

クラス転移の特典が俺だけ「サキュバス化」だった

緑茶わいん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

年に一度、どこかの高校で一クラスが消える。

原因不明の「神隠し」に遭った高校一年生の蓮（レン）は、気がつくとも異世界の神殿にいた。

立ちほだかるのは過去三十年間の失踪者が総出で挑んでいるというダンジョン。

生き抜くための力としてクラスメイトたちに「クラス」が与えられる中、何故か彼に与えられたのは「種族」それもサキユバスというわけのわからないものだった。

※カクヨムにも投稿しています

目次

| | | |
|------------------------|-----------|-----|
| プロローグ | — クラス転移 — | 1 |
| 新しい暮らし | — | 10 |
| 半妖精の少女 | — | 18 |
| 新パーティ体制確立 | — | 26 |
| ボス戦と世界の欠片 | — | 34 |
| 賢者の話 | — | 42 |
| 望まない再会 | — | 51 |
| 奇襲 | — | 60 |
| 対策 | — | 69 |
| 自爆 | — | 78 |
| 決着 | — | 87 |
| 元仲間の処遇 | — | 96 |
| 新たな目標 | — | 104 |
| 一歩ずつの前進 | — | 112 |
| 相棒との一夜 | — | 120 |
| 発足、湖作成委員会？ | — | 129 |
| 男子禁制・水遊び会 | — | 137 |
| 第一目標間近 | — | 146 |
| サキユバスになったら仲間と居場所ができました | — | 154 |
| 章間・番外編 | | |
| 【番外編】 サキユバスになって | — | 163 |
| 【番外編】 休日の過ごし方 | — | 168 |
| 【番外編】 アイリス一家とレン | — | 173 |

【番外編】 転職の行方

178

第二章

新しい出会い

183

ゴーレムの少女

192

今度は山づくり？

200

ぐだぐだ会議とメイ議長

208

一家に一台、メイドゴーレム

216

再び十一階へ

224

やんちゃな少年たち

233

落ち込む少年たち、とクリスマス

241

レンと年明け

250

新しいキス

258

複雑な気持ち

267

男友達との雑談 (前編)

275

男友達との雑談 (後編)

283

【番外編】 女子たちの内緒話

291

【番外編】 ショウとケン

296

二月のイベント

301

レンの悩み (前編)

309

レンの悩み (後編)

317

新戦法とデート

326

女子の恋愛トーク

334

二十階挑戦を控えて

343

二十階攻略 (前編)

352

二十階攻略 (後編)

360

一年目の終わり

368

【番外編】メイとボディ改造

376

【番外編】娼館の従業員少年たちからの相談

381

第三章

三十一年目の召喚と新しい仲間

386

転移者たちの事情

395

思わぬ再会

404

新しい計画

414

妖狐のダンジョンチャレンジ

423

サキユバスと説明会

431

新人後輩パーティとシオンの成長

440

いろいろ進行中

448

ひとまずの決着

456

騒動が収まって

465

生やすスキルと房中術

473

【番外編】妖狐といなり寿司

481

【番外編】アイシャとレン

486

シオンのレベルアップ方法

491

家の完成

499

新しくなった家で

507

二十階ふたたび

515

リザードマンとアラーム

524

川の完成とシオンの聖域

532

本格化するダンジョン

540

聖域とポーシヨン

548

三十階の戦い

556

賑やかなクリスマス

564

【番外編】 童貞を殺すセーターとレン

572

【番外編】 聖域の水

577

【番外編】 大晦日と初詣

582

第四章

一年半が過ぎて

587

森とカカオ収集

595

レンの悩みと変化したシオン

603

ダークエルフとレン

611

ダークエルフの姫

619

歓迎パーティ

627

続・ダークエルフの姫

635

お姫様の変化とフリーの悩み

644

フリーの転生

652

変化と決断

661

三十五階への再挑戦

669

ミーティアのダンジョン挑戦

678

新たな難関と見た目の変化

685

【番外編】 三十二年目のとある転移者（前編）

693

【番外編】 三十二年目のとある転移者（後編）

699

二年が経って

706

四十階攻略と新たな悩み

713

目標の決定

722

五十階攻略に向けて

730

| | |
|--------------------------------|---|
| 五十階攻略に向けて | 2 |
| いざ、四十一階へ | |
| 新しいステージ | |
| 四十五階攻略 | |
| 先達の協力 | |
| ベテランたちの大暴れ | |
| 伝説の一ページ | |
| 英雄の戦い | |
| 決戦の終わり | |
| 戦いの成果 | |
| 未来の展望 | |
| 見習い聖女と、英雄たちのこれから | |
| エピソード ― 帰還した者たちと、さらに挑み続ける者たち ― | |

835

番外編・後日談

| | |
|----------------------------|-----|
| 【番外編】 永遠のパートナー | 840 |
| 【番外編】 半妖精の少女 | 845 |
| 【番外編】 ゴーレムの少女 | 850 |
| 【番外編】 優しい妖狐 | 855 |
| 【番外編】 ダークエルフの姫 | 859 |
| 【後日談・番外編】 ささやかなエール | 864 |
| 【番外編・後日談】 あいつらのその後と年齢退行の効果 | 871 |
| 【番外編・後日談】 同窓会に来たあの子 | 875 |
| 【番外編・後日談】 子供たちは元気いっぱい | 882 |
| 【番外編・後日談】 魔王殺しの英雄たち | 889 |

【番外編・後日談】世界の終わりに

【番外編・後日談】未来と過去を目指して

プロローグ ―クラス転移―

最初は地震かと思った。

HRのため席についていたのに空中へ放り出されたからだ。違うとわかったのは床へ尻もちをついてすぐ。

固い。

大理石かなにかに変わっている。机と椅子はなくなっていて、クラスメートたちは全員、制服姿で席順通りに周りにいる。

教壇があつた位置には教師二年目の女性担任。彼女もまた尻を押さえながらこの異常事態に目を丸くしている。

「嘘」

近くで誰かが呟いた。

「もしかしてこれ、例の神隠しってやつ……?」

神隠し。

言葉は波紋を打つようにクラス全体へと広がった。

少年――藤咲蓮もまた「ああ、そういうことか」と理解し、同時に「なんてついてないんだ」と思った。

天を仰いでため息をつく。

周りの悲鳴も含め、音は石造りの神殿へと全て飲み込まれていった。



時は少し前に遡る。

朝のHRを待つ蓮の席にはクラスメートの椎名風里がやってきて、頼んでもいない噂話を垂れ流していた。

「そろそろ今年も起こると思うんだよね、神隠し」

「その話、もう何回も聞いたぞ」

飽きたと言つて軽く睨むと、話好きの小柄な少女は「ごめんごめんと笑つてから話を続けた。

「でもさ、今年も起きたら三十回目だよ？ わくわくしない？」

「正体不明の行方不明なんてむしろ怖いだろ」

しかし、蓮の感想は少数派なのか、クラス内には同じ話をするグループがいくつも見られた。

彼らの顔には悲壮感はない。

単にオリンピック的なイベントに期待する表情があるだけだった。

「三十年連続集団神隠し、ね」

「都市伝説みたいだね。ちゃんとした事件なんだけど」

蓮たちの語る「神隠し」は今から三十年前に初めて起こった。

日本のある高校である日突然、ひとクラス分の人間が跡形もなく消失したのだ。

白昼の出来事であり、校舎には他の人間もたくさんいた。誰にも見づからず全員いなくなるなど不可能と云っていい。

当然、事件は翌日の新聞で大々的に取り上げられた。

平成の神隠しなどと騒がれたそれは不可解なことにそれ以来、毎年この時期にどこかの学校で発生し続けている。

怪事件としか言いようがない。

風里は蓮の机に腕と肘を載せたままきらきらと目を輝かせて、

「藤咲くんは何が原因だと思う?」

「知らないって。ただ、誘拐とかならもつと楽な方法があるだろ。修学旅行を狙うとか」

「じゃあ、やっぱり神隠しなのかなあ」

調査でも詳しいことはわかっていない。

最近は何がって学校を休む高校生もいるらしい。

蓮は高校一年生。今年初めて当事者の仲間入りをしたが、さすがに休む気にはならなかった。神隠しはだいたいこの時期——入学して二か月ごろに起こっているものの、日付はバラバラ。安全になるまでずっと休むわけにもいかない。

だいたい高校なんて山ほどある。そのうち一クラスしか当たらないのだから、確率的には飛行機に乗って死ぬようなものだ。

風里たちが他人事のように話すのもわからなくはない。

と、その風里は嬉しそうに蓮の腕を突いて、

「なんだかんだ言っただけに付き合ってくれるじゃん」

「……暇なんだから仕方ないだろ」

肩を竦める。

素直じゃないなあ、とでも言いたげな視線を無視していると「ところでさ」とまたなにかくだらない話題が始まるうとして、

「やば。先生来たみたい。またね」

「もう来なくてもいいぞ」

担任の来訪を察知したクラスメートたちが慌ただしく動き出した。

数分後——まさか自分たちが神隠しの対象になるとは、この時の蓮は思ってもいなかった。



「ようこそ、新たな同士諸君。君達の不運へ同情すると共に、来訪を心から歓迎するよ」

「だ、誰だ!?!」

「待ってくれ、怪しい者じゃない。君達と同じ元日本人だ」

神殿には蓮たちだけでなく他の人物がいた。

痩せた身体にまるでゲームに登場するようなローブを羽織り、眼鏡をかけた痩せ気味の中年男。日本人を名乗ったように肌や目、髪の色は見慣れたものと同じだ。

大きく手を広げてこちらを宥めようとする仕草はまるで舞台役者か何かのようだが——。

「あなたは、ここが何だか知っていますか……?」

担任の問いに彼は「ああ、知っていると」と深く頷いた。

「ここは『迷宮の神殿』。年に一度、新たな犠牲者を召喚し続ける異世界のダンジョンだ」

「異世界って、マンガじゃねえんだぞ?!」

「待って。年に一度ってもしかして」

「その通り。私は三十年前にここへやって来た。つまり、君達が神隠しと呼ぶ現象の最初の犠牲者——その生き残りだよ」

一瞬、全員が黙った。

「もしかして、今までの神隠しは全部……？」

「ああ。神殿の召喚によるものだ。私は彼ら全員と顔を合わせている。いつの間にか、こうして案内するのが役割になってしまっただけね」

「その人たちはどこにいるんですか!？」

「外にいる。今は見えないが、周りには街が広がっているのさ」

ギリシャのパルテノン神殿のように壁のない柱と天井だけの建物。今、その周囲は輝きに包まれており外の景色は確かにわからない。男の言葉を証明する術もないわけだが、既に異常なことが起こり過ぎていたため「常識的にありえない」などという言葉も意味をなさない。

「俺たちはどうして連れて来られたんだ？」

「それは神殿が示してくれる。もうじきメツセージが現れる頃だろう」

予言はすぐに現実になった。

周囲だけでなく神殿全体が輝き始めたかと思うと空中に文字が浮かび上がったからだ。見たことのあるどの言語とも異なるのに何故か意味がわかる。

メツセージにはこう書かれていた。

『探索せよ。さすれば世界は開かれん。開拓せよ。さすれば世界が作られん。勇者よ、救世主となれ』

光の文字は一分程経つと少しずつ薄れ、やがて完全に消えた。

同時に床の一部が音を立ててスライドを始める。近くにいた何人かが慌てて飛びのく。

現れたのは下へと続く階段だった。

ぼんやりとした不思議な明かりに包まれており降りるのに支障はなさそうだが、螺旋を描いているため先は見通せない。

「迷宮の入り口だ。ここを攻略することが我々の使命であり、三十年来の悲願でもある」

「三十年間、攻略できていないダンジョン……？」

息を呑む。

三十年で消えた人間はかなりの数に上る。それでもなお全貌の見えない場所に挑まなければならぬのか。

すると、男は笑みを浮かべてこう言った。

「案ずるな。神殿からは使命だけでなく祝福も与えられる」

「祝福って何よ!?! こんなものどう考えても罰ゲームじゃない!?!」

「祝福とは最低限、生きていくための力だ。多くの場合は戦士や魔法使いなど特定の役割に沿った装備と能力になる」

「なんだそれ。本当にゲームみたいだな」

「日本は相変わらず平和なようだ。是非、進化したゲームの経験を迷宮攻略に生かしてくれ」

男が言い終わらないうちに今度は蓮たちの身体が輝き出した。

動揺と歓喜の声。前者は主に女子で、後者は男子だった。

早くも一部の者が順応し始めている——というか、信じる以外にできることがない。

そして実際、次々に『祝福』が与えられ始めた。

「うお、制服が……!?! これ、剣と鎧か?」

「こっちは魔法使いの杖みたい!」

制服が消え、駆け出し冒険者のような装備が代わりに現れる。戦士風の格好になった男子は心なしか体格まで良くなっていく気がする。

ゲームで言うところの初期作成ボーナスのようなものか。

先に終わった仲間のお陰で害がなさそうなことはわかった。蓮にもなにかしらの力が与えられるはずで、男子の端くれとしては若干の期待を抱かざるをえない。

どうせなら強くて格好いい職業がいいのだが——。

「お……!?!」

光が収まっていく。

クラスメートの一人がこちらに視線を向けてきて、驚いたように目を丸くした。

蓮が勇者のように凛々しい姿をしていたから、であれば良かったのだが。

「誰?もしかして、藤咲くんなの?」

懐疑の声と共に「ぱたぱた」と小さく風を切るような音。

見下ろした身体は小柄かつ華奢で、肌は白くなっている。纏っている衣装は水着、あるいは下着のような最低限の黒インナーだけで、背中には小さなコウモリの翼が一对。

尻のやや上あたりには先端がハートマークをした短い尻尾。

驚愕からあちこちに視線を向ければ紫紺の髪がむき出しの肩を軽く撫でた。

「な、なんだよこれ」

心なしか声まで高くなっている。こんなのは聞いていない、とか意味がわからない。これでは勇者どころか職業ですらない。

「おおー。それは悪魔——いや、サキユバスか？ いずれにせよ素晴らしい『祝福』だ。種の多様性は豊かさに繋がるからな」

先達である男は何やら大喜びしているが、蓮はとても喜ぶ気になれなかった。

彼の見立てが正しいのであれば、今の蓮はサキユバス。

マンガやゲームなどにも時折登場するその種族の特徴は、

「男とエロい事するのが得意なんだよな、確か」

「マジかよ藤咲凄えじゃん」

これがゲームなら即座にリセットしているところだが、生憎、現実にはやり直しが利かなかった。



それから一か月程が経って——。

「レン、お前パーティー抜けろ。この役立たずが」

「ああ、言われなくても抜けてやるよ！ 『俺は男だ』って何回言ってもわかってくれないんだからな！」

『サキユバスのレン』と呼ばれるようになった蓮は、転移してきてからずっと行動を共にしてきたクラスメートばかりのパーティーと喧嘩別れした。

仲間達で買った家から荷物を持って飛び出し、街を特に行くアテも

なく歩く。

視界の端には高台に位置する『神殿』の姿。ここは迷宮の入り口のあるあの神殿を中心として作られた街だ。人口は約千人。

転移者の先輩たちによって一から作られたため賑わいという意味では今一つだが、生活や冒険に必要な物はだいたい揃っている。

ファンタジー風の世界にしては治安が良く、素性のわからないチンピラの類はほぼいないのが最大の利点。

「……くそつ。なんだよあいつら、言いたい放題言いやがって」
限られた人数しか住んでいない割に街には建物が多い。

宿や武器屋、防具屋など必要な設備を揃えたら自然とそうなったというのと、毎年増える『新入り』のために多数の住居が造られているせいだ。

おかげで最近の転移者たちは拠点に困っていないらしい。実際、レンたちもいともあっさり家を手に入れることができ、ダンジョン攻略の疲れを休息によって癒してきた。

その家もついさつき追い出されてしまったわけだが。

「別に空き家ならいくらでもあるんだ。無理してあいつらと付き合わなくたっていい」

治安が良いのをいいことに、レンは適当な道端に座りこんだ。

荷物袋をあさって酒瓶を取り出すと栓を開けてそのままあおる。

蒸留酒、という分類になるらしい度の強い酒は少量でかなり酔える。ここには未成年だとか固いことを言う輩はいないし、今は酔いたい気分だった。

「あいつらのセクハラがなくなった途端にこれかあ。レンつたら大胆」

「いいだろこれくらい。あいつらの前で酔うと面倒だからなかなか飲めなかつたんだ」

首から下をすっぽり覆う色気のないローブを揺らしながら肩を竦める。

サキュバスであるレンはそこにいるだけで異性を魅了してしまう。肌を隠すことでその効果を抑えることができることがわかってから

はずつとこういう服を着ている。

気心の知れた相手からのからかい文句に眉をひそめ、もう一口酒を飲んでから——傍に立ってこちらを覗き込んでいる軽装の少女を見上げた。

「なんでお前がここにいるんだよ、フリー」

「私もパーティー抜けてきたからだよ」

同じパーティーで盗賊——罾の発見や解除などを担当していた少女、風里あらためフリーはあっさりと言おうと隣に座りこんできた。

ぴつたりと肩をくつつけるようにしてきた挙句、何も言わずに酒瓶を強奪。深酒は良くないと叱ってくるのかと思えば二口ほど飲んで「ありがと」と返してきた。

「レンがいないならあんなどころいたくないし」

「な、なんだよそれ」

妙に距離が近かったのはそういうわけか、と頬を染めれば、

「私一人じゃ手を出されるでしょ、絶対」

「あのな。だから俺を女にカウントするなよ」

「でもサキュバスだし」

ぐ、と、レンは言葉に詰まった。

フリーだけでなく他の仲間からもこんな風に女扱いをされていた。確かに今のレンは女顔だし守ってあげたい系の儂げな雰囲気があるが、この扱いは不当である。

「サキュバスでも俺は男なんだよ。身体だって女になったわけじゃない」

レンには今も「男にあるべきもの」がちゃんとしている。

可愛くはなかったが性転換したわけじゃない。

「知ってるってば。直接見せてもらったし」

「見せたんじゃないかって無理やり見たんだろ」

なお、その時の反応は「可愛い」と好評だった。もちろん全く嬉しくない。

「……そりゃ、お前は彼氏くらいいたのかもしれないけど。だからっ

て男にその態度はどうなんだよ」

「え？ 私処女だけど？」

「だから、あつさりそういうこと言うなよ!？」

「大丈夫。私、レンのこと女友達だと思ってるから」

さっきので酔っぱらったのか、けらけら笑いながら抱きついてくるフリー。胸が小さい割にその身体が柔らかいことはこの一か月で何度か実感している。

「どうせだからさ、もっとレベル上げてもっと可愛くならうよ」

「可愛くなるからレベル上げたくないんだよ」

レンは酒をあおり、ため息をついた。

いいのか悪いのか、この異世界において彼らはレベルを上げるほど強くなる仕様で——レンの場合、レベルアップするほどサキユバスらしくなっていくらしい。

微妙に膨らんでできてしまっている胸に手を当てて、

「このままレベルアップしたらどうなるんだよ、俺」

「そりゃ、完全に女の子になるんじゃない？」

イラっとしたので頬を引っ張ってやると、フリーは「いひやいいひやい」と笑った。

新しい暮らし

「レンー？ ご飯できたよー？」

軽く火であぶって温めたパン、チーズ、塩コショウだけのスープに、飲み物はミルク。

代わり映えはしないがこの世界の駆け出しには十分な朝ご飯。

電気コンロどころかガスコンロさえないので火起こしから頑張った。我ながらすごいと自賛しつつ、同居しているクラスメートを起こしに行く。

数日前——彼女、フリーはレンと共に今までいたパーティを抜けた。

正確に言うとレンが追い出されたので「じゃあ私も辞める」と勝手に逃げてきたのだが、男女混合五名から男のみ三名になったあいつらはきつと苦勞しているだろう。いい気味である。

新しく借りた家は小さめだが、それでも四、五人くらいは余裕で暮らせる立派なところ。雨は凌げるし風もあまり入ってこない。

二人なので部屋も一つずつ使える。

「ほーら。いつまでも寝てないで起き——」

「馬鹿、いきなり開けるな！」

ノックもなしにドアを開けて入ると、レンは着替えの途中だった。

紫紺の髪と瞳を持った性別不詳の美少女もとい美少年が恨みがましくこつちを睨みながら前を隠す。彼いわく「こうなる前より小さくなった」らしい、可愛い感じのアレは前にも見たし別に嫌な気分にもならない。

ついでに、背中とお尻に生える翼と尻尾も見慣れると可愛かったりするのだけれど。

「えつちなことでも考えてたとか？」

「違う。っていうかお前、なんて格好してるんだよ」

「え？ 普通じゃない？」

キャミソールにショートパンツ。

転移前でも部屋着だったらこんなものだ。もちろん、あいつらと暮

らしていた頃はこんな格好しなかったが、今はレンと二人つきりなわけ。

「あのな、何度も言うけど俺は」

「男なんでしょ？ わかってるわかってる」

うんうんと頷きながら歩み寄る。

その間にレンは色気も何もないトランクスを穿き、シャツを羽織ってしまふ。中学生のような成長し始めの胸もなかなか可愛いのに。

二人の距離が近づくと少年（仮）は一步後退する。

後ろにはベッドがあるため逃げられる距離は限られており、フリーはあと一步で接触しそうなところまで近づぐことに成功した。

「でもなあ。レンってそう言いながら私に何もしないし」

「したら大騒ぎするだろ、お前」

「ん？ じゃあ『してもいいよ』って言ったら？」

挑発するように見上げるとみるみる顔が真っ赤になった。

こういうところである。

元パーティメンバーの三人は高校生らしく性への関心が高いうえに異世界に来て調子に乗っている奴らだった。酒は飲むし煙草は吸うし、年上のお姉さんに有料で手ほどきまでしてもらっていた。お陰で余計にタガが外れ、それからはフリーにも遠慮のない視線を送ってくるように。

レンにはそういうところがない。

（大きくもない）フリーの胸をちらちら見てくることくらいはあるし、目が合うと照れたりもするが、所詮はその程度。むしろあいつらから「相手してくれよ」と露骨なセクハラを受けていた仲間である。むしろ彼の方がメインターゲットだったので大いに同情している。

ここに来てから一か月が経ち、以前神隠しに遭った先達にもたくさん会った。今はもう、元の世界に帰って普通に恋愛するなんて希望はあまり持てない。

こっちで彼氏作ってもいいかなー、と思うし、その相手がレンになるというのは別に悪い選択でもなかった。

「っていうか、レベル上がっちゃう前に経験しておいた方がよくない

？」

最後の一步を踏み出し、右手でレンの頬に触れる。

「ごくり。」

唾を呑み込む音が手に取るように聞こえた。

「……そこまで言うなら俺だって本気にするぞ」

「ちよつと意外。ヘタレるかと思っただけど、うん。いいよ」

肩を掴まれるとちよつとどきどきしてきた。

今のレンは非常に顔が良い。

ついでに言うと、魅了能力も男相手ほどではないにせよ機能する。どうせ二人つきりなんだし、こうなったら行けるところまで行ってやれ、と思いつつ目を閉じた。

顔が近づいてくる感覚。

唇が触れ合うと反射的に身体が震えた。怯えたように身を離そうとする少年の服を掴んで引き留める。そのまま唇で触れ合っていると気持ちが悪くさつち方向に昂ってきた。

「ご飯が冷めちゃうけど、まあいいや。」

身体が抱き寄せられるのを受け入れる。

少年の体温を感じながら次は何をされるのかと期待して、

「こんにちはー。藤咲君と椎名さん、起きてますかー？」

一か月前までは毎日のように聞いていた担任の声にいい雰囲気がかき飛んでいった。



「残念。邪魔が入っちゃった。私、先生出迎えてくるから早く着替えちやいなよ」

何事もなかったようにぱつと身を離すフリーを見て、レンは妙に名残惜しい気持ちを覚えた。

行けた、のか？ あのままでもいいところで「はい終了ー！」って言われたんじゃないのか？ うん、そつちの可能性が高い気がする。

ぱたぱたと担任を出迎えに行った相棒(?)を見送り、ため息をつ

いて、服とローブをいそいそと着こんだ。
なお。

女の子の柔らかい唇の感触は、たとえばあのフリーリのものであろうと
もしばらく忘れられそうになかった。

「良かった、二人とも元気そうで。他の三人も心配してたよ?」
「あはは、まさか。あいつらは狙ってた女がいなくなつて残念がつて
るだけですよ」

朝から家に押し掛けるなんて日本なら失礼な行為だが、こっちの世
界では早朝からダンジョンに向かう者も珍しくないので会える時に
会つておかないとタイミングを逃す。

せつかく来てくれた先生を立ち話だけで帰すのもアレだからと、レ
ンたちは二人分の朝食を三人で分けることにした。

ここでの生活はダンジョンを攻略して得たお金や戦利品、それらを
使つて街で購入・交換した品々に依存している。数少ない大人である
先生も決して楽な生活ではないらしく、恥ずかしそうにしながらも
嬉々としてパンやスープへ手を付け始めた。

「うん。こんなところだから仕方ないけど、男女が一緒に生活するつ
て色々問題があるものね。もしできたら、今度は女の子だけで組んだ
方がいいかも」

「ごもつともな意見ではある。」

ただ、レンは隣に座つたフリーリと顔を見合わせて、

「あの、先生? 俺が男なのは覚えてますよね……?」

「え!! あ、うん、もちろん! 藤咲君はサキユバスでも男の子なんだ
よね」

「こくこくと頷いてから「女の子の身体にはもう慣れた?」と尋ねて
くる。」

サキユバスになって身体が変わつたけど女になつたわけじゃない。
でもレベルが上がるとたぶん完全に女性化する、というのはゲームと
かに疎い人には難しかったらしい。

おそらく先生の中では「男の子だけど女の子なんだよね？」くらいのふわっとした認識だ。

「慣れるも何も、男から変な目で見られて最悪です。ダンジョン攻略してる間はいつらもさすがに真面目だったんで割と助かってはいましたけど」

「そっか。こんな生活じゃ慣れる暇もないかな」

転移して来てから一か月。レンはパーティメンバーとなったクラスメートと共にダンジョンの攻略に励んできた。

幸いにも先達がこつこつ調べ作り上げてきた地図や攻略法があるため地下一階からの初心者向けエリアではよほど油断しない限り危険はない。

どういう原理か自動復活するモンスターを倒し、同じく復活する宝箱からちよつとしたアイテムを入手しては売る。

戦ったり罠を解除したりすると少しずつ経験値が溜まり、レベルアップすると今の種族や職業に応じて強くなる。こつこつとステツプアップを繰り返し、どのくらい下にあるかわからない『最下層』を目指すのが今のところの目標である。

先達にとつては最初の方の階なんて鼻歌交じりにスキップできるレベルではあるのだが、この世界ではあらゆる品の供給が限られる。人手は多ければ多いほどいいらしく、初心者へのサポートも手厚い。

逆に言うところ「今更初心者なんていらないうから待ってますね。早く攻略終わらせてください」とはならず、レンたちも化け物退治に追われてきた。

「レンってすごく便利なんですよ、先生。攻撃魔法も回復魔法も使えるんです。火も起こせるし水も出せるし街のおじさんたちからもモテモテです」

「ああ、お陰で料理に風呂にこき使われるし、オマケ目当てで買い出しまで押し付けられてる」

「いいじゃない、それくらい。可愛くて得してるんだから」

「男は『可愛い』って言われても嬉しくないんだよ」

軽く言いあいしながらフリーを睨みつけると、先生がくすくすと

笑いだした。

「仲が良いんだね」

「べ、別にそんなんじゃない……。こいつが勝手についてくるだけで」

「安心していいよ。嫌って言われてもついて行くし、世話焼いてあげるから。レンは魔法使えるけど料理も洗濯もできないもんね」

「それは、向こうじゃ別にできなくても困らなかつたからな」

洗濯機やファーストフード、コンビニ弁当が便利だったのは事実だが、勉強する気がなかったのは別の問題……。とは言わない。先生やフリーにはバレバレだったかもしれないが。

「俺たち、いつ向こうに帰れるんですかね」

「きつといつかは帰れるよ」

先生は困った顔をしながら明言を避けた。少なくとも三十年、ダンジョンは攻略されていない。同じだけかからないという保証はない。

この世界で四十五歳になった自分を想像してレンは「うわあ」と思った。

「早く帰りたいなら、やっぱり頑張るしかないよ。みなさんともお話をしてるけど、ダンジョンに潜る人数とレベルが生活水準に直結するみたい」

「レベルアップかあ……。完全に女になったら俺、元に戻るんですかね?」

「……さあ?」

「さあ?」

女二人に無責任な返答をされた。

これだから見た目に変化がない奴らは。むしろパワーアップしただけなので別に能力がなくならなくてもいい、むしろ日本に帰ってもパワーアップしたままでいいと思ってるのだろう。

人の気も知らないで。

「ま、まあいいじゃない。女の子になっちゃったら彼氏作れば? レンならいくらでも立候補者が見つかるって」

「男と結婚するくらいなら一生独り身でいいぞ俺は」

「ああ……」

先生が遠い目になった。

「潔癖症ね。年頃の女の子にはよくあることかな」

「だから俺は女じゃ……。っていうか先生、今日は俺たちの様子を見に来ただけなんですか？」

「あ、そうだった」

ぽん、と手を打った先生は本題を切り出してきた。話をしている間に朝食はほとんど空になっている。

「様子を見に来たのは心配だったのもあるけど、二人がもしあの子達と仲直りする気がないようだったら紹介したい子がいるの」

「紹介？」

「それって女の子ですか？」

「もちろん女の子だよ。ただ、ちよつとなかなか仲間にしてあげられるパーティがない子みたいで……。みなさんも困ってるみたいなの」

訳アリか。

レンたちもこっちに来てそこそこの人と会ったが、それでも良く知らない相手の方が多い。もちろん去年以前の転移者がどんな人達だったかも詳しくない。

先生は大人なのもあって積極的に彼らと交流を持っており、そういう意味では情報源として信頼がおける。

「いったいどんな子なんですか？」

「可愛い子だよ」

いや、そうではなく。

「どういう訳アリなのか知りたいたいんですけど」

この先生、若干天然入っているのでは……。？　と思いつつ言うと、思いがけない返事が来る。

「可愛い子なのが問題なんだよ。似てると言えば藤咲君とちよつと似てるかも」

「男に狙われるってことですか？　レンみたいに」

「うん、そう」

彼女自身はあまり強くないため、狙われても身を守れるとは限らない。最近こつちへ来たばかりの男は特に軽はずみな行動に出やすい

ので注意が必要になる。

「なら女子と組んでもらえば」

「うーん……女の子同士だと、今度は嫉妬しちゃう子とか出てくるから」

「面倒くさいな」

「ああ、それでレンなんですすね？ 同じくらい可愛い子がいれば分散するし、レンなら嫉妬とかしないから」

「うん。どうかな？ とりあえず会ってみるだけでも」

レンはフリーと顔を見合わせると、どちらからともなく頷きあつた。

「どうやらお互いに異存はないらしい。」

魔法使い（サキユバス）と盗賊の二人パーティではダンジョン攻略にも心元なかったところだ。せめてもう一人くらいいてくれるとだいたいぶ楽になる。

「ちなみにその子——その人の職業はなんなんです？」

「アーチャー弓使い。でも、二人みたいな意味での職業もレベルもないよ」

「それって……」

「うん。こっちで生まれて育った子。ダンジョン迷宮ネイティブ世代なんて呼ばれたりもしているみたいなんだけど」

「なるほど。それは下手なパーティに預けられませんね……」

朝食後、先生によって引き合わせられたその女の子は、レンとフリーの想像以上の容姿をしていた。

半妖精の少女

蜂蜜色の髪と夕暮れ前の空色の瞳。

頭の後ろでしっかりとしたポニーテールを作り、肌の色は日本人離れして白い。

すらりとした長身へ革製の防具を身に着け、背中には矢筒。腰につけたベルトにはナイフや小袋などが取り付けられている。

見た目の年齢はレンたちと変わらない。

特筆すべきは彼女の耳だ。丸みがなく、ぴんと尖った形。髪に隠れることなく飛び出ている人目を惹く。

森野愛梨、と彼女は名乗った。

「アイリスと呼んでください」

透き通るような声で名乗られた時にはレンでさえ胸がときめいた。

彼女には魅了の能力はないはずなのだが。

「まさかエルフとは思わなかったな」

「正確にはハーフエルフだけだね」

彼女は転移者の間に生まれた子供だ。身体的特徴は主に母親から受け継がれたもの。

つまりアイリスの母はエルフ。

レンと同じく『祝福』によって種族が変わってしまった数少ない一人だ。

同族は皆無、外国人すらほとんどいない環境なのだからこの容姿は目立つ。面白がられたり口説かれたりは多いだろう。

ちなみに歳は二十歳。

十四、五歳になった頃から見た目がほぼ変わらなくなったらしい。母親にも挨拶をしたものの、並んだ姿はどう見ても姉妹。フリーは「なにそれ羨ましい」と呟いていた。

「でも、アイリスちゃん。本当にいいの？ 私たちの方が年下なんだから」

「はい。私は学校にも行っていませんし、皆さんよりずっと人生経験が足りないのです」

少し話をしたうえで二人はアイリスの加入を了承した。

今は三人で街を歩いているところだ。

美少女が一緒なだけあって街の人たちからちらちら視線が送られてくるものの、悪い意味で声をかけてくる者は今のところいない。

見た目上は女子ばかりとはいえ三人もいるとナンパのハードルは結構上がる。

それでも、あまり人慣れしていないらしいアイリスはレンの陰に隠れるようにしながら歩いている。

「森に住んでたんだろ。退屈じゃなかったのか？」

「家族は一緒でしたし、狩りをするのも楽しかったので大丈夫でした。お父さんは日本が恋しいってよく言っていますけど」

「それはそうだろうなあ」

アイリスの一家は街外れの森の管理者だ。

森で生産される木の実や薬草、木材などは日々の暮らしにとっても役立つ。森に住む動物を狩れば毛皮や肉も手に入る。

少女は弓の技を日々の暮らしから学んできたそうだ。

両親はともに四十歳前後。転移してきてから二十年以上をこの世界で過ごしていることになる。

日本で暮らした時間より長い異世界暮らしなんてレンには想像もつかない。

「じゃあ、アイリスちゃん。もしかしてダンジョンに潜るのって——」
「はい。お父さんたちを日本に帰してあげたいんです」

少女にとってはむしろ日本が異世界。ずっとここにいればいいのに、と思わず「帰ってあげたい」と思えるのは優しい証拠だ。

両親はダンジョンに赴くアイリスのことを物凄く心配していたが。「任せて。私たちだって一か月はダンジョンに潜ってるんだから。少なくとも無茶しないくらいの分別はあるよ」

「めっちゃくちゃ格好悪いこと言ってる気がするけど、そうだな。アイリスのことはちゃんと守るよ」

「ありがとうございます、レンさん。フリーさん」

話をしているうちに目的地が近づいてきた。

レンたちが転移してきた場所であり、以後も何度も訪れた場所——ダンジョンの入り口がある神殿である。

高台にあるこの建物には四方に築かれた階段からアクセスできる。遠くからでも見えるため、ダンジョンに挑む者の人数は街の者にも把握しやすくなっている。

「この階段が最初の難関なんだよね」

「下手な神社より長いからな」

「が、頑張ります」

脅かされたアイリスはきゅつと唇を結んで覚悟を決めてくれる。

結果がどうだったかというところ、少女はなんの問題もなく階段を上りきった。さすがは普段から野山を駆け回っているだけのことはある。

「ほら、レン。お手」

「ああ」

「……？ ああ、手を繋ぐのには何か意味があるんですか？」

むしろ、レンたちの方が不思議そうな目で見られてしまったくらいだ。

手を繋ぐのはこれまでもやっていた習慣なのだが、なんとなく気恥ずかしくなったレンは「別に一人で上れないわけじゃないぞ」と言い訳する。

「もちろんデート気分とかでもないよ。レンは人に触れているだけで

『エナジードレイン』ができるから」

「あ……えっと、サキュバスの特殊能力ですね？」

「ああ。触れている相手のHP——生命力を少しずつ吸収してMP——魔力を回復させられるんだ」

回復した魔力をどうするかというと、神殿に到着したところで「ヒール」×3。

癒しの力へと変換された魔力が三人を順に包み込む。その後、レンとフリーは「ステータス」と唱えて光の文字を呼び出した。

「ん、HP問題なし」

「こっちもだ」

言ってしまうえばステータスウィンドウである。

HPやMP、レベル、経験値、各種能力などが確認できる転移者特権。これはこの世界がゲームである証ではなく、現代の日本人にわかりやすい形で祝福の効果が表れているのだと考えられている。

仮に江戸時代の人間が召喚されてもステータスウィンドウは出せず、代わりに別の力が与えられるだろうという話。

二人のウィンドウをアイリスは興味深そうに見つめて、

「やっぱりお二人もそれ、出せるんですね」

「アイリスはやっぱり出せないのか」

「はい。私も妹たちも試したけどできませんでした」

転移者の子供に『祝福』は引き継がれない。

フリーの盗賊やレンのサキユバスはゲーム的な設定。レベルアップやスキル取得で強くなれるが、アイリスの弓使いは本当に職業で、弓が使えるから弓使いと名乗っているだけ。

ただ、エルフの子供はちゃんとハーフエルフだし、親の身体能力もある程度引き継がれるらしい。

「それもあって、なかなか連れていってくれる人が見つからなかったんです。お父さんたちについて行っても足手まといになるだけです……」

「俺たちもちょうどよかったよ。パーティ解散してどうしようかと思ってたから」

言いながら、レンは下り階段の前に立つ。

階段の前には数字の彫刻。例によって異世界文字か何かだが不思議と読める。

今は「五」と表示されているそれは現在ダンジョンに潜っているパーティの数だ。レンたちが潜るとこれが「六」になる。

「アイリスちゃんは初めてだから一階からだね」

「すみません、ご迷惑おかけします……」

「いや、むしろありがたいよ。俺たちも大して深く潜ってなかったし、心機一転ってことで」

明かりはレンが「ライト」の呪文を使える。

「ダンジョンの通路はだいたい三人は並べないくらい。私が先頭でア

イリスちゃんが斜め後ろ、レンは一番後ろで真ん中あたりを歩いてくれる？」

「わかりました」

「了解」

階段を歩きたびにこつこつと音がする。神殿から一階への階段に異はないが、こうしてただ進んでいると妙な緊張はどうしてもあった。

「アイリスの矢か俺のMPが半分切ったら何があっても帰るぞ」

「わかってる。無理したって仕方ないからね」

やがて階段が終わり、ダンジョン一階の入り口が姿を現した。



ハーフエルフの少女・アイリスにとってダンジョンは「そこにあるのが当たり前なもの」だった。

両親が共に出かけることはなかったものの、片方が街の人に乞われて留守にしたり、一緒に潜っていた頃の武勇伝を聞くことも多かった。

神殿の姿は森の入り口からでも見られる。

それだけ身近なものだったけれど、実際に自分が潜るのはこれが初めて。

自分の目と耳で感じたダンジョンは想像と違っていて、

「静か、ですね」

石でできた冷たい通路がただ、真つすぐに伸びている。

化け物の気配も唸り声もまったく聞こえない。

明かりにさえ気をつければ道なりにただ歩いて行けるのではないか。

「アイリス、寒くないか？」

「あ、はい。大丈夫です」

「良かった。もし着替えがいるなら言ってくれ。防寒はちゃんとしておいた方がいい」

念を押されたので、自分たちの格好を見比べてみる。

レンは身体をすっぽりとローブで覆っていて確かに温かそうだ。とはいえアイリスも長袖の服に革の部分鎧を付けているので寒くはない。冬に森を散策することも多いので多少の寒さには慣れている。むしろフリーの方が心配だ。黒のインナーこそ手首足首まで覆っているものの、上着は半袖、下も太腿すら覆っていない最低限のものだ。

視線に気づいた少女は「ああ、私？」と笑って、

「ごちゃごちゃしていると気が散るから仕方ないの。それに、いざとなったらレンに温めてもらおうし」

「人聞きの悪いことを言うな」

むっとした顔をする紫紺の美少女——もとい、美少年。信じられないことにレンは男性らしい。確かに喋り方はだいぶぎつくばらんだが、

「ストレージ。『ファイア』」

虚空から取り出した松明に火を点け、周りの空間を温めてくれる。

明かりは別にあるのだからこれは明らかに防寒のためだ。

「すみません、ありがとうございます」

「気にしなくていいよ。これはね、ライトが切れた時のための用心でもあるの」

光源は常に二つ以上用意しておく。できれば種類の別々の方がいい。松明と魔法の明かり（あるいはカンテラ）なら水をかけられても片方は残る。先人たちの経験をまとめた本に基礎として書かれている内容らしい。

一階に大きな危険はないものの、先々のために癖をつけているのだとフリーは教えてくれた。

もちろん多少、荷物や出費が増えてしまうが、

「荷物をしまえるの、やっぱり便利ですね」

「これがなかったら大きな袋背負っていかないといけないもんね……」

「しまった。アイリスの矢も予備を入れてくれば良かったな」

最近の転移者たちによって「ストレージ」と名付けられた異空間収納は量的な限界はあるものの、重さを感じずに荷物を運べるとも便利なものだ。

『祝福』のないアイリスはこれがとても羨ましい。

弓使いは矢がなくなったら何もできなくなってしまうし、あまり荷物を重くすると動きが鈍ってしまう。いかに荷物を減らすかは狩りでも悩むポイントだ。

「二階はしばらく進むとまずゴブリンが二匹出てくる。そこまでは罠もないけど、手を抜く癖がついてもアレだしフリーに調べてもらいなから行こう」

「はい」

ダンジョンには不思議が多い。

一番の不思議は「中で他の探索者と会うことがない」ということだ。パーティごとに別の空間へ送られていることになる。

さらに、中の状態は最も攻略進度の低いメンバーに合わせられる。何十階も下まで行ったことがある両親でも、アイリスと一緒に潜れば一階から攻略し直さなければならぬ。

「モンスターも罠も宝箱も復活するやつとしないやつがあるからな。少しでも攻略しておけば次に来る時は楽になる」

「アイリスちゃんは私たちの指示を聞いてくれればいいよ。とりあえず勝手に先に行かないことと、敵が出たら慌てず攻撃すること。いい？」

「はい」

レンもフリーも口調は穏やかだが表情は真剣だ。

死にたくないから。帰りたいからだ。帰るのはもちろん家だが、アイリスにとつての家が森の実家であるのと違い、彼らの本当の家はこの世界にはない。

もちろん、両親にも。

ぎゅっ、と、手にした弓を握りしめる。盗賊を先頭とするゆっくりとした行軍はもどかしくもあったが、ここがもう危険であふれるダンジョンなのだ。再認識させてくれる。

「さ、初回の戦闘が始まるよ」

言つてフリーが足を止める。足音がなくなったことで音の反響がクリアになり、アイリスの長い耳に「それ」が聞こえるようになる。通路の先から生き物の息遣い。それが二つ。

レンがちらりと視線を送ってくる。鼓動が早くなるのを感じながら頷くと、魔法の明かりがすつと奥に向かって移動を始めた。

照らされる範囲が変わったことで闇に潜んでいた小柄な人型生物が二体、驚きの悲鳴と共に武器を構え始める。粗末な皮鎧にナイフ。荒れた緑色の肌は見るからに邪悪で醜悪だ。

「前の奴から狙つて倒すよー！」

「はいっー！」

人の形をした生き物は初めてだ。けれど、やることは動物相手の狩りと変わらない。

アイリスは息を吸い込んで気持ちを落ち着けると矢をつがえ、一匹目のゴブリン目掛けて放った。真つすぐに飛び、飛び出そうとしていた敵の右目を射貫く。鮮血と悲鳴。それでもナイフを構えて走ってくる。二本目の矢が喉へ。それでも止まらない。

しつかりと意思を持った憎悪の視線が恐ろしい。

震える指で三本目をつがえようとした時、

「マナボルト」

レンの松明を持っていない方の手から魔力の光が飛び出し、ゴブリンを襲った。

じゅつ、と、焼けるような音がしたかと思うと敵は光の粒となって消滅していく。

「さあ、もう一匹だ」

「っ。はいっー！」

斜め後ろに立つ、ハーフエルフの自分より小柄な少年がとても頼もしく思えた。

新パーティ体制確立

「今日は結構頑張ったな」

「うん。うるさい奴らが一緒じゃないから気楽だったし、これだけ稼げば黒字だね」

ダンジョンを出て家に到着したのは夕方頃だった。

思ったよりも長居してしまったもの、おかげで一階はほぼ探索し終えた。

モンスターからのドロップ品や宝箱内のアイテムを換金すれば当面の生活費になる。

「さ、アイリスちゃん。ようこそ、私たちの家へ」

「……はい」

フリーが家の前で振り返って言えば、新しく仲間になった少女はどこか消沈した様子で答えた。

家が小さいから気に入らない、というわけではなさそうだ。

本格的にダンジョンへ潜る以上は仲間と一緒に暮らすべき、というのは本人及び両親とも話し合って決めたことだ。少女の家も森の傍の小屋なので規模や豪華さで言えば大差ない。

「疲れただろ。フリーが夕食を作ってくれるから、それまで休んだらどうか？」

「レン。それより先にお風呂じゃない？」

ひとまずリビングに招き入れて椅子に座らせながら言うと、アイリスは「違うんです」と首を振った。

「私、あまりお役に立てなかつたので……」

「そうか？」

「めちやくちや役に立ったよね？」

二人して首を捻る。

飛び道具役が増えたのでモンスターを仕留めやすくなったし、接近戦でナイフを振るってもらおう場面もあった。

狩った動物を自分で解体することもあるうえ、母親から料理も教わっているそうなのでフリーと協力して家事もしてもらえそうだ。

「でも、私の弓じゃゴブリンも倒せませんでした」

「そりゃあ簡単には死なないって。あんなのでも人型モンスターだし」

しかも血の気の多いタイプだ。銃で心臓を打ち抜いたってすぐには倒れず、一撃くらいは浴びせに来るかもしれない。

「レンと協力すれば近づかれる前に数を減らせて便利だよ。私は飛び道具持ってないからなあ」

「ナイフ投げてもいいけど、万が一無くしたら赤字だもんな」

長い耳のせいか聴覚も鋭いらしく小さな物音も拾っていた。

案外、盗賊の素質もあるかもしれない。

「だから気にしないで。これからも一緒に頑張ろうね」

「っ。ありがとうございます……っ」

瞳に涙を浮かべ始めたアイリスを見たレンたちは二人であたふたした。

とりあえず風呂と食事の支度を始めることにしてそれぞれ動き出す。

「あの、レンさん。お手伝いします」

「いや、俺一人で大丈夫。魔法使うから水汲みとかいららないんだ」

「でしたらなおさらお役に立てると思います」

家に据え付けの浴槽はしつかりした木製のもの。

科学素材が手に入らないので昔ながらの方法になったらしいが、レンたちにとってはむしろ「旅館とかにしかない立派なやつ」だ。

みんな日本人だけあって家具を作る方も使う方も風呂にはうるさいのである。

アイリスは数回の魔法で何パーセントかが満たされた浴槽の前に立つと、なにやらキュルキュルと鳴き声を上げた。

何も無い空中から水が生まれ、どぱと落ちる。

生み出された量はレンの魔法よりも多い。

「今のって？」

「精霊魔法です。お母さんみたいに上手くはないんですけど、水のあるところならこれくらいはできます」

「さっきのは精霊に話しかけてたってことか」

アイリスによると、この世界のものには全て精霊が宿っている。

精霊魔法は彼らに協力を呼びかける術だ。水の精霊なら水を出せるし、火の精霊なら炎を飛ばしたりもできる。

弱点はその精霊がないと協力してもらえないこと。火や水のなるところでその属性の魔法は使えない。

もともとはアイリスの母のスキルで、それが遺伝したのだとか。

「俺が魔法で水を出せばアイリスが精霊と話せるのか。便利だな。……あれ？ そうすると空気中の水分には精霊はいないのか？」

「その。お母さんは『いる』って言うんですけど、私には上手く感じ取れなくて」

「ああ。言葉で伝えられてもあんまり実感湧かないかもな」

こつちには理科の教科書も朝の天気予報もない。目に見えて水があるのと比べて「ある」ことがわかりづらいのかもしれない。

雑談を交えながらも協力して魔法を使うと、いつもの半分以下の時間で作業が終わった。

最後に火の攻撃魔法を何発かぶち込んでやれば湯沸かしも完了である。

「よし。じゃあ俺はフリーの方を手伝ってくるから、アイリスは熱いうちに入ってくれ」

「いえ、私は最後で大丈夫です」

「気にしないでいいよ。俺は好きなだけ沸かしなおせるから」

むしろ手が空いているうちに入ってくれた方が助かる。そう言うとし訳なさそうにしながらも「わかりました」と了承してくれた。

と、思ったら、バスルームを出て行こうとしたところで後ろから頬に触れられた。

「じゃあ、せめて私で魔力を回復してください」

肌と肌の接触部からじわりと生命力が流れ込んでくる。

けっこうMPを使ったので正直ありがたい。

ただ、真後ろに美少女がいる状況は心臓に悪い。今、アイリスは皮鎧を脱いでおり服しか着ていない。エルフの血なのか、冒険の後とは

思えないほどいい匂いもする。

今日一日接してみても、二十歳と伝えられた時とはだいぶ印象が変わってきた。年上というよりむしろ人懐っこい親戚の子という感じだ。

「あの、アイリス？ 軽々しく男に触れるのは良くないぞ」

申し訳ないが「お父さんと風呂に入るのとか嫌じゃないか？」と引き合いに出させてもらう。

すると少女は多少の間を置いてからこう答えた。

「お父さんは汗臭いし、裸を見られるのは恥ずかしいですけど……レンさんとなら平気だと思います」

うん、この子を任されたのが自分たちで良かった。

父親以外の異性とあまり接する機会がなかったのだろう。となればここは荒療治で、

「じゃあ、いつそ一緒に入るか」

「はい。じゃあ私、着替えを取って——」

「レンー？ そういうことするなら私も混ぜて欲しいんだけどー？」
「うお」

なんだか怖い顔をしたフリーが開けっ放しのドアの傍に立っていた。

「待て、違うからな？ ああやって脅かせばさすがにわかってくれると思っただけで」

「本当？ 今朝私にキスしてきたのに？」

「あれはお前から誘ってきたんだろ!？」

アイリスには荒療治も無効だったので止めてくれてよかったのだが、この少女はやっぱり「あのネタ」を脅しに使うつもりらしい。

不満をこめてにらみ合うと、アイリスが首を傾げて、

「……お二人は付き合ってるんですよね？」

「変なことを言わないでくれ」

「そうそう。こいつとはまだそういうんじゃないから」

結局、後輩少女には一人で風呂に入ってもらった。



夕食の後、フーリ、レンの順で風呂に入った。

風呂上がりのレンがリビングへ行くと少女二人は何やら談笑している様子。

「なんの話？」

「ああ、大した話じゃないよ。初めてのダンジョンでレンが床につまづいて盛大に転んだ時のことを——」

「お前……！　そういうことするならお前が小麦粉被って大騒ぎした話もするぞ!？」

「あ、それは反則でしょ!？」

放っておくと本当にもろくなことをしない。

お陰で打ち解けたようなのであまり強くも言えないが。

レンは苦笑してアイリスの方を振り返って、

「サキュバスの翼って本当にコウモリみたいなんですね」

背中へと向けられる少女の視線に気づいた。

風呂上がりにローブは暑いので今は下着と服だけ。レンの服には背中に二箇所と尻のあたりに一箇所穴が開けられており、そこから翼と尻尾を外へ出している。

人によつては明確に「変」と言ってきたりするのもローブを着ている理由なのだが、幸い、アイリスの態度は純粹に物珍しそうなもの。というか、アイリスは本物のコウモリを見たことがあるのか。

「あの、レンさん。ちよつと触ってみてもいいでしょうか？」

「ああ、うん。ちよつとくらいなら」

「ありがとうございます、それじゃあ……!？」

「んっ」

翼の裏が細い指で撫でられるとくすぐつたいような感覚が走る。

「わ、すべすべしてる。羽毛じゃないんですね。表は……こつちの方が柔らかい?？」

「あ、アイリス。それくらいにしてもらえると助かる」

「あつ、ごめんなさい！　痛かったですか……?？」

「痛くはないけど、なんかくすぐられてるような気分なんだよな」
フリーはそんな二人を見ながらニヤニヤしている。

「レンさん、翼や尻尾があるってどんな感覚なんですか?」

「んー……難しいけど、感覚的には耳に近いかな」

背中についていることは普段から漠然と感じる。

触られるとくすぐったいし意識すれば動かせるけれど、細かい動きとなると練習が要る。尻尾で物を掴むとかはまだ無理だ。

そもそも、今はまだ尻尾も翼も短すぎる。

「レベルが上がる度にちよつとずつ大きくなってるんだよね、翼と尻尾れ」

「あんまり嬉しくないけどな」

翼が大きくなれば空を飛べたりするのかもしれないが、その頃には胸も膨らんでいそうだ。

「だんだん大きく……。レンさん、尻尾も触っちゃだめですか?」

「そっちは勘弁してくれ。翼以上にくすぐりたい」

尻尾を握られると怒る動物がいるように神経が多く繋がっているらしい。

敏感な器官が後ろにあるせいで仰向けで寝づらいのが困りものだ。

今は翼が小さいので横向きなら支障はないが、姿勢が安定しづらいので抱き枕を買いおうか悩んでいる。

抱き枕とか女みたいだからかう奴らがいなくなった（フリーは「可愛い」とは言うが馬鹿にはしてこない）ことだし買ってしまってもいいだろうか。

「あ。レベルアップと言えば、なんか服が擦れて痛いんだよな」

「ああ、胸?」

「わかります。私も狩りの時とか気になってしまつて、お母さんに相談しました」

ついでに最近の悩みを打ち明けると、ぼかして言ったはずなのに女子二人はあっさり意味を理解した。

「男の人でもそういうのあるんですね」

「ないない。レンが特別なだけ」

「なんでフリーが答えるんだよ。まあ、こうなる前は全然平気だったけど」

サキユバスになって華奢になったと同時に肌が滑らかで敏感になった。加えてレベルアップによる女性化（サキユバス化）が進行したことで成長期を迎えた女子に近い現象が起きているらしい。

「下着、女の子用のにした方がいいんじゃない？」

「集中の妨げになりますから放置しない方がいいかと」

「下着かあ」

理屈はわかるが気は進まない。

男として不自由なく生きてきたの今更可愛い下着をつけるとか恥ずかしくすぎる。

「サキユバスから人間に転職したい……」

「できるんですか？」

「種族は職業じゃないからほいほい変えられないんだって。変えられる方法はこの三十年で二つか三つしか見つかってないとか」

「それは無理そうですね……」

前に先人たちにも相談したが「やめておいた方がいい」と言われた。『種族の変更についてはわからない点が多い。仮に人間になるアイテムが用意できたとして、この世界で言う「人間」が元の日本人と同じとは限らない。既に変わってしまった容姿がどの程度戻るかも未知数だ』

そこまで言われては諦めざるをえなかった。

「仕方ない。明日にでも新しい下着を買いに行くか。……できるだけ地味なやつを」

「えー。どうせなら可愛いのにすればいいのに。ねえ、アイリスちゃん？」

「はい。レンさんなら似合うと思います」

「別に下着なんて誰に見せるわけでもないだろ」

「私たちが見るじゃない」

見せるというか見られているというか。

「……わかったよ。そこまで言うなら選ぶの手伝ってくれ。むしろ選

んでくれ」

「やった。じゃあアイリスちゃんも一緒に行こうね？」

「はい、是非。明日が楽しみです」

翌日、レンは生き生きした様子の女子二人に引っ張られるようにして女性向けの下着を買い求めた。

どうせならブラにしようと思張するフリーを「それだけは嫌だ」と説得し、結局戦利品はキャミソールタイプのシンプルなものとなった。

店主が「これから大きくなる予定ならブラだと買い直しになるから」と賛成してくれたのが大きかったかもしれない。

これならまあ、ちよつと形が違うだけで肌着みたいなものだろうとほつと息を吐いて、

「ねえ、レン。どうせだからショーツも買おうよ」

「それは嫌だ」

さすがにそれはどう言い訳しても女装としか思えない。

ただ、

「でも、身体にフィットした下着の方が動きやすすくないですか？」

というアイリスの意見には一理あると思っただので、これまで生活を共にしてきたトランクスからボクサーパンツに下着を切り替えることにした。

結果、余計なことに煩わされることが減り、ダンジョン探索時の集中力が上がった。

新しい下着の助けもあって二回目の探索は順調に進み、三人は十分な余力を残したまま一階の最奥、ボスの部屋へと足を踏み入れた。

ボス戦と世界の欠片

「各階には必ずボスがいる。その階の雑魚よりかなり強いから注意した方がいいな」

「はい。一階のボスはどんな相手なんですか……？」

「ゴブリンソルジャー。今までのゴブリンより装備も動きも良いやつ。それに短剣持ちのゴブリンが二匹」

「一階の雑魚敵はゴブリン（ナイフ持ち）やゴブリン（こん棒持ち）など。」

人間に例えると一般市民が武器を持ったような相手だったが、ここで初めて兵士——戦うためのゴブリンが登場するわけだ。

レンも初めて戦った時は雑魚と勝手が違うことに驚き、恐怖を覚えた。

「でも、ゴブリンはゴブリンだ。基本的な対処方法は変わらない」

「向こうは遠距離攻撃してこないから落ち着いて一体ずつ倒しちやおう」

「わかりました」

こんな会話を交わした後、入室したボス部屋は数メートル四方の正方形。

奥まった場所に皮鎧と剣を持った比較的体格のいいゴブリンが一匹と、それを守るようにナイフ持ちのゴブリンが二匹。侵入者の姿を見た途端に奇声を上げて武器を構える。

当然、彼らに対応を始める頃にはレンたちも動き始めていた。

「左から！」

「はいー！」

扉を開けたフリーが道を開けると同時、アイリスが左の一匹に向けて矢を放つ。肩に命中して僅かに動きが止まった。次の矢をつがえる間を埋めるようにレンが魔力の光線を放って葬り去る。

その間、短剣を構えたフリーは右のゴブリンへと接近して注意を惹いていた。

ソルジャーも剣を構え、二対一に持ち込もうと動きを変え——遠距

離攻撃への警戒が緩んだところに矢と魔法の連続攻撃。これも綺麗に命中したものの、

「倒れない！」

「さすがにボスだからな」

怒って狙いを変えてくるソルジャー。殺意を向けられたアイリスは若干の動揺を見せながらも逃げることなく次の手を打った。

キュルキュルという精霊語が響いたかと思うと、レンが左手に持っていた松明から炎が飛び出す。

さらに、追いかけるように放たれる矢。駄目押しに二発目のマナボルトを叩き込めば、さすがのソルジャーも光の粒となって消滅した。

「……さ。これで後はあんただけね」

「ギ……!?!」

短剣で上手く敵の攻撃をさばっていたフリーが後方へ大きく跳躍。慌てて逃げようとするゴブリンだが、唯一の出入り口はレンとアイリスが塞いでいる。

直後、戦いはあっさり終わった。

「勝てました！」

「ああ、お疲れ様。大丈夫だっただろ？」

「はい。落ち着いて戦えば大丈夫、っていう意味がわかりました」

「実際、パニックになると結構苦戦するんだよ、こいつら」

レンたちの時は五人パーティだったが、組んで間もないせいで指揮系統が確立していなかった。

雑魚から、いやボスからみたいなの会話で時間を浪費した挙句、声のでかい奴の指示に従うことになったものの、今回は一匹のゴブリンに複数人が殺到して他を放置しそうになる始末。

身体のでかい奴が射線を塞ぐせいでレンの魔法が撃てなくなるし、なんとというかさんざんだった。

「でも、これくらい楽勝じゃないと次が困るよー」

各ゴブリンの消滅場所に残るドロップ品を回収しながらフリーが笑う。

「二階は今のソルジャーがメインの雑魚だから」

「え!? ボスだった敵がたくさん出てくるんですか……!?!」

「理不尽だよな。でもそういうところなんだ、ここは」

二階の初戦はゴブリンソルジャー×2。ボス戦で苦戦するような下には行かず、もう少しレベル上げなり連携の練習をするべきだ、という教訓をここで学ぶことになる。

「まあ、今の調子なら二階もなんとかなるだろ。とりあえず今日は帰って休むか」

「そうね。記念に階段と石碑だけ見て帰りましょ」

「石碑、ですか?」

二階への下り階段は部屋の奥にいつの間にか出現している。敵が全滅すると光と共に現れる仕様なのだが、話している間に光は見逃してしまった。

ボスは復活しないのもう一回見るには二階のボスを倒すしかないが——まあ、別にそれほど楽しみにするものでもない。むしろ何回も見ているとどうでもよくなってくる。

「石碑はほら、ソルジャーがいた位置の壁」

「あ……っ! これが古代文字で書かれたメッセージなんですね?」

アイリスが駆け寄り、刻まれた文字を指でなぞるようにする。

当然、これも日本語ではなく謎の異世界語(?)だ。

大した意味はないようだがボス部屋には必ず設置されている。少女は感慨深げにほう、と息を吐き出して、

「もっと文字の勉強をしておけばよかったです」

「え、アイリスちゃん、これ読めるの?」

「はい。少しだけなら」

「凄いな。俺たちは『祝福』で翻訳してるだけなのに」

街で使われているのは文字も含めて日本語(＋アルファベット)なのである意味二か国語を学んでいるようなものだ。

フリーが何かを思いついたように「そうだ」と声を上げて、

「ちゃんと読めてるか採点してあげよっか?」

「いいんですか? それじゃあ、お願いします」

嫌がられるかと思っただらむしろ嬉しそうに頷いてくれる。微笑ま

しい光景にレンの気持ちも和んだ。

たしか、一階の文言はこんな感じだった。

『最初の一步が今、踏み出された。世界の欠片を使い、闇を払え。汝らは地を足で踏みしめることができるだろう』

ゲームのTipsみたいだよな、とあらためて思っていると、

「あれ？ ねえレン、これ私たちの時と違わない？」
「ん？」

呼ばれて眺めた石碑には確かに違う文言が記されている。

『世界の子よ。汝の勇気を称賛する。願わくばその足を止めることなく進み続けて欲しい』

どういふことだ、と首を傾げたのも束の間、後輩が口を開いて、

「賢者様が仰っていました。この世界で生まれた子がパーティにいると石碑の文章が変わるって」

以前にダンジョンへ潜った「ネイティブ世代」からの情報らしい。

「アイリスちゃん以外にもいたんだ、そういう人」

「はい。一番年上だった人は私より七歳年上で、私たちの中で一番にダンジョンに潜り始めました。……何年も前に帰って来なくなってしまうんですけど」

「そうだったんだ……」

ダンジョン内で全滅したパーティは死体すら回収されない。そのパーティと同じダンジョンに潜ることができないため、これはどうしようもない。

彼の死以降、なるべく子供たちにダンジョン攻略をさせないようにしよう、という動きができた。

お陰で死者は減ったものの、文言変化に関する研究は途中で終わってしまっている。

湿っぽくなった雰囲気を吹き飛ばすようにアイリスは笑って、

「賢者様から石碑の写しを頼まれているんです。描いていってもいいですか？」

「ああ、もちろん」

「忘れないように訳も一緒に書いておこっか」

アイリスが覚えたという古代文字も今までのパーティーがこうやって石碑を写し、文字の配列パターンなどからこつこつと解析してきた結果を元に行っている。

研究の第一人者は件の「賢者様」だ。

石碑の写しが終わるのを待ってから、レンたちはせつかくなので彼に会いに行くことにした。



「久しぶりだな。元気そうで何よりだ」

「お久しぶりです。……ええと、賢者様」

賢者の庵は街の中心部から離れた静かなエリアにあった。

1LDKのアパートを思わせるような造りの部屋。連れはおらず一人暮らしらしい。本や紙束があちこちに散乱しており、いかにも男の部屋といった感じだ。

脱いだ衣服が散乱している様子はないのが救いだが、代わりに換気が不十分なような。

レンは部屋の空気に小さく眉をひそめた。

同じ男として共感してもいいところ。フリーと一ヶ月以上、ここ数日はアイリスも加わったのもあって多少敏感になっているのかもしれない。

なお、そのアイリスはというと、

「もう、賢者様！ またお風呂をサボってるでしょう？」

「ああ。つつい熱中してしまつてな。すまない」

「だめじゃないですか。お母さんに言いつけますよ？」

挨拶もそこそこに年上の男を注意し始めた。

賢者と呼ばれる男——レンたちを転移直後に出迎えたあの男もまた、面倒くさそうにしながらも小言を受け入れている。

フリーがきよとんと目を瞬いて、

「仲良いんだ？」

「あ……はい。賢者様はときどき家に訪ねて来てくださっていたので

顔見知りなんです。私にも昔から良くしてくださっていたんですよ」

「君の母は唯一の純血エルフだ。何かあつては大変だからね」

「……賢者様のそういうところは嫌です」

そう言うのとハーフェルフの少女はレンの後ろに隠れてしまった。

「これは失敬」

軽く頭を搔いてから（水でもぶっかけて洗ってやろうかと思つた）、賢者は「立ち話もなんだから」と三人に座るよう勧めてきた。

四人掛けのテーブル、および椅子は一人分のスペースを除いて物でいっぱいだったものの、賢者はそれらを雑に移動させて座れるようにする。

背中にいるアイリスを振り返ると、少女は嫌そうにふるふると首を振つた。

「俺とアイリスはこのまま立ってます」

「じゃ、私は遠慮なく座らせてもらおうつと」

「茶でも淹れようか？」

「あ、それはお構いなく」

ストレージから酒瓶を取り出して抱えるフリー。なんとというか、これくらい凶太い方がこの世界では生きやすいのだろう。

あまり気にしないことにして四十代中盤の先輩に視線を戻した。

「さっきの純血がどうのつてどういう意味ですか？」

「そのままの意味だ。この世界の存続を考えた場合、異種族の存在は多様性に繋がる。血は絶やすべきではないだろうか？」

「元の世界には戻れないと思つてるつてこと？」

「そこまでは言わない。ただ、我々の世代は間に合わないかもしれない。それに全員が帰還を希望するとも限らない」

ローブがぎゅつと握られる。

両親を帰したいと思つているアイリスからすれば気持ちのいい話ではない。

ただ、賢者の言うことにも一理ある。

もしダンジョンを攻略し終えて帰る方法が見つかったとして、それは「ここで生まれた人間」も一緒に帰れる方法なのか。

召喚された者だけが戻れるとしたら——「ネイティブ世代」が生き
ていけるようにここを整えるのは必要なことなのかもしれない。

言い方はわりと最悪だが。

「ねえ、賢者様って結婚はしてないの？」

「残念ながら独り身だ。私達の世代は生き残った者が少なくてね」

「賢者様たち最初の世代は『五英雄』と呼ばれて伝説になっています」

由来は単純。五人しか生き残らなかったからだ。

賢者様は懐かしむように目を細めて、

「私達の時は街などなかった。神殿の光が消えると今度は『闇に覆わ
れた世界』が目に入ったものだ」

比喩ではない。

今でも街の外側へ目をやると、壁のように立ちはだかる『闇』を見
ることができる。レンたちはまだ試していないが、闇の向こうへ行こ
うとすると不思議な力によって阻まれてしまうという。

ゲームで言うところの侵入不可能区域。

あるいは、無しか広がついていないために世界が「行くな」と警告し
てくれているのか。

「食べ物とかはどうしていたんですか？」

「荷物袋——今はストレージだったか。それにいくらから入っていただ
ろう？ 後はモンスターのドロップで賄うしかなかった」

「……そんなの、殺される前に餓え死にするだろ」

「実際、食料の奪い合いもあったさ」

街も家もなく、攻略本もない。チュートリアルさえ不十分な中、喧
嘩さえろくにすることがないような高校生たちがダンジョンに放り
込まれ、ゴブリンとの殺し合いをさせられた。

凄惨すぎる「一年目」に胸が痛くなった。

「幸い、食料の心配は一階をクリアするまでだった。……君達も手に
入れたらどう？ 世界の欠片を」

「うん」

世界の欠片はボスがドロップするレアアイテムだ。

回収していたフリーがストレージから取り出してころんころん、と

テーブルに置く。金平糖のような形をした真っ白い宝石である。

この石を世界の端にある『闇』にかざすと一定範囲が明るくなり、移動可能になる。文字通り「世界を作って」いるのだと推測されている。

この時、土地の種類などを願うことである程度の操作も可能。

ちなみに一個の宝石で払える闇は二メートル弱。

「最初に現れたのは一本のリンゴの木と小さな水場だった。我々がどれだけ飢えていたかわかるというものだ」

「それだけじゃすぐに足りなくなるんじゃない？」

「この世界の果樹は実のなるサイクルが早い。それに、ボスを倒せば楽になるとわかったからな」

手に入る世界の欠片は階層とパーティ人数によって決まる。一階の場合は「初めてクリアした人数」と同じだけの欠片が手に入る。

生き残っている人間が全員一階をクリアすれば食料も水も増やせるし、二階をクリアすればさらに増えるというわけだ。

「土地に余裕が出てくると『農夫』といった、戦闘に役立たないクラスの方が活躍するようになった。畑など対応する地形を作って世話をさせればアイテムが生み出せる」

試行錯誤の連続はゲーム的だ。……命がかかっていなければ少し羨ましく思えたかもしれない。

賢者はふつと息を吐いて話を区切ると「それで？」と話を振ってきた。

「その様子からしてアイリスと一階をクリアしたのだろうか？　世界の欠片はいくつ手に入った？」

「二個」

「あれ、二個？」

テーブルの上には確かに二個の宝石。

初回クリアはアイリス一人だから一個のはずなのだが。

「やはりな。この世界で生まれた子には、我々とは異なる特権が与えられているのだ」

賢者の話

かつてダンジョンを攻略したネイティブ世代も通常より多い数の欠片を獲得した、と賢者は語った。

「碑文の写しもありがたく頂戴しよう。ささやかではあるが謝礼を受け取ってくれ」

いくらかの硬貨がストレージから取り出され、フリーへと差し出される。

賢者はこうして対価を用意することで知識を収集している。攻略本の作成において主動力となっているのも他ならぬ彼である。

貰った金も生活費として有難いが、今は話の方が重要である。

「俺たちより欠片が多くもらえる……つて、それ、大発見じゃないですか?」

「ああ。子供たちを連れて攻略すれば楽に土地を広げられる。我々もそう考えた。だが、そう上手くはいかなかった」

「どうして?」

「子供たちが苦勞して道を切り開かなければむしろ欠片の数が減ることがわかったのだ」

オンラインゲームなどで使われる用語に「パワーレベリング」というものがある。

レベルの高い既存プレイヤーが初心者を手助けすることで安全かつ高速にレベルアップさせる、というものだが、ダンジョンにはこれへの対策が施されていた。

「親世代がけん引し、子供たちに何もさせずクリアした時の欠片の入手数はゼロだった」

「なっ……!?!? それ、ボスに再挑戦は?」

「できなかつた。具体的な線引きまでは不明だが、与えたダメージか攻撃した回数か、なんらかの形で貢献度がカウントされているらしい。そして条件に満たなければペナルティが課される」

「うわあ。困るよね、それ」

フリーが呻くと、賢者も深いため息を吐いた。

「対策として新規の転移者と子供達を組ませたり、子供達だけのパーティが組まれるようになった。……その結果、『初めてのネイティブ世代』を含むパーティが全滅している」

報酬のために無理をしたことで大事な子供が失われた。

高校生のレンには想像するのも難しいが、親たちの悲しみは相当なものがあっただろう。

これを受けて「子供たちをダンジョンに潜らせないようにしよう」と話が出た。

「だから、アイリスの挑戦にも思うところはあるのだ」

「……賢者様」

レンの後ろから顔だけを出したアイリスが申し訳なさそうな顔をする。

「そんな顔をするな。あいつらにもう一度故郷を見せたいという気持ちもわかる。それに、おそらく君達が頑張ることも世界には必要なのだ」

「どうしてですか？」

「簡単だよ。我々はどこまで行っても異分子。だからこそダンジョンも子供達の挑戦を歓迎しているのだ」

転移直後のメッセージや碑文の内容を見ても、神殿、あるいはダンジョンを作った者がレンたちに「世界を広げること」を求めているのはわかる。

であれば、彼らにとって、この地で生まれて育った子供たちは重要な意味を持つ。

「なんか、滅んだ国の復興を支援してる気分」

フリーが呟くと「似たようなものだろうな」と返答があった。

「ただし、復興しなければならぬのは国ではなく世界だ」

「そんなこと別の世界の人間にやらせるなよ……」

「この世界の人間が全て死んだのだとすれば仕方なかろう」

仕方ない、で済ませられるのはだいぶこの世界よりの考え方だが、理屈はわかる。

用件もとりあえず終わった。

世界の謎に関してはここで議論したところで結論は出ない。

「二階以降の石碑もぜひ写しを持ってきてくれ。君達は話が通じそうだからな」

「わかりました。報酬が出るならこっちとしても得ですし」

帰ろうと立ち上がったところで、

「ああ、そうだ。レン君だったな。君と二人きりで話したい。少し残ってくれないか」

賢者の声がレンを制止した。



「話ってなんですか?」

「なに、大した事じゃない。……レベルアップは順調かな?」

「まあ、安全第一でやってます」

ろくな話じゃなかったなと思いつつ肩を竦める。

積極的にレベルを上げようとはしていない。かと言ってダンジョンを攻略していれば経験値は勝手に入る。

今日だって、ボス戦後にステータスを確認したところレベルが上がっていた。

残念ながらファンファーレが鳴ったりHPMPが全回復したりはしないので上がったかどうかは数字を目視するしかない。

すると男は口元に笑みを浮かべて、

「そうか。それは良いことだ」

「俺がだんだん女になるのが良いことなんですか?」

多少刺々しい口調になったのは仕方ない。

相手は相手で割と失礼な態度で、

「良いことだよ。性別が規定される種族。しかも、それに男が選ばれるなんて非常に珍しい。肉体が変化する過程も細かくレポートして欲しいくらいだ」

「金になるなら考えますけど」

「ふむ。これくらいでどうだね?」

提示された額はかなり魅力的だった。

やんわり断ったつもりがまんまと乗せられたレンはついレポート作成を承諾してしまった。報酬の一部は酒代に消えるだろう。

「本題はなんですか？ この話をするためにフリーたちを帰したわけじゃないでしょうか？」

「これが本題だよ。仲間に女性化を後押しされるのも嫌だろう？」

「確かにそうですね」

普段から割と「いいじゃない。可愛いし」とか言われているので大差ない気もするが。

「そんなに嫌なものなのか？ 容姿が美しくなるのだから性別くらい我慢すれば良からう」

「男に身体を狙われても同じこと言えます？」

「……妊娠がどういうものか体験してみたい気はするが、男の性欲を浴びせられるのは確かに嫌だな」

ほら見ろ。

というか、だんだんだだのエロ話になっていく気がする。女性陣を帰させたのはこのためだったのではないか。

「男に抱かれるのが嫌なら、今のうちに女を作ってしまったらどうだ」

「これから女になります、なんて男と付き合いたい奴がいますか？」

フリーとキスしたことをふと思いついたが、あれは別に好きだと言われたわけでも付き合おうと言う話になったわけでもない。もし上手く行っていたとしてもセフレみたいな関係になるだけだろう。なりたいが。

賢者は少し考えるようにしてから、

「あいにく経験がないのでなんとも言えんな」

「金払えば相手してくれる人がいるって聞きましたけど」

「私は皆のリーダー格だぞ？ 娼婦を買っているなどと知られたら恥ずかしくて外を歩けん」

ああ、賢者っていうのは魔法使いを通り越したという意味だったのか。

ジト目で見てやると気まずそうに咳ばらいをして、

「君のアレもあまり自慢できるサイズではないのだろうか？ 魅了スキルとテクニクで骨抜きにすれば女になっても関係ないのではないか？」

「ひよつとして喧嘩を売ってますか？」

「良いだろう。女の君に手を出すのは自制しているのだ。男の君と他愛ない話をするくらいは許して欲しい」

当然だが、彼にも性欲はあるらしい。

一回目の神隠しメンバーということはレベルも高いだろうし、彼の血が引き継がれないのも損失なんじゃないのか？ と疑問に思いつつ、あることに思い至った。

「アイリスのお母さんにあんなこと言うってことは、俺も期待されてるんですか？」

「無論。完全にサキュバス化した上でなるべく多くの子を残して欲しいものだ」

半端な状態だとどうなるかも気になるが、おそらくサキュバスの血は遺伝しないだろう……と真顔で続ける彼を見て、レンは「こういうところが嫌がられるんだろうな」と思った。



「なんていうか、偏屈な研究者って感じの人だね。私たちのことエロい目で見ないのはいいけど、ちよつと面倒くさそう」

「はい。良い方だとは思いますが……」

先に帰ることになったフリーはアイリスと一緒に食料品店へ寄り道をした。

卵などの食品は傷みややすいので使い切れる分だけこまめに買わないといけない。マジックアイテムの冷蔵庫もあるにはあるのだけれど物凄く高くとても買えなかった。

レンがいると機嫌が良くなる店のおじさんはアイリスが相手でもおまけをしてくれた。美人なら誰でもいいらしい。

今度からこの子に頼むと言う手もあるだろうか？ 駄目か。一人

で買い物に行かせるとあちこちでナンパされそうだ。

で、道中で話題になったのは賢者のこと。

「お父さんなんか『あいつに変な事されたらすぐに言え』っていつも言ってます」

「うわ、嫌われてるなあ」

でも「無理もないかな」とも思う。

子供をたくさん産んで欲しい、とかなかなかハードなセクハラだ。純粹にこの世界のことを考えているのはわかるのだけれど、だからこそ悪意なくひどいことが言える。

もし、アイリスの母親が未亡人になった場合、あの賢者はきつと当然のように再婚を勧めるだろう。

その場合でも「私と結婚しよう」とは絶対言わなさそうなのがせめてもの救いである。

「アイリスちゃんって何人姉妹なんだっけ？」

「三人です。十七歳と十三歳で、二人ともとっても可愛いんですよ」

この子の妹ならそれはもう可愛いだろう。年下の弟妹なんてただでさえ愛着が湧くのにな。

「お母さん頑張ったね。この世界だと子供産むのも結構危ないんじゃない？」

「お母さんは『そんなに大変じゃなかった』って言ってました。日本にいた頃より身体が丈夫になったのと、生命の精霊魔法があるからって」

最先端の医療技術の代わりに魔法が活躍するのか。

確かに、自分で自分のHPを回復できるのなら痛みや苦しみもだいぶ和らげられる。

回復魔法の使い手が知り合い相手に助産師めいたことをすることもよくあるという。

「じゃあ、レンもそのうちそういうのに駆り出されるかな」

「そうですね。私もお手伝いできるように魔法を上達しておきたいです」

「アイリスちゃんは頑張り屋さんだなあ」

フリーも負けてはいられない。

レベルアップだけに頼らず、暇な時にナイフや格闘の練習をしておくといざという時に役立つ。

トレーニングでも経験値は入るので一石二鳥である。

「でも、そうだね。回復魔法が使えるれば自分の時も役に立つんだし。覚えておいて損はないか」

「じ、自分の時なんてそんな……。まだまだ先の話ですし」

頬を赤くしてそんなことを言うアイリスだが、二十歳ならそろそろ結婚を考えておかしくない年齢だ。

この子の場合寿命が長いので焦る必要もないのだろうかけれど。

「結婚はともかくとしてさ。気になる男の子とかいないの？」

「い、いませんよ。私はあんまり街にも出ませんでしたし、街に行くとみんなに見られるので落ち着かなくて……」

「それで知ってる男がお父さんとあの賢者おっさんかあ」

「こんなに可愛いのに、なんというか寂しい。」

「あ、でも」

アイリスが恋愛できるように応援するべきか、と何気なく考えていると少女が再び口を開いて、

「レンさんは格好いいと思います」

「……へえー？」

見れば、はにかむような表情。

たぶん頼れるお兄ちゃんに対するような小さな憧れなのだろうか

……ちゃんというじゃないか。気になる男の子が。

「でも、レンは格好いいっていうより可愛い系じゃない？」

「そんなの失礼ですよ」

「いいのいいの。別に悪口言ってるわけじゃないんだから」

レンに言わせれば「可愛いは褒め言葉じゃない」となるのだろうか、別にすべての女が背の高いがっしりした男を好むわけじゃない。

フリーは悪ぶってみたり自分を大きく見せようと空回りしている奴よりああいう可愛い奴の方が好みだ。

なんと言うのだろうか。小動物系？

こつちに来てサキュバスになる前からからかうと面白いのは変わっていない。

「あいつ、意外と頼りがいあるしねー」

「はい。戦いで落ち着いていられるのも、きっとレンさんが傍にいてくれるからだと思うんです」

「うんうん。それ、直接言ってあげるときつと喜ぶよ」

「ちよ、直接……!? それもちよつと、その、恥ずかしいです」

俯いてごによごによと呟くアイリス。

なんだろう、この可愛い生き物は。

自分とレンでちゃんと守ってあげなければ。

「二人つきりになりたい時とかあったらいつでも言ってみてね。そうしたら私、適当に飲みにも行ってみてしばらく帰ってこないから」

フリーとレンとの間にはあのキスの一件以来特になにもない。先生の勧めでアイリスが仲間になってそれからばたばたしていたので当然なのだけれど。

この可愛くて純粋な後輩がいると、ここであまり変なことでもできない。

キスしてしまった以上、ここで終わらせたくない気持ちがある一方、もしアイリスが本気でレンを好きになるのなら応援してあげたいとも思ってしまう。

ある意味恋敵になるというのに。

「二人つきりだなんて……そんなの、どうしていいかわからなくなりそうです」

幸い、今のアイリスにはまだそういうのは早そうだ。

少しだけほつとしながら少女の方へ軽く身を寄せて、

「じゃ、そういうのはレンの方から誘われた時にとっておこっか」

「レンさんはそういうこと言わないと思います」

「それもそうだ」

二人で和やかに笑いあった。

なお。

この後、家に帰ってきたレンがいきなり「どつちでもいいから羽と

尻尾のサイズを測るの手伝ってくれ」とか言い出したせいでアイリスは見事に真っ赤になった。

望まない再会

「俺、そんなに変なこと言ったか？ 風呂に入るよりは普通だと思うんだけど」

「あはは。まあ、ちよつとタイミングが悪かったかなー」

夕食や入浴を済ませた後、部屋でフリーと二人きりになる。

若干一名から勘違いを受けたものの、もちろん変な意味ではない。

賢者から依頼されたレポートのために今のレベルでの翼と尻尾の長さを記録しておくためだ。

アイリスは自室にいる。

外へ追い払ったりとかは間違ってもしていない。

服も上だけ脱げば十分である。

人の部屋にノックもなく入ってくる奴なので、フリーはそれくらい見慣れている。立ったまま上を脱いで後ろを向くとすぐにメジャーで計測を始めた。

「……ん、羽は十センチ。最初の二倍くらいになったんじゃない？」

「マジか」

「もう少ししたら前からでもちらつと見えそう」

今後はよりローブが手放せなくなりそうだ。

「レベルから伸び率計算できるのかな？ 毎回測ってたらわかりそうだね。……じゃ、尻尾触るよ？」

「おう、優しくな」

「おっけ」

応えたフリーは確かに優しい手つきで尻尾に触れてきた。ただし、計測するのではなく撫でるように。「ひうつ？」と変な声を出してしまいくすくすと笑われた。

さすがに二回目は普通にやってくれて、結果は八センチだった。

「ありがとう、助かった」

サキュバス化の進行を数字として目にするのは良い気分ではないものの、これもお金のためだ。忘れないようにしっかりとメモしておく。

それからいそいそと服を着こんでベッドに座り、

「ねえ、レン。測るのってこれだけでいいの？」

「ん？ 他に測った方がいいところあるか？」

「うん」

「だいたい二箇所視線が注がれる。」

男子から女子になるにつれて変化する場所、と考えても自ずと答えは出た。

「タイムリミットまでどのくらいか分かった方が便利じゃない」

「待て。必要だとしてもそこはさすがに自分でやる」

「本当？ たぶん物凄くやりづらと思うよ？ 私だって自分じゃスリーサイズ上手く測れないし」

「お前、俺の身体に触りたいだけだったたりしないよな？」

「だけ、ではないかな。半分くらい？」

物凄く不安になる返答ではあったものの、せっかくなのでお願いすることにした。

着たばかりの服を脱いでバスト、ウエスト、ヒップを計測。

今度は必然的に下着一枚。黒のボクサーパンツが最後の砦だが、

「さて。これも脱いじゃおっか」

「やっぱり面白がってるなお前!?!」

「じゃあここだけアイリスに頼む？」

純粋な妹分にそんなことを頼めるわけがない。

結局、レンは裸をあますところなく観察されながらしつかりと測られてしまった。

「……嫁に来てくれる子がいなくなったら責任取れよ」

今度こそ服を着こみながら冗談めかして言う。

どうせ「レンはお嫁に行く方でしょ」とでもからかわれるかと思いきや、

「うん、いいよ。私で良ければ」

悪戯好きな性格に反して澄んだ綺麗な瞳に見つめ返された。

意外すぎる反応に硬直していると、家のどこかからキュルキュルと精霊語が聞こえてきた。アイリスが魔法の練習をしているらしい。

それを合図にフリーが「さ、手洗って寝よつと」と歩き始めた。呼び留めようと思えば呼び留められたと思う。ただ、少女の耳がいつもより赤くなっているように見えて、開きかけた口が止まってしま

う。
アイリスの耳と違って人間の耳はそこまで目立たないし、ただの見間違いだとは思うのだが。

「……眠れなくなるだろ、こんなの」

幸い、翌日はダンジョン探索の予定がない。



「なあ、二人とも。こんな魔法があると便利、とかないか？ レベルアップで何取ろうか迷ってるんだ」

朝食に顔を出すとフリーは全くのいつも通りだった。

昨夜の一件は秘密、という合図だと認識してレンもなるべく普通に振る舞う。

幸いアイリスは特に気付かなかった様子で「おはようございます」と挨拶をしてくれた。

食事をしながら切り出したのは計測の件と関係あるようなないような事柄。

「レベルアップのボーナスですよ。どんな魔法があるんですか？」

パンとミルクを笑顔で味わっていたアイリスが口の中のものをごくと飲み込んでから尋ねてくる。

「基本的な魔法は一通りあるよ。たぶん、精霊魔法とは内容が違うんだらうけど」

ウインドウは他人にも見せられるので二人に見えやすいように公開してやる。

所持スキルおよび獲得可能スキル一覧。端の残りスキルポイントの欄には「2」の表示。

「前のも余らせてたんだ？」

「ああ。とりあえず困らなかつたし、前に上がった時は相談できる空

気じゃなかったから」

当時のパーティは男三人を含む喧嘩別れ前の奴らだ。

フリーはともかく他の奴らとは日を追うごとに仲が悪くなっていた。理由が「やらせてくれないから」だったあたり馬鹿じゃないのかと今でも——いや、それはともかく。

レベルアップするとステータスが上昇するほかにスキルポイントが1得られる。

このポイント1点につき新しいスキル一個を覚えるか、既存のスキルを強化することができる。

レンが今持っているのは初期スキルである「魅了」「エナジードレイン」の他、任意で取った便利魔法と攻撃魔法だ。

「ファイア」「ウォーター」「ウインド」はある程度MP調節が可能で、小さく使えば火を付けるなどの用途に、大きければ湯を沸かしたり浴槽に水を溜めたりできる。

「マナボルト」は使い勝手のいい単体攻撃魔法だし「ヒール」にも数えきれないほど世話になっている。アイリスが来てからはまだ出番がないが複数攻撃が可能な「マジックアロー」という魔法も覚えている。

修得可能な魔法としては属性付きの攻撃魔法やまだ取っていない便利魔法などがある。

「賢者様あの人にも言われたんだけど、俺の魔法は幅が広い分、専門性だと魔法使いとかに劣るらしい。だから色々できる方がいいと思うんだけど」

「そうだね。レンがいると家事が捗るし」

「咄嗟の対応ができるのでとても助かっています」

フリーとアイリスの発言の差には敢えて言及しないことにして、

「うーん……そうだなあ。あ、そうだ！ ねえレン、冷蔵庫が欲しい」「『フリーズ』を取ってことか？ これ、水を凍らせるだけでエンチャントする魔法じゃないんだが……」

「この際だから製氷機でもいいよ。氷があればお酒も冷やせるでしょ？」

「なるほど、重要だな」

ということでは便利魔法「フリーズ」に決定した。冷気を放射することもできるので夏場、暑くてどうしようもない時にも使えるかもしれない。

こっちの世界はヨーロッパ準拠だからかそれとも地球温暖化の影響を受けていないせいなのか、七月相当のはずの今でさえ日本ほどの暑さはないのだが。

「食材長もちさせるのにも使えるといいんだけど……」

「多少の氷じゃすぐ解けるだろ。……ん？　じゃあ大量の氷ならアリなのか？」

「あ！　なんだっけ、氷室ってやつ？　あれどうやって作るんだろ？」
「窓のない部屋に氷びっしり置くんじゃないか？　あとなんか木くず？　を敷き詰めてたような……？」

ちようど家には食品保管用の地下室があるので試してみることにした。

適当な容器に「ウォーター」で水を張っては「フリーズ」で凍らせて地下室に並べる。

「作ってる間にけっこう溶けるぞこれ」

「部屋の温度が下がれば溶けにくくなる、はず？」

「できた氷を保つのは私が精霊にお願いしてみます……！」

地下室のスペース半分を氷が埋め尽くすためにレンのMPがほとんどなくなったものの、その甲斐あって部屋の温度はぐっと下がった。部屋が冷えたことで氷が溶けにくくなって好循環である。

これには調理担当のフリーリと、それを手伝うことのあるアイリスが歓声を上げた。

「やった！　後は木くずがあると変わるのが試してみたいなあ」

「木くずならうちに行けばもらええると思います！」

「待った。さすがに少し休ませてくれ」

そうと決まればさっそく、という勢いの二人を制止。

MPがなくなると気分的に疲れる。

かといって自分だけ家で休んでいるのもなんとなく落ち着かない。

ぐったりしているレンを見たアイリスは冷静になったのか少しゆんとして、

「もう一つのポイントはレンさんが楽になるようなものに使ってください」

レンの左手が柔らかな両手に包み込まれる。

触れ合った箇所から生命力が流れ込んでMPに変換される。アイリスを疲れさせてしまうというのが難点だが、これには確かな癒し効果があった。

「ありがとう。じゃあ『エナジードレイン』の効率を上げるかな」

吸えるHP量を上げることもできるが、今回はMPへの変換率の方を上げる。

操作を終えたのを見たフリーが右手を抱きしめるように握ってきて、

「目指すは無限ループだねっ」

ヒール↓エナジードレイン↓ヒール（以下略）というコンボだ。

ヒールの回復量と合わせて効率をアップしていけば安定した補給が見込めるようになる。とてもゲーム的な戦法ではあるものの、将来的には是非とも実現させたいところである。

今の段階でも家で休んでいる分には十分黒字になる。

「ひと休みしたらアイリスの家をお願いしに行くか」

ただ、ずっと地下室にいるのはちよつと寒すぎるので先にリビングへ戻った。



アイリスの実家——森野一家は快くレンたちのお願いを聞いてくれた。

正確には「おがくず」だと訂正してくれた上で使い方までレクチャーしてくれたくらいだ。氷室を使っている家があるらしく、備蓄されていた分から持ち帰れるだけの量を分けてくれた。

もちろん本来は有料である。

さすがにタダでは申し訳ないと交渉して、アイリスが手に入れた二個の「世界の欠片」と交換ということになった。

大した量ではないものの、これを使えば森を広げられる。新しい転移者が来て木材の必要量も増えてきたのでちょうどいいのだという。手伝おうとしたレンがアイリスの妹たちに囲まれ、話し相手をさせられている間に、クラス「木こり」であるアイリスの父がおがくずを袋に詰めてくれた。

流れて昼食まで振る舞われそうになったのを丁重に辞退し「娘をよろしく」とあらためてお願いされて森の傍の小屋を後にして、

「本当、良い人たちだよな」

「はい。自慢の家族です」

アイリスが笑顔で答えるのも頷けるといふものだ。

彼らからの好意を思えば袋の重さなんて安いものである。盗賊であるフリーも筋力は高くない。一番重い袋を持つのは男であるレンの役目だ。

小柄になって失った分の筋力はレベルアップでお釣りがくるほど取り戻しているものの、それでもなかなか重い。

あいつならこれくらい軽く運べるのだろうか、と、前のパーティーでリーダーだった男を思い浮かべて、

「レン」

不用意な思考が招いてしまったのか。

思い浮かべたのと同じ顔が眼前に立ちはだかっていた。

身長百七十五センチ。日本にいた頃はハンドボール部に所属していた。「斧使い」のクラスを得てからは筋肉量が増してよりがっしりした体格になり、身長以上に迫力がある。

背が縮んでいるのもあってレンからは見上げるような格好になる。

「……タクマ」

随分久しぶりに会った気がするが、実際にはせいぜい一週間といったところだ。

できれば一生会いたくなかったと思いつつ、

「元氣そうで良かったよ。新しいメンバーは見つかったのか？」

「言って横を通り過ぎようとする。」

「待て」

大きな身体が一步踏み出すだけであっさり道を阻まれた。じろりと舐めるような視線がレンを、フリーを、そしてアイリスに向けられる。

大切な後輩がびくりと身を震わせフリーの背中に隠れるのを見てレンは苛立ちを覚えた。

二人を庇うように立ってまっすぐに見返す。

「なんだよ」

「お前とフリーが抜けたお陰で攻略が進まなくなった。飯もまずいし雑用が増えて困っている」

「だから？」

「どうか戻ってきてくれ、と頼み込んでくるなら少しくらいは考えなくもない。……そんな風に思いながら尋ねると、返ってきたのは、

「許してやるから戻って来い。もちろんそっちの娘も一緒にだ。……」

男三人に女三人でちようどいいだろ？」

「っ、あんたね……!？」

「止める、フリー」

言い返そうとした仲間を低い声で止める。

驚いたような視線が向けられるのを感じながらタクマを睨みつけた。

自分でも不思議に思うほど苛立っている。

「何回言えばわかるんだ。……俺は男だ、この脳筋が」

「お前……!？」

喧嘩をふっかけてきた側のくせに沸点が低い。

激昂した男はレンの肩を掴もうと手を伸ばしてきた。太い指に思いつきり掴まれたら痣が残りそうだが、

「いいのか？ 街中だぞ？」

「……っ」

舌打ちと共に手が引つ込む。

街には人がいる。そしてその人の多くは転移者。つまり無力な一

一般人ではなく戦う力を持っている。

女に乱暴しようとする男、という絵面である以上、周りがどちらに味方するかはわかりきっていた。

「女同士で仲良しごっこか。楽しそうでいいな」

苦し紛れに投げかけられたのは捨て台詞。

去っていく大きな背中にレンは負けじと言い返した。

「羨ましければサキユバスになってみるよ。お前みたいなのと付き合うよりずっと楽しいぞ」

奇襲

「……悪い。無駄にあいつを怒らせた」

家に帰るまで、三人はほとんど何も話さなかった。

街の人から「大丈夫だったか？」と穏やかに声をかけられたりもしたものの、それだけでレンの気は晴れない。

あの場を収められたのは結果論。

タクマが後先考えず暴れる可能性はあったし、そうなったらフリーたちまで危険にさらしていた。

それに、これからそうならない保証もない。

中に入ったところで二人に深く頭を下げると、

「もう。なに言ってるの」

フリーの腕が身体を包み込むようにして背中に回された。

「ありがと、レン。私たちの代わりに怒ってくれて」

「でも」

「いいじゃない。あんなやつ、一言言つてやらなきや気が済まない。

レンが言わなかったら私が文句言つてたよ」

実際、途中まで言いかけていたわけだが。

「ああいう時は男が頑張るものだよ」

「……本当、レンって都合の良い時に男の子ぶるよね。違うか。都合の悪い時?」

褒めてるのか貶しているのか。

どちらにしても、かすかに潤んだフリーの瞳が間近にあつて物凄く気恥ずかしい。

感傷的な気分になっているためレンまで泣き出してしまいそうだ。

「というか、いろいろ当たってる」

「今はそういうこと気にしなくていいの」

「そうですー!」

「うわっ……!?!」

離れてもらおうとしたらむしろアイリスまで身を寄せてきた。フリーとは逆に後ろから抱きしめられ、少女たちの体温が両側から身

体に染みこむ。

慰められている場面でさえついエロい方向に考えそうになるのは男としての悪い癖だが——今はそれだけではなく、どこか安心するよくな気持ちもあった。

「レンさんのせいじゃありません。……私も、言ってくれて嬉しかったです」

「アイリス」

「こういうのも良いな、と、思った。

普通の高校生のままだったらこんな場面、一生出会えなかつたかも知れない。

「ありがとう、すごく嬉しいよ」

レンは笑って、それから真顔になった。

「それはそれとして離れてくれ」

「そんなに恥ずかしがらなくても。別に興奮しても大したサイズにはならないでしょ」

「お前、間違つても他の奴にそんなこと言うなよ?」

アイリスがものすごく慌てた様子で身を離れた。

「……でき。レンならあいつタックマの気持ち、少しはわかる?」

おがくずの袋を邪魔にならないところへ置き、お茶を淹れてひと息。

全員それなりに落ち着いたところで話をすることにした。

「ちなみに私はぜんぜんわかんない」

「私もです」

「まあ、俺も自信持つて『わかる』とは言えないけど」

きっぱり言い切る女性陣に苦笑してから、

「あいつ元ハンドボール部だろ。でかくて運動やってる奴ってそれだけでわりと威張れるんだよね」

「魔法使いよりも戦士の方が偉い、みたいなことですか? それはおかしいんじゃない?」

「ああ。でも、喧嘩が強いほうがわかりやすいだろ。ぶん殴られたら魔法使いはどうしようもない。だからプライドがあるんだ」

成績が良い奴と運動ができる奴。顔やコミュニケーション能力に差がないとしたらモテるのは後者だ。

タクマも自分に自信を持っていた。

さつさとクラスメートから仲間を二人も見つけ、サキユバスになった可哀想な奴（レンのことだ）も仲間に入れてやった。

そうしたらフリーまでついてきたのだ。

勝ち組だと思っただろう。上手くレンたちをその気にさせれば相手にも困らない。タクマたちと組んだ後「レンを誘っておけば良かった」と言ってくる男子も複数いた。

なのに、レンもフリーもタクマたちに見向きもしなかった。

「モテるかモテないかってめっちゃくちゃ大事なんだよ。クラスの中には元からいた彼女とパーティ組んだ奴もいるし、組んでから付き合いだした奴もいる。このままだと勝ち組だったはずのタクマが負け組になる。今まで上手く行ってたから余計に許せない」

腹立ち任せにレンを追い出したところ、フリーまで出て行ってしまった。

かといって他の女子を仲間に入れるのも簡単じゃない。元クラスメートは既にパーティを組んでしまっているし、レンたちと喧嘩別れしたと知られば警戒される。

しようがないからレンたちを「許してやって」今度こそ良い目を見させてもらおうとしたのだろう。

「なにそれ、くだらない」

ため息をつきながらフリー。

そこまではつきり言われてしまうと男であるレンの立場もない。

「女子だって彼氏いるかいはいか重要だろ」

「私たちは自分よりスペック高い男子を脅して彼氏にするとかしないしできないよ」

「確かに」

少しくらい擁護してやるつもりが納得させられてしまった。

要は「力づく」というのが最高に格好悪いのだ。

「つていうか、お前の中だとタクマより俺の方がスペック上なのか？」

「うん。別にタクマってイケメンじゃないし」

「……いや、うん。そこは賛成だけど、もうちょっと手心加えてやれよ」

あまりにも正直過ぎてドン引きである。同性しかいない場での女子というのはこんな感じなのだろうか。

せめてタクマと「男同士として」比べられていたらもう少し素直に喜べるのだが。

「あの人が殴りこんでくる……とか、あるんでしようか？」

「あるかも」

答えたのはフリー。

質問したアイリスは青い瞳にじわりと涙を浮かべ、小さく震えた。

「私、人間と戦ったことはないんです」

「え、そこなの？」

「はい。だって、必要な分だけ獣を狩るのは全然違うでしょう？」

人間は何をしてくるかわかりませんし……」

暴力を振るうこと自体はアイリスにとって普通。

価値観の違いをあらためて感じつつも、レンは「そうだな」と頷いた。

彼らだって似たようなものだ。

一か月と少し、この異世界で暮らすうちに「生き物を殺すこと」には慣れた。殺さなければ殺されるからだ。ただ、それは「相手がモンスターだから」できたこと。

人間相手に同じことができる自信はない。

しかし、タクマたちはおそらく違う。あいつらはたぶん、日本にいた頃から喧嘩ができた。だから躊躇なくレンの肩を掴もうとした。

そういう奴は簡単にバランスを見誤る。

「二人とも気をつけてくれ。なるべく一人では行動しないように。それから危なくなったら逃げるなり大きな声を出すなりしてくれ。殺さないにしても痛めつけて追い払うくらいはしてもいい」

「うん」

「……わかりました」

神妙に頷く二人。

それからフリーリはレンを見つめて、

「レンもだよ？　っていうかたぶんレンが一番危ないんだから」

俺は男だ、と言いたいところだがそうもいかない。

タクマたちから狙われているのが事実である以上、男か女かはこの際関係ない。

「ああ。……これからはもうちよつと本腰入れてレベルアップしないと」

自分の身を守るためにも力が必要だ。

一緒に冒険を始めたのだから、タクマたちとの実力差はほぼない。だからこそ奴らに置いていかれるわけにはいかない。

翼と尻尾のことは気になるものの、ひとまずそれは無視して。

「付き合ってくれるか？」

「もちろん。……じゃ、次からはちよつとハードに行こつか。私も余らせてたポイント、戦闘系のスキルに振ろうつと」

「私も、お二人の足手まといにならないように精一杯頑張ります！」

レンたちは心機一転頑張ることにした。



「マジックアロー！」

輝く魔法の矢が多数、空中へと生み出される。

数は、三十。

この魔法はステータスに応じて基本の本数が増える。さらに、籠めたMPの量によって数を十倍まで増やすことができる。

一本一本の威力はmanaボルトに劣るものの、代わりに広い範囲をカバーすることができる。

矢は二階のボス部屋へと降り注ぎ、散開しようとしていたゴブリンたちを繋ぎとめた。

二階のボスはゴブリンシーフ。

武器はナイフと小ぶりなものの、ソルジャーに比べて動きが速い。ちよこまか動き回られると厄介だが、止まっている間はただの的だ。

壁として立ちはだかるソルジャー×3の合間を縫うようにして飛んだ矢がシーフの左目に突き刺さり、さらに精霊魔法「ファイアボルト」が着弾。ダメージの蓄積によってシーフは動きを大きく鈍らせる。

衝撃から立ち直ったソルジャーが剣を構えて動き出すも、レンは抜け目なく再度「マジックアロー」を発動させた。

恐るべきは数の暴力。

再び前進を阻まれるゴブリンたち。满身創痕となったシーフが号令めいた鳴き声を上げるも、アイリスがジャンプしながら射た二の矢によってそのHPはあえなく尽きた。

護衛対象を先に倒されたソルジャーが動揺する中、フリーが素早く忍び寄って、

「ゴブリンの急所は人間と同じ——首か心臓、つと」

頸動脈への攻撃に新スキル「急所攻撃」が発動。刃のキレが増し、派手に血が噴き出した。動きを止めずその場を離れたフリーは返り血を上手く回避しながら別のゴブリンへと近づき、

「少しくらいは私も活躍しないとね……!」

二階のボス戦もレンたちの快勝に終わった。

「……わ、欠片が四個も！もしかしてこれ二倍になってる感じ?」

全ての敵が光の粒となって消えた後、フリーが恒例のドロップ品回収を行う。その間にアイリスはまだ使えそうな矢を拾い、血のりを拭って矢筒に戻す。レンは早くなった呼吸を整え、失ったMPを少しでも補えるように休憩に努める。

マジックアローは小技から大技まで幅広く使える代わりにMP消費が大きめになっている。

ここまでの道のりで消耗した分も加えて二回も最大化したせいでもかなり負担が大きかった。

「レン、お疲れ様ー。碑文の写しとかはやつとくから少し座つてい

「いよー?」

「悪い、じゃあそうさせてもらおう」

壁際に座ってひと息。

頑張ると宣言した通り、今回は少しハードだった。何しろ二階を最初から最後まで一気に攻略したのだ。

一度攻略すると復活しないモンスターや罠が残っているので何度も緊張を強いられた。ただ、その甲斐はあったと言っていていいだろう。

ステータスウィンドウを表示し、さらに一つ上がったレベルを見て頷く。

「次は何を取るかな」

前は利便性の向上を目指したが、身を守る術を欲している今は戦う力が欲しいところだ。

マジックアローのMP消費を減らすか、manaボルトの威力を上げるか、魔法攻撃力自体を底上げするスキルで汎用的な攻撃能力を上げるか。

炎や氷、風などの属性攻撃魔法は火傷やしもやけ、裂傷など発生するため、対人戦においてはカタログスペック以上に有効に働く。いざという時のために覚えておくのもアリかもしれない。

スキルポイントがそこそこ貴重なためとても悩ましい。

「……うーん」

「スキル考えてるんだ? 男相手ならレンにはいいのがあるのに」

「フリー。作業は終わったのか?」

「うん。ドロップは回収したし、訳文は先に写してもらったから」

アイリスが異世界文字の方を写し終えたら今日は終わりだ。

「で、いいスキルって?」

「男子に無理やり言うこと聞かせられるスキル」

「ああ、うん。言いたいことはわかった」

ローブに隠された自分の身体にちらりと目を見てから首を振る。

魅了スキル。

効果があるのは「男のレン<女のフリー」と判定されていることから明らかだが、

「これ脱がなきゃいけないだろ」

「どうせもうちよつとレベルアップしたら邪魔でしょそれ」

「これにも穴開けて着れば」

「羽には魅了効果ないんだっけ？」

ありそうな気もする。

「……いやいや。ないない」

しばらく考えてからやつぱり駄目だと首を振って、

「終わりました！」

「お疲れ様、アイリスちゃん。じゃ、帰ろっか」

「そうだな」

頷きあったところで、迷宮内に異音が鳴り響いた。

からんからん、という鐘のような音。

今のところ特にそれ以上の異変はない。音からしても敵襲の類とは感じられないが――。

「ねえ、レン、これもしかして」

「ああ。たぶん、援軍が来る時に鳴るやつだ」

全滅したパーティの元へ行くことはできない。

ただ、一人でも生存者がいる間なら救援に赴くことはできる。現在の攻略パーティ数が表示されているあの刻印に触れ「何番目に入ったパーティと合流するか」を思い浮かべればいい。

方法自体は攻略本にも書かれている。

問題は、頼んでもいない援軍が何故来るのか、だ。

「……誰かが待ち合わせに失敗した可能性、あると思う？」

「ないはないけど、低いと思う。たぶん、俺たちだとわかって入ってきてる」

現在攻略中のパーティがどんな構成か知る方法は通常ない。ただ、見張りをつけてレンたちが入ったのを確認していれば、何番目がターゲットかは知ることができる。

友好的な相手ならこっそり見張りなんてせずに声をかけてくるなり、もつと早く応援に来てくれるはず。

ならば相手の目的は逆。

ダンジョン内なら何があっても事故だと思っっているに違いない。

「そこまでするか……!?!」

「ねえレン、これどうするの!?! 早くここから出ないと!」

「待て。下手に動くともむしろ鉢合わせる」

考える。

応援に来る場合、移動可能な階層はメインパーティの攻略範囲に限られる。そして相手はレンたちが二層を攻略した後にやってきた。

この場合、向こうが移動できるのは一階から三階まで。

神殿からダンジョンに入る際、既に攻略済みの階層はショートカットが可能。

レンたちに追いつきたい場合、三階に出てから二階まで上る方が速い。

「走るぞ。そっちの階段じゃなくて二階の入り口から出る!」

対策

上り階段を使う判断は賭けだった。失敗すれば狭い通路で争うことになりかねない。いつそ広いボス部屋で迎え撃つ手もあっただろう。

しかし、結果的に賭けは成功。

追いつかれる前にダンジョンを出て神殿の階段を下りることができた。

「……神殿で待ち構えられた方が危なかったかもな」

早足で離れつつ階段の方を振り返って呟く。

「さすがにあいつらも神殿では戦わないでしょ。……っていうのもだんだん言いづらくなってきたけど」

「本当にあの人たちだったんでしようか。他の人だったのかも」

「ああ。一応、確かめておくか」

帰りに街の人へ聞き込みをしたところ、タクマともう一人が神殿に行くのを目撃されていた。一人足りないのは別行動で見張りをしていたからだろう。

言質が取れたことで優しいアイリスの表情も曇った。

「何かあったのか？」

「助けを求めたわけでもないのに応援が来たんです。万が一を考えて会わずに逃げたんですが……」

「それは困るな」

街の人はレンたちの味方をしてくれる。

卑怯な手を使ってまで「仲間割れ」する輩は他の人間にとっても害でしかない。攻略の人手が無為に減ることになる上、初心者狩りのような行為さえ誘発しかねないからだ。

「こつちから上の人達に話を通しておく。しばらくの間、交代で見張りを立たせるくらいはできると思う」

「ありがとうございます」

人目があれば変なことをしづらくなる。タクマたちだって今年の転移者。一年以上の経験を持つ他の転移者には敵わない。

「仲間、増やした方がいいかもな」

家まで無事に帰り着いた後はそういう話になった。

「そうだね。こっちの方が人数多ければ手も出しづらだろうし」
「買い出しに行くときもその方が安心ですね」

二人からも反対意見は出なかった。

となるとどうやってメンバーを見つめるかだが、

「アイリスちゃんの妹にお願いできないかな？」

「妹たちまで冒険に出してしまうと狩りが滞ってしまいます……」

おそらく保護者からの許可も出ないだろうからこれは却下。

となるとクラスメートにあたるか、先輩たちをお願いするか。

フリーたちの安全を考えると追加メンバーも女子がいい。そのうえでレンに忌避感がなく、アイリスにも嫉妬しない人物となると、なかなかハードルが高い。

タクマたちが仲間を増やせていないのだからレンたちだって難しいはずで、

「明日にでもいろいろ話をしてみるか」

チャレンジするだけしてみよう、という結論にしかなかった。

最初に話を持って行ったのはクラスメートの女子。

女子だけで組んでいるパーティが一つあり、その家はフリーが知っていた。

彼女たちを尋ねて事情を話すと、

「うわ、あいつそんなことしてるんだ……」

「前に誘われたけど断ってよかった」

と、概ね同情的ではあったものの、

「ちよつと人数がなあ。三人合流すると多すぎるし、誰か一人だけうちから抜けるのも困るんだよね」

とても納得できる理由で断られた。

男子と組んだ女子に話を持っていくのは勇気がいるし、これでありクラスメートは打ち止め。

いくつかの先輩パーティにも話を振ってみたものの同じような回

答をされた。

たまに良い返事をもらえたかと思えば、

「仲間になったらこっちの指示に従ってもらうけど、それでも良ければ」

それは困る、と丁重にお断りした。

向こうの方が先輩なのだから当然ではある。ただ、それだと「アイリスを守る」と約束したのが嘘になりかねない。

連日ハードなダンジョン攻略を指示されて命の危険が及ぶ可能性だつてある。

相手を信用しないわけではないけれど、面と向かってそう言うてくる以上、慎重になるべきところなのは間違いない。

何年もここにいる人たちの中には結婚をして家庭を持っていたり、戦闘向きではないクラスで店や職人をしている人も多い。

そういう人たちは本業があるし、彼らの時間を奪ってしまうと逆に街の機能がマヒしかねないので無理に誘うこともできない。

「……やっぱりなかなか難しいな」

「わかつてはいたけど、めぐり合わせって大事だよな」

あちこち回っている間に日が暮れかけてしまった。

「疲れたー。ねえ、レン。もう今日は外食にしない」

「そうするか。たまには贅沢しないとな」

「やった！ アイリスちゃん、好きな物頼んでいいからね」

「本当ですか……!?!」

飲食店は街に何軒かある。その中で三十代の女性が営むレストランを選び、夕食を済ませることにした。

二階をクリアして収入もあつたのでたまの贅沢である。

街の洋食屋さんを模した店内は清潔かつ落ち着いていて居心地がいい。利用者も元日本人およびその子供なので最低限のマナーはできている。

「わ、ハンバーグにビーフシチュー、グラタンもある！ どれにしようか迷っちゃうなあ」

「季節の天ぷら……美味しそうです」

フリーはなかなか食べられない凝った料理に目を輝かせ、家で狩りをしていただけあって肉料理はわりと食べ慣れているアイリスは野菜が美味しく食べられる料理に目を付けている。

レンとしてはやはりがつり系のメニューに視線が行く。

カツ丼か、カツカレーか。ハンバーガーとポテト、ドリンクのセットなどという心躍る文字も見える。洋食屋と言いつつなんでもアリな感じなのも日本風だ。

「新人さん？ 女の子ばかりで大変ね」

サービスの水を運んできてくれた店主が柔らかく微笑んでくれる。ちなみにサービスというのは雰囲気だけで、その分、料理の値段が高めに設定されている。ここでは水も有限なのだ。

「俺、水を作るバイトとかしたら役に立つかな」

「ん？ 俺って？」

「ああ、この子は男の子なんです。『祝福』でサキュバス引いちゃって」

「ああ、あなたがあの。本当に女の子にしか見えないんだ」

驚いたように言った店主は少しだけ話に付き合ってくれた。

「男の子の目が気になるんじゃない？」

「本当に困ってます。そのせいでパーティ抜けることになって……」

「今日も仲間を探しに歩いてたんですよ」

「なるほどね……」

同情するように頷いた彼女は「うーん」としばらく考えた後で、

「仲間のいない女の子なら何人か知ってるから紹介しましょうか？」

仲間になってくれるかは交渉次第だけど」

「本当ですか!？」

「困った時はお互い様でしょう？ その代わりに、また食べに来てくれる？」

「もちろんです」

料理ももちろん美味しかった。

フリーはハンバーグセット、アイリスは野菜天ぷら定食、レンはカツ丼をオーダー。久しぶりの味に涙さえ出そうになった。むしろ頼まれなくても通うレベルである。

つつい調子に乗ってデザートまで注文してしまったので、もしかすると店主はなかなかのやり手と言えるかもしれない。



「……ですか？」

「……っばいな」

ローブの裾を掴むアイリスに眩くようにして答える。

洋食屋の店主から紹介してもらえたのは全部で三人。二人に話を
して断られ、最後に訪れたのはひっそりとしたとある路地だった。

近くには生活必需品を扱う店はなく、雑貨や薬草など利用者の限ら
れそうな店といくつかの家が並んでいる。これが日本なら歩くのを
少し躊躇ってしまいそうな場所だ。

変な輩が少ない分、この世界ならむしろ安全なはずではあるけれ
ど。

「タクマたちが行つてた風俗つてこんなところにあるんだね」

路地の向こうにあるらしいのはフリーが言った通りの店だ。

まさか、このメンバーでこんなところへ来ることになるとは。

前のパーティにいた頃「自分も連れていってくれ」と言ったら「働
きに行くのか？」と馬鹿にされたのを思い出したレンは思わず顔をし
かめた。

「まあ、行ってみよう。紹介状があるし、怒られはしないだろうし」

レンとフリーでアイリスを挟むようにしながら路地へ。

道にゴミなどは落ちておらずいたって清潔。少し進むと開けた場
所に出た。

あつたのは洋館風の建物だ。

窓の向こうには明かり。行くなら午後の方がいい、ということだつ
たので来たのはおやつ時。

「こんにちは」

ノッカーで玄関を叩くと、しばらく待ってから女性が顔を出した。

「誰？ 店が始まるのはまだ先だけど。……それとも、もしかして働

きたい子?」

「すみません、人に会いに来たんです。これが紹介状で……」
「ふうん?」

歳は二十代中盤だろうか。髪が長く、なかなか整った顔立ち。短く切り揃えた爪には青いマニキュア。薄く化粧をしており、下着と寝間着の中間のような服を身に着けている。

彼女は紹介状を一瞥した後でレンたちを見て、

「ああ、新しくこっちに来た子たちか。……じゃあ、もしかしてあなたがサキユバスになっちゃった子? タクマくんたちの仲間だった?」
「あいつのこと知ってるんですか?」

「もちろん。あの子たちには儲けさせてもらってるから」

これにフリーがジト目になって、

「……高いお金払って、こんな美人に相手してもらってたんだ」

「あなたたちだって可愛いじゃない。うちで働いてくれたら絶対人気出るんだけどなあ」

「あはは。すみません、私そういうのはちよつと」

愛想笑いをしながら受け流すフリー。アイリスは身を屈めながらレンの後ろに隠れた。そのレンの頬には女性の手が伸ばされて――。

「綺麗な顔。これで男の子とか反則じゃない?」

日常的に行っていると思われるごく自然な動作で顔と身体が近づけられた。

ほのかな石鹸の匂い。

下手に唇か胸に触れてしまいそうな距離。ちなみに彼女の胸は三人とは比べ物にならないくらい豊かだ。

「……ね? ただでいいから私としない?」

甘い吐息が首と頬を撫でる。

魅力的すぎる誘惑に思わず首を縦に振りそうになると、

「レンのって可愛い感じだからたぶん満足できないと思いますよ」

「レンさん。ここにはそういう目的で来たんじゃないですよ……?」

寄ってきたフリーに脇を小突かれ、アイリスに後ろからローブを

引っ張られた。

「残念ですけど、お断りさせていただきます」

「そっか。……うん、本当に残念。気が変わったらいつでも言っただけでいいよ。……うん、本当に残念。気が変わったらいつでも言っただけでいいよ。」
微笑んで身を離すと、彼女は「姉さんなら仕事中心だと思っただけでいいよ。」
内してあげる」と言った。

「姉さん？」

「私が紹介相手だと思った？ 残念。あなたたちのお目当ては娼婦じゃなくて、娼館ちやんの経営者っていうか保護者みたいな人だよ」

豪華なホテル風の建物内を奥——店舗ではなく裏へと向かって進み、一枚のドアの前へ。

「姉さん、人が会いに来ただけです。レストランのマスターからの紹介です」

「どうぞ、入ってもらって」

穏やかな声。

「失礼します」

中は清潔感のある落ち着いた造りになっていた。壁には本や書類の棚が並び、奥まった場所には作業用の机。手前にはソファと背の低いテーブル。校長室とか社長室を思わせる雰囲気だ。

娼館のオーナーと言うから部屋にベッドでも置いてあるかと思えばいたって健全。

奥の机に座っていた女性はレンたちを見ると「ようこそ」と立ち上がり、柔らかに微笑んだ。

「この館の経営をお手伝いしているマリABELです。どうぞよろしく」

本名は鈴谷万梨阿というらしい。

「源氏名というわけではありませんが、長い名前の方がそれっぽいですよ？」

「確かにそうかも。レンももつと長い名前にしてみる？ レンレンとか」

「なんかパンダっぽいぞその名前」

ソファに向かい合って座り、まずは雑談——と思っただけですがに脇

道に逸れすぎた。

くすりと笑ったマリABELに「すみません」と謝ると、「いいえ。なんだかそういう会話を聞くとほっとします。ここにいるとどうしても日本のことは忘れがちになってしまいますから」

「マリABELさんは、やっぱり日本に戻りたいですか?」

「ええ、できるのであれば。と言っても、私自身は直接それに向けて進んでいるとは言えませんが」

「姉さんは頑張ってるじゃない。ここの経営だって立派なサポートだよ」

「サポート?」

アイリスがポニーテールを揺らして首を傾げる。

マリABELは「若い方、それも女性には難しいですよ」と頷いて、「ダンジョンの攻略は生と死が隣り合わせ。モンスターとの殺し合いや罠への警戒は神経をすり減らし、人間的な感情を削り取っていきま。特に男性は矢面に立たされやすいですから、彼らが心安らぐ場も必要だと私は考えています」

「そっか、だから娼館なんだ」

「私みたいに戦いにも生産にも向いてないクラスの子もいるからね。そういう子でもここなら働けるし、男の子にいっぱい求められるってけっこう気分がいいんだよ」

『娼婦』などといった直球のクラスもある、と聞かされて、レンは失礼ながら少しほっとした。

「変な『祝福』に当たったのは俺だけじゃないんですね」

『祝福』の内容は多岐に渡ります。当人の適性に応じて定められる場合が多いようですが、中には意図の掴めないものも含まれるようです」

「レンちゃん——レンくん? のサキユバスなんて、それこそここで働くためのクラスな気がするけど」

「当人が望んでいないものを無理強いするのは良くありません。……

さて、ご用件はパーティ加入のご依頼、ということでしたね」

「はい」

レンはマリアベルに自分たちの事情を語って聞かせた。

もちろん、タクマたちの所業についても。

「あー、タクマくんたち、そんなことしてるんだ。ごめんね、迷惑かけて」

「いえ、元はと言えば俺たちにも責任があるので……」

「あの、それでどうですか？ 無理になってわけじゃないんですけど……」

経営者という立場にある人だ。

レンは「おそらく断られるだろう」と思ったし、フリーの口ぶりからもそれが伝わってくる。

アイリスは不安そうに一人一人の顔を見つめ、マリアベルはそんな三人を落ち着かせるように微笑んだ。

「いくつか条件があります。もし、それを呑んでいただけるのであれば喜んで」

自爆

「これで部屋が全部埋まったね」

「すみません、マリアベルさん。ちょっと狭いですよね」

「いいえ。ベッドと机があれば十分です。お気になさらず」

話はとんとん拍子に進み、夕方にさしかかる頃にはマリアベルの引越しが完了していた。

ベッドも机もクローゼットももともと据え付けられているため、運ぶのはいくらかの私物だけでいい。それらもストレージを使えば手間いらずだ。

リビングのテーブルも賑やかになった。

「若い方と一緒にだと自分まで若返ったような気分になれそうです」

「不便なことがあったら何でも言ってください。無理を言ってお願ひしてしまったので……」

マリアベルが提示した条件はレンたちにとっても悪い話ではなかった。

条件1：週に何度かは娼館へ仕事に行く

条件2：ダンジョン攻略には余裕のある時だけ参加する

条件3：夜型の生活が多いので基本的に昼まで寝ている

パーティーメンバーを追加する目的として一番なのは家での安全確保。タクマたちでもそれ以外でも、踏み込まれた時に対抗できる戦力を用意しておくことだ。

マリアベルは古参組にあたるのでレベルが高い。

家で寝ていてくれるだけでも防犯効果が期待できる。

「いいえ。困った時はお互い様です。それに、娼館の経営に携わっているとよく誤解されるのですが、私は男性よりも女性の味方のつもりです」

「はい。本当にありがとうございます」

「あれ？ レン、今回は『俺は男だ』って言わないんだ」

「マリアベルさんを不安にさせるようなこと言っていてどうするんだよ」

「マリア、で構いませんよ。長い名前ですと言いつらいでしょう」

「じゃあ、マリアさんで」

マリアベル——マリアは「知り合いが増えるのはいいものです」と微笑んで、

「タクマさんたち一行には娼館側でも対応を試みます。事と次第によつては出入り禁止の措置を取ることも検討しましょう」

「あ、それいい。あいつらきつと困るだろうなあ」

行きつけの店に行けなくなる。それがお気に入りであればなお辛いだろう。

「でも、報復とかありませんか？ 迷惑がかかるんじゃない」

「ご心配なく。実力ではこちらが上ですから、しっかりとお仕置きして差し上げます」

「すごい。マリアさん超頼もしい……！」

もちろん見た目はごく普通の女性だ。容姿としてはむしろ美人。

緩いウェーブのかかったセミロングの髪。胸もCカップくらいはありそうだし、物腰からも清潔感と大人の魅力が漂っている。

つつい胸元に視線をやってしまうと、マリアはレンの目を見返し、ながら軽く腕を組んだ。

「私は娼婦ではありませんので、この家に男を連れ込むことにはないとお約束します。……と、言いますか、私は同性愛者寄りの両性愛者です」

いきなりの爆弾発言である。

「あれ、じゃあ私たちもターゲットに入るんですか？」

「え、あの……っ!？」

「安心してください、アイリスさん。もちろん、仲間へ無差別の好意を向けたりはいたしません。異性愛者だつてそうでしょう?」

「男子はわりと女の子なら誰でも良さそうな気がするけど」

「そうなんですか、レンさん?」

「頼むから俺に振らないでくれ」

フリーはともかく、アイリスの純粋な視線を向けられると辛い。

「……そんなの人によるだろ。俺だつてフリーたちをそういう目で見ないくらいの分別はある」

「ふーん、本当に？」

面白がったフリーが顔を近づけてきたので額を突いて押し返した。

一瞬、キスした時のことを思い出したのは秘密である。というか、女子の方からアプローチしてきた場合はノーカンだろう。

マリアはそんなレンを見てふつと笑い、

「正直、レンさんは私の好みですから、もしお相手に困っていらっしやるのでしたらいつでも言ってくださいね」

「……へ？」

「あの、もしかしてレンさんって、魔性の女っていうやつなんですか……？」

アイリスが半眼になって眩き、フリーが困った顔で笑った。

「うーん。まだ女の子じゃないけど、魔性は魔性かも」



パーティの棲み処には酒の匂いが漂っていた。

酒は特定クラスのスキルによって生成が可能。材料は必要だが手間を大幅に省くことができるため、物によっては安価で手に入る。

異世界に来て以来、すっかり酒の味を覚えてしまった。

日本にいた頃は正月などに少し味見させてもらった程度。大して美味しいとも思わなかった。なのに、今はもうこれが手放せない。

酒臭い息を吐き、手に三分の一ほど残っていたきゆうりの漬物をかじる。追いかけるようにあおるのは赤ワインだ。合うかと言われると微妙ではあるものの、安く手に入るので定番の組み合わせになっている。

つまみがなくなったのでストレージを開いて中を漁り、

「くそ、つまみが切れた。おい、誰か買って来いよ」

タクマは仲間たちへと雑に声をかけた。

無駄に物で散らかったリビングに下着同然の男が二人。やっていけることもタクマと大差ない。彼らは「えー」と面倒くさそうな声を上げた。

「最近、買いに行くとか『程々にしろ』とか嫌味言われるんだよな。たまにはタクマが行けよ」

「あ？　なんでリーダーの俺が買い出しに行かないやいけないんだ」
「ははは！　そんな事言ってこき使ってたからレンとフリーに逃げられたんだろ！」

「おい、今なんて言った？　もういっぺん言ってみろ」
立ち上がって斧を手にする。元陸上部とサッカー部。どちらも大して期待されていなかった「エンジョイ勢」の彼らは「ひっ」と悲鳴を上げると愛想笑いを浮かべた。

許しを請う代わりとして「とっておき」だというチーズを寄越してきたので良しとする。金が減るからと高いつまみを買わなくなっただけ。やっぱり美味しい、何よりワインに合った。

ちなみに節約している理由は他に使いたいところがあるからだ。

「なあタクマ。またあそこ行こうぜ」

「あ、いいなそれ！　いいだろタクマ」

「またかよ。……まあ、金ならまだもう少しあるしな」

ちやうど憂さ晴らしもしたかったところだ。

パーティからレン、フリーが抜けてしばらく。

メンバーなんてすぐ補充できるだろうと思っていたのになかなかいい女が引つかからない。仕方ないからレンたちを連れ戻そうとしたところ、向こうはハーフェルフの美少女を連れていたうえ、生意気にもタクマの誘いを断ってきた。

この前はダンジョンにまで押しかけたというのに顔も見ずに逃げられた。

別に闇討ちするつもりはなかった。ただ力の差をわからせた上で「説得」しようと思っただけだ。

なのに、奴らは街の連中に告げ口までしたらしく、神殿での見張りや待ち伏せができなくなってしまった。常時監視役が立つようになったうえに顔を見ると声までかけてくるからだ。

思い出したらまた腹が立ってきた。

「じゃあ風呂沸かすぞ」

「えー。水汲みすんのも沸かしたお湯を運ぶのもめちゃくちや面倒なんだぜ」

「仕方ねえだろ。汗臭いまま行くと怒られるんだから」

娼館の女たちは美人揃いな上にテクも凄いが、その分だけプライドも高い。

「……あーあ。レンがいればな」

「あいつらが素直になれば金払って風俗行く必要もないもんな」

「なんか方法考えるしかねえだろ。あいつらだっていつまでも逃げ回れるわけがねえ」

ぶつぶつ言いながら水を汲み、湯を沸かしては浴槽に放り込んだ。最初の方に入れた分が冷めるので量が溜まる頃にはそこそこの湯加減になる。

こうしていると好きだけシャワーを浴びられた日本がどれだけ便利だったかわかる。

とは言っても今更帰る気にはなれない。

この世界では力が正義だ。戦わない奴は見下される。女子の中には「生き物を殺すとか無理」だとか言ってるレベル上げをサボっている奴らもいるらしいが、そいつらが間違いに気づくのは強い奴に力づくで蹂躪された後だろう。

「女なんてどうせ男より弱いんだから大人しく従ってりやいいんだよ」

娼館では幸運なことにお気に入りのお姫を指名することができた。

男三人に女一人。

一人ずつ女をかうと高いというのもあるが、仲間と女を囲むと征服感が凄い。エロいことをする場所なので胸を揉んでも足を触っても怒られない。

ここではすぐにやるのではなく、まずは酒を飲みながら話をすることが多い。つまみも酒も普段買っているものとはレベルが違うので気分も良くなり、自然と後の行為にのめりこむことができる。

「だいたいサキュバスなんて男とやるための種族なんだろう？ だってら『俺は男だ』とか言っていないでさっさと覚悟決めればいいんだ。そ

うだろ?」

下着のような格好をした美女がタクマたちの愚痴を肯定するように微笑む。

化粧を施された顔は妖艶で、身に纏った香水は雰囲気を高めてくれる。

艶めく唇が酒杯に軽く触れて、

「でも、その子って実際男の子なんでしょ? タクマくんたち、男相手に興奮しちゃうの?」

「あれだけ可愛かったら余裕つすよ」

「そうそう。あれはもう女。男だって別に口とかは普通に使えるんだし」

「男の癖にいい匂いするんだぜ。……着替えてる最中とかめっちゃくちゃエロいからな。そのままやってやろうと何回思ったかわからなえ」

フリーも別に悪くはないが特別感はない。サキユバスになる前からレンに構ってたあたり男の趣味も悪いし、タクマたちだってその気になれば抱けるレベルだ。

それよりはレンを屈服させて従順になるまで仕込む方が良い。

「やってりやそのうち女になるんじゃない?」

「サキユバスにとっては一番の経験値だもんな!」

「ふーん。じゃあ、早く口説かないとね。ぐずぐずしていると他の男に取られちゃうかもよ?」

「ああ。もちろんわかってる」

タクマはにやりと笑った。

やっぱりこの女たちはよくわかってる。日本にいた時みたいな綺麗ごとは異世界では通用しないのだと。

機嫌が良くなったタクマたちは酒の勢いも手伝って自分たちの「作戦」をひととおり話した。

次はいつそのこと家に押し入ってやろうと思ってる。もちろん鍵はかかっているが玄関ドアは木製だ。うっかり力を入れすぎて壊してしまっても仕方ない。

すると、

「……そっかー。じゃあダンジョンの中で襲おうとしたのも本当なんだ」

さつきまでとはまるで別物の冷えた声でした。

「あ？　なんだよ、別に大したことじゃないだろ。向こうが大人しくすれば乱暴なんてしなかったって」

笑って胸に手を伸ばすと、ぱん、と強く払われた。

何が起こったのかわからない。三人が三人ともぽかん、としながら、今まで味方だったはずの女を見つめた。

彼女はその間にさつきと立ち上がると埃でも落とすかのように身体を払い始める。

頭に血が上る。

「おい！　俺達は客だぞ!」

「だから何？　金さえ払えば何をしてもいいと思ってるの?」

「な……っ!」

楽しく飲んでいたはずなのに、そこまで怒らせるようなことを言うただろうか。

なんと反論すべきか躊躇ったところで耳に足音が聞こえた。

気づけば、店のオーナーであるマリアベルが入室してきていた。歳は離れているが十分に美人で胸も大きい。ただ、今日は彼女も一緒に相手をしてくれる——なんていう雰囲気ではなかった。

「姉さん、聞いてたでしょ?　こいつら完全に黒」

「ええ。……申し訳ありません、皆様。今回のお代は返却させていただきます。どうかお帰りいただき、今後一切、当館へ立ち入らないようお願い致します」

「……な。なんだよ、それ」

「出入り禁止ってこと。当然でしょ?　マナー悪い上に態度もでかくて、娼婦の間でも評判良くなかったんだよ」

初耳だった。

金を払って抱きに来ているというのに、陰でこそこそ自分たちを嘲笑っていたのか。

これには仲間もさすがに身を震わせている。

「……ストレージ」

低い声で告げ、愛用の武器を手にする。

はっとした二人もまた同じように武器を取り出した。

「やるのか、タクマ?」

「ああ。馬鹿にされたままで黙ってられるか。……後悔させてやる」

「はっ! それも面白そうだな!」

戦意を高めるタクマたちを前に、女二人は黙って立ち尽くしたままだった。

怯えているのかもしれない。

こちらよりずっと年上と言っても所詮女だ。ダンジョン攻略を避けてこんなところで金を稼いでいる奴らに喧嘩ができるわけがない。

「殺すなよ。ちゃんと謝らせて相手させるんだから……!」

刃のない部分で殴るか家具を壊すか。

威嚇を兼ねた大声と共に大きく斧を振り上げて——目にも留まらぬ速さで懐に飛び込まれた。

肩に指が触れて、

「……がっ!」

「タクマ!」

腹部に衝撃。膝が折れ、絨毯の上にあっけなく崩れ落ちる。見上げれば、マリアベルがかすかに服や髪を揺らしながらタクマを見ていた。

膝蹴り。

肩を掴むことで身体が吹き飛ばないようにする配慮付き。女とは思えない、真似をしろと言われてもできない見事な一撃だった。

「私のクラスは『蹴術師』。多彩な特徴を持つダンジョンのモンスターには不向きですが、戦えないわけではありません」

「嘘、だろ」

戦うどころか、すぐに立ち上がることさえできそうにない。

仲間たちも既に娼婦によって制圧されて武器を手放してしまっている。落とした武器は拾わない限りストレージにしまえないし装備

することもできない。

「残念。サキユバスだけじゃなくて私たちも、お仕事するだけで経験値入るんだよね」

タクマたちは自由なはずの異世界で生まれて初めて「逮捕」を経験した。

決着

「揉め事は勘弁して欲しいものだ。他者を裁くなど気分の良いものではない」

苦々しい色をした賢者の声が神殿内に響く。

夜闇を払うように輝くのは複数名による魔法の明かり。

街の中心に位置しており広さもあるこの場所には今、百名以上の人間が集まっている。

ダンジョン攻略のためではなく、タクマたち『罪人』の処遇について話し合うためだ。

参加者には今年の転移者——すなわちクラスメートが多く含まれている。なまじ顔見知りであるだけに彼らの視線は冷ややかだ。

「何余計な事してくれてるんだよ」

「本当最低。女の子をなんだと思ってるの？」

タクマたち三人は文字通り手も足も出せない状態で中央付近に座らされている。

口は塞がれていないものの、彼らが口にするのは言い訳や恨み言ばかりだった。

「お前らのせいだ。素直に言う事聞いてりゃこんな事にはならなかった」

最も矛先を向けられることになったのは当事者の一方であるレンとフリーだ。

マリアベルが仲間になってからまだ一日。だというのに、出勤した彼女が早く帰ってきたと思ったら「彼らが捕まりました」。

さすがに驚いたものの、それは「早すぎる」という驚きであって、タクマたちがやらかした事については「まあ、それくらいはやるかもな」という感想だった。もちろん彼らも無関係ではないということ、アリスやマリアベルと一緒にこの場にやってきた。

傍には護衛というかタクマたちへの牽制として数名が立っており、危険はないと考えていいものの悪意を向けられるのはいい気分ではない。

「サキユバスの癖に」

「男と一緒に暮らすならそれくらい覚悟しておけよ」

口々に投げかけられる身勝手な台詞に、隣にいるフリーリの表情がどんどん曇っていく。

彼女が何かを言う前にと、レンはタクマたちへ答えた。

「そうだな。お前らと組んだのは確かに間違ってた。同じ男ならこんな風になった俺の気持ちをわかってくれる、なんて考えたのが馬鹿だったんだ」

「ほら、やっぱりな。……おい、こいつも認めたま。自分が間違ってた、ってな！」

得意げな大声が響き、

「少し黙ってもらおうか。……サイレンス」

「ぐ……っ!? つ! くっ! つ、っ!」

本来は魔法封じか何かに用いるのだろう。賢者の魔法がうるさい輩を文字通り黙らせた。

身嗜みもそこそこにやってきたという風体の痩せた男は軽く眼鏡を持ち上げながらため息をついた。

「急な生活の変化で心を病む者、力を得た事で増長する者は時折現れる。厳しく取り締まる事は人的リソースの問題で難しいし、先達が介入しすぎてしまう事には懸念もある。最低限の指導を行った上で個々人の意思を尊重してきたが……ままならないものだな」

年長者の介入については「ネイティブ世代が得る世界の欠片」の件も影響しているだろう。

パワーレベリングの弊害が明確に出た一例。あそこまで極端ではないにせよ、強者に牽引されてレベルだけ上がった者が独り立ちしてやっていけるかは難しいところだ。

「さて。君達の態度は目に余る。仲間に対する横暴な振る舞い。喧嘩別れした相手になおも付きまとう態度。年長者から窘められても顧みることなく、特定の性別や職業を下に見る。痛い目に遭ってなお反省していない。生半可な罰を与えたところで意味があるとは思えん。街の平和を維持する上では害でしかない」

賢者はそこで「だが」と続けた。

ここからの言葉はその場にいる全員に向けられたものだ。

「……諸君も知つての通り、ここは転移者とその子供たちが作った街だ。ここに来た時、我々のほとんどは子供だった。大人は同伴してきた教師程度のもので、多くの者は日本における法の知識もそれを行使する責任についても十分には把握していない」

タクマたちが未熟だったのが事実なら、裁く側が成熟しきっていないのも事実。

「よつて、この街に極刑は存在しない。それほどの罰を他者に与えるという判断はあまりにも重すぎるからだ」

これには「手ぬるい」という声も上がった。

タクマたちによる直接の被害者はレンたちであり、他は絡まれた娼館の女性たちくらいのものだが、他の者たちにとつても他人事ではない。彼らを野放しにされたら同じようなことが起こるかもしれない。むしろ、今は当事者でないからこそ強いことを言う。

これに賢者は重い頷きを返した。

「君達の意見ももつともだ。懲役のようなものを科すにせよ、監視する人手が必要になる。それもなかなか大変だね」

三食粗食を提供するだけでいいならそこまで手間もかからないが、納得せず收容された者というのはえてして脱走したがる。いっそ排除してしまった方が楽、という考えもある。

「そこでだ。被害者たちによる『私刑』を認めようと思うのだがどうだろうか」

一瞬、場がしん、と静まり返った。

「あの」

真つ先に手を上げたのは、レンたちの担任。大人ではあるものの、賢者と比べたら年齢は約半分。むしろ若手であるようにも見える。

「それは彼女たちに罰を与えさせる、ということでしょうか？」

「その通りだ」

咎めるような響きにも賢者は怯まない。

「第三者が罪の重さを決めるのは難しい。だが、被害を受けた当事者

であれば話は別だろう。どの程度の報復が妥当であるかは己の心に委ねれば良い」

つまり、殺したければ殺しても構わない、と。

ある意味では責任の回避。ただ、タクマたちの罪状を挙げたうえで「レンたちに委ねる」と判断しているわけで、その決定に従う覚悟と責任は当然、街の者たちも負う。

「さあ、どうする?」

問いかけられたのはレンたちと、それから娼館の娘たちだ。

恨みの軽い後者が先に口を開いて、

「姉さんに任せます」

頷いたマリABELが責任者として答える。

「こちらとしては彼らの半永久的ブラックリスト入り。および慰謝料の請求。以降、迷惑行為が確認できた際に我々の裁量で対処する権利をいただければそれで十分です」

「ふむ、それは問題なからう」

念のため投票という形で採決も行われたものの、当然のように賛成多数で可決。

「では、君たちはどうする?」

「……って言われてもなあ」

困惑したように呟くフリー。

心情的には「は? 死ねば?」くらいの勢いではあるものの、だからと言って直接手を下せるほど覚悟は決まっていない。どうしてこんな奴のためにそこまで責任を負わないといけないのか、という感情はどうしてもある。

どうしよう、とばかりに向けられた視線をレンは見返して、それからタクマたちを振り返った。

「なあ、タクマ。お前らはどうしたら納得してくれる?」

彼らの所業、および言動についてはマリABELたちからも聞いた。生半可なことで反省するとは思えない。下手をすれば余計に恨みを買ってしまうが、

「はっ。俺達に勝ったら考えてやるよ。どうせお前には無理だけど

な」

沈黙の魔法が解除されると案の定、挑発するような台詞が返ってきた。

「馬鹿じゃないの。どうして私たちがそんなことしなくちゃいけないわけ？」

「勝てばいいんだよ。偉そうな事を言っただけで負けるのが怖いんだろうが」

マリアベルに叩きのめされたというのにこの態度。年上はともかく、同格になら勝てるという判断か。上には上がいると理解しながらスタンスを改めないあたり筋金入り。

確かに、これは一度叩きのめさないとわからないかもしれない。

レンは少し考えてから答えた。

「わかった。なら、勝負しよう。それで納得するんだろ？」

意外だったのか、タクマは目を丸くしてから喜色を浮かべた。

「勝った方が正しいって事だな？」

「そんなわけあるか。俺たちが勝ったら素直に『悪かった』って認めろっていうわけだ。負けても許すわけじゃない。嫌なら無抵抗のお前らに好き放題するぞ？」

「……卑怯者が」

果たしてどっちが卑怯なのか。

結局、タクマたちはこの条件を呑んだ。

「同じ人数での真剣勝負。殺しはなし、ってことでいいな？」

「ああ。っても、どうせフリーやそっちの女は戦わないんだろ？」

水を向けられたフリーとアイリスは目を瞬いて、それから表情を引き締める。

「ううん、私も戦う。それならぶん殴っても嫌な気分にならないしね」
「私もです。レンさんたちだけに嫌な思いをさせられません」

勝負は三対三ということになった。アイリスはダンジョン経験で言えばレンたちよりも初心者。先達が含まれていない以上、負ければ言い訳はきかない。

向こうは前衛が三人。

対するレンたちは後衛二人にシーフという変則的な構成だが、
「ねえ、レン。つい喧嘩買ったけど、勝てるの？」

「ああ。いつも通りにやればたぶん」

移動しながら囁いてきたフリーに同じく囁くようにして返す。

「たぶんって、そんな適当な」

「仕方ないだろ。あいつらと勝負するのは初めてだし、向こうだってレベル上がってるかもしれない」

それでも勝算はある。

ウインドウを開き、残っていたスキルポイントを使う。唯一、それを確認したフリーは驚いたような顔をした。

「やる気なんだ」

「そりゃあな。……やるからには勝つ」

勝負の場所選ばれたのは一階のボス部屋だった。

全員が攻略済みのため、部屋には何の障害もない。そこに立会人として賢者、それからマリアベルほか二名の大人。

縛られたまま運ばれてきたタクマたちは部屋の一方にまとめて置かれ、レンたちはその反対側に立つ。

立会人はなるべくじゃまにならない位置に退避し、

「では、縄を解いてもらおう」

賢者の宣言により、立会人の一人——高レベルの戦士がまずはタクマの傍へしゃがみこんだ。

はらり、と縄がほどけて、

「ストレージー！」

勢いよく立ち上がったタクマが駆けてくる。開始の合図どころか仲間が自由になるのすら待たず、異空間から武器を取り出しつつの特攻。

それだけに成功すれば大きな成果を挙げられただろうが、

「マジックアロー」

あいにく、レンたちは既に警戒していた。

三十本の光の矢が降り注ぎ、タクマだけでなく縛られたままの仲間にも襲い掛かる。とばっちりを受けそうになった戦士には賢者の

防御魔法が飛んだ。

ゴブリンたちを怯ませた範囲魔法を前にタクマは、

「だからどうした……!」

痛みに顔をしかめながらも前進を選択。実際、一発一発の威力はさほどでもないため、痛みを覚悟していさえすれば不可能ではない。

ただし、

「ファイアボルト!」

「なっ!?!」

隙をついたアイリスの攻撃はタクマも予想外。飛んできた炎に足を止め、慌てた様子でかわす彼。

そんな男の肩に本命——射られた本物の矢が突き刺さる。

これも致命傷にならない。ただし、実体であるために動きを阻害し、さらに継続的な痛みを与えてくれる。

「くそっ、なんなんだよ、次から次へと!」

悪態をつきつつも斧を構え直し、そのまま突っ込んで来ようとする彼に、

「マジックアロー」

「ファイアボルト」

魔法と飛び道具の波状攻撃。

最後は、辛くも接近に成功したタクマの首へびたりとナイフが押し当てられて、

「……はい、降参しよっか?」

ようやく縄を解かれた二人の少年たちも含め、全員が驚愕の表情と共に結果を受け止めた。

「どこが正々堂々だ。全然戦ってねえじゃねえか」

再び縛られた少年たちはなおも悪態をつく。

約束はどうしたのかと思いつつレンは顔をしかめて、

「お前ら、RPGでも魔法使いとか嫌いなタイプだろ」

「まあ、あの手のゲームでは魔法など『攻撃手段の一つ』でしかないか

らな。属性が違うだけでダメージを与えることには変わらない。飛び道具の有用性など信じていなかったのではないか」

「賢者さん、今時のゲームはちゃんと遠くから攻撃してくれるのもあるんですよ」

「なんだと」

驚愕する賢者。

三十年前でも火の弾を投げる髭の親父くらいはいたはずだが、まあ、それはともかく。

「で？ 自分たちが悪かったって認めて『二度としない』って誓えるか」

「誰が誓うかそんな事」

半ば予想していたことではあるが、全く話にならなかった。

ため息。

「どうする、レン君？」

「仕方ない。これは使いたくなかったんだけどな……」

言いながらレンはローブを脱ぎ捨てた。

下にも服を着ているものの、男性から女性に変わりつつある危ういボディラインはよりはっきりと表れる。服から外に出した翼や尻尾も角度によつては見えるだろう。

突然の行動にタクマたちは息を呑み、

「サキュバスらしくエロいことと言う事聞かせてくれるのかよ？」

「お前らみたいな雑魚にそんな勿体ないことするかよ」

レンは彼らの前にしゃがみ込むとその瞳を覗き込んだ。

スキル『魅了の魔眼』。

サキュバスの初期スキルである『魅了』の発展形である。発動が任意でありMPの消費が必要、さらに視線を合わせる必要がある代わりに効果が高い。単に『魅了』をパワーアップさせる手もあったものの、レンはより確実なこちらを選んだ。

「いいから黙って負けを認めろ。そんなんじや女にモテないぞ」

「……お前に何がわかるんだよ」

なおも口答えをしてくるタクマたちだが、その語調は明らかに弱く

なった。

どこか頬を染めて恥ずかしそうにさえている。

単純に魅了するだけだと攻撃的な好意を引つ張り出してしまいう可能性があつたが、先に負かしたことでうまい方向に誘導できたらしい。

「少なくともお前らよりはわかる。女つてのも色々大変なんだよ」

「俺は男だ、って言いながら何言つてやがる」

「女を馬鹿にしながら女とやるのに拘つておいて何言つてんだ」

肩を竦め、

「真面目に頑張るなら少しは見直してやってもいいぞ」

これにタクマ以外の二人が目の色を変えた。「本当か!？」と嬉しそうに言った彼らにタクマが低い声で「黙つてろ」と釘を刺し、

「絶対に認めないからな」

「駄目か。……なら仕方ない」

レンは立ち上がつて賢者を振り返つた。

「あの。こいつらもサキュバスにする方法とかないですかね?」

「種族変更の手段は未だに数少ない。サキュバス化やそれに類するアイテムも見つかっていないが……女の苦勞を味わつて欲しいと言うのなら、職業変更アイテムでなんとかならないこともない」

「じゃあ、それをこいつらに使つてくれませんか?」

どうしてもわからないのなら自分たちで味わつてみればいいのだ。

元仲間の処遇

「タクマたちの様子はどうですか？」

「真面目に働いてくれていますよ。今のところ暴れる様子もありません」

昼過ぎに起きてきたマリアベルがフリーの淹れたお茶を手に微笑んで答える。

「ブラックリスト入りはなくなってしまうしましたが、お客として来られないのであれば同じことですな」

「あはは。まさかあいつらが娼館あそこで働くことになるなんて思わなかったなあ」

心底楽しそうに笑うフリー。

容赦なき過ぎて若干可哀想になるものの、レンも同感である。

「転職アイテム三つ分はなかなか高い借りになったな」

「でも、あの人たちの借金になったんですよね？」

と、これはアイリス。彼女も自分たちを脅かした相手にかける慈悲は持っていないようだ。

「当分はタダ働きだろうな、あいつら」

「三食家付き、週休二日ですから決して悪い条件ではありませんよ」

タクマたちの件が解決してから二日が経った。

三人にはレンの希望に従い転職用のアイテムが（無理やり）与えられ、元の職業から「娼婦」へと変わっている。

『な、なんだよこれ……!?!』

変わった直後の狼狽ぶりは正直いい気味だった。

転職するとレベルは1に戻り、ステータスも大きく下がる。スキルは残るものの効果が減少。戦闘職なら多少時間をかければ元の水準まで戻れるだろうが、非戦闘系となるとかなり苦勞する。

ちなみにレンのサキュバスと違い、娼婦になっても性別までは変わらない。

ただ、ステータスの減少によって筋力は落ちるし、クラス特性によって体格も僅かに補正された。

運動能力が誇りであるタクマたちにはショックだろう。

容姿も別に可愛くはならなかった。転職に伴い与えられた衣装が下着同然だったため、あまりの似合ってなさに何人かが嘖き出す始末。

もちろん、そんな姿で客の相手はできないので、仕事は荷物運びや部屋の掃除などの雑用である。

暴れようにも他の従業員は女性ばかりだしみんなレベルが高い。

自慢の筋力を奪われた上にアウエーな環境、しかも自分たちが一番の下っ端——という状態に、有無を言わさず働かされているらしい。

なお、働けば働くだけ（効率が悪いが）経験値が入り、娼婦らしい技術や能力が身についていく。

最終的には「自然と同性を喜ばせる所作が頭に思い浮かぶ」男の娘らしい。

「きつと、彼らももうレンさんには頭が上がらないでしょう」

マリアベルが穏やかな美貌に笑みを浮かべた。

「魅了もある程度効いていますし、皆さんは店の子たちに大人気ですからね」

「街の女の子からも人気だよ、レン」

「妹たちも『また会いに来て欲しい』と言っていました」

「嬉しいけどさ。モテてるっていうより仲間扱いだよな、それ」

タクマたちは「女の敵」でレンは「女の味方」。

敵対的な相手よりは好意的な相手と付き合いたいと思うのは当然だ。

「いいじゃない。レンに彼氏取られるんじゃないかって心配してた子もわりと安心してたし」

「そんな予定は全くないからその子にはよろしく言っておいてくれ」

「うん。今はどっちかって言うと『彼女を取られるんじゃないか』って男子が心配してるっぽい」

「その予定もないっての」

どこでどうやって浮気をしろというのか。一応、この街にも宿的なところはあるものの、やましい目的で借りたりしたらあつという間に

噂が広がりそうである。

「俺だって女子から嫌われるより好かれた方がいいよ。これからどうしたって話す機会が増えるだろうし」

「レベル上げないとだもんねー」

タクマたちとの一戦の後や魅了の魔眼を使った時にも経験値が入った。特に後者は難易度に比して経験値が高め。サキュバスの行動を取ると実入りがいい、というのはある意味当たっていたのかもしれない。

「それともレンも転職する？ 娼婦じゃなくてなんか別のに」

「あー、それもアリかもな」

今のレンは「種族：サキュバス」「クラス：なし」という状態だ。

種族とクラスはそれぞれ別個でレベルを持つが「種族：人間」と「クラス：なし」についてはレベルがない。代わりに経験値がもう一方に集中して注がれ、基礎ステータスが強化される。

ちなみにアイリスの母親はエルフで精霊使いだそうだ。

「転職すればレンさんがサキュバスになるのも遅らせられますね？」

半妖精の少女が青い瞳を瞬かせるも、

「代わりにしばらく俺の戦力が下がる。もう『女になりたくない』って騒ぐのはやめたから、転職は慎重にやればいいと思う」

もちろん、上手く転職すれば戦力アップに繋がる。

魔法使い系になればバリエーションを増やせるし、戦士系を選んで足りない前衛を補ってもいい。魔法を使う関係上、手を空けたまま戦えるクラス——マリアベルと同じ蹴術師になるのもアリだ。

悩ましいうえ、転職アイテムが手元にないのでしばらく悩んでおくことにする。

すると、相棒（と呼んでもそろそろ差し支えないだろう）がにんまりと笑って、

「じゃあその暑苦しいローブも脱いじゃおうよ」

「お前、こういう時本当に楽しそうだよな」

「そりゃあ可愛い子に可愛い格好させるのは楽しいもん。ねえアイリスちゃん」

「はい！ レンさんはもつと可愛くなった方がいいと思います」

さらにはパーティ唯一の大人も止めるどころか同調して、

「レンさんの可愛くなった姿は是非見てみたいですね。……店の子どもが羨ましがりそうです」

女ばかりの家はとても賑やかだ。

しかし、そんなこの家がとても心地いい。タクマたちと生活を共にしていた頃よりもほど楽しいし充実している。

これからも彼女たちと共に冒険を続けていきたい。

ダンジョン攻略はまだ始まったばかり。いつか最下層にたどり着いて帰還の手がかりが見つかる日までレンたちは戦い続けなければならない。

ある意味、ここからが本当の意味で冒険の始まりだ。



「ところで、レンさん？ サキュバスの身体というのは性欲的にどうなのでしょう？」

「突然何を言い出すんですか、マリアさん」

さらに数日が経って、レンたちはダンジョン三階の攻略を終えた。

三階のボスはゴブリンウォーリア。両手斧を携え、攻撃力・HPに優れたこの敵をいつもの先制攻撃で下し、アイテムやお金、世界の欠片を入手。

三階で手に入った欠片は六個。

地下室の半分を氷で満たすためのおがくず代は二階で手に入れた欠片（四個）で「もう十分」と言われてしまったので、ひとまずこの六個は取っておくことにする。売ればそこそこの金になる上にストレージの容量も食わないのでへそくりのようなものだ。

『つていうかアイリスの分なんだから好きに使っていいんじゃないか？』

『確かに。売って可愛い服買うとか、美味しいもの食べるとかしてもいいんだよ、アイリスちゃん』

『そんな。レンさんたちがいなくなったらダンジョンに潜れないんですから、これは共有の財産です』

後輩がとても謙虚なので使い道はひとまず保留である。

そのうち何か特別なことをしたくなつた時——例えばアイリスの両親が森を求めたように——ぱーっと大量に使うのも良いかもしれない。

他の戦利品でも十分収入にはなっているため、家でささやかな祝杯を挙げていたのだが……今日は娼館へ行かないということと食事に参加していたマリアベルがとんでもないことを言い出した。

危うく飲み物を嘔き出しそうになつたレンはなんとか口の中のもの飲み込んで、

「賢者あいつじゃないんですからそういう冗談はやめてください」

「すみません。……ですが、困ってらっしゃるのではないかと思いまして」

こてん、と首を傾げながら言われた。

おっとりとしていて理知的な大人の女性。娼婦たちからも「姉さん」と慕われており、レンたちの家にも家賃としていくらかを入れてくれている。

攻略にはできるだけ加わらない方針ながらもとても助かっているし尊敬もしているのだが、娼館経営に携わっているせいか、性的な話に積極的などころがある。

あるいは同性故の気安さがレンにも適用されているからなのか。

「男性は機能的にも溜まりやすいわけですから、我慢は身体にもよくありません。二、三日に一度は排出された方がよろしいかと」

話の内容も妙に具体的である。

これにフリーが「あー、そっか」とバツの悪そうな顔をして、

「レンの部屋について行っても嫌なにおいがしないなー、つて思ってたんだけど、もしかして我慢してた？ 気にしなくてもいいのに」

「そうですね。お父さんも私たちを森に行かせて家でお母さんと何かしてる時があるんです。お母さんも『男の人は仕方ない』んだって言っていました」

「うん。とりあえずアイリスはお父さんに一言言ってもいいんじゃないか」

賢者が聞いたら「四人目も期待できそうだな」とか言いそうである。ともあれレンはマリアベルに向き直って、

「いや、本当にあんまり困ってないんですよ。不思議とそこまで切羽詰まらないというか。……さすがに露骨に迫られるといろいろ思うところはありますけど」

「そうですか。それは不思議ですね……？ いえ、もしかすると男性的な性欲と女性的な性欲が拮抗、というか相殺されているのでしょうか？」

どちらを相手にすべきか迷っている状態、と言い換えてもいい。

「確かにそれはあるかもしれませんが」

というか、そろそろ女性的な方にバランスが傾いている気がする。

最近、朝でも落ち着いて目覚められることが多くなった。

「……っていうか、せめて二人きりの時に相談させてくれませんか？」
「あら。そういったお誘いは他の女性に聞かせない方がいいのではありませんか？」

「ふーん？ 私に『彼女できなかつたら結婚してくれ』とか言っておいてそういうことするんだ？」

「えっ!? あの、フリーさん、いつの間にそんなことがあったんですか？」

「いや待て。フリー、お前それ文言が変わってるだろ!? 確かに似たようなことは言ったけど！ ……っていうかそういう話じゃなくて、保健の先生に相談するような感じで！」

騒いだ末「この家で隠し事をして無駄」という結論になった。

「……ええと、つまりアレですよ？ サキユバスなのに男を襲いたくならないのか、っていう」

「はい。レンさんの場合、サキユバスでありながら男性でもあるわけなので、だいぶ特殊な状況ではありますが……種族的な特性が今後強くなってくる可能性は考慮した方が良くないかと」

男の淫魔だから女が対象になるのか、これからも性欲が強くなる

いのか、それとも男を「美味しそう」と思うようになるのか。

順番に想像してしまったレンは最後のところで慌てて首を振って、「やっぱり、定期的に発散した方がいいんじゃないか？」

「そうですね。あるいは『満足』と言うべきなのかもしれません」

この世界におけるサキュバスがどのような存在なのかは未知数なところが多いものの、生物の三大欲求のうち二つ、すなわち「性欲」と「食欲」が直結した存在であると考えた場合、性欲を発散することはすなわち食欲を満たすことに繋がる。

要するにエナジードレインである。

ここまでの話をレンは自分なりに咀嚼し直して、

「……定期的にエナジードレインが必要、か」

言ってから「なかなか過激なこと言ってるな」と気づいた。

訂正しようと顔を上げたらアイリスが頬を染め、フリーがなんだか嬉しそうな顔をしていた。

前者には謝る必要があるそうだが、後者はいろいろ誤解していそうなうえになんとというか逞しすぎる。

「じゃあ、レン。今度から一緒に寝よっか？」

「えっと、あの。夜はなるべくお部屋に行かないようにしますので……！」

「レンさん。もし可能であれば空間にかけられる『サイレンス』のようなものを習得した方がよろしいかと。さすがにこちらの技術レベルでは防音はあまり利きませんので」

「いや、待ってください。これは誤解というか……いや、誤解でもないのか？」

言っているうちによくわからなくなってきた。

エナジードレインが必要なのは確かだが、果たしてどの程度の量でどの程度の頻度で吸うべきなのかわからない。それによつては手を繋ぐ程度の接触では足りない可能性もあるし、そうすると広い範囲の身体的接触が有効な可能性はある。

悩んでいるとフリーが肩に手を置いてきて、

「安心して。レンが無理やり変なことするタイプじゃないのは知って

るから。私たちで良ければ協力するよ。ね？ アイリスちゃん？」

「えっ!? は、はいっ。私で良ければ!」

「ふふっ。レンさん、もちろん私も微力ながらお手伝いさせていただきます。必要であればいつでも仰ってくださいね?」

「……なんだこれ」

純粹に男としてモテているわけではない。むしろ女同士の気安さに近い。仲のいい女子同士なら同じベッドで寝るくらいにはない……かもしれないし、そう考えると男のプライドが若干傷つかないでもないのだが、可愛い女子からこうも親しげにされると「もうこれでもいいんじゃないか?」という気がしてくる。

なるほど、タクマたちもこれなら更生するかもしれないな……と益体も無いことを思いつつ、レンはとりあえずフリーたちにこう答えた。

「えーつと……そうだな。フリーだけに頼んでも大変かもしれないし、順番にお願いしてもいいかな?」

ドレインする量を少しずつ増やしながら検証していこう、というつもりだったのが、思いのほか意味深な言い方になってしまった、と気づいたのは言い終わった後のことだった。

新たな目標

朝。

どこかから聞こえてくる鶏の鳴き声で一度目覚め、二度寝した後はキッチンから聞こえてきた準備の音で時間を知る。

時計のない、スマホはあっても機能しない生活に最初の頃は戸惑ったものの、慣れてくるとこれはこれで悪くはない。

「ん……っ」

自身の唇から漏れる高い声にもだいぶ慣れた。

抱きしめるようにしていた毛布を離して身を起こす。翼と尻尾が成長するにつれて寝間着はラフな感じが多くなった。身体が丈夫になったのか風邪をひく気配もないのでまあいいかな、と思っっている。ベッドサイドに腰を下ろしてから軽く伸び。

下着を替えてから胸の痛みもあまり気にならなくなった。早いペースで成長していくのが困り物ではあるが、

「可愛くなったよなあ、俺」

部屋に置かれた姿見へ身体を映して眩く。

一部の特徴に目をつぶれば紫紺の髪をした美少女である。男の頃より身長は下がり、代わりにヒップサイズは上がった。膨らみが目立ってきた胸も、すべすべなうえに日本人離れた白さの肌も男のものとは思えない。

男子高校生をしていた頃、クラスにこんな子がいたらまず間違いなく好きになっていた。

そう考えると他の女子から嫉妬を受けるのも多少は仕方ない気がする。

なにかの作用で突然元に戻ったりしていないのを確かめたら着替えるをする。頭からかぶるタイプの衣服は翼の関係で着るのが面倒なので前留めタイプを着ることが多い。ボトムスはスカートではなくパンツ。ダンジョン攻略する上でも肌は出していない方が楽だ。

「ウォーター」

水の魔法で金属製のボウルを満たし、手と顔を洗ったら窓から水を

捨てる。

だいぶ伸びてきた髪を櫛で軽く梳いてやれば朝の支度は完了である。

「フリー、何か手伝うことあるか？」

「あ、おはようレン。んー、もうちよつと早く起きてくれれば火起こしとか頼むんだけどなあ」

「悪い。つつい二度寝しちゃうんだよな」

「レンさんは普段から魔法で大変ですから。大丈夫です。軽く火が点けば私が精霊にお願いしますから」

「うん。アイリスちゃんが来てくれて本当助かってる」

弓使い兼見習い精霊使いのアイリスが来てから朝食の支度はずいぶん楽になったらしい。狩った獲物をその場で調理することも多いため火起こしにも慣れている。何もないところから火や水を出せる、という特権がなければ「俺って必要ないんじゃない？」と思うところだ。

「俺も料理覚えるかなあ」

「あれ、どうしたの急に」

驚きつつも振り返ったフリーは「んー、でも」と考えるようにして、

「食材もタダじゃないからなあ」

「失礼な。俺だって簡単な料理くらいできるぞ、たぶん」

「こつちだと火加減調節するのも大変だけど大丈夫？」

コンロがあるわけではないので強火だの弱火だのワンタッチでは変えられない。アイリスは精霊にお願いして勢いをコントロールできるが、そうでなければ薪の量などを調節しながら上手くやりくりするしかない。

「お前、実はめちやくちや料理上手いんじゃないのか？」

「えー、今頃気づいたの？」

最近、フリーの軽口が憎まれ口に聞こえなくなってきたから困る。「そうだ。頼んでばかりでアレなんだけど、髪切ってくれないか？」
マリアベルはだいたい朝は寝ているので朝食は三人で摂ることが多い。

簡単な食事をしながら少女二人に言葉を投げると、彼女たちは揃っ

て目を丸くした。

「え、切っちゃうの？ もったいない」

「そうです。どうせ切るなら鬘かづらを作れるくらい伸ばしてからにしましょう」

これだけ綺麗な髪だとそういう需要もあるのか。

なんとなく感心してしまいつつ、

「いや、長いと邪魔じゃないか？」

「レン。可愛いは我慢で成り立ってるんだよ？」

制服のスカート丈とか考えたとわからないでもなかったが、

「命がかかっている時に『可愛い』を優先できるか」

「縛るのはどうですか？ 私とお揃いにしましょう」

どこかうきうきとアイリスが言ってくる。確かに彼女のポニーテールは見事だし、なかなか楽しそうだ。ひとまず試してみるのもいいかもしれない。

「どうせならいろんな髪型してみようよ。ツインテールとか今のレンなら似合うと思うけど」

「お前、自分はショートの癖に」

「だって毘に髪が絡まったりしたら最悪でしょ」

言われてみるとゲームでもロングヘアーなのは後衛職が多かった気がする。たまにストレートロングの女騎士とかもいたりするが。

「……うん、とりあえずポニーテールにするよ」

「じゃあ、後でやってあげる。レンがやるとポニーテールじゃなくてサムライヘアーになりそうだし」

「そんな馬鹿な」

憤慨しつつ自分でも試したら本当にそうだったので結局フリーにやってもらった。

アイリスはそれをにこにここと見つめて、

「なんだかいいですね、こういうの」

「アイリスちゃんも妹とやったことない？」

「はい。でも、レンさんの髪は私たちとはまた別なので」

「アイリスたちの金髪も見事だけどな」

「向こうだと金髪つて潜在遺伝だったけど、こつちだとハーフでもしつかり遺伝するんだよね」

そもそも遺伝子などという法則に縛られているのかどうか。フリーたちのような人間ならともかく、レンたちのように種族から変わっている者はそれこそ精霊力とかが働いていてもおかしくない。

自分の子供もハーフサキュバスとかになるのか、と少し考えてからレンは思考を追い出した。

「さて、じゃあ準備して出るか」

「うん」

「はいっ」

寝ているマリABELに挨拶——すると起こしてしまうので、そのまま出る。予定は昨夜のうちに伝えてあるので問題ない。

行先は何度目かになる賢者の家である。

「さすがに道ももう覚えたな」

「お金くれるおじさんにはこまめに会いに行きたいもんね」

「なんかいかがわしいぞその言い方」

賢者はもうあまりダンジョンに潜っていないので、用事で出ていない限りは家にいる。

ノックするとすぐに「入りなさい」と返事があった。

「おはようございます。……あ、賢者様。またさつきまで寝ていらしたでしょう?」

「仕方あるまい。昨夜も遅くまで作業をしていたのだ」

「インドアな人つてネットがなくても夜型生活なんだよね」

「夜の方が静かだから本とか読みやすいんだろ」

中に入ったらとりあえず窓を開けて換気をする。

アイリスが床に散らばった本などを片付け、レンはその間に賢者の服を着替えさせる。フリーはテーブルを軽く片付けて軽食の準備だ。

何度か来て慣れてきたのでもはや遠慮はない。少しは片付けておかないと気になって仕方がないのである。

賢者の方も鬱陶しそうにしつつも「まあ、便利ではあるな」とこれを受け入れている。

「さあ、賢者さん。お腹減ってるならこれでも食べて」

「三階の報告を持ってきたのでお納めください」

「俺のレベルアップ報告も続報があるから金に換えてくれ」

「君達は本当に容赦がなくなってきたな。私のところへこれだけ頻繁に来る若者も珍しいぞ」

フリーではないが、金になるのだから来なければ損なだけである。

「……ふむ。やはり、子供達に向けられた碑文は世界の成り立ちを語るものらしいな」

「何かわかりましたか?」

「いや。三階程度ではなんとも言えない。ダンジョンは少なくとも五十階以上あるのだから」

「今、最高記録が何階でしたっけ?」

「五十三階だ。……正直、五十一階の存在を知った時は皆が絶望した」
「でしょうね……」

大台が来たら「ここで終わるんじゃないか」と思うのが人情だ。

特に五十階ともなれば期待は大きい。何しろここで終わらなかつたら次は百階の可能性が濃厚である。

「三十年かけて五十階ってことは、百階にたどり着くにはもう三十年……?」

「当然だが、ダンジョンの難易度は潜るごとに増していく。今のペー
スでは次の三十年で七十五階にたどり着けるかどうか」

「本当に絶望じゃないですか」

帰還を半ば諦めている初期の転移者はふつと笑って、

「だからこそ、新しい動きが出始めているわけだ。アイリスがダン
ジョンに潜り始めたのもその一つだろう?」

「……あと三十年もかかったら、お父さんは日本に帰れなくなります」
「最もご高齢だった教師は既にこちらの世界で天寿を全うされている
からな」

エルフであるアイリスの母にはまだまだ長い時間がある。ハーフ
エルフであるアイリス自身だって三十年経っても若々しいままかも
しれないが、人間はそうもいかない。

ここまで考えてから「そうか」と思う。攻略が滞りはじめた原因には当然それもあるのだ。

「歳をとるとステータスってどうなるんですか……?」

「当然、全盛期を過ぎると徐々に減少が始まる。レベルアップを続ければ十分補える範囲だが、下に潜り続ける上では大きなハンディだ」

だから、先駆者たちは街を作り、生活環境を整え、知識を蓄え、装備等を流通させて新しい転移者をサポートするのだ。

自分たちよりも早く、深いところまで潜って欲しいから。

「君達にも期待している。終わりにたどり着く以外の方法で真実を紐解くための道標になってくれるのではないか、とね」

「……賢者様」

「だからこれからも攻略を続けてくれ」

「いい話が台無しだぞ」

すると、賢者は誤魔化すように咳払いをして、

「ひとまず、十階の攻略を目標にして欲しい。そこまでたどり着けば初心者脱出と言つていいだろうな」

「十階かあ。……きついでしょ、さすがに」

「そうですね……。ちなみに、レンさんたちは今まで何階まで行ったことがあるんですか?」

「八階だな」

タクマたちとその階を攻略中に喧嘩別れした。

だから、今のレンたちのレベルでも十階くらいならなんとかかなりそうではあるが……問題は、あの時は五人パーティだったということ。

あれからレベルが上がっているとはいえ、三人で攻略するとなるとなかなか厳しい。

「……いざとなったらマリアさんについてきてもらおうか?」

「……そうだな。ここで頼るのはできれば避けたいけど」

新しい目標は『十階の攻略』に決まった。

次が四階なわけなのでなかなか遠い道のである。一つの階をクリアするのに一度の探索では済まないとして、休憩する日数も含めると一週間に一階ペースといったところ。

十階まで攻略し終えるには、

「二か月近くかあ」

帰り道を歩きながら計算してみたところ気が遠くなりそうになった。

「やばいね。同じペースで攻略していても五十階クリアするのに三年以上だよ。そりや三十年もかかるよ、これ」

「まあ、俺たちはまだまだ若いし十年くらいかかってても平気っちゃ平気だけど、そりや前からいる人は焦るよな……」

アイリスが「両親のために」と奮起するのも頷ける話だ。今はまだ四十歳程度でも、アイリスがダンジョンを踏破するまで存命とは限らない。

その健気な少女はレンたちの様子に微笑みを浮かべて、

「無理はしないでいきましょう。お父さんたちからも『この世界に骨を埋める覚悟はできている』って言われているんです」

「……アイリスちゃん」

「それはむしろ頑張るしかないやつだろ」

命を失っては元も子もないので休息も大事だが、やはり人任せにしてはいられない。

「四階のボスはスピアゴブリンだっけか」

今度は槍使いである。既存の敵と大きな能力差はないものの、獲物の種類が増えるとリーチがバラけて思った以上にやりづらくなる。そういう意味では「遠距離から片付ける」というレンたちの戦法とは相性がいいのだが、

「ゴブリンはどんどん数が増えるんだよな……」

「あの、いったい何階までゴブリンなんですか？」

「十階」

ゴブリン多すぎ問題。

ベテランの中にもふと思いついたようにゴブリンを掃討しに行く者がいるほど、初心者向けエリアの道のりは多くの者にトラウマを残している。

まあ、向こうは「人間多すぎ」と思っているかもしれないが。

「レベルアップも必要だな」

「そうだね。レンとアイリスちゃんもMPが大変」

「矢の消費も激しくなりますよね……」

魔法は使い方次第で大きな戦力になる。それはタクマたちとの戦闘でも証明した通りだ。

ただ、やっぱりMP消費は問題である。レンの場合はエナジードレインで補給できるのでまだマシではあるものの、いちいち補給の時間を取っていたらなかなか進めない。

「MP補給か。いちおうそれっぽい新スキルはあるんだよな。試しに取ってみるか」

「じゃあ私はもうちょっと前衛できるように一撃必殺を目指そうかな」

「それはシーフじゃなくて暗殺者じゃないのか？ いや、すごく有難いけど」

「私も攻撃魔法を複数に飛ばせるように練習中です……！」

レンたちはさらなる戦力強化に向けて作戦を考え始めた。

一歩ずつの前進

「ドレインボルト」

手のひらから放たれたのはどこか青白い光を放つ光線。四階ボス部屋前。最後の雑魚敵である斧持ちゴブリンはこれをもろに喰らい、僅かに顔をしかめる。紙の端で指を切った、くらいの反応である。

当然、そのまま前進してくる彼(?)だったが、鋭く飛来した矢が右手の甲を直撃。こちらには明らかな悲鳴が上がった。

「両手武器持つてる奴は飛び込まれると弱いんだよね」

味方が牽制している間に高速で接近した盗賊が通り過ぎざまにナイフを閃かせ、切り裂かれた首から大量の血が噴き出す。

駄目押しにもう一回ずつ魔法と矢をお見舞いすれば、痛みやら何やらで混乱してしまいろくに動けない。光の粒となって消えるのに時間がかからなかった。

光が完全に消えるのを確認してから、レンはふっと息を吐き出して。

「MP回復できるのはいいけど、やっぱり威力が低すぎるなこれ」

『ドレインボルト』は新しく取得した魔法スキルである。

マナボルト同様の単体攻撃魔法だが、威力が大幅に下がる代わりにエナジードレイン、つまり単純にダメージを与えるのではなく生命力を吸収する効果を持っている。

ちゃんと当てられればむしろMPが回復するわけだが、これだけで敵を倒そうとしたら十発以上は軽く命中させなければならぬ。

回復したMP量を確かめつつ手を握ったり開いたりしていると、手袋を外したアイリスが右手をそつと絡めてきた。

「相手が一体の時じゃないと安心して使えませんね」

「ああ。フリーが首や心臓さくさく狙ってくれるから一体ならわりと余裕あるんだよね」

「ちよつとレンー? あんまり褒められてるように聞こえないんだけどー?」

「褒めてるよ。面倒なところかなり引き受けてもらってるし、すごく感謝してる」

「ほんと？ ……えへへ、やった」

途端に上機嫌になったフリーりはドロップ品の回収作業をてきぱきと終わらせていく。

なんだかおだてたような形だが、感謝にも褒め言葉にも嘘はない。こつこつと靴音と共に寄って来たフリーりが「ほら」と左手を差し出してきて、

「私には右手ちようだい」

「いつも悪いな、本当」

可愛い女子二人と手を繋いで休憩。

実を言うとこれが戦闘後、少なくとも二回に一回くらいは行われている。もちろん目的はエナジードレインによるMP回復である。

回復したMPで「ヒール」をかければフリーりたちの疲労もある程度吹き飛ばせる。こまめに行うことでレンたちは高い継戦能力を維持している。

ただ、ドレインボルトのお陰で回復時間は多少短縮した気がする。

「経験値はどう？」

「あー……つと、『ステータス』」

ステータスやストレージの操作など（魔法の発動も含む）には必ずしも発声があるわけではない。念じるだけでも発動するものの、声に出した方がわかりやすいぶん精度が上がるため基本的には発声をしている。

ただ、両手が塞がっている今ののような状態だと、ウィンドウを出した後の操作はタップ操作をせず念じて行うしかない。

三人は肩を寄せ合うようにして経験値の欄を覗き込んで、

「やっぱり多いね」

「だな。ダメージ的には貢献してないのに経験値は増えるのか」

「普通の経験値が私とアイリスちゃんに偏るから私の経験値も増えるんだよね。地味にお得」

レンたち転移者は種族やクラスに合った行動を取ることによって多くの

経験値を得られる。レンの場合はそこにエナジードレインが含まれる。

ドレインボルトによって生命力を吸い取ることでサキュバスの成長するし、こうして手を繋いでドレインでも一定時間ごとに経験値が増える。

「レンさん、生命力ってどんな感じなんですか？」

「んー……頑張って登った山の頂上で食べるソフトクリームみたいな感じかな」

「山……。私、登ったことないです」

「そっか、こっちって森はあるけど山はないんだよね」

住むものに向かない地形を作っている暇がなかったんだろう。

「っていうかレン。じゃあ生命力って美味しいの？」

「舌で感じるわけじゃないけど満足感はあるな。マッサージ受けた時みたいに疲れが取れる感じもある」

「へー。ちよつと羨ましい」

ダンジョン内で雑談。呑気な話だが、もちろん完全に警戒を解いてはいない。この階の情報は十分があるので徘徊型のモンスターがないのも把握済みだ。

「さて。回復したところでさくさくボスを倒しちゃおっか」

「おう」

「はいー」

四階のボスも特に大きな失敗もなく撃破し、レンたちは新たに世界の欠片を八個手に入れた。



「次は五階ですね。皆さんなら大丈夫だと思いますが、念のためご注意を」

ボス部屋攻略の祝勝会は前にも訪れた洋食店で行う事になった。

めいめいの注文した料理+酒がテーブルに並べられた様だけを見るとまるで日本のレストランのよう。当然、値段もそこそこ張るもの

の、石碑の写しやレンのレベルアップ報告を含めてそこそこ収入があるためなんとかなる。

むしろ、ボスを倒すたびにここで打ち上げをやるのか、なんていう話まで出るくらいだった。

本当に週一ペースで進むつもりなら若干来すぎな気もするが。

そんな風に食事を進めながらマリアベルが口にしたのが先の台詞だ。

「下一桁が五階、およびゼロの階は難易度が上がります」

言わば五階ごとが小ピリオド、十階ごとが中ピリオドといったところ。それぞれさらに階を進めるための関門であり、その次の階からの難易度も目に見えて高くなる。

レンも五階が今までよりハードだったのはよく覚えている。

五階のボスはゴブリンアーチャー。遂に敵が飛び道具を使ってくるのだ。今までのようにノーダメージでの撃破は難しい。

「多少の傷はヒールで治すつもりでいかないとな」

「うん。私も動いて攪乱するよ」

「先にアーチャーを潰せばいいんですね。頑張ってみます」

幸い、今のパーティは連携に不安がない。

協力しあっているだけで十分攻略できるだろう。それぞれの行動方針を語って笑顔を浮かべれば、マリアベルも「心配なさそうですね」と微笑んだ。

「よろしければ私も同行しようかと思ったのですが」

「え、いいんですか？」

「ええ。石碑や欠片の件は把握していますので、あくまでピンチになった時の手助け、ということになります」

娼婦たちも経験を経ているいろいろ気が回るようになり、経理ができる子もいるので、娼館の方はそれほど困っていないらしい。

タクマたち三人が雑用をこなしてくれるようになって余計に手が空くようになった。

「週二回の探索ペースであれば十分に参加可能かと」

「もちろん大歓迎！ ね、レン？」

「ああ。いてくれるだけでも安心感が違うもんな」

余裕をもった戦いを心がけているとはいえ、うっかりで全滅……という危険はどうしてもある。マリアベルの存在はそういう時のためのセーフティになる。

「私もマリアさんと一緒に冒険したいです！」

「ありがとうございます。では、参加させてください。戦闘には極力参加いたしません。荷物運びやMP補給にお役立てください」

「……MP」

「ずっと手を繋いでいても構いませんよ」

「恥ずかしすぎますよ」

戦闘中はともかく、フリーたちに負担をかけずエナジードレインできるのがあるがたい。

ストレージ持ちが三人になれば矢を大量に持つて行けるのでアイリスの戦闘力も上がる。

ここでマリアベルは話を変えて、

「実を言いますと、お手伝いする代わりに別の目的もあるのです」

「目的？」

「一部のアイテムを娼館へ優先的に提供して欲しいのです。在庫が減ってきている品がありました」

浅い階層の戦利品は安い品が多い。それは間違いないのだが、逆に深いところでは手に入りづらい品もある。

初心者を持ち帰るアイテムにもそれなりの需要があるのだ。例えばゴブリンの使っている金属武器を溶かせば再利用できる。

ドロップや宝箱からたまに手に入るハーブは化粧品や香の材料になりうる。素材を持ち込んで職人に依頼すれば既製品を買うより安く手に入るし、品切れだから手に入らないという心配もない。

「もちろん売値は同等か多少色を付けるようにします。……いかがでしょう？」

「全然問題ないです。でも、もしかして節約のためですか？ タクマたちへの給料が大変だとか……」

「いいえ。ここ数年、化粧品や薬品の需要が高まっています、品薄の

状態が解消できていないのです」

若い世代の買い求める量が多くなったせいだ。

男子からの需要も増えており、自然に集まる分だけでは足りなくなっている。

高レベルプレイヤーが敢えて仕入れに向かうこともあるものの、移動や戦闘にはどうしても時間がかかる。ゲームのようにお手軽に大量入手とはいかない。

「ですので少しでも入手手段を広げられればと」

「大変なんだ……。うん、そういうことなら協力させて！ マリアさんが手伝ってくれば一日に戦える回数も増えるし！」

こうしてマリアベルがダンジョン探索のメンバーに加わった。

「マリアさんには一番後ろをお願いしていいですか？」

「はい。後方を警戒しつつ、レンさんとなるべく手を繋ぐようにしますね」

「む。……私、今からでも後衛目指そうかな」

「フリーが後衛になったら前衛がいなくなるだろ。アイリスに接近戦させる気か？」

「え、あの。私はナイフも使えますし、矢の節約にもなりますけど……矢に比べるとあまり自信がありません」

「わ、わかってるってば。レンにくつつくのは帰ってからのする」

戦闘中以外、常に人肌に触れるようにしたところMP効率はかなり良くなった。要所でドレインボルトを活用すればさらに楽だ。

ただ、手を繋いでいると少し歩きづらい。もう一方の手をアイリスが取ろうとするので猶更である。

ローブを着なくなったことだし尻尾を掴んでもらおうかとも思っただが、優しく掴まれただけでもかなり気になるので仕方なく断念した。

「ねえマリアさん。レベル上がるとどのくらい強くなるのか試しに見せてもらったりできない？」

「構いませんよ。では、次の戦闘でゴブリンを一体お任せください」

そうしてターゲットになった相手——前の階のボスでもあるスピ

アゴブリンは脚線美を誇るマリアベルの足を叩き込まれ、骨のへし折れる嫌な音と共に一撃で消滅した。

相手が人間でも結果は大して変わらないだろう。そう思うと頼もしさを感じると共に少々ぞつとした。

「この階層の敵ならさすがに造作ありませんね。皆さんも経験を積みめばこの程度は軽くできるようになるかと」

「あらためてとんでもないな、『祝福』って」

幸い、それ以降マリアベルの出番はなかったものの、MP補給の効率化とストレージ容量の増加によって探索はより効率的になった。

一度の探索で五階のボス前までたどり着くことができ、次回のボス攻略を楽にすることができたのだ。もちろん、復活する分の雑魚や罨はもう一度対処しないといけないのだが、その分、戦利品も余計に手に入る。お陰で収入もアップである。

次の探索もさくさく進み、ゴブリンアーチャーを含むゴブリンパーティーに快勝した。

集団戦かつ、MP残量を気にしなくていい戦いではレンのマジックアローが役立つ。やはり手数差は重要だ。

「欠片は十個、つと。またレベルも上がったし調子いいかも」

「俺も今回の探索で上がったな。次もやっぱりMP効率関係かな」

ドレインボルトの取得によって新たなスキルが取得可能になった。

『ドレインマジック』。

manaボルトやマジックアローなどの通常攻撃魔法に「微量のドレイン効果」を付与する常時発動スキルだ。レンは嬉々としてこれを取

得。
次の探索で試し撃ちを試してみたところ、回復するMPは本当に微量で「ないよりはまし」程度ではあったものの、ゆくゆくはこれが効いてくる……かもしれない。

「私はどうしようかなー。もうちよつと急所狙いを極めたい気もするけど、そろそろ罨関係も上げないとだよね」

「罨もだんだん凶悪になってくるからな」

「そうそう。いっそのこと罨を探す魔法とかあればいいのに」

「今のところそういうのは見当たらないな」

「私にも無理です。鉄には精霊が宿りませんし、死んだ木にも生命力がありませんから……」

賢者のような本職の魔法使いならもしかしたら使えるのかもしれない。

「あつたらあつたで今度は『罨を解除する魔法』が欲しくなりそうだぞ」

「それはあるかも」

五階の打ち上げにはまた洋食店を使った。何を食べても美味しいのでいくら通つても飽きそうにない。

日本にいた頃にはありふれていた、こちらでは上等な料理に大満足して家に帰り——寝る前、レンはフーリに夜這いをかけられた。

相棒との一夜

「……うん。もう待てない」

フリーは我慢の限界だった。

紫の髪もすべすべの肌も隠さなくなったレン。レベルアップと共に女らしくなる一方で、もう服を着ていても男にはまったく見えな
い。

ダンジョンだと1〜2メートル以内にいることが多いので彼女も
とい彼のいい匂いも香ってくる。タクマたちと別れて良かったと心
から思う。

まあ、レンが可愛くなることについては問題ない。恋敵とかならと
もかく、フリーが仲良くなりたいたいのにはむしろレンなわけで。

問題はレベルアップのスピードだ。

体型のデータはフリーが取っている。だからもろもろの数値は手
に取るようにわかる。五階の攻略でまたレベルが上がったので、レン
の「男を主張する部分」はもうギリギリだ。

「待てないからしょうがないよね、うん」

今は夏。

日本より涼しいとはいえエアコンもない世界なわけで。厚着なん
てしていられない、と自分に言い訳しつつ、夜、キャミソールにショ
トパンツだけの格好でレンの部屋のドアをノックした。

顔を出した相棒はフリーの格好に一瞬息を呑み、

「フリー？ どうした？」

「計測。また必要でしょ？」

フリーは用意してきた「表向きの理由」を答えた。

「別に明日でも良かったんだけど」

「だーめ。こういうのは早い方がいいの」

恥ずかしそうにしつつもレンは部屋に入れてくれる。

いつ来てもあまり物がない部屋。

趣味にあまりお金を使えないというのもあるけれど、フリーやアイ
リスは安い小物なんかをたまに買い求めては部屋に置いている。

残念に思う一方で、いつも通りの様子に落ち着くのを感じながら「ほら、脱いで」と催促。

「しようがないなあ」

軽く文句を言いつつも大人しく服に手をかけるレン。小さく喉が鳴ってしまったものの、何食わぬ顔をして誤魔化した。

「羽もすっかり目立つようになったねー」

「ああ。ここまで育てば前からでも余裕で見えるな……」

腕の横から顔を出したサキュバスの翼。尻尾の方も伸びてきて小悪魔を名乗るには十分なサイズになった。

胸や尻のサイズも順調に育ってきている。この分だとフリーリやアイリスはあっさり追い抜かされてしまいそうだ。

「むー。さすがに胸で負けるのはちよつと不満だなあ」

「女子から見ても胸って大きいほうがいいのか？」

質問からして「男子の大部分は胸の大きい女子が好き」と言っているようなものである。

ぶつちやけると答えの何割かはそれが理由だ。

「モテないよりはモテた方がいいじゃない。男子が気にするなら私たちだって気にするよ」

「そっか。そりやそうだな」

話しながらも手は動かしている。一箇所を除いて測り終え「さて」と言っレレンのボトムスに手をかけると、

「待て、自分で脱ぐからー」

渋々、裸になり始めるレン。美少女が恥ずかしがっているみたいでちよつとそせる。

マリABELと違って女の子全般が好きというわけではないつもりだが、女の子はたいてい可愛いものが好きである。だから可愛い子が手の届くところにあるのだって嬉しい。

下から出てきた味もそっけもないボクサーパンツは正直似合わないことこの上なくて、気分がだいぶ冷めてしまったが。

「……うわ。また縮んでるな、これ」

「もう。人に胸の大きさがどうか言っておいて」

文句を言いつつ内心で「やっぱり」と思う。

平常状態のそれはショーツに収めてもほぼ違和感のないサイズ。ベッドサイドに腰かけた彼の前にしゃがみこみ、指でふにふにと刺激してやっても可愛いサイズにしかならない。

恥ずかしいのとプライドが傷つくのとでレンはほとんど喋ろうとしなかったが、

「なあ、フリー。これもうちよつと縮んだらさ……トイレってどうなるんだと思う？」

「急に怖いこと言わないでよ……!？」

男子と女子だと出てくる穴の位置が違うわけだが、果たして徐々に変わっていく場合はどうなるのか。先に穴ができてくれるなら良いが、その場合は両方から出るのか。先に今ある穴が塞がるのだとするとパンクしたりはしないのか。

レベルアップして準備が整うまでパンクしてはヒールでなんとかする生活とか、ホラーとかそういうのさえ超越している。

「大丈夫でしょ、さすがに。たぶん。きつと」

「自信なさそうだな、おい」

レンの方からこんなことを言い出すあたり、やっぱりそろそろ限界である。

全ての計測を終えてメモに記録していると、レンはさつきと服を着直そうと動き始めた。

「ね、待って、レン」

「……なんだよ」

最後の数字が少し走り書きになったものの、構わず彼の身体に腕を回す。筋肉質な感じはなく、むしろ柔らかい。フリーの方も腕が出ている服装なので素肌同士が触れ合って互いの体温が移動を始める。

同時にエナジードレインも始まっている。

肌の接触によるじわじわとした吸収は、意外と吸われる側にとっても気持ちいい。人をダメにする枕とかああいうのはこんな感じなんじゃないか、と思えるような、じわじわと染みこんでくる快感がある。

「フリー。俺、いまあんまり余裕ないんだけど」

「知ってる。っていうか私がやったんだし」

「じゃあエナジードレインのテストは後にしてくれ」

「だーめ」

レンには一定量のドレインが必要、という話になってからスキップは増えたものの、まだ「同じベッドで寝る」ところまでは行っていない。

レンが少しずつ吸収量を増やしていくと言って聞かなかつたからだ。

これまではそれに甘んじていたが、今日は退かない。

「ね、一緒に寝よう？」

抱きついたまま背中側に回り込みつつ、耳元で囁く。

我ながら大胆な行動を同性めいた気安さが助けてくれた。

「それとも、もうそういうの興味ない？」

「……なかったらこんな風に動揺してないっての」

腕を取られて押し倒される。

部屋の鍵かけたつけ。

今さらそんなことを気にしながら、フリーはレンからの口づけに身を任せた。



「レン。ねえ、レン。起きて」

「ん……」

ダンジョンの五階を攻略した翌日、目覚めると気分が妙にすつきりしていた。

快眠できた翌日でもここまで気持ちのいい朝はなかなかないのだが。

なんだか呼ばれたような気がする、と思いながらレンはもぞもぞと身を起こして、

「寝起きで悪いんだけど、お湯作ってくれない？ このまま出てってアイリスちゃんに会ったらすごく恥ずかしいから」

「フリー」

何も身に着けていない少女と目が合ってしまった。

髪の乱れた状態でもやっぱ可愛い……と、ぼんやり思ってから、昨夜の出来事に思考が追いついてびくつとした。

見下ろせば、ベッドもなかなか大変なことになっていた。

後悔はない。というか、思い出しただけでむず痒い喜びが湧き上がってくるのだが、

「……あー。一応、声は抑えたよな？」

「そのつもりだけど、私だって初めてだし、ちゃんとできてたか自信ないよ。っていうかレンが思ったより積極的に来るからつつい声出ちゃって——」

「わかった、俺が悪かった。めっちゃくちや恥ずかしくなってきたから止めてくれ」

あんなことの後だというのにあまりロマンチックな雰囲気にならない。

こんなことなら先に目覚めておくんだった。そうすれば余韻に浸りながらフリーの寝顔を眺められたに違いない。

レンは後悔しつつ「ウォーター」と「ファイア」でボウル一杯のお湯を作った。フリーはそれをタオルに染みこませて身体を拭いていく。

「レンにもやってあげよっか？」

「いや、俺はいいよ」

「いいから。いまさら遠慮する仲でもないでしょ？」

半ば強引に身体を拭われる間もフリーの裸を見放題だった。

つついじつと視線を注いでしまうとにやりと笑って、

「えっち」

「お前に言われたくはない」

昨夜迫ってきたのは彼女の方からである。

するとフリーは意外にも「真っ赤になって」顔をそらした。

「可愛い」

「なっ……!?!? レンが攻めてくるのは反則でしょ!?!?」

「いいだろ、たまには」

「むー」

睨んでくる顔も可愛いと思ってしまうのだからもういろいろと駄目である。

「なあ、フリー。俺と付き合ってくれないか？」

お互いに応急処置を済ませ服を着直しながら尋ねると、意外な返答。

「……んー。そういうのはもつと後にとっておかない？」

「あんなことしたのにか？」

「だって、今じゃないと間に合わなくなりそうだったし」

意味合いはわかる。むしろ切羽詰まっていたのはレンの方だったわけ。

「お前もやつぱり、俺が女になるのは嫌か？」

「別に。それはぜんぜん」

「どっちだよ」

「レンが男の子でも女の子でもどっちでもいいけど、男の子のレンはもうちよつとで終わりでしょ？ だから急いだの」

両方体験できた方がお得、ということらしい。逞しいというかなんというか。とにかくフリーらしいのは間違いない。

「じゃあ今から付き合ってもいいだろ」

「でも、これからどうなるかわからないじゃない。レンが男相手じゃないと駄目ってなるかもしれないし」

「それはないと思うんだが……」

「そう？ 完全にサキュバスになったら嫌でもそうなるかも」

身体の衝動に抗えなくなる未来。女になるのを受け入れたとはいえ、さすがにそれは看過したくない。この家に男を連れ込むわけにもいかないし、女性向けの娼館というのは果たしてあるのか。男に困ってタクマたちを買う、とか想像したくもない。

「エナジードレインは女相手でも大丈夫なんだから大丈夫だって」

「じゃあ、これからは遠慮なく吸ってもらわないとねー」

女相手でも大丈夫だと証明できない限りは付き合ったりとかでき

ないらしい。女の子との関係を進めるために女の子にならないといけないとは。

「私ばかり構ってるとアイリスちゃんが寂しがるから、ちゃんと相手してあげてね?」

「ああ。……いや、アイリスとはこういうことしないぞ?」

「そう? 別に大丈夫そうだけど……あ、でも、ご両親に悪いか。いちやいちやするなら女の子になってからの方がいいかもね」

女子になればいいのか。

「レンは自分の彼女が前に女の子と付き合っていました、ってなったら嫌?」

「……別に女子なら嫌ってほどじゃないな」

なんかそういうことになった。

もちろん、本人の意見を聞いていないので今のは勝手に言っているだけなのだが、

「さ、早くご飯の支度しないと」

「おう。せっかく起きたし今日は手伝うぞ」

「本当? ありがとー」

意気揚々と二人で部屋を出て行ったら、

「あ」

「あ」

「……あの、おはようございます、お二人とも」

微妙に気まずそうな表情のアイリスが朝食の支度を一人で始めていた。

朝起きてもフーリの姿がないため部屋に行ったところで「あ……っ」と気づいたらしい。さもありなん。

とりあえず二人は朝食の後で朝風呂に入った。



「あの、世界の欠片の使い道なんですけど……湖を作るのはどうでしょう?」

夕食の席でアイリスがおずおずと切り出してくる。

マリアベルは娼館に出向いており不在。朝の一件で少々気まずいレンとフリーだが、アイリスが気にしない雰囲気を出してくれているので努めて普通に対応する。

「どうして湖なの？」

「はい。昨日あの店に行った時、店主さんが話していたじゃないですか」

現状、この世界には魚介類があまり出回っていない。

肉は陸地で飼える動物から取れるが、魚や貝は水辺がないと用意できないからだ。そのため、洋食店でも海老の天ぷらや魚のカルパッチョ等のメニューは提供されていない。

水自体はあちこちに作られた井戸や池、川や森の中にある小さな湖などから補給できるし、魔法系のクラスが生み出すこともできるので間に合っているのだが、

「もっと大きな湖を森の奥に作れないかなって」

「なるほどな」

食文化が豊かになるのは重要だ。水の供給も簡単になるし、動物の成長にも役立つかもしれない。

「けっこう欠片も貯まったもんな。何個だっけ？」

「6個に8個に10個で24個。40〜50mくらいだから学校のプールくらいはいけるね」

しかも正方形だから面積としてはたぶん50mプールより広い。

「魚にはちよつと狭いかもだけど、泳ぐのにはちよつと良さそうだな」「そっか、泳げるんだ！ まだ暑いしちよつどいいかも！」

この異世界ではレジャーが限られる。泳げるようになれば夏の遊びが増えそうだ。既に八月に入って秋が近づいてきているのが少し勿体ない。

「どうせなら海水浴にしたいところだけど、さすがに難しいよな」

「はい。海は以前にも作ろうとした方がいたみたいなんですが、あまり近くに作ってしまうと弊害も大きいそうで……」

「あー、それはそうだよ。んー、でもどうせなら海の魚も取れるよう

になればいいのに」

湖で海の魚が取れでもしない限りは難しそうである。

「ん？　なんかあったな、そんなの。海の水が入り込んでくる湖みたいな」

翌日、マリアベルに尋ねてみたところ「汽水湖ですね」と教えてくれた。

「川によって海と繋がっている例もあったはずですから不可能ではないと思いますが、海ほどではないにせよ根気と計画性が必要な作業かと」

そう言われてしまうとレンたちだけで勝手に作るわけにもいかない。

どうせ森の中に作るとしたらアイリスの両親の許可も必要だし……と、先に賢者の見解も聞いてみることに。

すると、結果的にこのプランは難航することになる。

発足、湖作成委員会？

「上手くいくかどうかはわからないが、試してみる分には構わないのではないか？ 森の奥なら迷惑もかからないだろう」

恒例の報告ついでに相談すると、賢者は少し考えたうえでそう答えた。

「川なり水路なりで海と繋げる、というのであれば湖の端から細く伸ばせばいい。海岸線を作るよりはよほど融通がきくだろう」

欠片で拡張される『世界』は基本的に正方形だが、使用時に思い描くことで変型も可能だという。もちろんその場合でも総面積は変わらない。

「川などの細い地形も作れるし、さらに応用すれば縦横ではなく『深さ』を高めることも可能だ」

「あ、もしかして井戸はそうやって掘ったんですか？」

「そうだ。地下には鉱石の採掘場もある。地上に作ると地形が限られてくるからな」

彼の話を聞いてレンたちにもさらに閃くものがあった。

「じゃあさ、地下に湖を作るっていうのはどう？」

「地底湖か。陽光が届かないと通常の海の魚は育たないかもしれん」

「えー。……うーん、難しいなあ」

「無論、この世界では問題ない可能性もあるがな。我らの『祝福』同様、都合の良い作用が働くこともありうる」

とはいえ逆の可能性も考えなければならぬ。

汽水湖プランはひとまず保留ということにして、今度はアイリスの両親のところへ話を持って行った。

「塩分のある湖だと森の動物たちに悪影響が出ないかしら」

「あ、そっか。動物たちの飲み水になるんだもんね」

いつの間にか考えが抜けていたと口を開けるアイリス。父親がこれに頷いて、

「それに、繋げるのであれば海よりも山の方がありがたい。海まで森を伸ばすのも大変だろう？」

「山かー。高いところも涼しいっていうもんね」

「我々としては熊や鹿などの動物が生息してくれないか、という希望が大きい。それからきのこや山菜の類も期待できる」

「熊って美味しいの、お父さん？」

「独特の臭みがあるはずだが、好きな人は好きははずだ。俺も食べたことはない」

そう言われるとちよつと食べてみたい気もする。

今まで山を作らなかつたのは地形的な事情のほか、大型動物を狩る人手がいる……というのもあるらしく、軽々しく作るとは言えないものの、

「レンさん、フリーさん。今回は普通に湖を作りませんか？」

「賛成。泳ぐだけならそれで十分だよね」

夫妻も「普通の湖ならば」と欠片の使用を快諾してくれた。その上で良さそうな場所へと案内してくれる。

「森や湖のような地形を作る際は『地形を終わらせない』のがコツです」

と、アイリスの母。相変わらず娘と姉妹にしか見えない若さと美貌である。

「そうしておけば後から広げたい時に便利でしょう？」

「それって端っこから水が流れちやったりしないんですか？」

「大丈夫です。あの闇は虚無ではなく壁のようなものらしいですね」

それならば問題ない。となると後は広げる世界のイメージをきちんと思い描けるかどうかだ。

「アイリス。頭の中でイメージしようとせず、道具の助けを借りてもいいのよ。たとえば、作りたい湖の絵を描くのはどうかしら？」

「あつ、そっか」

というわけで、一度紙と筆記用具を用意して湖予定地へと取って返し、ああでもないこうでもない筆を走らせることになった。

レンとフリーも面白そうだからとアイリスの絵を眺めたり、彼女の相談に乗ったりする。

「アイリス、絵上手いんだな」

「あつ……その、ありがとうございます。昔から森の風景や動物たちを描くことがあったので」

そのせいか、少女の絵は写実的でタッチが丁寧だった。

ただ、今までは「そこにあるもの」を描いていたのでイメージ図の作成はなかなか難航。

結局、その日のうちには完成せず、ゆつくりと絵を完成させたうえで湖の作成に臨むことになった。

「焦らなくていいよ、アイリスちゃん。今すぐ欠片を使わなくてもいいんだし」

「そうだな。先に攻略を進めてもっと広い湖が作れるようにしてもいい」

「でも、それだと夏が終わっちゃういませんか？」

「すぐに涼しくなるわけじゃないし、それはそれで泳ぐから大丈夫だよ」

前に水浴びや水風呂を試したこともある。その時も水の冷たさを感じたものの、翌日風邪を引いたりはしなかった。『祝福』によって身体が強くなっているお陰だ。

「とりあえず川魚で満足するけど、いつかは海老とか貝も食べたいよね」

「俺たちの欠片も貯めていかないとな」

これには少し不安そうだったアイリスも笑顔になって、

「じゃあ、八階を早く攻略しましょうー！」

「うん。でもまずは六階からね」

「そうでした」

小さく舌を出した後輩はいつの間にかいつもの調子に戻っていた。



ダンジョンの質が変わった。

六階に足を踏み入れた瞬間、アイリスはそれを肌で感じた。

壁や床、天井の材質も素っ気ない白い石からやや深みのある色合いへと変わっている。それが空気にも影響しているのかもしれない。

「……よしっ。行こっか！」

先頭に立ったフリーが気合いを入れるように拳を握って宣言する。踏み出した少女の右手はナイフの鞘ではなく盗賊の七つ道具シーフズツールの傍に置かれている。ということは、最初の障害は敵ではなく罠。

片手に松明、片手にマリアベルの手を握ったレンがアイリスの隣に立って、

「さすがに気合い入ってるな」

「危険な罠があるんですね？」

「ここまでに比べると、な」

五階までの罠は壁や宝箱から飛び出る矢が中心だった。見分け方は単純で「穴」に注意すればいい。階が進むにつれて穴が小さくなったりカモフラージュされたりはするものの対処方法に大差はない。穴を埋めてしまおうか射線上に立たなければいいのだ。

ここまでのフリーの作業を見ていたので、五階までの罠ならアイリスでもある程度対処できる気がするのだが。

「つと、ここだ」

少女の靴音が止まったのはアイリスが何も発見できていない地点だった。

右側の壁に寄ったフリーは小さく千切った粘土を取り出す。その手が向かった先を注視すると、そこには縫い針ほどの大きさの穴が。

レンが松明をかざすと粘土が硬くなつて罠をしっかりと封じる。「ちなみにこれがスイッチ」と何の変哲もなく見える床の一点が踏まれ、カチツと小さな音。当然、針は飛び出して来ないが、

「ちくつとするだけだと思って油断してるとしばらくして痺れてくるんだよね」

ナイフを握るくらいならなんとかなるものの力は入らなくなるし、飛び道具だと命中させるのさえ難しくなるという。

「ほらここ、よく見ると線が入ってるでしょ？」

確かにスイッチの部分には薄いラインが見えるが——二種類の明

かりがあるとはいえ、こんなものを逃さず見分けないといけないとは。

「私、サブの盗賊シールフをする自信、なくなってきました」

「大丈夫ですよ、アイリスさん。罫の見分けは知識と経験の蓄積ですから。この程度、今となつては私でも見分けられます」

と、これは最後尾を歩くマリアベル。

娼館では経理や庶務、クラス的な役割は前衛である彼女は盗賊には向いていない。

「私だつて攻略本がなかったら見落とすかもしれないしねー」

「本当、攻略本がなかった頃は命がけだよなこれ……」

ため息をついたレンが「防御力上げる魔法も欲しいよなあ」と呟く。彼はこうやってみんなのことを考えてくれる。ちゃんと決めたわけではないものの、実質、パーティーのリーダー役でもある。

先日、彼はフリーりと深い間柄になつたらしい。

その夜はぐっすり寝てしまったのでアイリスは声も音も聞かなかった。フリーりが部屋にいなかったのと、レンの部屋から二人で出てきたのを見ただけなのだが、後でフリーりに尋ねると少し恥ずかしそうに「……うん」と頷いてくれた。

『でも、付き合つてるわけじゃないから安心してね』

アイリスだつて何も知らないわけではない。母から最低限の教育は受けているし、両親がこつそりとした行動からおおよそどういふものかは把握している。

ただ、そういうことは結婚あるいは交際している男女がするべきだと思つていた。

だから、付き合つていないのにそういう関係になるといふのはむしろ「大人だ」と思つてしまう。

安心して、というのがアイリスに気を遣つてくれているのもわかるのだが、少女にはとてもフリーりの真似はできそうにない。

レンのことが好きか嫌いかで言えば好きだ。

たぶん、特別な人として好きなのだと思う。マリアベルと手を繋いでいたりフリーりと仲良くしていると、妹たちを感じたことのある「お

父さんたちを取らないで」に近い、けれど少し違う嫉妬の感情を憶えてしまうことがある。

レンたちがいつも通りにしてくれている——もともと距離が近かっただけかもしれないが——お陰でこうして普通にいられるけれど、

「レンさんって、なんだかお兄ちゃんみたいですよね」

ぽつりと呟くと、松明の明かりが小さく揺れた。

「どうしたんだ、急に」

「え、あの。……お姉ちゃんの方が良かったですか？」

「いや、そこはお兄ちゃんがいい」

ぶつきらぼうにしつつも少し嬉しそうなのが「可愛い」と思う。

「ただ、頼りになるなあ、って思っただけです」

「っ。止めてくれ。めちやくちや恥ずかしくなる」

肌が白いので顔が赤くなるととてもわかりやすい。こうやって素直な反応をしてくれるのも女性から好感を持たれる理由なのではないだろうか。

フリーりからも言われているし、レンとこうやって仲良くするのは問題ないはず。

と、前の方から小さな咳払いがあつて、

「そろそろ敵だよ。気をつけて」

「あ、はいっ！」

前方に小部屋。扉はなく、松明と魔法の明かりが部屋の中を照らしたかと思うと、待ち構えていたアーチャー二体が矢を射かけてくる。

フリーりはこれをしゃがんで回避。片方の矢をアイリスがかわし、もう一方はレンから手を離れたマリABELが片手で握りつぶした。

「この、お返しだ！」

二十本（適度に本数を減らしてMPを節約）の魔法の矢が敵に向かって降り注ぎ、アイリスの矢がそれを追いかけるようにして敵の腕へと突き刺さる。

「アーチャーは近づいちゃえば弱いんだよね、っと！」

すかさず接近したフリーりのナイフが二体の首を次々に切り裂き、形

勢は完全に決した。

戦闘終了。

終わってみれば完勝だったものの、先制攻撃を受けた時はひやりとした。

「やっぱり飛び道具は怖いですね」

「ね。アイリスちゃんがいてくれて本当に良かった」

レンがお兄ちゃんならフリーはお姉ちゃんである。こうして優しく声をかけてくれる彼女のことアイリスは大好きである。

まだ出会ってからあまり経っていないのに、このパーティで冒険するのが日常のようになっていく。

本当にこの人たちと出会えてよかった。

同時に、さっきのフリーの活躍ぶりを見て「私は近づかれてもナイフを抜けるようにしておこう」とも思う。

「あ、宝箱だ。これも罫があるかもしれないんだよねー」

「本当に難易度上がってるよな」

「この階のボスはゴブリンシューターです。まだまだ敵は強くなりますよ」

今度はクロスボウ持ちのゴブリンが増えるらしい。

機械式の弓は普通の弓に比べて威力が高い。人の筋力で引くより強い力を出せるのだからそれはどうしようもないことだ。

アイリスもそちらの使用を検討したことはあるものの、

「クロスボウは再装填に時間がかかります。一発目をなんとかしてしまえばあまり怖くないはずです……!」

「さすがアイリス。弓使いの気持ちはよくわかってるな」

「はい、任せてくださいっ」

もつと彼らと一緒に冒険がしたい。

もつと役に立ちたい。

両親を日本に帰りたいのとは別に、アイリスの中にはそういう気持ちもある。どちらも嘘偽りのない本当の気持ちだ。

六階の攻略にかかった日数も一週間。

湖の構想はなかなか完成しなかったので、アイリスは七階の攻略が

始まって森に通い、絵の製作に勤しむことになった。

その甲斐あってか、レンやフリーはもちろん、マリアベルや賢者が見ても「これは」というデザインが完成した。人工物っぽくならないように細部まで苦心した自信作である。

七階までの欠片を全て使うと五十個分——直径80〜90m程度を広げることができる。

自分の頑張りでみんなの暮らしが楽になるかもしれない。そう思うと、ダンジョン攻略に近づくのとはまた別の喜びも生まれる。

「頑張ったな、アイリス」

「お祝いに何か欲しいものとかない？　高いものは私たちにも買えないけど」

だから、少しだけ勇気を出しておねだりしてみることにした。

レンの服を小さくつまんで、

「じゃあ、あの、レンさんと一緒に寝たいです」

「え」

彼の顔がものすごく真っ赤になったので「変な意味じゃなくて！」と慌てて補足した。

男子禁制・水遊び会

なんだか布団が柔らかいな、と思った。
ついでに温かい。いつもこうだといいいのに、と思いながら目を開くと、すぐ近くにアイリスの寝顔があった。

「っ!？」

声を上げそうになりつつも必死に堪える。

寝ている後輩を起こしてしまうのは可哀想だ。……と、その配慮ができたのは良かったのだが、問題はその後輩をレンが思いっきり抱きしめていることだ。

昨夜はアイリスと一緒に寝た。

文字通り同じベッドで寝ただけである。女の子と一緒にというのは落ち着かないかと思っただが、案外、他愛のない会話を繰り返しているうちにお互い眠りに落ちていた。

大型犬を隣にしているような安心感、といったところだろうか。

ただ、寝た時点ではちゃんと布団を抱きしめていた。

見ればその布団は床に落ちており、二人とも人肌を頼りに暖を取っているような有様である。

「アウトじゃないか、これ」

一緒に寝るだけならともかく身体を押し付け合うのはよくない。

今のうちに離れてなかったことにするべきか……と思ったところで少女が「ん……」とゆっくり目を開いた。

ぼんやりした表情のままレンを見つめて、

「おはようございます、レンさん」

無防備な笑顔。

あまりの愛らしさに頭を撫でてやりたくなる。

「おはようアイリス。悪いな、苦しくなかったか？」

下敷きになっていた腕を引きぬきながら尋ねると、少女は少し考えるようにしてから「いいえ」と首を振った。

「とても気持ち良かったです。……小さい頃を思い出しました」

「お父さんと一緒に寝ていた頃のこと？」

「いえ、お母さんと」

そこはお父さんと言つて欲しかった。

「起きるか。……何時だかわからないってこういう時に不便だよな」

「大丈夫です。日の高さを見ればだいたいわかります」

生まれた時から時計のない生活をしているとそうなるのか。ひよつとして、文明の利器に頼らない人間の方が生物としてのスペックは高いのではないか。

ともあれ、レンは床へ下りると身体と翼をぐつと伸ばして、

「今日はいよいよ湖の解禁日だもんな」

「はいっ」

朝食を済ませたらさっそく出発しなければならない。



「わあ……！　すごいすごい！　本当の湖みたい！」

「うん、お姉ちゃんすごい！」

「ええ、これは美しいです。ありがとうございます、アイリス。よく頑張りました」

「綺麗……。水も光をきらきら反射してる」

「こんなところで泳げるなんて楽しそう！　今年は泳ぎに行けなかったし！」

欠片による世界の創造は、行ってしまえばあっという間だった。

手持ちの欠片五十個を入れた小袋と自分の絵を手念じるアイリス。直後、光と共に欠片が闇へと吸い込まれていき、絵の通り——念じた通りの地形が徐々に形作られていく。

曲線を描きながら広がる澄んだ湖と丈の低い草地。

草食動物の餌場としても森の水場としても大きな役割を果たすだろうし、泳ぐのに十分な広さがある。

これに歓声を上げたのはフリーにアイリスの妹、母親、それからレンたちと一緒に転移してきた元クラスメートの女子たちだ。

湖の完成式に集まった面々である。

マリアベルと娼館の娼婦たちもレンの傍らで微笑んでいる。

「良い場所ができましたね」

「本当。一番に使えるなんて得しちゃった。ありがとね、レンちゃん」
「いえ、そんな。むしろ皆さんには迷惑をかけてしまったので」

タクマたちの件について、もちろんあのあとお礼は言った。ただ物理的なお詫びはできていなかったものでこれくらいは当然だ。

頑張ったのはアイリスなのであまり偉そうなことも言えない。

「せっかく男子禁制なんだから楽しもうね、レンちゃん」

「いえ、それなら俺がいるのはおかしいんですけど」

「大丈夫。レンちゃんなら誰も気にしないから」

逃がさないとばかりに腕を片方抱きしめられてしまう。

彼女の言う通り、この場にいるのは（レンを除いて）女子ばかりだ。アイリスの父を含む男子は一人もない。

タクマたちも留守番で、娼婦が出払う代わりにと街から呼ばれた用心棒に大掃除をさせられているらしい。

どうしてここまで徹底したのかと言えば答えは簡単で、

「さ、アイリスちゃん？ さっそく泳ごっか！」

「はいっ！ フーリさん、泳ぎ方教えてくださいね？」

「もちろん！」

湖の傍に立ったフーリとアイリスが服に手をかけ下着姿になる。

黒と白の布地を身に纏った少女たちは片や楽しそうに、片や少し恥ずかしそうに水へと足をつけていく。

「わ、冷たい！」

「いいなあ。ね、フーリ、私たちも入っていい？」

「うん！ ほら、みんなも泳ごっか？」

他の少女たちも次々と服を脱いで下着だけの姿で湖に駆けていく。

「……いやまあ、今回のためだけに水着を作るのは金がかかりますよね」

思わず遠い目をしてしまう。

女子相手でも少しは落ち着いて対応できるようになってきたと自負しているが、さすがにこの人数、かつパーティーメンバーでもなんで

もない相手の下着姿まで含まれているとどうしていいのかわからない。

「というかアイリスの母まで水遊びに参加しているのだが……こうして高校生に交じっても「ちよつと年上」程度にしか見えない。

誰もレンのことなんて気にしていないし、なんならフリーやアイリスが「早く早く」とばかりに手を振ってくる始末。

くすりと笑ったマリABELがもう一方の腕を取って、

「私たちも参りましょうか、レンさん？」

耳元をくすぐる吐息に少しぞくつとしてしまう。

「マリAさん、また俺をからかっているでしょう？」

「申し訳ありません、つい。若い方の反応を見ると初々しくて可愛らしいな、と」

「いや、まあ、男扱いされるのは諦めましたけど……」

「じゃあいいじゃない、ほらほら」

年上の女性二人に急かされるようにして服を脱ぐ。

現れたのは黒いブラとショーツである。女子の中でボクサーパンツはNG、ということ以身に着けさせられたものだ。

キャミソールでも経験した通り、女子用の衣装というのは肌触りが良く、この下着も穿いていて心地いい。

ただ、

「めちやくちや恥ずかしいですよ、これ？」

「そっかー。レンちゃん分だけ水着にすれば良かったかな」

「いや、ぶつちやけ水着と下着って素材が違うだけですよね？」

ものによつては境界線も曖昧なわけで。

ラベルの差だけで人前に出られるか出られないかわ変わるというのはエロ——もとい、ちよつと理不尽だと前々から思っていた。

するとマリABELは首を傾げて、

「では、レンさんは同性から同じように『格好いい』と褒められたとして、下着と水着で同じ反応ができますか？」

「いや、下着褒められたらちよつと気持ち悪いです」

なるほど、気の持ちようは偉大らしい。

「そうですね。せっかく来たんですし、少しくらい泳いで帰ります」
「そうそう。ぶっちゃけその格好でも可愛い女の子にしか見えないしね」

「レベルもだいぶ上がりましたからね」

寝ている間にエナジードレインした分が、今朝ステータスを確認したらまたレベルが上がっていた。その結果、女性化はさらに進んでおり、なんとというかフリーに押し倒されたタイミングはぴったりだったかもしれないと思う。

「実は今朝起きてからトイレに行きたくならないんですよ」

感覚がおかしくなっているだけかと思っただけかと思っただけのためにチャレンジしてみたものの、何も出て来なかった。

娼婦のお姉さんが目を瞬いて、

「サキユバスってトイレ行かなくていいの？ なにそれずるい」

「吸精によって生きる種族なのですから、エネルギーの分解の仕方が我々とは異なるのかもしれませんが。栄養を百パーセント取り込めるのだとすると排泄の必要はないわけで、人間よりもよほど清潔な生き物なのかもしれません」

「まあ、少なくともこのままなら破裂する心配はなさそうなので助かりました」

言いつつ、お姉さんがたと一緒に水辺まで歩いて、

「あ、やっと来た。藤咲くん……藤咲くんって呼ぶのなんか違和感あるよね？」

「レンちゃんでもいいんじゃない？ 可愛いし」

「だね。レンちゃん、ほら、一緒に泳ぐ？」

「うわ、ちよつと……!?!」

元クラスメートたちにもみくちやにされた。

翼と尻尾があるせいかな今までと同じように泳ぐことができず、練習が必要そうだったのもあって女子の輪から逃げる事ができず、水をかけてくる少女たちに反撃していると、

「楽しそうだねー、レン？」

「わ、フリー!?!」

「私もいますよー！」

「レンお姉さん、私たちも交せてくださいー！」

フリーにアイリス、アイリスの妹たちまで寄って来てしまった。濡れた下着は肌に張り付いていて、裸とあまり変わらない。

「固まったら泳ぎづらいだろ」

「いいのいいの、水で遊ぶのも楽しいし」

「そうですー！」

今日くらいは羽を伸ばしても問題ない、とばかりに、この日は昼食休憩を挟んで日が暮れかけるまで、女子だけの憩いのひとときが続いたのだった。



八階のボス部屋。

レンたちとしても初めて訪れるその場所に現れたのは六体ものゴブリンだった。

ソルジャーが三体、前衛を固め、アーチャー二体に守られるようにして立つのは杖を持ちローブを纏ったゴブリン。

ゴブリンメイジは戦闘が開始するとすぐに呪文らしき奇声を上げながら杖に炎を宿してくる。

これは、さすがにきつい。

思いながら、レンは四十本が最大となった「マジックアロー」を生み出す。

魔法の矢と入れ替わるようにして飛んでくる二本の矢と炎の塊。

「ファイアボルトー！」

レンの掲げる松明から飛んだ炎がひとつ、相手の炎とぶつかって相殺。もうひとつが向かった先でメイジが慌てたように飛びのいた。

「ナイス、アイリスちゃんー！」

精霊魔法の対象拡大はまだ弓を放ちながらだと上手くいかないらしいが、相手の魔法を防いだうえに牽制にもなったのなら大戦果だ。

敵の矢の一本はフリーがナイフで叩き落とし、もう一本は——レン

の肩に突き刺さった。

「レンさん!？」

「大丈夫。これくらい大した怪我じゃない。それより攻撃してくれ！」

「っ、はいっ！」

レンの魔法もいくらかがソルジャーの盾に防がれている。敵の前衛が全てフリーに殺到したら一気に瓦解してしまう。

「マジックアロー！」

「ファイアボルト！」

肩の痛みに構わず再度、全力の魔法行使。アイリスもまた二発のファイアボルトを連発して、ボスであるメイジが一番最初に沈んだ。

代償は、ダメージを受けながらも生き残ったソルジャーの接近。

「うわ、こいつら急所狙いにくいから嫌い……っ！」

うめいたフリーはちらり、とレンに視線を送ると、意を決したように一体の懐へと飛び込んでいく。

「——マジックシエル！」

敵の攻撃は張り巡らされた光の防壁が弾いた。効果時間は0.5秒程度。MP消費も馬鹿にならないものの、防御効果はかなり高い。そして一撃ぶんの時間さえ稼げば、フリーのナイフで心臓を一突きだ。

これで、三対四。

後ろにいるマリアベルも「まだ大丈夫」と判断しているようで動いていない。アーチャーの矢が向かった時に防御するだけだ（と言っても、それだけで十分助かっている）。

残るアーチャー二体をアイリスが魔法で食い止めているうちに、

「マナボルト！」

側面を向けたソルジャーを狙い撃ち。

後はもう、敵が全滅するまでさほど時間はかからなかった。こちらがまともに受けた攻撃はレンの肩に刺さった矢一本だけ。

フリーやアイリスも敵の攻撃で小さな切り傷を作っただけだ。

「よし、なんとかあったな。じゃあアイリスから治療するぞ」

「馬鹿言っていないで自分の傷を治しなさい」

「痛っ!？」

フリーに頭を叩かれた。仕方なく自分に「ヒール」を施しながら、女の子の肌に傷が残ったら大変だろ」

「じゃあレンだって気をつけなきゃだめでしょ」

「男からの評価が下がるなら俺はむしろ好都合だし」

「私も困るからだめ」

ちなみに三人の傷は全て跡形もなく消えた。こういうところは魔法さまさまである。もしレンの魔法で完治しなくても高レベルの治療魔法を誰かに頼めばなんとかなる。治してもらう前に死んでしまうような怪我さえしなけばいいのだ。

そして。

「記録更新、だな」

「うん。ほら見て。かけらがいっぱい!」

アイリスの分が十六個。レンとフリーの分で同じく十六個。いきなり前の階の倍以上の数である。

「これだけあつたら湖を広げられるな」

「え、もう新しい絵が必要なんですか!？」

「あはは、大丈夫だよ、アイリスちゃん。別にすぐ使わなくてもいいんだし。ゆっくり描けば」

「いつそ完成図を描き始めてもいいかもな。湖を作り終わったら山への道でも作るか」

「そうだね。あー、でも、海にたどり着けるのはいつだろう」

階が進むごとに欠片の数が増えるのだからいつかは行けるはずだ。……なんて言っているうちに最下層まで下りてしまうかもしれないが。

もしそうになったらそうなったで日本に帰って心置きなく海水浴ができるかもしれない。

「さ、石碑を書き写したら帰って打ち上げしよっか」

「おう。あの店に週一で行けるのもいつまでかわからないしな。今のうちに食べておかないと」

長いと思っていた十階までの道のりもあと少しだ。

第一目標間近

気づくと暦の上では十月に入り、気候もぐっと秋らしくなった。

栗や秋刀魚の美味しい季節だが、どちらも今の異世界では手に入りづらい。芋にしてもサツマイモよりジャガイモ優先ということ、なかなか高価な品を一人一本分ずつ買い求めて焼き芋にして食べた。

高校生になってから約半年。

半分以上は机に向かって勉強するのではなく異世界で四苦八苦ししていたことになる。数か月かけてまだ十階すら攻略できていないあたり「三十年もののダンジョン」はやはり恐ろしい。

「九階のボスだけど、ここでもまた厄介な相手が出てくるらしい。……ゴブリンヒーラー。回復役だ」

「構成はソルジャー三体にシューターが二体、メイジが一体とボスのヒーラー。一番奥のヒーラーが前のソルジャーをばんばん回復させるから、さっさと終わらせないと戦いが長引くんだって」

九階ボス部屋前で作戦会議。

レンたちの戦い方だところこのボスとは相性が悪い。レンにもアイリスにも一撃必殺の攻撃力がないうえ、フリーの攻撃も急所を狙う必要があるからだ。

まともな前衛がいればもっと楽ができるのだが。

タクマたちは性格は悪かったが実力と度胸だけは大したものだった。特にタクマは防衛も考えずに突撃してはゴブリンを一撃で叩き潰すのを繰り返しており、その攻撃力が「一か月で八階まで攻略」というスピードに繋がっていた。当時の攻略実績はクラス内で一番だったはずである。

まあ、ないものねだりをして仕方がない。

事前情報があるだけでも儲けものだ。自分たちにできる中で最善を探すしかない。できればリアベルの手を借りずに、だ。

「とにかくヒーラーを早く潰すことだな」

「私とレンさんで集中攻撃しますか？」

「ちよっと厳しいんじゃない？ ソルジャーが守ろうとするだろう

し、後衛もいっぱいいるからなかなか当たらないよ」

レンが飛べればもうちよつとマシだっただろうが、今の翼ではまだ無理だ。

「じゃあ、直接フリーに刺してもらうしかないな」

「心臓狙えば一撃でいけるだろうけど、そこまで行く前に私死んじやうんじゃない？」

「敵の注意を俺たちで惹けばいい」

かなりリスキーな作戦ではあるものの、回復を受けた前衛に殺到されたらどのみち無理だ。やってみる価値はあると判断。

「マリアさん、無理だったら助けてもらってもいいですか？」

「かしこまりました。タイミングを見て助け舟を出すようにいたします」

「ありがとうございます」

鍵開け、罫確認済みの扉を「せーのっ！」で開け、勢いよく飛び込む。

「マジックアロー！」

「ファイアボルト！」

四十本の魔法の矢に炎の弾と実体のある矢。今回は拡大精霊魔法ではなく弓矢との併用を選んだ。

開幕から降り注いだ攻撃に敵たちはいったん防御姿勢。それが終わるか終わらないかのタイミングで後衛が飛び道具の準備を始め――

レンは彼らの目を順に見つめながら「魅了の魔眼」を発動させた。

どうやら敵は全部オスだったらしい。彼らの視線がレンへと釘付けになる。残念なことに「なんでもいうことを聞きます」という態勢ではなく「イイオンナ、テニイレル」とばかりにギラギラ視線が送られてくる感じだが、注意を惹ければそれでいい。

レンはさらにマジックアローを放ちながら「マジックシエル」で敵の攻撃を防御。防ぎ切れない分はかわすか、喰らった上で「ヒール」を用いる。

アイリスはその間も攻撃を続けてソルジャーを休ませない。

「うお、やばいなこれ……!?!」

シューター×2+メイジがレンに集中攻撃、ソルジャーはアイリスをターゲットに定めてそちらに殺到。

アイリスも逃げ回りながら攻撃を続けているものの長くはもちそうにない。

自分への攻撃をなんとかやり過ぎつつ、後ろを向いたソルジャーの一体に「マナボルト」を叩き込む。もろに喰らったソルジャーは重症——と思ったところにヒーラーの回復魔法が飛ぶ。

「あと少しだったのに!」

「やっぱり先に倒さないと駄目だね、これ」

聞こえたフリーの声は敵陣の奥から。

驚き振り返るヒーラーだが、もう遅い。ローブの上から突き刺さったナイフが心臓を抉り、ボスのHPを一撃で削り取った。

ゲームと違い、種族ごとの生命力はだいたい決まっている。お陰でちゃんと狙えばこの通りだ。

真つ先に消滅したボス、至近に現れた(単にこっさり回り込んだだけだが)敵に慌てふためく敵後衛。だが、慌ててフリーの方を振り向いてしまえばむしろ隙だらけ。

「後ろを向いていいのかよ!」

今度のマジックアローを守ってくれる前衛はいない。フリーは身を屈め、ゴブリンの陰に隠れることで光の矢をやりすぎし、矢の雨が止んだ途端に舞うようにして敵の頸動脈を切り裂いていく。

「レンさん、フリーさん! 助けてください!」

「うわ、やば。もうちよつと待ってアイリスちゃん!」

後衛を壊滅させる間にアイリスがピンチだ。愛用の弓を放り出し、ナイフを引きぬいて三体のソルジャーを相手にしている。ナイフだけでなく敵を蹴っ飛ばしたり殴り飛ばしたりしてようやくなんとかなっている状況。

急いでレンが放ったマナボルトで今度こそ一体が消滅、駆け寄ったフリーがさくつともう一体を倒して、

「これで終わりです!」

アイリスのナイフが敵の額へと叩き込まれた時には、思わず安堵の息が漏れた。

「負けかけた、と言っている。」

誰も重傷を負ってはいない。しかし、そんな事態になったらむしろ負けなのだ。死んだ人間を蘇生する魔法はまだ見つからない。

ゲームと違ってやり直しは効かないのだから。

「十階に挑戦する前にレベル上げをするか」

全員の傷を癒しながらレンは呟いた。

フリーも若干浮かない顔をしつつ「そうだね」と頷く。

「週一の縛りはさっそく崩れちゃうけど、今の私たちだと十階のボスには勝てないと思う」

「……そんなに大変なんですね、十階は」

「ゴブリンの親玉が出てくるからね」

十階のボスは「ゴブリンキング」だ。

味方のゴブリンを強化する能力を持っているうえ、取り巻きとして全種類のゴブリンを一匹ずつ連れている。盾と鎧、剣で武装を固めるため倒すのも容易ではなく、正攻法で上回ることを余儀なくされる。

唯一なんの傷も負っていないマリABELが頷いて、

「皆さんにとってはむしろ十一階以降よりも高難易度かもしれないですね。十一階からは個の能力が上がる代わりに個体数が減りますから」
「ここが正念場ってわけか。せめて俺とアイリスの攻撃で一体ずつ倒せるようになればだいぶ違うだろうな」

後回しにしてきた火力強化が必要かもしれない。

次の探索は十階の攻略ではなく、攻略済みの階層を巡って経験値を稼ぐという方針で一致した。攻略を急ぎたいアイリスもこれに同意してくれる。

あと一レベルか二レベル、レンとフリーが上げられれば戦力はかなりアップするはずだ。

「では、レンさん。私とも一緒に寝てくださいますか？」

「え」

マリABELからの何気ない、しかし重大な提案にレンはすぐには返

事ができなかつた。



「こうして二人きりになるのは初めてかもしませんね」

高校生だったレンとはまったく違う大人の女性——マリアベルが部屋にやってきたのはその日の夜のことだった。

適度に酒を飲んで身体が火照った状態のレンは己の欲望を抑えきれず、ついつい相手の身体に目をやってしまう。フリーやアイリスとはまた違った魅力に思わず息を呑んだ。

微笑んだ彼女は自然な動作でレンの隣、ベッドの上へ腰を下ろすと「もう少し飲みませんか?」と、手にしたワインボトルとグラスを示してくる。

誘われるままにグラスを手にし、軽く打ち合わせて乾杯。

意外にもワインは作られたばかりの若いものだった。若いレンにはこういう酒の方がわかりやすい。半分ほどをついつい一気に飲んでしまうと「ペースを速めると酔いが回るのも早いですよ」と言われた。

「男に酔わされたことかあるんですか?」

セクハラめいた問いにもマリアベルは動じなかつた。

優しい顔立ちに微笑を浮かべたまま「そうですね」と呟き、手にしたグラスを小さく揺らして、

「男性と交流していると『酔いをコントロールしなければならぬ』シチュエーションというのはどうしてもあります。心から『そうなるのも良い』と思える男性以外は警戒しておかなければ食い物にされるだけですから」

「……なんかこう、男が本当すみません」

男からしたら「魅力的な異性と関係を持ちたい」というのは自然な欲求なのだが、女からしたら鬱陶しい時もあるだろう。この世界ならレベル差によってある程度なんとかなるとはいえ、酔い過ぎて前後不覚になっていればそれもできない。

好きなだけ酒を飲むこともできないとは不便なものである。

マリアベルはくすりと笑って、

「レンさんも気をつけてくださいいね。旧知の男性だからと言って気を抜いてはいけません。男は皆、一皮剥ければ獣なのですから」

「十分わかっているつもりですけど……」

「そうでしょうか？ その矛先を向けられた経験はないでしょう？」「確かに」

向こうも意外と酔っているらしい。齒に衣着せない話がこそばゆくも有難い。女になってからの身の振り方についてはレンとしてももう他人事ではないのだ。

「トイレに行く必要がなくなってから、レベルが上がらなくても身体が変わってるっぽいんです」

「完全に女性——サキュバスになりつつある、と？」

「はい。ふとした時にむずむずすることがあって、ああ、今も作り替わっているんだな、って」

フリーリの一件を最後に男性的な機能も役目を終えている。

「そういう意味ではマリアさんやアイリスももう安心かもしれないかもしれません」

「相手が男性であれ女性であれ、襲われる時は襲われるのですけどね」
どちらかというところ女性の方が好きだというマリアベル。このシチュエーションは「狙われている」のだと考えるべきなのだろうが、不思議と危機感はない。男としては「美人に襲われる」なんて夢のような話なのである意味当然ではあるが。

せつかくだから少し話を聞いてみようかと、レンは尋ねた。

「マリアさんは、好きな人とかいないんですか？」

「ここ数年は恋人と呼べる相手はいませんね。強いて言えば、レンさんのことが気になっています」

悪戯っぽい笑みが返ってきた。

「ですが、そういうことが聞きたいのではありませんよね？ ……そうですね。私にはここに来る前、恋人がいました」

「女の子、ですか？」

「ええ。中学時代の同級生です。高校は違いましたので、一緒に来られませんでした」

「そうか、と思った。」

異世界召喚によって恋人と引き離されてしまったケースもあるのだ。

だとしたら、マリABELも帰ろうと必死に努力したはずだ。

今さら帰っても恋人とはよりを戻せない、と、諦めたのはどれくらい経ってからだったのだろう。

「彼女はきつと今頃、幸せになっているでしょう。もしかしたら結婚して子供がいるかもしれませんが」

レンには具体的な想像はできない。

ただ、自分とフリーに置き換えてみるだけでもかなり胸が痛んだ。

「可能であれば帰りたい、と以前お答えしたのはそういう意味です。

……今更帰っても昔には戻れない。それでも、あの子の顔をもう一度見たい」

あるいは、マリABELはこつちの世界にいた方が幸せかもしれない。日本ではまだ同性婚が認められていない。しかし、この世界なら女性同士で添い遂げることも難しくはない。

賢者は「子供を残さないなど重大な損失だ」とかなんとか言うだろうが、あの男の言い分なんて無視しておけばいいのだ。

ただ、帰りたいと願わなければダンジョンに潜る必要はない。

戦う者を応援するためにも帰りたい気持ちを繋ぎとめているのかもしれない。

「そうですね。……帰りたいですね、いつか」

レンはグラスを握る手に軽く力を籠めた。

残っていたワインを一気にあおる。既にある程度酔っていたため、けつこう身体がふらふらしてきた。良い感じに体温も上がっていて気持ちいい。

マリABELは優しく微笑みながらレンのグラスを取り上げ、近くのテーブルへと置いた。中身の半分程残ったワインのボトルも一緒にだ。

二人で寝るとベッドが軽く軋んだ音を立てる。

頬を優しく、甘く撫でられたレンはあまりの心地良さに変な声を上げそうになった。

「せっかくですから、少し撫でまわさせてくださいね？ レンさんの肌は滑らかで心地良いのです」

「お手柔らかに。……っていうか、マリアさんだって綺麗じゃないですか」

「ありがとうございます。では、レンさんもどうぞお好きなように」

二人は眠りに落ちるまで、しばらくこの不思議なスキンシップを続けた。

その甲斐あってか、起きた時には経験値がけっこう溜まっていた。

サキユバスになつたら仲間と居場所ができました

「うん、すつごく似合ってる。可愛い!」

「はい! 素敵です、レンさん!」

膝丈のシンプルな黒スカートに紺のニーハイソックス。長袖の白ブラウスに細いリボンを合わせた制服風コーデを少女たちに絶賛される。

鏡の前に立たされたレンは異国の女子高生のような自身の姿に思わず見惚れ、それからその可愛いが故の無防備さに苦笑した。

「やっぱり、スカートつめてめちゃくちゃ心細いんだな」

本格的に女子っぽい服へ身を包むのはこれが初めてである。

服を選んでくれたのは他でもない、フリーとアイリスの二人。どうせなら、とか言いながら制服っぽいチョイスになったのはおそらく悪ノリだ。

ちなみに下着の方もきっちりブラとショーツである。

パンツルックが当たり前だった身としてはなんとも落ち着かない。

「ふふっ。すぐに慣れますよ。今日はダンジョンへは行きませんが、お洒落をしても問題ありませんし」

少し離れて様子を見守るマリアベルもどこか楽しげだ。

「男装には男装の良さがありますが、やはり女性の可愛らしさを引き立てるには女性用の服を着るのが一番です」

「確かに、体型には合ってますね」

答えて胸に手を置く。ブラの影響もあるとはいえ、はつきりと膨らみが存在している。

反対に下腹部はすつきりとなだらかになり、代わりにヒップサイズが上がった。身体にぴったりフィットするショーツの感触は思った以上に心地いい。

少女二人がちよん、と左右からブラウスをつまんで、

「これからはもっとお洒落しようね?」

「レンさんともおでかけしたいです」

「そうだな。たまには散歩もしないと」

領けば歓声が二つ上がった。

「レン、女の子になってからノリ良くなったんじゃない?」

「むしろ俺、そんなにノリ悪かったか?」

「えー? 女の子の服着るのあれだけ避けてたじゃない」

「……そう言われると弱いな」

仲間と認識していてもどこか距離を取っていたのかもしれない。

「じゃあ、フリーたちに色々教えてもらおうかな。服のこととか」

「お化粧のこととかね」

先日、レンはどうとう最後の境界線を踏み越え、女子——というかサキユバスへと完全に変化した。

『医者』というレアな職業についている女性に診てもらったところ「変化は完了している」とのお墨付き。

あれから結局用を足したくなる気配は全くなく、エナジードレインが足りていれば腹も減らない。翼も広げて歩いていると道で邪魔になりそうな程度に大きくなった。

男装をしても、もう人間の男には見えないだろう。

思うところはあるものの、悪いことばかりではない。悪さをする器官がなくなったのでフリーたちと素直に触れ合える。一人で女を何人も困っている、なんて変な噂を立てられることもない。

「さて、出発しよつか。賢者様に報告しないとね」

「今回はお話することも多いですからね。なにしろ十階ですから」



『魔法攻撃力強化』『発動速度短縮』。

2レベル上げた上で臨んだ十階ボス戦。過去最高となる九体との激戦の末、レンたちはひとつの区切りへと到達した。

手に入ったボス報酬、そして石碑の内容も今までより豪華なものであり、ダンジョンを作った何者かからも喜ばれていることがわかった。

さて。

「……そうか。これが十階の碑文か」

賢者の家にて向かい合い、最初の目標達成を告げる。

併せて提出した古代文字——その訳はこうだ。

『汝らは大いなる一步を踏み出した。己を知り、敵を知り、これからも進み続けよ』

期待していたほど大きな情報はない。

ただ、

「十階という区切りが重要であるのは間違いないようだな」

「はい。その証拠に、アイリスに『お祝い』がありました」

「む?」

全員の視線を向けられた半妖精の少女はどこか照れくさそうにしつつ、とある単語を口にした。

「ステータス」

少女の指示によって光の窓が生み出されると、賢者——転移者全体のリーダーと言える男は目を見開いて立ち上がった。

「与えられたのか……!?! 十階攻略の報酬として、君にも『祝福』が!?!」

無理もない。

ネイティブ世代にはどうやっても使えなかった力だ。それをアイリスが操ったのだから、これはひとつの革命である。

これにアイリスはこくと頷いて、

「はい。レンさんたちみたいにレベルアップとかはできないんですけど……」

「何?」

「ほら、見てください賢者さん。アイリスちゃんのスレータス画面にはレベル表示とかスキルポイントとかないんです」

種族は「ハーフェルフ」、職業は「弓使い」となっているもののレベルはない。0ではなくレベル自体が書かれていない状態だ。

正直、理解した時にはかなりがっかりした。直前に大喜びしただけに落差がすごい。

賢者も物凄く落胆したような表情になりつつ、椅子に座り直して。

「いや、しかし、確かに大きな一歩だ。お陰で新たな希望も見えてき

た」

「とうとうっ？」

「十階ではステータス表示権限が与えられた。では、二十階では？」

「……と、そういう話だ」

「あ、確かに！」

レンたちと同じ機能が分割して与えられていくシステムかもしれない。

最終的に同じことができるようになるのだとすれば、ネイティブ世代が頑張る意義が大きく変わってくる。

「アイリスちゃんレベルアップするようになったら私たちいらなくなるんじゃない？」

「ああ。今でもめっちゃくちゃ強いもんな。これでレベル1なんだとしたらどこまで強くなるのか」

「お、おだてないでください！ 私なんて、レンさんたちがいなかったらここまで来られなかったんですから……！」

三人の会話に賢者は大きく頷き、

「そういうことなのだろうな。我々が先達となり、この世界で生まれたい子を導く。単なる道案内ではなく、子供達を鍛えて伸ばし、困難を乗り越えさせることで道が開けるのだ」

「俺たちもアイリスたちも両方必要、ってことか？」

「そうだ。……無論、転移者だけで無理やり攻略することもできるのだろうが、加速度的に上がっていく難易度を考えれば人手は多いほうがいい」

この件は年長者たちの会議にかける、と彼は宣言した。

ネイティブ世代に新たな可能性が与えられた以上、再び挑戦者を募ってもいいかもしれない。もちろん犠牲者が続出しても困るのでよく話し合っつて対応を決めなければならぬ。

「君達には引き続きアイリスを導いてやって欲しい。……おそらく

『アレ』も手に入ったのだろうか？」

「アレ、ってコレ？」

フリーがころん、と転がしたのは小さなクリスタルのようなもの

だ。

レンたちはこれを前に一度見ている。タクマたちが罰として握られ、強制的に使わされたアイテム。すなわち、

「転職石。消耗品だが、職業の獲得もしくは変更が行える。君達の場合にはレンが使えば良からう」

「うん。私が盗賊辞めちゃうとまずいし、レンは職業持ってないもんね」

「貴重なサキュバスのスキル枠をこれ以上攻撃魔法で埋めるのも心苦しい。是非早めに使って欲しいものだな」

賢者の発言はかなり個人の都合が混ざっているものの、彼の言うこともわかる。

普通の攻撃手段ならクラスからも得られる。サキュバスとしての固有スキル——攻撃魔法にしてもドレインボルトのような「ならでは」のものを取る方が将来のためだ。

どんなクラスを選ぶかはもう少し考えたいが。

「完全なサキュバス化もおめでとう。是非とも早いうちに子供を産んでくれ」

「うん。その件であんたの指図は受けない」

女になった以上、男同士の気安さはもう通用しない。完全にセクハラである。



「十月かー。これからどんどん寒くなるんだろうな」

「夏が過ぎしやすかった分、冬は不安だね。……アイリスちゃん、こっちって雪積もるの?」

「降った時はどさつと積もりますよ。溶けにくいので困るんですよ、あれ」

「どさつと積もるのかあ……」

家周辺の道なんかは雪かきが必要かもしれない。

異世界に来たというのに庶民的な話だ。

「水風呂でも風邪ひかないし、寒いのは大丈夫そうだけど……冬場はダンジョンに行く人減っちゃいそうだね」

「そうですね……。大雪の後はお母さんも神殿周りの雪を溶かしに行ってます」

神殿までの道や四つの階段が通れないと行きたくても行けない。そういう時は熱や炎の魔法が使える人間の出番らしい。

「雪が解けた後の石畳や石の階段は滑るから気をつけてくださいね？」

頭を打って死んじゃうなんて、絶対駄目ですからね？」

「気をつけます」

「うん、それはほんと洒落にならないね……」

この分だと雪の季節までもあつという間かもしれない。

冬が終わって春が来たら新しい転移者がやってくる日も近い。

さすがに気が早いとは思うものの「お前達がダンジョンクリアできなかったから俺達が呼ばれたんだ！」と言われる側に回る覚悟は今からでもしておいた方がいい。

「五十五階とか中途半端な階で『おめでどう！　これでダンジョンは終わりです！』ってなればいいのにな」

「そんな作りかけで諦めたゲームみたいになったら逆に大ブーイングじゃない？」

人によつては三十年もかけたのだ。少しくらいドラマチックに終わってくれないと「今までの苦労はなんだったんだ!？」となりかねない。

「まあ、少なくともあと何年かは我慢してもらうしかないな」

「次の子たちはタクマみたいのが出てこないといいね」

「子たち、って言っても、次に召喚されてくるのが三年生だったら俺たちより年上だけだな……」

「受験生、っていうやつですよ？　こつちに来ると『予定が全部狂った』って泣く人もいるらしいです」

さもありません。

「年上でも後輩は後輩だよ。ダンジョン経験ではこつちが上なんだから助けてあげなくちゃ」

「つても基本、一緒に来た奴らでパーティ組むだろ。できることって少ないんだよな」

「一番大きいのが金銭的支援だろうか。」

「転移してきてから一年間は初心者支援期間として各種お店で（可愛いかからおまけ、というのとは別枠で）割引してもらえる。割引いた分は通常価格を高め設定して補填しているらしいので、普通に買い物するだけでも初心者を助けることになる。」

「そうだね。私たちは何か作る系のクラスでもないし。あ、レンが今からなってみる？」

「戦闘系以外はさすがに微妙じゃないか。自分たちで使う武器を自分で作るって手はあるかもしれないけど」

「例えばアイリスの使う矢。これを生産できれば出費がかなり減らせる。」

「アリと言えばアリだが、レン自身が強くなれば使う矢の量も結果的に減るだろう。」

「あの、できたら私みたいな子のことも助けてあげて欲しいです。きつと他にもダンジョンに行きたい人はいると思うので……」

「ああ、そうだな」

「なんか期待されちゃってるしね、レン」

「十階を（まともに）攻略したネイティブ世代はアイリスが初めてだ。つまり、レンたちはこの分野では最前線にいる。」

「賢者があの件を広めれば注目度はさらに高まるだろう。」

「でも、仲間に入れるのは女の子だけだぞ。男は別のパーティを紹介する」

「仲間に入れて好きになっちゃうと困るから？」

「それも困るけど、そうじゃなくて、フリーたちになにかあると困るだろう」

「そう答えると、フリーとアイリスはなにやら顔を見合わせ始めた。」

「また「レンだって気をつけないとだめだよ」とか言われるのかと思っただら、」

「そうだね。レンがそれでいいならいいんじゃない？」

「その分、女の子を助けてあげましょう！」

二人はにこにこ笑ってそんなことを言った。

優しすぎて若干怖い。何か企んでいるのか、それともレンが女性化したのが嬉しいのか。

「ま、でも、女子のことは助けてやりたいよな」

タクマたちの一件はもちろん、それ以外にもこの異世界で女子が苦勞している点はたくさんある。

服。風呂。食事。妊娠や出産もそうだろう。

男子が苦勞していないと言うつもりはないが、男子なら適当に済ませられる点でも女子には必要になったりする。生活する上でのコストはどうしたって余分にかかるし、その原因の一端は男子にある。

……と、元男子が言っつて説得力があるかは謎だが。

元男子だからこそわかることもある。娼館経営に携わるマリアベルやアイリス一家、洋食店の店主などさまざまな方面の女性とも面識のあるレンたちはなかなか便利な立ち位置にいるはずだ。

今でも女性同士の繋がりにより助け合いはもちろんある。

レンたちもそのコミュニケーションの手助けができればいいかもしれない。

「これからもやることいっぱいだね？」

明るく微笑む少女。

思えばフリーリとは転移前からの付き合いだ。あの頃は「妙に付き合いとわれるな」くらいの認識だったのだが、ひよつとすると当時から好意を寄せていてくれたのだろうか。

「お手伝いさせてくださいね、レンさん」

穏やかに微笑む少女。

アイリスももうパーティーに欠かせない人材になっている。両親との約束だけでなく、レン自身の想いとしても「この子を守ってあげたい」と思う。

目指すは、彼女らと一緒にダンジョンをクリアすること。

日本に帰れるようになるまでは、この翼や尻尾にも役立つてもらおう。

「これからも頑張ろうな」

自然と笑顔を浮かべながら言えば、元気のいい返事がすぐにやってきました。

章間・番外編

【番外編】サキュバスになつて

「いただきますー！」

リビングに三つの声が唱和した。

例によつて就寝中のマリアベルを除いた三人での朝食。すっかり馴染みの風景だが、最近になつて少し変わったことがある。

食事用の椅子がひとつ増えたのだ。

テーブルの短辺に置かれたその椅子に座るのは他でもないレンである。いわゆるお誕生日席、上座にあたる場所だが、別にパーティーダーだからこうなつたわけではない。

椅子に浅く腰かけた彼の背中——なかなか見栄えのするサイズになつた蝙蝠（風）の翼のせいだ。

意識して畳んでいればともかく、うっかり広げてしまうと隣の人の邪魔になる。じゃあ隣に誰もいなければいい、というわけである。

つまり、どちらかというところ「邪魔だからはじき出された」と言う方が実情に近い。

ついでにレンの分の朝食だけ妙に量が少ない。

パンもスープもチーズも申し訳程度に置かれている程度で、それぞれ一口か二口でなくなつてしまふそうさ。

これはレンへの嫌がらせ、ではもちろんなく、

「便利だよ、サキュバスって。まさか食いだめができるなんて」

フリーが何気なく言つたそれが理由である。

サキュバスになつたレンは他者からの生命力吸収——エナジードレインによつて食事を行えるようになった。

また、十分な量を吸収できていれば食事時になつてもお腹が空かない。い。

補充が必要になつたら何か食べるなり、フリーたちにHPを吸わせてもらえばいい。

空腹でない時でも食事は可能なので、お腹の膨れていることの多い

朝は味を楽しむ程度の量を用意してもらおうようになった。

これにレンは肩を竦めて、

「便利だけど、フリーたちを食料にしてるようなものだからな。なんか申し訳ない」

「いいのいいの。別に死ぬまで吸われるわけじゃないし」

「適度に吸ってもらえるとご飯が美味しいのでむしろ助かってます！」

最近フリーかアイリス（たまにマリアベル）と一緒に寝ることが多い。

寝ている時はだいたい身体的接触があるわけだが、無意識状態でも危険域まで『吸って』しまうことはなかった。

サキユバスにとつて人間は食料。吸い殺してしまつては勿体ない、ということだろう。むしろドレインだけで殺す方が意識しないと難しいわけだ。

この影響か、フリーたちはレンが減らした分の食料を二人で分けている。印象としてはむしろ元気いっぱいだ。

「でもさ。お腹空かないのは便利だけど、ご飯の楽しみは減っちゃうよね」

美味しそうに食事を口にしながらフリー。

「味の好みとかも変わってきた感じ？」

「んー。なんか肉が食べたい感じはあるな。あと生野菜」

生命力を摂取しやすい食材をより美味しく感じるのだろう。生肉や生魚はさすがに食べたいと思わないが。

「あ！ 生といえばさ、生卵もレンならいけるんじゃない？」

「いけるか……？ 駄目だった時が怖いぞ、さすがに」

鶏は身体の大きさなどから比較的飼育しやすいため、卵自体は異世界でもわりと安価に手に入る。

ただ、問題は「生で食べるとお腹を壊す」ということだ。

日本の生卵はきちんと殺菌処理をされているためにこの手の被害が少ないのだが、こちらではそこまで手が回らない。茹でたり焼いたりして食べるのが当たり前であり、卵かけご飯なんかは割と自殺行為

である。

レンたちも前に一度試したものの、見事腹痛に苦しむことになった。

人間とはいろいろ仕様の異なるサキユバスなら菌の作用も防げるかもしれないが、もう一回アレを味わうと思うとあまり気は進まない。

げんなりした表情のレンたちを見たアイリスは首を傾げて、

「やっぱりレンさんたちも生の卵、好きなんですね？」

「昔から食べてたからねー。アイリスちゃんは生卵苦手？」

「はい。あまり美味しいと思ったことは……」

ということとは食べたこと自体はあるのか。

「お父さんとお母さんはお母さんの魔法を使ってたまに無理やり食べてますよ」

「便利な精霊魔法……!?!」

生命の精霊に働きかけて身体の調子を元に戻すことができるらしい。

どうしても食べたくなったらアイリスの母に頼もう。二人はそう心に決めた。

「あ。森の方も湖ができてから動物が増えたそうです。湖畔にはハーブも生息し始めたそうですよ」

「それはいいな」

森には食べ慣れた獣——豚や牛は生息していない。肉になりそうな代表的な動物は鹿や狼になるが、食べてみると意外にいける。獲れる量は値段に直結するし、ここで暮らす人数は年々増える一方なので数が増えてくれるのはありがたかった。

「あれ、アイリスちゃん？ 動物ってそんな簡単に増えるものなの？」

「はい。森の動物は気付いたら増えてるので」

「気付いたら増えてる」

すごい話である。

この場合、こっさり繁殖しているとかそういう話ではなく本当に無から生えてきているという話。

動物の生息数は自然の規模と充実度、それから管理者の力量によって変化するらしく、森の動物に関しては現状、エルフであるアイリスの母によって維持されている。

精霊使いの方も自然を操るクラスであるため間接的に森の発展に寄与しているのだそうだ。

「肉か。いいよな、鹿肉の香草焼きとか」

「魚も獲れるようになったそうですよ。少しですがお店に出回る量が増えたそうです」

「そっか。なんかいいね。私たちのやったことがそのままみんなに伝わるのって」

悪いことをすればタクマたちのようになりかねないが、良いことをすれば街での生活が豊かになる。

未完成の湖でもそれだけ影響があるのなら完成すればもつと暮らしに役立つだろう。

欠片はまだかなり余っているので広げようと思えば湖をより広げられる。どの程度の規模で完成させるかは悩ましいところだ。

「アイリスの頑張りがお母さんたちの役に立ってるんだな」

「……えへへ。だとしたら嬉しいです。今までは私、森のお手入れくらいしかできることがなかったの」

「じゃあ、やっぱりアイリスちゃんたちは今のままだとクラスを持つてることにならないんだ」

管理者のクラスレベルが影響するのだとすれば、アイリスがレベルを持てるようになったらどうなるか。結果次第ではこの世界の今後が大きく変わることになるかもしれない。

毎年入ってくる転移者数はほぼ固定なのだから、広がる世界を維持していくにはネイティブ世代の協力が不可欠だ。

初期の転移者が寿命を迎えるまでにダンジョン攻略の糸口が掴めなければこのままずると行きかねない。そう考えると賢者があれこれよからぬことを企んでいるのもわからなくもない。

「あれ？　なあ、アイリス。じゃあ、森を育てるようなクラスの人が他にも住んだら森はもつと豊かになるのか？」

「なると思います。昔、そういうことを試した時期もあったそうなんです……お母さんたちと意見が対立したりして逆に面倒になった
そうで……」

「あー、そういうのもあるのか。ゲームみたいに簡単にはいかないんだね」

「悪意がなくとも、というか悪意がないからこそ、意見の調整に四苦八苦することもある。」

神の視点から全てを操るのは違う苦勞が現実にはあるのだ。

「レンのサキュバスもなにか隠れた効能があるのかな？ 娼館に住んでいるといいことがあるとか」

「つても、人間は気が付くと増えてたりはしないしな……」

言つて、レンは遠い目になった。

「正規の手続きを踏まないと増えない人間。それを増やすのがサキュバスの役目……なんて可能性はあるだろうか。」

【番外編】 休日の過ごし方

ダンジョンに潜るのは週に二回程度、という決まりは十階攻略で手こずってからも守り続けている。

リアルの間は「宿屋で一泊すれば全回復」とはいかないからだ。身体の疲れを取るには度合いに応じた休息時間が必要になる。もちろん魔法でも治せるが、心の疲れはヒールでは治らない。

相手がモンスターとはいえ、度重なる殺し合いは人の心を荒ませる。

転移者の中には一定数「どうしても殺しは無理」という者もいる。それに比べればレンたちは凶太い方だが、人間らしいゆとりを忘れれば知らず知らずのうちに壊れていくだろう。

というわけで、ダンジョン攻略に積極的なレンたちも週に五日は休みである。

休みの日に何をするかはその時によって違う。

賢者をはじめとする知人に会いに行くこともあるし、一日中寝ていることもある。アイリスは定期的に家に帰ったりもしているし、フリーも買い物に出かけたりしている。

マリアベルに至っては余暇の時間を娯館での仕事に宛てているのであ見えてかなり忙しい。

ではレンはといえば、

「……暇だな」

部屋でただごろごろしていることが圧倒的に多い。

名誉のために弁解するのであれば、異世界に娯楽が少ないことも大いに関係している。

ダンジョン攻略で得た収入で生活している以上はあまり散財もできない。女性向けの服は男性向けに比べて割高なので、サキュバスになつてからは余計に節約が必要だ。

タクマたちなんかは暇さえあれば酒を飲んでいたが……酒とつまみを安いもので我慢したとしても金がいくら飛んでいくかわかったものではない。

レンのお気に入りには安いワインではなく蒸留酒。

比較的値の張るそれを週に一本までしか飲まない決めており、大抵は夕飯あるいは寝る前に一杯分程度口にして終わりだ。

これでも十分な贅沢。

日本にいたらあと四年は酒が飲めなかったのだからむしろありがたく思うべきだ……と、話がだいぶ逸れたが、

「そろそろ、なんか本でも買うかな」

ブラにシヨーツだけの下着姿でベッドに転がりつつ呟く。

最初は抵抗のあつた「本格的な女子の下着」だが着てみると思ったよりも心地いい。

前に好んでいたキャミソールは背中部分に穴を開けないといけなかつたうえ、固定されていないので激しく動くはずれやすかつた。翼と干渉するのでレンとしては気になるポイントである。

その点、ブラなら背中が大きく空くしずれにくい。

フリーやアイリスのサイズを早くも上回りつつある胸をホールドしてくれるのも慣れてくると楽だ。

話を戻すと、この異世界でも本は意外と多く流通している。

人の記憶から本を作り出す職人がいるからだ。これによって純文学やライトノベル、マンガなど色々な本が再現されている。

連載中の作品の続きはこちらでは追えないため、年に一度、新しい転移者が来るのを心待ちにしている者もいる。転移して早々に「○〇ってマンガ読んでた？」とか聞かれた方は大変困惑しただろうし、何年経つても続きが出ないマンガに絶望している者もいるが。

娯楽として需要が大きいため、新しい作品を提供すると金が支払われる。

レンも前に二つほど記憶を提供し、本人が憶えていない細部まで再現された本が書店に出回っている。

そこまですておいてレン自身が本を持っていないのは「高いからだ。本を作るには紙がある。紙の原料である木は燃料にもなるし家や家具を作るのにも使う。いくらあつても構わないくらい需要があるので値段が安くないのだ。

森の管理者であるアイリスの両親は責任重大であると同時に木の生産でかなり稼いでいるらしい。ああ見えてアイリスはかなりのお嬢様なのだ。

「買うなら何がいいかな」

単価が高いので長く楽しめる本がいい。

となるとマンガよりは小説。活字の類はそこまで得意ではないのだが、有名な推理小説とかならエンタメ性も高いし読めるだろう。

フリーは私物として少女マンガを何冊か持っている。いつそのこと借りてみてもいいかもしれない。サキュバス化によつて感性が女子に寄っているかどうか確認するのにちょうどいい。

マリアベルからも「暇な時は読書をすることもあります」と前に聞いたことがある。あの女性がどんな本を読むのかは少し興味があつた。

「こんな身体じゃなかったら運動するんだけど」

翼と尻尾のせいもあつてレンの姿は非常に目立つ。

街を歩いているだけでみんなから注目されるのであまり一人で歩きまわりたくはない。レベルアップのたびに身体のバランスが変わってしまつて感覚の掴み直しになるし。

「他になんかあるかな、休日の過ごし方」

こんな悩みが出てきたのも余裕ができた証拠だろう。

タクマたちといた頃はハードスケジュールだったので寝るのが最優先だったし、パーティを抜けてからもなんだかんだやるが多かった。

サキュバス化が完了したり収入が安定したりと落ち着いたので逆に暇を感じるようになったのだ。

レンは天井——ではなく部屋のドアを見つめながら（仰向けは翼のせいでやりづらいのだ）しばらく考えて、

「あの人にも聞いてみるか」

フリーたちを選んでもらった外出着に着替えて外に出た。

異世界における大先輩にして一人暮らしをしている暇な男こと賢者はレンの来訪に「また来たのか？」などと文句を言いつつも部屋に入れてくれた。

女という存在を記号としてしか捉えていなさそうなぞんざいな扱いが有難い。

今日はフリーたちと一緒にではないし大した用件でもないので掃除はせず、そのまま椅子に座りこんで事情を説明する。

「というわけで、こういう時ってどうやって暇を潰すのがいいんだ？」

「ふむ。……古来からの伝統的な余暇の過ごし方ならある」

「へえ、それって？」

「性行為だ」

なるほど、こいつに聞いたのが間違いだった。

レンは「お邪魔しました」と立ち上がってそのまま帰ろうとして、

「待て。別に適當を言っているわけではない。かつての日本が子たくさんだったのには間違いなくその手の理由もある」

「……あー。そういうやあの鬼退治するマンガの主人公も弟妹たくさんいたよな」

「無論、子供を労働力と見做していた側面もあるがな。だとすれば猶更この世界には合っているだろう？」

人手はいくらあってもいい、という話だ。

アイリスの家だって娘たちに狩りをさせているわけで、ダンジョンに潜らないにしても手伝って欲しいことは山ほどある。

理屈はわかった。わかったが、

「もうちよつとなんかはないのか」

「蹴鞠でもしてみるか？　けん玉や竹馬という手もあるな」

「いつの時代だよ」

「簡単な道具で、かつ一人でも遊べるものとなるとどうしてもそうなる。昔の子供は野山を駆け回り秘密基地を作って遊んだりもしていたのだぞ」

「うわ、三十年の世代差って凄いな」

下手すると親子以上も歳が離れているわけで、ある意味では当然

か。

「二人用の遊戯で良いなら将棋や碁という手もあるな。酔狂な者が盤と駒、碁石を生産している」

「それ、実はあんたがやりたいだけだったりしないか？」

「それもある」

部屋の隅にはちゃっかり盤が置かれている。埃は被っていないのでたまに誰かと遊んでいるのだろう。

レンは「ありがとう、考えてみるよ」と言っ手土産の干し肉を差し出した。不精な彼としては生鮮食品より嬉しいのか「悪いな」と笑みを浮かべて受け取ってくれる。

「せっかく肴をもらったし、少し飲んでいくか？ いい酒があるのだ」

「止めておくよ。高い酒に慣れたら金がかかる。……っていうか飯も食わないと身体に悪いぞ」

「むう、アイリス達と同じような事を言わないでくれ」

去り際、賢者は「ああ、そうだ」とレンを呼び留めて、

「裁縫はどうだ？ 縫物ができれば服が長もちするし、良い作品ができれば売れるぞ」

「裁縫か。悪くないかもな」

次の休みにフリーリへ教えを乞うてみたところ、意外に筋が良かったらしく「せっかくだからもつと練習しなよ」と言われた。

自分の服を自分で繕えるようになるのは悪い話でもないので、以来レンは暇になると針と布でちくちくやるようになった。

【番外編】アイリス一家とレン

「いらっしやいませ、みなさんー！」

「今日はゆつくりしてゆっくりしてくださいねっ？」

森の片隅にある木造の小屋の戸を叩くとすぐ、金色の髪をした二人の少女が出迎えてくれた。

姉であるアイリス同様、母親の容姿を色濃く受け継ぐ愛らしい姉妹。十三歳の三女はアイリスの胸へ飛び込むように抱きつき、十七歳の次女はレンたちへ柔らかく微笑んでくれる。

妹を受け止めたアイリスもまた優しく笑って、

「ただいま、アイナ、アイシア。お父さんとお母さんも」

次女がモリのあいな森野愛奈、十七歳。

三女はあいさ森野愛紗、十三歳。愛称はアイシアだ。

三人の母であるエルフの美女（印象としては美少女の方が適切だが）——アンナは娘とレン、フリーを穏やかに出迎えて、

「ようこそ。今日は皆さんでどうされたのですか？」

「私は湖の絵を描きに来たの。早めに完成図を決めたいから」

「私はアイリスちゃん付き添いです」

湖のデザイン責任者になったアイリスは「責任重大です」と言いつつもやる気のように、筆記用具とお弁当を持参している。いいところまで描けなかったら一日中でも粘る構えだ。

フリーの方はというと付き添いというのは口実で、湖のほとりで昼寝をするつもりらしい。まあ、寝ているだけでもアイリスとしては寂しくないだろうし、万が一何かあった時にも対処しやすい。

「俺はアイナたちに遊んでもらえないかと思って」

「本当!?!」

途端、目を輝かせるアイナとアイシア。

初めて会った時からレンたちは二人に懐かれている。特にレンは肌の色が近いせいか会うたびに雑談や森の散策を求められていた。

ここに来る時はたいい何かしらの用事がある時なので少し相手をしては「また今度」と濁っていたのだが、暇がでてきた今こそ約束

を果たすチャンスだと思った。

アンナはこれに「そうですか」と笑顔で頷いて、

「申し訳ありません、レンさん。娘たちのために」

「いえ。むしろ突然来て迷惑じゃないですか？」

「全然迷惑じゃないよ！」

「今日はいっぱい遊んでくれるんですね？」

「ああ。少なくともアイリスが絵を描き終わるまではこっちにいるつもりだ」

「じゃあ晩ご飯も食べて行ったらいいよ！」

実年齢よりも幼く感じられるのはアイリスと同じだ。姉妹に左右から腕を取られたレンは小学校高学年くらいの子を相手にしている感覚になる。

もちろん、身体の方は歳相応なわけだが、柔らかい感触を受けても反応する器官はない。

これを見たアイリスは小さく頬を膨らませて、

「二人とも？ 私の絵が完成しないって言いたいの？」

「まあまあアイリスちゃん。お休みなんだからのんびりやろうよ、ね？」

フリーに宥められて事なきを得る。妹たちが相手だと礼儀正しいアイリスも普段とは違う表情になるらしい。

レンはあらためて少女たちを見つめて、

「じゃあ、なにをしようか？」

「狩り！」

ふたつの声が同じ答えを示した。

狩りはある意味、釣り以上に地道な作業だ。

釣り糸と餌を垂らしてただ待つ、というわけにはいかない。森を歩いて気配や痕跡を探り、獲物の位置を特定しては静かに接近しなければならぬ。そして機会を得たら迷わずに仕留める。勘と経験も必要になるし思ったよりも体力を使う。

とはいえ、森で育った年頃の女の子たちにかかれれば狩りも散歩感覚だ。

動きやすい服装にナイフと弓矢で武装したアイナとアイシアがレンを案内するように淀みない足取りで森を歩いていく。何気なく足を踏み出しているように見えるのに足音は最小限、かつ足元が見えているかのように障害物を避けている。

「大きな動物だとけっこう大変ですけど、野兔くらいなら簡単ですよ」「うん。意外と人懐っこくて寄ってきたりするもんね」

「へえ、そうなのか」

レンは頷きつつ「話半分に聞いておこう」と自分に言い聞かせた。狩人の言う楽は一般人に適用したら「けっこう大変」に違いない。

実際、なるべく音を立てないように森を歩くだけでも一苦労。

ダンジョンでもある程度忍び足は経験しているものの、石の床と森の中では必要な技術が全く違った。しばらく四苦八苦してみた後、これは無理だと諦めて、

「ごめん、二人とも。ちょっとだけ止まってもらっていいかな？」

小休止を挟んでもらいステータスウィンドウを操作する。

残しておいたスキルポイントを使ってしまうことにした。獲得するスキルはもともと取ろうか悩んでいたもので、その名は『浮遊移動』。

翼の大きさが一定に達したところで現れたこのスキルは文字通り浮いた状態で移動するものだ。

取得して念じるとふわり、と身体が浮かび上がり、宙を滑るようにして移動できる。あまりスピードは出ないものの高さの調節も可能なようで、

「おお、楽しいなこれ」

「あ、レンお姉ちゃんずるい！」

「お母さんでもふわふわ浮くのはできないかもしれません」

「そうなの？」

「ゆっくり動くのは逆に難しいそうです」

どうやら風の精霊はせっかちらしい。

「わたしも！ わたしも飛びたい！」

「ああ、俺につかまってくれれば一人なら運べるかな」

「……あの、レンさん。アイシアが満足したら私も飛んでみたいです」
「恥ずかしそうに服をちよんと掴んでくるアイナは正直ものすごく可愛かった。」

それから。

「ドレインボルト」

魔法の矢を撃ち込まれた野兎が「きゆう」とばかりに倒れると、少女たちが歓声を上げた。

「遠くから外傷もなく野兎を仕留めるなんて……！」

「レンお姉ちゃんすごい！」

低威力の代わりに生命力を直接奪う魔法が思わぬところで役に立った。

無傷で命を落とした獲物にアイナとアイシアは素早く歩み寄り、てきぱきと血抜き作業を始める。その表情には「兎さんが可哀想！」などという色は微塵もなく、冷静で冷徹な狩人のそれだ。

「傷が少ないほうが肉も毛皮も利用しやすいですし、高く売れるんです」

「レンお姉ちゃん、狼とか鹿も一緒に狩ろうよ！」

「いや、残念だけど大きい動物だと一撃じゃ無理だと思う」

そう答えると二人は残念そうな顔をした。

「でも、レンさんがいれば少ない手数で狩れそうです」

「わたしでも毒なしで狼を倒せるかも！」

ハーフエルフの少女たちはなんとというか逞しすぎである。

それから小型の動物を何匹か仕留めてはレンのストレージに放り込み、きりのいいところでお弁当を食べた。

レンのはフリーとアイリスのお手製、姉妹のはアンナの作ったものだ。

せっかくだからちよつと交換してみたところ、さすが、アンナの調理技術は若者には真似できない領域にあるのがわかった。

それはそれとしてフリーたちが十分腕が立つことと、食べ慣れた味が安心することも。

知らず笑顔になっているとアイナが呟くようにこんなことを口にしていた。

「私ももつと料理練習しようかな……」

結局、夜は三人で夕飯をぐ馳走になった。

獲れたてのままストレージで保存していた兎肉を含め料理は絶品。

思わずいつも以上に食が進んでしまい、女性陣から微笑ましく見守られてしまった（フリーは若干対抗意識を燃やしていた）。

にこにこしたままのアンナは澄んだ眼差しでレンを見つめて、

「レンさんならこの家に来ても問題なくやっていけそうですね」

アイリスとその父親が盛大にせき込んだ。

【番外編】転職の行方

「……うーん」

親指と人差し指でつまんだ小さなクリスタルをじつと見つめる。

椅子に浅く腰かけ、首の下あたりで背もたれに身を預ける姿勢は翼が大きくなってからの癖だ。もしくは食事中などでなければテーブルに腕を載せる。

このところそんな風に行っていることが多いせいか、相棒も気になっ
ているようで、

「まだ悩んでるの、レン?」

「ああ。やり直しがきかないと思うとな」

「あれでしょ。ゲームでも一個しかないアイテムとかなかなか使えないタイプ」

「ぐ」

凶星である。

結局、それでやり直す羽目になってレベル上げをがんばり、今度は苦戦せずにクリアしてしまったりする。

さすがにリアルで回復アイテムをケチるような真似はしないが。

「選択肢が多いってというのが余計にな」

「レンになら教えてあげる、っていう人も多いもんね」

転職石の仕様は少々特殊で、基本的には使用しようとする本人に素養のある職業がリスト表示される。その中からひとつを選ぶことになるのだが、この時、知人や友人などの同意があればその人物と同じクラスに就くことができる。

例えばフリーの盗賊やアイリスの弓使い、マリアベルの蹴術師などだ。

タクマたちの半強制転職は娼婦のお姉さんが協力してくれたお陰。

レンの場合はアイリスの母・アンナの精霊使いや、元クラスメートの女子たちもお願いすれば協力してくれるのでそのへんも選択肢に入ってくる。

「石のおススメはだいたい魔法系なんだよね?」

「ああ。なんか娼婦とかもリストにあるけど」

「あー。サキユバスだもんね」

「サキユバスだからな」

さすがに非戦闘系のクラスは今回除外する。

大まかなプランとしては直接戦闘系か射撃系か魔法攻撃系か、あるいは支援魔法系か、といったところ。

レンたちのパーティは前衛が足りない——というかフリーが無理やり前衛を張っているだけで実質ゼロ、という状態であり、レンが前に出られればだいぶ楽になる。

ただ、攻略が進んでマリアベルが本格参戦すれば前衛不足は補える。殴り合いをしながら魔法を使うのは難しい、というのもある。

弓などの射撃武器なら白兵戦よりはマシだが、飛び道具はだいたい両手が塞がってしまう。

「私としてはレンとお揃いになれば嬉しいんだけど」

「畏対策ならアイリスが頑張ってくれるだろ」

マリアベルも実際の経験からアドバイスしてくれたりするし、今からレンが盗賊になるのはもったいない。

「じゃあやっぱり魔法系じゃない？」

「だよな。そうすると後は具体的にどのクラスにするかなんだが……」

これがものすごく悩ましい。

魔法系と言っても結構種類があり、それぞれに長所が存在する。最もオーソドックスな魔法使いを選べば汎用性が増すし、回復系のクラスに就けば万一の時にフリーたちを癒しやすくなる。

するとフリーは後ろから身を乗り出してクリスタルをつんつんしながら、

「いつそノリで決めちゃいなよ。石さえあれば転職はできるんだし」

転職石はめったに手に入らない貴重品。十階毎のボスから一個ドロップするのが主な入手元というなかなかのレア度だが、逆に言うと二十階をクリアすればもう一個手に入る。

「私はまだまだ転職しそうにないし、アイリスちゃんが正式にクラス

を手に入れるのもいつになるかわからないでしょ？ もう一個くらいレンが使っても大丈夫だよ」

「できれば無駄遣いはしたくないけど……まあ、それもそうか」

「そうそう」

にっこりと微笑むフリー。

可愛らしい表情に和むと同時にキスでもしたくなってくるが、真面目な話の途中なのでぐっと我慢。

深く考え過ぎず決めていいのなら、今、レンが必要だと思いう能力を重視してみるか。

レンがしたいことはフリーたち、仲間を守ること。魔法で色々できるサキュバスは各方面からのサポートにちょうどいい。

となると、

「よし、決めた」

しばらく考えてから、レンはようやく進路を一つに絞った。

転職作業自体はほんの一瞬だ。

クリスタルを使いたいと念じ、表示されたクラス一覧から一つを選ぶ。後は最終確認にYesで答えればクリスタルが光の粒に変わってレンの身体へと吸い込まれていく。

クラスの変更に伴って変更された衣装はどこかエキゾチックな雰囲気も漂う布面積少なめのもの。ちなみに元の服は一時的にストレージへ移されただけでなく変わったわけでない。

「へー。これが『魔操師』マナコンダクターかあ。男でもこの衣装なのかな？」

せっかくなので転職の儀式？ はパーティメンバーみんなの見ている前にした。

真つ先に声を上げたのはフリー。若干ズレている気もする疑問の声にレンは「さすがに男は別衣装じゃないか？」と答えた。

ちなみにレンの性別はサキュバス化に伴い、ステータス画面上も「女」になっている。

「でも、確かに魔法使い系にしては露出度高いよな」

「サキュバスの魅了と同様、肌の露出が関係しているのかもしれないね」

「レンさんなら似合っているので大丈夫だと思います」

「ありがとうございます」

「マリアベルとアイリスからの反応に（若干苦笑気味の）笑顔で答える。

それからステータス画面を表示して、

「おお、やっぱりけっこうステータス下がったな」

「補正が結構効いてたんだね。その分はレベルを上げて補わなきゃ」

「ああ。便利なスキルがいろいろあるからな。期待してくれ」

魔操師はその名の通りマナの扱いに特化したクラスである。

魔法スキル自体よりも魔法をより効率的に運用するための補助的なスキルが充実している。

「一見すると地味ですが、便利な良いクラス選択ですね」

「ありがとうございます。俺にはこういう方が合っているんじゃないかと思って」

「レンさん、具体的にはどんな風が変わったんですか？」

転職前に軽い説明はしていたものの、レンも伝聞以上の情報はなかった。あらためてスキルリストを開きつつ「そうだな」と言っ
て、「方向性自体は今までとそんなに変わらないかな。ただ、MP効率を上げたり敵の弱点を突いたりしやすくなった」

ポイントの使い方次第だが、例えば前者の運用法としては最大MPを上げたり魔法の消費MPを削減したり、MPの自然回復速度を上げたりできる。

後者なら無属性魔法を他の属性に変換したりだ。

「MPは余分にかかるけど、マナボルトをファイアボルトにしたりできると」

「それ、すごく便利です！」

ファイアボルトならアイリスが使えるので、使うならむしろライトニングボルトあたりだろうか。金属鎧を着たゴブリンなんかには雷の魔法が効果抜群だろう。

もちろん普通に魔法攻撃力を上げるスキルも（他の魔法職には劣るものの）存在しているし、夢がいろいろ広がってくる。

「俺としては最大MPを増やすスキルを真っ先に取りたいところだな」

「そこ？　なんか地味そうな気がするけど」

「けっこう上がり幅がでかいんだよこれ。それに、俺のMPが多ければもっとさくさく進めるだろ」

エナジードレインで回復するMPは当然、レンの最大値ぶん以上は無駄になってしまう。

食事的な意味のドレインはMP満タンでも発生するので全くの無意味ではないものの、溢れてしまうと勿体ない。

「寝てる間にぐっと回復できたら便利だと思っただ」

「……ふーん。へー。なるほど」

「……そうなんです、寝ている間に」

変なことを言ったつもりはなかったのだが、不思議なことにフリーとアイリスからの反応が鈍かった。

若干遅れて無難な返答をしてくる二人を見て「変だな？」と首を傾げると、リアベルが、

「つまり、レンさんは私たちと一緒に寝るのを楽しみにしてくださいね」

「っ!？」

レンは真っ赤になって硬直した。

あの時間が幸せなのも有難いと思うのも事実なのでなんとも返答がしづらかった。

第二章

新しい出会い

「ん……」

気持ちのいい朝。

目を覚ますと、すぐ傍でレンが眠っていた。

身体には彼——もとい彼女の温もり。寝ている間に抱きついてくるのはレンの癖だ。仰向けで寝られないのでなにかを抱いた姿勢が安定するのだろう。ひどい時だと押し倒された上に抱きしめられた状態で目覚めたこともある。

まあ、特に嫌だとは思わないのだけれど。

女の子の身体は柔らかいので触れ合っても痛くないし、レンはあまり力も強くない。ほんのり甘く人を酔わせるような匂いも好きだ。

「可愛いなあ、もう」

口を開くとぶつきらぼうなのに、寝ていると美しくもあどけない。何時間でも見ていられそうだと思う。もちろん、実際にはそうも言っていられないのだけれど。

仕方ないので額にキスをするくらいで我慢する。

「ほら、レン。起きて」

「ん……」

透き通った高い声で呻くと、レンは数秒の間を置いて目を覚ました。

「おはよう、フリー」

寝ぼけた声で言ってから慌てて手を離してくるのもよくあることだ。いざとなると積極的な癖に。でも、そういうところも可愛いと思う。

「おはよ。朝ご飯の支度、手伝ってくれる？」

「おう」

身を離すのを少し名残惜しく感じつつ身支度を整える。

よく使うのでこの部屋にも着替えを置いている。レンと一緒にだと

水どころかお湯さえ用意してもらえるので便利だ。顔を洗うのに井戸で水を汲むのは大変だし、何より冷たい。

顔を洗って髪を整え服を着たら部屋を出てキッチンへ。

魔法のお陰で火起こしの時間は大幅短縮できる。薪を使ったかまどの熱はついでに部屋を暖めるのにも役立ってくれる。

だいたいレンたちが起き出すのと前後してアイリスも起きてくる（もちろんレンと一緒にいるのが逆の場合もある）。

「おはようございます、レンさん、フリーさん」

「おはよう、アイリス」

「おはよ。アイリスちゃん、スープの用意手伝ってくれる？」

「はいっ」

金色の髪に深い青色の瞳。ハーフエルフの少女・アイリスは今日も美しい。紫紺の髪と瞳を持つサキユバスのレンと甲乙つけがたい、日本人離れた容姿である。

同性としては羨ましさと共に負けた気分にもなるものの、この二人と一緒にいると男も気おくれするのかナンパもほとんどないので助かっている。

朝ご飯のメニューは前と大きくは変わっていない。

攻略する階層が進んでお金に余裕ができたのと氷室のお陰で食品を保存しやすくなったのでスープに少し肉が入るようになった程度だ。しかし、少しとはいえ馬鹿にはできない。いいうま味が出て味にぐっと深みがでるのだ。

「本当、二人ともすごいよなあ」

レンは調理の役に立たないので火や水を起こしたらお仕事終了である。

出来上がるまで待つていてくれて構わない、というか二度寝してもいくらいなのだが、最近は興味があるのかフリーたちの作業を眺めていることが多い。

「褒めても何も出せないよー?」

などと言いつつ、内心では嬉しくてたまらない。顔がにやけているのが自覚できるので仲間たちにもバレバレだろう。

料理をするのが必ずしも女の子の役目だとは思わないものの、好きな人に料理を作ってあげるのは楽しい。レンが料理を覚えてしまうところの特権がなくなってしまうので現状維持を望んでいるとは当の本人には内緒である。

「いただきますー！」

三度の食事はダンジョン攻略においても重要な要素だ。

腹が減っては戦ができない。摂取した栄養で動いている以上、これは紛れもない事実だ。美味しいご飯が食べられるとついでにテンションも上がる。

なお、サキユバスになったレンにとってはこの「美味しい」というのがもはやメインで。

お誕生日席に座った彼女に視線を送れば、フリーたちの分に比べて格段に少ない量をじっくりと味わって食べている。エナジードレインが食事になるので寝ている間にたっぷり「食べた」今はお腹が空いていないのだ。

「ところでレン。クラスの方のレベルアップはどう？」

「思ったよりも上がってるかな」

先日、レンは念願のクラスを手に入れた。

『マナコンダクター魔操師』

魔力操作を得意とするこの職業は当然、種族サキユバスのほうとは性質が異なる。経験値が分散するのもあってレベルアップは遅くなる、というのが予想だったのだが、

「サキユバスよりは数字の上がりが遅いけど、クラスの適性行動がどっかに混ざってるっぽいな、これ」

「魔操師って意外といやらしいクラスなんでしょうか……？」

と、自分でもあまり信じていないという口調でアイリス。転職で与えられた衣装は意外とエロかったものの、さすがにそれはない……と思う。

サキユバスと経験値が完全一致していないということは、えっちなことで経験値がたくさん入るわけではないのだろう。

いや、もちろん毎晩えっちなことをしているわけでもないのだが。

「あれかな。エナジードレインは有効なのかもしれない。あれってMPを回復してるわけだから」

「あー。魔力操作ってことになるんだ」

「サキユバスと相性ばっちりかもしれない。」

「じゃあ、あれだね。寝る前にギリギリまで魔法使ってから寝れば完璧？」

「庭が水浸しになりそうだな、それ」

「攻撃魔法を撃つわけにもいかないし、確かに庭へ水を捨てるくらいしかできないか。魔法の明かり？ 消えるまで寝られなくなるから却下だ。」

「とりあえず最大MP量を上げて、魔法のMP消費減らして、魔法の威力も上げた」

「レンさんが魔法をたくさん使えるようになるんですね」

「もうちょっとクラスレベル上がらないと魔法攻撃力が前くらいまで戻らないけどな。その分、使える回数は増えたはず」

「まだまだクラスのレベルは発展途上。長い目で見れば大幅なパワーアップだ。戦闘中にエナジードレインしている暇はなかなかないのでボス戦で使えるMPが多くなるのは嬉しい。」

「十一階からもハードな感じだし、気合い入れていかないかね」

「あれからレンたちはダンジョン十一階の攻略を終えている。」

「ゴブリン地獄が十階で終わったため、出てくるモンスターは新しくなった。今度の敵は二足歩行の豚に似た種族、オークである。」

「人間並みの身長を持ち、筋力では人に勝る彼らは耐久力に優れている。」

「数的は減少し、一度に一体か二体程度しか出てこなかったのが救いではあるものの、なかなか倒れない敵をいなしながら攻撃を加え続けるのはなかなか骨が折れた。」

「オーク相手だと攻撃特化のタクマでも一撃必殺は無理だったかもしれない。」

「それはそれとして羽も伸ばすけどねー？」

「楽しそうだな」

「だってデートだもん」

今日の休みは三人で本屋に行く予定だ。

レンとのデートでもあり、アイリスとのデートでもある。これなら一回のお出かけで二度美味しい。デート、という言葉にレンたちが二人して照れるのもまた良い。

なにを着ていこうか。

外出用の服は機会を見て少しずつ増やしている。日本にいた頃のようにぽんぽん買ったりはできないものの、高校生にもなると身長はあまり伸びないので買った服は長く着られる。多少のほつれなんかは自分たちで繕いながらコーデに活用したいところだ。

サキユバス化が完了してからレンが可愛い格好をしてくれるようになったのも嬉しい。

「せっかくだから私もなにか買おうかなー」

三人で連れ立って歩くと街の人から視線が集まる。

声をかけられることもあるのでそういう時は笑顔で応じる。基本、注目されるのはレンとアイリスだけけれど、気軽に声をかけられるのはフリーが多い。

「またマンガか?」

「うん。小説ってごろごろしながらぼーっと読みづらいじゃない?」

「あー、それはあるな」

そう言うレンはコスパ重視で文字の多い本狙いらしい。

気分転換ではなく時間潰しが目的ならそれもアリだろう。レンには他に最近始めた裁縫くらいしか趣味がないし。

「私は歴史の本とか買いたいです」

「アイリスは勉強家だなあ」

「とつても面白いんですよ? 教科書の短い文の中にもこんなに物語が詰まってるんだ、って」

アイリスの知識は両親が買い揃えて与えた本が中心だ。

記憶から教科書を作ってもらえばこの世界でもある程度の教育はできる。専門的な部分は暇をしている元教師にお願いすることもできる。

紙の原料となる木を生産しているだけあつて少女の家には本が豊富で、ちよつと話している分にはアイリスが異世界人だと忘れてしまひそうになる。

それでも、この後輩にとっては鎌倉幕府も文明開化も「知らない世界の物語」なのだ。

「私たちがこのくらい熱心に勉強すべきだったんだろうね」

「歴史の勉強なんてなんの役に立つんだよ、とか思つてた自分が恥ずかしくなるな」

「……もう、あんまり褒めないでください」

照れるアイリスはものすごく可愛かつたが、往来なので頭を撫でるのは我慢した。

さて。

人口千人の街はあまり大きくもないので本屋にはわりとあつさり到着する。

「空いてるかなー?」

「本屋なんてそうそう混まないんじゃないか?」

「そう? 立ち読みしてる人がいっぱいいるかもしれないよ」

なにしろ立ち読みする分にはタダだ。

……なんて言つて一時期、休みの度に通っていたら「たまには買つてくれ」とやんわり叱られたりもしたが。

「あ、ほら、私たちの他にもお客さんがいる」

さほど広くないスペースに本棚がぎっしりと並ぶ書店。

駅前などにある大型書店ではなく個人経営の古書店のイメージに近い店内には店主の他、何度か見た覚えのある姿があつた。

フード付きのコートを着込んだ男もしくは女。

手袋までして肌を隠しているのが逆に印象に残っている。フリーリとしては「肌が弱いのかな?」と思つているが、未だに素顔を見たこととはなかつた。

彼、または彼女はフリーリたちにちらりと視線を送ってから、すぐに本へと視線を戻した。直立不動での立ち読み。なかなか堂に入った構えである。

「いらつしやい。……今日は大人数だな」

「こんにちは。こつちの二人は買う気満々だから安心して」

「お前は立ち読み目当てなんじゃないか」

「……フリー。あちこちで大人を困らせてるんじゃないだろうな？」

「あ、あはは」

中年店主とレンからそれぞれ睨まれた。とりあえず笑って誤魔化しておく。

「ま、買う気になったら声をかけてくれ。それと売り物は丁寧に扱ってくれよ」

「わかりました」

素直に頷き、それぞれ目当てのコーナーへ歩いていくレンとアイリス。

自分も少女マンガを物色しようかと思つたところで、店主がふつと息を吐くの気づいた。

「アイリスちゃんと例のレンちゃんか。あのコンビは目の毒にも程がある」

「おじさん。そこは目の保養つて言うべきじゃない？」

「触つたら駄目なんだぞ？ 薬と言うよりは毒、むしろ罨だろう」

確かにそうかもしれない。フリーはレンにもアイリスにも触り放題だが。

「それこそフードでも被つて欲しいもんだよ」

「フードと言えば、あの子は立ち読みしてもいいの？」

視線で先客を示すと「ああ、あいつか？」と店主は頷いて、

「あいつはいいんだ。たまに買つてくれるし、両親にも世話になつてる」

「つてことは、こつちで生まれた子なんだ」

どんな子なのかちよつと興味がある。

知り合いの子はアイリスたち姉妹のように人懐っこいタイプが多い。大人しい子なのだろうが、果たしてどんな子なのだろうか。

話しかけてみたい。ただ、レンから釘を刺されたばかりだし——と、

「あの」

綺麗な声が聞こえた。

人の心にするりと入り込むようなレンの声とも、小鳥の囁りのようなアイリスの声とも違う。嫌な部分を意図的に徹底排除したようなクリアな声。

見ると、件の子がいつの間にかレンの傍へと歩み寄っている。

声の高さからすると女の子か。

「レンさん、でよろしいでしょうか。サキュバスの」

「ああ、そうだけど……?」

戸惑った様子で答えるレン。

謎の立ち読み少女は正面から彼を見つめると、顔を隠しているフードを丁寧な動作で取り払った。

「……綺麗な子」

表れたのは予想以上に端正な顔立ち。

肌は白く、髪は銀色。黒に近い紺色の瞳はどこか不思議な質感をしている。

歳はフリーたちと同じか少し下くらいだろうか。

少女の予想外な可愛らしさにフリーが妙な胸騒ぎを覚えるのとはほぼ同時、形のいい唇から再び声が紡がれて、

「お願いがあります。どうか、私のご主人様になっていただけないでしょうか?」

「え」

「え……!?!」

「はあ?」

声を上げたのはレンとフリーだけでなく、話し声に気づいて寄ってきたアイリスもだった。

本屋には似つかわしくない声に店主がかすかに眉をひそめたが、当の少女は意に介した様子もなくレンだけを見つめ続けている。

こっちは眼中にないというのか。

フリーにはレンの交友関係を制限する気はない。他に恋人を作ったとしてもそれはそれで仕方ないと思っっているが、それでも「ご主人

様と呼ばせてくれ」は予想外である。

ちりちりと胸が嫉妬で焦げるのを感じつつ謎の少女を睨みつける
と、

「……………ん？」

少女の顔にごくごく細いラインが入っているのを見つけてしまい、
怒りがあつという間に疑問へと変わった。

ゴーレムの少女

「君達はここをたまり場か何かと勘違いしていないか？ ……まあ、報告が入らないと困るのも事実なのだがな」

賢者は文句を言いつつもフリーリの淹れたお茶を美味そうに飲み、ほっと息を吐いた。

だんだんと世話焼きレベルを上げているレンたちもレンたちだが、この男は差し入れがなかったら何も食べずに死ぬのではなからうか。ともあれ。

本屋の片隅で「ご主人様になってくれ」と告げられたレンは、ひとまず全員で賢者の家へと場所を移すことにした。

明らかに「種族：人間」とは思えない少女。その対応は慎重になるべきだと思ったからだ。案の定、この件には年長者たちも関わっていたようで、

「思ったよりも早かったな。もう二、三日はかかると予想していたが」「たまたま早くお会いできましたので、これが好機と判断しました」相変わらず表情は変わらないものの、端正な顔立ちをした少女である。

表情豊かでとつきやすいアイリスと比べるとどこか近寄りがない雰囲気があるため、美人度で言ったら彼女が一番かもしれない。

と、隣に座った少女を眺めていると、レンの後ろに立っている（椅子が足りないせいだ）フリーリが「ふーん」と低い声を出した。

「じゃあ、賢者さんがこの子をけしかけたんだ？」

「どうしたんだ、フリーリ。いつになく喧嘩腰だぞ」

「だって『ご主人様』だよ!? 縛ったり叩いたりとか、高校生にはまだ早いでしょ」

さすがに認識が偏り過ぎではなからうか。

純真なアイリスはこれに「えっ」と声を上げて、

「私、てつきりレンさんと結婚したいってことだと……」

最近あまり聞かなくなってきたが、配偶者の男性を指して「主人」と呼ぶこともある。どちらかというところの方がまだ普通というか、

可能性としては高い。

「でもさ。結婚するってことはえっちなことし放題なわけだし、意味はあんまり変わらなくない?」

「結婚相手とセフレじゃ大違いだろ」

「とうるか、女子相手にする話じゃない気がする。」

このままだと話が脱線していくのでレンは例の少女へと視線を向け直して、

「ご主人様っていうのはどういう意味か、教えてもらってもいいか?」
「私の身柄を全て委ねる、という認識で間違いありません。命の保証と将来的に子供を作るとお約束いただければ後は好きになさっていただければ」

「ほら、私の言った通りだった」

「いや、おかしいだろ色々?!」

「どうして出会ったばかりの少女から「ご主人様になってくれ」などと言われるのか。」

「おい、賢者が俺を紹介したのか?」

「うむ。彼女は見ての通り人間ではない。加えてダンジョン探索への参加を希望しているため、君達に任せるのが妥当と判断した」

アイリスがステータス表示能力を得たことにより子供たちのダンジョン探索に希望が生まれた。

「賢者はあれから他の古参転移者たちと相談を重ね、ひとまず「今まではよりは柔軟に対応しよう」という方針を定めたい。」

様子を見ながら少しずつ子供たちにダンジョンを解禁していく。

その先駆けとして、アイリスの参加しているレンたちのパーティに異種族の少女をもう一人紹介することになった。

「なるほど。で、君の種族は?」

「ゴーレムです。母からこの種族を受け継ぎました」

ゲームやマンガの知識から簡単に表現すると「動く人形」である。

土や石を材料とし、簡単な人型をしていることが多い。サイズは人間大からそれ以上までさまざまで、多くの場合は主人の命令によって単純な作業をこなす程度の存在である。

その点、この少女は一見人間にしか見えないうえに普通に受け答えまでしていて妙にハイスペックだが、

「そもそもゴーレムって種族なのか……？」

「彼女の母親が『種族・ゴーレム』なのだ。少なくとも広義の生物ではあるし知的存在でもあるわけだから、種族と呼んでも差し支えはない」

「お母さんがいるんですね。……あれ？　でも『ハーフゴーレム』じゃなくて『ゴーレム』なんですか？」

「ゴーレムは生物的な生殖活動によつては増えませんが。父親から生命力を分けてもらい、それを蓄積して子供となる新たな『コア』を作成します」

言つて左胸に手を当てる少女。

「彼女とその母親はゴーレムの中でも特異な存在とを考えてくれ。心臓の位置にあるコアを破壊されれば生命活動を停止するし、生命維持に食事と似た行為が必要となる。見ての通り、会話や思考については我々と同レベルだ」

「食事って普通にご飯を食べるの？」

「いえ。我々は石や金属をコアから取り込んでボディの素材とします。経年劣化や破損、自己強化のために素材を消費しますので定期的に補給が必要なのです」

石や金属を食べる、というわけだ。

「……私たちより食費がかかりそうですね？」

「だからダンジョンなのだ。あそこには石ならいくらでもあるだろう？」

「もしかして壁や床のことか？」

あれを砕くという発想はなかった。

ドロップ品の中には敵の使っていた武器や防具が含まれることもあるので金属も手に入つて一石二鳥ではあるが、

「壁なんてどうやって壊すんだよ」

「マリアベルに頼めばよからう」

めちやくちや簡単に言われた。

さすがのマリアベルでも無理なんじゃないかと思いつつ、家に帰って尋ねてみると、

「問題ありません」

めちやくちや簡単に言われた。

まあ、レベルの暴力については今更なので「そういうものか」で流すとして、話の流れはこれでわかった。

ゴーレムは食費がかかる。

また、子供を作るために生命力の提供者が必要なので、ダンジョンに潜る人間を「ご主人様」として付き従う、という発想になるわけだ。

言い方が過激なだけで雇用契約みたいなものである。

「生命力の提供って俺のエナジードレインみたいなものなのか？」

「いいえ。それほど融通のきくものではありません。吸収には時間がかかりますし、提供を受けている間は無防備になります。HPやMPも回復しませんのでダンジョン攻略中に使うのは現実的でないかと」
「なるほどな」

ついでに言うとうと精神の休養および肉体のメンテナンスのためにある程度の睡眠も必要らしい。

基本的には人間と同じように扱って良いということだ。

身体も細い継ぎ目が入っていたりよく見るとつるつるしているだけであまり気にならない。レンに従う、と宣言するくらいだから我が儘なタイプでもないだろう。

「ご両親は承知していらつしやるんですか？」

「母はむしろ積極的に後押ししてくれています。父も消極的賛成の立場を取っていますので問題ないかと。どうやら私たちゴーレムは本能的に主を求めるものらしく、そういう意味でもいずれ必要な行動なのです」

「そういうことなら特に反対する理由もないな」

ネイティブ世代や困っている女の子を助けたい、というレンの想いとも合致する。

少女はこくりと頷いて、

「ボディは必要に応じて再構築が可能ですので、ご命令いただければ

お好みの形状に作り替えます。元男性と伺っておりますので胸のサイズは大きいほうがよろしいでしょうか？」

「マジか」

「……レン？」

「……レンさん？」

二人に睨まれた上、マリアベルまで自分の姿を見下ろして、

「これでは不足でしょうか？」

「ごめんなさい」

素直に謝ったうえでみんなに確認する。

「真面目な話、ダンジョンに潜りたいっていうなら助けてやりたい。どう思う？」

「わたしはいいと思います。わたしだけ特別、っていうのも変だと思えますし……」

「私も構いません。今までは荷物持ち程度の役割しか果たしていませんし、仕事が増えるのは良いことです」

となると後はフリーだが。

「いいんじゃない？」

少女はきまり悪そうにそっぽを向きながら答えた。

「いいのか？」

「いいよ。……別に、私だって本気で反対してるわけじゃないし。レಂಡってこの子にえっちなことするつもりじゃないんでしょ？」

「するか。っていうか、できるか！」

若い女の子にほいほい手を出していたらタクマと変わらない。いや、まあ、合意のうえだからそこは大きく異なるのだが、それにして最低限相手のことを知ってからにしたい。

レンは少女に向き直って、

「というわけで、うちのパーティーで良ければ歓迎だ」

「本当ですか？ あなた方の仲間に入れていただけるのであれば願ってもありません」

新たなパーティーメンバーの加入が決定。

「ところで、名前を聞いてなかったよな？ 君のことはなんて呼べば

「いいい？」

「兵藤命ひょうとうめいと申します。どうかメイとお呼びください、ご主人様」

「……そのご主人様っていうのはなんとかならないか？」

「？ ご主人様はご主人様でしょう？」

なお、メイは十三歳。今度こそ本当の歳下、後輩だった。



「ごっつ！」

ブーツに覆われた足が叩きつけられると、いい音と共に壁が砕けて破片が落ちる。

痴漢でも撃退するようなノリで石を砕いて見せたマリアベルは平然と居住まいを正して「いかがでしょうか？」とメイに尋ねる。

あらためて見ても惚れ惚れする脚線美ではあるものの、その足はともではないが凶器には見えない。

尋ねられたメイは特に気にする様子もなくポーカーフェイスのまま「ありがとうございます」と頭を下げて、

「よろしければもう二、三度繰り返していただけますでしょうか？
それでちょうど良い量になるかと」

「かしこまりました」

地面に転がった石片は一つずつ拾い上げられて、

「あの、それ飲み込むの？」

「いいえ」

年下だからか敬語抜きでのアイリスの質問に短く答えたメイはダンジョン探索用だという半袖ブラウス（ちなみに下はショートパンツ）のボタンを外し、フリーたちよりは大きそうな胸を平然と晒す。

「ちよつ、お前な!？」

「？ 特に見られて困る相手はいませんかよね？」

女子ばかりのパーティで良かった。一応、元男であるレンが目を見逃らしていると、フリーとアイリスが小さく歓声を上げた。

「わあ……!？」

「え、どうなったんだ？ ……つて、なるほどな、そうなるのか」

メイの素肌は顔同様、要所に細いラインが入っている以外は美少女のそれだ。

少女が石片を運んだのは自身の左胸。そこに押し当てられた石はまるで溶けるように消えていき、最終的には跡形もなく消失する。

確か、心臓の位置にコアがあるんだったか。

「これで『食べた』ことになるのか？」

「ええ。ある程度はストックが可能ですので、これだけあればしばらくはボディの維持に困りません」

小さな破片まではさすがに拾わなかったものの、吸収された石はメイのボディと同じ体積程度に上った。

ゴーレムの少女は淡々とボタンを留め直しながら、

「もし敵から金属がドロップしましたら分けていただけると幸いです。他のアイテムは全て皆さままで回収していただいて構いませんので」

「いいのか？ メイにも金は必要だろ？ ほら、装備を買ったりとか」

レンたちがいるのはダンジョン一階。階段を下りてすぐの地点だ。

初心者メイが加入したためゴブリンたちの巣窟に逆戻りだが、レンもクラスレベルを上げないといけないのでそれはむしろ都合。

ただ、ダンジョン攻略用の服装と言う割にメイは非常に軽装である。

肌の露出した服装はもちろんだが武器さえ持っていない。食料も水も必要ないからと荷物袋もかなりすかすかで、その代わりにアイリスの予備用の矢を背負っているくらいだ。

これは本人曰く、別に金がないわけでも急だったので用意できなかったわけでもなく、

「私に武器は必要ありません。私の武器はこのボディですので」

発言の意味はこの後の戦闘にて明らかになった。

現れたゴブリン二匹。アイリスは初陣にそこそこ緊張したのだが、メイは襲い来る敵にまるで怯む様子もなく、むしろ前へと進み出て、「なるほど、これがモンスターですか」

右の拳を叩きつけた！

マリアベルの蹴りほどとはもちろんいかないものの、殴りつけられたゴブリンはなかなかいい音を立てて後方へと吹き飛ぶ。思わずあっけにと取られていると、メイはもう一匹からの攻撃を左の手のひらで文字通り受け止めてみせる。

どこか硬質な音と共に弾かれるこん棒。人間なら手首が「ぐきつ」と嫌な音を立てているところだが、

「コアの損傷にさえ注意すれば問題ありませんね」

右で殴られて一匹目同様に吹き飛んでいく二匹目。

一応、アイリスが矢を飛ばしてとどめを刺したものの、正直一人でもどうにかなったような気がする。

これには若干反対気味だったフリーですらぽかんとして、

「メイちゃん、強いんだね」

「それほどでもありません」

答えるメイは淡々とした表情。

「私や母にとつて魔力は動力源ですので魔法が使えません。武器に対して強気に出られるのは素材さえあれば自己修復——つまり治癒が可能だからです。ゴブリン程度なら問題になりませんが、先々はボディの強化が必要になるでしょう」

「いや、それでも十分凄いつて」

これはまさしく、レンたちが常々求めていた人材。

「前衛が入ってくれば攻略がぐつと楽になりますね……！」

もう一回ゴブリンを掃討する苦労を差し引いても大きなお釣りが来そうである。

今度は山づくり？

「ほんと、前衛がいるとめっちゃくちや楽だな」

いつもの、と言つていい程度には通い慣れてきた洋食店にて。

レンは熱々のハンバーグ定食＋白ワインを前に今日の感想を口にした。

メイの初陣を終えた帰り。

一度クリアしたことのある階層ではあるものの、新メンバー加入祝いも兼ねて、ということでの店へとやってきた。

今日のメイの活躍はと言えば、初戦の後も「無双」と表現して差し支えないもので。

レンたちが手慣れていたこともあつていともあつさり一階のボス撃破に至ることができた。

「……うん。最初反対しちやつたのが申し訳ないくらい」

メイのボディは生半可な攻撃であれば「かーん！」といい音をさせて弾く。

別に罫を解除しなくても大して問題ないせいで本日仕事がほぼなかったフリーが申し訳無さそうに同意する。

これに対するメイは相変わらず表情を変えないままに、

「お気になさらず。愛人が正妻から敵視されるのは当然の事です」

「あ、愛人って……」

真つ赤になるアイリス。

初々しい反応をしてくれる彼女は癒しであると同時に、いったい何を想像したのか聞いてみたい気もする。

ちなみにアイリスの注文はきのこグラタン、フリーはレンと同じハンバーグ定食である。

マリアベルはミートソーススパゲティと赤ワイン。普通の食事ができないメイは水だけをちびちびと口に行っている。

「いったい普段どんな本を読んでいるんだ？」

「将来の参考にと恋物語の類を好んでおりますが……？」

「恋は恋でもドロドロのやつでしょ、それ」

参考資料がやけに偏っている。

「私たちは人間に比べて情緒面——特に恋愛関係に弱い傾向があるため、補強しようと思ひまして」

「まだ少女マンガ読む方がマシじゃないかなあ……」

「いや、あれはあれでわりと過激だぞ」

少年マンガではあまりお目にかかれないほど露骨なシーンがわりとありふれていたりする。

人気がないところで壁ドンされて「きゅん」とするのもどうかと思う。男の方は十中八九「このまま落とせそうだな」とか考えているというのに。

メイは「やはり難しいですね」と呟いて、

「人間の心の機微は把握しづらいところがあります」

「そういうものなのか？」

「はい。身体的な構造が異なる以上、どうしても感覚に乖離は出てきます」

例えば身の危険。

ゴーレムには自己修復機能があるため、多少痛めつけられる程度なら特に問題ない。

トラブルを避けるに越したことはないので普段は姿を隠しているが、もし男に乱暴されたとしてもボディの洗浄、あるいは再構成をして終わりである。

これを聞いたフリーは目を細めて、

「……なんかちよつと心配になってきた。この子、変な男に捕まったら大変なことになりそう」

「コアさえ壊されなければ特に気にしません」

「だからそういうことじゃないの！ ……うん、この子は確かにうちで預かったほうがいいね」

「私としても後輩ができるのは嬉しいです」

少女たちの意見にレンも頷いて、

「オークも相当強かったからな。前に立って戦ってくれるのは心強い。これからもよろしく頼む、メイ」

レンズに近い役割を果たしているらしい濃い色の瞳がかすかに揺らめいて、

「かしこまりました。ご期待に沿えるよう誠心誠意、努力いたします」



初心者向けエリアに逆戻りしたダンジョン探索は初回、および二回目の苦労が嘘のようにスムーズに進んだ。

防御力に優れ、身体能力自体も高いメイはゴブリン相手なら二対一でも余裕で勝つ。誤射に気をつける必要性は高くなったものの、MPを節約しつつ素早い敵の殲滅が可能になった。

フーリはたまに撃ち漏らした敵を急所狙いする程度で後は罨に専念できるし、レンもメイへのダメージをヒールで癒したり、新しいスキルで浮けるようになったのを活かして上から魔法を撃てる。

特別なゴーレムというだけあってメイにもヒールは有効だった。

新しい連携を模索しつつも一回の探索ごとに一階のペースでクリアしていき、わずか二週間で四階までの攻略が終わった。

「メイの手に入れた欠片もこれで二十個か」

わかりやすいようにテーブルの上へ出してみるとなかなか壮観である。

「でも、いいの？ これ売るだけでも結構な額になるけど」

「問題ありません。報酬を山分けしていただいているだけで十二分です」

当初「食事さえできればいい」と言っていたメイだが、さすがにそれではレンたちの方が落ち着かない。

ドロップ品を売ったりあれこれした収入から生活費等を差し引いた後、余った分については全員で山分けすることにした。

お菓子も酒も必要ないメイはお小遣いのほとんどを本に使っているようだ。

女子にしては珍しく服にも興味が薄いようで「最悪、裸でも問題ありません」と節約しようとする。さすがに肌は隠せ、と四人で説得し

て最低限の服は買わせるようにした。

「素材の摂取量が増えたお陰でボディの強化に回せるリソースも増加しました」

コアのある胸に手を当てて呟く少女ゴーレム。

「ボディの強度が攻撃力に直結しますので余裕があることは重要で
す」

レンたちのレベルアップとはシステムが違うものの、彼女もまた冒
険を繰り返すことで強くなるわけだ。

「ところで、今までの食事はどうしていたの？」

「母から提供を受けていました。ただ、最近になって『面倒になってき
たからそろそろご主人様を見つけなさい』と言われてしまいました」

「ああ、自分の分もあるんだろうし、ストレージを使っても運ぶの大変
だよな」

石も金属も重い。ストレージには重量制限があるため、なんの変哲
もない石を運ぶのに大部分を使うのは損した気分だ。

「父にもお願いできれば良いのですが……」

「お父さん、どこが悪いの？」

「腰をやっておりました、戦闘を控えているのです。夫婦仲が良すぎ
るせいですね」

「あら、と言いますと、メイさんに姉妹は何人いらっしやるのですか
？」

「私を含めて三人です。そろそろ四人目ができるのではないかと」

五年に一人とかそのくらいのペースだろうか。

人間で考えると早いとは言えないものの、アイリスのところでも三
人姉妹なのを考えると食費は大変だろう。

「……男性は生命力の提供に積極的と聞いていますが、それも良し悪
しですね」

自らの身体を見下ろしたメイは淡々と呟く。

家の中なのでコートは着ておらず、着ているのは簡素な服だけだ。
出会った頃に比べて胸部は成長しており、服を着けていてもそれなりに
目立つ。

「積極的な分、体力の消耗が激しいようです。母が相手好みの容姿を追求したことで拍車がかかってしまったのでしょう」

「待て、なんか生々しいぞ……!?!」

まあ、自分好みの美女・美少女がいつまでも若いまま甲斐甲斐しく世話をしてくれるなんて男の夢である。しかも相手が嫌がるどころか求めてくるのだから、つつい頑張ってしまうのもわかる。

「ねえレン。なんかゴーレムの方がサキュバスっぽくない?」

「そうかもな。別に対抗意識燃やす気もないから構わないけど」

「レンさんにはレンさんの良さがありますよ。香りや生身ゆえのふとした仕草などはメイさんにはないものです」

「レンは柔らかくて気持ちいいしね」

「……なるほど。香りの再現は困難ですが、柔軟な素材も検討するべきなのです。柔らかい肉体が寵愛に繋がると」

「いや。無理しなくてもメイは十分魅力的だから」

言う少女はレンを見つめ返してきて、

「では、生活に余裕ができましたら私にも生命力の提供をお願いします」

ドレインする立場のはずがドレインを要求されるようになってしまった。



さらに二週間が経ち、ダンジョン八階までの攻略が終わった。

新たに入手した世界の欠片は五十二個。四階までの分も含めると合計七十二個になる。

石碑の内容はアイリスの時と変化がなかったため賢者からの調査報酬は出ていないものの、欠片だけで大変な成果である。

「やはり子供達に与えられる恩恵は馬鹿にできんな。……フルに入手できれば十階までで百十個になる。これは転移者が十六階まで攻略した時とほぼ同数だ」

新規の報告事項があまりなかったため少し間を置いての訪問。

来ない間にまた部屋を散らかし放題にしていた中年男は、アイリスに続きメイもフルの欠片を獲得できた事実にも重い頷きを返した。

「子供だけのパーティを再び作ってもいいかもしれない。指導役として二名程度、若い転移者を同行させれば事故も防げよう」

「結構街も大きくなってるけど、欠片ってそんなに足りてないの？」

「充足したと見做して良いのは世界のどこにも『闇』が無くなったその時だろうか」

世界一つ分を埋めるためにいったいいくつの欠片がいるか。……考えただけで気が遠くなりそうな話である。何しろ、七十二個の欠片を使っても家二、三件分にしかないのだ。

「街の広さは確かに今のところ充分だ。向こう数年は心配せずに済む程度に土地も家も用意できている。だが、全体的な欠片の獲得量はだんだんと落ち込みつつある」

「そうなのか？ 増えそうなものだけ」

「この世界で生活していただけなら最下層を目指す必要がないからな」

熱意溢れる一握りが到達階層を更新すべく潜っていく一方、多くの転移者は「この辺りでいいだろう」とダンジョン攻略を「稼ぐための手段」に切り替えてしまう。

三十年経つてもクリアできていない状況の弊害だ。

同じ階を繰り返し攻略しても欠片はもらえないので、こうなると供給量は減っていく。

「長期戦を見据えればこそ土地は必要だ。農場や牧場、森は人口に応じて広げていくべきだからな」

その点、アイリスの作った湖は有難いと賢者は語った。

水場としても食料の供給源としても役に立つからだ。

「じゃあ、そろそろ完成させた方がいいですね」

「絵はできてるけど、作るのは後回しになってたもんね」

完成させると広げられないというプレッシャーも理由だ。しかし、十分な欠片も手に入ったことだし、そろそろ作ってしまった方がいいだろう。

「そうしてくれ。魚の供給が増えれば正月の食卓も少しは豪華になる」

「そっか。もう十二月だもんね」

空気も冷たくなってきて、ちらほら雪の降る日も出てきた。

「あー、おせちの作り方とか私詳しく知らないや。アイリスちゃん知ってる？」

「お母さんを手伝っていたのである程度はわかりますけど、自信はあまり……」

「だよ。誰かに教わった方がいいかなあ」

お正月の前には大晦日もあるし、その前にはクリスマスもある。

「鶏肉が欲しいのなら前もって予約しておくのを勧める。毎年あの時期は限られた食材の取り合いになるのだ」

「こつちでもチキンの予約は風物詩なんだ」

「日本人だからな」

クリスマスと言えば、プレゼントも用意した方がいいだろうか。知り合いの子供——アイリスの妹たちはひそかに期待しているかもしれない。アイリスの母とも相談して贈り物を検討しようと思う。

サンタさんになる必要がなくともお年玉は用意した方がいいだろうし、一緒にダンジョンへ潜っている仲間たちにもささやかなプレゼントを渡したいところだ。

そう考えるとこつちでも年末はなかなか忙しそうである。

「でも、あれだよな。こつちには時計もないから年が明けたかどうかわからないんだよな」

「初日の出も見られないしね」

この世界にも太陽は存在するものの、地平線と呼べるほど遠い土地がないため日の出の瞬間を見ることができない。

太陽は闇の彼方から光だけを届けてきた拳句、気づいたら空の上の方に昇っているものである。

賢者もこれには肩を竦め、

「私はもはや慣れてしまったが、初日の出を見るために山を作ろうと声を上げる者は毎年いるぞ」

「じゃあ、どうして今まで作らなかつたんですか？」

「主に欠片不足が原因だな。山を作るにしてもどの程度遠くに作るか、という点もなかなか決着がついていない」

日の出を見るとなれば遠いほうがいいが、あまり遠くに作ると資源の輸送が大変になる。

また、細い道で遠くに山を作っても日の出を見られる角度がものすごく限られてしまう。

メイが不思議そうに首を傾げて、

「いつそのこと作ってから考えればいいのでは？」

「まあ、それも一つの手ではあるな」

新たな欠片を消費することで地形の上書きも一応可能らしい。物凄く勿体ないので推奨されない——というかわりと強く「やめろ」と言われるそうだが。

「君達も山を作りたいんだつたな。欠片の積み立て自体は行われているから話を持って行ってみてはどうだ？ 湖と繋げる、という具体案が出るだけでもだいぶ変わってくるかもしれない」

というわけで、レンたちは年末および年始の準備を行うためにいろいろと動きだすことになった。

ぐだぐだ会議とメイ議長

「マジックアロー!」

生み出された四十本の光の矢がゴブリンの群れに降り注ぐのを追いかけるように、ゴーレムの少女が敵の群れに向けて駆け出していく。

メイの肩越しに飛んだアイリスの矢と魔法が前衛を牽制、メイは全く立ち止ることなくその脇をすり抜けると、最奥に立つゴブリンプリーストを無造作にぶん殴った!

「ギツ!」

悲鳴と共に吹き飛び、壁に叩きつけられるプリースト。

乱暴にも程がある攻略法にむしろ敵へ同情したくなりつつも、レンは新スキル『属性変換』を用いて雷属性の単体攻撃魔法——ライトニングボルトを撃ち放った。

範囲魔法とメイの強襲によって混乱し始めたゴブリンたちはそれを立て直すことができず、レンたちからの援護射撃をまともに喰らい、

「所詮はゴブリンですね。殴ってしまえば脆いものです」

あれだけ苦労した九階のボスグループがあっさりと壊滅した。



「あの、あなたが山を作ろうと動いているグループのリーダーの方……ですか?」

「ああ。俺が山の会——正確には『初日の出を見るための山と海の会』のリーダーだ」

次の休日。

レンたちは賢者から紹介された男の家をマリアベルを除く四人で訪ねた。

男の職業は大工。長年の異世界生活によって与えられた立派な肉体に最低限の服だけを纏った中年男(同じ中年でも賢者とは印象がま

るで違う)はさっぱりとした態度で出迎えてくれた。

妻だという細身の女性が当然のようにお茶を出してくれるのもどこかの家とは大違いである。まともすぎて逆に意外に感じつつも手土産(フリーとアイリスの作った煮物)を差し出し、向かい合うように席に着く。

まずはメイが口火を切って、

「先ほどの妙に長い名称はいつたいなんなのでしょうか」

菌に衣着せなさすぎである。

うすうす気づいていたがこの少女、遠慮というものを知らないらしい。

幸い大工の男は「確かに長いな」と笑って、

「でもその方がわかりやすいだろ。俺たちが悩んでる証みたいなものだ」

「つまり、山か海かってこと——ことですか？」

「そうだ。初日の出を見るなら山だ、いや海だって意見が割れててな」
日の出、日の入りというのは簡単に言うとは太陽が地平線(水平線)から顔を出す(隠れる)現象である。

高いところからだと思やすくなるし、逆に何もない低い位置に広がる水平線を用意しても日の出を綺麗に見ることができる。

まあ、もちろんこの理論はこの異世界でも自転や公転などの仕組み、世界の形が同じである場合の話なのだが。

地球人であるレンたちがあまり違和感なく生活できている時点で大きな差異はない——実はこの世界が平面だったりとかはしないだろう、というのが一般的な見解である。

「あー。まあ、山の上から海の向こうを見るのが一番いいんだろうけど……」

「それじゃあ欠片がいくらあっても足りませんよね」

「そうなんだよ」

初日の出が見たい面々が街を拡張するのに必要な欠片を除いた趣味で使える欠片をこつこつ貯蓄したことでもかなりの量の手持ちがあるものの、それを使っても地平線あるいは水平線を見られるようにす

るのはなかなか大変である。

地平線（水平線）とは現在地からずつと遠くを指すものであり、「行ったことのない場所」を深い闇が覆っているこの世界においては「作らなければ存在しない」ものだ。

東に広い海を作ってさらに西に高い山を——なんて贅沢が過ぎる。「そもそも海を作るのつてめちやくちや大変だろ？ 海までの道を作るのもそうだけど広げる時が」

「あ、そうか。欠片を使わないといけないから……」

いつぺんにばーつと作ってしまったのならいいが、そうでない場合は世界の端まで行って念じなければならぬ。端が海上にある場合は当然船か何かが必要だ。

「で、山を作るにしても熊とか狼が人里に来る可能性は考えないといけない。面倒くさすぎてなかなか実行に移せないまま今に至るつてわけだ」

「確かにそれは面倒くさいな……」

「海老やマグロを食べたいっていう海派の意見も根強いしな」

「うん。食べ物はずっちやけ海の方が美味しいよね」

フリーの返答はかなり身もふたもないが、レンとしてもおおむね同意見である。

山の高級食材という代表例は松茸だが、味やコスパを重視する若い世代からすると「椎茸で良くないか？」となる。その椎茸は菌さえいれば丸太でも栽培可能である。

「むう。山菜の美味さは子供にはわからないか」

「失礼ですが、あなたも子供の頃に異世界に召喚されたのでは？」

「うちは親が大工だったからな。伝統を重んじる傾向が強くて和食が多かったからそういうのも食べ慣れていたんだ」

だとすると余計に正月は大事だろう。

「このところ会への新規加入者が少なくなてな。最近の若者にとって正月とは『お年玉をもらうイベント』でしかないらしい」

「あー」

「あはは。まあ、そうかも」

顔を見合わせて苦笑するレンとフリー。

逆に異世界で生まれたメイやアイリスの方が「伝統行事は大事では？」「そうですね？」という反応である。

精霊がいて魔法があるこの世界ではゲン担ぎに対する心証も違ってくるのだろう。

会のリーダーはテーブルの上で腕を組むと頷いて、

「お前達が湖を作り始めたと聞いて実は期待していたんだ。道を伸ばしやすくなったからな」

「森は街の南寄りですけど、大丈夫でしょうか？」

「問題ない。西に山を作るか東に海を作るかすればいいだけだ」

海を作った場合は森の端から日の出が見られるし、山を作った場合は山の上から日の出が拝める。

「わざわざ山に登るのはなかなか大変だな……」

「年に一度の行事だぞ？ 日本だとそのために富士山に登る者がいるくらいだ。我々の体力なら多少の登山くらいなんでもないだろう」

「確かにそうかもね」

海には拡張問題がある。

「残念だけど、日の出を見るなら山の方が現実的かな。残念だけど」

「そうだな。海の幸が食べられないのは残念だけど」

「本当に残念そうだな……？ まあ、俺も人の事は言えないが」

リーダーはここで笑みを浮かべて、

「アイリスちゃんが協力してくれれば話が一気に進むかもしれない」

「私ですか？」

「ご両親は森の管理者だろうか？ 二人は森周辺の拡張には否定的なんだよ。先々のために未確定のまま残しておきたい、というのは理解できるんだが、山を作るためにはそれだと困る」

別にどうしても森から伸ばす必要はない。ただ、熊などの動物がいきなり街に来ると森を経由して来るのでは討伐のスムーズさがだいぶ変わってくる。街の人間でも殺すだけならなんとかなるが、肉を取るために「なるべく傷つけず殺す」となると慣れた狩人の方が良い。

「湖まで川を繋げれば森の動物たちも喜ぶだろう？ そのあたりの説

得に協力してもらえないか？」

「はい。結果はお約束できませんが、協力させてください」

「本当か!? 助かる!」

話をした帰りに森にも寄ってアイリスの両親に相談すると、意外とすんなりOKが出た。

「アイナたちも立派に狩りができるようになってきたし、頃合いなのでしようね」

「もちろん、拡張の仕方については事前に打ち合わせて欲しいが、山に繋げる事自体は構わないよ」

「本当!? ありがとう、お父さん、お母さん!」

リーダーの言っていた通り、娘から話を通したのが大きかったかもしれない。

了承がもらえたので翌日、リーダーのところへ報告へ行った。いきなりの大進歩に彼はおいおい喜んでくれ、これでは大人たちで進めてくれるかと思っていると、

「せっかくだからお前達も話し合いに参加しないか？」

道を伸ばすには先に湖を完成させないといけない。それを考えると確かにアイリスがいた方が楽である。なんだか大事になってきたのを感じつつも了承すると、それから休みの度に『初日の出(以下略)の会』に呼び出されるようになった。

話し合いと言っても要は「ああでもないこうでもない」と大人たちが言いたいことを言う場である。

人によつては酒を手にしており、なんとなく見えるからにグダグダである。

初回の話し合いに参加したアイリスの母は「方針が決まったら教えてください」

「……なんか、今まで山ができなかった理由がわかるな」

「うん。欠片だけが原因じゃないね、これ」

船頭多くして船山に上る。

日本でも公共事業の決定は役所等が行っていたわけで、この手のこと得意な人間なんてここにはいないのだ。

しばらく待っても話が進みそうにないので、

「先に湖完成させて来ようか」

「そうですね」

「お？ 湖を作るのか？ それは興味深いな」

レンたちが動き出したら何人かがついてきた。下見だという話だが、面白そうだから来ただけなのでは？ という気もしないでもない。

ともあれ、アイリスの両親にも声をかけた上で湖が完成。

グラウンドを含めた中学校の敷地に匹敵する面積の水源。来年の夏には百人とかで水遊びができそうである。もちろん川の端っこも用意したのでここから山へと伸ばすことが可能。

「これはいいな。新しい土地を見るのはわくわくする」

「……まあ、ここじゃ旅もできないですもんね」

悪い人じゃないのだろうが、リーダーも若干、いや相当に決断力が足りていない。

対立意見を出している双方が十分な戦闘力を持っているだけに下手に強行できないというのもわかるのだが。

主要メンバー+レンたちが話し合いの会場に戻ると酒盛りが始まっていた。

会の構成員全てが参加しているわけではないものの、結構な賑わいである。ひよつとするとメンバーの半分くらいは忘年会的なノリで顔を出しているだけなのかもしれない。

「これじゃ決まらないだろ、そりゃ」

「お、レンちゃんだっけか？ お帰り。ほら、こっちに来て一緒に飲もう」

「ついでに酒を注いでくれよ」

「そんなこと誰がするか！」

何人かからの視線に邪なものを感じてつい声を荒げる。念のため肌を隠す服装にしてきたが、どうやら正解だったらしい。

レンは手近な酔っ払いから酒瓶を取り上げると、仲間を振り返って、

「メイ。もうお前が仕切ってくれないか？」

騒ぎを見ながら「非効率的です」とか呟いていた少女は真顔のまま、しかし普段よりも素早く顔を上げて、

「よろしいのですか？」

「ああ。このままじゃ埒が明かない」

「かしこまりました。それでは……」

参加者が連れてきた子供を除けば最年少のメイは良い意味で空気を読まず、堂々とみんなの前に出て行くと宣言した。

「湖もできたことですので、『山を作る』ところまでは合意とみなします。その上で、山までの道、および山の形をデザインする者を決めましょう」

「ど、どうやって決めるんだ？」

あまりにもきつぱりと宣言したのでみんな黙ってしまった。

注目が集まる中で誰かが尋ねて、

「この場にいる者全員で無記名の投票を行います。任せたい相手の名前を一つだけ書いてください」

「今日参加してないメンバーもいるんだが」

「全員揃う機会を待っていたら永遠に決められません。不参加者は参加者に決定を委任しているものと判断していいでしょう」

「もつといい方法があるんじゃないのか？」

「ではこの場で提案を。適当と思われる方法であれば採用します」

全員が黙った。

メイに任せたレンでさえ予想外の活躍ぶりである。

「……すごいな。どこで覚えたんだ、こんなの」

「ラブロマンスの中に宮廷ものか、浮気男が裁判で負ける話でも交ざってたんじゃない？」

「人生、何が役に立つかわかりませんね……？」

投票用紙の作成、配布、集計はレンたちが手伝った。

用紙にはアイリスの持っていた余りの紙を流用した。用意がいい……と言っても湖のデザイン画を運んできたついでなのだが。

なんだか誰が選ばれるか予想できる気がする。

思いながらレンはアイリスの名前を書いた。

「——では、デザイン画は最多の指名を受けたアイリスさんをお願いします」

拍手が巻き起こる中、アイリスだけが「また私なんですか……!？」と悲鳴じみた声を上げた。

「だって前例があるし」

「湖の絵もめちやくちや上手かったもんな」

「あ、もしかしてお二人も私に投票したんですね!？」

「ちなみに私も投票しました」

仲間から三票も入っていた。

みんなから期待された少女は「ひどいです……!？」と憤慨しつつ「賢者様に凶鑑を見せていただかないと」と早くも具体的なプランを考え始めていた。

こういう真面目な子だから期待されるのである。

「では、次回の会合はアイリスさんが絵を完成させてから、ということ。完成の催促は禁止とします。よろしいですね?」

「異議なし」

ぐだぐだが嘘のようにスムーズに終わり、ぞろぞろと解散していく一同。

何人かから「頑張れよ」と声をかけられたアイリスは緊張した様子だったが、メイがそんな少女の傍に立って、

「逆に考えてください。これで絵が出来上がるまで呼び出される心配はありません」

「でも、新年まで一か月もないんだよ?」

「年明けでも来年の年末でも構いません。何年も待ってきた人たちが後一年くらい待てないはずないでしょう」

先に「催促はなし」という言質も取っている。

こうして山作成の作戦会議はなんとか平和に終わったのだった。

一家に一台、メイドゴーレム

メイを加えた新生パーティはダンジョン十階も無事にクリアした。前衛の追加に加えて一度攻略した経験、レンやフリーのレベルアップがあわさつての快勝。

主な報酬として世界の欠片二十個＋転職石一個が手に入った。

「なんか増えたぞ、転職石」

未経験メンバーが一人でもいると攻略が最初からになる、という仕様のおかげである。

若干裏技めいているが、こうでない中途加入メンバーは転職の機会が得られないことになりかねない。また、新メンバーに十二分の活躍をさせないといけないので一概にお手軽とも言えない。

というか、こうやって複数手に入るからこそ、タクマたちに三つも使ってもらうことができた……とも言える。

現状フリーは転職がいらないので新しい石はひとまずとっておくことになった。

そして、次の休日。

「メイ。なにか欲しいものとかないか？」

「？ 突然どうなさったのですか、ご主人様？」

「ほら、話し合いの時に頑張ったご褒美だよ」

レンは家でメイと二人きりになった。

フリーとアイリスは賢者のところへ凶鑑を見に行った。マリアベルは例によつて部屋で寝ているのでカウントしないものとする。

新しい後輩は話しかけると意外に饒舌だが、普段は物静かだ。

休日はリビングで静かに本を読んでいることが多い。ちなみに場所がリビングなのは自室がないからだ。四つある個室はレンたちが占領中。

誰かと同室、または誰かが二人部屋になって部屋を明け渡す、という話もしたが、

『ご心配には及びません。私はベッドでの睡眠も必要としませんので』

コンピュータにおけるデフラグあるいはスリープモード的な休眠は取るものの、椅子に座って目を閉じるだけでも問題ない。荷物さえどこかに置かせてもらえれば部屋はいらないうので「本人が言うなら……」とそのままだなっているのだった。

なので夜は暗いリビングで椅子に座って寝ている。

もし、この家に泥棒でも忍び込んだ場合、ほぼ人間にしか見えないロボ、もといゴーレムと遭遇してぎよつとすることだろう。悲鳴でも上げようものなら目を覚ましたメイに殴られてアウトだ。

リビングに本棚を置く必要はできたものの、どうせ他のみんなの蔵書もあるのでこれは特に問題ない。

むしろ私物が少なすぎるので、ご褒美にかこつけてプレゼントしようと思ったわけだ。

しかし、当の本人はあまりピンとこない様子で、

「将来的に抱いていただければ私としては問題ありません」

「そこをなんとか。新人を働かせて楽をして終わりじゃ俺の格好もつかないだろう？」

「ボディの損壊もなく、食事の世話もしていただいているわけですので、むしろこの上なく優良な『ご主人様』なのですが」

しばらく考えた上でメイは再び口を開いて、

「どうしても仰るのでしたら、衣装を一着いただけませんか？」

「ああ、もちろんいいぞ。っていうか、やっぱりメイも服に興味あるんだな」

程度の差こそあれ、女子とはそういうものだろう。

自費なら他のものを買うかもしれないが、誰かにプレゼントされるなら可愛い服を着るのもやぶさかではない……くらいの気持ちはレンにもある。というか、今の自分を自分と思わず美少女キャラかなにかだとみなして着せ替えるのはそこそこ楽しい。

「それで、どんな服が欲しいんだ？」

「はい、メイド服を。デザインはご主人様のお好みで構いません」

「待て、どうしてそうなった。……いや、だいたい想像つくな」

愛人がメイドになる、もしくはメイドが愛人になる話でも読んだの
だろう。

「ご主人様にお仕えする以上はあれが正装でしょう?」

「マンガとかでしか見たことないぞあんなの。いや、本物のメイドに
会ったことがそもそももないけど」

「では、ご主人様の常識も参考になりませんね」

相変わらず言葉に遠慮のない新人である。

ただまあ、メイの言葉にも一理ある。見た目上は銀髪美少女な彼女
がメイド服を纏ったら確かに似合うだろう。

「わかった。……でも、そういう服はけっこう高そうだな。クリスマス
スプレゼントと合体させてもいいか?」

「いただけるものと思っておりませんでしたので、何の問題もありま
せん」

そういうことになった。

「ご主人様がどのようなデザインをお選びになるのか楽しみですよ」

「プレッシャーをかけるんじゃない。俺だってそんな服選ぶの初めて
なんだぞ」

「フリー様とそのようなプレイはしないのですか?」

「できるか!」

日本なら通販で安いサンタ服やメイド服を買って「着てくれ」とか
言えなくもないが……って、そういう問題でもない。

「問題は店だな。後でみんなに心当たりがあるか聞いてみるか」

「調達元なら私が母から教わっております」

「お前のお母さんもけっこうな変人というか、むしろ元凶だったりし
ないか?」

この真偽はメイの子供にまともな教育を施したらわかりそうだ。

「じゃあ、さっそく行ってみるか」

「はい。喜んでお伴いたします」

案内されたのは街の一角にひっそりと佇むこじんまりとした店
だった。レンたちにはあまり縁のない界限というか、エリアとしては
娼館に近い。

中は意外と清潔感があり、並べられた衣装も華やかで、一目見て丁寧な造りがされている。

「いらっしやいませ。……ああ、メイちゃん。それとそっちはもしかして噂の『レンちゃん?』」

「どうも」

「初めまして。……あの、俺ってそんなに噂になってるんですか?」「もちろん。元男の子で可愛いサキュバスなんて話題になって当然でしょう?」

店主は三十歳前後の女性だった。コスプレが好きなのだろう。本人もゴスロリ衣装に身を包んでカウンターの向こうに座っている。

髪の色が黒ではなく、少しくすんだ金色だが、

「ああ、これはウィッグ」

「あ、染めてるわけじゃないんですね」

「髪用の染料はなくてもないけど結構高いの。ウィッグの方が色も長さも手軽に変えられるでしょう?」

「確かに」

ウィッグは人毛を買い取って染料で染めて作るらしい。

店主はレンの髪をうっとり見つめて、

「レンちゃんの髪なら染めなくてもそのまま使えるでしょうね……。丁寧に伸ばしてね? いざとなったら高く売れるから。なんなら私がお買ってあげる」

「考えておきます」

前にアイリスが鬘の話をしていたのはこういう人がいるからか。

せっかくファンタジー世界(?)に来たのにほぼ全員が黒髪黒目だし、ウィッグやコンタクトには意外と需要があるのかもしれない。

「ところでご用向きは? どんな衣装をお探し?」

「メイド服ありますでしょうか。できればご主人様が好みそうなデザインで」

「メイド服ならそっちなね」

意外といっぱいあった。

「それなんてどう? ……ああ、それぞれ。いかにも若い男の子が好

きそうでしょうか?」

カウンターから指さされた一着を手に取ると、それはコルセット付き・スカートとエプロンが一体化したタイプの衣装だった。胸の部分にあらかじめ布の余裕が作られており、胸の大きな女の子が着れば非常に破壊力があるだろう。

メイのサイズだと少々心もとないものの、

「バストサイズをアップする必要があるですね」

「スリーサイズが可変って便利だねー。妬ましいくらい」

身体の方を服に合わせるといふ暴挙。

メイなら極論、ここにある衣装全て着られるわけだ。

「いかがですか、ご主人様? この衣装で許されるめいっぱいまでバストサイズを上げることもできるかと」

「こんな可愛い子にそんな衣装着せて何をするのかしら」

「作った人が言うことですか!?!」

「この店のお得意様には娼婦も含まれていますからね」

とりあえず衣装は元に戻してもらった。あんな衣装をプレゼントした日にはフリーやアイリスからまた「ふーん」と言われるのが目に見えている。

「ご主人様は大きい胸がお好きなのですよね?」

「いや、まあ、嫌いじゃないけど。別に女の子の価値はそこだけじゃないぞ」

フリーたちの胸だけが大きくなったとして嬉しいか、と言われると微妙である。彼女たちには彼女たちの良さがあるわけで、安易に巨乳になられてもバランスが崩れるというか、好きになった子とは別人になってしまったような寂しさがある。

メイはこれに頷いて、

「貧乳もお好きなのですね。幅の広いご趣味で尊敬に値します」

「おい、ちょっと端的に纏めすぎだろ」

結局、レンはスタンダードなメイド服に近い一着を選んだ。スカートの長さはひざ下で、エプロンにフリルが多めになっているのが可愛いらしい。

すっかりしているので忘れがちだがメイは十三歳。この子にはこれくらい落ち着いたものの方が似合うだろう、と思ったのだ。なので決して日和ったわけではない。

「うちの衣装は基本手洗い推奨だけど、大丈夫よね？」

「はい。うちには洗濯機なんてありませんから」

文明の利器がないおかげで服選びは逆説的に楽である。

会計を済ませると、レンは衣装の包みをメイに差し出して、

「この前はよく頑張ったな。……それから、少し早いけどメリークリスマス」

「……ありがとうございます、ご主人様」

包みを受け取った少女は真つすぐにレンを見つめると、ぎゅっと包みを抱きしめて、

「大切に使用させていただきます」

意外なほどまっすぐな反応にレンは「……反則だろ」と誰にも聞かえないように呟いた。



家に帰ってフリーたちと合流すると、買ってきた衣装を見た少女たちは、

「可愛いー！」

「素敵ですー！」

幸いジト目で見られたりはしなかった、とレンはほっと胸を撫で下ろした。

さっそく着て見て欲しい、と言われたメイが着替えを始めるのもどことなく微笑ましい。

ただ、リビングでいきなり着替え始めるのは勘弁してほしいと思った。女同士だから構わないのだろうが、一応礼儀として目は逸らした。

今のメイに似合うものを選んだので衣装はばっちり映えた。

銀髪的美少女メイド。なんとというかやりすぎなくらいにハマっている。

「いいなあ。なんか私もこういうの欲しくなってきたやう」

「フリーたちにもクリスマスプレゼント用意するから、買ってもいいぞ?。」

「いいですね。いつそのことみんなを着ませんか?」

「みんなを着たらご主人様がいないのにメイドの群れが出来上がるぞ」

「でも、大掃除する時とかは気合い入りそうだよ?」

「それはいいかもな」

しばらく盛り上がったものの、フリーやアイリスはプレゼントに別ものを希望してきた。

フリーはマンガ、アイリスは歴史の本。

「そんなのでいいのか?」

「だって、メイちゃんのはご褒美+プレゼントでしょ。私たちがクリスマスプレゼントにもらっちゃったら不公平じゃない」

「それに、私たちは自分でも服を買いますから」

コスプレは楽しいが、さすがに外では恥ずかしくて着られない。もちろんダンジョンにも着ていけないのであまり実用的ではない。

「私は問題なく外出できますが……?」

「メイくらい堂々としてたら逆に大丈夫かもな」

メイド服を得たメイは積極的に家事をすると宣言、

「食事の支度も任せていただいて構いませんが」

「ご飯は私たちが作るからいいよ。ね、アイリスちゃん?」

「はいっ。料理をするのは楽しいですし、狩人としても必要な技術ですから」

「では、私は掃除と洗濯を担当しましょう」

ゴーレムであるメイは暑さや寒さにも強い。

冬は特に水が冷たいため洗濯はかなりしんどかったりする。なのでレンたちの場合、レンが作ったぬるま湯を使ったりすることが多かったのだが、メイなら井戸から汲んだ水にそのまま手を突っ込んで平然としている。

「もみ洗い用のアタッチメントを用意したいところですね」

「腕の付け替えまでできるのか」

「はい。生成するためのコストはかかりますが、ある程度のオプションでしたら可能です。母はドリルすら運用していました」

「ドリル」

「私ではまだとてもあの威力は出せません。食材を削るのがせいぜいですね」

「それでも十分役に立つんじゃない？ かつお節削るとか」

ただ、残念ながらかつお節が手に入らない。

「ん？ 削る道具か……なあ、かき氷とかどうだ？」

「あ、いいかも！」

氷なら氷室にたくさんある。

メイに頼んで削ってみてもらったところ、ガリガリガリと特徴的な音を立てつつ細かい氷の山が出来上がった。これを器にこんもりと盛り、常備しているジャムを載せれば完成である。

「んー！ 美味しい！」

「いいな、これ。ナイフで削るとめちやくちや大変だからできなかつたけど」

「はい！ とっても美味しいですー！」

ケーキを作ろうとすると食材にけっこうな金がかかる。その点、かき氷ならジャムと氷さえあればいい。この場合、氷は「ジャムを食べるためのつなぎ」として非常に優秀である。

パンに載せると主食っぽくなってデザート感が薄れる。

「これで夏だったら最高なんだけど」

「私としては氷の固定が課題ですね。片手で固定しつつ氷を削れるようなアームを作る必要があります」

「賢者さんとかの世代に聞いたらかき氷器の作り方教えてくれそう」

さすがに作り方までは教えてもらえなかったものの、形状を絵にしてもらえたのでメイがそれを元に「かき氷用アーム」を作成、レンタルの間で家宝の一つとして扱われるようになった。

再び十一階へ

「すごい……！　森が見渡せます……！」

ハーフェルフの少女がレンの腕の中で歓声を上げる。

今、二人は森の上空にいる。

メイにご褒美を渡した翌日。今度はアイリスの絵を手伝うために二人で外出することになった。凶鑑では補完できない部分、森が上から見るとどうなっているのか把握して参考にしようという趣向だ。

森を飛ぶのは前にアイリスの妹たちと一緒にやったので勝手は掴めている。

飛ぶ、と言っても浮遊移動のスキルではスピードが出ないのであまり危険もない。

一番危ないのはお姫様抱っこした少女を落としてしまわないかということだ。さすがにアイリスは結構重い。

いや、少女は太っているどころかかなりスリムなのだが、それでも成人一人分の重みである。弓を引く関係上、実用的で引き締まった筋肉がついているのもあって、物語のように気軽な空中散歩とはいかない。

だからこそ、絶対に落としたりしないように細心の注意を払う。

「参考になりそうか？」

「はい！　湖から川が伸びるイメージが描けそうです！」

さすがに空中でスケッチはできないので、この光景は瞳に焼き付けようということになる。

サキュバスになって落ちた筋力がレベルアップによって向上し、人間だった頃よりは上がった筋力を総動員してアイリスに付き合う。

森の奥、湖のあたりを浮いているため、近辺には人がほとんどいない。

スカートではなくパンツルックを選んでるので下着を見られたりはしないものの、人の多いところだったら集中力を削がれていただろう。

「……今、レンさんと二人きりなんですよね」

アイリスの方も感じるものがあつたのか、視線をレンに移してそんなことを言ってくる。

密着していると少女の体温、匂い、柔らかさをダイレクトに感じる。筋肉がついていると言ってもやっぱり女の子。男のそれとは全然違う。

夜のベッドで人肌の温もりを求めあうのともまた違った静かな雰囲気。

「俺たちと会ってからずっと頑張ってただろ。たまには気分転換もしないとな」

「大丈夫ですよ。レンさんたちのおかげで毎日が楽しいです。少しずつ、目標に向かって進めていますし」

「そっか。なら良かった」

アイリスの目標は両親を日本に帰すことである。

エルフである母親はともかく、人間である父親の方は既にそこその年齢だ。焦りは禁物とはいえ時間的余裕はあまりない。

攻略だけに専念するならレンたちのところ以外に良いパーティがあつたかもしれない。

結果的にこの子から可能性を奪っていないか、と考えると少し不安になつたりもする。

「日の出を見るつてなつたらけつこう長い道が必要だよな」

「はい。三十キロくらいは欲しいんじゃないかと」

「遠いな……。中学の時のマラソン大会は三キロだったぞ」

高いところからじゃないと本当の意味での日の出を見られないが、視点が高くなると遠くまで見渡せるので距離が必要になる。

あんまり遠くなつても管理しきれないし、かといって近すぎると都市計画に支障をきたしかねないので距離はなかなか難しい。まあ、三十キロも離れていれば山の動物が森まで来ること多くはなさそうだ。

「長い川になるな。釣りとかもできるんじゃないか？」

「賢者さまは山葵を育てられないか、と言っていました」

メジャーな薬味だが、育てるには清流が必要となるためなかなか条

件が厳しい。あれば食生活が豊かになるし是非欲しいところだ。

「あんまり責任を感じすぎるなよ。催促してくる奴がいたら俺たちからも抗議するし」

「はい。のんびりやりたいと思います。……だから、もう少しだけこうしていてもいいですか?」

「ああ、もちろん」

二人はしばらく、二人だけでの空のひとときを楽しんだ。



「さて。またここに戻ってきたわけだけど」

ダンジョン十一階。

出てくる敵の種類は一新されて、新たにオークが登場する。レンたちにとっては十階の敵よりむしろ戦いやすいくらいだったが、だからといって一概に難易度が下がったとも言いがたい。

先頭に立ったフリーが後方を振り返って、

「メイちゃんは金だらいとか頭に当たっても平気?」

「頭部への衝撃はあまり歓迎できません。思考は胸のコアで行っていますが、視界は瞳に頼っていますので行動が乱れます」

「だよねえ。じゃ、罠は一つずつ解除して行こっか」

実を言うと、十階までの罠であれば「メイを先行させて強引に踏み越える」という戦法が可能だった。

一部では「漢探知」などと呼ばれているらしいこの手法、人間がやったら自殺行為だが、素肌Ⅱ装甲であるメイに関して言えばかなり合理的である。

針や通常の矢程度なら「かーん!」と弾いてしまうので時間短縮になる。変な癖がつくと良くないとは思いつつ、アイリスにとつても二週目、レンたちは三週目だったこともあってついついお世話になってきたが、十一階から追加される罠はフリーが言った通り「天井から金だらい」だ。

ギヤグめいた見た目と裏腹に頭部への衝撃は普通に怖い。

「オークの攻撃はメイも気をつけろよ。まともに受け止めるんじゃないくて逸らすか避けた方がいい」

「心得ております。さすがに関節の強度には限界がありますので」

隊列はフリー↓メイ↓アイリス&レン↓マリアベルの順。

罫を解除しつつ進み、訪れた一戦目。太いこん棒を持ったオークの巨体にメイは軽く目を瞬いて、

「さすがにゴブリンとは威圧感が違いますね」

フリーと入れ替わるようにして先行、レンやアイリスの遠距離攻撃に追い越されつつ、二足歩行する豚のような魔物に肉薄する。

甲高い鳴き声に眉をひそめつつ、振り下ろされたこん棒をさつとかわして拳を敵の腹へと叩き込んだ。

「ピギツ!?!」

「……手ごたえあり。ですが、倒すにはパワー不足ですか」

オークは悲鳴を上げ身を震わせたものの、吹き飛ぶこともなくメイを睨みつける。

体重は軽く百キロを超えているだろう。小柄なゴブリンとは違ってさすがにタフだ。

「メイ！ いったん射線を開けてくれ！」

「失礼いたしました。ただちに」

少女が飛びのくと同時に矢+ファイアボルト+マナボルトを飛ばし、オークがかすかに怯んだところで再びメイが攻撃。

これをもう一度繰り返せば、さすがのオークも光の粒となって消滅した。

戦闘を終えたメイは軽く腕を振って損傷具合を確かめつつ呟くように、

「なるほど。このレベルの相手が雑魚とは、さすがにハードですね」

「的は大きいし、スピードは若干落ちてるから戦いやすいところもあるんだけどね」

フリーのナイフだと厚い肉のせいで心臓にも頸動脈にも深く届かなかったりして難儀する。

一戦ごとにリソースが目減りしていく上に戦闘時間もかなりかか

る。

「では、攻略の長期化さえ覚悟すれば我々にとって戦いやすい相手です
すね」

「うちにはレンがいるからね」

マリアベルにエナジードレインさせてもらいつつ全員にヒールを
かけ、消耗を補いながら進んでいけばいい。

ある意味これが初めての「まともなダンジョン攻略」になるメイに
手順をひとつひとつ確認させながらボス部屋の前までたどり着いた
ところで、

「よし。今日はここまでにしよう」

「このままボスを攻略しないのですね」

「HPは十分残ってても精神的には疲れただろ？ 焦ってミスるより
慎重に行った方がいい」

「了解しました」

なお、材質の変わった十一階の石はメイいわく「上の階のものより
美味」とのことである。



翌日の朝。

朝食の支度が済んで四人が食卓に集まったあたりで家のドアが乱
暴にノックされた。

レンは仲間たちと顔を見合わせ、

「誰か来る予定はなかったよな？」

「うん。……タクマたちが今更怒鳴りこんできたりはしないだろう
し、リーダーかな？」

「うーん。一応、俺が出るよ」

言って立ち上がると、フリーが「待った」と引き留めてくる。

「レン。自分が可愛い女の子なの忘れてるでしょ？」

「あ」

可愛くても一応男だった頃ならまだしも、今のレンでは凄みがまっ

たくない。

ぶつちやけ他の仲間がいくのと大差ないというか、変態相手の場合は逆効果な可能性さえある。

「私も行く。アイリスちゃんとメイちゃんはなにかあった時に裏口から逃げられるようにしておいて」

「わ、わかりました!」

「逃げて騒いで隣家を頼ればいいのですよね? お任せください」

短く打ち合わせを済ませ、フリーがストレージからナイフとベルトを取り出す間にもドアが再び叩かれて、

「おい!・ いないのか!」

若い男——というか、少年の声。

リーダーではなさそうだと領きあいつつ「今行くよ」と応えてドアを開ければ、見覚えのない相手がそこに立っていた。

来訪者は二人だ。

一人はドアを叩いていたと思しき少年。革でできた軽めの装備に身を包み、腰には剣を差している。

もう一人は木製の杖を持ち、魔法使い風のローブに身を包んだ少年だ。この世界では貴重品である眼鏡をかけている。

どちらも年齢的には十三、四。

目が合うと、彼らは若干鼻白む様子を見せて、

「レンって人のパーティーの家で合ってるか?」

「合ってるけど、どちら様? 会ったことはないよな?」

「レンって人に会いに来たんだ。話があつて」

ダンジョン探索者の家を訪れるなら早い時間の方がいい。これは以前、レンたちの担任が似たような時間にやってきたのと同じである。

だからそれはまあいいのだが、話というのは果たして。

……まあ、年齢からして転移者ではありえない。レンたちより遙かに強い心配はほぼないし、ネイティブ世代なら無下にするのも可哀想だ。

「レンは俺だよ。朝食は食べたのか? どうせなら食べながら話を聞

かせてくれ」

言つて、家の中に招いてやる。

フリーも特に反対はせず「スープはちよつと余ってるし、パンもまだあつたよね」とキッチンへと引つ込んでいく。

二人はレンの顔を見てしばらくぽかんとして、

「どうした?」

「いや、その。反則だろ、と思つて」

「?」

なんだかよくわからないことを口走つた後、おずおずと家の中へと入つてきた。

「なんかいい匂いがする」

「だから朝食の前だつたんだつて」

よく考えてみると椅子が足りない。とりあえず私室から持つてきて対応した。椅子は少し余分に用意しておいた方がいいかもしれない。

二人はもしかすると食べてきたのかもしれないが、食べ盛りの男子だ。「いただきます」と素直にスプーンを取つた。

「で、何の用で来たんだ?」

「ああ。俺たちもこのパーティーに入れて欲しいんだ」

「うちに?」

「あれじゃない。賢者さんが言つてた件。他の子にもダンジョン潜入許可を出すかもつて」

「ああ、あれか」

賢者には「女子ならうちで預かってもいいけど、男子は別のところに頼む」と伝えてあつたので、彼らは別のパーティーを紹介されたのだろう。

「紹介されたパーティーが納得いかなかったからうちに頼みに来たのか」

「ああ。不公平だろ、男だから入れてもらえないとか」

「確かに、言いたい気持ちはわかる」

何しろレンも元男だ。女子だからつて優遇されていたら「おかし

い」と思う。

「つても、あいつだって変なところは紹介しないだろ。そんなに嫌だったのか？」

「別に腕も、リーダーの性格も嫌じゃない。ただ……」

「ただ？」

「四人の先輩がみんな彼氏彼女持ち、っていうかパーティー内で付き合ってた気まずいんだよ！」

「あー」

「どこのパーティーだかわかった。おそらくレンたちの元クラスメイトだ。」

「えー、いいじゃない、それ。四人の関係はかんたんに崩れないから、人間関係で解散とかなさそうだし」

「それじゃ俺が彼女作れないだろ！」

「正直過ぎる」

ちなみに、さっきから喋っているのは剣持ってる方の少年である。

「そういやお前ら、名前は？」

「俺はシヨウ。こっちはケン」

「ど、どうも」

ペこりと頭を下げしてくれるケン。こっちはだいぶ大人しい性格らしい。

「ケンも彼女が欲しいのか？」

「……それは、まあ」

「で、女ばつかりのうちに入りたいと」

「だって美人が揃ってるって聞いたし。こっちの方が絶対楽しいじゃないか！」

「めちやくちや否定しづらいな」

動機が「彼女欲しい」であつてもやる気があるのはいいことである。ただし、それを正直にレンたちへ伝えてしまうのはどうかと思う。

「でもお前らを入れて変なトラブルがあつても嫌だし」

「するわけないだろそんなこと。お互いの気持ちがちやんと通じ合わないきや付き合うことにならない」

「お前ら意外に可愛いところあるな」

タクマたちとは大違いである。

つい「可愛い」などと褒めてしまうと、年頃の少年たちは「嬉しいけどプライドが許さない」とでも言いたげな微妙な表情を浮かべた。

シヨウはレンの顔をじっと見つめ——ようとして若干視線を逸らしながら、

「レンさんならわかるだろ。どうせいろいろ教えてもらうなら男より綺麗なお姉さんの方がいいって」

「めちやくちやわかる」

「レンー？ いったいどっちの味方なわけ？」

ついつい同意したらフリーにジト目で睨まれた。

やんちやな少年たち

美人とお近づきになりたいとレンたちのところへやってきた少年、シヨウとケン。

空になった食器を前にどこか切実な表情を浮かべる彼らは、男だった頃のレンとは二、三歳差。異世界では実年齢より精神が若くなりがちなのもあってかなり年下に感じられる。

無駄な自信に満ち溢れていたタクマたちに比べると好感が持てるし、助けてやりたい気持ちもなくはないが――。

レンは軽く咳ばらいをして話を戻すと二人に告げた。

「悪い。やっぱりうちのパーティには入れられない」

「なんでだよ。変な事しないなら別にいいだろ!？」

「そこはいったん置いておくとしても定員オーバーなんだよ」

パーティの適性人数は四人から六人とされている。

通路を二人ずつ並んで進むとして二列か三列。部屋では前衛後衛で半数ずつ分かれるとちよūdい。多すぎるとごちゃごちゃして逆に連携が取りづらい。

「あいつらならちゃんと言導してくれるだろうし、頑張ってみろよ。別に同じパーティじゃなくても彼女は作れるんだし」

「そうそう。あんまり強引じゃなければ街で声かけても話聞いてくれると思うよ」

レンの台詞にフリーが合わせると、大人しい方の少年、ケンが「なるほど……」と頷いた。

これは説得できそうかと思ったところで、

「そんなこと言って俺達を追い払う気だろ!」

なかなかてごわい。

シヨウの方がしぶとく抵抗を見せるとケンも黙ってしまった。

そこまでレンたちのパーティにこだわるということは、

「……ひよつとして、うちのパーティに好きな子でもいるのか?」

「なっ!?! な、ななな、なんでそうなるんだよ!?!」

「いや、めちやくちやわかりやすいなお前」

真っ赤になって慌てている。

レンだってこつちに来るまで女子とは縁がなかったわけで、そう考
えるとシヨウの方が将来有望とも言えるわけだが……ここは自分の
ことを棚に上げて可愛い弟分のように思っておく。

こうなると彼らの内心に興味が出てくるわけで。

軽く身を乗り出し、テーブルに肘を載せながら少年たちを見つめ
た。

「ここだけの話、誰が好きなのか教えてくれよ」

「だ、誰って」

目を泳がせ、ちらちらとレンたちの方を窺ってくるシヨウ。視線の
先にいるのが具体的に誰なのか、レンは判別しようとして、

「言えるわけないだろアホか！ レンさんはどつちの味方なんだよ
！」

「……なんだよ。男の気持ちならわかってやれると思ったのに」

なんだか仲間外れにされた気分である。

椅子に背を預けて不貞腐れると、フリーがくすくすと笑って、

「まあまあ。この子たちだって本人のいる前では言えないでしょ」

「早いとこ伝えた方が後に退けなくなって良くないか？」

「レンだって好きな人に『好き』って言うの恥ずかしい癖に」

「俺はもうそのくらい言えるぞ」

耳に顔を近づけて「好きだ」と囁いてやると、少女は「ぼっ……!?!」
と頬を染めた。

「今言わなくてもいいの！ ……私も好きだけど」

「っ」

なんだかレンまで恥ずかしくなってきた。変な雰囲気になりそう
なので慌てて姿勢を正す。

なお、アイリスは恥ずかしそうにこちらをちらちら見てきており、
メイは黙って真つすぐにレンたちの様子を観察していた。

少年二人はぼかんと一部始終を見守った後、

「お、女同士とか駄目だろもつたない！」

「で、でもシヨウ。女の人同士で付き合ってるなら僕達にもチャンス

があるかも」

「え、そういうのもあるのか……？」

「どうなんだ？ とでも言いたげにこつちを見てくる。

そんなことを言われても。

「……どうなんだろうな？ 彼氏持ちよりはまだチャンスあるのか？」

？」

「私に聞かれても」

「ドロドロの人間関係ですね。興味がありません」

とりあえず結論が出ないことはわかった。

「なあ、シヨウ、ケン。一緒のパーティになったからってそれだけで付き合えるわけじゃないぞ。結局は頑張つてその子の気を惹くしかない」

「それはレンさんの体験談？」

「まあ、そんなところだ。だから、こうやって我が儘を言うくらいならあいつらのところで成果を挙げる方がいいんじゃないか？」

最終的にはアドバイスめいたことを言つて説得することに。別に嘘は言っていないし、これでやる気が出れば実際にダンジョン攻略でも頑張れるだろう。

シヨウたちもこの話には興味があるのかこくりと頷いて、

「レンさんも俺たちが強くなつたら見直してくれるか？」

「ん？ ああ、ちゃんと先輩の話聞いて、命を大事にしながら冒険を続けられる奴は格好いいと思うぞ」

「……わかった。じゃあ、頑張ってみるよ」

ゴネまくつたのが嘘のように少年たちは納得して帰っていった。

二人の去った後、入れ違うようにリビングへ顔を出したマリアベル（騒がしくて起きてしまったらしい）はレンを見て、

「若い男の子を二人も惑わしましたね？」

「別に騙したつもりはないんですが」

若干不本意なレッテルを貼られてしまった。



「でもさ、レン？ 実際のところどうなの？」

朝食の片づけを終え、細々した用事を片付けたら後は部屋でごろごろする。

このところ休日もやるが多かったので今日はほぼまるまるオフである。

フリーも買い物に行くつもりはないらしく、マンガを片手にレンの部屋へやってきて我が物顔でベッドに座りこみ始めた。

まあ、特に問題はない。

こつちで流通しているベッドは「規格を共通にした方が手間が省ける」と大きめサイズだ。女二人なら並んで寝たとしても手狭にはならない。ちよくちよく体験しているのでそれはよくわかっている。

……それはともかく。

「どうって、なんの話だ？」

「男の子。なんか思ったりするのかなって。美味しそうとか」

「人を化け物みたいに言うなよ」

人間の生命力を餌にしているわけなのであながち間違いでもないのが困りものだが。

ごろん、と横向きに寝転がったまま、座るフリーの横顔を見上げて、

「まあ、なんか全般的に嗅覚が鋭くなった気はする」

「え、私汗臭い？」

「いい匂いだから安心しろ。そうじゃなくて、男子と女子の違いがわかりやすくなったってこと」

「ふーん」

ページをめくる手が一瞬止まって、

「どっちが好きなの？」

「嗅いでて落ち着くのは女だな。男のは……なんだろうな。客観的には別にいい匂いじゃないんだけど癖になることってあるだろ？」

「猫とか犬の匂いつい嗅いじやうような感じ？」

「あー。近いかも」

止められない止まらない、となるかどうかは怖いから試していな

い。

「つまりレンは匂いフェチってことかー」

「なんか嫌だなその言い方。……でも、間違っではないか」

間近に行かなくてもその人の存在を強く感じられるのは悪くない。

「俺は好きだぞ。フリーの匂いも」

「だから、そういうこと急に言うの禁止」

ぱたんとマンガを閉じた少女が振り返って顔を近づけてくる。

触れ合った唇は数秒間、離れることはなかった。



ボス部屋に入った途端、豚に似た鳴き声が大きく響き渡る。

十一階のボスはオークウォーリア。さらに一回り大きな巨体とそれに似合うサイズの手斧を持った戦士である。

さらに通常のオークが二体。

遠距離攻撃の手段を持たないが故になにも考えず突撃してくる彼らを止めるのは至難の業だ。

「マジックアロー！」

「ファイアボルト！」

十八番となった魔法十矢の攻撃で接敵前に少しでもダメージを与えたら、前衛であるメイに進行を阻んでもらう。

とはいえさすがに三体を相手にするのは厳しいため、

「ほらほら、こっちも気にしなさい！」

フリーにすばしっこさを活かして挑発を行ってもらう。

心臓や首を狙いづらいので急所狙いはできないが、腕や足を浅く裂くだけでも注意を惹くことはできる。

一体が気を取られて離れた隙にメイと対峙する通常オークへと攻撃を集中。

「マナボルト！」

新スキル「魔法増幅」。

マジックブースト

個々の魔法へMPをつぎ込むのとは別にさらなるMPを消費、威力

を強化するスキルだ。目いっぱいまで威力を上げたマナボルトはゴブリンのHPを一撃で刈り取る。当然、オークにもかなりのダメージを与えることが可能。

敵の攻撃をかわしながらメイが繰り出す拳も着実にヒットし、そこへアイリスの矢とファイアボルトが加われば、一体が沈むのに時間はかからなかった。

「よし！メイ、しばらくボスを引き付けてくれ！」

「挑発が優先ということであれば恙なくこなさせていただきますしよ
う」

次いで狙うのはフリーを攻撃しているオーク。それが終わったらようやくオークウオーリアを袋叩きして、

「……はあー。終わったあ。やっぱこいつらしぶとすぎでしょ」

ボスが消滅すると部屋にはドロップ品と下り階段が残された。奥の石碑は既に書き写しているため、内容が変わっていないことを確認するだけで良い。

世界の欠片は二十二個。増加ペースはこのまま一個ペース（アイリスたちは二個ペース）ということだが、なかなか馬鹿にできない。十一階での獲得個数は一階から四階までの獲得個数の合計を上回る。二十二階まで行けばこれがさらに倍である。

「MP最大値増やして良かったよ、ほんと」

「うん。知ってる？レンのMPって他のみんなと比べてもかなり多いらしいよ」

「MPが俺の取り柄だからな」

なんとなく胸を張ってみると「頼りにしてる」「これからもよろしく
お願いします」と真面目に返されてしまった。

「メイもありがとな。敵を引き付けてくれるお陰で各個撃破がやりやすい」

「当然のことをしたまでです。……ただ、やはりボディの強化は継続すべきですね」

「一発殴られたら俺たちもメイも無事じゃ済まないもんな……」

異世界に来る前のレンだったら即死しかねない。今でも骨の一本

や二本は軽く持って行かれるだろうし、もしそれでレンが気絶したらヒールもかけられなくなる。

攻撃魔法を撃ちながら「マジックシエル」も使う、というのもタイミング的に厳しい。

「私たちも成長しているはずなのになかなか楽になりませんね……」

「残念ながら、下層を目指し続ける限り待っているのは苦境です。前線にいる方々の話を聞いても『楽になった』という声はありません」「うわあ、もうちよつと手加減してくれてもいいのに」

とはいえ、レンたちの同期の中には既に十六、七階まで攻略しているパーティもある。

タクマたちといった頃は最速攻略組だったレンたちだが、何度も一階からやり直しているうちに出遅れてしまった。賢者曰くこれは仕方のないことだそうで、

『ネイティブ世代を多く連れていく以上、転移者のみのパーティより苦境を強いられるのは当然だ。スキル数がその分だけ減るのだからな』

アイリスもメイもネイティブ世代としては破格の実力だ（精霊魔法やボデイ改造という独自の強みを持っている）が、これが転移者なら攻撃用のスキルでさらに強くなれる。実質四人パーティであるうえに半分が異世界生まれというレンたちはかなりのハンディを背負っている。

もちろん、だからと言ってアイリスたち除け者にするつもりもなければリアベルに「抜けてください」と言うつもりもないが。

「あいつらもショウたちを連れて一階から潜り直しなんだよな」

「うん。命の危険まではないだろうけど、ちよつと大変かもね」

見たところショウたちは剣士系と魔法使い系のようだった。

アイリスのように獣相手の実践を積んでいたり、メイのように物怖じしない特性を持っているかは微妙だ。彼らを活躍させつつ大けがをしないように注意して見守るといいうのは骨が折れるだろう。

話しながら階段を下り、神殿に戻って。

「やっと来た。けっこう粘ってるんだね、お疲れ様」

「あれ？ どうしたの二人とも。……シヨウくんにケンくんも？」

石造りの神殿に足を載せたところで声をかけられた。

いたのは件のパーティの女子二人。元クラスメートなのでレンたちとも当然顔見知りだ。彼女らに寄り添われるようにして立っているのはこの前会ったばかりの少年たち。

あの時は生意気な態度だった彼らは見る影もなく気落ちしており、顔には涙の痕らしきものも見える。着衣にも傷や汚れが見えることからダンジョン探索の後だろう。

「どうしたんだ？」

尋ねると、相手パーティの少女たちはレンと視線を合わせて、

「久しぶり。また可愛くなってない、レンちゃん？」

「ちよつとね。トラブル、っていうほどじゃないんだけど、この子たちが落ち込んじゃって」

「攻略、上手くいかなかったのか？」

レンの声にシヨウたちがびくつとする。叱られた子供のよう、というか、ほぼそのままか。

「二階はきつちり攻略したよ。途中までは二人とも順調だったし、欠片も二個ずつもらったから神様？ も満足だったみたい」

「ただ、ボス戦で怖くなっちゃったみたいで……」

「なるほどな」

事情はなんとなくわかった。

レンは少年たちに近づくとそれぞれの肩に手を置いて、

「今日はこいつら預かってもいいか？ そのために待ってたんだろ？」

「お願いできる？」

「二人ともレンちゃんたちに懐いてるみたいだから、その方がいいかなって」

「ああ。俺も知らない相手じゃないからな」

今日のところは二人を連れて帰ることになった。

落ち込む少年たち、とクリスマス

「で、なにがあったのか詳しく聞かせてくれるか？」

洋食店で祝杯を挙げながら、といきたいところだが、少年たちがこの様子だと落ち着ける場所の方が良さそうだ。

シヨウたちを連れて家に戻ったレンは、夕食の支度をフリー、アイリスにお願いで、ひとまずお茶を淹れた。温かいお茶を飲むと二人も多少は落ち着いたらしい。

言いづらそうにしながらもぼつぼつと話をしてくれた。

「……怖くなったんだ」

「戦うのが、か？」

「ああ。最初は大丈夫だったのに、なんか……」

二人は今日が初ダンジョンだったらしい。

最初に感じていたのは強い緊張。初めての戦闘をなんとかこなすと、自分たちでもゴブリンを倒せることに喜びが生まれた。

二度、三度と戦闘を繰り返して、モンスターの死を積み重ねていく。

順調に探索を続けながら、彼らはふと思ってしまった。

生き物はこんなにも簡単に死ぬ。

なら、一歩間違えれば「死ぬ」のは自分たちなのではないか？

疑問に気づかない振りをしてながらボス部屋へと到着。パーティリーダーからの注意事項を聞きながら「これが終わったら帰れる」という安堵と共に「今までよりも強い敵が来る」と認識した。

今までのゴブリンは倒せたが、ボスも同じようにいくのか？

「今までと同じようにやれば大丈夫。そう言われてたのに、戦おうとしたら身体が動かなくなって……」

リーダーが守ってくれたため怪我は負わなかった。

結局、ボス戦はレンのクラスメートたちが痛めつけたゴブリンにとどめを刺しただけ。

シヨウたちの脳裏には「やらなければやられる」「やられたらああやって世界からいなくなる」という認識が強く残った。

「そう、か」

シヨウたちは話すうちに涙を滲ませていた。

涙も枯れていただろうに、水分補給した途端にこれだ。よつぽど悔しかったらしい。

しかし、レンは二人が不甲斐ないとは思わなかった。

「頑張ったな、二人とも」

「え……？」

驚いた顔の少年たちに歩み寄り、ぽん、と頭に手を置いてやる。

「まだ若いのに、あんな奴らと戦うなんて怖くて当たり前だ。ボス戦まで一気にこなしたんだからむしろ大戦果じゃないか」

「でも、みんな普通に戦ってるのに」

「俺たちは『元の世界に帰りたい』って事情があるからな。『祝福』をもらってるからお前たちよりは安心だし。……それに、戦える力があるからって怖くないわけじゃない」

「そう、なのか？」

「当たり前だろ。ここに来る前は殴り合いなんてしたことなかったんだ」

こつちに来てからも攻撃は魔法なのだが、それはともかく。

「正直、今だって怖い。ゲームと違って死んだら終わりだからな」

「じゃあ、どうして戦えるんだよ」

「慣れかな。あとは、どうしても戦いたい理由があるかどうか」

しばしの沈黙。

「女にモテたい、格好つけたいってだけじゃ駄目なのか？」

「別にいいんじゃないか？　ただ、死ぬ思いしてまで女にモテたいかどうか。それはお前たちが決めるしかないよな」

「……………」

これで彼らが「ダンジョン攻略は止める」と言ってもそれは仕方のない話だ。

命には代えられない。賢者だって犠牲が出ることは望んでいないはず。

狭い世界だ。別に命を張って活躍しなくても結婚相手くらいは見つかるだろう。近所の女の子と自然にそうなるか、あるいはお見合い

でも始まるか。

「なあ、レンさん」

しばらくして顔を上げたシヨウはレンを見上げて、

「頑張ったらデートしてくれよ」

「え？」

「ずるいぞ、シヨウ。レンさん、僕もお願いします」

妙なことを頼まれてしまった。

冗談かと思えば二人とも真剣な顔つき。

元男のレンとデートして楽しいのだろうか。どうせならアイリスとかの方が良いと思うのだが……アイリスが彼らとデートするところを想像したら若干モヤつとしたので口には出さないことにする。

そのうえでしばらく考えて、

「じゃあ、十階まで攻略できたらデートしてやるよ」

「本当か!? 嘘つかないよな!」

「ああ。……ただし、命は大事にしろよ? 死んだらなんにもならないんだからな?」

「わかってる!」

一転して表情を輝かせる二人。

まあ、死ぬのが怖いとあらためて実感した後なのだし無茶はしないと思うのだが、果たして「レンとのデート」のどこにそれほどの効果があったのか。

その後、シヨウたちにはフリーとアイリス特製の夕食を振る舞ってからパーティーの家まで送り届けた。

パーティーリーダーはわざわざレンに頭を下げて「ありがとう」と言ってくれた。「気にするなよ」と笑って答えたら彼女に引っ張られて家の中へと後退していつてしまったが。

「ちゃんとデートしてあげなよ、レン」

「約束は守るよ。デートって言っても街ぶらぶらしたりなんか食べたりにするだけだろ? 頑張ったならそれくらい付き合ってるって」

「うーん……そうだけどそうじゃないっていうか。まあ、いいや」

もしかしたらシヨウたちはこれから大きく成長していくかもしれない

ない。

若い少年たちを潜らせることにしたのにはそういう理由もあるだろう。ダンジョン探索に堪えられる期間が長く、伸びしろも多い。

身体も精神も出来上がった者だと転移者より年上になってしまい指示を聞いてくれないかもしれないし、かといって転移者の方を二年目以降の者にすると今度はパワーレベリング扱いされて世界の欠片を減らされてしまうかもしれない。

なかなかままならないものである。

「シヨウたちが成長したら独立させるのかな」

「あー、どうだろうね。その場合、アイリスちゃんとメイちゃんと一緒に組むとか？」

「え、私、レンさんたちと一緒に駄目なんですか？」

「ご主人様と別のパーティに行くメリツトが私にはないのですが」

当のアイリスたちは新パーティ結成に反対だった。別にシヨウたちが嫌いなわけではないだろうが、慣れた仲間と離れるのに抵抗があるのはわかる。

「ああ。俺もできれば、アイリスたちとこのままやっていきたいな」

「レンさん……いー」

笑顔になったアイリスが腕を取ってくる。するとフリーが自然な動作で逆の腕を確保。

一瞬リリースしたメイがどうするかと思えば、

「ご主人様。抱きついててもよろしいでしょうか」

「歩けなくなるから止めてくれ」

まあ、デートにしてもパーティ再編にしても、話が持ち上がるとしてもまだまだ先の話である。



ダンジョン探索の翌日は再び休日。

アイリスは朝食の後からさっそく山の件で絵の製作を頑張っており、筆記用具と紙を片手にうんうんうなっていた。

「レンさん。これ、やっぱり年内には絶対終わりません」

「もうすぐ年明けだもんなあ」

湖の作成だつて大変だったのに、長い川十山の絵なんてどう考えても終わるわけがない。

むしろ簡単に終わるなら会のメンバーは今まで何をしていったんだ、という話になってしまう。

「メイも言ってたけど、急いで終わらせなくてもいいよ。気になるならちよつとだけ川伸ばしとくとかでいいんじゃないか？」

「そんなのでいいんでしょうか……？」

言つて見上げてくるアイリスの青い瞳には不安の色がある。

真面目過ぎるのも考えものだ。とはいえ、レンだつて街規模のプロジエクトを任された経験なんてない。責任を感じてしまうのも当然と言えば当然なのだが。

経験がないからこそ安請け合いできる、という面もある。

「いいって。文句言われたら『今年は河原から月見でもしてろ』つて言おう」

「実際、あの方々はそれでも満足するのではないでしょうか」

お気に入りになつたらしいメイド服姿で掃除をしていたメイが立ち止まつて言う。

「平地から立つて見渡せる地平線はせいぜい4〜5km程度先でしかない、と本で読みました。であれば、山に登らなければむしろ近場で日の出が見られるでしょう」

もちろん、それだと日が昇る瞬間は見られないわけだが、街から見よりは川から見る方が障害物の関係でまだマシだろう。

時計がないので0:00にあけおめコールもできないわけで、きつちにこだわつても仕方ない。

さらにメイは少し考えるようにして、

「大まかなプランはアイリスさんが作成し、実際に川を具現化するの
は他の方に任せても良いと思います。何人かで分担すれば個性が出て逆に面白いかもしれません」

「それはいいかもな。一人でやるとえんえん似たような感じになりそ

うだし」

「今のところ大した文句は来ていませんが、もし変ないちやもんをつけられた場合にはご主人様に宥めていただきましょう」

「任せろ。いざとなれば『魅了の魔眼』を使えばいい」

あまり積極的には使いたくないスキルだが、もめ事の時は不可抗力だろう。

ここまで来るとアイリスもほっとしたのか笑顔になって、

「やっぱり、レンさんは頼りになりますね」

「そんなことないって。むしろ頑張ってくれてるのはアイリスとメイだし」

「もつと褒めていただいても構いませんよ」

「メイはちよつと凶太すぎるかもしれないけど、アイリスも自信持っていていいぞ」

「ふふっ。はいっ、そうします」

次の日。レンたちは前日までに描けた分の絵——5kmぶんあるかないかをリーダーに提出して「川の作成自体はお任せします」と丸投げした。

これで「早くしろ」と急ぎ立てられるのはアイリスではなく会のメンバーの方になる。ついでに川の出来も連帯責任だ。

人選で揉めた場合は今回の日の出もナシになるかもしれないが、レンたちはそこまでこだわっていないので特に問題ない。

若者にとって重要なのはむしろお正月の数日前、

「メリークリスマスマス！」

チキンとケーキとプレゼントの日ことクリスマスマスである。クリスマス由来？ そんなもの大多数の若者にとっては割とどうでもいい。

レンたちパーティーも我が家でささやかなパーティーを開いた。アイリスの家と一緒に、という手もあった（実際、アイリスの妹たちから誘われたりもした）のだが、他でもないアイリスの母から「仲間同士での思い出作りも大切ですよ」と言われ、一年目くらいは仲間だけで……ということになったのだ。

食卓に並んだのは今のレンたちなりのご馳走。

一羽分丸ごと買ってきてじっくり焼き上げた鶏肉に、いつもより具材が多めのスープ、たつぷりのパンに、ケーキの代わりとして用意したクッキー（数種類のジャム添え）、ちよつとお高めのワイン。

「メイちゃんがご飯食べられないのが残念だけど……」

「お気遣いなく。私も素敵にご馳走をいただきましたので」

メイの席の前には鍛冶屋から格安で譲り受けてきた鉄くずが積み上げられている。金属はボディの強化に重要、ということ、表情はあまり変わらないもののご満悦の様子。

「チキンは私とフリーさんで頑張りました！」

「アイリスちゃんのお陰で火加減ばっちりだからきつと美味しいよー」

「めちやくちやいい匂いしてるもんな」

料理ができない分、主に買い出しを担当したレンは思わずぐくりと唾を飲み込む。こういう時は「料理上手なメンバーがいてくれて本当によかった」とあらためてしみじみ思う。

パーティを早抜けして娯館の方へも顔を出す予定のマリアベルはいつもの微笑みを浮かべて、

「ワインは私たちからです。多めに買い込みましたのでたくさん飲んでください」

「あはは。これは明日きつと二日酔いだねー」

笑いながらチキンにナイフを入れて切り分けていくフリー。四分割とはいえ、皿に盛られた肉はかなりの大きさ。

「去年のクリスマスは家族とフライドチキンだったぞ。下手したら今年の方が豪華なんじゃないか」

「そこまで言ってもらえると作った甲斐があるよね」

「はいー」

いただきますを言って、待ちに待ったご馳走を食べ始める。チキンを一口食べたらパンを口に放り込み、合間にスープを挟む。もちろんマリアベルと娯館のみなさんからのワインもありがたくいただく。

「美味しい」

ほう、と、恍惚の吐息が漏れた。

「あそこの洋食も美味いけど、フリーたちの料理も最高だよな」

「えへへー。これからもずっと食べたい？」

「ああ、食べたい」

こつちに来てからこういうことを素直に言えるようになった気がする。サキユバス化の影響か、それとも女子と過ごすようになったせいか。

マリアベルがにこにこしながら「試しにもっと酔っていたらきましようか」と不穏なことを呟いて、

「アイリスさん。レンさんにお酌をして差し上げては？」

「あ、はいっ。どうぞ、レンさん」

「ありがとう、アイリス」

酒のせいかわ表情筋が緩くなっている。だらしない笑顔になっていないといいのだが、レンの顔を見たアイリスは目を逸らしてしまった。駄目だったかもしれない。ちよつと気を引き締め直した方がいいかと思つたところで、

「レン、私にも注がせて」

「いや、まだグラスにいっぱい入ってるから。むしろ俺にも注がせろ」
わいわい騒いでいるうちに自重するのを忘れてしまった。

今夜は他の家も似たようなものだ。少しくらい大きな声を出したところで文句を言ってくる者はいない。楽しむべき時にめいっぱい楽しんで英気を養わないとダンジョン探索なんてやっていられない。
「さて、適当なところでプレゼント交換もやっちゃうか」

「賛成ー」

レンはフリー、アイリスへ本人の希望通りマンガと歴史本を。マリアベルにはこれまた本人の希望で女性同士の恋愛小説を贈った。

フリーたちからのプレゼントはと言うと、

「はい。可愛い服と下着のセット」

「私たち四人で選んだんですよ」

絶対にダンジョンには着ていけない黒のドレスに同色のブラとショーツ。背中が大きく開いたデザインになっているため翼があつ

でも窮屈ではない。

確かに可愛い。可愛いが、

「これ、パーティとかに着ていくやつだろ？」

「パーティなら今やつてるじゃない」

「まじか」

今着替えて来いと促され、さっそく袖を通すことに。

結果、フリーたちからは大好評。可愛い可愛いと連呼されるとレンも満更ではなかったものの、ご馳走をごぼして服を汚してしまわないか注意を払うのが大変だった。

レンと年明け

年末年始はダンジョン攻略はお休みということにした。

飲み過ぎて動きたくなくなったから、というわけでは決してない。クリスマスパーティーをやつて「今年一年お疲れ様」ムードを出した後、ダンジョンでばたばたするのは微妙じゃないか？　と思つたからだ。他のパーティーも似たようなところは多いらしい。

代わりに大掃除をしたり、繕い物に精を出したり、攻略本をあらためて精査してみたりといったことに時間を使った。

大晦日は年越しそば……は無理だったのでスープパスタを食べた。日の出に執念を燃やしている例の会は有志を募つて川で月見会、からの日の出を見る会を執行したらしい。

（レンたちはそこまでして風情を感じたいとは思わなかったし、行つたらお酌させられて大変だろう、ということでも不参加）

時計もないし起きていてもなあ……ということでも普通に寝た。

翌朝。寒さを感じて目を覚ますと、

「うお、積もってる……!」

外が一面、銀世界になつていた。

夜のうちに降つたらしい雪が数センチは積もっている。お陰で窓を開けるのも一苦労である。「ファイア」の魔法で出した炎を使い遠めの距離から温めてから開くと、

「おはようございます、ご主人様。雪ですよ、雪」

「なんで雪だるまなんか作つてるんだ、メイ」

「勿体ないかと思ひまして」

ゴーレムの少女が家の庭で遊んでいた。

服は上下一枚しか着ていない。長袖だからまだマシだが、さすがに寒そうである。

メイは自身の半分ほどの大きさの雪だるまの傍らに立って真顔のまま、

「犬は喜び庭駆けまわるものなのでしょう?」

「犬か」

「わんわん」

せめて表情を作って欲しい。いや、白い雪に銀髪の少女はとても映えるが。

「どうしたの？　なんか騒いでるけど……って、なんでメイちゃん雪だるま作ってるの!?!」

「そうなるよなあ……」

程なくアイリスも起きてきた。彼女も雪にはしゃぐかと思ったたら雪が降ると動物たちの活動が鈍るんですよね……」と渋い顔。

とりあえず火起こしや水の用意を済ませ、フーリとアイリスに朝食の支度をお願いして、

「俺もちよつと外に出てくるかな」

「雪だるま作るの?」

「雪を解かすんだよ!」

メイと同じような格好でも風邪はひかないだろうが、一応もつと着こんだ格好で外へ。新年早々、かなり強烈な寒さである。

「あ、新年の挨拶忘れた」

「朝食の時でもいいのではありませんか?」

「それもそうだな」

メイが遊ぶ分の雪は確保してやりつつ、家の周りに積もった雪へ「ファイア」を次々に放り込んでいく。何発か投げれば風呂を沸かせる程度の火力はあるので雪は次第に解けて水へと変わっていった。

「おお、これなら雪かきいらすですね」

「MP使ううえに地面が水浸しになるけどな……」

「MPの補給でしたら私をお使いください」

「冷え切った手でほつペを触るんじゃない」

これでもかと冷えた無機物の手はある意味凶器だった。

ともあれ、多少のエナジードレインはできた。浮けるのを活かして屋根の雪も処理する。一気にやろうとすると「どきっ!」と落ちてきかねないので場所を見つつ解かすのがポイント。

「うわ、すごく便利そう。ね、良かったらこつちも手伝ってくれない?」

「いいですよ」

近所の家からも声をかけられ、そっちの雪にも炎を打ち込んだ。たっぷりあったMPがごっそり減ってしまったものの、そのお陰で経験値がアップ。身体を動かしたことで体感温度も和らいできた。

メイは残った雪を一箇所に集めたうえで雪だるまの兄弟（姉妹？）を量産していた。

「父の故郷の雪はもっと水分が多くて雪だるまが作りやすいとか。羨ましい話ですね」

「あー。俺は雪を嬉しいと思ったのとか子供の頃だけだな。中学入ってから普通は面倒くさかった」

解けたら解けたで路面が滑る原因になるし、積もったら歩きにくくて通学に手間取る。

大学受験の日は高確率で雪が降る、なんていう伝説もあった。

「……大学かあ。戻ってから受験するの面倒だな。いや、その場合、高一からやり直しになるのか？」

「レンー、メイちゃんー。そろそろご飯にしよう」

「おう」

「わかりました」

家の中に戻ると朝食の支度ができていた。

おせち料理は海産物が結構な割合を占めるのでこれまたきちんとは再現できない。それでも栗きんとんや野菜の煮物などが並べられ、近所の家が年末についた餅を使って雑煮も用意された。

さらに、小さめのボトルに入った透明な液体。

「おお、日本酒か」

「うん。お米が貴重だから高いんだよね、これ」

寝ていたマリABELも起きてきて「リビングは暖かいですね」と目を細めた。

全員が食卓についたところで、

「あけましておめでとうございませす」

恒例の挨拶。異世界に来てまでやることか、という話もあるが、なんとなくやらないと落ち着かない。アイリスたちにしても親世代が

そんな調子だから普通に毎年やっていたらしい。

「お餅は一人二個までだからねー。それ以上のお代わりはなし」

「マジか。うんざりするほど食べてたのが懐かしいな……」

「ねー。向こうじゃおつきな袋に入った切り餅が安く買えたもんね」

米は作るのに広い土地が必要になる。現状だとたくさんは獲れないのでなかなかの高級品だ。もち米となれば猶更。

「あれだな。山作るとか言う前に田んぼ増やすべきなんじゃないか？」

「そうかも。せつかく川作つたんだし有効活用できそうだよね」

「でも、森を広げる邪魔にならないようにもう少し川を伸ばしてからにして欲しいです」

「そういえば川で砂金は取れないでしょうか。貴重な素材ですので是非取り込みたいです」

「メイさん。硬貨を食べるのは極力避けてくださいね。流通が滞りかねません」

レンも朝から動いてカロリーを使ったせいかもしれないもより多めに食べた。

日本酒の力もあって身体はほかほか。動く気力があるうちに風呂を沸かして身を清める。わざわざ昼間から風呂に入るのは体温を持続させるためもあるが、それ以上に外出の予定があるからだ。

綺麗になった身体に纏うのはクリスマスでもらった下着とドレス。

「まあ、一番晴れ着っぽいので言うところだよな」

色はこの際気にしない。この異世界ではさすがにそこまで厳密なものではない。フーリやアイリスもそれぞれに私物の中から華やかな服を選んで身に着けている。

「ご主人様。私はメイド服でよろしいでしょうか？」

「さすがにコスプレはどうなんだ？ いやまあ、一番高い服ではあるし、いいのか」

「では、レンさん。私の装いはいかがでしょうか？」

「マリアさんは……着物ですか!?!」

艶やかな赤色。髪もかんざしで結び上げられており、彼女だけまる

で日本にいるかのような」

「すつこい。それ、いくらしたんですか？」

「まあ、家一軒分くらいは払いましたね。仕事で特別に見栄を張りたい時用のとっておきです」

娼婦たちもこういう専用の衣装を一着は持っているという。マリアベルの場合は責任者の立場なのでエロい意味での接客用ではなく、普通の着物である。にじみ出る大人の魅力ばかりはどうしようもないが。

「じゃ、行くか。初詣」

「おー！」

向かう先は、神殿。

外に出ると他にも同じ方向へと歩くグループの姿がある。

一月一日の神殿は普段とは異なり、神社のような役割で用いられているらしい。初めてのレンたちは半信半疑だったが、近づくにつれて賑わいが大きくなっていくのを見ると実感が湧いてくる。

有志によって除雪されたらしい石の階段は綺麗になっており、上っていく人と降りていく人が何人も見られる。

男はラフな格好の者も多いが、女子の多くは思い思いに着飾っており、レンたちの格好もそれほど目立たない。ほっとしつつ階段を上ると、

「おお、君達も来たか。あけましておめでとう」

「あ、賢者さん。あけましておめでとうございます」

「今年もよろしく……いや、まあ、ほどほどに付き合ってくださいましよ」

「待て。どうしてそこで口ごもった」

日頃の行いのせいである。

神殿内はダンジョンの入り口が今日だけ封鎖され、聖職者系クラス的女性数人がおみくじを販売し、ホットワインを配っている。

知り合いに挨拶回りを行っている年長者の姿も複数見られ、賢者もその中の一人だった。酔っているのか若干顔が赤い。

「そうだ。あんた、シヨウたちを爰に唆さなかつたか？ まだ若いん

だからプレッシャーをかけすぎるなよ」

「心外な。約束通り君達を紹介したりはしなかったし、安全に配慮して紹介先を選んだ。……』『どうしてもレンたちが良ければ直接交渉しろ』とは言ったがな」

「それが余計だったんじゃないか？」

「断って引き下がったのなら問題なからう。それより、一杯どうだ？」

差し出されたワインは「悪いけどやめとく」と辞退した。

「家で一杯飲んできたからな。これ以上飲むと眠くなりそうだ」

「なるほどな。違うない」

「賢者様。お母さんたちとは会いましたか？」

「いや。娘たちもいることだし、午後になってから二人だけで来るのではないか？」

「そっか。じゃ、私たちから森に挨拶に行こっか」

「そうだな」

「では、私は娼館の方に顔を出してきます」

途中でマリアベルと別れたレンたちはアイリスの家へ挨拶に行き、主に女性陣から歓迎を受けた。

「せっかくですからお雑煮でも食べていってください」

「いいんですか？」

「ええ。多めに調達してましたから」

さすが、森の管理者の家はご馳走のグレードが違った。レンたちより格段に豪華な正月料理を振る舞われ、期せずして再びお腹がいっぱいになってしまった。

ちなみにメイの家の方はというと、

「我が家への挨拶はいらないでしょう」

「どうして？」

「どうせいつも通り夫婦でいちやいちやしているだけです。下手をすれば妙な場面に出くわしかねません」

「うん、やめとくか」

三が日が過ぎたあたりで挨拶に行くことにして、アイリスの妹たちにお年玉を渡したりしてのんびりと過ごした。



十二階のボスはオークエリート。

ウォーリアの強化版であり、攻撃力と体力がさらに高くなっている。攻撃方法は「近づいて斧を振り下ろす」とシンプルだが、選択肢がひとつしかないからこそ迷いがなく恐ろしい面もある。

通常のオーク二体とウォーリア一体を連れたこのボス相手に、開幕、アイリスの新魔法が放たれた。

「ストーンバインド！」

ハーフエルフの少女の要請に従った大地の精霊がボス部屋の床石を動かし、エリートの足へと纏わりつく。十分に絡まったらすぐさま硬化して彼(?)の足を繋ぎとめた。

作戦成功である。

ファイアボルトよりも難度が高いうえ、下手に床を荒らすと後で通る時に困る……ということを使いどころが悩ましかった呪文だが、ボス部屋なら多少暴れても問題ないし、オーク系の敵には遠距離攻撃がない。

「皆さん、今のうちに！」

足の拘束をなんとかしようともがき始めるエリートへ弓を射かけながらアイリス。

もちろん、この隙を逃すわけにはいかない。

「ストーンレイン！」

アイリスが石で来るなら自分も、ということ、レンは「アローレイン」の属性を変更、大地の属性に変えて降らせた。

物理属性となる代わりに物理的な衝撃を伴うようになり、オークたちの足を多少ながら繋ぎとめてくれる。

MP量というアドバンテージを活かして二度、三度と発動させて時間稼ぎ、およびダメージの蓄積を行ったところで、

ゴッ!!

オークの片方に駆け寄ったメイが手にした「武器」を跳躍しながら

叩きつけた。

オークからのドロップ品。木製の大きなこん棒がゴーレムの怪力を余すところなく伝え、半ばのところまで折れ砕けながら大ダメージを叩きだす。

「やはり木製の武器は強度の問題がありますね」

だが、十分な戦果は挙げた。

こん棒を喰らったオークはメイが立て続けに繰り出した蹴りを『急所』に受け、光の粒子となって消滅。

「フリーさんもあの急所を狙ってはいかがですか？」

「やですよ。そんなことしたらナイフ買い替えなきゃいけないじゃないですか」

「血や内臓より嫌か。……嫌だな」

仕方ないのでレンがマナボルトの土属性版「ストーンピア」で狙ってみた。狙いは微妙に外れたものの、メイが取り出した二本目のこん棒が上手く当たって撃破。

「土属性もなかなかいいな」

「調子にのって石碑を壊さないようにしてよね？」

敵の数が減ったところでフリーリのバックスタブも決まり、年始最初のダンジョン探索も見事、成功に終わったのだった。

「しかし、難易度の上がり方がえぐいな」

「今の敵とかゴブリン軍団と戦ったら勝てるもんね、たぶん」

キングが率いているでもゴブリンはゴブリン。オークにかかれば二、三体まとめてなぎ倒されかねない。的がでかく動きが早くないからなんとかなっているものの、総戦力は早くも危険なレベルに到達している。

「十六階とかまで行ったあいつらはすごいな、本当」

新しいキス

「ウォーター」

ちやぶちやぶと浴槽に水が溜まる。

「ファイア」

炎が投下されるたびに水の温度が上がり、やがて風呂が沸く。

「フリーズ」

湯の温度が下がり、やがて凍る。

「ファイア」

以下繰り返し。

「うーん。やっぱりもの凄く地味だなこれ」

えんえんと魔法を使つて経験値を稼ぐ方法。

思いついたので試してみたものの、なかなか地道な作業である。ゲームのレベル上げは苦にならないタイプだが、これはさすがに精神に来る。

余らせておくよりは確実にいいのが逆に困りものである。

ステータスを表示し、一回ごとの経験値上昇値を眺めつつしばらく続けてっていると、

「お疲れ様です、レンさん」

「アイリス」

ぴと、と頬に柔らかな手が当てられ、金髪の美少女がレンの隣にしゃがみこんだ。

触れ合つた部分から少女の生命力がほんのり流れ込んできて心地いい。

「どうですか？」

「めちやくちや地味だな」

熱して凍らせてを繰り返していると「意味あるのかこれ？」という気分になる。

回数を減らすために魔法増幅マナブーストを併用してみたら経験値効率が出た。

反復練習は何事においても基礎の基礎ということか。

「昼間修行するならともかく、寝る前にMP使いたいだけならこの部屋に明かり設置しまくる方がいいかもな」

浴室は入浴時しか使わない上に中が隠れるので明かりがいっぱいでも支障はない。変にブーストしなければ朝までには光も消える。

寝ている間にエナジードレインすれば消費したMPが回復できて一石二鳥である。

「じゃあ、また一緒に寝てもいいですか？」

「ああ、もちろん」

「嬉しい」

肩が触れ合うような距離で微笑むアイリス。

距離が近くなったな、と思う。抱き合って寝たり抱き合って飛んだりしていたのだから当然と言えば当然なのだが。

「だんだんダンジョンが厳しくなってきましたね」

「ああ。敵もそうだけど、だんだん広くなってるんだよなあ……」

レンたちはダンジョンの構造確認を攻略本に頼っている。

一階の地図は一ページにあっさり収まって余白がだいぶあったものの、直近で攻略した十二階の地図は一ページにみっちり詰まっていた。

全部探索した場合の労力はもちろん跳ね上がる。

マップピングの手間がなく、迷う心配もしなくていいだけで相当楽をしてはいるのだが。

「三回で一階攻略に切り替えた方がいいかもな」

一回目と二回目でその階をくまなく回り、三回目でボスを倒す。

これなら一回ごとの労力を以前のレベルに戻せる。

「それがいいかもしれませぬね。皆さんにも相談してみましよう」

「悪いな。またペースが遅くなって」

「そんな。私だって大事なことがなにかくらいわかってるんですよ？」

「ああ。アイリスのことは頼りにしてる」

ちなみに、マップ情報があるのにくまなく探索するのは何故か、と言えばもちろん「宝と経験値のため」である。最短ルートでボス部屋

に向かえば時短にはなるものの、戦力的な余裕はどんどんなくなっていくだろう。

経験値稼ぎのために同じ階を周回する羽目になるくらいなら最初から全部回っても問題ない。

「アイリスたちが『祝福』を受けられるまで、それかマリアさんが本格参戦できるようになるまでは俺が頑張らないとな」

盗賊であるフリーリは純粋な戦闘職ではない。敵がオークになって攻撃力が上がった今、あまり無理はさせられない。

となればクラスも得てスキル数の増えたレンが活躍するべきだ。

アイリスは目を細め「ありがとうございます」と囁いた後で尋ねてきた。

「今度はどんなスキルを取るんですか？」

「んー、クラスの方は順調に強化すればいいと思うんだけど、サキュバスの方が悩ましいんだよな」

せっかくなのでスキル一覧を表示してみる。

最近、サキュバスのレベルアップで取ったのは「ドレインマジック（攻撃魔法に微量のエンジードレイン効果を付与）の2レベルめ」と「キュア（状態異常回復＋微量のHP回復）」である。

スキルの取得状況やサキュバスの種族レベル等を条件に増えるスキルもあるため、次に何を取ろうかなかなか悩ましい。

素直に考えるとMP効率をさらに上げるか最大MPを増やすかなのだが、

「……あの、レンさん。これって」

アイリスの指がひとつのスキルに触れる。

画面が切り替わり、そのスキル——「ドレインキッス」の詳細が表示された。

「あー……。そこにも書いてあるけど、キスした時にすごいエネルギーを吸収するスキルだな」

「すごいエンジードレイン……」

「すごいって言っても吸収スピードと変換効率の話だぞ。吸い取るHPの量自体は変わらないっばいから危険はないはず」

レンは慌てて弁解した。いや、別にそれを取るとは一言も口にしていないのだが。元男だった身として女子にこの手の話をするのは躊躇してしまう。

だというのに。

「これを使えば簡単にレンさんのMPが回復できるんですか……?」

少女は顔を横に向けてレンの瞳を覗き込んできた。

「まあ、今までよりは格段に早くなると思う。色々問題があるけど」

「いいんじゃないでしょうか、これ」

「……いいのか?」

正直、一番抵抗がありそうなのがアイリスだ。

フリーは今更嫌がらないだろうし、メイも同様。マリアベルもおそろく快諾してくれるだろう。ただ、アイリスは恥ずかしがると思っていた。

しかし、

「レンさんは嫌ですか? 私とキスするの」

「そういうこと言うと今すぐキスするぞ」

「いい、ですよ?」

レンは右手を持ち上げるとアイリスの手を取り、一緒にウィンドウを操作した。

ドレインキッスの取得を確定。

「……取っちゃいましたね」

「取っちゃったな」

青い綺麗な瞳が少しずつ潤いを増していく。

それが悲しみや恐怖からくるものではないとわかっているレンは、アイリスの唇にそっと顔を近づけた。

「……んっ」

ほんの二、三秒。

唇を離すと、アイリスは息を我慢していたのか「はあっ」と大きく呼吸をした。

彼女は頬を紅潮させたまま至近距離からじっとレンを見つめて、
「しちやいました」

「しちやったな」

「……責任、取ってくださいですか？」

責任。

あいにく、女になってしまった身としては安易に「結婚する」とも言えないし、フリーたちとの触れ合いを止めることもできそうにないのだが。

レンは真つすぐに少女の瞳を見つめ返しながら答えた。

「もし、どこかのパーティから『アイリスが欲しい』って言われたら絶対に嫌だつて言うよ」

「じゃあ、これからもずっと一緒ですね」

その言葉にレンは笑って、

「ああ。いつか、ダンジョンをクリアするまでな」



可愛くて清潔な下着を身に着けながら、アイリスは以前母と話したことを思い出した。

『私は、レンさんにならアイリスを任せてもいいと思っているわ』

当時の自分はそれを聞いて物凄く慌てた。

母親とはいえ——いや、母親だからこそ、だろうか——恋のことでストレートなアドバイスをされるのは恥ずかしかった。経験のないアイリスにとって「それ」は未知の世界で、だからこそ踏み出すのが怖かった、というのものもある。

けれど、話自体を「やめよう」と言い出すのももったいなくて。

おずおずと、小さな声で母に尋ねた。

『どうして、レンさんならいいの？』

『一番は、きっと彼女も私と同じで長く生きられる種族だから』

純粋なエルフである母は四十を超えても少女のように若い。若々しい、ではなく、本当にまだ老けるような年齢に達していないのだ。最近では父と並ぶとまるで親子のようにさえ見える。

具体的にエルフが何年生きるのかはわからない。

ただ、母の血を引いているアイリスも人よりは確実に長生きする。人間と結ばれれば、伴侶の老衰を見送らないといけない。

『サキュバスは生理的な機能でも人間より優れているのでしょうか？それはきつと肉体に縛られる度合いが人間よりも低いということ。長く若い身体と心を保って生き続けることができる』

『レンさんとなら、ずっと一緒にいられる』

『そう。そうすれば、私のようにあの人を見送らなくて済むでしょう？』

言つて母は少し寂しそうに笑った。

ダンジョンでモンスターに殺されでもしない限り、母が取り残されるのは確かな未来だ。

好きな人が自分を残して逝ってしまった後もずっと生き続けなければいけない。

想像したアイリスはあまりの恐ろしさにぶるつと震えた。母はそんな様子を見て微笑み、

『アイリスたちには私と同じ思いはして欲しくない。だから、長生きする相手を選んでくれたら嬉しい。……もちろん、それだけじゃないけれど』

母はレンの性格自体も気に入ってくれている。

妹たちも懐いており、遊びに行くたびに「相手をしてくれ」と強請っている。アイリスが（若干の嫉妬を交えた）注意をしても直る様子はない。

外傷もなく生命力だけを奪う攻撃魔法、宙に浮いて手の届かない場所にアクセスする能力、魅了によって悪い輩を懐柔できる可能性。能力面でも将来森に住むのにうってつけだ。

『それに、好きなんでしょう？』

『……うん。でも、私たちは女同士だし』

きつと子供は作れない。

暗にそう告げると、母は「別にいいじゃない」とあっさり言った。

『もちろん、アイリスの気持ち次第だけど。賢者さまの言うことなら気にしなくていいわ。どうしても言うならなんとかする魔法な

りアイテムを探してみてもいいしね』

『そんな方法、あるのかな?』

『なかったら、アイリスは諦めるの?』

下着の上から寝間着を纏って、きゅつと手を握りしめる。

「……諦めたくない」

廊下に出ると家の中は静かだった。

夜に活動しようとするとも明かりがいる。蝋燭にしてもオイルにしてもお金がかかるので、多くの家が早い時間に活動を終える。レンたちのパーティは明かりの魔法を使える者がいるので比較的自由が利くものの、夕食を終えて風呂に入った後は自室で静かに過ごすのがせいぜいだ。

今はまさに「後は寝るだけ」という時間。既に浴室はレンの使った明かりの魔法でいっぱいになっている。

アイリスはなるべく足音を殺しながらレンの部屋の前までたどり着くと、ドアを軽くノックした。

「レンさん、入ってもいいですか?」

「ああ、どうぞ」

優しくて穏やかな声。

軽く唾を飲み込んでからドアを開く。

レンは下着姿でベッドに腰をかけ、足を所在なくぶらぶらさせていた。目が合うとにこりと微笑んだ後、不思議そうに首を傾げた。

「……どうした? なんかに緊張してるけど」

「いえ、その」

出会った頃から綺麗だったけれど、一緒に冒険するようになってからレンはますます綺麗になった。

会った頃にはまだ残っていた男性らしさが消えて、今はすっかり美しい女性。服や下着も女性ものを身に着けるようになり、アイリスたちに肌を見られても極端に恥ずかしくなかったりもなくなっている。

こうやって無防備な姿を見せてくれて嬉しい反面、好きな人の姿だと思ふとどきどきしてしまう。普段なら「そういう場面じゃない」と意識を逸らせるけれど、今は「そういうつもり」で来ているわけで。

「隣、座ってもいいですか？」

尋ねると「もちろん」と返事があつた。

少し脇にずれてくれるレンに「ありがとうございます」とお礼を言つて、ちよこんと座る。肩を触れ合わせながら軽くもたれかかる。既に高鳴つていた心臓がさらにうるさくなる。もしかしたらレンにも聞こえてしまうのではないか、とさえ思えた。

「アイリス？」

「レンさん」

答える代わりに彼の名を呼んで、目を見つめる。

「フリーさんやマリアさんと、夜、どんなことをしているんですか？」
「っ。いや、その」

レンは夜ごと代わる代わる仲間たちと眠っている。

今のところメイは「まだその時ではないと思いますので」と遠慮しているものの、他の二人はむしろ積極的だ。

いったいどんなことをしているのだろう。

アイリスだつて無知ではない。ある程度の想像はつくけれど、それでも細部はわからない。知りたいと思う気持ちも実際にある。

レンは頬を染めて目を逸らし、

「……恥ずかしいから言いづらい」

小さく告げてくる彼女を「可愛い」と思った。

同時に「きつと気を遣つてくれてるんだ」とも。

だから、勇気を出して自分から一歩踏み込む。

「私だつて、子供じゃないんですよっ」

近いほうの手を相手の手と重ねると、ちいさくぴくんと震えるのがわかつた。

「責任、取ってくれるんですよね……？」

「アイリス」

ふうっ、と。

息を吐き出したレンの濃紫の瞳がまっすぐにアイリスを見つめて、

「ごめん、女の子にそこまで言わせたら駄目だよな」

「ふふっ。レンさんだつて女の子じゃないですか」

笑ったら少し緊張が解れる。

優しく上半身が倒されるのを感じながら、アイリスは昼間触れ合ったばかりの唇が下りてくるのを見つめ、ゆっくりと目を閉じた。

複雑な気持ち

レンの部屋から聞こえ始めた物音と声に、フリーは「始まったかあ……」と呟いた。

「今日はアイリスちゃん、気合い入ってたもんね」

多少押し殺した感じはあるものの、壁の厚さにきっちり聞こえなくするのは難しい。お互い様なので大目に見てあげよう。

窓を開けてしばらく星を眺めていると、部屋のドアがノックされた。

「少し、お酒に付き合っただけませんか？」

ワインのボトルとグラスを手にマリABELが入ってくる。どういうわけかメイもその後が続いていた。

もちろん、部屋に招き入れるのは構わないのだけれど。

「メイちゃんも飲むの？」

「いえ、私は付き添いというか賑やかなようなものです。どうせ飲むのであればアルコール度数の高いものが良いですね。燃やせば身体を温められそうですし」

「それ、お酒っていうよりむしろ燃料だよな？」

マリABELが用意したワインは白。透き通った液体がグラスの七分目程度まで満ちたところで、軽く触れ合わせて乾杯する。

口を含むと芳醇な香りが鼻を通り抜けて幸せがこみ上げてくる。

お返しにおつまみ用のナッツを取り出して振る舞うと、殻に入ったままのそれをメイが甲斐甲斐しく剥いてくれる。「ありがとう」を言ってからひとつを口に運んで、

「もしかして、メイちゃんも眠れなかった感じ？」

「いえ。私の場合は記憶の整理やボディの調整がメインですので、その状態でも聞こうと思えば周囲の音を拾うことが可能です。なので気にならないと申しますか、むしろ是非やってくれと」

「そうなんだ。……って、もしかして私のも聞いてたり？」

「ノーコメントでお願いします」

露骨に視線を逸らされた。

どうにか忘れさせる方法はないか、そう思いつつメイを睨んでいると、マリアベルがくすくすと笑って、

「落ち着いていらつしやるようで安心しました」

「どうやら心配されていたらしい。フリーは「あはは」と苦笑するとグラスへ視線を落として、

「これくらいで嫉妬したりしないですよ。レンを独り占めするつもりもないですし」

「……確かに、私が心配する話でもなかったかもしれませぬね」

マリアベルもたまにレンへちよつかいかけている。嫉妬というなら彼女だって対象になるはずだが、フリーは特に悪意を持っていない。

「でも、来てくれたのは嬉しいです。美味しいお酒も飲みましたし」

「そう言っていただけだと幸いです。フリーさんとはこれからも仲良くさせていたいただきたいですから」

「そうですね。私もです」

人と話していると外の音も気にならない。一人で静かにしていたらどうしても気になって変な気分になっただろうからとても助かる。

「レンには早いとこ音を消す魔法を憶えて欲しいなあ」

「いつそのこと娼館みせの備品を借りてきましようか。ここだけの話をしたいお客様用に用いる品なのですが」

吸音石というマジックアイテムで、魔力を籠めると一定範囲の音を吸収して外に漏らさないようにしてくれるらしい。

密談や、聞かれたくない声を出す時にはもってこいの品だ。

「それいいですね。借りても大丈夫なんですか？」

「予備がありますので、関係者権限で持ち出すことは可能です。……壊したら弁償していただくことになりましたが」

「うわあ。マジックアイテムの弁償とか私たちの収入でできるかなあ」

借金なんていうことにならないよう細心の注意を持って扱わないといけない。それでも借りる価値はありそうである。……お互いに。声をひそめながらではあるものの、これもひとつの女子会というや

つか。

(この家にはもともと女子しかいないが)

「……前から疑問だったのですが、フリーさんはどうしてそこまで大らかでいられるのですか?」

「マリアさんこそ」

一杯目のワインを飲み終わったので二杯目を注いでもらい、こちらも注ぎ返して、

「私はもともと本命になるつもりがありませんから。レンさんには人恋しさを埋めていただければ十分なんです」

「私も似たようなもの……っていうのはちよつと違うか。私の場合もちよつと特殊なんですよねー」

お酒の勢いを借りられてちよつどいいかもしれない。どこか興味津々な様子で視線を送ってきているメイには後で口止めをしよう。

「ほら、私とレンって転移する前からの付き合いじゃないですか」

「ええ。以前からアプローチを受けていたとレンさんからも伺っています」

「レンってば、そんなこと言ったんですか?」

嬉しいような照れくさいような。もちろん、正確にはきつと「ちよつかいをかけられた」みたいな言い方だったのだろうが。

ただまあ、正解。

当時から好きだったのだろうと今となっては思うけれど、あの頃のフリーが抱いていたのはまだ淡い想い。からかうと面白いやつ、くらのノリであつて深刻なものではなかった。

「そんな時にこつちに来ることになつて、レンがあんなふうになつたじゃないですか。その時に私、考えたんですよ」

これからも彼女——彼と今までのような関係が続けていくのか。

環境ががらりと変わったのだから関係をリセットする手もあった。それでも続けることにした時点で、フリーは覚悟を決めていたのだ。

「レンが中途半端な状態のままでも、完璧に女になつちやつても別にいいって。これからもこいつに付きまどつてやろう、って」

実際、恋心は今でも変わっていない。

女子同士になって遠慮がいらなくなり、むしろ付き合いやすくなった。案外、今の関係が向いているかもしれないと思う。

「だから、いいんです。私はマリアさんやアイリスちゃんのこと好きですし。このままです」

「……そうですか」

マリアベルはふっ、と、大人の笑みを浮かべて、

「では、たまにはフリーさんにもお相手をしていただいても？」

「いや。そういう好きじゃないんですけど」

「フリーさん。私のことも好きだと言っていただけませんか？」

「あ、うん。もちろんメイちゃんのこと好きだよ。仲間外れにしたわけじゃないからね？」

エナジードレインみたいなものでも済むらしいので、そもそも「恋敵かどうか」考える必要もなかったただけだ。

そうやってしばらくワインを傾け、談笑しているといい感じに眠くなってきて、マリアたちと解散した後もぐっすりと眠れた。



「マナボルト」

強化された魔力光がゴブリンに突き刺さり、一撃でその生命力を吹き飛ばす。

レンは自身に迫りつつあった二体目を同じように片付けると、やや遅れてやってきた三体目の攻撃を後ろに跳んで回避。同じくブースト付きのマナボルトで消滅させた。

「うん、なんとかなるな」

「お疲れ様です、ご主人様」

「メイこそ。悪いな、休みの日にわざわざ付き合わせて」

「いえ。私はほぼ同行しているだけです」

ダンジョン一階。

休日である今日、レンはメイを連れて二人だけで探索をしていた。

ステータスが上がってきたのとスキルが増えたお陰でゴブリンなら一撃で倒せるようになったからだ。

罨はメイに踏み越えてもらい、もしダメージが入ったら「ヒール」する。戦闘は基本的にレンが一人で切り抜け、倒しきれなかった場合だけメイにぶつ飛ばしてもらおう。

今のところ敵三体くらいならどうにかなっているのでこのやり方はなかなか良いかもしれない。

「ご主人様。その代わり約束の物をお願いします」

「わかっている。その分のストレージは確保してあるから」

メイへの報酬は石である。

攻撃魔法を土属性に変換すれば石が出せるし、それを壁にぶつければレンでも砕ける。この方法を使えばメイの食料を余分に調達することが可能だ。

ボディの維持だけでなく強化にも使おうらしいので多めにあって困ることはない。

「ですが、どうして急に自主トレなど始めたのですか？」

「急に、ってわけでもないぞ。前から考えてはいたんだ。ただ、今まではさすがに危険だったからな」

目的は当然レベルアップだ。

攻略を少しでも楽にするためにもレンの成長は必須。ただ魔法を使うよりモンスターを倒す方が経験値の入りもいいし多少なりとも金になるのでこの方法を試してみたわけだ。

欲を言うとな人で潜れるようになりたいものの、罨の対処と緊急時の安全確保がネック。さすがに二人が限界か。

するとメイはわざとらしく肩を竦めて、

「ご主人様も相当に頑張り屋さんですね」

「頑張り屋さん、ってなんかちよつと可愛いな」

「別にそういう話ではないのですが」

二人だけだと移動中もいつもより静かだ。

交互に喋り続けていないと静まり返ってしまつて少し寂しい。それはそれでプロっぽくて悪くはないが。

「アイリスさんの目的を一日でも早く達成させてあげたい、とか考えているのでしょうか」

「……なんでわかるんだよ」

「それくらいはわかります。お二人ともわかりやすいですから」

先日、レンはアイリスとの関係を先に進めた。付き合うとか結婚するとかそういう話をしたわけではなく、実質的な変化はアイリスが前よりも甘えてくるようになった……という程度。

女同士なので少女を傷物にしたわけでもないのだが、それでもレンに出来る範囲で責任を取ってやりたいと思っっている。

「アイリスさんの方はむしろ肩の力を抜いているというか、ご主人様に従う姿勢だと思うのですが」

「だからだよ。余計になんとかしてやりたいだろ」

「……あの少年たちに偉そうなことを言っておいて、ご主人様本人がこれですか」

「俺はちゃんと安全を考えてるぞ。疲れだつてヒールとエナジードレインでなんとかなるし」

効率だけを考えたら十階あたりに行っている。よほどうまくやらない限り怪我が絶えないだろうから実際にはやらないが。

メイは相変わらず淡々とした声で、

「まあ、そうですね。無茶をさせないために私がついてきているわけですし」

「感謝してるよ。メイがいなかったらマリアさんをお願いしないといけなかった」

疲労という概念の薄いゴーレムの少女ならレンと共にスムーズな行動が可能だ。

サキユバス化して以来、トイレに行く必要すらなくなってしまったため、パーティで動いているとついつい配慮に欠けた行動をしてしまいがちになる。この二人だけならそういう心配がない。

レンたちはさらに何度かの戦闘を繰り返して、

「なあ、メイ。お前もやっぱり子供は欲しいんだよね？」

何気なくレンは尋ねてみる。

すると返答は迷いなく、

「ええ。種の保存、というか子機の生産はゴーレムの本能のようです
ので」

「子機って」

「特別、母に私への強制命令権があるわけではないのですが、生産の過程上、私たちの子供は半分以上自分のコピーになるのです」

プログラムをコピーするようなものなのか、それとも魂が宿っているのかはわからないものの、メイたちの場合、母親から子へ引き継がれるものが非常に大きい。

性格もある程度似通るらしく、その中に「本能」も含まれる。

「人間であれば猶更なのではありませんか？ 自分の子、という以上に『相手の子』でもあるわけですから」

「相手の子、か」

「私の父は子供が自分に似ていないことを時折嘆いています」

「……それはちよつと可哀想だな」

遺伝子を与えているわけではない以上、仕方がないとはいえ。

「それなんだよなあ。俺はともかく、フリーたちまで子供を作れなくなるってというのは駄目だろ」

「本人が納得済みならいいと思いますが」

「いや、いつか日本に帰るつもりだし」

異世界でなら許されるとしても日本ではそうもいかない。

メイは少し返答に間を置いてから、

「今のご主人様には男性器がありませんからね」

「直球で言ったな、おい」

「ちなみに形だけなら私でも再現できますが」

「意味あるのかそれ」

ジト目でツッコミを入れた後、レンはため息をついて、

「実はさ、俺、生やすスキルを取れるようになったんだよ」

「初耳なのですが」

「この前出てきたばかりだからな」

きつかけとしては「ドレインキッス」を取ったことだろう。

サキュバスらしいスキルを増やしたことによってさらなる可能性が生まれた、といったところか。

染まれば染まるほど性的なスキルが増え、そのお陰がこれだと思うと複雑である。

「というか、そんなものがあるのなら取得すればいいのでは？」

「まあそうなんだけど、戦闘の役にはまったく立たないだろう？」

せつかくのスキルポイントが勿体ないのではと思ってしまう。

別に関に回してもいいだけだし、急いで取らなくても、と。

「ふむ。……ひよつとして、ご主人様は少しずつ、好みのタイプが男性にシフトしているのでは？」

「怖いこと言わないよ!？」

断じてそんなことはない。ないはずだ。

男性、などというフレーズから賢者やシヨウたちの顔を思い浮かべてしまったレンは、嫌な想像を振り払うためにも件のスキルを取得しようとして心に決めた。

男友達との雑談（前編）

オークヒーロー。

エリートよりさらに一回り威圧感のある屈強な戦士。こいつらにはHP・攻撃力を上げる以外の進化はないのか。おそらくないのだから。

ウォーリア二体、エリート二体を従えた彼は強敵としか言いようがなかった。

「フリーズ・アロー！」

空中浮遊によって射線を作り、五十本に増えた「マジックアロー」を氷属性に変換して射出。「マナブースト」も加えたことで矢の先端は鋭く硬くなり、オークたちを強かに襲った。

レンの掲げるランタンからは「ファイアボルト」が飛び、アイリスの矢が精度よりも速度重視で次々に突き刺さっていく。

さらに二度、氷の矢を降らせながら徐々に接近したレンは、敵の斧が届かない高度を維持しながらブースト付き「マナボルト」を叩き込む。

身を屈めながら接敵したメイが拳を振るい、アイリスを狙おうとする敵はフリーが挑発して気を惹いた。

敵の武器が何度もレン、メイ、フリーの間近をかすめる。

「ライトニングボルト！」

雷属性の魔法は敵に僅かな痺れを残すらしい。動きが鈍ったのを機にさらなる攻撃を叩き込み、最初の一体が消滅すれば形勢はレンたちへ傾いた。

「……さすがにボス戦は緊張するな」

戦いが終わるとすぐ、レンは地面に降りて床に座りこんだ。

魔法の連続行使による精神的疲労がきつい。弓と魔法を連発していたアイリスも傍らに座りこみ「ちよつと休憩です」と笑った。

今日はこれで終わりのつもりだから急ぐ必要もない。

両手両足、胴体の状態をチェックしている銀髪のゴーレム少女を見て、

「メイも少し休憩したらどうだ?」

「おかまいなく。先に石碑の写しを進めておきます」

「あ、ありがとうメイ」

「お気になさらず」

事務的な見た目とは裏腹にメイはとても気づかいはできる。甘えてしまえばなしの彼女にはもっとお礼が必要かもしれない。金属塊でも買って渡すか、それともあの店でもう一着何か衣装を買い求めるか。

メイは汗をかかず老廃物も排出しないとはいえ、たまには衣装の洗濯が必要である。

レンのお小遣いの出所がメイの協力によるダンジョン攻略、というのが少々アレだが、こつちからも甘やかしてやりたい。

「つていうか結局、オークも増えまくりだよな」

「本当にねー。どこから湧いてくるのかって言いたくなるよ」

無から無限に生み出されているように見えるモンスターたち。

ダンジョンを作った人間が「世界を解放させたい」のだとすればなんでこんな邪魔をするのか。その辺りも攻略を進めて行けばわかるのだろうか。

思考を遠くに向かわせていると、レンの手に触れるものがあつた。そろそろと伸びてきたアイリスの手だ。

消費したMPがじわじわと、しかし確実に補充されていく。お礼を言おうと振り返ったら少女の唇が目に入ってなんだか照れくさくなってしまう。

アイリスの方も頬を染め——それでもこちらをじっと見てきて、

「レンさん。……MPは足りていますか?」

「いや。今日はもう帰るだけだし」

へタレと言われようとも、人前ではさすがに恥ずかしい。

それを見たマリアベルが反対側に座つてもう一方の手を取り、

「では、せめてこれで補充してください」

「ありがとうございます」

ダンジョン十三階をクリア。

この調子で行きたいところだが、きつと次の階はもつと手強いのだろう。



「いや。お前とこうやって酒飲むとかなんか変な感じだな」

「本当はまだ飲んじやいけない歳だもんな」

「こつちじゃ普通にみんな飲んでるんだよなあ……」

休日。

常備していた酒とつまみが減ってきたので補充しようと街に出たところ、馴染みの男二人とぼったり会った。シヨウとケンを預かるパーティの男性陣、彼女とダンジョンに潜っているリア充どもである。

せつかくだから話でもしないか、ということやってきたのは街中にある酒場。

カレンダー的に言うとは平日だが、この世界では曜日はいずれも関係ないので店には普通に客が入っている。人目がある方がお互い浮気を疑われなくて済むので個室ではなくテーブル席の一つに陣取る。

この酒場に来るのも久しぶりだ。

タクマたちと組んでいた頃に来たことがあるが、別れてからは来なくなつた。メイやアイリスを連れてくるような店ではないし、ボス戦後の打ち上げは例の洋食店が恒例だ。

しばらくぶりだと若干テンションも上がる。

メニューを見ると、前に来た時と大きな変化はない。ここは料理の味は普通だが酒の種類が充実している。せつかくだから普段あまり飲まないエールを注文。

つまみは揚げたじゃがいもにした。フードメニューがどこことなく冒険者酒場っぽい感じなのもここの特徴である。

「じゃがいもか……」

「あれ？ お前ら芋嫌いだったか？」

レンの注文に対する反応は微妙。

向こうじゃファーストフードでさんざん食べていただろうにどうしてかと首を傾げれば、

「いや、飽きた」

「じゃがいもとか主食だろ。飽きるわ」

「あー。うちはパンが多いからなあ」

地球でもそういう地域があつたように、じゃがいもはここでもメイ
ンフードの一つだ。茹でたり蒸したりして白米やパンの代わりに食
べることも多い。

特に節約したい家にとっては強い味方である。

「それに揚げ物とか家じゃなかなかできないだろ？ だから揚げ芋は
いいな、って」

「くそ、毎日パン食べてるとか金持ちかよ」

そう言う二人はエールの他に腸詰めウインナーと川魚の塩焼きを注文した。
魚の方は川を作った成果だろう。

四、五キロまではなんとか完成し、会のメンバーは月見と日の出を
それなりに楽しんだらしい。「引き続きデザインを頼む」とアイリス
のところへ依頼が来たので「来年の年末までには」と約束している。

「なかなか手が出ないと言えばビールもそうだよな」

「ああ、保存が難しいからな」

エール、というのはビールの種類だ。

もう少し詳しく言うと言法の名前である。

日本で一般的なビールはラガーという別の種類のビールなのだが、
ぶつちやけレンは日本のビールを飲んだことがないので味の違いは
わからない。

「それもあるけど、女ってビール苦手じゃないか？」

言われてレンは「そういえば」と思った。前に来た時はフリーも一
緒だったが、彼女はワインか何かを飲んでいた気がする。

独特の苦み、あるいは炭酸がだめなのだろうか。

考えていると二人から見つめられて、

「お前は平気なのか、ビール？」

「いや、俺はこうなる前から飲んでたし」

話している間にエールが運ばれてきたので乾杯して口にする。

ほら大丈夫、と笑おうとしたものの、不思議なことに前ほど美味しく感じない。

「……これってこんな味だったか？」

「ああ、特に変わってないと思うけど?」

「やっぱり駄目なんじゃないか」

所詮は女か、みたいな顔をされて少々むっとしたレンだが「飲んでやるから他の頼めよ」とメニューを渡されたので気を取り直した。

なかなか気遣いができる男である。だからモテるのかもしれない。

今度は素直に赤ワインを注文。

「あ。っていうか俺が口付けたのって嫌じゃないのか?」

「別に。知らない奴ならアレだけど。そこまで気にしてたらこっちじゃやってけないだろ」

「確かにそうか。ありがとう」

気にしていないのを示すようにぐいっと杯を傾げる向こうのリーダー。笑って礼を言うと彼は何故か頬を赤くして視線を逸らした。もしかしてもう酔ったのだろうか。

「炭酸系は酔いやすいらしいからゆっくり飲めよ」

「……ビールはぬるくなると美味くないだろ」

言い訳するように口にしたリーダーに相棒が「あいつに告げ口しとくな」と告げ、むっとしたリーダーが、

「じゃああの件をあいつにバラす」

「なっ、お前、それは反則だろ!?!」

「先にやってきたのはそっちだろうが」

「……なんか楽しそうだな、お前ら」

懐かしい男同士のやりとり。なんだか羨ましいと思っていると、二人が気を取り直したように居住まいを正した。

料理も運ばれてきたので三人で適当につつく。

「可愛い女の子に囲まれてるお前が何言ってるんだ」

「いや、だって俺も女子だし」

悔しかったらサキユバスになってみる、と暗に示すと、

「……………」

「……………」

「なんだよ」

「いや、随分覚悟決めたんだな、って」

「そりゃあな」

完全にサキユバス化してから既に何か月か経っている。

胸もいつの間にかフリーたちを追い越して推定Cカップくらいの大大きさに突入しているし、女子ならではのあれこれも経験した。

これで「俺は男だ」と言い続けるのも無理がある。

「慣れだよ慣れ。抵抗するのを止めると一気に楽になるぞ」

「そんなもんか……………」結婚も似たようなものなのかね」

「え、結婚するのをお前？」

目を瞬いて尋ねると、相棒からも似たような視線が送られる。どうやら初めて口に出したらしい。

リーダーは苦笑して、

「まだ考えてるだけだけどな。…………今のままのペースで攻略したつて、百階に着く頃には二十歳近いんだ。こっちで暮らす覚悟決めた方がいいいだろ」

「ああ。それは、な」

もちろん、今のままのペースで百階攻略なんて絶対に無理だ。彼もそれはわかっているだろう。だからこそ先のことも考える。

「相手は？」

「あいつに決まってるだろ。誰かに聞かれて変な勘違いされたらどうするんだ。責任取れよお前」

「いや、説得に協力するぐらいはするけど…………めちやくちや焦ってるなお前」

「あのな…………。いいか、この世界に女はいくらでもいないんだぞ？」

めちやくちや真剣なトーンで言われた。

ため息をついたリーダーは若干声を抑えて、

「別れたらもう二度と会わないわけじゃないし、あいつだって俺と別れたら俺の知ってる誰かと付き合うんだ。好きな相手なら大事にし

て当たり前だろ」

「……なるほど。いい奴だな、お前」

レンと同年。まだ高校一年生だというのに色々考えている。

感嘆して呟くと、彼は「これくらいはな」と笑った。

「なんか、男友達に話しているのかあいつの女友達に話してるのかよくわからないけど」

「それは……あー、うーん……どっちだろうな？」

「わからないのかよ!？」

あらためて考えてみるとなかなか難しい問題だった。

レンは彼らを男友達と捉えて接しているものの、一方で自分を女子だとも思っている。気を遣わなくていい同性、とは言えないが、かと言って異性というほど遠い存在かと言われると困る。

相棒の方もうんうんと頷いて、

「滅茶苦茶可愛い顔と声で『俺』とか言うんだもんな、お前」

「口調はまた別の問題だからな。特に困ってないし」

これが日本なら損をする場面も多いかもしれない。レンが元男子という事実を知らない人も大勢出てくるだろうが、この異世界なら翼と尻尾を見ただけで圧倒的多数の人が「ああ」と察してくれる。

荒事の影響で話し方の荒くなる者も男女問わず一定数いるので無理して変える必要がない。

「っていうか、お前たちから見ても俺って可愛いのか？」

「自慢かよ」

「可愛いに決まってるだろ」

馬鹿なのか？ という目で見られた。

知り合いから断言されたことについては喜ばばいいのか嘆けばいいのか。

「俺を好きになっても何も出ないからな」

「好きにならねえよ!？」

「タクマたちみたいなのはなりたくないからな」

あの三人は彼らからも「男としてめちやくちや悲惨」と認識されているらしい。

酒がなくなつたので新しいのを注文して、

「でもお前、そういう欲とかないのか？ サキユバスなんだろう？」

「あつたら今、お前らはめちやくちや危険な状況だと思っただが」

はつとした二人が慌てて水を注文しようとする。もちろんこの酒

場でも水は有料なので、レンが「ウォーター」の魔法で出してやった。

これ幸いと水をがぶ飲みした二人はほう、と息を吐く。

ひよつとしてファンタジー世界に酔っぱらった乱暴者が多いイメージがあるのはチエイサーを十分用意できなかったから、というのもあるのだろうか。

「つたく、いきなり心臓に悪い事言うなよ」

「浮気が彼女にバレたら大変だもんな」

「本当にな。その上、相手がお前とかヤバすぎる」

「そうだよな。元男が相手はなあ」

笑つて言うと、二人は真顔でお互いを見つめて、

「いや、別にそこは問題ない」

「むしろイケる」

「なんでだよ!？」

「前のお前と顔も声も違うからだよ」

男性口調の美少女はマンガやゲームならたまにいます。現実離れした美少女（レン）がそれでも特に問題ないらしい。現実離れした

逆の立場だった場合を想像したレンは「まあ、そうかも」と頷いて、

「いや。俺は男に興味ないからな？ ついこの前、生やすスキル取っ

たばっかりだし」

「マジかよ」

「生やすってアレだよな？ それってめちやくちやマニアックなアレ

じゃないのか」

「マニアック言うな」

軽くジト目で睨みつけてから、二人に「ここだけの話な」と念を押した。

男友達との雑談（後編）

「ここだけの話ってことならついでに聞きたい。……今も生えてるのか？」

「まさか」

穿いているスカートを見下ろしつつ即座に否定。

下着はつけているし目立つこともそうないだろうが、それでもさすがにこの装備は心許ない。

リーダーは「なんだ」と、残念なのか安心したのか良くわからない感想を呟き、

「なんで生やしてないんだ？」

「……お前まさか男が好きなのか？」

レンは若干引き気味で半眼になった。リーダーに近いところに座っていたもう一人も中腰になって席を離そうとする。

「言いがかりはやめろ。……ほら、捨てたはずの相棒が戻ってきたんだろ？ 頼りにするのが当たり前じゃないか？」

「ああ、そういうことか。残念だけどそうもいかないんだよ。意識してないと消えるみたいで」

レベルアップごとの計測ついでにフリーと検証した結果である。

出しっぱなしにしてもMPを消費したりはしないのだが、維持しようと気を張っていない限り一定時間で元に戻ってしまう。

おそらく自然な状態を保つ仕組みがあるのだろう。

「自然な状態、ね」

「自然な状態、なあ」

「なんだよ」

意味深な台詞を吐いた二人は「いや別に」と揃ってはぐらかした。

ちなみに、彼らに言うつもりはないものの、新たに生えたレンのそれは男だった頃のものよりも大きめだった。

色は今のレンの肌と同じで質感もどこか滑らか。

敏感なのか軽く触られただけで「ひうつ!？」と声が出てしまい、フリー

りに「面白い」と遊ばれそうになった。あれを出したまま出歩いたりするのはそういう意味でも無理そうだな。

なお、意識すれば大きさや形はある程度変えられるようなのだが、これまたしつかり意識していないと元に戻る。使いこなすのはなかなか難しそうである。

「そんな能力手に入れてまで男を避けるとなると、シヨウたちは望み薄だな」

「ああ、そういえば。あいつらは元気でやってるか？」

「大きな怪我はしてないし、あれからも頑張ってるよ。ゴブリンには結構苦戦中だけどな」

「そうなのか？ 一階はボス戦以外順調だったんだろ？」

年齢的に身体が出来上がりにきつていない部分はあるものの、シヨウはそれなりにしつかりした身体をしていた。ケンの方も魔法使いなので一定のポテンシャルが出せるはずなのだが、

「ゴブリンもだんだん強くなるだろ。敵の数も多くなるし、俺たちのフォローを最小限にしようとするにあいつらにも負担がな」

「そういうものか」

オークと正面切って戦える戦士がいればゴブリン程度軽くあしらえるだろうが、ダメージを与えすぎないようにしつっ引き付けておくとなるとまた違った苦労がある。

リーダーたちがそうやって難易度を調整している間、シヨウたちは全力を強いられるわけで、確かに大変かもしれない。

料理の方もさすがになくなってきた。

リーダーは最後のワインナーを口に放り込むと適当に新しいつまみを注文して、

「お前もわかかってるだろ。お前のところのパーティは滅茶苦茶恵まれてるって」

「まあな。性格面でも能力面でもうちはいいい子ばかりだ」

「ああ。シヨウたちが悪いわけじゃない。むしろよくやってる。俺たちがもつと上手く指導してやれたら……って思うくらいだけど、あの子達は別格だ」

「そこまで言うのか。お前たちだって同期で一番の出世頭だろ」
タクマたちが自滅したせいもあるが、それでもかなりの攻略スピード。

男二女二、かつクラスのバランスもよく、シヨウたちの指導もなんだかんだ上手くやっているようだ。こうして話をしていても嫌味なところがなく付き合やすい。

十分凄いというか憧れるレベルなのだが、

「お前が言うな」

「そうそう。実質二人だけで後輩二人育てて、今何階だつて？」

「この前十三階を終わらせた」

二人が「これだよこの野郎」という顔をした。

「俺たちが四人でどれだけ苦労して十六階まで行っただと思ってるんだ」

「それはもちろんわかってるって。だからこそお前たちのことは尊敬してる」

「嬉しいけどな……。お前とフリーには敵う気がしない」

「戦闘力の話……。じゃ、ないよな」

リーダーは「違う違う」と手を振った。

「いや、真剣勝負でもお前の魔法をどうにかできるか怪しいけどな。しかも飛ぶだろお前」

「飛ぶっていうか浮くだけど……。ああ、まあ、ジャンプしても届かない距離まで浮けばいいよな」

「そういうことだ。……。話を戻すと、フリーはめちやくちやコミュニケーション高いだろ？」

「ああ、あいつのあれはやばいな」

異性でも物怖じせず話しかけて世話を焼けるのは昔のレン自身でよくわかってる。

「お前のところの料理も美味かったってシヨウたちが言ってたぞ。うちの二人が対抗意識燃やしてた」

「あれはアイリスとの合作だけど……。そっちの料理はどうなんだ？」

「別に不味くはない。不味くはないし、最近は上手くなってきたけど、

最初の頃は料理する度に悲鳴上げてたな」

調理器具の違い、火加減の問題など日本とは全く違うから仕方ない。

「文句にならないように気をつけて苦情を出してみたら『なら自分でやれば?』だぞ」

「いや、それは俺もそう思う」

「お前、そこで女子の味方するのかよ」

「そりやそうだろ。家事全部やらせるならダンジョンには男だけで行かないと釣り合わない」

安全なところで待っていてくれれば俺たちが稼いでくるから、とやってもなお「家事やりたくない」と言うのならレンも「それはおかしい」となるだろう。

「まあ、そう言いつつ俺も家事は任せっきりなんだけどな……。やってるのは火起こしと水の用意くらいだ」

「いや、割と凄いいけどなそれ」

「うちでもケンが毎朝早く起こされてこき使われてる」

本人からすれば「魔法ではぱつと」ではあるものの、ないと手動で一生懸命やらないといけない。家事をする者にとっては死活問題なのである。

新たに届いたつまみを前にリーダーは「まあ、あれだ」と言つて、「シヨウたちにも少しは情けをかけてやってくれ」

「? ああ。相談には乗ってやるつもりだし、遊びに付き合うくらいなら喜んで」

何故か「駄目だこれ」と頭を抱えられた。



体格はヒーローと大差ないものの、他のオークよりも豪華な装備を身に着けた個体——オークロードが苦悶の声と共に消えていく。

十四階のボス攻略が無事に終了し、部屋には静寂が訪れた。

「どんどん偉くなっていくな、オーク連中」

「オークばかりの戦場は十五階で終わりですからね」

愚痴のごとく呟いたレンにマリABELが応じてくれる。

ここぞとばかりに抱き留められて両腕に包み込まれるのは正直恥ずかしいのだが、温もりのにもMPの補充的にも心地いい。

弓を下ろしたアイリスが首を傾げて、

「ロード……ってたしか偉い人ですよ？　十五階のオークはなんなんでしょう？」

「オーククイーン」

「オークは女性の方が偉いんですか……!？」

おそらくロードは地方領主——部族長くらいの位であり、トップに君臨しているのがクイーンなのだろう。

あるいは、ゲームめいたこのダンジョンのことだしその辺の設定は適当なのか。

「クイーンってことは、ゴブリンキングの時と同じくらいきついんだろ？　なあ」

「五の倍数だしね。敵、何体だっけ？」

「八体ですね。ロードとクイーン以外のオークが二体ずつです」

「……難易度を上げるために数を増やせばいい、というのはいささか短絡的では？」

メイが若干不満そうに呟く気持ちもわかる。

とはいえそれで敵が変わるわけでもない。結局のところ、十分に備えて臨むしかないわけで。

「このあたりで戦力の増強が必要かもな」

街にはいくつかの武器店がある。

初心者向け、中級車向け、ベテラン向け、それから女性探索者向けというラインナップ。レンたちが利用するのはもっぱら初心者向けか女性向けの店だ。

今回はまず女性向けの店を訪問。

「いらっしやい。……ああ、久しぶりだね。死んでないのは知ってた

けど」

「あはは、ひどいよおばさん。ほら、私たちは攻撃避ける派だから」
女性向けだけあって店主は中年の女性だ。

アイリスの弓と矢は直接職人に依頼しているため、メンバーで最も利用頻度が高いのはフリーだ。彼女は店主と軽口を叩きあうと、きよろきよろと店内を見回している後輩をぐいっと押し出した。

「今日は私じゃなくてこの子の装備なの。革の鎧でいいの？」

「この子か。……これはまた特殊な子を連れてきて。下手な鎧より本人の身体の方が硬いんじゃない？」

「やはりそう思われますか」

我が意を得たり、とばかりにゴーレムの少女は頷いて、

「革鎧程度では焼け石に水、下手をすれば動きづらくなるだけなのではと申し上げたのですが」

「んー……まあ、難しいところではあるかもね。でも、着けないよりはいいんじゃない？ あんたのお母さんも心臓コアへのダメージは気にしていたし」

「なるほど、母にもそういう時期があったのですね」

「今は違うのか？」

「今は、納得のいくボディが出来上がったので経年劣化さえ補えれば問題ない、と、安全に戦える階で戦っています」

メイも一定の有用性は認めてくれたので、やはり比較的動きの邪魔になりづらい革製の鎧を見繕うことになった。

「あ、おばさん。あと金属製の鈍器とかない？ できれば太くてしっかりしたやつ」

「メイスとか？ そういうのは男向けの武器探した方がいいね。うちに置いてるのは比較的細めのやつだから」

幸い鎧はちょうどいいサイズのものがあった。胴体と腕だけを保護する軽戦士向けの品だ。

「そっちの子、レンチちゃんも何か買って行きなさいよ。翼それ用に穴開ける料金、安くしとくから」

「うわ、おばさんちやつかりしてる」

「すみません、俺はまだ鎧はいいです。今買うと胸がきつくなりそうなので」

「……種族的に可愛い上に成長期が長く続くとか物凄く羨ましいんだけど」

ジト目になった店主はそれでも気を取り直して「杖なんかもあるから気が向いたら買いに来なさい」と言ってきた。レンとしても発動媒体の方はおいおい購入したいと思っている。

ただ、今日のところはメイの武器だ。

メイだからメイス、というわけではないものの、少女自身が希望したのがそれだった。片手で持てて簡単には壊れず、威力のある武器。重さや重心の問題で取り回しが難しいという欠点はゴーレムの怪力のお陰でなんとかなる。

初心者用の武器店に移動していくつかの品を試し振りした後、これはという品を買い求めた。

支払いはパーティの共有財産＋レンの私費から。

「私の装備ですから私が支払いますが」

「いいのいいの。メイちゃんの装備で私たちの生存率が上がるんだから、パーティ全体の買い物だよ」

「そういうことだ」

レンは個人的にも世話になっているので費用の一部を出させてもらった。

メイはしばし逡巡した後「ありがとうございます」と頷いて、

「ですが皆さん、実は私のことを子供扱いしていますね?」

「子供とまでは思っていないけど、メイは実際後輩だろ」

ぽん、と、頭に手を乗せてやると「不本意ですが認めましょう」と言ってくれる。

「受けた恩は働きで返す事にします。どうぞご期待を」

「ああ。頼むぞ、メイ」

十五階のボス部屋ではメイの新装備が役に立った。

レンは雷属性「ライトニングアロー」の雨を降らせて敵の行動を妨害。姑息な手段に怒り狂いながら迫ってきたオークには細腕からは信じられない威力の重い一撃が繰り出された。

メイスの硬度自体はメイの腕と大差ないものの、より体重が乗りやすくなったこととリーチが伸びたことは大きい。振りかぶったメイスの一撃に空いている方の拳で追撃することもでき、格段に攻撃力が上がった。

「勿体ないからあんまり使いたくないんだけど……っ！」

フリーは遊撃しつつ、敵の顔に小麦粉の入った小袋を投げつけて妨害。粉塵爆発なんてレアな現象を狙ったりはしなかったものの、呼吸と視界を多少妨害できるだけで十分。

アイリスも可能な限りの連射で敵を牽制。

しかし、さすがはオーククイーン。今までで最大のサイズを誇り、オスのオークを強化する能力を持つそのせいで戦いは長引いた。レン、フリー、メイ、アイリスがそれぞれに敵を引き付けながら攻撃しないと追いつかないレベル。最終的にはマリアベルにも一体を撃破してもらい、なんとか攻略。

「欠片が減りませんように……」

祈りの成果か、アイリスやメイの分の欠片はきちんと最大数入ってきた。

床に散らばった欠片を拾い忘れないように集め、みんなで数えた後はほっと胸を撫で下ろしてしまった。

早くなった呼吸を落ち着けつつ確認した石碑の内容は、

『世界の子らよ。よく進み続けてくれた。これから先、汝らの重荷は少しばかり軽くなるだろう』

もしかして、と顔を見合わせた後、

「ストレージ」

アイリスとメイが唱えると、レンたちにとっては既に慣れ親しんだ異次元収納が後輩たちのために開かれた。

【番外編】女子たちの内緒話

「実際のところどう思いますか、マリアさん？」

「実際、とは？」

「レンのことですよ。私はレンしか経験ないから他の人と比べてどうなのかなって」

「なるほど。そういうことでしたか」

珍しくレンが長めの外出をした日、マリアベルが早い時間に起きてきた。

あのサキユバス娘は食べなくても生きていける体質なので、昼に帰らないかもしれない日は「昼食はいらない」と言っ出ていく。街の人の目があるので悪いことをする心配もされる心配もあまりなく、放っておいても大丈夫だろう。

逆にフリーをはじめとする四人が全員家にいる機会なんてそうそうない。

せつかくなのでレンがいるとできない話をぶつちやけてみることにした。

簡単な昼食を用意して（かまどの火を落とさなければアイリスが火勢を操作できるので比較的楽である）、一人欠けた食卓を囲む。

フリーの質問にマリアベルは穏やかに頷いて、

「そうですね。レンさんはお上手ですよ。しかも、日を追うことに上手になっていきます」

「そうですよね……!？」

やっぱりあれは上手なのだ、と、つい勢い込んでしまった。

「ふ、フリーさん。あんまりそういうお話は」

「いいじゃない、悪口言ってるわけじゃないし。アイリスちゃんだって他人事じゃないでしょ？」

「それはそうですけど……」

あ、真っ赤になってしまった。

先日、レンと先に進んだばかりの後輩は持ち前の純粹さもあってこういう話は得意じゃない。

それでも強く止めてこないあたり興味はあるようで、

「アイリスちゃんはどうだった？ レン、優しくしてくれましたよ？」
「あの、こういうのが筒抜けってやっぱり恥ずかしくないですか……？」

「娼館から道具を借りてきましたから今後は大丈夫ですよ」

音がなくとも女同士、そういうことが「あった」か「なかった」かはだいたい察しがついてしまうわけだが、そこはお互いさま。

これで男子が交じていたらと思うと——うん、それはだめだな、とフリーは深く頷いた。

「アイリスちゃん、それでそれで？」

「どうしても言うんですか？ ……えっと、レンさんはとっても優しく、その、上手でした。私、途中からなにをされているのかわからなくなってしまうくらいで」

「ああ、そうだよ」

「初めてがレンさんならそうなるでしょうね」

マリアベルと意見が一致するのが楽しい。これは酒を用意するべきかもしれない。この異世界では昼間から酒を飲んでも咎められることはないわけだし。

「でも、あれってマリアさんが教えたんですよ？ 他にいないし」「いえ。もちろん私のテクニックを吸収されているのも事実ですが、大半はレンさん自身の創意工夫ですよ。天性の才能と言っているかと」

「うわ、じゃあ、やっぱりサキユバスの本能ってすごいんですね……」一言で言えば「エロい」種族。匂いや容姿で他者を魅了するだけでなく、手練手管においても娼婦並みに優れているらしい。しかもそれが種族特性だというのだから恐ろしい。

他のサキユバスを知らないのでレンの話になるが、彼女の場合、強引なことは基本的にしてこない。

甘い言葉を囁きかけながら優しく指やその他を這わせてくるのが常套手段。言ってしまうえばそれだけなのだが、相手の弱いところを的確に見つけ出す能力やギリギリまで焦らすテクニックが尋常じゃな

い。

「私でも『受け』に回つてしまうと流されてしまいそうになります。ですので極力、レンさんのペースを乱すようにしているのですが、そのせいでテクニックを盗まれている感覚はありますね……」

「マリアさんでもそうなんだ。……私も最近、最後のほうはわけわからなくなっちゃって、口押さえてないと大変なことになりそうで」「女性同士だから、というのものもあるでしょうね。される側の気持ちがわかるからこそ、攻める方法もわかるわけです」

こうなるとある意味無敵である。

成長速度で負けている以上、フリーたちが優位に立つことはできない。

しかも、負けてもあまり悔しくない。幸せで満たされるだけなので「別にそれでもいいかな」と思つてしまう。

「……あれ？　もしかして女の子同士つてすごくいいんじゃない？」

「わかつていただけますか？」

マリアベルと見つめ合い、しっかりと握手。よくわからないけれど気持ちが一とつになった瞬間だった。

アイリスがそれを見てほう、と息を吐き、

「私も、少しだけわかる気がします。男の人の身体ってやっぱり怖い気がして」

「威圧感あるからねー。レンは向こうにいる時からあんまり怖くなくなっただけど」

「あら、そうなのですね？」

「はい。運動もやってなかったから細いんですよ、そもそも」

頼りがいのある男はいつの時代も一定の人気があるが、害のなさそうな男が好き、という層も一定数いる。

フリーはどちらかというと後者なのだろう。

レンをからかってじやれるように遊びたいという欲求と、いざと言う時は優しくリードされたいという欲求がある。これはなかなか他の男では満足できそうにない。

「つまりご主人様は女たらしだということですね」

と、これは黙って話を聞いていたメイ。

スリーサイズが可変、その気になれば顔さえがらりと変えられる彼女は実のところかなりの警戒対象なのだが、今のところレンが手を出す様子はない。

妹みたいな対象なのか、それとも人肌の温もりが足りないのか。

「せっかくですので、もっと具体的なお話も聞かせてください。特に過激なプレイを是非」

「メイちゃん、そういうところじゃないかな？」

「？ 骨抜きにされた女性は相手を許し、何でも受け入れてしまうものなのでしょう？ 皆さんも特殊なプレイの一つや二つ経験があるのでは？」

「そんなの言っても私が恥ずかしいだけじゃない」

メイからも体験談が聞けるならともかく。

「では、母の話ではいかがでしょう」

「え」

「そんな興味深い——いえ、罪深い行為が許されて良いのでしょうか」
「そうですよ。ここにいない人の話なんて」

思わぬ攻撃。

メイ以外がこれに反論するも、

「では、この話はなかったことに」

「待ってメイちゃん。どうしても言うなら考えなくもないよ」

「ええ。もちろん他人に口外したりはいたしません」

「はい。もちろんです」

結局、みんな好奇心には勝てなかった。

ちゃんと娘に隠していなかった母親が悪い。そういうことにして、内緒の話を続けた。

盛り上がってきたので酒も用意した。素面のはずのメイが一番ノリノリだったような気もするがきつと気のせいだろう。

まさかメイの母親があんなことやそんなことまでしていたとは。

こんな話はとてもじゃないけど人にできない。本人に知られてたら命が危ないとか以前に言ったフリーたちがドン引きされかねない。

でもいい話が聞け、

「ただいま。……なんかみんなで盛り上がってるな、なに話してたんだ？」

「いえ、母の恥ずかしい話を少々」

「趣味悪いことしてるな!？」

「もつともである。」

「いかがですか、ご主人様も。後々の参考になるかもしれないません」

「なるか？　っていうか、知り合いの話だと素直に楽しめる気がしないぞ」

幸いレンはあまり乗り気ではなかった。

フリーとしても彼女が「あの話」を知ってしまうのは避けたい。もし方が一そつち方向に目覚められたら身が持たないかもしれない。

アイリスに目配せをし、意思を統一してから妨害にかかった。

「メイちゃん。この話はそれくらいにしよう。ね？」

「レンさんは今日どちらに行ってきたんですか？　良ければ聞かせてください」

「え？　ああ、俺はショウウのところの男二人と酒場で話してたんだ」

レンはレンでなかなか楽しい話をしていたらしい。

服も髪も乱れていないし変な匂いもしないので浮気のセンはゼロ。

メイは少し物足りなさそうだったものの、こつちの話の方がよっぽど健全だと、フリーはそのままレンの話を聞き続けた。

【番外編】 ショウとケン

ショウが生まれたのは、大人たちが「異世界」とか「この世界」と呼ぶ小さな世界だった。

街の外には闇が広がっていて進むことができない。街の中心には神殿があり、そこはダンジョンへと繋がっている。

生まれた時からそれが当たり前だった彼には、両親の故郷だという「日本」という国が物語の中の存在としか思えない。

日本を感じられるのは主に本を読んだ時。そこには広い世界があり、行く手を阻む闇などは存在しない。同じ方向に真っすぐ進むと長い時間をかけて元の地点に戻ってくるができるというのだから、少年にはそれがとても素晴らしいことに思えた。

どうやったら日本に行けるのか。

疑問に思うようになったのはある意味当然のことで、彼はある日両親にそれを尋ねた。

すると、返ってきたのは、

『ダンジョンをクリアすればもしかしたら』
ダンジョン。

そこもまた少年にとって未知の詰まった場所だ。大人たちや、年に一度日本からやってくる新しい住人たちはこぞってそこに挑み、日々の糧を獲得してくる。

まさに物語で見る「冒険」そのものだ。

自分もダンジョンに潜りたい。ショウはそう思ったものの、大人たちはこれを許してくれなかった。危険だから。行つてはダメだと口癖のように言い、こっそり行こうとしても神殿に近づくまでの過程で必ず誰かに止められてしまう。

日本人だけずるい。

子供だったショウにはこの世界で生まれた子と日本人の違いなんてよく理解できていなかったの、仲間外れにされたと思った。

不貞腐れつつも、いつか冒険することを夢見て木剣を振る日々。

幸い彼には同志がいた。魔法使いを親に持つ少年のケンだ。彼は

シヨウと違って喧嘩は弱かったものの、冒険を夢見ているのは同じだった。

そして、ケンにはシヨウに新しい「世界」についても教えてくれた。『お前もモンスター倒してこの世界を広くしたり、金を稼いで美味いもん食いたいよな?』

『う、うん。でも、もつとしたいこともあるよ』

『もつと? それってなんだよ?』

『恋、かな』

今まではマンガを読んでもさりと流していた部分。

冒険の世界では結婚とは「女の子と絆を深めて強いつながりを持つこと」なのだ。ケンは教えてくれた。それまでは歳の近い適当な女と結婚して家庭を作るのが自分の未来だと思っていた。

だから、ケンの話は衝撃だったし、彼が近所のおじさんからもらったという秘蔵のマンガはもつと衝撃だった。

それからはシヨウの夢が少し変わった。

『ダンジョンで活躍してみんなに褒められて、ついでに可愛い女の子を嫁にする!』

肝心のダンジョン探索については何度頼んでも「ダメ」と言われるばかりで進展しなかったのだが、それがある日、突然に変わった。

『久しぶりだな。少し、君らの息子——シヨウについて話があるのだが、構わないか?』

家にやってきた賢者、街のまとめ役の男が夢のような話を持ってきたのだ。

シヨウのような「この世界で生まれた子」も少しずつダンジョンへ潜らせようという意見がある。そこで試しにシヨウとケンを指名したいというのだ。

両親はこれに難色を示したものの、少年はもちろん「やる!」と言った。

話を聞けば、既に女子が二名ダンジョンに潜っているという。なら、シヨウたちにできないわけがない。ダメと言われても腐らず鍛錬を続けてきたからこそ、こうやって話が舞い込んできたのだ。

最終的には両親も折れ、シヨウたちはとあるパーティーと引き合わされた。

そして。

「レンさん、やっぱりすげえ綺麗だよな……」

「うん、それにいい匂いだし、なんていうかすごくエロいよね」

紹介されたパーティーは男二人女二人の四人構成、しかもメンバー間ですでに恋愛関係が成立しているという残念な感じだった。

みんな親切だったし丁寧に対応してくれた。そこについては感謝しているし尊敬もするが、これでは恋愛の希望が全くない。

業を煮やしたシヨウはケンと共に別のパーティーへ直談判することにした。

既に「この世界の子」を仲間に入れているうえに女子しかいないという夢のようなパーティー。リーダーが元男子というのが「??」という感じではあったものの、入れてもらうならそこしかない。彼女たちの家は「冒険のことで相談がある」と街の人に聞けば簡単にわかった。街でちらつと見かけたことはあったものの、きちんと話すのは初めて。

顔を合わせたレンは、思っていた以上の女性だった。

街の女の圧倒的多数を占める黒髪黒目とは違う、紫がかった妖しくも美しい髪と瞳。肌の色は白く、同じ人間とは思えないほどすべすべしているのが見ただけでわかる。

瞳は奥行きが深く、見ただけで吸い込まれてしまいそうになる。

背中に広がる翼と尻尾も他の女にはない要素。犬や猫とはまた違う感じでふりふりと動く尻尾もまた飛びつきたくなるような魔性の魅力がある。

近づくとはんわりと甘い匂い。

程よい大ききの胸も形の良い尻のラインも、年頃の男子にはたまらない。

それでいてレン本人はかなり無防備で飾らない態度。元男子とい

うのは本当らしく気さくな態度でショウたちとも話をしてくれた。

残念ながら、パーティ入りの話は断られてしまったが。

「でも、デートしてくれるって」

「ああ。レンさんとデート……」

レンに認められようと頑張り過ぎて失敗をしたショウたちに、レンはまた優しくしてくれた。

慰めるように頭に乗せられた手の感触はまだ忘れられない。親にやられたら「子供扱いするな!」と怒るところだというのに嬉しさがなかった。

結局、このまま世話になることになったカップル。パーティの家に戻り、二人で使っている部屋であの少女との会話を回想する。

ショウたちと二、三歳程度しか違わないはずなのに大人っぽくて美人で、なのに身近に感じられる。

「っていうかケン。お前までレンさん狙いなのかよ。他の人にしろよ」

「ショウこそ」

レンのパーティは他のメンバーも美人揃いだ。金髪や銀髪の美少女までいて目にも華やかだし、惚れるのには十分すぎる。

ただ、美人すぎて少し気おくれしてしまう。その点、レンは、

「レンさんなら少しくらい無茶言っても『仕方ないなあ』で許してくれそうじゃん」

「わかる。今は女の人にしか見えないけど、元男だからなんだろうね」
狭い街だ。近所に住んでいる歳の近い女子とはだいたい知り合いだ。彼女たちは成長するにつれてショウたちを邪険に扱うようになった。

だんだんと膨らんできた胸や柔らかさを増していく肌をエロいとか不思議に思うのは当たり前だし、見てしまうのは仕方ないだろうに。視線に気づくと「最低」だのと言って睨んでくる。いや、そんなエロい身体している方が悪いのではないか。

「頼んだら胸、触らせてくれるかなあ、レンさん」

「焦ったら駄目だよ、ショウ。ちゃんと仲良くなってからお願いしな

いと」

「わかってるって。女をその気にさせるテクニク、ってやつだろ」
しかし、想像したら興奮してきてしまった。

今晚はなかなか寝付けないかもしれない。女と親しくなるチャンス
のなかったシヨウたちが急にあんな美人と話せるようになったのだ。
少しくらい情緒不安定になってしまっても仕方のない話。

どうせ同室にいるのはケンだし、他の部屋に聞こえない程度に騒が
せてもらおう。

「でもさ、その気にさせるってどのくらいその気にさせたらいいんだ
ろうな？」

「え？ えーつと……レンさんの方から『触っていいよ』って言うてく
れるまで、とか？」

「そんなのいつになるかわからないじゃないか」

街には「子供は近寄らないように」と言われているエリアがあつて、
そこには「お金を払えばエロいことのできる店」があるらしい。

小遣いを貯めて行くのでは格好がつかなかったが、これからは頑張
れば自分たちで稼げる。

レンと仲良くなるのももちろんとして、我慢できなくなったらそこ
へ行ってみるという手もあるかもしれない。

「ああでも、デートっていくらかかるんだろうな？ プレゼントとか
もいるんだろ？」

「なんか、デートの時は男が全部払うのが常識らしいよ」

「マジかよ。結婚したらどうせ財布まとめるんだから誰が払っても同
じじゃね？」

「でも、レンさんだつて貧乏な男よりお金持ちの男の方がいいはず」
「じゃあ無駄遣いもできないじゃねえか。……くそ。でもレンさんだ
もんな。男なんて選び放題だよな絶対」

財布の中身を数え直しながら悶々とする少年二人。

彼らの夜、そして冒険はまだ始まったばかりである。

二月のイベント

「ストレージだと……!?!」

レンたちの報告に、賢者は前回同様に大きな反応を見せた。

目を見開いて立ち上がった彼はレンたちの視線に気づくと軽く咳払い。あらためて席に座り直して、

「容量は？ 我々と同程度の力が与えられているのか？」

「いや。たぶん、俺たちの四分の一くらいだと思う」

検証した結果、だいたいそのくらいだった。

メイの場合、メイスを収納したらあとは石を少し入れて終わり。ないよりはマシ程度の収納量だ。

賢者は「なるほどな」と呟き、

「石碑の内容から見ても今後、少しずつ容量が増えていくのかもしれない。二十階までの道のりを遠く感じていたが、迷宮の造り手もなかなか粋な事をしてくれる」

「はい。矢を自分で持ち歩けるようになるだけでも大きな進歩です！」

これでレンたちもアイリスの矢を入れていたスペースに他のものを入れられる。

重いドロップ品が入るとストレージのやりくりが大変だったりするのでこれは正直ありがたい。

「ああ。ストレージが解禁されればネイティブ世代と我々との格差もだいぶ縮まる。これは間違いなく朗報だ」

己の指同士を組み合わせ、何やら思案を始める賢者。

彼の顔には隠しきれない笑みの色がある。

「よくやってくれた。今回の報酬は通常よりも弾ませてもらおう。これでまた我々は新たな一步を踏み出す事ができるな」

「新たな一步って、シヨウくんたちみたいなのをもっと増やすつもり？」

「無論だ。下層まで潜らせないにせよ、一定階層——例えば十五階までを多くの子供たちに経験させられれば我々の暮らしはぐっと豊か

になる」

ダンジョン攻略におけるストレージは「装備品を必要な時だけ取り出せる便利な収納」だが、日常生活においては「重い物を簡単に移動させる手段」にもなる。

店をやっている者や職人なら品物を手軽かつ大量に運ぶことができるし、引越しの際などはストレージ持ちを数人動員すれば楽に済む。

ストレージに満載したうえで両手にも可能な限り抱えれば一人で二人分以上の運搬能力を生み出すことだってできる。

「欠片の入手を考えてもメリツトは多いからな。早急に第三陣の探索者候補を選定したい」

「第三陣か……」

言うまでもなく第一陣がアイリスとメイ、第二陣がシヨウとケンである。

始まってからまだ一年経っていないというのに話がどんどん進んでいく。賢者が前に言ったように、これが新たな動きというやつなのだろうか。

戦力が増えるのは悪いことではない。

むしろ「みんなだダンジョンを攻略しよう！」という機運が高まるのは願ってもないことなのだが、

「なあ。そんなに急がなくてもいいんじゃないか？」

レンは妙な不安、違和感を覚えた。

街のリーダーにして最古の転移者である中年男はこれに眉をひそめて、

「何故だ？ どうせなら早い方がいいだろう。もちろん、指導役の選定も含めて慎重を期すつもりだ。みすみす子供たちを死なせるつもりはない」

「なら、安全を最優先にしたっていいだろ。次から次に新しい奴を送り出していくんじや、まるで兵士を量産しているみたいだ」

嫌だと思ったのはおそらくシヨウとケンの泣き顔を見たからだ。

アイリスとメイは優秀だし、レンの手の届くところで見守ることが

できる。けれどあの少年たちは前途有望なだけの駆け出しで、成長にはまだまだ時間がかかる。

第一陣を特殊な例として除外すれば「ネイティブ世代にもダンジョン探索をさせる」という方策の成果はまだ挙がっていないのだ。

「せめてシヨウたちが十階を攻略するまで待たらどうか。もちろん、それだって急かすべきじゃない。あいつらが死んだら元も子もないんだ」

これにはフリーが「そうかもね」と頷いてくれる。

「せめて十五階までは到達してくれ、ってどんどん新しい子を送り出すんじゃ、選ばれた子たちはプレッシャーだよ。期待されないよりはいいかもだけど、あんまり期待しすぎると無理させちゃう」

「指導役がいろいろとダンジョンは安全な場所ではない。その上で志願するのだ。多少の困難は背負って欲しいものだが」

「んー……なんていうのかな。少しくらい無理をさせてでも結果を出させたいのか、子供の成長を見守りたいのか、どっちなのかちゃんと決めるべきじゃない？」

賢者は虚を突かれたような表情になってレンたちを見た。

彼はしばし思索するように間を置いてから、

「我々の世代はゼロから道を切り開いてきた。それに比べれば温過ぎるくらいだ……と断じるのは傲慢か？」

「そこまで偉そうなことは言えないけどな。『自分たちの想いも背負ってくれ』なんて勝手に言われたら『知るか』って言いたくもなるだろ」

背負いたくて背負うのと背負わされるのでは全く違う。

アイリスの両親への想いは一緒に背負いたいが、この少々極端すぎるおっさんに「自分たちはもつと苦労したから」と言われるのは嫌だ。

返事はすぐには来なかった。

数秒後、重苦しいため息と共に吐き出されたのは、どこか寂しげな言葉。

「……我々にはもうあまり時間がないのだ」



「悪いこと言っちゃったかな」

家に帰った後。

リビングのテーブルに腰かけたレンは、フーリの呟きに「かもな」と答えた。

「アイリスのお父さんだってもう若くないんだ。あのおっさんなら猶更だよな」

「ん……。あのおじさんならあと三十年くらい余裕で生きると思ってたんだけど」

実際、あと三十年なら生きられるかもしれない。

ただ、それは本当に「死ぬまで」の計算だ。

既に一線を退いている賢者。これから体力はさらに落ちていくだろうし、ボケだつて始まるかもしれない。彼がリーダーを名乗ってられる間にダンジョンが攻略される保証はない。

ましてあの男は攻略できなかった時のことも見据えている。

自分の手が離れるまでに「これからもこの世界で人々は生きていける」と確信できる環境を作らなければ、と焦っているのだろう。

自分が死んだ後の世界、なんてレンには考えられない。

寿命で死ぬのはまだまだ先の話だ、とどうしても考えてしまうからだ。理屈ではなく実感としては賢者の気持ちはわからない。

「……私たちに『早く子供を作れ』って言うのもそういうことなんでしょうね」

「ああ。……まあ、だからつてすぐ子供を作ります、なんて言う気はないけど」

年長者の言うことも少しは尊重してやらないとな、とは思う。

結局、第三陣の投入については年長者たちで話し合つて方針を決める、ということでも落ち着いた。

大人たちが「追加する」と決定し、ダンジョンに潜りたいと立候補する子供が出てくるのならレンたちが強硬に反対することではない。

「でも、そのうちきつと指導役の方も足りなくなるぞ」

「私たちより年上の人たちにもお願いするつもりなんじゃない？」
いろいろ試してみる、という意味ではそれはそれでアリなのかもしれない。

「ま、俺たちは今まで通りやればいいか」

「だね。焦っても仕方ないし。死んじやったらなんにもならないもん」

その後。

レンたちの反対が効いたのかどうなのか、第三陣に関する話し合いはすぐには結論が出なかった。

新しい子を出す、という方向で決定し、じゃあ誰を出すかという話し合いが始まったのはショウウたちが十階を攻略し終えてから——までもう少し後のことになる。



「あつという間に二月だねー」

「ほんとに早いよな、時間が経つの」

ついこの間クリスマスや正月を祝ったばかりだというのに。

ダンジョンに潜っては休息を取って、を繰り返していると季節感もなくなってくる。そういう時に季節の行事はとても便利だ。

とりあえず節分は実施した。

適当な豆を投げ、投げた端から拾ってかじるといいう、なんかこう「これでいいのか？」と言いたくなるようなノリだったが。そもそもサキユバスはどちらかというと鬼や悪魔、退散させられる側の生き物なのではないか、という気もするし深く考えたら負けである。

で、大きな二月の行事といえどもう一つあって、

「なあ、フリー？ こつちでもバレンタインとかあるのか？」

「レンからバレンタインの話題を出すなんて……欲しいの？」

「そりゃ欲しいよ。好きな女の子からのチョコだぞ」

彼女と呼んでいいのかわからないものの、親しい仲の女の子たち。彼女たちから貰えたら間違いない幸福だろう。

「でも、ほら。バレンタインがあるなら俺もチョコ作らないと」

「うんうん。自分が女の子だって忘れてないみたいでえらいえらい」

「ここにこしながら本当に頭を撫でてきたフリーは「でもねー」と首を捻って、

「めちやくちや高いんだよね、チョコ」

「めちやくちや?」

「うん、めちやくちや。下手したら家を買えるくらい」

「いや高すぎだろ!?!」

かつて、胡椒が金と同じくらい高かった時代・地域もあつたという話は聞くが。

「材料のカカオがねー。どつかの階でたまーにドロップするらしいんだけど、育てるのが大変すぎてまだ量産できてないんだって」

カカオは高温多湿でないと育たない。

街周辺はどつちかというと涼しい気候なので不向きだし、かといって気候が変わるほど遠くに行くには欠片が足りない。

ハウス栽培を行いつつ魔法で水を補給するとかすれば育てられるかもしれないが、それにしたってある程度の土地＋貴重な人材を割くことになる。

「だからドロップした分しか流通してない……っていうか、たいいていの人がストレージに入れて保管してて、闇取引みたいに受け渡しされてるとか」

「あー。ストレージに入れとけば腐らないもんな。豆なら軽いし」

それにしても闇取引って。

「じゃあチョコは諦めるしかないか」

「うん。作るならやっぱクッキーかなー。一緒に作る?」

「教えてくれるか?」

「いいよ。一緒に作るのも楽しそうだし」

幸いフリーが快諾してくれたので、レンもみんなに振る舞うためのクッキーを作れることになった。

するとそこに後輩たちも加わって、

「あの、私も一緒に作りたいです!」

「面白そうなので私も参加してよろしいでしょうか」

「おつけー。じゃあみんなで作ろっか」

レンにとつてはほぼ初めてのお菓子作り。

料理自体、家庭科の調理実習でやる程度だったので不安だったものの、

「なんか思ったより楽しいな、これ」

「意外。レンがけっこう上手い」

「意外ってなんだ」

ジト目で睨むと「ごめんごめん」とフリーは笑って、

「意外と器用だもんね、レン。お菓子が作れても不思議じゃないか」

「お前、また意外って言ったな」

「意外って言えばメイちゃんが不器用なのも意外かも」

「不覚。どうやら繊細な力加減を要求される作業は苦手のようです」

力が強すぎるのも考えものである。掃除用具が壊れないように、という程度の配慮はできるものの、ちまちま手を動かしたりするのは専門外らしい。

アイリスは家族とも作ったことがあるらしく上手だったので、それでもなんとか形になって、

「おお、できてる……!」

「火加減はアイリスちゃんのお陰だね」

出来上がったクッキーは不十分な設備で作ったにしてはなかなかの出来だった。

ごくごく普通のシンプルなもの他、干した果物を入れたもの、メイ特製の型で色んな形にしたものなどを作成。

「みんなで作ったからどれが誰の、って感じじゃなくなっちゃったけど、これはこれでいいよね?」

「ああ。楽しかったし、みんなで食べれば問題ないだろ」

マリアベルに渡す分はちゃんとラッピングして残しておくことにして、おやつにみんなで味わった。

異世界に来て甘味が貴重になったからか、それとも女になって味覚が変わったからか、甘いものが以前よりも美味しく感じる。

エナジードレインのおかげで食べなくても平気だというのについつい食べ過ぎてしまったら、みんなからくすくすと笑われてしまった。

しかし、そういうのも悪くない。

「あれ？　つていうかこの場合、ホワイトデーってどうなるんだ？」

「あー。……どうなんだろうね？」

バレンタインデーにみんなで贈りあってしまったのである意味お返しも済んでいる。

無理にホワイトデーをやる必要もなさそうだが、

「せっかくですからまたお菓子作りをすれば良いのでは？」

「賛成です！」

「じゃあそうしよっか。レンもそれでいい？」

「ああ、もちろん」

今回は「牛乳ならあるからアイスはどうか」という話になった。色的にホワイトだしちよいどいい。

一か月後にはもう少し温かくなつてアイスが美味しい気候になってくれることを願いつつ、レンはまたみんなでお菓子作りをする日を楽しみにすることにした。

なお。

帰ってきたマリアベルが娼婦のお姉さん方からのクッキーを持って帰ってきたので、ホワイトデーのお返しも作る必要が生じたことを付け加えておく。

レンの悩み（前編）

「打ち止めかと思えば、性懲りもなく貴方たちですか」

振るわれたメイスが小鬼の首をぐしやりと砕く。

絶叫を上げる間もなく消滅していくゴ布林ソルジャーを見送ることもなく、メイは左の拳で二体目のゴ布林を迎え撃った。

直後、敵の後衛から飛んできた炎をアイリスのファイアボルトが迎撃、ゴ布林メイジは杖を持つ手に矢を受けて悲鳴を上げる。

さらに押し寄せてくるゴ布林にフリーがナイフを突き立て、四体目はとりあえず蹴飛ばして食い止める。

すばしっこい小鬼たちの後ろから迫ってきた巨体にはレンが浮遊状態から、

「ファイアボルト！」

ブースト付きの炎属性ボルトを顔めがけて叩き込んでやる。

視界を封じられたオークヒーローが足を止めたのは一瞬。すぐさま最後尾に陣取るゴ布林ヒーラーが顔の火傷を癒し始める。

レンは舌打ちしつつ、最大ブーストの「フリーズ・アロー」を降らせて敵全体のHPを削りにかかる。しかし残念ながらヒーラーへ向かった矢はもう一体のヒーローの身体が阻んでしまった。

隙あり、とばかりに陰から飛び出してきたゴ布林アーチャーの矢がレンの肩へ。

「ちよつと多すぎだろ、ボス戦じゃないんだぞ!？」

とはいえ、四体の前衛ゴ布林は間もなく消滅。

メイとフリーが二体のオークヒーローを相手できるようなったところで形勢は決した。通常のマナボルトを叩き込んでメイジを片付けたら、ヒーラーの回復が追いつかないスピードで敵の数を減らしていくだけだ。

最後の方は「ドレインボルト」を打ち込んでMPの節約。

戦闘が終わると、床の上にはかなりの量のドロップ品が散らばるところになった。

「……終わったな。みんなお疲れ様。怪我はないか？」

「心配しなくても、レン以外は擦りむいたくらいだよ」

言いながら歩み寄ってきたフリーリが有無を言わさずに矢を引きぬく。

レンは痛みにも顔をしかめながら「キュア」と「ヒール」を立て続けにかけた。キュアを併用したのは変な雑菌が入った場合の用心だ。

みんなにもヒールをかけ、ひと息ついたところで身体をぐいっと引き寄せられる。

唯一出番のなかったマリABELに唇を塞がれ、柔らかな感触と共にMPが補充されていく感覚を味わう。

他のメンバーからもちらちらと視線が送られてくるのもものすごく恥ずかしいのだが。

「ふふっ。……役得です」

「マリAさん。いきなりだから息できなかつたじゃないですか」

「あら。まだまだ修行が足りませんね、レンさん」

まだ使えそうな矢は回収してアイリスの矢筒へ。

メイはいったんメイスをストレージに収納し、回収したドロップ品はひとまずフリーリのストレージに放り込まれる。

「さすが、十六階からは厳しいな」

五階区切りの後、ということできさらに難易度が上昇したダンジョン。

新たな脅威はゴブリンとオークの連合軍だ。今更ゴブリンが交ざったところで、と思いきやこれがかかなか侮れない。でかいオークに集中すると小さいゴブリンを見逃しそうになるし、動きのリズムが違うので「慣れ」を容易に崩されてしまう。

さっきのように前衛がゴブリンを止めている間にオークに接近されると最悪、ゴブリンごと叩き潰されかねないし、単純に数が増えたせいで処理しきれない。

「ええ。やはりここは少しずつ攻略するしかないでしょうね」

言ってマリABELが広げたのは十六階のマップだ。

攻略本に載っているものではなく、自分たちでマッピングしているもの。

ダンジョンもだんだん広くなってきて「あれ、どこまで攻略したわけ？」といったことが起こりやすくなってきた。どの敵を倒してどの敵を倒していないかは後の攻略にも大きく関わってくるので、ごっちゃにならないように記録することにしたのだ。

ひとまず、マップは暇になりやすいマリアベルにお願いした。

「今までは多くが復活する敵でしたが、復活しない敵が増え始めています。その代わり、今のように一戦ごとの重みは増すことになりました」

気を抜けない戦いが続くと集中力も途切れやすくなる。

今まで以上に無理をせず、引き際を考えなくてはならない。

幸い、復活しない敵の多くは階段からボス部屋への経路に配置されている。一度雑魚掃除を終えてしまえばボス戦にはかなり安全に挑める。

「じゃあみんな。また注意して歩いてね。私の指示には絶対従うこと」

「ああ」

「はい」

「かしこまりました」

フリーがあらためて声をかけたのは、この階から新たに加わった罠のせいだ。

落とし穴。

一見何の変哲もない石畳の特定箇所を踏むと床が抜けて穴に落とされる。この階における穴の深さは約三メートル強。よほど変な落ち方をしない限り命の危険はないものの、変な体勢で落ちると頭を打つ可能性もある。

何より、ここで警戒する癖をつけておかないと後が大変だ。

もつと下の階に行くと穴がもつと深くなるし、穴の底が槍衾や毒の池になっているケースもあるという。下手をすると落ちただけでアウトである。

攻略本があるとはいえ、シーフ役がいなかったらうっかり踏みかかない。

「こんなところをひとつひとつ手探りで攻略してきたんだ。……賢者
があんなこと言う気持ちもわからなくはないかもな」

十六階のボスはゴブリンナイト。

レンたちが階をくまなく回り、ボス戦を制するまでにはやはり三回の探索を要した。



「久しぶりですね。レンさんが娼館ちやうかんに来られるのは」

「そうですね。起きてる時間も合いませんし、なかなか用もないので」

十六階の攻略を終えたある日、レンは出勤するマリアベルと一緒に娼館への道を歩いていた。

時刻は昼下がり。

夜の仕事である娼婦たちもぼちぼち起き出してくる時間帯だ。手土産も持ってきたし、マリアベル経由で話も通してあるので邪険にされることはないはず。

「あら。お客として来てくださってもいいのですよ？ あのスキルも存分に活用できるかと」

「あー。いや、わざわざお店に行かなくても、俺の周りには綺麗な女性がたくさんいますからね」

「これはこれは、お上手ですね」

くすくすと笑いながら歩くマリアベルは娼館関係者だけあって慣れた様子。

一方のレンは何度か来た道とはいえ少し落ち着かない気分だが……彼女の服の袖を掴んで隣を歩く少女のおかげで少しは気が紛れる。

「あれねー。これ以上レンの武器が増えたらどうなるかと思っただけど、むしろ弱点だね」

猫のようになやかな細身を持つ黒髪黒目の少女、フリーである。

心境の変化か、それともこまめに切るのが面倒だからか、最近はシヨートからボブくらいの髪型を行ったり来たりしている。

こつちに来た当初——あるいは来る前からの相棒だけあって一緒に『寝る』頻度は一番であり、お互いに相手のことはよく知っている。奥手なアイリスや女性の方が好きなリアベルには「生やすスキル」があまりウケていないので、あれに最も興味を示しているのも現状だとフリーである。

「まあ、尻尾がもう一本生えたような感覚だけどき。俺で遊ぶのもほどほどにしてくれよ？」

「えー。でも、そうやっていじめてあげないとずっとレンのペースじゃない」

女性の身体はみんなデリケートだが、サキュバスの身体は特に敏感にできている。

中でも尻尾は神経がたくさん通っているらしく、少し撫でられただけで声が上がりがりそうになる。悪戯好きなフリーはこの尻尾で遊ぶのがお気に入りらしく、二人で寝ている時は積極的に責めてくる。

「生やすスキル」で生まれるモノも似たような扱いだ。

刺激に対する反応がわかりやすく、明確な限界の存在するこの器官はなるほど確かに弱点である。

レンとしては素直にこちらのペースに乗って欲しいのだが。

リアベルに至っては少し油断しただけでレンを完全に弄んでくる。年季の違いがあるとはいえ、相手のされるがままになるのはやはり恥ずかしい。例のマジックアイテムがなかったら家中に変な声を何度も響かせていたことだろう。

「そういえば、あのアイテムのお礼もしないとな」

「あ、そうだね。本当に役に立ってるし」

「でしたら、お二人が相手をしてくださるのが一番だと思いますが」

「物。物でお願いしたいです、リアアさん」

ちなみにアイリスとメイは留守番。

フリーがついてきたのは「帰り道、一人じゃ心細いでしょ？」という理由だ。リアベルはそのまま仕事なのでフリーがいないとレン一人になってしまう。

別に子供じゃないし、迷ったら空を飛べばいい。とはいえ、娼婦の

お姉さん方の相手をするのにあたっては一人だと心元なかったのでありがたく申し出を受けた。

さて。

話をしているうちに娼館に到着した。少しずつ動き出しているらしく、いくつかの部屋には明かりが見える。

入り口は中から開けてもらうまでもなくマリアベルが鍵を持って
いる。

お客様用の表口ではなく従業員用の裏口から入ると、程なくさつぱりとした服装をした長身の女性？　が出迎えてくれる。

「お帰りなさいませ、姉さん……って、お前ら!？」

「え？　あ、あー、タクマか。誰かと思った。久しぶりだな」

レンたちを見るなり思ったよりも低い声で驚いた彼女、もとい彼はレンやフリーにとってかつてのパーティーメンバーにあたる少年、タクマだった。

その様子だと来客がレンたちだとは聞いていなかったのかもしれない。

「わ、タクマってばだいぶ細くなったねー。女物も似合ってきた感じ？」

「うるせえ。誰のせいだと思ってやがる」

タクマ、およびその取り巻き二人が娼館で働くことになったきっかけがレンたちだ。

元はと言えばタクマたちのせいではあるものの、もめ事を収める際に罰として「娼婦になって娼館で働く」ように提案したのは他でもないレンである。

もつと別の罰でも良かっただろう、と言われれば「ごもつとも」としか言えない。

しかし、

「リアン。言葉遣いに気をつけなさいといつも言っているでしょう」

マリアベルが一喝すると、意外にも彼はすぐにしゅんとして、

「……申し訳ありません、姉さん」

「よろしい」

「あの、マリアさん？ リアンってなんですか？」
「っ」

タクマことリアン（？）がびくっとして、それからレンたちを睨んでくる。「おい、こらそこに触れるな」とでも言いたげだが、もちろんマリアベルは気にせず答えてくれる。

「向日葵の英名から取った源氏名です。最初は『ひま』と呼んでいたのですが、いつの間にか向日葵、さらにはリアンになっていました」
彼の名前を漢字で書くと「拓真」。無理やり可愛く読んで「ひま」と言ったところか。

レンはなるほど頷いて、
「良かったな、タクマ……じゃないリアン。可愛い名前をつけてもらって」

「いいわけあるか殺すぞ」
「リアン？」

「失礼いたしました。……お客様は、恐れながらも少々、我々従業員
の気持ちに配慮していただけると幸いなのですが」

「うわ、敬語とかほんと似合わないよねタクマ」
「っ」

さすがに学習したのか、フリーの煽るような台詞をリアンは震えながら堪えた。

少し可哀そうな気分になりつつ、レンは苦笑して。

「いや、嫌味とかじゃなくてさ。女扱いされながら男の名前で呼ばれるのって逆に辛くないか？」

あらためて見ても、今のタクマは前とは別人のようだ。

種族が変わったわけではないのでレンほど劇的な変化ではない。基本的な顔立ちは同じだし身長もほぼ変わっていないのだが、筋肉が落ちたうえに脂肪の付き方が変わりつつあること、こまめに（髭を含む）体毛を剃っているらしいこと、女性用の服に身を包み丁寧な物腰を身に着けたことでかなり印象が違う。

このまま娼館で働き続ければさらに変わっていくだろう。

そうなったときに「タクマ」と呼ばれ、知らない人から「え、男？」

と言われるのは精神的にどうだろうか。

「俺だったらいつそ女の名前で呼ばれた方が気が楽かなって」

「あー。レンは男でも女でもあんまり違和感ない名前だもんね」

「ああ。そこは正直助かってる」

これはリアンとしても意外だったのか、軽く目を瞬いた後で小さく
呟くように、

「……お前に言われるのはめっちゃくちや癪だけど、よくわかるじゃね
えか」

「伊達に女になったわけじゃないからな」

不本意ながら自己認識の転換を求められた者同士、奇妙な共感が芽
生えた瞬間である。

「ちようど良かった。リアン、レンさんたちの案内をお願いします。

くれぐれも粗相のないように」

「はい。……さすがに俺、いえ私でも、姉さんのお客さんに失礼な真似
はできません」

普段から厳しく躰けられているのだろう。

苦笑の後、「どうぞこちらへ」と恭しく言っただけはレンたちを導いて
くれた。

このままなら直に娼館に馴染みそうだ。

レンはそう思ったものの、口に出すとまた怒られそうなので心の中
だけに留めておくことにした。

レンの悩み（後編）

「いらっしやい、二人とも。久しぶりー」

「うわ……っ!？」

訪問相手は最初に来た時にも会った娼婦のお姉さんである。

接客部屋ではなくプライベート用の私室に通されたと思ったら、いきなりぎゅっと抱きしめられた。豊かな胸に顔が押し付けられて一瞬、息が詰まった。

スキンシップを含む仕事をしているせいか娼婦の皆さんはパーソナルスペースが狭い。

年下の同性相手なら猶更——いや、レンが男子だった頃から似たようなものだったか？

「びっくりするじゃないですか」

「ごめんごめん。でも、いいでしょ？ 減るものじゃないし」
減るとしたら彼女側のなにかである。

「レンちゃんまた可愛くなってるし。なにこのいい匂い？ 香水じゃないよね？ 胸はいま何カップ？」

「ええと……どこか座って話せませんか？ 実はその辺も関係する相談があつて」

「なになに、相談？」

「あ、レンちゃんたち来たんだ。私たちも話したい」

なんとかお姉さんに離れてもらったところで別の女性の声。二人の娼婦が部屋の前までやってきて声をかけてくる。

全員、娼婦だけあつて美人なうえ、プライベートなのでラフな格好。いや、仕事中也露出は多いのだが、今は化粧をほとんどしておらず、下着も男に見せる用の華やかなものではない。同性しかいないからこそその無防備な姿だ。

ちなみにタクマあらためリアンは男にカウントされていないし、彼はレンたちを送り届けてすぐに別の仕事に行ってしまった。

「あはは。ここっていつもこんなに賑やかなんですか？」

「まあ、いつもじゃないけど。女ばかりで気を遣わなくていいから

ねー。フリーちゃんも参加したくなつた？」

「いや、それはないです」

とりあえず中に上がらせてもらい、絨毯の敷かれた床へ思い思いに腰を下ろした。

娼館の接客用フロアは土足のまま利用する形だが、娼婦の私室は入り口で靴を脱ぐ形式になっている。みんな日本人なのでずっと土足はやっぱり落ち着かないらしい。

「これ、つまらないものですがお土産、というか手土産？ です」

「ありがとう。お、もしかしてジャーキー？」

「はい。ポークジャーキーです」

オークを倒すとたまに肉が落ちる。

おそらくオーク肉なのだろうが、味はほぼ豚肉。肉も買うと高いので家の食卓でも重宝しているが、今回はせっかくだからと燻製にしてみた。

スモークするためのチップはアイリスの実家から調達。持ってきた側が言うのもなんだが、なかなか良い出来になったと思う。

「ある程度日持ちしますのでおやつにでも食べてください」

「ありがとう。……よし、じゃあお酒空けよっか」

「おっけー。グラス人数分持つてくる」

「私は部屋からいいお酒持つてくるねー」

「すぐ食べる……っていうか、これから飲むんですか!? 夕方から仕事なんですよね？」

「だいじょうぶだいじょうぶ。仕事のお酒とプライベートのお酒は別だから」

そんな「甘い物は別腹」みたいな上手い話はないはずだが。

一方、酒に弱いようでは娼婦なんてやっていられないのも事実のようだ。

客をいい意味で手玉に取るのが娼婦であって、酔い潰されていいように翻弄されたのでは面目丸つぶれだ。

「まあ、お酒に弱いなら弱いで誤魔化す方法もいろいろあるんだけどねー」

「そんなのがあるんですか？」

「あるよー。袖に袋を仕込んで中に流すとか、口に含んだままお客さんにキスして飲ませるとか」

「それはお客さん喜ぶんだろ？うなあ……」

いい気分になった客は酒量も増えがちになるし、細かいところに目が行きづらくなって誤魔化しが効きやすくなる。

もちろん利用料の中には酒代も含まれる。

「レンちゃんたちはお酒、いけるひと？」

「レンはわりとザルですよ」

「お前もな」

フリーの場合、普段から悪戯好きなぶん酔ってもあまり変わらないのかもしれない。

時と場合は選ぶ方だしお小遣いも有限なのでレンもフリーも無制限に飲んだりはしないが、今のところ本気で酔いつぶれた経験はない。

お姉さんたちとお酌をしあつて盃に口をつける。強めの蒸留酒。好みの味だ。

「……美味しいですね、これ」

「でしょー。私のお気に入りなんだ」

「つていうか二人とも本当に平気そう。本当に娼婦、向いてるんじゃない？」

「いや、冒険もありますし、男にはあまり興味がなくて」

これには三人が「もったいない」とハモってきたものの、レンとしてもここは曲げるつもりがない。

「あの、それで相談なんですけど」

「うんうん」

お姉さんたちも強要するつもりはないらしく話題転換に乗ってくれる。

ほっとしつつ、なんとなく一同の胸元に視線を向けつつ、

「俺、レベルアップするたびに胸が大きくなって……見ての通り、結構な大きさになっちゃって」

「だね。フリーちゃん、これってサイズどれくらい？」

「ぎりぎりDになってないCですね」

「おお、と歓声上がる。」

フィクションではCカップくらい当たり前だが、リアルにおいてはそこそこ大きい。日本人転移者の街であるここでもその常識は変わらない。

その点、娼館のお姉さんたちは胸の大きな人が多い。

「皆さんは下着とかどうやって調達してるのかと思って。手頃ない店があれば教えてもらえませんか？」

「――」

不思議なことに、誰も返事をしてくれなかった。

オーク肉のポークジャーキーはビーフジャーキーとはまた違った味わいながらいい味で、もちろんお酒にも合うが、酒に夢中で口が開けられないというわけでもない。

三人はなにか尊いものでも見たようにレンへとじつと視線を向けてきて、

「レンちゃん、抱きしめていい？」

「なにこの子可愛い」

「リアンもこれくらい素直になつてくれればいいのに」

なんか感動されたらしかった。

困惑しつつフリーを見ると、彼女までなにやらうんうんと頷いている。

「いや、そんなに変なこと言ってないよな？」

「や、言っていないからこそっていうか。あれだけ嫌がってたレンが私たち以外の人に下着の相談するようになったと思うと……」

「あのな、俺だって恥ずかしいんだからな？」

「まあまあ。心配しなくてもちゃんと教えてあげるから」

ここにこしながらさらにお酒を勧められ、せっかくなのでいただく。

「下着はねー。大きいサイズはあんまり数がないんだよね。特に可愛いやつ」

「こつちだとつける人数に限りがあるもんね」

「Cならまだありそうだけど……レンちゃんの場合、まだまだ大きくなるか」

「そうなんですよ」

「これまでも何度か胸がきつくなつてきてやむなく下着を買い替えている。」

「この際、可愛いかどうかは二の次なんですけど」

「それはダメ」

「きつぱりと否定された。」

「いつそキャミ系にしてみたら？ サキュバスって下着つけなくても型崩れしなさそうじゃない？」

「え、そうなのレンちゃん？」

「そう言われても、女になってからまだ半年くらいですし」

「あー。それに若いしね」

「ちなみにキャミソール系もちろん考えなかったわけではない。ただ、レンとしてはできればブラを希望したかった。」

「……その、あのホールド感を一回味わうともう戻れないというか」

「レン、本当に成長したよねえ」

「頭を撫でるな。実は酔ってるだろお前」

「残念でしたー。私は素でもこういうキャラですー」

「なるほどね。うーん、そうするとやっぱり高くついちゃうかなー」

「当然だが、大きいサイズのブラほど必要な材料は多くなる。」

「値段的にも高めになりやすいし、成長のたびに買い替えるとなると猶更だ。」

「いっそ自分で作ろうかとも思ったんですけど、納得のいく出来に仕上げるには腕が足りなくて」

「え、レンちゃん裁縫するの？」

「今のところほつれたところを直す程度ですけど」

「ブラは独特の構造をしているためなかなか難易度が高い。レンとしてはいい感じのフィット感が希望なので微妙な出来で妥協したくもない。」

「妥協できるところといたったら可愛いかどうかくらいしか」

「それは妥協しちゃダメ」

「はい」

どうしてもだめらしい。

娼婦のお姉さんがたは三人で「うーん」と悩んだ挙句、しばらくしてにっこり微笑み、

「下着にお金がかかるのはしょうがないよ」

「つまり打つ手はないんですね……」

「こればかりはねー。私たちのお古をあげるわけにもいかないし」

「それはそうですね」

普通、下着はよほどのことがない限りは共有しない。そこは気にしないとしても捨てる以上、基本的には機能的に限界が来た品である。ぶつちやけもらつても仕方ない。

と。

「あれ？ それ、もしレンチちゃんがお下がりでも気にしないなら意外となるんじゃない？」

「え？」

「私たちがプライベートでつけてるのは無理だけど、仕事着ならいけるかなって」

いわく、仕事用の下着は娼館から予算をもらって娼婦たちが購入しているらしい。

「お客さんの前では綺麗な下着つけてないといけないでしょ？ だから補助してくれてるんだけど、これって『少しでも痛んできたら買い替えられるように』っていう意味もあるのね」

「あ、そっか。普段使いのより早く買い替えるんですね？」

「そういうこと」

接客には不向きでも普通につける分には十分。

もちろん、仕事用からプライベート用に転用する娼婦もいるものの、仕事着はブラだけどプライベートではキャミソール派、という娼婦もいる。

「捨てるくらいならちようだい、ってみんなに話してみよっか？」

「そうしてもらえると助かります」

この結果、レンは次の買い替えタイミングに娼婦たちのお下がりを買ってもらうことができた。

激しい動きをするには不向きなデザインだったりもしたものの、普段着には十分すぎる。おかげでかなりの節約である。

「ところでレンちゃん。着られなくなった下着ってどうしてるの？捨てる？」

「いえ。今までのほだいたいフリーやアイリスがもらってくれました。俺、どんどんサイズが上がるのであんまり痛んでませんでしたし」

これはこれである種の節約である。

今のブラサイズだとフリーたちには合わなさそうだが、次のブラあたりはマリアベルのサイズと合うかもしれない。

お姉さんはこれに「なるほどねー」と頷いて、

「売ってお金にするのもアリかと思ったけど、ちゃんと活用されてるなら大丈夫か」

「え、中古の下着って売れるんですか？ ……古着として売って意味じゃないですよね？」

すると返ってきたのはにんまりとした笑み。

「そのへんは男の子だったレンちゃんの方がよくわかるんじゃない？」

「……あー。可愛い女の子の下着なら買う奴はいますね」

「いるんだ!？」

「いるんだよ、これが」

フリーが驚くのも無理はないが、男子にとって女子の下着はエロアイテムである。

もちろん中身にしか興味のない者もいるし、新品に興奮できる者も限られる。ただ、可愛い女子の身に着けていた品ならたとえ洗濯済みであっても需要はある。

ひと昔前、高層マンションが少なく道とベランダとの距離の近い物件も多かった頃は下着泥棒の被害が多かったとも聞く。

「じゃあ、レンのも売れるんだ」

「売れる売れる。なんならフリーちゃんも売れると思う」

「いや、私はそういうのいいですけど」

少し前に男の友人から「可愛い」と太鼓判を押されたレンならそれは需要があるだろう。

「いや、でも、どこへどういう風に持って行ったら売れるのかはさっぱりなんです」

「姉さんに渡してくれば娼館こっちでなんとかできるよ？」

蛇の道は蛇だった。

「そうですか。今つけてるのはたぶん誰にも使ってもらえないんですよね……」

「レンちゃんは姉さんに処分をお願いした、それを姉さんがオークションに持ち込んだっていう体ならたぶん誰も傷つかないよ」

「いや、オークションって」

詳しいことは聞かないほうが身のためな気がした。

万が一、そこに知り合いが参加していたりしたら気まずいにも程がある。

と、レンの服の袖がくいくいと引かれて、

「別に無理して売らなくてもいいんじゃない？」

「まあ、確かにな」

そこまでお金に困っているわけではない。

フリーがN〇と言ったのは主に生理的嫌悪感からだろう。買った男が「どういうこと」に「使う」のかはだいたい想像がつく。

レンはしばらく考えた後で、

「ちよつと考えておきます」

元男だからか、別に処分するつもりだった下着がこっそり使われる分にはそこまで抵抗はない。もちろん、今使っている分が盗まれたり、目の前でやられるのはまた別の話だが。

というわけで判断はひとまず保留。

お姉さんたちも無理には言ってこなかったもので、後は普通に他愛のない雑談をして酒をご馳走になってから帰った。

ポークジャーキーは「また食べたい」と言われるくらい好評だったので、オーク肉（仮）がまた手に入ったらマリアベルに経由で贈ることにした。

レンの種族レベルがさらにアップし、カップサイズがCからDになったのはその夜のこと。

レンは悩んだ末、新たなスキルとして「魔力過剰蓄積^{マナストレージ}」という特殊なものを選んだ。

新戦法とデート

「さて。……それじゃあ試してみるか」

十七階、ボス部屋前。

レンは罨チエツク済みの扉の前に立つと、仲間たちを振り返った。離れて立ったフリーたちはレンの目配せに頷きつつ、少し心配そうな表情を浮かべる。とはいえこの戦法のリスクは低い——はずだ。

全員の準備が整っているのを確認したところで前に向き直り、ドアを引き開けて、

「ファイアアロー！」

中の様子をきちんと確認するよりも先に魔法を発動させた。

降り注ぐ炎の矢。ゴブリンとオークの混成軍がこれに悲鳴を上げ、明確な殺意を持ってレンを認識する。

一方、レンはまともに取り合うことなく床を蹴って宙に浮かび上がり、後退しながらライトニングボルトで敵の先頭を狙っていく。

仲間たちは一人を除き、あらかじめ定めたルートで逃がっている。

ダンジョンの廊下は三人が並ぶのはきつい広さ。ゴブリンなら三体はぎりぎり並べるものの、部屋の中と違い、全員が一度に殺到してくることはない。

逃げるレンを追って敵がボス部屋を出てくれれば儲けもの。

通路の広さに沿って炎の矢を生み出し、降り注がせればモンスターたちは逃げ場もなくこれを受けることになる。一人、レンよりやや後方に陣取ったアイリスが後退しながら放つ矢がこの戦法を後押し。

ゴブリンメイジやゴブリンヒーラーが魔法を使うためにも前進が必要となるため、結果的にすばっしこいゴブリンと大柄なオークが距離を離されることになる。

「ファイアアロー、ファイアアロー、ファイアアロー！」

多少「ヒール」が飛ぼうが知ったことではない。

集団へ立て続けに飛ぶ攻撃は敵の処理能力を超えている。飛び来る炎の矢に立ち向かうのはいかに命知らずなモンスターと言えど勇氣がある。

あらかじめ安全確保した通路を逃げ続けることで敵に迫られるリスクを最大限回避し、可能な限りの遠距離攻撃を継続。

これぞ必殺、引き撃ち作戦。

ある種のゲームにおいてはわりとメジャーな戦法である。

現実においても後退しながらの射撃という困難をクリアできるのであれば十分な効果がある。もちろん、それ以外にも問題はあり、その最たる例がMPの消費量なのだが、これについてもレンの新たなスキルにとってある程度解決した。

魔力過剰蓄積《マナストレージ》。

これは簡単に言うと「最大MP量を増設する」スキルだ。

MPを「最大量の約九割」消費することで最大MPがほんのちよつとだけ伸びる。二回目以降は増設された分も含めた量の九割消費でさらに伸びる。

実質、最大MPを無限に伸ばすことができる夢のスキルだが、MP補給を自然回復や希少なポジションに頼って活用しきれない。

例えば「MPを全回復させるために丸一日待つ」なんてことになる。しかも最大MP量が増えるほどに効率が悪くなるのだ。その点、MP回復手段の多いレンならかなり有効に活用できる。

増設した分も含めてMPが満タンの状態で扉を開け、引き撃ちを行うことによって安全な敵掃討が可能。

この戦法にゴブリンたちはあえなく壊滅し、後から追いついてきたオークたちも満身創痍の状態。

「よし。……メイ、そろそろいいぞ」

「待ちくたびれました。では、後はお任せください、ご主人様」

ふらふらの状態で近づいてきた彼らをメイの振るうメイスが次々と叩き潰し、ダンジョン内に静寂が訪れた。



「……で、その調子で十八階も攻略したって？」

「本当にとんでもないよねレンちゃんたち」

「それほどでもないって。俺たちの戦い方はどうしても時間がかかるし」

十八階まで攻略を終えた数日後、レンたちの家にシヨウのパーティーのリーダーと、その彼女が揃ってやってきた。

まずはリビングに座ってお互いに近況報告。

(追加の椅子を買ったので座るところは問題ない)

男二人ではなく男女ペアで来たのは「男だけで行かせると心配だから」とのこと。クラスメートの女子たちとはなんだかんだ友人関係を築けているものの、もし彼氏を奪った日には一瞬で敵認定されることだろう。こと恋愛において女子の恨みは怖い。

「お前らだつて頑張ってるだろ。いったん仕切り直さなかったら今頃二十階クリアしてたんじゃないか?」

「まあな。でも、シヨウたちを教えるのもなかなかいい勉強になってるぞ」

「うん。こつちだと私たちが一番新人みたいなところあるし、若い子を教えられるの楽しいよね」

なんだかんだ彼らも上手くやっているらしい。

上層部の人選もそれなりに確かだということだ。もともと、タクマたちが活動休止したうえにレンたちも除くとなると残るパーティーもあまり多くはないのだが。

ここでリーダーが笑みを浮かべて、

「今日来たのもシヨウたちの件だ。俺たちもようやく十階を攻略できてな。シヨウたちもステータスを出せるようになった」

「え、本当!?! シヨウくんたち頑張ったね」

「本当だよ。ここまで来るのすつごく大変だったんだから」

リーダーたちはバランスの良い四人パーティー。

魔法使いと聖職者が一人ずついるので、戦闘はシヨウたちに支援魔法をかけて頑張ってもらい、傷を負ったら回復魔法をかける。それでも危なくなったらさすが助手舟を出す、というスタイルを取っていたらしい。

レンたちからすれば味方にかける系の魔法があるだけでもすごいし、四人もいればさぞかし安定だろうという感じなのだが、一概にそうとも言えないようで、

「どこまで手出していいかわからないのが本当きつかった」

「どんどん数が増えるゴブリンをあの子たち二人に倒させないといけないでしょ？　もうハラハラしたよ」

「あー。……俺たちはレベル的にアイリスたちと一緒に戦えてたからな」

メイに至ってはゴブリンを素手で撲殺しまくっていた。

「でも、そうか。ついにあいつら十階まで行ったのか。じゃあご褒美やらないとな」

「そうしてくれ。あいつら、十階をクリアしたらお前とデートできるって張り切ってたんだ」

「可愛かったよ、初々しくて」

レンたちだって大して歳は変わらないが、気持ちはわかる。

「デートか。本当にそんなんでいいのか？　あの歳なら洋食屋で食べ放題とかの方が嬉しくないか？」

「お前な。今更デートはなし、とか言ったらあいつら何するかわからないぞ」

「そこまで深刻な話なのか!？」

せめて生粋の女子とのデートの方が、とも言ってみたものの、二人から声を揃えて「お前が行け」と言われてしまう。

まあ、もちろんレンでいい、レンがいいというのなら引き受けるのは構わない。

「わかった。じゃあ、シヨウたちと休みをすり合わせないとな。二人一緒でいいんだろ？」

「できれば一人ずつ相手してやって欲しいが、そこまでは頼めないな。お前だって忙しいし、あいつらの小遣いも大変になる」

「そっちは六人パーティだもんな。わかるよ」

レンたちは五人パーティだが、メイの食事は主に石げんちちやうたつ。レンもいざとなれば食べなくても問題ないし、マリアベルはダンジョン攻略とは

別に収入源を持っている。

(今のところ必要に迫られてはいないが) どうしても困ったらアイリスの実家に頼ると言う手もある。

「生活費とかカツカツじゃないか？」

「まあ、楽ではないけどなんとかなってる。シヨウたちが自分たちの分の欠片を提供してくれているからな」

世界の欠片はいい値段で売れる。

特に世界の構築にこだわりのないリーダーたちは手に入れた欠片を売って収入にしているらしい。売られた欠片はいずれ新しい土地に化けて人々の暮らしに役立つだろう。もしかしたら初日の出を見るための欠片の足しにされるかもしれない。

デート話はとんとん拍子に進み、二、三日後には無事デートの運びとなった。

「どう、レン？ 準備はできた？」

「ああ、問題なく」

ノックしてすぐにドアを開けて入ってきたフリーリに、レンは振り返って答えた。

女になって結構経つ。さすがに身支度にも慣れてきて、フリーリたちを頼ることも少なくなった。今日の準備も個人的にはばっちりである。

動きやすい膝上丈のスカートにハイソックス。上は背中に二箇所穴の開いたセーターだ。首には布製のチョーカーを着けて数少ない露出も抑えている。

フリーリはしばらくじつと眺めたあと「うんうん、可愛い」と頷いて、「髪も長くなったよねー」

「ああ。ちょっと面倒だけど、伸ばすと愛着も湧いてくるな」

紫紺の髪はプライベートではストレートにすることが増えた。今日も丁寧に梳いたうえで垂らしている。運動するわけでもないだろうしこれでいいだろう。

「あ、でも一応、髪を纏める準備もしておくか」

シヨウから「剣で勝負だ!」とか言われる可能性も考えてストレージにリボンを放り込んでおく。

思えばリボン結びなんて以前は結び方を見ながらでもできなかった。今では手元を見なくても簡単になら結べるようになったのだから大きな進歩である。

「私たちがあげたドレスは着ないんだ?」

「あれは頑張り過ぎだろ。デートかよ」

「デートでしょ」

「デートだけどき」

向こうは中学生相当の少年二人である。

女子と一緒に遊びに行くのをデートと表現しているだけであって、本格的にエスコートしてくれたりするわけではないだろう。

パーティでもないのにあんなの着て行ったらレンが恥ずかしい、もし「お嬢さん、お手をどうぞ」とか彼らがやってきたら気恥ずかしさもあつて吹き出す自信がある。

フーリはこれに「脈なしだね、完全に」と呟いて、

「いい? 遅くても夜のうちに帰ってきてね? ちゃんと二人は家に送ること」

「わかってるって。あいつらの成長のためにも夜は寝かせてやらないとな」

普通の話をしている時だと相手の顔が間近にあつても自然にしていられる。同性かつ想い人という関係はシンプルで複雑だ。

「けど、鞄になに入れるか考えなくていいのは楽だよな」

「本当にねー。必要そうなものはとりあえずストレージに入れとけばいいんだもん」

日本だと「女子のバッグは小さい方がいい」とか言われていて大変だったらしい。ポケットのない服も多かったりするから猶更。

レンはふと、今の自分が日本で生活することをイメージして「そんな日はたぶん来ないよな」と思い直した。

ダンジョンをクリアして帰れない可能性、帰れると同時に男に戻る

可能性、帰れないけど男に戻る可能性などなどを考えると「帰れるけど男に戻れない可能性」はそこそこ低い。どっちにしてもまだまだ先の話でもある。

「あ、来たみたいだね」

「ん。じゃあ、ちよつと行ってくる」

「行ってらっしゃい」

玄関の方から少年の声がしたのでそちらへと向かう。

「ご主人様、お気をつけて」

「変なことされたら逃げてくださいね……!?!」

「ありがとう。でも大丈夫だって。あいつらより俺の方がさすがに強いし」

メイとアイリスにも見送られながら玄関を開き、

「よう。二人とも、昨夜はちゃんと寝られたか？」

「お、おはようございますレンさん！」

「きよ、今日はよろしくお願いしますー！」

面白いほど緊張したショウとケンに挨拶をした。

二人とも前に家に来た時のような武装はしておらず、シンプルながら小綺麗な格好。間違ってもダンジョンに連れていかれたりはしなさそうだ。

これがタクマたちだと「別に適当でいいだろ」とばかりにラフな服装をしてきそうなので少年たちの好感度がアップ。いや、比較対象が悪い気もするが。

「さて、じゃあ行くか」

別に街をぶらぶらする程度で緊張しなくても、と思いつつ、指摘すると逆効果な気もするので敢えてあっさりとした声をかける。

二人は「は、はい！」と大きな声で答えて後を追いかけてきて、

「あ、あの、レンさん。今日も綺麗です」

思い出したかのように言ってくれる。

レンは軽く吹き出して、

「なんだよそれ。……でも、悪い気はしないな。ありがとう」

笑いかけたら真っ赤な顔でそっぽを向かれた。

——ひよつとして二人とも、恋愛的な意味で期待しているのか？
帰ってからフリーに尋ねたら「鈍すぎ」と呆れられたが、それはともかく。

街を回って買い食いをしたり（※シヨウたちの奢り）、
雑貨屋で小物をプレゼントされたり（※もちろんシヨウたちの支払
い）、

酒場の個室で昼食を摂ったり（※これもシヨウたちの奢り）。
もちろん個室で変なことをされたりすることもなく、いたって楽し
く健全なデートをして、シヨウたちを家まで送り届けた。

二人に「こんなのでよかったのか？」と尋ねると「もちろん！」と
帰ってきたので満足はしてくれたらしい。

これで満足してくれるのがやっぱり若いというかなんというか。

いつそ「エロいことはできない」とわかってくれる方が楽な気がする
のだが、かといって「お前ら俺のことが好きなの？」なんて自信過
剰っぽいセリフも吐きづらい。

「なあ、レンさん。もつと頑張ったらまたデートしてくれるか？」

悩みつつ、結局はその期待に応えてしまった。

「じゃあ、十五階をクリアしたらな。……わかっているとと思うけど、無茶
はするなよ」

明るい顔で「はい！」と頷く彼らと別れ、リーダーたちに挨拶をし
て家への道へ。

そうそう危険はないと理解しつつもなるべく明るく人気の多い道
を選んでゆつくりと歩いていると、

「あのー！」

二人組の女の子に呼び留められた。

彼女らはレンをどこか強い視線で睨みつけて、

「あいつらとどういふ関係なんですか!?!」

なんだかわかりやすい質問を投げかけてきた。

女子の恋愛トーク

追い返すわけにはいかないものの、ちょうど暗くなってくる時間。仕方ないので一度、二人の家に行ってしばらく預かる了承をもらった。二人とも簡単には引き下がってくれそうになかったからだ。シヨウたちの知り合いだと話し、少女たちと話をしたいだけだと告げると両親は納得してくれた。

二人を連れて家に帰り、フリーに呆れられたうえでお茶と軽食を出して、

「どうしてあんなことを言ったのか聞いてもいいか？」

時間を置いたせいでそれなりに落ち着いたのか、少女たちはいきなり食って掛かってきたりはしなかった。

「あなたがケンたちとデートしてたから」

歳はシヨウたちとだいたい同じくらい。活発そうな子と大人しそうな子で、イメージ的にもなんとなく被る。ただ、率先して口を開いた少女が口にしたのは「ケン」の名前。

一緒に聞いているフリーやアイリスが「あ、そっちなんだ」という顔をした通り、二人とも自分とは違うタイプの相手を好きになったらしい。

必死な表情からも思いがわかる。

こういうのがわかるようになったのは成長したからだろうか、と少し思ってから、さつきフリーに「鈍感すぎ」と怒られたことを思い出して脱力。

「俺とあいつらは知り合いだよ。友達っていうか、可愛い後輩みたいな感じかな」

女子相手なので自然と少し声色が穏やかになった。

誤解されないように説明したつもりだったのだが、少女たちはむしろ疑いを強めてしまったらしい。視線を鋭くして、

「じゃあ、どうしてデートなんかしてたんですか？」

「向こうから頼まれたからだよ。もちろん、変なこととは何もしてない」
「昼間だったし、人の目もあるしね」

レンより高レベルの人間がそのへんで普通に買い物していたりする街なので見つからないようにするのも難しい。

どうしても言うのなら聞き込みでもしてもらえばデートの様子はぼっちりわかるだろう。

「ケンたちのことはなんとも思っていないんですよね？」

「二人はあいつらのことが好きなんだよな？」

質問を質問で返すな——とは言わず、少女たちは少し驚いてから「はい」と頷いた。

「俺はなんとも思っていないよ。恋愛的なあいつらとどうこうなろうとは全然思っていない」

「なら、どうしてデートしたんですか？」

レンは少し考えた。

ここで「頼まれたから」と答えても話がループしてしまう。さっきの「どうして」と今の「どうして」では意味合いが違うのだ。

フリーも難しそうな表情を浮かべている。同性として気持ちはわかるのだろう。アイリスもどうしていいか困ったような顔だ。

なお、メイはいつも通り無表情ながらもどこかわくわくした様子で成り行きを見守っている。

「断ったら落ち込むだろ。頑張る気力だってなくなるかもしれない」

「別に、ダンジョンなんて潜らなくてもいいじゃないですか」

賢者が聞いたら落ち込みそうなセリフである。

「確かに、ケンたちが無理して頑張らなくてもいいかもな」

「ほら」

「でも、あいつらはやりたいって思ってる。俺はそれを尊重してやりたい」

「そんなの勝手じゃないですか。付き合う気もないのに期待を持たせたりしても、結局いつかは傷つくんです」

彼女の言うことにも一理ある。

レンにその気がない以上、少年たちは失恋のショックを背負うことになる。むしろ遅くなれば遅くなるほど傷は深いかもしれない。

そういう意味では最初に誘われた時に断るべきだったのだろうか

——その時はまだ「異性として好かれている」なんて本気で考えていなかったわけで。

「……でもなあ。本人たちから『好きです』って言われたわけでもないのに『付き合う気はないから諦めてくれ』って言うのも変じゃないか？」

レンならきつとがつつり落ち込む。

別にそのまま付き合えると思っていたわけじゃない。ただ一度、夢を見させてほしかっただけなのに……と、しばらく女性不信になるかもしれない。

すると少女はむっとした表情を浮かべて、

「結局、嫌われるのが怖いから言えないだけじゃないんですか？」

「……まあ、そうかもな」

がっかりした顔よりは喜ぶ顔が見たい。

ただ一緒に遊ぶだけでショウウたちが頑張れるならそれでいいじゃないか、と思う。

だから「違う」とは言わない。そのうえで少女たちを見返して、

「二人が言いたいのは『好きな人を取らないで』ってことでいいか？」
「っ」

息を呑み、気おくれしたように硬直する二人。

睨んだつもりはない。ただ、人とは違うサキユバスの容姿は多少威圧感があるかもしれない。男なら「エロい」が先に立つだろうが相手は女子だ。

「は、話を勝手に変えないで！ あなたがケンたちを振らないのはおかしい、っていう話をしているんです！」

「うん、わかってる。……だからさ、それをわざわざ言いに来たのはなんのためかってこと」

「っ!？」

「俺とショウウたちだけの問題なら話は簡単なんだよ。別にこのままデートを続けているだけでもいつかはあいつらが自分で気づくかもしれないだろ」

明確に拒絶するのが最適とは限らない。

恋愛に正解なんてない。一般的に良いとされる理論があつたとしても、それがレンとショウたちに適用できるかどうかはわからない。

外野が強硬に意見してくるのはおかしいのだ。

そう、意見してきたのが外野なら。

「要するに、俺にあいつらを振って欲しいんだろ？　じゃあそう言えればいい。っていうか、俺はその気がないって言ってるんだから今のうちに告白すればいいじゃないか」

「……そ、それで振られたらどうするのよ!？」

なりふり構っていらなくなったのか、とうとう敬語じゃなくなつた。

おそらく今のが本音だろう。

彼女たちはショウたちが振られてくれる方が都合だからレンに抗議しに来た。失敗できないチャレンジの前にできるだけ成功率を上げようとするのは確かに正しい。

ただ、レンがそれに付き合っただけやる必要はない。

「二回振られたからって諦める必要はないだろ。何回も告白して最後には勝った女の子の話、いくつも知ってるぞ」

フリーが「なんていうマンガの話？」という顔をしたがこれはスルー。

実際、諦めずに何回も告白してくれるような子がいたらたぶん男はだいたい落ちる。女の子から「好き」と言われるのはなんだかんだ嬉しいし、気持ちが上がきになるものだ。

「なにそれ。……そんなの、できるわけない」

難しいのはわかる。もしかしたら初恋かもしれないし、振られるのは怖いだろう。

それでも告白しないと始まらない。ショウたちにも似たようなことを言った。

少女たちは俯いたまま黙ってしまった。

レンは軽く息を吐いて、

「本当に好きなんだな、あいつらのこと。前から知り合いなのか？」

「うん。……幼馴染」

「なるほどな」

小さな街だ。同世代の子供なんてだいたい知り合いでもおかしくない。その中でも家が近い子とは何度も顔を合わせるだろう。

一緒に遊んでいくうちに「ああ、この人と将来結婚しよう」と思ってもなにもおかしくはない。

残念ながらショウたちの口からは少女たちの名前を聞いたことがないので、単に「口うるさい幼馴染」と思われている可能性が高いが。「男ってそういうの全然気づかないからなあ」

「そ、そうなの？」

「ああ。若い男って好きな子と付き合う妄想ばかりしてるんだよ。『こいつ俺のことが好きなのか？』ってもし思っても妄想だと勘違いするだろうな」

「……そ、そうなんだ」

少しだけ顔を上げながら感心する少女たち。

するとフリーがくすくす笑って、

「ふふつ。さすが、本人の体験談だと説得力が違うね」

「その節は失礼いたしました」

毎日のように話しかけてくる女子生徒に対して「俺を面白い玩具だとも思っているのか」と感じていた身としては何も言い返せない。

バツが悪くなったのを咳払いで誤魔化して、

「だからまあ、告白するのは効果あると思う。成功するかどうかはそりゃわからないけど、成功を祈ってる」

これには相手も微妙な顔になった。

「……ライバルの人にそんなこと言われても」

「敵対されるよりはいいだろ。俺だってショウたちには幸せになって欲しいんだ」

もし、直接告白されたらちゃんと断る。そう約束すると、ようやく少女たちはほっと息を吐いてくれた。口元にも笑顔が戻ってくる。

「失礼なことを言ってすみませんでした」

「こつこつそ、きついことを言って悪かった」

謝りあうと少しは打ち解けられた気がする。

「あなた——レンさんって、男心を惑わす悪いサキユバスだつて聞いてたんですけど、ちゃんとした人なんですね」

「待て。そんな噂どこから聞いたんだ」

「え？ お父さんとかからですけど……？」

きよとんとした顔で言われ、レンは「どういうことだ」と頭を抱えた。

するとフリーがぼん、と、肩を叩いてくれて、

「まあまあ。たぶん、レンが可愛すぎて浮気したくなる、とかそんな話でしょ？」

「いや、そんなの俺にはどうしようもないだろ……!？」

「お父さんたちは浮気の言い訳をしてたんですか……!？」

「……そういえば、お母さんたちのいるところでは言っていなかった気がします」

娘くらいの歳の女の子が可愛いとか、知られたら怒られると思うたのだろう。

レンはフリーたちとともに「あ……」と遠い目になった。

魔眼は使っていないし服も長袖を選ぶようにしている。それでも素肌ゼロとはいかないので魅了はある程度有効だ。店の主人など街の人に笑顔を浮かべることもあるが、その程度で悪女と言われても困る。

「なあアイリス。美人って街歩くだけで惚れられるものなのか？」

「ど、どうして私に聞くんですか!？」

「レンはなんかえつちだから特別じゃないかなあ」

「ご主人様ですから仕方ありませんね」

「なんだよそれ」

美人のナチュラル魅了についてはともかく。

今度、街で冗談めかして噂の出所を聞いてみることにする。

「絶対ですよ？ 絶対、ケンたちと付き合ったりしないくださいね

？ えつちなこととかしちやだめですよ？」

「しないって。俺、知ってるだろうけど元男なんだし」

すると少女たちは顔を見合わせた後で視線を戻して、

「でも、今は綺麗な女の人ですし」

「さ、サキユバスですし」

「ああ。シヨウたちもこういう認識でデートとか言ってきたのか……」

クラスメートたちは元のレンの姿を知っているし、他の年の転移者にしても自分が「変わった」経験があるのでだいたいすんなり受け入れてくれる。

ただ、街の人はサキユバスに変わる過程のレンⅡフード付きで身体も隠していた子なので、元男だという事実は知識程度。

「正直、その『俺』っていうのも似合っていないです」

「……ばつさり言うなあ」

「だって似合っていないですし」

「俺が口調を変えて男と恋愛するようになったら、困るのはそっちだぞ?」

少し意地悪をしてやると「それはずるいです!」と慌てて立ち上がる。

「冗談だって。……でも、そうやって素直に話せばあいつらも振り向いてくれるんじゃないか?」

「……そう思いますか?」

「ああ、もちろん」

二人はレンから見ても十分可愛い。もちろん、恋愛対象にするにはまだ幼いし、見境なく声をかける気もないのだが、こんな子たちを無視するなんて勿体ないと思う。

「だから自信持てよ。だめかもしれない、って挑戦するより絶対成功させてやる、って挑戦する方がいいぞ」

「そっか……。そうかもしれないですね」

少女たちは「ありがとうございます!」と言って納得してくれた。家まで送っていった時も笑顔で、これから近いうちに告白してくれるかもしれないと思えた。

「まあ、そう上手くはいかないよねー」

実際はちゃんと告白するまでに結構な時間がかかってしまい、その

間にレンはショウたちと二回目のデートに行く羽目になってしまったのだが。

「なんで早く告白しないんだよ」

「そ、そんなこと言われても……!」

おかげで少女たちをレンが急かす羽目になった。どうしてそうなったのかよくわからない。ただ、頑張ろうとしている女の子を放っておくのはなんとなく気が引けたのだ。

「なんだかんだ言って優しいよね、レンって」

「そんなことはない……よな?」

幸い、少年たちと少女たちは後に（紆余曲折の末）交際を始めることになる。

そうなつてからもレンは少年たち、さらには少女たちからも頼られ、あれこれと世話を焼く羽目になるのだが、それはまた別の話である。

ちなみに噂の件は何人かの男を問いただしたところ、やはり冗談の類で。

「レンちゃんが可愛いから褒めてるんだって」

調子のいい話ではあるが、あまり怒るのもアレなので「ありがとう」と微笑んでおいた。

そのうえでレンは再び服装について悩むことになったのだが、大きくなった翼と尻尾はそうそう隠せない。体型もコートを着ただけで隠せるかどうか。

「あの、それに、レンさんの魅了は本当に肌からだけなんでしょうか？」

「声からも出ていたりしませんか?」

「あー。可能性はあるかもね」

「ではマスクもして完全防備になりますか、ご主人様?」

「いや、絶対怪しいだろそれ」

顔も身体も隠して声もくぐもらせた謎の人物。むしろ悪役として巷に名を轟かせてしまっただけである。

「では、レンさんはそのままでもいいのでは？」
「……そうですね、そうします」

結局、あまり気にしないことになった。

二十階挑戦を控えて

「いや、十九階もめっちゃ大変だったねー」

お馴染みの洋食店に五つのグラスが打ち合わされる音が響いた。

綺麗な色の赤ワインをぐいっと一気飲みしたフリーリがほうつと深く息を吐いて、しみじみとダンジョンの思い出を振り返る。

「はい、本当に。さすがに数が多すぎて……」

賛同したアイリスの表情も苦笑いである。

十九階のボス戦に登場した敵の数は軽く二十を超えていた。

ボスはゴブリンパラディン。金属の剣と鎧で武装し、回復魔法を操る高位のゴブリンである。とうとう戦いながら回復する奴まで出てきたか……と、レンは心底うんざりした。

「ご主人様のお陰で私たちは楽ができましたが」

「いや、みんながいなかったら俺も危なかったよ」

今回も逃げながら魔法を降らせる戦法を採用したものの、さすがに敵が多すぎたためさらなる仕掛けを用意させてもらった。

フリーリ、メイ、マリアベルにはあらかじめ逃走経路の脇道に潜んでもらい、通り過ぎようとしたゴブリンを引っ張りこんでこっそり潰してもらったのだ。

レンとアイリスがたつぷり挑発したので本体がフリーリたちへ流れていくことはなく、むしろ挟撃の形に持ち込んで敵を殲滅した。

「全員ができることを行ったからこそです。この成果は誇って良いでしょう」

マリアベルも微笑みながら褒めてくれる。

十九階ともなると欠片も合計百十七個——かなりの個数になってきているし、ドロップ品を含めた報酬も美味い。次の節目である二十階攻略にもいよいよリーチがかかった。

「ですが」

ワインを半分ほど口にしたマリアベルはことん、とグラスをテーブルに置いて、

「次の階は今までのようにいかないと思ってください」

この警告の重みはレンたちもすでに知っていた。

十六階以降、ダンジョンの難易度は一気に上がっている。ジंकウスから言つて二十階はもつと難しくなるのは当然、というのもあるが、それ以上に攻略本から得た事前情報のせいだ。

いわく、二十階はダンジョンの構造そのものが違う。

雑魚戦は存在せず、ボス戦のみが存在する。あるいは雑魚戦こそがボス戦である。

「二十階からは私も最初から戦います。……そうでなければ全滅する危険が高いでしょう」

「そこまでのレベルですか、殲滅戦は」

「はい」

穏やかな彼女がにこりともせず頷くあたり、百パーセント本気だ。

殲滅戦。

二十階のダンジョンには壁が存在せず、天井も極めて高い。十九階のダンジョン全域と同じかそれ以上のフィールドが広がっており、そこに十九階にいたすべての敵と同じかそれ以上の数のモンスターがひしめいている。

勝利条件は敵の全滅。

降りた瞬間からボス戦が始まり、下手な行動を取れば階段を上つて逃げることでさえまもなくなくなる。

仲間が死んでも、迫りくる敵をなんとかしなければ遺体を持って帰れない。これまでのようにエナジードレインで都度補給も行えない。

せっかく美味しい料理が並んでいる。肉料理だけでなく川や湖から取れた淡水魚の塩焼きなどもある豪華版だというのに、リアルな「苦境」の想像に手が止まってしまう。

レンはぐいっとワインを飲み干すと仲間たちに告げた。

「二つ、提案があるんだ」

二十階が近づいてきた時点で考えていたこと。

「二十階は別のパーティと合同で攻略しないか？」



「……二十階か」

一緒に攻略しようと思える相手は一組しか思い当たらなかった。

ポークジャーキーを手土産にレンとフリーで向かったのは最近交流の多い元クラスメートのパーティ宅。シヨウとケンを面倒見ている彼らのところである。

二人の、というか主にレンの訪問に喜ぶシヨウたちに軽く挨拶をし
てから「大事な話があるんだ」と席を外してもらい、四人と向き合っ
て用件を話す。

リーダーは深いため息をついて天井を仰いだ。

「二十階な。俺達も正直、考えるだけで憂鬱だったんだ。どんだけき
ついんだってな」

恋人である聖職者の少女が彼の肩に手を添え、小さく頷いて、

「二十階で亡くなった人も多いんだって。『十九階までがチュートリ
アル』だつて言う人もいるみたい」

特に情報の出揃っていなかった頃は酷かっただろう。初めて二十
階に降りたパーティの絶望なんて想像するだけで恐ろしい。

もう一人の少年も腕組みして、

「二十階あそこをクリアしないで十九階までで、それかクリアしてうんざり
して攻略を止めた人の話も聞いたことがあるな」

いくら『祝福』に守られていようと死ぬときは死ぬ。

明確に「死」を意識してしまつたらもう以前のようにには戦えない。
レンたちはもともとただの高校生であつて軍人でも傭兵でもないの
だ。

十九階までの復活する敵を倒してお金を稼ぐだけでも生活は成り
立つ。もうそれでいいじゃないか、と諦める者が出るのは当然だ。

リーダーがレンたちに視線を戻して、

「この話は願つてもない。多分、俺達も本気で攻略するつてなつたら
お前達に『助けてくれ』つて頭を下げていたと思う」

「じゃあ」

「ただ、問題があつてな。俺達はまだ十六階までしかクリアしてないんだ」

「ああ、そうだよな」

シヨウたちの面倒を見るようになって一階からやり直しているの
でその間の進行がストップしてしまっている。

若い少年たちの安全を考えた結果、攻略はゆっくりになりレンたちに
追い越された。

「シヨウたちとももう少しで十一階の攻略が終わる。張り切ってるあ
いつらを放置するのも嫌だろ。できれば十五階までは連れて行って
やりたい」

「十六階からは正直オススメできないしな……」

かなりの量の欠片と最低限のストレージを得られればもうダン
ジョン攻略を止めてもいいだろう。普通の仕事に就いても他のネイ
ティブ世代にないアドバンテージを得られるし、何より彼らには身の
安全を心配してくれる女の子たちがいる。

引き続きシヨウたちが張り切っているあたり、あの二人はまだ告白
できていないようだが。

「一応、そこについても提案がある」

「お、なんだ？」

「一時的にパーティを組み直すんだ。お前らの十七階からの攻略を俺
とフリーで手伝う。シヨウたちにはアイリスとメイに協力してもら
う」

一時的なものだから生活拠点は今のままでいい。

神殿で合流して分かれるような形になるだろう。アイリスもフリー
の熏陶を受けてある程度罫の対処ができるし、自信がない時はメイ
を先頭にしておけば大きな被害は防げる。

これならシヨウたちを急かすこともなくリーダーたちに十九階ま
でクリアさせることができるし、逆にシヨウたちの攻略を止めること
もない。

リーダーは目を瞬いて「めちやくちや良い提案だな」と呟き、

「いこのかっ」

「ああ。アイリスたちからも了承はもらってる」

『やるからには厳しく行きます！』って張り切ってたよー」

上下関係をはつきりさせておけばセクハラの心配もしなくていい。アイリスは意外と下の立場の人間にはS、というか体育会系などころがあるのかもしれない。

それでも、了承してくれたのはショウたちの性格を多少なりとも知っているからだ。

「まあ、私に関してはシーフが二人いても……って感じだろうけど」

「いやいや。戦闘の人手が多くなるだけで全然違うって」

「他の奴らの戦い方なんて見る機会そうそうないしな。勉強にもなりそうだ」

男二人はかなり乗り気。

レンは相手パーティの女性陣に視線を送って、

「二人はどうだ？ もちろん、こいつらをどうこうしたりはしないって約束する」

「私が一緒ならレンが変なことしても一発でわかるしねー」

「あはは、そこはそんなに心配してないよー」

「うん。どっちかっていうとレンちゃんは何もしてないのに男どもがその気になっちゃう方」

「いや、誘われてもいないのにその気になるかよ……!?!」

すかさず反論する少年たちだったが、前に「お前ならいける」とか言われた身としてはあまり信用できないレンだった。

「じゃあ、OKってことでもいいか？」

「ああ。ショウたちもそれでいいって言ったらな」

ショウとケンも呼んで事情を話すと、彼らもノーとは言わなかった。

「どうせならレンさんと一緒に良かった」

「いや、それは効率が悪いからな？」

レンとしてもショウたち相手にエナジードレインはできない。リーダーたちも今後のためにレベルアップが必要、と説得して了承してもらった。

話がややこしくなる一方なのであの少女たちには早く告白して欲しいと本気で思った。



なんで手を繋いだりキスしたりしてるんだこいつら。

レンとフリーのダンジョンでの様子を見た最初の感想は割とひどいものだった。

十七階での初戦が比較的楽だったせいもある。

レンの浮遊能力は便利だが、魔法自体はありふれたもの。「ライトニング」や「ファイアーボール」、「エリアヒール」などの範囲魔法を見慣れているせいか少々見劣りする。

おまけに戦いが終わるたびにいちやいちやする。

だから、彼——リーダーはレンの実力を見誤った。事前情報では評価していたはずなのに「女同士のキスとか目の毒すぎるだろ」などと私怨を交えてしまったのだ。

違和感を覚え始めたのは雑魚戦をいくつか終えた後。

「みんなお疲れ」

仲間たちに声をかけながら気軽に「ヒール」を発動させるレン。多少の傷や疲労で回復魔法をかけるとMPがもったいない。なので頃合いを見計らってなるべく節約するのがセオリーなのだが、

「レンはMP回復できるからねー」

移動中に手をつないでMP回復するサキュバス。吸った分のHPもちやんとヒールで補填する。肌の接触だけで追いつかなくなったらキスで回復するらしい。

よく見てみると戦闘中もばんばん攻撃魔法を連発している。

基本魔法とはいえ、属性変換したりするとそこそこMPも嵩むはず。範囲魔法を最大効率狙って放ったりせず、単体魔法を片っ端から撃ちこんでいくスタイルはなにかもう世界が違った。

「なあ、レン。お前の最大MPってどれくらいあるんだ？」

「ん？ ああ、見てみるか？」

快く見せてくれたステータスにリーダーは絶句した。

仲間の二人と比べてMPが倍以上ある。というかレベル自体、リーダーたちを大きく上回っている。MP操作を得意とする魔操師マナコンダクターとサキュバスのコンボにより経験値が入りやすいらしい。なんというか若干詐欺である。

「お前、これでもっと色々魔法使えたら最強だろ」

「それは『もう一個クラスが取れたら最強だろ』って言ってるのと変わらないぞ」

「まあ、それはそうなんだが」

リーダーから見たら驚異のステータスでもレンは偉ぶらない。

仲間の長所を把握し、それを尊重した立ち回りをしてくれる。移動中は邪魔にならないよう最後尾に陣取り、戦闘中はリーダーが切り込めるように範囲魔法は不用意に撃たない。仲間の射線を邪魔しないように宙に浮いて魔法を放ってくれるし、高い位置から戦況を見て声掛けもしてくれる。

使える魔法の種類が違うため、魔法使いとも聖職者とも共存可能。相方のフリーはフリーで普段はレンと手を繋いで歩いているくせに「あ、そこトラップ」と当たり前前に指摘してくるし、愛嬌のある喋りで場を和ませてくれる。防ぎ切れず後衛に向かおうとしたゴブリンをさくつと心臓一突きしたりと戦闘でもいぶし銀の活躍がある。「……なあ、お前ら。これからもずっと組まないか？」

思わず言ってしまったのも仕方のないことだと思う。

仲間たちも「気持ちわかるけど……」と濁しつつ、本音では「そうしてくれると助かる」と顔に書いてあった。

しかし、レンは笑って、

「ありがとう。でも、それはできない」

「どうしてだ？」

「アイリスとメイまがいるからな。俺はもう、あいつらと一緒に頑張るって決めてるんだ」

あまりにもきつぱりとした物言いにうっかり惚れそうになった。恋愛的な意味ではなく「兄貴と呼ばせてください！」的な意味で。い

や、女だから姉御か。

残念だが仕方がない。

リーダーは内心で諦めつつ頷いて、

「じゃあ、きつい階だけ協力するのはどうだ？ どうせ五階毎にきついのが来るんだろ？」

「ああ、それはアリかもな」

いつそのこと二パーティ合同という手もあるが、それだと分け前が減ってお互いに生活がきつくなる。五階毎に共同戦線を張るくらいがちょうどいいだろう。

協力を考えるとある程度、攻略ペースを揃えるべきか……などと話し合いつつ、かなり良い感じのペースでダンジョン探索を終えた。

このペースならもう一回の探索でボスを倒せるかもしれない。二回に分ければ余裕だ。

「レンちゃん、私たちにMP分けられるようにならない？ そうしたらもう怖いものないと思うんだけど」

「うーん……残念ながら今のところそういうのはないな」

女性陣のMPタンクにさせられているレンを想像してリーダーはつい吹き出しそうになった。

するとフリーが、

「サキユバスだし、キス限定でMPを分けられるスキル、とかありそう。そういうのあったら使う？」

とんでもないことを言い出しやがったこの女。

そういえば学校でもレンに付きまとは日常的に彼女（当時は彼）をからかっていた。割と可愛いくせに性格はなかなか曲者のようだ。

どうにかならないのか、という想いを籠めてレンを見ると「こればっかりはな」とでも言いたげに肩を竦めた。

一方、フリーに尋ねられたこちらのパーティの女性陣は「うーん」と悩む素振りを見せて、

「女同士ならアリかなあ……？ どう思う？」

「絶対駄目だ！」

やっぱり、レンとフーリとは必要な時だけ組む方がいいかもしれない。
あつさりと考えを改めたリーダーだった。

二十階攻略（前編）

「どうだった、シヨウたちの様子は？」

ダンジョン攻略に追われている間に季節はすっかり春になった。ここまで来ると、レンたちが召喚された時期——六月まであつという間だろう。長かったような短かったような。少なくともたった一年とは思えないほどいろいろあつたことだけは確かだ。

異世界での生活にも慣れてきて、月日の経過による感慨は少なくなってきた。一番に思うのは「暖かくなつて夜が過ごしやすくなつたな」ということだ。

とはいえ、まだまだ暑い季節にはほど遠い。

背中に腕を回し、軽く抱きしめるようにした少女の温もりはとても愛しく感じられる。

「……そうですね。やっぱり、まだ危なっかしいです」

金髪長身の美少女、アイリスはレンの顔を間近で見つめながら困つたように微笑んだ。

しばらくの間、指導することになった少年たちの戦いを思い返しているからで、レンとの距離が近すぎるから、ではない。

一緒に寝るのももう何度目かわからない。

お互いに下着姿。鼓動すらも伝わってくるほど触れ合っているものの、どちらの心臓も穏やかに脈打っている。

「今まで以上に怪我に気をつけないといけないのに、シヨウくんは前に出すぎてしまいがちでした。ケンくんも敵が近づいてくるのに我慢できず魔法を使つてしまつたり……」

ケンも「ヒール」なら使えるようなので全く怪我が治せない、ということはないものの、だからこそ彼のMPはとても貴重になる。

シヨウとアイリス、メイが協力してケンを守っていくスタイルを確立するのにかなり悪戦苦闘したらしい。

「メイがこまめに指示を出してくれるので助かりましたけど、そのせいで険悪な雰囲気になりかけてしまつたり……」

「そっか……。悪いな、アイリス。大変なことを頼んで」

「いいえ。私もとても勉強になっています。今までレンさんとフリーさんに頼りっぱなしだったんだな、って」

感謝と申し訳なさを籠めて頬と髪を撫でると、少女はくすぐったそうに目を細めた。

「仲間なんだから、どんどん頼ってくれていいんだぞ。俺たちだってアイリスたちを頼りにしてる」

「はい。でも、自分でももつとたくさんの方ができるようになりたいです」

別の者と組むのはアイリスたちにとってもいい刺激になったようだ。

念のためマリABELに同行してもらっているものの、今のところ本当に危ない場面というのは発生していないらしい。

その代わり、怪我や疲労の度合いを考慮して早めに撤退、十一階を三回の探索で攻略するペースで動いている。

「そうそう。二人とも、レンさんの話を聞きたがるんですよ？」
青色の瞳が悪戯っぽく輝き、くすりと吐息がこぼれる。

「好きな物とか嫌いな物、普段は何をしているのか、とか……たくさん聞かれちゃいました」

「マジか。なんか恥ずかしいな、それ」
男子から本気で惚れられているらしいのも、細かな情報を探られているのも。かすかに頬を染めて眩げば、

「だから私もちよつとだけ意地悪しちゃいました」
「へえ、なんて言っただんだ？」

「レンさんが一番好きなのは可愛い女の子だって」
レンは「う」と言葉に詰まった。

「……間違っていないけど、それはそれで恥ずかしいぞ」
「すみません。レンさんが取られるんじゃないか、って思ったら、っ

「いい」

見ると、アイリスの瞳がかすかに潤んでいる。不安にさせてしまったのか。ぽんぽん、と頭を叩いて安心させてやる。

「俺はどこにも行かないよ。あいつらにも『組まないか』って誘われた

けど断ったんだ」

「本当、ですか？」

「もちろん。俺にはもう頼もしい仲間がいるからな」

すると、少女はとろけるような笑みを作って「嬉しいです」と囁いてきた。

細い腕が首に回されて、お互いの身体がより密着する。

「二十階を攻略する時はよろしくな。九人がかりで誰も死なせずに突破しよう」

「はい。ありつたけの矢を持って行きますね」

話をしているうちにお互いの体温が共有されて、なんだかぼかぼかと温かくなってくる。

近い距離にいるため大きな声を出す必要もなく、部屋が静かなままに言いたいことが全部伝わる。

少しずつ、アイリスの鼓動が早くなってきた。

「……レンさん、キスしてください」

「ああ」

少女が直接強請ってくるのは珍しい。そう思いながら、レンは彼女の唇に優しく触れた。

十数秒。

軽く糸を引きながら唇が離れる頃には、どちらも本格的にどきどきし始めていた。

何度も触れ合っているからか、これ以上言葉での確認はいらなかった。

横向きで見つめ合う体勢を止めてアイリスを押し倒す。窓からの月明かりを遮るように背中の翼を広げると、少女はゆっくりと目を閉じて再びのキスを強請ってきた。



「レンさんの判断は英断だと思います。……この戦力ならば十分に、あの群れにも対抗が可能でしょう」

下り階段に靴音を響かせながらマリアベルが静かに言った。

革の上から金属を張った部分的なプロテクター。丈夫な革製のグローブに、やはり金属張りのブーツ。普段よりもぐっと気合いの入った装備は本格的な戦闘態勢の証である。

「もちろん、慢心は怪我の元ですが。油断さえしなければ間違いなく勝てます」

「マリアさんにそう言ってもらえると安心できます」

レンの声に、周りにいる仲間たちがふっと笑みを浮かべる。

適度に気を引き締めつつ、肩の力が抜けた良い状態。二パーティ分、普段の倍近い人数がいることもあり、暗く冷たいダンジョンの中でも不安や寂しさはあまり感じられない。

「マリアさん。あらためて確認だけど、二十階は明かりがいららないだよな？」

「ええ。昼間の荒野ですので、太陽の明かりが十二分に届きます」

「ダンジョンの中で太陽とは、不思議な話ですね」

「でも、ダンジョンだからこそ、なにが起こっても不思議じゃないです」

今日ばかりはシヨウたちは留守番。

レンたちのパーティとリーダーたちが勢揃いで二十階攻略に挑む日だ。

もちろんレンたちだけでなく、リーダーたちも気合十分で、

「お前らがいれば百人力だ。ゴブリンとオークくらい、いくら来ようと怖くない」

「そうそう。ぱぱつとやっつけて打ち上げに行こう！」

「ああ、そうだな。あんまり湿っぽくするのも俺たちらしくない」

話すうちに階段の出口——二十階の入り口が見えてきた。

神殿からダンジョンへと繋がる階段は何階に降りる時でも長さが一定だ。だから常連は間隔で到着がわかる。

「作戦は覚えてるよな？」

「ああ。とにかく階段の前を死守。いつでも逃げられる状態で敵を迎え撃つ、だろ？」

「OK。じゃあ、予定通り俺につかまってくれ」

「うん。……痛くしないでね、レンちゃん?」

「しないっての」

そつと身を委ねてきた魔法使いの少女を優しく抱き上げ、仲間の最後尾で翼を広げる。

彼氏である向こうのパーティのシーフが若干嫌そうな顔をしたものの、恋愛で揉めている場合ではないので無視。

「行くぞ」

先頭に立つたりリーダーがそう告げ、先陣を切って飛び出した。

次々に出て行く仲間たちを追い、二十階に出たレンは強い太陽の明かりを感じた。同時に屋内とは違う新鮮な空気も。

天井はあるはずだが、見上げた空は高く陽光の影響もあつて区切りがわからない。

不思議な情景に感動するのはひとまず後回しにして、ふわり、宙へと浮かび上がる。

移動する先は高台。二十階のフィールドは正方形の広い部屋。階段の入り口があるのは一辺の中央であり、箱のような構造物が突き出すように壁へ接続されている。

つまり、箱の上に乗って「高さ」を確保することが可能だった。

上には既に、風の精霊を利用して跳躍したアイリスが弓を構えて陣取っている。レンはその傍らに降り立って魔法使いの少女を下ろした。

「広いな。向こうの端も見えない」

「はい。でも、敵は見えます」

情報によると、二十一階への階段は反対の壁際。敵の軍勢もそちらの方向から迫ってくるらしく、実際、レンの目には敵の第一陣が見えた。

十匹程度からなるゴブリンの集団。

今となつては雑魚だが、侮って時間をかけていると第二陣への対処が遅れるという寸法だ。となると敵がやって来るまでの時間も無駄にはできない。

レンは「マジックアロー」を土属性に変換、石のつぶてを敵に向かって降らせた。アイリスも弓を引き絞って狙撃を始める。

「アイリス。足か腰に尻尾を絡みつかせてもいいか?」

「足でお願いします。この場所から動くつもりはないので」

「了解。じゃあ、ありがたく」

尻尾も身体の一部だ。長くなると同時に操作もしやすくなってきたので、近くにいる止まった相手に巻きつけるくらいは難しくもない。接触部からはじわじわとエナジードレインが行われ、ある種のエネルギー供給ケーブルのような働きをしてくれる。

これには同席している少女が顔を真っ赤にして、

「なんでこんな時にえっちなことしてるの!?!」

「別にエロくないだろこのくらい。手を繋いでるのと大差ないし」

「いや、尻尾はえっちなでしょ」

「おい、お前ら上でいちゃいちゃすんなよ!」

「わ、私はいちゃいちゃしてない!」

まあ、えっちなとしてもMP回復のためなので納得してもらおうしかない。

この日のために可能な限り増やしてきた最大MP+エナジードレインによる回復を活かして魔法を連発。敵が自陣に到達する前にダメージを蓄積していく。

アイリスは「ファイアボルト」の代わりに風の魔法を矢に纏わせ射程距離と加速度を向上させている。

敵がある程度近づいてくると盗賊二人による振り回し型の投石器——スリングを用いての攻撃が加わった。ゴブリンたちも弓矢や魔法を用いて応戦してくるものの、散発的なそれは大した脅威ではない。接敵する頃には半壊していた敵の一団をリーダー、メイ、マリABELが苦も無く撃破していく。

揃いも揃って剣、メイス、脚で一撃である。遠距離攻撃で削る戦術だと地味になりがちだが、やはり前衛の活躍も馬鹿にはできない。というかあんな攻撃をレンが受けたら確実に危険なので「味方で良かった」としか言いようがない。

「つて、言っているうちに次が来るな」

休んでいる暇がほとんどない。

レンはひと呼吸おき、アイリスに二度ほど「ヒール」をかけると再び石のつぶてを降らせる仕事に戻った。敢えて実弾を使っているのは敵が全滅するまで定位置を動くつもりがないから——道がどれだけ荒れようと困るのは敵だけだからである。

第二陣は第一陣よりも数が多かった。

十を超えるゴブリンから少し遅れて数体のオークも見える。おそらくは同時に走り出して少しずつ差が生まれたのだろう。とりあえずオークは後回しにしてゴブリンを削っていると、

「そろそろ私もお仕事しようかな。後ろは任せて」

杖を手にした少女が生み出したのは「ファイアボルト」よりも大きな火の塊。両手で構えた杖の先にそれを灯したまま念じ、威力と精度を高めると一気に射出！オーク集団の中央で着弾した塊は爆発して炎と衝撃を撒き散らした。

「ファイアボール」。

拡大もなにもしなくとも最初から範囲攻撃属性のついた発展攻撃魔法。あまりにも魔法使いらしい攻撃にレンは思わず感嘆してしまっただ、

「ちよつと羨ましいな、それ」

「ありがと。私はレンちゃんのMPが羨ましいけどねー」

「お互いじゃないものねだりか」

「そういうこと。足りない部分は補っていけばいいよ」

地形を荒らしつつ敵を排除する作戦は功を奏し、第二陣も特に被害なく撃退成功。

この分ならこのまま待ちの戦法で苦も無く勝てるのでは、と思ったレンの目にさらなる敵の一团が映った。さも当然のように数が増え、ていてうんざりした。

「いや、これ絶対きついだろ」

「だからきついつて最初から言ってたじゃん」

「その通りだし準備もしてきたけど、言いたくもなるぞ」

石弾、矢、ファイアーボールに襲われても狂ったように押し寄せてくる。

前衛も慌てず一体ずつ着実に処理していくものの、すぐに第四弾が迫る。当然と言うべきか、少しずつレンたちから余裕は失われていった。

敵の到達までに十分なダメージを入れられなくなり、前衛が相手にしなければならぬ数が増えていく。

ゴブリンとオークの振るう様々な武器をリーダーやメイ、マリアベルはうまくかわしながら反撃を加えていくものの、階段の前に立つ聖職者の少女を守るためには多少の無理をしなければならなかった。

切り傷、擦り傷、矢による刺し傷が少しずつ増えていく。

「こういう時こそ私の出番……！」

一人だけ高台ではなく地上に位置していたのは一団の中央をキープするため。上にいるレンたちも飛び道具で狙われる可能性があるため、ある意味では階段前が一番安全な位置なのだ。そして聖職者がそこに陣取っているのは当然、全体に回復魔法を飛ばすためだ。

スキル「敵味方識別回復」によって範囲回復魔法が敵に影響を及ぼすことはない。これが正統派ヒーラーの力。正統派魔法使いと同様に頼もしい。

前衛が倒しきれずにゴブリンが漏れても——ガッ！ と、見た目の印象とは裏腹に苛烈な音を立てて聖杖が突き立てられ、あっけなく消滅していく。

「あれ。おい、あいつ強くないか？」

「あー、うん。あの子は『杖攻撃』スキルも取ってるから」

古来より聖職者がサブ前衛になれるゲームは珍しくない。守られる側かと思えば最低限の自衛能力を持ったヒーラーの姿はなんともか輝いていた。

二十階攻略（後編）

「……これで九回、か」

回を追うごとに数が増え、個体の性能も増していく敵戦力にさすがのレンたちも苦戦を強いられた。

棒立ちで魔法を使っていただけのレンですら肩にずっしりと疲労を感じる。すかさず飛んできた範囲回復魔法が物理的な疲れを癒してくれたものの、精神的なそれまではどうしようもない。その範囲回復だって九回目やってきた敵をかなり強引に一掃したお陰で撃つたものだ。

「さすがにもうMPがきついよ。でも、次で最後なんだよね？」

「ああ。次でボスを含めた最大戦力が来るはずだ」

レンの答えを聞いた魔法使いの少女は「しようがない、とっておきを使いますか」とストレージから小瓶を取り出した。

高価なMPポーション。一気飲みのとふう、と息を吐いてから「ん」と片手を差し出してきて、

「レンちゃんもちよつとでも回復しときなよ」

「ああ、ならありがたく」

しつかりと指を絡めて手を握る。接触相手が二人になったことでMP回復効率が上がり、ほんのちよつとではあるが余裕ができた。

そうしている間に地響きのような足音が聞こえてきて、

「あれか」

彼方から迫りくる敵の集団。

もはや気が遠くなりそうな数。下手をしたら百近いのではないだろうか。

ゴブリンキングやオーククイーンを含み、ゴブリンパラディンも複数確認できる。彼らの総大将となっているのはエンシエントゴブリン。希少かつ強力な古代種らしい。

あんな敵、万全の状態でも戦いたくないのだが

「よし、あれを倒せば終わりなんだな？ やってやろうぜ！」

リーダーが元気のいい声で号令をかける。

彼だつて装備のあちこちを綻ばせ、顔にも疲労の色が見える。だといふのにそれをまるで気にしていないかのような威勢の良さだ。

格好いいな、と素直に思う。

彼の勇気は仲間たちにも伝播していき、まずは相棒である盗賊の少年が、

「あれは飛び道具なんか使つてる場合じゃねえな。……フリー、それ返せ」

「おっけ。後はナイフで勝負ね」

聖職者の少女は残るMPで前衛に補助魔法をかけていく。彼女も秘蔵のMPポーションを飲み、最後の激戦に備えた。回復魔法を飛ばしてもらえるのはあと一回か、二回か。

「ご主人様、後で土をいただいてもよろしいでしょうか」

「ああ。好きなだけ食べていいぞ」

メイの相変わらずな様子がとても嬉しい。思わず笑いそうになりながら答えると、マリアベルも常と変わらない穏やかな声で言った。

「正念場です。ですが、一人も欠けずにここまで来られたのです。負けるわけがありません。勝ちましょう」

「ああ」

向こうのリーダーが口火を切ったのだから、レンが締めないことには負けた気分になる。

ばさつと音を立てて翼を羽ばたかせると、レンは大きく宣言した。

「いくらいようとゴブリンとオークには違いない。蹴散らすぞ！」

おう、と、みんなの声が唱和して、仲間たちは本格的な迎撃態勢に入った。

敵との距離はだいぶ詰まってきている。

「さて。ここは出し惜しみしている場合じゃないな」

「だね。レンちゃん、牽制お願いしていい？」

「ああ、任せろ」

二人の攻撃魔法担当はある共通する魔法補助スキルを持っている。

MP消費が激しいためにここまで温存してきたそれは、レンもついでこの前取ったばかり。使いどころが難しい代わりにうまく使えば絶

大な効果を発揮する。

ダブルキャスト
『二重魔法』。

ブーストを受けた百を超える石の雨が敵集団に降り注ぎ、悲鳴と怒号を生み出す。そしてそれを追いかけるように本命が着弾。

ファイアーボール×2。

ほぼ同時に発生した爆炎が相乗効果により非常識なレベルの熱量と衝撃を生み出す。最前線にいたゴブリン数体がなすすべもなく蒸発し、続く敵たちにも大きな影響を与えていく。

爆発が収まった後も敵の数は一割減っているか減っていないかだったが、それでも十分。

ここまでさんざん荒しまくった土地の状態は最悪。地面がえぐれ石が散乱する直進路を無理やり超えようとする敵たちは減速を余儀なくされる。当然、時間をかければそれだけ飛び道具を多く放てる。

「よし、残りMPは大魔法ぎりぎり。もうここで撃ち尽くしちやおう！ レンちゃん、上に連れてって！」

「お、おう！」

慌てて少女を抱え上げ、上空に浮かび上がる。

少女は杖を構えたまま精神を集中させ、ありったけの魔力を消費して最後の魔法を発動させた。

「ブリザード！」

撃ち降ろすようにして発生した冷気の嵐がもたもたしている敵たちを直撃。半数ほどのゴブリンはオークの巨体に隠れることでダメージを軽減したものの、残りは為すすべもなく飲み込まれた。生き残った者にしても火傷の後に凍傷まで喰らってひどい状態。

ヒーラーやパラディンが回復魔法を唱えて治療を行うも、もはやそれは織り込み済み。

高台に降りたレンは魔法使いの少女とふたたび手を繋ぎ、アイリスの足に尻尾を巻きつけながらさらなる石弾を連発した。アイリスの矢も的確に前衛をスナイプ。

「そんだけやってくれれば十分すぎる。後は任せろ！」

ぼろぼろになりながら抜けてきた敵たちへ前衛が果敢に突進。ち

ぎっては投げる勢いで蹴散らしていく。

これで、後は勢いを殺さず最後まで戦い抜けるかどうか。

上位クラスのゴブリンやオークは一撃で倒するのが難しい。後ろから追いついてきた彼らによってメイたちは二対一、三対一の状況に追い込まれていく。

さらには階段前、聖職者の少女にまで敵が迫り、

「ドレインボルト」

「えいっ！」

レンの悪あがきを喰らい、生命力を減らしたそいつに聖杖が炸裂。なんとか消滅した。

「よし、俺も降りてくる」

「え、危ないよレンちゃん……!?!」

「大丈夫。ここまで来たらタゲを取った方がこっちも狙いやすい」

階段前にふわりと舞い降り、ドレインボルトとマナボルトを織り交ぜて応戦。なんだかんだ言って「術者のMPが回復する攻撃魔法」は役に立った。攻撃が間に合わない時はぶん殴ってでも隙を作り、敵の数を減らしていく。

何度かもらった攻撃の痛みは範囲回復魔法が癒してくれて、

「これで、後はお前らだけだ」

気づけば敵はたつたの三体になっていた。

ゴブリンキング。オーククイーン。エンシエントゴブリン。

軍勢を滅ぼされた彼らは憎々しげにリーダーたちを睨み、残る力の全てをもって襲いかかってくる。

「頼んだぞ、みんな」

キングの鎧をメイの振るう金属槌メイスマスが粉碎。クイーンの心臓をリーダーの剣が深々と貫き、エンシエントゴブリンの頭蓋をマリアベルの回し蹴りが見事に砕いた。

最後の一体が倒れ伏し、しん、と静寂が満ちて数秒。

「……終わったん、ですよね?」

半信半疑とアイリスの眩きに、レンはゆっくり頷いた。

「ああ、終わった。勝ったぞ、俺たち」

しばらく待ってもなにもやってこない。代わりに一同の前に行くつも宝箱が降つてくると、ようやく実感が湧いてきた。

レンを含む半数以上がその場に崩れ落ち、しばらく動かなくなる。終わったら打ち上げ、などと始まる前は言っていたものの、終わつてすぐの心境としては「今すぐ帰って寝たい」だった。

そんな中、比較的元気なシーフ二人は片っ端から宝箱を開けて報酬を確認していつてくれる。敢えて別々ではなく一緒に動いて中を覗き込んでいるのは着服防止だ。そんなことする相手ではないとわかつてはいるが、だからこそなあにはせずお互いに証拠を残しておく。

「ちよつとレンー？　ちよつと休んだらみんなにヒールかけてあげてくれないー？」

「無茶言うな。さすがにMPが空だつての」

と、服の袖がぐいぐいと引かれ、

「だったら、その、私から持つていつてください」

「私でもいいけど？」

「お前から取つたらあいづらがうるさいだろ。……じゃあ、アイリス」
「はい」

魔法使いの少女が興味深そうに見てくるのを感じながら、唇を触れ合わせて緊急回復。回復したMPを使い、まずは自分にヒール。次いでみんなに回復をかけていくとお疲れムードもだいぶマシになった。

「宝の方はどんな感じだ？」

「さすがに凄いやー？　まず欠片の数が馬鹿みたい」

一人につき二十個。マリアベルを除くと八人で、アイリスとメイは二人分扱いなのでちょうど二百個だ。これはメンバーの各々の取り分として分けることにする。

残りの宝は二等分しよう和前もつて決めていた。

一個しかないアイテムについては売却額を基に、もらわなかった側のパーティには金銭を多く分ければいい。

「倒すたびにドロップ品が落ちてたらごちやごちやになるから、最後にまとめて落ちてきたみたいだね。お金と宝石だけで見たことない

量だよ」

「そりゃああれだけ倒せばなあ……。二百以上倒しただろ」

目玉としては転職石が一個、それからスキルの振り直しが可能となるリセットストーンが一個。魔法の武器やポーションもあった。

「ポーションはちようどいいな。使った分だけ補填しよう」

「だね。消耗品代は大変だからねー」

山分けとは別に持って行っていいと言ったのだが「ちゃんと代金は払う」と主張されてしまったため、代金がわりに空いたストレージを荷物運びに使わせてもらうことにした。中に放り込むのは当然メイの食事（土と石と金属）である。

「細かく二等分するのけっこう面倒だけど、どうする？ 帰ってから後日にするか？」

「後からわかるように内容記録しておく方が面倒だろ。ここで分けようぜ。ある程度、値段はざっくりでもいいだろ」

転職石は余りがあるので向こうのパーティに譲り、リセットストーンをもらった。

区切りの階ということもあって二等分でもひと財産である。これだけあればしばらくはなにもしなくても生活費に困らないだろう。

「次の召喚があったら割引してもらえなくなるもんねー。今のうちにお金貯めておかないと」

「その割にお前ら金持ってそうだよな……。どうやって貯めてるんだ、一体？」

「別に特殊なこととはしてないぞ。俺とメイの分の食費が浮くのが大きいんじゃないか？」

「燃費の良いのが一番の自慢ですのぞ」

市場価格で考えると「燃費がいい」は絶対嘘だが、まあ、ダンジョンに行けばタダで手に入るという意味では間違っていない。

なお、レンに至ってはエナジードレインをうまく活用すると食費ゼロどころかマイナスである。やらないが。

それから結構大量にあったオーク肉はレンたちの方で引きとっておく。ポークジャーキーが地味に評判いいのでごっそり加工して

色々なところに配ればいい。

「さて。後は石碑の確認だな」

「向こうまで歩くのか。面倒くせえな……」

荒れた地面を迂回し、数キロ先にある下り階段付近まで歩くのは正直「なんの遠足かな？」という感じもあったものの、ちゃんと確認しておかないと賢者から文句を言われそうだし、アイリスたちに新たな力が芽生えたかどうかもよくわからない。

結果、石碑にはレンたち向けとアイリスたち向けの二つの文言が書かれていた。

『汝らが滅ぼした軍勢は敵の尖兵に過ぎない。真の敵はより強大である』

『己の実力を知り、学び励む事で道は開ける。先達へと教えを乞い、努力を重ねよ』

新しく与えられた祝福は「スキル一覧の表示機能」だった。

アイリスとメイ、それぞれが持っている魔法や能力がスキルという形で表示される。スキルポイントが増えたわけでもクラスレベルが追加されたわけでもないものの、なぜか未取得スキルが表示されていた。

どういふことかは試しにアイリスに「ファイアボルト」を使ってもらうとわかった。

生み出された炎が今までよりも明らかに大きくなっていったのだ。

「スキルレベルの補正が乗るようになった……ってことか？」

「たぶん、そうだと思います。ちよつとお母さんの魔法に近づけたような気がするのよ」

スキルのレベルはよく使っているファイアボルトが高く、覚えていくけどあまり使っていない魔法は1レベルのままだった。

とはいえ、レンなんてほとんどのスキルが1レベルである。

「なるほど。アイリスさんやメイさんは本来、我々よりもよほど才能や実力を備えた存在なのですね」

アイリスの場合は母親から教えを受ければ、メイの場合はいっぱい食べて機能を拡張すればポイントなしでスキルを獲得・強化できる。

これからはそこにスキルレベルが乗るわけで、レンたちほど手軽ではないというだけで将来的に見れば彼女たちの方がずっと強い。

「シヨウたちもか。……つても、あいつらにここを攻略させるのは気が引けるけどな」

「うん。ここは軽々しく来るところじゃないよ」

「あまりにも修羅場すぎたからな……」

全員があと5レベルくらい上がって鼻歌交じりに引率できるようになったら来てもいいかもしれない。

いや、5レベルじゃ鼻歌交じりは無理か。10レベル欲しい。

「ですがご主人様。理論上は未経験者を一人ずつここへ連れてくれば転職石やりセットストーンを量産できるわけですよね？」

「メイ。それは完全に生け贄だぞ」

やり直しのきくゲームでならやってもいいが、リアルでやるなら絶対勝てる保証をつかないとやりたくない。

「っていうか、まず十六階から十九階をクリアしてもらうのがめっちゃくちゃ大変だよね」

「ああ。二十階の祝福が欲しいな」

二十階に到達するために二十階でもらえる特典が必要とはどういうことなのか。

さすがにそれは無理としても、シヨウたちには最低あと二年くらいかけてここに来て欲しい。アイリスとメイはつくづく規格外である。

一年目の終わり

「よくやってくれた。君達のおかげでまた一つ新たな情報が得られた。この一年は大きな飛躍の年になったと言っていていいだろう」

新しい『祝福』に対する賢者の態度は今までに比べるとかなり落ち着いたものだった。

報告に対して一瞬、喜色を浮かべて見せたものの、すぐに表情を戻して告げてきたのだ。

シヨウ、ケンに続くネイティブ世代の投入の件でいろいろあったらしい。

「一年って、西暦でも年度でも中途半端だぞ?」

「暦としてはともかく、世界の発展で見た場合は『転移』をひと区切りとするさ。君達とて、自分が転移してきてからの年月で時を考えているのではないか?」

「確かにな」

正月やクリスマスの時期がずれるわけでない。

進級的な意味での区切りとしても四月になるが、異世界の歴史が大きく動くのは新しい転移者が来た瞬間からだ。

賢者はふつと息を吐き、対面に座ったレンたちを見て、

「次なる召喚の時間が近づいている」

十九階までの攻略、それからリーダーたちの手伝いをしているうちにけっこうな時間が経った。

一階進むごとに約半月。六月まではもう大した日数がない。

「ね。そういえばこっちだと召喚ってどんな感じなの? ある日突然どん、って人が来るの?」

「いいや。召喚の数日前から予兆が現れる。具体的には神殿が輝き始めるのだ。そうならしたらしばらく探索の際は注意することになる」

別に探索できなくなるわけではないのだが、万が一転移者たちとばったり会うと気まずいし、説明を求められる可能性がある。

神殿が光り始めたら大人しくしておいて慣れている賢者に任せようが無難というわけだ。

自分たちもそうしよう、と仲間たちとそれとなく頷きあう。

「無論、新しい転移者たちの相手は私がする。だが、君たち五人——いや九人は『先駆者』として注目される立場となるだろう」

「マジか」

「歳の近いダンジョン経験者だからな。加えて言えば、一年で二十階攻略、それも子供たちを加えての達成は十分に偉業と言っていい」

単純に目立つというのもあるが、と付け加えたのは賢者なりのジョークか。

紫髪に金髪に銀髪。黒髪の方が少ないレンたちのパーティは実際見た目がファンタジーしているので注目を集めやすい。

転移してきたばかりのレンがそんなパーティを見たとしたらどうなるか。……確実に「すごい」か「ヤバイ」という感想になりそうだ。

「地道にコツコツ頑張ってきただけなだけだな」

「それが重要なのだ。努力すれば達成できるという実例であり、同時に欲張ってはいけないという戒めでもある。ダンジョン攻略なんて簡単だ、と侮った者には死が待たせよう」

「……そうだな」

ダンジョンは「先が見えず簡単には帰れない」と言うほど恐ろしいところではない。

引き際さえ間違えなければちゃんと帰れるあたり親切設計とも言えるが、同時に「いつでも帰れる」からこそ引き際を誤りやすくもある。

ひとつのミス、ボタンの掛け違いで全てが水の泡になるかもしれない。

加えて、二十階への到達で「安全に帰れる」という保証さえも揺らぎ始めた。もし、階段前に陣取ることなく前進を選択していたら。敵の攻撃に仲間のひとりが身動き取れなくなったら。見捨てて逃げるという選択をすることが果たしてできるか。

「先駆者って言っても、私たちにできることなんてそんなじゃないよ？

せいぜい聞かれたらアドバイスするくらい？」

転移してきた年が違々と交流もそんなに多くない。

たまに顔を合わせて話すくらいはあるものの、肩を並べて戦うこと
はないし攻略情報なら攻略本を見た方が詳しい。

召喚されたばかりの者達が「なんか先輩面したコスプレ集団」にあ
れこれ指図されて従うか、と言われると怪しいものもある。同じ年の
転移者同士でパーティを組むのにはそういった理由もあった。

「別に多くを求めはしないさ。ただ行動で示してくれればいい。最前
線を目指すパーティの在り方というものを、な」

「最前線か。……遠い話だな」

十階を攻略した時にはここまで攻略がきつくなるとは考えていな
かった。

攻略本がいくら詳細でも生で体感しなければわからないことがあ
る。二十階でこれなら、果たして三十階はどれほどきついのか。

レンの呟きに賢者が目を細め「それがわかつているのなら君達は夫
夫だろう」と言った。

「なんだよ、珍しい。まさか死ぬつもりじゃないだろうな？」

「馬鹿を言うな。少し長い目で見ることにしただけだ。後進をもう少
し頼りにしても良いだろう？」

「じゃあ、二十階目指して子供を大量投入、とかはしないんだな？」
「しないさ。二十階はあまりに遠い。私でもそのくらいはわかつてい
る」

だから、賢者にとっても十五階がひとつのラインになったのだら
う。

二十階でストレージ獲得なら思い切った戦略は取れなかった。多
くの者に獲得の可能性があるからこそその人海戦術。

「シヨウたちが二十階を攻略できるか否か。それがひとつの判断基準
となる。幼い頃から自分なりに鍛錬を積んできた彼らが先達の指導
を受けた上で何か月、何年かかるか、を含めてだ」

「年単位で見えてくれるのか？」

「生憎、子供が育つには時間がかかるからな」

ゴレムであるメイのようにボディを作り変えてパワーアップ、と
はいかない。

加えて、人の寿命は長くない。実戦経験を積む時間も考えれば潜り始める年齢は早い方がいい。何歳から潜り始めて何年で何階まで到達させるか。人死にを極力避けつつ欠片を集めるには考えるべきところが山ほどある。

「あの、賢者さま。三組目の人たちは決まったんですか？」

「ああ、大方な。少女二人をシヨウたちと同じパーティに入れようかと思っっている」

「女の子二人……」

しかも、わざわざシヨウたちと同じパーティ。

該当しそうな二人の顔がレンの脳裏にはつきりと浮かんだ。

「それだと八人パーティだろ？ ……多くないか？」

「新しい子が加わるとなると一階からの挑戦になる。既存パーティ全員を揃える必要はなからう。指導役を二人に子供たち四人を加えた六人パーティで挑めばいい」

これならリーダーたちはローテーションを組める。

余った二人は休息を取ってもいいし、他のパーティに同行させてもらってもいい。二人だけで低い階に潜って小遣い稼ぎをするという手もある。

わざわざ面倒くさいことを……という気もするものの、この方法なら自然にシヨウたちの攻略を遅らせられる。

少女たちにとってもシヨウたちといられる時間が増えるわけで、上手く行けばなかなかいい方法かもしれない。

「将来的にはパーティを二つに分離してもいいだろう」

「それ前に失敗した奴なんじゃないのか？」

「未経験の者だけで組ませるのと、ある程度経験を積んだうえで手を離すのは全く違う。なんなら新しい転移者から二人程度を加えてもいい」

十階までを経験したネイティブ世代と『祝福』持ちの初心者転移者ならわりとつり合いは取れる。

なるほど、それならとレンは頷いた。

「いろいろ考えてるんだな」

「意見を出してくれる者が何人もいるのでな。……そうだ。君達も話し合いに参加するか？」

「いいよ。どうせ酒飲んで終わりなんだろう？」

「初日の出にこだわる遊びの集まりと一緒にするな」

「そうなのか。意外だ」

ちやんと話し合いをしているのなら悪くないかとも思ったが、やはりノーと答えておいた。堅苦しいのは好みじゃないし、年長者ばかりの集まりというのはえてして若手の意見を軽視するものだ。

「そうか、残念だな。……だが、きつとそのうち本格的な誘いが行くぞ」

「その時はまた考えるよ」

新しい情報を伝え、報酬をもらったら用は終わりだ。

立ち上がって帰り支度を始めたところで、賢者が「ああ、そうだ」と思い出したように言った。

「後一人ならパーティーに加えられるか？」

「んー……まあ、女子で気が合いそうならな。まさかまだ誰か紹介する気か？」

「いや、違う。転移者の輪からあぶれる者が出るかもしれないだろう？ 念のため、心の準備をしておいても損はない」

こちらの話には「もしそんなことになったら相談してくれ」と答えておいた。六人までならまあ、悪くはない。二十一階からはリアベルも本格的に手伝ってくれるらしいので特に困ってもいないのだが。



「……いよいよ、こっちにきて一年か」

帰り道。

すっかり暖かくなった外の空気を感じながらぼつりと呟く。

隣を歩くフリーが「早かったね」と微笑んで、

「いろいろ準備もしておかないとね。必要な物はできるだけ今のうちに買っておかないと」

「向こうでも親がそんなことやってたな。あれやそれが値上がりするから買いだめする、って」

食料品だと日持ちの問題もあるのでそんなに大量には買えないのだが。調理を担当する二人が「重要だよ!」「そうです!」と口を揃えて言った。

もちろんレンとしても異を唱えるつもりはない。むしろ「悪くならないうちに食べなきゃ」と食卓が豪華になるのならそれはそれで嬉しい。

「新しい転移者ですか。どんな方たちが来るのでしょうか」

「そうだねー。あはは。なんか普通に入学式に立ち会う気分かも」

「入学式……学校ではたくさんの人が一気に入ってくるんですよね？」

きつと賑やかなんでしょうね」

「ああ。転移者の何倍もの人数だからな」

中学の時の入学式を思い返してみると、たった一年の違いでも下級生がぐつと子供に見えたのを思い出した。真新しい制服に身を包み、緊張や新生活への期待を抱いた彼らの初々しさを微笑ましく思うと同時に「俺も一年前はこんな感じだったのか?」と微妙な気持ちになった。

きつと新しい転移者たちも似たようなものだろう。

「変なやつもいるし、面白いやつだっているよ。人間だからな」

「では、ご主人様は『変で面白いやつ』ですね」

「メイもな」

召喚されてくる者たちが新入生と大きく違うのは、望んでここに来てくれるわけではない、ということ。

彼らの不安は入学の比ではないだろう。

ちゃんとした世界でやっていけるようになるか。タクマたちのように暴走する輩が出ないかどうか。少し心配になってくる。

「レンも身の振り方を考えた方がいいかもね。新しく来る人たちはレンが元男だって知らないわけじゃない? 魅了にも耐性ないし」

「……あー、そっぴやそっぴや」

とはいえ変装が無理っぽいのはこの前結論付けたばかりだ。

新人に悪女呼ばわりされたり、ショウたちのように告白してくる輩を出さないためには他の方向から対策しなければならぬ。

「しばらくあんまり外に出ないようにはしてみるか……？」

「それがいいかもねー。しばらくしたらレンの話も広まるだろうし、ダンジョンに行くだけなら変な噂にもならないでしょ」

「悪いな。そのぶん家事を手伝うから」

「ありがと。まあ、そんなに手伝ってもらわなくてもいいんだけどね」

料理はフリーとアイリスがしてくれるし、掃除と洗濯はメイが率先して頑張っている。

レンの仕事は主に魔法で火をつけたり魔法で風呂の準備をしたり、魔法で氷を作ったりである。あらためて考えるまでもなく魔法でしか役に立っていない。

やはりダンジョンでもっと役に立つしかないらしい。

「俺、もっとMP増やしてガンガン魔法を使うよ」

「うん。MP回復には協力するからねー」

実はサキユバスって仲間がいなくなにもできないのではないだろうか。

全ての基本がエナジードレインなので当然といえば当然なのだが、あらためてフリーたちがいてくれる有難さを噛みしめる。

レンはふつと息を吐いて笑った。

「これからもいろいろあるだろうけどさ。フリーたちがいてくれればなんだってできる気がするよ」

「ばーか。なに改まってるんだか」

「はい。私もレンさんたちと一緒にならもっと頑張れます」

片手をフリーに握られ、もう片方の腕にアイリスが抱き着いてくる。

出遅れたメイが「不本意です」とこぼすのもなんだか見慣れてきた気がする。

安心と嬉しさからつい、翼と尻尾が動いてしまう。

仲間の役に立てるのなら、仲間と一緒にいられるのならサキユバスの身体も悪くない。不便なこともあるけれど、それを含めて楽しんで

いこう。

「さて。帰ったら軽く昼飯食べて夜に備えるか」

「うん。今夜は宴会だもんねー」

昨日、ダンジョンから帰った後は結局、打ち上げをやるには疲れすぎていたため、翌日である今日に延期になったのだ。

会場となる洋食店の店主に頭を下げると彼女は快く用意していた料理をお弁当にしてくれた。それらは温かい状態のままストレージに収納されて出番を待っている。こういう時のストレージは冷蔵庫以上の能力を発揮してくれるから助かる。

代わりに会場となるのはリーダーたちの家。シヨウたちも交えて結構な大騒ぎになる予定だ。

手土産は前もって買っておいた酒と、昨日から仕込みを始めているポークジャーキー。酒と食事はきついダンジョン探索の合間の楽しみである。すっかり味を知ってしまった今となっては二十歳まで日本に帰りたくないような気もしないでもない。

と、夜のことを想像したら居ても立っても居られなくなってきた。

全員を連れて飛んで帰れたらいいのに、と思いつながら、レンはマリABELの待つ家へと仲間たちと共にのんびり歩いた。

【番外編】メイとボディ改造

「ご主人様、私のことも抱いてください」
夕食後。

美味しい食事の余韻を味わっていたレンは、突然の懇願に変な声を出しそうになった。

片付けの途中だったフリーやアイリスも目を丸くして硬直している。

言い出した相手、銀髪のメイドゴーレムことメイは素の表情のままだが、

「どうしたんだ急に」

「他の皆様ばかりずるいではありませんか。仲間外れはよくありません」

「……あー」

夜、レンはたいい誰かと一緒にベッドへ入っている。フリーが一番多く次がアイリス、たまにマリアベル。このメンバーにメイは入っていない。

ゴーレムであるメイは人間と同じ形での睡眠は取らないし、レンが求められているのは「子供を作る際の生命力の提供」であって性行為ではない。メイ本人も自身の恋愛より他人の色恋がドロドロする方が好きなようなのでそれで良いと思っていたのだが。

少し考えてから、レンは立ち上がって少女の腕を軽く掴んだ。

くいつと引き寄せると腕を回して抱きしめてやる。硬いが、陶器や鉄と比べるとなんとなく柔らかかさのある不思議な質感。肌の表面はひんやりとしている。

「これでどうだ？」

「あまり嬉しそうではありませんね？」

レンズ的な役割を果たしている瞳がじっと見つめてくる。

「出会った頃より胸は増量しました。背丈を考えれば十分巨乳と言えるはずですが、性癖に刺さりませんか？」

「性癖について真面目に追及されると困るんだが、こっちも真面目に

答えるなら柔らかさと温かみが足りないな」

「むう」

小さくうなつて身を離す少女。

なんだかんだ抱きしめられて嬉しそうにも見えるので、やっぱり仲間外れが嫌だっただけで「エロい意味で抱いて欲しい」わけではなかったようだ。

「やはりそこですか。機能面を考えると無駄なコストだと思っただけです」

「身体をあつためたり柔らかくするのつて難しいの、メイちゃん？」

「前者はエネルギー的な問題ですね。魔力を体温に回せばその分、戦闘能力が低下します。素材で解決することもできなくはありませんが、その場合には調達の手間とメンテナンス費用の増加が見込まれます」

まとめると「柔らかかったか素材は高い」ということだ。

「メイのお母さんは人間そっくりなんでしょう？」

「はい。ただ、母は何度尋ねてもボディの構成を答えてくれないのです。レシピアさえわかれば費用を抑えられるのですが……ぐぬぬ」

「ぐぬぬって口に出して言うのか」

苦笑しつつ、レンは何気なくメイの身体に触れてみる。

振り返った少女がレンの指に視線を注ぐ。淡々とした表情は「楽しいですか？」とでも尋ねてきているように見えた。

「これはこれでいいと思うんだけどな、触つてて気持ちいいし」

「ですが、抱く気にはならないのでしょうか？」

「そこにけっこうこだわるんだな？」

「一人だけ除け者は寂しいではありませんか」

そう言われても、ベッドでメイを抱いたまま眠れる気がしない。

ひんやり感のせいで温まるどころか身体が冷えてしまう。

「うん、夏なら歓迎だぞ。寝苦しい夜なんかむしろ一緒に寝て欲しい」

「あ、それいい！ 絶対気持ちよさそう」

「逆に夏場の炎天下ではすごい温度になりそうです……」

アイリスの言うことにも一理ある。車の外装のごとく熱を吸収しまくってすごい温度になりそうだ。夏ならメイのボディで料理がで

きるのではあるまいか。

すると、メイはなにかを思いついたように「なるほど」と言っ
て、「太陽光。それならば効率よくボディを加熱することができ
るかもしれません。熱を体内に取り込み、逆にできる限り逃が
さない構造を確立できれば……」

「太陽光発電でもする気か？」

「蓄熱素材くらいのあれじゃない？」

翌日から、メイは思いついたことを試そうとボディの改造に
踏み切り始めた。といつても主に内部の問題なので見た目は
ほぼ変わらなかったのだが。

素材はこれまでに溜めてきたものを使用。

破損さえしなければ維持に必要な素材量は多くないので、
集めた素材はだんだん溜まっていく。それらはこうやって改造
をするために使用されるわけだ。

そして改造と並行して行われたのが、

「ひなたぼっこか。気持ちよさそうだな、メイ」

「充電中です。いえ、電気ではありませんね。充電中とでも
言うべきでしょうか」

日の高い時間に窓際に座ってじっとするという行為。

読書などの動かなくてもできる作業は並行して行われたもの
ので、できる限り日光を浴び続けた。

すると当然、掃除などの家事は滞るわけだが、たまにはこう
いう日があつてもいいだろうとレンがほうきやちりとりに手
を伸ばす――

「ご主人様。それは私の仕事です」

「いや、メイはひなたぼっこしてくれ。いつも頑張っている
メイドのお手伝いだ」

「駄目です。きちんと仕事と両立します」

なぜかめちやくちや怒られた。

掃除用具をレンから奪ったメイはふと思いついたように身を
寄せ、ほら触ってみるとばかりに胸を張ってくる。

そこまで言うならとレンは手を触れて、

「お、あったかい」

春の陽気を吸収したボディはしっかりと熱を帯びていた。

ゴーレムであってロボではないので中の機械が熱でダメになる、などということもない。

ノリとしてはあったためて使うカイロ———というか温石である。

「後はこの熱がどの程度持続するかですね」

結論から言うと、熱は夜の間にすっかり消えてしまった。

「むう。熱の蓄積効率と保温効率を上げる必要がありますね。ひとま
ず肌の露出面積を増やしますか」

「待ってメイちゃん。さすがに裸とか下着はだめだからね？ 家の中
だけど窓のそばなんだよ？」

「非効率的ですが仕方ありませんね。では、ご主人様。背中が大き
開きたいやらしい衣装を貸していただけないでしょうか？」

「もちろん貸すけど、お前が俺の服をどう思ってるのか後でじっくり
聞かせてくれ」

肌に直接光を当てるようにしたこと+改造によって保温能力を高
めたことでだいぶ持続するようになったもの、それでも一日は保た
ず、

「やはり、コアに新しい機能を与えるべきですね」

「それって難しいのか？」

「まったくの新機能であればかなりの難事ですが、今回はボディに魔
力を行き渡らせる機能の応用———同じ要領で熱を循環させれば良い
ので、さほど手こずらないでしょう」

この改造が終わるとメイの保温能力はぐっと上がり、一日一時間程
度の日光浴で温かさが保たれるようになった。

「次なる問題は熱し過ぎると熱が籠もりすぎることですね」

「適度に放熱するしかないんじゃないか？」

「放熱してしまうと今度は雨や曇りの日が続いた際に困ります」

「そうか。なんかいろいろ難しいな」

この試行錯誤はひとまず温石の原理に立ち返り、ボディから吸収し

た熱を蓄積する内部パーツを作成。そこから発生する熱を適度に循環させることである程度の解決に至った。

完全に解決するためにはコア自体により高度な温度調節機能をつけなければならぬらしい。

「これでご主人様の寢床を温められます」

「ありがとう、メイ。でも、これからは夏だから冷たいままでもいいぞ？」

「ご主人様はなかなか我が儘ですね」

でも、せつかくなので夏が来る前に一緒に寝た。

人肌の温もりとはまた違う感じではあったが、ぽかぽかした感じがなかなか心地いい。翌朝フリーたちにはそれを伝えると「楽しそう」だと好評で、それから一人寝をするメンバーがメイを抱いて寝るのがパーティ内で流行した。

【番外編】娼館の従業員少年たちからの相談

「……で、どうして俺が呼ばれたのか聞いてもいいか?」

レンは今、娼館の裏側——従業員用の部屋の一室にいた。

理由は単純、呼び出しを受けたからだ。呼んだ張本人である二人の男はどこか神妙な顔つきで座卓を挟んだ向かいに座っている。

シンプルな女性服を纏った少女もとい少年。

タクマの元取り巻きたちである。本名愁しゆうと怜雄れお。今は源氏名として「アキ」「レナ」と名乗って——もとい、呼ばれている。

現在リアンと呼ばれている親格のあいつに比べると二人はもともスマートな体型だった。引き締まった筋肉は比較的スムーズに女性的な身体つきに近づいていったようで、髪を伸ばし薄く化粧をしている今となつてはそこそこ似合っている。

前にリアンと会った時からまた時間が経っているのもあるだろうが。

そもそも、いったい彼らがなんの用なのか。

「はい。レン様には少々お願いがございまして」

「まずはお話だけでも聞いていただければと」

「なんだそのうさんくさい口調」

用件を口にした彼らについていついつツツコミを入れると、監視役として同席している娼婦のお姉さんがけらけらと遠慮のない笑い声を上げた。

接客中であれば「くすくす」と上品な笑い方をするだろうに。

客として来ていた頃はたっぷり夢を見させられていたであろうアキたちの心境はいかに。女の子扱いされていじられた拳句、素の表情を嫌というほど見せられたのでは百年の恋も冷めただろう。

と、それはともかく。

「いえ、その。ちようどいい口調、というものがいまいち掴めないもので」

「別に前みたいな話し方でもいいぞ。俺だつて特に気にしてないし」

「お前の場合は声が完全に女だからな。……まあでも、いいって言う

なら甘えさせてもらう」

ちらりとお姉さんを窺うと、彼女は「プライベートだから許す」とばかりにウインクしてきた。

寛容な判定に頭を下げると共に、彼女の手におみやげのポークジャーキーがあるのを見て苦笑してしまう。もちろん食べるのは構わないが、喉が渴かないだろうか。

「それで、話って?」

「ああ。お前にしか聞けないことだ」

「ふむ」

なかなか真面目な話らしい。

そもそもこいつらとは直接的な交流がない。だいたいの会話はタクマの監視下で行われていたからだ。あまり性格が良くなかったのは間違いないだろうが、同時にあの傍若無人な俺様野郎よりはマシだっただろうとも思う。

さて。

彼らの相談とは、

「男の身体と女の身体ってどっちが気持ちいいんだ」

「よし、邪魔したな。帰る」

「待て! 待てって! めちゃくちゃ重要な話なんだよ!」

わりと本気で席を立ったところ慌てて引き留められた。

翼か尻尾を掴まれそうになったので仕方なく座り直し、アキたちをジト目で睨んでやる。

ちなみにお姉さんは笑い転げながらポークジャーキーを齧っている。缶チューハイとかあったら確実に飲んでいるところだ。

「重要な話がそれかよ。……男の身体と女の身体の感じ方の違い、ってことでいいんだよな? 俺だって男に抱かれたこととかないぞ」

「もちろん、オナニーの体感で構わない」

「フリーとのセックスがどうだった、とか聞くほど俺達もアホじゃない」

オナニーとかセックスとか平気で口に出してしまうあたり彼らの自己評価は怪しい気もしたが、まあ、男同士の気兼ねない雑談だと思

えばそれほどおかしくもない。

「なんでそんなこと聞くんだよ？」

「いや、なんていうか身の振り方に迷っているというか。……わかるだろ、お前なら」

「ああ。このままだと客取ることになるもんな、お前ら」

「そういうこと。ぶっちゃけお前のせいだな」

軽い恨み言には肩を竦めて応えておく。

元はと言えばこいつらのせいだし、めちやくちや困っているならともかく「女側も気持ちいいんじゃないか」とか言い出している時点でわりと順応しているのではないか。

ため息をついて呆れを追い出し「んー……」と考えて、

「まあ、ぶっちゃけ女の方が気持ちいいな」

「やっぱりそうなのか……?!? どのくらい気持ちいいんだ？」

「体感だと数倍かな。下手すると十倍」

「そんなに違うのかよ!?!」

驚く二人だが、男と女ではそもそも性感や性欲の種類が違うから仕方ない。

男のそれは男性器を中心として発生する焦燥感がメインだ。対して女性のそれは全身に蓄積される幸福感。同じ「すつきりしたい」でも天と地ほどの差がある。

……という話をなにげなく語ってから、レンは「俺はなんの話をしているんだ？」と我に返った。

「今のはあくまでも俺の体感だからあんまり気にしなくても——」

「やっぱり女の方が気持ちいいんだな……」

「だよなあ。俺もうすすうすそうだと思ってた」

「あれ？」

なんか変な扉を開けさせてしまったというか、最後の一押しをってしまったかもしれない。

「お前ら大丈夫か？ 自棄になるなよ？ 悩みがあるなら相談しろよ？」

「……レン。お前優しいんだな」

「あの時はひどいこととしてごめんな？ 本当に悪かった」

本格的にやばそうだ。

お姉さんを振り返って「なにかあったんですか？」と尋ねると、
「大したことじゃないよ。ただ、お客を取るための『訓練』について詳しく説明したくらい」

「十分大ごとじゃないですか」

この娼館は基本的に男性向けなので、客を取るとしたらもちろん男だろう。

アキたちはレンと違って女になったわけではないので……。

レンは遠い目になった。

「大丈夫大丈夫。男の子でも女の子みたいに可愛がってあげればちゃんと気持ち良くなれるから」

「そういうものなんですか？」

「うん。レンちゃんも覚えておいて損はないかもよ？ むしろ私たちよりそういうのは得意かも」

「なるほど……」

男を相手にする予定は全くないものの、なにかの参考にはなるかもしれない。

男を相手にする想定で思いついたテクが逆にフリーたちへ使えたりとか。

「なるほどな。……わかるよ。全く新しいことに踏み出すってのは勇気がいるよな。特にこういうのは自分がまるつきり変わってしまうようなものだし」

「わかってくれるか、レン」

「じゃあ、どうすればいいのかもわかるか？」

縫うように見つめられたが、レンに言えることなんて多くはない。
「俺の場合は嫌って言っても女になるしかなかったからな。思い切つて踏み越えてしまえば一気に世界が開ける……ってことくらいかな」
タクマにも似たようなことを言った。その時は思いつきり嫌そうな反応をされたのだが。

「……そうか、ありがとな、レン」

涙ぐんで感謝をされた。本気でこいつら大丈夫だろうか？

「いや、な。まだ全然借金返せる見込みが立たないんだよ。このまま『娼婦』のままだったらずいと思っけど、一気に金を稼ぐには表に出るしかないだろ？ そんな時に姉さんから詳しい話を聞いてさ」

「ああ。あの石高いもんな」

転職石は希少価値があるためになんか値が張る。

今となつてはレンたちの手元にも一つあるし、買おうと思えば買える程度の額ではあるが……。

「ここに来て間もない頃、ストレス解消に高い酒飲んだりしたのが良くなかつたよな……」

「ああ。指導が気に入らなくて暴れて店の備品壊したりもしたもんな」

「結構いろいろやってんな、お前ら」

足りない分くらいは貸してやろうか？ せめてフリーたちにそういう相談くらいはしてみようかと思つたレンだったが、アキたちの話を聞いていたらその気が失せた。

やっぱりこのまま解放するとやらかしそうなのでもう少し女子の気持ちを知ってから自由になつて欲しい。

「まあ、頑張れよ。健闘を祈る」

お姉さんから「ナイス、レンちゃん」と笑顔を向けられた。

第三章

三十一年目の召喚と新しい仲間

平凡な男子高校生だったのに、ある日突然異世界に召喚されてサキユバスにされた少年（今は少女）——レンの朝は早い。

街のどこかでニワトリが鳴くのと、食事の支度のために魔法で火を起す必要があるからだ。

では、レンが朝に強いかというとは実はそうでもない。

エナジードレインによる「食いだめ」が可能なら、人と一緒に寝ている時はだいたい朝まで「お腹いっぱい」の状態なので起きる必要があまりない。外的要因によって起こされるか、強い意志の力で目覚めなければ二度寝三度寝は余裕である。

なので、誰かと寝るとたいいていレンの方が遅く起きる。

その日も、目覚めると間近にフリーリの瞳があった。

「おはよ、レン」

他でもないレンの腕に抱きしめられたまま、幸せそうに微笑む彼女。

お互いに一糸纏わぬ姿なのは昨夜の名残だ。

けっこう疲れる行為だったはずなのだが、少女の肌はむしろつやつやしている。男は吐き出し、女はその分満たされる……そんなエロ漫画でありそうな光景が真実なのだということを、レンは異世界に来てから知った。

「おはよう、フリーリ」

微笑みを返し、腕を離す。

代わりに少女の頭に手を伸ばして弄ぶようにすると「もう、髪乱れちゃう」と抗議された。

「どうせ一回整えないとだめだろ」

「じゃあ、私もレンの髪で遊ぶ」

「わ、馬鹿やめろ」

サキユバスになって以来、毛先を整える程度でばっさり切ったこと

のない髪はかなり伸び、特に縛っていない今はシーツの上に好き放題に広がっている。異種族パワーなのか特に痛む様子がないのは助かるものの、長い分だけいじられた時の被害は大きい。

しかし、止めろと言って止めてくれるフリーではなく、彼女は毛糸玉にじやれる子猫のごとくレンの髪を触り倒した。

こうなったらさらに反撃するしかない。

指を相手の髪ではなく脇へとのばし、くすぐるように動かす。手先の器用さは自慢のひとつだ。フリーはすぐに笑い声を上げ、手を離れた。

「もう、こら、やめなさい」

頬を両手で包み込まれて、キスをされる。

舌を絡め、数秒で離れると再び笑いあった。

「なんか爛れちゃってるね、私たち」

「これくらい普通だろ。……好きでもないやつとはこんなことできない」

「ん。そうだね。好きだよレン」

「俺も、フリーのことが大好きだ」

暖かくなったせいでベッドの上がより心地良くなり、つつい起き上がる機会を逃してしまふ。

そろそろ身支度を整えるべきだが、もう一回くらいキスをしてもらいか……と思ったところで、部屋のドアがノックされた。

「ご主人様、フリーさん。起きていらっしゃいますか？ お待ちかねのイベントが始まりましたよ」

「え、本当？」

慌てて身を起こした二人はいつもより手早く身支度を終えて家の外に出た。

視線を向けるのは街の中央、神殿の方向。

すると、

「わ、光ってる」

「光ってるな」

夜のうちに始まったのか、神殿はぼんやりと、しかし確実に光を

放っていた。

賢者から聞いていた召喚の準備段階。

カレンダーは六月中旬。まだかまだかと待っていたがとうとう始まったらしい。

「なんかちよつとわくわくするね」

「ああ。ちよつと不安もあるけど」

神殿が光り始めたらダンジョン探索は休みにしよう、と決めていた。この二、三日はのんびり過ごして新しい転移者の来訪を待つことにする。

逆に大人たち、特に賢者は忙しくなる季節だ。

五月あたりから空き家が掃除され、初心者向けの物資がたくさん準備されていた。レンたちが新人と大きく関わることはおそらくないだろうが、果たしてどうなることやら。



野次馬をしに行きたいような、関わらないで済むならその方がいいような。

微妙にそわそわした気分になりつつ数日が経ち、神殿が「あの時」と同じ強烈な輝きを放つのを見た。

しばらくすると輝きは消え、いつもの神殿の姿が戻ってくる。

無事かどうかはわからないものの、ともかく召喚自体は終わったらしい。

「これで夜も安心して眠れますね」

こちらで生まれ育ったアイリスは慣れっこなのか、発光の終了に対してそんな身も蓋もない感想を口にしてくれた。

昼でも夜でも光りっぱなしだったので寝る時邪魔だったのは確かである。特に昨夜なんて「どうにかならないのかこの光」と若干イライラした。

「あと何年かしたら俺たちも慣れてそういう感想になるのかなあ」

「かもねー。お正月とか節分とかと同じ感覚？」

ともあれ光も消えたことだし、明日あたりからまたダンジョン探索を再開することにする。

二十一階からダンジョンはまた厳しくなった。もちろん二十階ほどの難易度ではないものの、新しく敵として登場したりザードマンはゴブリン以上の体格とオーク以上の俊敏さを併せ持ち、なおかつ巧みに武器を使いこなす強敵だ。

罠もまた増えたため注意して攻略しないと大けがを負いかねない。新しい感覚に慣らすためにもコツコツとした攻略が必要だ。

「そろそろお昼だね。アイリスちゃん、準備しよつか」

「はい。今日は何にしますか？」

「そうだなあ……サンドイッチとか？」

食材が限られるので料理のレパートリーはそう多くないものの、生活費に余裕ができてきたことで安定して買える食材も増えてきた。

初心者割引の終了で食生活が逆戻りしないことを願いつつ、レンはメイの方を振り返って、

「なあ、メイ。なにか手伝うことあるか？」

「午前中の家事は終了しました。ご主人様は座っていてください」

ひなたぼっこをしているゴーレムの少女はいつも通り、若干冷たいとも取れる淡々とした口調で返してきた。ちなみにいつもこうなので別に怒っているわけでもなんでもない。なんだかんだ半年以上も一緒にいるのでレンたちももう慣れた。

ただ、座っているとやわ言われてもなんだか昭和のお父さんをしているみたいで落ち着かないのだが――と。

「すまない。レンたちはいるか？ 話があるのだが？」

レンがそわそわしながら食事の支度を見守っていると、家の入り口の方から珍しい声がした。

「お？ 賢者のおっさんが向こうから来るとか珍しいな」

「タイミング的にまた変なお願いっぽいな。レン、出てもらえる？」

「ああ、もちろん。……メイ、一応ついて来てくれるか？」

「お任せください」

ひなたぼっこ用にレンの服を着たゴーレムの少女を後ろに従え、ド

アを開ける。

「ああ、良かった。きちんと家にいてくれたか」

「どうしたんだよおっさん。……特にその腕の中のやつとか」

賢者は一人だった。

てつきり誰か連れているかと思ったので拍子抜けした直後、レンは彼が正確には一人じゃないことに気づいた。

人は連れていないが、一匹の動物を抱いていたのだ。

若干神経質そうな中年のおっさんが大事そうに動物を抱きかかえている図。なかなか似合わない。

すると賢者は困ったような表情を浮かべて、

「ああ。彼女は少々訳ありだな。君達に守ってもらえないかと思って連れてきたのだ」

「彼女」

嫌な予感というか、話の筋が読めてきたというか。

じつと見つめると、それ——若干焦げた黄色というか黄みがかかった茶色というか、つまりはきつね色をした生き物は、はつきりとした意思を感じられる澄んだ瞳でレンを見返してきた。

「初めました。このような格好で申し訳ございません。こちらであれば今のわたくしでも違和感なく受け入れてくださると伺ってまいりました。恐れ入りますが、あなたがレンさまでいらっしゃいますか？」

「ああ、俺がレンだけど……」

猫と変わらないサイズの子狐から明瞭な日本語が発せられたことについて目を瞬いてしまう。

「もしかして、君も元日本人——さつき『祝福』をもらってそんな姿になったのか？」

「ご明察です。突然のことで、わたくしとしても戸惑っているのですが……」

しゅん、と、耳と目を伏せる彼女。

「可愛い」

思わず呟けば、斜め後ろにいたメイも同じことを同時に呟いた。

それを聞いた賢者はふっと笑って、

「やはり、君たちなら大丈夫そうだ。……ひとまず中で話をしたいのだが、構わないか？」

「ああ。そういうことならもちろん」

ちようどもう少して昼食が出来上がる頃あいだ。

フリーたちも交えて相談するためにも中へ入ってもらい、人数分の食事を用意する。

事情を聞いたフリーたちも新たな異種族が人型すらしていないことに目を丸くしたものの、それはそれ、とすぐに順応して子狐しやうじよの分の食事に気を配ってくれる。

「サンドイツチだと食べにくいよね？ 小さく千切ってお皿に並べればいいかな？」

「お手数をおかけいたします。そうしていただけると大変助かります」

床の上だと話しづらいし、テーブルの上に乗ってもらうのもどうかと思ったので、レンが抱き上げてサンドイツチを運んでやることにした。

狐を抱きしめるのは初めてだが、ふわふわとした毛並みがなんとも心地いい。

フリーたちも抱きたがったものの、ここは食事が少なくて済むレンが適任。役得というやつである。

「さて。……既に想像がついているだろうが、彼女は今年召喚されてきた新たな転移者の一人だ。ステータスに表示された種族名は『妖狐』」

「この世界はいわゆるファンタジーだと思っていたのですが、和風や中華風もありなのですね」

「異世界だからな。我々の基準による線引きなど無意味かもしれない。……そもそも、エルフやサキュバスが我々の知識と似通っている時点で、この世界の種族が再現されているのではなく、我々の常識を基に新たに種族を『創って』いるのかもしれない」

ともかく、レアな種族を引いてしまったせいで彼女は狐になってし

まったわけだ。

「一見して人に見えないのは困りますね。事情を知らなければ私、狩ろうとしていたかもしれない」

「か、狩られるのは困ります」

「待てアイリス。子狐を狩ったところで肉も毛皮もたかが知れているだろう。捕らえて育て、頃合いを見て仕留めるべきだ」

「おい待ておっさん。効率の話はよそでやれ」

すかさずツツコミを入れると賢者は「しまった」という顔で咳ばらいをした。

「すまない。……ともかく、そういうわけでここに連れてきた。異種族は奇異の目で見られやすいが、彼女の場合は極めつけだからな」

「ああ。人型してないってのはある意味俺より困るかもな……」

翼と尻尾と美貌のせいでやたらと目立つレンだが、それでも大まかに人の形は取っている。一目見て意思疎通が可能で、対等に話すべき相手だとわかるのは大きな利点だ。

しかし、狐の姿では「たかが動物」と無意識に侮られ、軽く見られてしまいかねない。そこまで行かなくとも通行人に蹴つ飛ばされたりすることはあるだろう。

「あの、レンさまは元男性、なのですよね？　元に戻る方法はなかったのですか？」

「完全に元に戻る方法、っていうのは残念ながら見つかってないんだ」「人間に種族変更するアイテムは存在する。私も所持しているが、それを用いたとしてもレンの『性別』が戻る保証はない。容姿もな」

二度の変更よりも一度の変更で留めておく方が元の姿に戻れる可能性はまだ高い。

「君の場合も残念ながら似たようなものだ。その姿からアイテムで人間に戻った場合、容姿が元の姿なのか『現在の姿を基にした人間体』なのか保証できない」

例えば金髪に近い髪のと風美少女になってしまいかもしれない。それでもいい、というのならとりあえず人間にはなれるが、いつか日本に帰れた時に苦労する覚悟が必要だ。

狐の姿になってしまった少女はため息をついて、

「……運命というものはままならないものですね」

「あまり気を落とさない方がいい。その姿と力はダンジョンに潜り、生活費を稼ぐにあたっては役立つだろう。異種族は揃って多彩かつ強力だからな」

「異種族——」

少女の顔がレンへと向けられる。

「ああ。人間じゃない、ってわかりやすいって意味では俺が一番かもしれない」

何しろ翼と尻尾である。

「あのおっさんも価値観が特殊なだけで悪いやつじゃないんだ。ここに連れてきたのも単に君が心配だったからだろ」

「……レン。君は私の事をマッドサイエンティストか何かだと勘違いしていないか?」

「似たようなものだろ実際」

賢者が「解せぬ」といった感じの表情で黙った。

そんな二人のやり取りを見つめていた妖狐の少女は「あの」と声を上げて、

「わたくしからもお願いします。わたくしをここへ置いていただけないでしょうか?」

「ああ、それはもちろん——」

「いいよな? という確認のために仲間たちを見ると、みんな「もちろん」と笑顔で頷いてくれる。」

「困ってる子を放っておけるわけないよ」

「はい。寝床も食事も困ると思いますし、傍に誰かいた方がいいです」
「最少の座を譲れなさそうなのは残念ですが、反対する理由はありません」

レンとしても、ここまで話を聞いてしまったら情が移る。

礼儀正しい良い子のようだし、なにより可愛い。

「でも、大丈夫か? 友達と別々に暮らすことになるけど」

「はい、承知しております。……友人を貶すつもりはありませんが、彼

女たちも混乱のさ中にあります。姿が全く変わってしまったわたくしは重荷になってしまおうでしょう」

「そっか。しっかりしてるんだね……。私だったら泣き出しちゃうかも」

悪い意味ではなく、心底感心するようにフリーが呟くと、

「突然いろいろなことがありすぎて感覚が麻痺しているのかもしれない。それに、こうして心配してくださる方にめぐり合えましたから」

いい子過ぎる。

いい子過ぎて一人にはしておけない。レンは深く頷いて最終決定を下した。

「是非うちで暮らしてくれ。……えつと、名前を聞いてなかったな。あだ名でもいいから教えてくれないか？」

「はい。わたくしは紫苑と申します。こちらではファーストネームで呼び合うのですよね？ でしたらシオンとお呼びください」

「わかった。よろしく、シオン」

こうしてパーティに妖狐・シオンが加わることになった。

種族変更に関しては一ひとまず保留。賢者は「必要であればアイテムは提供する」と言ってくれたので急いで決める必要もない。気持ちの整理をつけるためにも先に他の問題を片付けることに。

さっそく寝床をどうするかなど相談を開始——しようと思ったら、

「ありがとう。何か困った事があればこちらにも相談してくれ。……で、だ。彼女の件とは別にもう一つ相談があるのだが」

「まだなにかあるのかよ。お前、俺たちを便利使いしすぎだぞ」

「そうだよ賢者さん。もう帰っていいよ」

「そういうわけにもいかないのだ。良いから聞いてくれ。解決しなければお前たちも困ることになるかもしれない」

そこまで言われては聞くしかない。

レンたちは賢者のさらなる相談に耳を傾けることにした。

転移者たちの事情

「まず、今回の転移者たちについて話しておきたい」

「なにかあったの？」

「あつたと言えばあつたし、なかったと言えはなかった。ただ、やってきた者達が少々特殊だったというだけだ」

「具体的には？」

「女子しかいなかった。女子校だったのだ。それも宗教系の名門校——いわゆるお嬢様学校というやつだな」

これまでの転移者は男女同数であることがほとんどだった。

単純に、共学校・男女混合のクラスの割合が最も多いからだ。

同様の理由から名門校の生徒がやってきたこともこれまでにはなかった。

「じゃあ、シオンちゃんはお嬢様なんだ？ ……あ、何歳なのか聞いてなかったよね？」

「わたくしは十五歳です。一年生ですので、皆さまよりも年下になると思います」

「俺とフリーも去年、一年生の時に召喚されたんだ。だから一歳差だな」

他愛ない学年の話に心が和む。

地方出身者が故郷の話題で盛り上がったりにするように、レンたちにとっては「地球」「日本」がもう故郷なのだ。

お嬢様学校と聞いて興味が湧いたのか、フリーが「それでそれできと身を乗り出す。

「なんていう学校だったの？」

「はい。わたくしたちの学校は」

告げられた名前にレンは残念ながら聞き覚えがなかった。

学力的にも性別的にも進学先候補にならないのである意味当然だ。

一方、フリーは名前くらいは聞いたことがあったようで「制服が可愛いんだよね」と口にする。

それで廊下の方から「懐かしい名前ですね」と声がした。

寝間着の上に一枚羽織った姿のマリアベルが立っていた。普段はきちつとしている彼女も寝起きはだいたいこんな感じである。この家には女子しかいないので問題はないのだが、

「おっさん、あんまりジロジロ見るなよ」

「私をなんだと思ってるのだ」

「ふふっ。賢者様のことは信用していますので構いませんよ」

微笑みつつ自分の席へ腰かける彼女。

実際、寝間着と言っても肌の出ない上品な装いなので特別エロくはない。女性の普段人に見せない姿、というだけでロマンを感じてしまうタイプなら話は別だが。幸い、賢者はちらちら視線を送ったりすることもなく話に集中する構えだった。

初対面のシオンは小さくなってしまった身体をマリアベルに向けて、

「初めまして、シオンと申します。……あの、先ほどのお話ですが、もしかして我が校の?」

「ええ、別の高校に進んでしまいましたが、中等部まで在籍していました。まだ、中庭にはあの大きな銀杏いちじょうの木がありますか?」

「元気に花を咲かせております。外部入学生に『実を踏まないように』と教えるのも伝統ですね」

「懐かしい。あの頃と変わっていませんね」

同じ学校ならではの会話がしばし交わされる。

「マリアさんの母校ですか。言われてみると二人とも上品ですもんね」

「マリアさんずるい。学校のあるあるネタなんて……レン、私たちも入学式の思い出話とかしよっか?」

「俺たちは同じクラスだったんだから話が別だろ」

話が逸れた。

マリアベルは取り分けてあった彼女の分の昼食を口に運びつつ「失礼しました」と話の先を促してくれる。

頷いて応えた賢者が再び口を開いて、

「知っている者がいるなら話は早い。かの学校は名門だけあって育ち

のいい生徒が多いらしい。しかも生徒は女子だけだ。これまでの者達とは勝手が違う」

「あ、ゲームとかマンガもあんまり見たことなかったり？」

「さすがに今の時代、全く知らない者の方が稀だがな」

家との連絡用にスマホは必要になるし、その気になればアプリでゲームも読書もできる。古き良きファンタジー小説の中には名作として「読むべき本」扱いされていたりするので、最低限の知識くらいは少女たちも持ち合わせていたようだが、

「平和な世界で育ってきたご令嬢がある日突然『剣を取って戦え』と言われたとして、すんなりと応じられるかという話だ」

「なるほど。拒否されたのですね？」

「荒事への忌避感。生命を奪う事への抵抗。死の恐怖。理由と程度は様々だが、な」

中年男の顔に苦々しい表情が浮かんだ。

妻も子供もいない彼にとって若い女子はどちらかという苦手な相手。ただでさえ話しづらい相手に嫌なことを強いなければならぬのだから大変だったのは想像がつく。

彼としても若い少女たちに「いいから戦え」とも言えない。

「いいから家に帰してくれと泣く者もいた。……正直、ダンジョンの事は考えなくても良いからこの地で暮らす覚悟をしてくれ、と説得するのが精一杯だったよ」

「大変でしたね、賢者様……」

これはさすがに同情するしかない。

「で？ 家への案内は終わったのか？」

「なんとかな。担任の女性が『せめてバラバラになるのは避けられないか』と食い下がってきたが、二、三十人が共同生活できる住居などさすがに用意がない」

仲の良い者同士で数人ずつ、分かれて家に入ってもらうしかなかった。

アパート的な住居くらい用意しておけという話もあるが、同期の転移者をひとかたまりにしておくのにも良し悪しがある。

同じクラスでも、というか同じクラスだからこそ仲の悪い者の存在。

同期だけで群れてしまい街の住人と仲良くなれなくなる可能性がある。ダンジョン攻略に積極的な者とそうでない者の間で争いが発生する懸念などを考えると、普通の家を複数用意する方が無難であり楽である。

「……そのような状況で『仲間に入れてください』とは言えず、わたしはこの方を頼ることになりました」

「大変だったのですね……」

マリアベルがしみじみと目を細めた。

「あ、忘れてた。マリアさん。シオンには俺たちと生活してもらおうと思うんですけど、いいですよね？」

「ええ、もちろんです。よろしくお願いしますね、シオンさん」

「はい。どうぞよろしくお願いいたします、マリアベルさま」

「マリアで構いませんよ」

先輩後輩の心温まるやりとりに和んだところで話の続きだ。

「でも、とりあえず住んでもらえたならそれでいいんじゃないか？

そこからのなにか問題が起きたのか？」

「これから起きるかもしれない、と言うべきだな。……このまま本当に『誰もダンジョンへ潜らなかつたら』誰が彼女たちの生活費を工面する？」

「あ」

人が生きていくためには衣食住がいる。住居は無償提供してもらえし、当面の食料くらいはレンたちの時も工面してくれた。

ただ、ずっと養われているだけ、というわけにはいかない。

レンたちの世代にもダンジョンに潜らない者はいるものの、みんな職人の手伝いをしたり荷物運びに精を出したりして金を稼いでいる。

では、お嬢様たちが同じようにできるかというと——怪しいものがある、と言わざるを得ない。少なくともアルバイト経験のある者はほぼいないだろう。

「金の問題はシビアだな……」

「ああ。ダンジョンに潜るのであればパーティは一蓮托生だ。お前たちのように生活費の共有も可能だろうが、果たして、家族でも恋人でもない者同士で限られた金銭を分配できるか」

「少なくとも全員になにかしら稼ぐ手段を与えないと厳しそうである。」

「職人、商店、受け入れが可能なところを探して割り振るだけでも頭が痛くなりそうだ。」

「職人系や農業系のクラスになった方はいなかったんですか？」

「ゼロではないが、希少だな。ちなみに今回は大半が聖職者系のクラスだった」

「日常的に神に祈っていた人間と考えればさもありなんだが、

「ダンジョンに潜れば大活躍だぞそれ」

「やりたいこととできることが一致しないというのは悲しい話である。」

「んー……こつちだと医者ってそんなにたくさんはいらないんだろ？」

「魔法で治療するだけの医者なら間に合っている。割り振ることができて一人か二人を助手として、といったところか」

「レンたちが病気がらしい病気をしていないように身体自体が丈夫になっっているし、パーティ内に怪我を治せる人間がなにかしらの形で在席している場合がほとんどだからだ。」

「本格的な医学、薬学をかじっている者がいれば話は別だが、転移者は教師を除いて高校生である。」

「なんか大ごとになってきたな……なあ、シオンは『一緒にダンジョンへ潜って欲しい』って言ったらどう思う？」

「お世話になる以上、何もしないわけにはいかないと思っております。この身体では家事もできませんので、もし、わたくしの『スキル』がお役に立つのであれば喜んで」

「すごい。ありがとう、シオンちゃん。安心して。もちろん無理なんてさせないから。シオンちゃんのごことは私たちが守るよ」

「ありがとうございます、フリーさま」

さて。

ここまでの話から「他の生徒はダンジョン攻略を渋っていてお金がない」「シオンには戦える仲間がいて本人にも意欲がある」という構図になったわけだが。

「おい、おっさん。これじゃシオンが同級生からたかられるんじゃないのか？」

「私もそれを心配している」

もちろん、礼儀正しく育ってきたお嬢様がカツアゲ的なことをするわけがない。

おそらくは平和的な話し合いから始まるだろうが——自分の方が弱い立場なのを自覚している人間の口にする「困った時はお互い様」はなかなか厄介だ。

極端な話「あなたが助けてくれないと私たち死ぬんだけど、見捨てるんだ？ ふーん？」という話になる。

「いや、待て。俺たちの収入だけで一クラス分養うとか無理だからな？」

「もちろんそこまで宛てにする気はない。最悪、養うしかないとなった時には皆から少しずつ徴収することになるだろう」

町内会費か。

「……だがまあ、その、なんだ。何かいい方法がないかと思つてな」
「丸投げかよ」

「単純に職の紹介、仲介なら私に伝手がある。だから君達に求めているのは常識を打ち破る回答——ブレイクスルーだ。例えばこの際、二、三人ほど口説いてダンジョンに誘ってくれてもいい」

「俺はホストか結婚詐欺師か」

さすがに「魅了の魔眼」を併用してもあつさり女の子を口説けるほどの力はないはずだ。というか、あつたとしてもそんな方法は取りたくない。

マリアベルが「そうですね……」と思案して、

「少数であれば娼館で引きとることもできますが、彼女たちの方が拒否するでしょうね」

「え、あの、マリアさまは娼館を運営していらつしやるのですか……？」

「ああ、戦う力のない女性の受け皿としてな。働いている人たちとは俺も知り合いだけど、みんな元気に楽しくやってるよ」

「え、レンさまも娼館を利用なさって……？」

「ち、違う違う。従業員の人たちと友達になっただけだつて」

危うくやばい誤解をされるところだつた。

「でもまあ、そうだよな。ヒーラーが多いなら、なんとか探索に協力して欲しい。ヒーラーが欲しいパーティとかたぶんいくつもあるだろ」
「ならさ、本当に全員がダンジョン行きたくないのか確認するのが先じゃない？ シオンちゃんみたいに『必要なら行く』って子もいるかもでしょ」

「そうですね。話の流れ上、あの場では言い出せなかつた子もいるかもしれない」

探索する人間がシオン以外に二、三人でも出てくれば話はだいぶ変わる。

触発されて気が変わる者が出てくるかもしれないし、そうでなくとも別の手段で稼ごう、という機運は高まるはずだ。

賢者は「ふむ……」と思案して、

「説得、いや扇動を頼んでも良いか？ 私からも話はしてみるが、同性かつ歳の近い君達からの方が話が通りやすいだろう」

「わかつた。俺たちとしても無関係じゃないからな」

シオンを仲間に入れたことで関係者になったとも言えるが、そうでなくともマリアベルの母校だ。なんとかしてやりたい、と思った可能性は高い。

「申し訳ありません、レンさま。ご面倒をおかけいたします」

「気にするなつて。それこそ困った時はお互い様だ。……でも、そうだな。そうするとシオンには一度、早めにダンジョンへ行ってもらった方がいいかもしれない」

行くつもりだ、と話すよりも行ってきた、と話す方が説得力がある。体験談を伝えつつ「注意していれば命の危険はない」と伝えること

でダンジョンへの忌避感がある程度減らすことができるだろう。

レンの腕の中の子狐はどこか神妙な顔つき（可愛い）でこくりと頷き、

「かしこまりました。覚悟を決めます」

「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。ゆっくり慣れていきましよう」

アイリスが優しく声をかけ、メイが無表情のままに頷く。

「シオンさんは見るからに前衛ではありません。敵の攻撃はしっかりと私がガードしますのでご安心を」

「ガード……女性のほうが前に立つのですね？」

「ああ、メイはこう見えてゴーレムだからな。力も防御力も下手な男よりずっとあるんだ」

「ゴーレム……」

五人中三人が異種族のパーティ。

実際、シオンが交ざるとしたらこれ以上の適任はいない。

「ところでシオンちゃん、『妖狐』ってどんな能力なの？ スキル一覧を見せてもらってもいい？」

「ええ、もちろんです」

「私も見せてもらったが、なかなか興味深いぞ」

シオンは「行儀が悪いですが……」と言いつつレンの腕を抜け出してテーブルへ降り、器用に前足を使ってウィンドウを操作。

ただたどしい手つきなのは動きづらいただけでなく慣れない操作なものもあるだろうが、なんとかスキル一覧が表示された。

一同は集まってそれを覗き込み、

「あれ？ なんだかレンさんのと似てますね？」

「だな」

基本的な魔法を他のスキルで多種多様に使いこなす、という意味ではだいたい同じだ。

もちろん細かいスキル構成は異なっている——例えば、サキユバスらしい名前のスキルが存在せず、代わりに妖狐っぽい名前のスキルが並んでいるが。

特に目を引いたのは未取得状態で表示されている「二尾」というスキル。

みんなの了解を得つつタップすると詳細が表示。そこには「同時行使可能な魔法数を＋1する」とあった。

「同時に二つまでの魔法を使えるようになる……?」

「え、待って。これ二尾ってことは、たぶん九尾まであるよね?」

今見えている効果だけで考えても『ダブルキャスト二重魔法』より強いのだが。

レンは小さくてもこもこした少女を拝み奉りたくなると同時に「もう俺いらんじや?」という気分になった。

思わぬ再会

結論から言うと、シオンの将来性は確かに凄まじいものの、レンが要らなくなるといふことはなさそうだった。

「よし。いいぞ、シオン」

「はい……っ！」

家の庭。

適当な棒にボロ布を巻きつけて作った即席の案山子かかしから少し離れて立ち、合図をひとつ。するとレンに抱き上げられた状態の子狐——シオンは返事と共に案山子を睨みつけた。

直後、二人の前に生まれる小さな火線。

螺旋を描きながら飛んだそれは見事、的代わりである案山子に命中、表面を焦がすと共に布部分へ火をつけた。

妖狐のスキル「狐火」である。

放っておけばそのうち燃え上がって灰だけが残るだろうが、近所迷惑も考えレンが「ウォーター」で消火する。火の消えた的を見つめつつレンは頷いて、

「うん。落ち着いてやれば的には十分当たりそうだな。でも、威力がちよつと心元ないか」

「わたくしとしては十分に驚きなのですが、レンさまの魔法はもつと威力があるのですか？」

「レベルが全然違うから単純には比べられないけどな」

参考として火属性に変換したマナボルトを披露。

片腕でシオンを抱いたままもう一方の手から放った炎は濡れた案山子に命中、湿気を飛ばすと共に大きく燃え上がらせた。慌てて「ウォーター」を複数回かけ消火。

狐の姿となってしまうたお嬢様は「すごい」と呟いた。

「魔法とはこれほどのものなのですな」

「シオンもレベルが上がればいろんなことができるようになるよ。使い方によっては生活にだって役に立つ」

「電子機器も使い方を誤れば人を傷つける。魔法も道具と同じで使

方次第、ということですね？」

「ああ。……なんか、シオンなら俺が教えるまでもなくすぐにいろいろ覚えられそうだな」

「いいえ。レンさまや皆さまが受け入れてくださって、わたくしはとても心強い思いです」

賢者が帰った後、レンたちはシオンの能力をさらに詳しく検証した。

そうしているうちにわかったのは、妖狐は「応用が利きやすい」という意味ではサキユバスに似ているものの、本質的には別物だということだ。

魔法攻撃力があまり高くないのは同様———というか、下手をすればサキユバスよりも低め。

魔法を二つ同時に使ったり、複数体の敵を狙ったりと便利なスキルが充実する一方でHPとMPがかなり低めに設定されている。

つまり、小さな身体が表す通りにか弱く、またMP管理の面でも扱いの難しい種族なのだ。

最初のスキルとして取った狐火はアイリスのファイアボルトに比べて消費MPも威力も控えめ。尻尾を増やすことで同時発動可能数を増やし、状況に応じて一発撃ったり二発撃ったり使い分けるのが基本的な運用プランだと思われる。

本当に尻尾がどんどん増えていくのかどうかはレベルを上げてみないとわからないが、

「でも、クラスメートが聖職者になってる中で一人だけ姿が変わるなんてな。せめてもう少し西洋風なら良かったのに」

「そうですね……。もしかすると、わたくしの父方の実家が大きな日本屋敷ですのでそちらの影響なのかもしれません」

「そうなのか。じゃあ、学校ではわりと肩身が狭かったり？」

「いえ、そこまでは。父は次男ですし、私自身は仏教徒というわけでもありません。クラスメートとは打ち解けていたつもりです」

しかし、召喚と種族変更によって事情が変わってしまった。

「レンさまは寂しくはありませんか？」

「俺の場合はフリーがいてくれたから、寂しいとかはなかったな。むしろ男子から変な目で見られるのが嫌だった」

「心中お察しいたします。……わたくしも、自分がサキュバスになったらと思うとぞつとします」

女子校育ちのお嬢様が男に言い寄られるのはきついでだろう。そういう意味では可愛い動物に変わったのは良かったかもしれない。

一方で、他の少女たちがそういう目に遭う可能性は否定できない。「できるならなんとかしてやりたいんだけどな……」

「レンさまが親切にしてくださいるのは、ご自身の経験からですか？」

「ああ。たぶん、そうなのかな。女になってそこそこ経つし、同じ女としては放っておけないと思う」

「……本当にありがとうございます。皆さまがいなければ今頃、途方に暮れていたことと思います」

「俺たちが助けなくても他の誰かが助けてくれたよ。ここの人たちはみんないい人たちなんだ。元をたどれば日本人だしな」

シオンは「はい」と答えるとしばらく黙って、

「日本にはもう、帰れないのですね」

「今のところはな。帰る方法を探すためにも俺たちはダンジョンへ潜らないといけない」

攻略状況の進展に皆が一喜一憂する世界で、戦う気のない新参者は果たしてどう見られるか。



シオンの能力を生で確認した後は家に入ってこの世界のことを色々と話した。

賢者から最低限の説明は行われていたものの、細かいところまでは行き届いていない。おいおい慣れていってもらえばいい、と省略された部分を質問されるまま、こちらが思いつくままに答えて「異世界に来た」という実感を強めてもらう。

平和な生活面の話をすることで気持ちを落ち着けてもらおうとい

う狙いもある。

「では、生活のレベルは戦前の日本程度、ということになりそうですね」

「そうなるかな？ お魚がなかなか手に入りづらい代わりにお肉はそこそこ手に入りたりするし、色んなお料理のレシピ自体はあるからいろいろ違うところはあるけど」

「家電がなんにもないから最初のうちはけっこうきついと思う。でも、慣れればそこそこ快適だぞ」

すると、シオンはレンに抱かれた状態のまま何度か瞬きをして、

「この身体では操作もままなりませんので、いつそなにもないほうが気楽かもしれませんね」

「ほんと、人型していないのは不便だよー。レンなんか最近、尻尾を便利遣いしてるのに」

「俺だって不便はあるんだぞ。仰向けで寝られないし着られる服が限られるし、椅子に寄りかかるのも気を遣うんだ」

「ふふつ。……レンさまがいてくださると、自分が一人ではない、という気がいたします」

しみじみとした呟き。

「とりあえず、シオンの席を用意しないとな。……椅子の上にクツシオンでも重ねるか？」

「んー、どうだろう？ 無理にテーブルを使わない方が楽かも？ 椅子を二つくっつけて、その上に食器を置けるようにするとか」

一番楽なのは「床に皿を置いて食事してもらおう」なのはなんとなくわかる。ただ、自分たちがその立場だったとしたら「ペット扱いだよ」と憤るのは確実なので口には出さなかった。

「ここで、静かに話を聞いていたメイが口を開いて、

「そもそも、シオンさんには椅子が高すぎるのでは？」

「あ、そうか。シオン、一人で上れそうか？」

「ええと……そうですね、一度、試してみたいと思います」
やってみた。

ぴよん、とジャンプして飛び乗るのは失敗。身体を上手く使えるよ

うになればできるかもしれない、という感じ。

椅子の足を上手く使って上がるのも上手く行かなかった。人がよじ登るようにしようとするの変な体重がかかって椅子が傾きそうになる。

猫ならうまくいことするする上つていきそうなものだが、あいにくそのコツを知る者は誰もいない。

失敗にしゅん、とするシオンにアイリスが助け舟を出した。

「上りたい時は私たちが抱き上げてあげましょう？　だいたいの場合は近くに誰かがいるはずですし」

「ありがとうございます、アイリスさま」

「いいえ、そんな。私、シオンさんとは仲良くしたいんです」

「アイリス。わかってると思うけどシオンを食べちゃだめだからな？」

「そ、そんなことしません！　レンさん、私をなんだと思ってるんですか！」

半分冗談として釘を刺したらぶんぶん怒られてしまった。

半分、狩人の本能が暴走しないか心配していたのも事実なのだが。

「後は寝床だねー。ベッド自体は余ってるんだけど、やっぱり上げるのが大変だよな？　クッションとタオルか何かで小さいのを作った方がいいかな？」

「なんだか、猫やうさぎの寝床のようですね……」

だんだん実感が湧いてきたのかシオンが呆然と呟く。

「早くこの身体に慣れ、せめて人用の家具を使えるようになりたいです」

「頑張れシオン」

こればかりは本人の努力次第だ。

人の形に新しい器官が生えたレンと違い身体の形自体が変わったのだから、違和感さえ消えれば逆に慣れやすいに違いない。

「……ん？　人間の生活っていうと……」

「どうしたの、レン？」

「いや、ちよつと懸念が思い浮かんだんだが、軽々しく口に出していい

のかと思って」

仲間に耳うちの形で相談すれば、フリーとアイリスも「あー」と微妙な顔になった。

メイが真顔で頷いて、

「トイレですか。それは確かに難題——」

「こらメイ！」

「メイちゃん！　そういうのはもうちよつと控えめに……！」

「トイレ……わ、わたくし、さすがにそこまでペットと同じ扱いは……!?!」

「た、大変です！　シオンさんが震えだしてしまいました！」

大騒ぎになった。

なお、動物というより妖怪だからか、シオンはそれから何日経つてもその手の行為が必要にならなかった。レンは仲間ができたことに感動しつつ、変な配慮が必要にならなかったことに心底ほつとした。

それはまた別のお話として、シオンが落ち着くのを待ってから、

「だ、大丈夫だよシオンちゃん。お風呂はレンが湧かせるから気軽に入れるの。汚れたら綺麗にすればいいからね？」

「フリー、それフォローになってないぞ!?!」

とりあえず、シオンには試しにリビングでクッションに乗って寝てみてもらうことにした。メイが一緒なので寂しくはないはずだ。

また、レンたちの清潔さについてはお嬢様から太鼓判が押されたことを付け加えておく。



その日の夜、レンはフリーと共にベッドへ潜りながら話をした。

「でもシオンちゃん、本当に大変だよね。一人になりたい時もあるだろうし、お部屋があった方がいいよね？」

「そうだな……。メイにも結局部屋をあげられてないし、いつそ引越した方がいいかもな」

「わ、レンったら大胆」

年に一度、人がどばつと増えるため、街には空き家がたくさんある。一クラス分は無茶としても「今よりも少し広い家」くらいなら探せばあるはずだ。

「良い物件あるかなあ。……あ、いつそのこと建てちゃう？」

「金足りるか？ ……あー、建てることなんて考えたことなかったし、いくらかかるか全然わからないな」

寝る前の雑談とはいえ、なかなか魅力的な話である。

知識として得ておくだけでも悪くはないので近いうちに近所の大工にでも聞いてみようと思う。

「明日、ダンジョンに行く予定だったけど、昨日の今日で来てくれるかな」

「二階だし危なくはないと思うけど、こういうのは気持ちの問題だもんなね……」

レンたちだつてまともに戦えるようになるまでにはそれなりの葛藤があった。その点においては「敵なんだから倒すのが当たり前だろうが！」と平然と斧を振るっていたタクマが正直羨ましい。

時間を置くしかないと思いつつも心配しながら眠って、翌朝。

万全の態勢を敷くからダンジョンへ行ってみないか、と朝食の席で切り出すと、シオンは「かしこまりました」とはつきり答えた。

「早い方がいいのですよね？ 〴〵指導のほど、どうぞよろしくお願いいたします」

「ああ、それはもちろん。……でも、大丈夫か？ 無理はしなくてもいいんだぞ？」

「そうだよ。早い方がいいのは私たちの都合なんだから、シオンちゃんには気にしなくても大丈夫」

あつさりしすぎていて逆にレンたちの方が慌ててしまう。

これにもシオンは静かに「いいえ」と答える。

「なにもしなくてよい、と言われるよりも『こうしろ』と指示を受けている方が気楽なのです。どうかお気になさらず、なんなりと命じてくださいませ」

「……もう。シオンちゃんはちよつといい子すぎるよ」

困ったように呟くフリー。シオンはぺたん、と耳を伏せると「性分
ですの」と小さく言った。

レンとしても心配ではあるものの、本人が「行く」と言っているの
に行かせないのもおかしい。

「わかった。それじゃあ、今日は見学のつもりで行こう。俺たちにと
っては慣れた場所だから戦いは任せてくれていい」

「はい、かしこまりました。よろしくお願いいたします」

と、話がまとまったところで家のドアが叩かれる音。

「レン、フリー。いるだろう?」

「つて、またおっさんかよ」

せつかくシオンがやる気になっているというのにいったいなんな
のか。

若干苛立ちつつドアを開けると、意外なことに中年賢者は今日も人
を連れていた。

転移時に着ていたものだろう清楚な服を纏う成人女性。背筋を伸
ばした立ち姿はとても自然で、威圧感をまるで感じさせない。

「おはようございます、賢者さん。……こちらの方は?」

「客人だ。君達というよりはシオンにな」

「ということは……と視線を向ければ、女性は微笑と共に挨拶をして
くれる。

「初めまして、シオンさんたちの担任をしております志藤愛沙しどうあいさです。
こちらの流儀に則り、どうぞアイシャと呼んでください」

「先生?」

アイシャと名乗った女性に驚きの声を上げたのは、アイリスに抱か
れてやってきたシオンだ。

女教師はそんな教え子にも笑顔を向けると「遅くなってしまっご
めんなさい」と眉を下げる。

「様子を見に来たの。慣れないことばかりで困っているでしょう?」

それから、シオンさんを受け入れてくださった皆さんにもお礼を言い
たくて」

それでわざわざ来てくれたのか。

遅くなつて、ということはもしかして他の生徒たちのところを周った後なのか。よく見ると表情に少し疲れが見える。

彼女だつて異世界に来て困惑しているだろうに、休む時間さえ削つてみんなの世話をしていたのか。

「ありがとうございます、先生。ですが、わたくしはこうして元気にしております」

「シオン——シオンさんのことは俺たちでできる限り守ります。だから安心してください、アイシャさん——アイシャ先生？」

「好きなように呼んでいただいて大丈夫ですよ。……でも、そうですか。安心しました」

ほつと息を吐くアイシャ。

少し話しただけの印象でも「いい先生だな」とわかる。こういう人がいてくれるなら他の生徒も少しは安心だろう。

「じゃあ、用事つてシオンちゃんの様子を見るのと私たちへの挨拶？」

中に入って少しお話してもらおっか、レン？」

「ああ、そうだな」

頷き、レンはアイシャを中に招き入れようとする。

すると、女教師は「いいえ、実は……」と言葉を濁した。

「先ほどお伝えした用事というのは別にあるのです」

「別、ですか？」

「ええ。こちらに住んでいるはずのある方に会いに来たのです。名前
は——」

「……愛沙？」

「っ!？」

本名で呼ばれたアイシャがぱつと顔を上げ、家の中、私室の方向から顔を出した女性を見つめる。

「万梨阿っ!？」

初対面のはず。にもかかわらず下の名前を口にした彼女は、一目見てわかる歓喜の表情を浮かべた。

まさか名前を教えたんじゃないだろうな……と賢者を睨むと、彼は「心外だ」とばかりに渋面を作った。

「学校名と年齢を聞いて、同じ学校出身の者がいると教えてただけだ。マリアベルの名前を出してきたのは彼女の方……まあ、元々知り合いだったのであればピンと来ても不思議はあるまい」

新しい計画

考えてみれば領ける話だ。

神隠しの話は毎年ニュースになっている。学校やクラスはもちろん、搜索願が出されれば名前や顔写真も公開されるので知り合いなら当然気づく。そして「毎年日本から一クラスが召喚されている」という賢者の説明を聞けばピンと来る。

神隠しに遭った知り合いもこの世界に來ているのだ、と。

まあ、二人の場合はただの知り合いとは思えない。

お互いの顔を見た後はどちらからともかく駆け寄って抱きしめ合って涙していたので、鈍いレンでも「そういうことか」と事情は察せられた。

前にマリアベルから聞いた話。

女性の恋人がいたこと。高校で学校が別になったために世界さえ隔てて離れ離れになったこと。

「……お恥ずかしいところをお見せしました」

「いえ、そんな」

二人が再会を喜び合う中、レンたちは「私はどうしたらいいのだ」という顔の賢者を追い払い、頃合いを見てアイシヤを家の中へと招いた。

例によって余計なことを言いそうなメイの口をひとまず塞ぎ、

「アイシヤさんがあの、前にマリアさんから聞いた……？」

「ええ。ここへ来る以前、私が交際していた子です。まさかこんな形で再び出会えるとは思いませんでした」

この三十年——いや、三十一年間、召喚されるのは決まって高校の一クラス。

相手も召喚されてくる可能性は通常、マリアベルの転移から二年以内にしか存在しない。教師として召喚に引つかかるといのはもはや奇跡だ。

ずいぶん時間が経ってしまった。しかも異世界での不便な生活を余儀なくされるのだとしても、会いたかった人に会えるのはいいこと

だ。

しみじみとこの奇跡を噛みしめると、

「待って、万梨阿。交際していた、ってどういうこと？」

マリアベルの隣に座ってもらったアイシヤが突然不満そうな声を上げた。

察したフリーが「あ」と口を開くも、経験不足なレンたちにはなにもできない。マリアベルは「何を言っているのかわからない」とでも言うように目を瞬いて。

「だって、ずっと昔の話でしょう？ あなたを置いていってしまった私に『今も交際している』なんて言う資格は——」

「そんなの関係ない！ 私はずっと待ってた！ 教師になったのだから、あなたに会えるかもしれないって思ったから……！」

本当に、どうしていいのか見当もつかなかった。

涙ながらに睨み合う年上たちの間に慌てて割って入り「ちよ、ちよつと落ち着いてください！」と強引に止めるのが精一杯。

しかしその甲斐あつてか、元(?)恋人同士の喧嘩はいったん止まった。

呼吸を整えたアイシヤは「ごめんなさい」と頭を下げて、

「こんなこと言うつもりじゃなかったの。……私だって、ずっと一人でいられたわけじゃない。寂しさから別に恋人を作ったこともあった」

「ええ。私だって同じ。……いいえ、もつとひどいでしょうね。男性も、女性も、一夜限りの関係だつてあつたもの」

マリアベルもまた自嘲気味に応じる。

昨日と同様、寝起きのせいで身支度が整っておらず、着替える時間もなかったので少し居心地も悪そうだ。どうせなら綺麗な自分を見てもらいたかつただろう。

「今は娼館の経営を手伝っているの。……賢者様からもう聞いた？」

「ええ。……大変だったんでしよう？ 驚いたけど、責める気になんてならなかった」

「……ありがとう」

なんとか仲直りはできたようだ。

分かれ分かれになって過ぎた年月は戻ってこない。それでも、また始めることはできるはずだ。

ぐすつと鼻を鳴らしたフリーがレンを見て、

「なんかいいね、こういうの」

「ああ。……でも、もし俺たちがそういう立場になったら、お前には幸せになっていて欲しいな」

「は？ 私に他の男と付き合えってこと？」

「十年以上独り身とか寂しすぎるだろうってことだよ」

こほん。

成人女性二人揃っての咳払いで我に返る。せつかく話がまとまったのにレンとフリーが言い争いを始めてどうするのか。

「本当によかったです、先生。おめでとうございます」

「ありがとう。……みんなが大変な時に不謹慎だと思っただけ」

「良いのではないでしょうか？ 恋愛に年齢は関係ない、と私の両親も言っていました」

「メイもたまにはいいこと言うな」

「ご主人様？ 私は常に気の利いた会話を心がけているのですが」

「この言葉にフリーとアイリスが吹き出し、場が和んだところで、
「あの、ちようどいいので話を聞いてもらえませんか？ みなさんがこの世界に馴染める方法について」

レンたちは賢者から聞いた話をアイシャにかいつまんで話した。

彼女もだいたいの話は聞いていたのだろう。シオンがダンジョンに潜って呼び水になる、という案も含めて真剣に聞いてくれ、その上で頷いてくれた。

「私も、日本に帰る方法がない以上は必要なことだと思う。シオンさんが協力してくれるのなら説得がとても楽になるんじゃないかな」

「愛沙——アイシャも説得をするつもりだったの？」

「もちろん。いざとなったら私もダンジョンへ同行するつもりだったし、誰も協力してくれないのなら一人で行くことも考えてた」

「さ、さすがにそれは無茶です！」

一人で行くとなったら賢者が誰かしら人を出してくれただろうが、それでもなかなかに厳しい。

「アイシャさんのクラスはなんだったんですか？」
「教師です」

自分の持つているスキルを他人に「教育」して与えることのできるクラスらしい。なんか凄そうだが、低レベルでは役に立たないうえに戦闘にはまるきり向いていない。

マリアベルが珍しく怖い顔をして「絶対無茶はしないで」とアイシャへ言った。

「……すみません、みなさん。私は今後、彼女と一緒に住むことも検討したいと思います。とても一人にはしておけません」

レンたちとしても「それはもちろん」と言うしかなかった。引越を挟むとして、パーティから抜けてもらうかどうかは話し合っただけめればいい。

ひとまず恋人たちの同棲については置いておいて、アイシャは再び「先生」の顔に戻った。

「懸念としては、やはり男性との距離感ね。慣れていない子が多いから、多少距離を取った生活環境を用意できればいいのだけれど」

「今ある家だと難しいかもしれませんがね」
寮的などころを用意して希望者だけを受け入れられればだいぶ違うだろう。

ただ、既存の家は基本的に街の中心部からなるべく離れないように建てられる。

結婚して男性と暮らし始める女性も多いので「男が近所にいない区画」というのは現状存在しない。

「離れたところに土地を作って、そこに新しい家を建ててもらえばなんとかなるかもしれません」

「土地を作る……」

「それは、賢者様の説明にもあった『世界の欠片』を使う方法でしょうか？」

「そうです。郊外はまだ闇に覆われているので、そういう場所ならス

ペースも確保できますし誰もいません」

その分だけ不便なわけだが、この辺りは日本で田舎暮らしをするのと変わらない。利便性と平穩というのはどちらかを取るとどちらかが逃げていくものだ。

ただ、不便を覚悟するにせよ他に欠片とお金が必要になるわけで。

アイシヤは「……難しいな」と思案顔で首をひねった。

「みんなに前向きになってもらうために安心できる家が欲しいけど、家を建てるためには稼がないといけない。あちらを立てるとこちらが立たない感じ」

「戦う気のある方は現状、本当にいないのですか？」

「全くないわけではないけれど、戦ってもいいと思っっている子と『他の子がやるなら一緒にやってもいい』という子がそれぞれ二人ずつくらいね」

「一パーティ作れるかどうか。バランスも考えると厳しいね」

初心者だけで一から攻略するとなると時間もかかるし、最初の頃は自分たちの生活費だけでいっばいいっばいだ。

かなりスムーズに戦ってこれははずのレンたちで「新しい家を建てられるかな？」くらいの状態なので、新人が大きい家を作ろうと思ったらクラス一丸になったうえで半年〜一年を見るべきだ。

フリーが「うーん」と腕を組んで、

「家かあ。なんか私たちと似たようなこと考えてるね、レン」

「サイズが違うけどな。土地だけなら俺たちでもなんとかなるけど

……」

言つてから、レンは「土地はなんとかなるのか」と再認識した。

「フリー。ひよつとして俺たちの家と一緒にしちやおう、みたいなこと考えてるか？」

「そこまでは考えてなかったけど、それもありかも？ 女の子専用住宅街みたいな」

「それ、俺が住んで大丈夫なのか？」

「レンがだめだったらマリアさんや、下手したらアイシヤさんもだめじゃない？」

確かに、女性の身体なのに女性が恋愛対象になる、という意味ではレンもマリアベルも変わらない。

「土地を提供してもらえただけでもとても助かるけど、いいの？ あなたたちが苦勞して貯めた財産なんでしょう？」

「や、めっちゃくちゃ思い付きで喋ったので大丈夫とは言いにくいですけど。そもそもそんなお金もないですし」

たぶん、もろもろ必要事項を挙げていったらうんざりしてくる系のプランだ。

それでもちよつと面白そうではある。

「住宅街かー。あれだよな、それって家を貸すってことだろ？ ひよつとして家賃とか入ってくるのか？」

「値段にもよるけれど、それはもちろん支払うべきでしょう。本来なら私たちが建てるべきなのだし」

「家賃収入。本で読んだことがあります。不労所得、というやつですね？」

この歳で賃貸住宅のオーナーとは夢のような話だ。

ただの冗談のはずなのにやってみたくなってくる。

「できたらいいけど、いろいろ大変だろ。街から遠くなるってことは森からも本屋からも遠くなる」

アイリスやメイとしても不便なのではないかと口にしたところ、当のアイリスが可愛く首を傾げて、

「いっそ森の傍に作るのはどうですか？ それなら用のない人は来ないと思います」

「森の管理者には伝手があるのですから利用しない手はありませんね。さすがです、アイリスさん」

「マジか。怖くないか、人の少ないところに住むって」

「いいえ？ 獣を狩るのは得意ですし、一緒に住むのはいい人ばかりなんですよね？ それに、一人じゃ手に負えない問題ならレンさんたちが助けてくれますから」

「……アイリス」

信頼されている。不覚にも少し泣きそうになってしまった。

ここで、話を聞いていたマリアベルが口を開いて、

「お金でしたら娼館からお貸ししましょうか？ 私たちがレンさんたちへ融資し、みなさんは居住者から家賃として費用を回収、少しずつ返していただければ」

「え、大丈夫なんですか、それ？」

「問題ありません。もともとなにかの時のため——例えば、今いる娼婦たちが引退した時、先々の支援をするために貯めていた資金なのです。のんびりと暮らせる家ができれば願ってもないことなのですよ」

「え、あれ？ なんか問題が解決したぞ？」

しかもわりとみんな賛成モードである。

買い物の不便についてもストレージがある以上、その気になれば買いだめが可能なわけで。ちよつと面倒なのはダンジョンへの行き来くらいか。

娼館からお金を借りられるのであればアイリスの両親に土地の相談をして、家の間取りや配置・デザインを決定、大工に依頼してしまえば建設に取り掛かれる。一年なんて待たずとも立派な家を用意することができてしまいそうだ。

ついでに自分たちの家を作ってしまうこともできるし、どさくさに紛れて豪華な家にもできる。マリアベルやアイシャが住む家もついでに建ててしまえば一石二鳥だ。

困ってしまうくらいに困るところがない。

レンはしばらく考えてからみんなを見て、尋ねた。

「とりあえず、賢者あのおっさんに相談だけでもしてみるか？」

「賛成！」

なんと、誰からも異論は出なかった。

この後「それなら話は私が」とアイシャが引き受けてくれた。レンたちの側からも誰か行つた方がいいので、これはマリアベルにお願いする。

残ったメンバーは予定通りダンジョン探索だ。さすがに一階を攻略するのにいまさらマリアベルの補助は必要ない。

「シオン、大丈夫か？」

「はい。あの……急にいろいろと決まりすぎて頭が追いつけていないのですが、こちらではいつもこのような感じなのですか？」

「さすがにいつもはこんなに変じゃないよ。……大変じゃないよな？ あれ、自信なくなってきたぞ？」

この一年でやったことを思い返してみると「だいたいこんなもん」と言っても嘘ではないかもしれない。

レンは目を細め、静かに子狐の少女を見つめ返した。

「大丈夫、そのうち慣れる」

「……わたくしがなにをすれば良いか、今後指示をくださると大変助かります」

納得したというよりは諦められたような気がするが、ひとまず話はまとまった。

軽く準備を整え、レン、フリー、アイリス、メイにシオンを加えた五人で出発。

昨夜も娼館に行っていたマリABELには家で寝てもらったことにした。二十階を乗り越えたメンバーが今更一階で不覚を取ることもない。

慣れた道をシオンに紹介しながらゆつくりと歩き、神殿への階段を上った。

ちなみに子狐になった少女はレンの肩の上である。しがみついているだけでいいならそれほど難しくなくいらしく、定位置で大人しくしていてくれる。

「上つて下りてがちよつと面倒なんだよな」

「レンが全員連れて飛べるようになれば上らなくてもいいんだけどね」

「さすがにそれは魔法使わないと無理だろ」

「アイリスさんが飛べるようになれば一人ずつ抱えて飛べるのでは？」

「飛行の魔法はまだまだ練習中です……」

軽口を叩きながらではあったものの、ひんやりとした階段へと足を踏み入れるとさすがにシオンも息を呑んでいた。

できるだけ安心させようと笑顔を向けつつ階段を下り、ダンジョンへと入った。

「……………」

「ああ。俺たちがこれから攻略していくことになる場所だ」

妖狐のダンジョンチャレンジ

「どうだった、シオン?」

探索自体は特に問題なく終了。

ボス以外の敵を倒し終わったところで帰還し、帰路へとつきながら尋ねた。

レンの腕に抱かれた少女は「……そうですね」と少し疲れたような声を出して、

「正直に申し上げますと、恐ろしいです。あの空間にはあまりにも濃く『死』が満ちていますから」

「……そうだな。あんなところ、本当は行かずに済む方がいいんだ」「ですが、少し安心もしました。死体が残るのではなく光となって消えていく……これだけでもかなり救われた気分です」

死体も血も最後には消える。実際のところどういう仕組みなのかはわからないものの、見た目の印象としては「浄化」と呼んでも差し支えない。

ゲームの中の敵と同じ、ただの障害だと思えば生き物を殺す罪悪感はいささか和らぐ。

シオンの感想に頷きを返して、
「帰って休もう。無理をさせて悪かったな」

「いいえ。わたくしはただ見ていただけですので」

初回である今日、レンたちはシオンに「戦うこと」を要求しなかった。

ただその場において、戦いの空気を実感してもらえればいい。その判断は間違っていないからだろう。

戦い自体も危なげなく終わっている。レンの魔法、アイリスの矢、メイの振るうメイスがあれば負ける要素はほぼ存在しない。

とはいえ、初めての体験に精神的疲労は溜まっているはずだ。

異世界に来たばかりのシオンにはゆっくりと休んでもらいたい。

「シオンちゃん、昨夜の寝心地はどうだった?」

「はい。まだ身体には慣れておりませんが、寝床はとても快適でした」

「そっかそっか、よかった。もし不便なところがあったら言ってみてね。いろいろ工夫してみるから」

「なんでしたら私を湯たんぽとして使っていたいただいても構いません」

「ああ。メイの身体は温かいからな」

銀髪の美少女が表情を変えないまま「ひなたぼつこの成果です」と胸を張ると空気が和んだ。

「一階って言っても一気に攻略するとそこそこの収入になるよな。……あ、そういえばシオンの分の報酬はどうする？ 渡しても自分じゃ使いづらいよな？」

「手の形からして細かい作業に向いていませんよね。レンさんかフリーさんに持ってもらった方がいいんじゃないでしょうか」

「そうしよっか。シオンちゃん、ちゃんと金額は記録しておくから、使いたくなったら言ってみてね？」

「あの、衣食住を提供していただいているだけでわたくしは十分——」
「だーめ。仲間なんだから、そういうところで遠慮はなし」

家に戻るとマリアベルはもう戻ってきていた。

「お帰りなさい、みなさん。ダンジョンはどうでしたか？」

「一階のゴブリンならさすがにもう雑魚ですね。アイシャさんは帰ったんですか？」

「ええ。賢者様の家を出たところで別れました。もう一度生徒たちの家を周るそうです。……身体が心配ですが、放っておけないのでしようね」

仕方ない、と言うように困ったように微笑む彼女。

「ああ、賢者様からは了承——といいますが賛成をいただきました。加えて『費用が足りないのであれば融資しても良い』と」

「本当ですか？ あのおっさん、意外と気前がいいな」

「善意だけでなく都市計画の一環という意味もあるようです。家が増えるのは街の発展を考えてもメリットになりますからね」

むしろ費用なら出すから十分な家の数を用意しろ、というスタンスらしい。

なにせよ申し出としてはありがたい。

必要になった時は遠慮なく頼らせてもらうことにする。

「じゃあ、明日にでもアイリスの家に行ってみるか。もしそれでOKが出れば大工のところに行ってほしいの費用を聞いて、デザインと家賃の額を決めて……」

「本格的に話を出すのは家賃を決めてからの方がいいでしょうが、アイシャもそれとなく希望調査を行ってくれるそうです。それも参考になるかと」

「ありがたいね。……あはは。っていうか私たち、ほんと高校生らしくないことしてるなあ」

湖を作って山への道を作って、今度は住宅街だ。

賢者が同世代の代表扱いしてくるのも仕方ないのかもしれない。まあ、原因の何割かはその賢者がぼんぼん仕事を投げってくるせいなのだが。

「さて、シオン。さつきも言ったけど後は好きなように寛いでくれ。俺たちのダンジョン探索は週二回のペースだから『また明日行こう』とかはないし、別に次でさつそくゴブリンと戦わなくてもいい」

「本の読み聞かせなど必要でしたら申し付けてください」

「なにからなにまでありがとうございます。では、お言葉に甘えさせていただきますね」

それから、シオンはリビングの端のほうに用意した寝床に移動して、なにをするでもなくぼうっとしていた。

遠慮しているのかと思いを声をかけようかとも考えたものの、しばらくすると規則正しい寝息がかすかに聞こえてきた。

「……やっぱり疲れてたんだな」

「そりゃそうだよ。あれだけいろんなことがあったんだもん」

「俺たちの時とどっちが大変だっただろうな」

「あー……比べづらいね。私たちの場合はうるさいのが近くにいたけど自分のことは自分でできたし」

自分のことを自分で「できた」と考えるか「やらないといけなかった」と考えるかは個人次第だ。

しつかり者のシオンとしては他人の世話になるしかない状況はス

トレスが溜まるかもしれない。レンたちとしては将来的に戦力になつてくれることを期待しているわけで、なにも無償で施しをしているわけではないのだが。

これからも無理をさせないように注意していこう。

夕方が近づいてきた午後の陽光に照らされながら丸まって眠る子狐を見つめ、レンたちは静かに頷きあつた。



「いくつか条件は出させてもらうことになるけど、それさえ呑んでもらえれば住宅街の建設は構わない」

翌日、レンはアイリスとシオンを連れて森へと赴いた。

初対面のシオンを紹介すると、目を輝かせたのはアイリスの妹たちだった。

「可愛いー！」

狐は現状、この森には住んでいない。

二人は見たことのないふわふわもこもこの子狐に好奇心を抑えきれなかったようで、挨拶が終わるとすぐに「一緒に遊ぼう」とシオンを連れて行ってしまった。

連れていく、と言つても小屋の外からは出ない範囲。両親の目の届くところで大人しくじやれていてくれるようなので危険はない。

シオンが「これはどうしたら」とでも言いたげに視線を送ってくるのに「よければ相手をしてやってくれ」と苦笑を返した。

なお、妹たちが印象よりもお姉さんなのは話がややこしくなるのでひとまず黙っておく。

妹たちとシオンが遊んでくれている間に事情を説明して相談をもちかけると、アイリスの両親——木こりである父とエルフである母は二、三、小声で話をした後で良好な返事をくれた。

「お父さん、条件って?」

「森を荒らさない事。森から少し離れた位置に建設する事。将来的に周囲を森で囲まれる可能性を了承する事。獣に襲われる可能性をあ

らかじめ覚悟する事。……こんなところかな。本格的に話を進める場合は細かい点を詰めた上で書面に纏めるよ」

「もし森の近くに建設するとしたらどれも当たり前前の話だと思いません。もちろん俺も、住む人にも納得させるようにします」

「ありがとう。……ああ、そうか。これも付け加えておいたほうがいいな」

レンの返答に深く頷いたうえで、アイリスの父は一つの条件を追加した。

「代表はレンさんとアイリスが務めてくれ。他の誰かが代表になってこちらの要望が通らなくなるのは困る」

アイリスと顔を見合わせ、同時に頷く。

「わかりました。俺とアイリスが代表になります」

「良かった。……なら、もう少し詳しい話もしてしまおうか」

言って、アイリスの父は一枚の地図を取り出してきた。

思ったよりもずっと精巧に作られた街の地図。わりと新しいものなのか、森から伸びる川までしっかりと描かれている。

「これってどうやって描いてるんですか？」

「レンさんのように飛べる人間が空から街を俯瞰し、その記憶を本づくりの要領でプリントするんだ。後は製図の得意な人に頼んで地図に起こしてもらえばいい」

街の中心部の測量ができていれば、サイズの比較から他の部分の大ききさもおおよそ把握できる。

地図があると具体的なイメージもしやすい。

「規模はどのくらいになる予定なのかな？」

「俺たちパーティと今年の転移者、後は娼館のお姉さんたちが住めるだけの家があればとりあえず大丈夫なので——どうしても必要なのは最大で五十人分くらい、家の数だと多くて十軒くらいになると思います」

「賢者様からも期待されているんだろう？ 来年以降の希望者もいるかもしれないし、街の人から移住希望者が出るかもしれない。倍の規模は想定しておいた方がいいだろう」

「百人分……って、街の一割に近いじゃないですか」

「うん、なかなか派手な計画だ」

とは言え、人口約千人だったのは去年の話。

あれから新たに生まれた子もいるし、新たな転移者によって三十人弱の人が増えている。この調子で人が増えることを考えると無茶な数字ではない。

「家の数は多くて二十。一軒あたりのサイズと家間の距離を決めればだいたい規模が出せる。ここは大工さんと相談した方がいいかもしれないな」

「はい。数が決まればだいたいの費用もわかると思うので相談してみます。……必要なら欠片も集めないといけませんね」

「君たちなら十分足りるんじゃないか？ かなりの数の欠片を持っているだろう？」

「二十階を攻略した時の欠片だけで百個以上あるので、確かにそうですね」

話がすんなりまとまってほっとする。

本当に大変なのはおそらくこれから——あっちこっちへ相談・確認をしては少しずつ話を進めていかないといけないのだが、出だしから頓挫しなかつただけでも収穫だ。

アイリスの妹たちも「レンさんたちが近くに住むんですか!？」と喜んでくれた。

「まだわからないけど、もし上手く行ったら前より遊びに来やすくなるかもな」

「ふふっ。……正直に言いますと、アイリスやレンさんの顔を見やすくなる、というのも了承したポイントなんですよ」

そこでアイリスの母がおっとり教えてくれる。

「女の子はどうしても家を出ていくものでしょう？ 親としては顔を見たいものなのですが、こちらから会いに行くのは気が引けてしまう……でも、近くに住んでいれば安心できますからね」

「あんまりそういう事は言わなくてもいいと思うんだが」

「あら、そうですか？」

夫からのやんわりとした苦情を妻は笑顔のままスルー。
ぶつちやけ、結婚した娘に会いに行きづらいのはぶつちぎりでも男親の方だと思うので、レンとしては少し同情してしまった。
なお、帰ってからこの話をフリーにしたところ「お父さん的にはレンこそ『自分から娘を奪う憎いやつ』だけどね」と言われ、愕然としたことを付け加えておく。



「……狐火！」

空中に生み出された線状の炎がゴブリンを襲い、小さく悲鳴を上げさせる。

威力が足りていないため、敵が怯んだのはほんの一瞬。すぐに気を取り直して攻撃を加えてこようとするものの、メイの攻撃がすかさず直撃。

ゴブリンはあつげなくその命を散らして光の粒となって消滅した。

「よし。いいぞ、シオン。その調子だ」

「ありがとうございます。ですが、その。わたくしは役に立っているのでしょうか？」

あちこちに相談しに行ったりしているうちに数日が経って、あつという間にシオンとの二回目のダンジョン探索に。

本人の希望もあって今回はシオンも攻撃に参加することになり、今のところ数回の戦闘を順調にこなしている。

攻撃も当たっているし、魔法を使うたびに経験値も入っているので大健闘なのだが、当の少女は少し不安そうな様子だ。

確かに、ぶつちやけメイなら狐火のダメージがあろうとなかろうとメイスで一撃なのだが。

「シオンちゃんは期待の新人だからねー。将来的に大活躍してもらうために少しずつ経験を積んで貰ってる感じ？」

「つまり、今のところは役に立っていないと」

「初心者のうちから大活躍されたら俺たちの立場がないだろ。この一

年間、苦勞を積み重ねてきたのはなんだったんだって」

そう言つて説得するとシオンは「そうですね」と頷いてくれて、「あの、ところで今の戦闘の後でファンファーレが聞こえたのですが、これでレベルアップをした……ということなのででしょうか？」

「わ、おめでとうございませう！」

「2レベルになりましたか。これで尻尾の数を増やせますね」

リストを隅から隅まで眺めて見ても目玉としか思えないスキル「二尾」。

パーティ全員からわくわくするような視線を受けたシオンは「では……」とたどたどしい手つきでウィンドウを操作、件のスキルを取得した。

すると、ふさふさとした尻尾が光に包まれ——数が一本増えて戻ってくる。

見た目にもボリウムが増したこともあつて「おお」と思わず感嘆。「尻尾が増えました。……でも、これは少し邪魔な気もするのですが」「慣れの問題じゃないか？ それより、次の戦闘でパワーアップした成果を見せてくれ」

「は、はい」

というわけで試してもらつたところ、見事、狐火を同時に二発飛ばすことに成功した。

二発とも同じ対象を狙うことももちろん可能。威力的に決定打にならないのは変わらないものの、二重魔法ダブルキャストと違ってパッシブスキル、二発撃つのに狐火二発分のMPしか消費しないので燃費もいい。

もちろん一発だけ撃つことも可能。

「いいな。俺も妖狐になりたくなつてきた」

最大MPを増やすスキルを持ち越せたらものすごく強そうだが、残念なことに「妖狐になるアイテム」などという都合の良いものは流通していないどころか存在しているかどうかすらも不明である。

サキユバスと説明会

「狐火!」

一二発の狐火が手近なゴブリンへと見事命中し、

ダブルキャスト「二重魔法・魔法増幅・マジックアロー」

基本7本×10倍×2発分、計140本の光の矢がブースト付きで降り注いで一階のボスパーティイ全てを消し飛ばした。

後に残るのはドロップ品と石碑、下り階段だけ。

「おー。俺もなんだかんだ強くなったな」

「いえ、その、もはや災害というか悪魔めいた強さではないでしょうか……?」

「いやいや。このくらいじゃ全然足りないぞ。二十階のボスとか今の矢の数より多かったし」

「……百鬼夜行か何かですか」

呆然と呟く子狐の背を撫で、レンは「シオンもお疲れ」と言っている。

「よく頑張ってくれたな。MPがカラになるとなんとなく疲れた感じするだろ?」

「そうですね……。ですが、これくらいはさせていただけかなければ」

さっきの狐火がシオンのMPで撃てる最後の魔法だった。

可能な限りの攻撃はしてもらったうえでボスを撃破したことになる。シオンはネイティブ世代ではないので欠片の数には影響しないはずだが、なにげに転移者を一人だけ追加して攻略し直すのは初めてである。

果たしてドロップ品はどうなるのか。

ドロップ品を回収するフリーとアイリスをしばし待って、

「うん、特に種類も数も変わらないねー」

「このダンジョン、優しいのか厳しいのかわかりませんね……」

ボスのレアドロップをたくさん回収する裏技、みたいなのは頑張れば使えそうである。

さすがに初心者の引率もシオンで打ち止めじゃないかと思いつつ、

レンは頷いて言った。

「さて。それじゃ今日のところは帰るか」



「あ、お帰りなさい。怪我は……なさそうね、よかった」

家に帰ると箒を手にした大人の女性がにっこりと微笑んで出迎えてくれる。

「ただいま戻りました、先生」

「もう、先生は止めてくれてもいいのに。こっちでは先生らしいことなんてほとんどしてないんだから」

シオンに挨拶をされた彼女——アイシャはそう言って苦笑する。

生徒たちの初期対応を終えた彼女は現在、マリアベルと同じ部屋で生活している。家の問題が進展するまでの仮住まいという形だが、住まわせてもらう代わりにと不在の間の家事を買って出てくれており、生活面でもかなり助かっている。

（私室は今まで一人一部屋を使っていたが、もともと二人用の部屋なのでベッドは二つずつ置いてある）

シオンには普通に話しているのにレンたちだけ敬語なのも変な感じがする、ということと話し方は普通にしてもらった。

問題は、

「アイシャさん、本当にもっと休んでくれていいんですよ？」

「大丈夫。教師なんて残業当たり前の仕事なんだから。むしろ日本にいた頃より楽なくらい」

マリアベルに負けず劣らずの働き者だということか。

いや、適度にだらけることを知っているマリアベルよりもひどいかもしれない。今日だって生徒たちのところへ顔を出したうえで掃除と洗濯をしてくれており、ぼーっとしたり仮眠をとる時間なんてほとんどなかったはずである。

言っても聞いてくれないので、レンにできるのはせめて「ヒール」でHPを回復させてやることくらいだ。

恋人と一緒にというのも精神的にはいい効果を挙げているようだが、夜型のマリABELとは生活リズムが合わなくて苦労している様子。

「生徒さんたちの様子はどうでしたか？」

ひとまず荷物を置いて適宜着替えも済ませた後、アイシャから首尾を教えてもらう。

すると彼女はこくと頷いた後、困ったような表情を浮かべた。

「生活には少しずつ慣れていくみたい。分担して家事を片付けられるようになってきたし、異世界にきた事実も呑みめてきてる。ただ、住宅街への反応はあまり良くないかも」

「そうなんですか？」

少し意外な気もする。落ち着いた場所に女性だけの場所を作れば喜んでくれると思ったのだが。

「ええ。……その、隠しても仕方ないことだから率直に言うけれど、レンさんのことが信用できないという声がいくつかあるの」

「俺ですか」

「サキユバスって要するに悪魔みたいなものでしょう？　しかも元男性ということまで警戒されているみたい」

「あー……」

シオンやアイシャのように気にしない女性もいるが、気にする人がいるのも当然だ。

「この時代だし、頑なな信仰を持っている子なんてほとんどいないんだけどね。それでも『悪魔は信用できない』っていう考えは根強いみたい」

「まあ、逆にマンガとかゲームでも人を唆すイメージついていますしね」
怪しいやつを疑ってかかっておくのは自衛の基本だ。

一概に間違っているとは言いがたい。

「じゃあ、お金を稼ぐ目途の方はどうですか？」

「最初にもらったお金も厳しくなってくる頃だから、多くの子が働き口を見つけようという気にはなってきてる。ただ、希望職種の偏りがひどくて割り振るのが大変そう」

希望が多いのは服飾系や調理系。

学校でも嗜みとして教えているし、趣味として好んでいる生徒も多い。血なまぐさくなく心得のある分野なので人気が集まる。

ただ、この世界の職人は専用クラスに就いていてスキルで高速・大量生産できることが多いので、それほど多くの弟子・部下は必要ない。余った分は服飾に必要な綿花の栽培や食料にも革にもなる動物の飼育にまわってもらったり、別の仕事を選んでもらうしかない。そうになると人気職業に誰が就くかは公平に決めないと不満が出る。

「では、面接ですか？」

「それができればいいけど、むしろ必要なのは実技試験でしょう？採用までに時間がかかってしまうから、少人数を仮採用して実際に働いてもらって、その中から本採用を決める方法にしようって」

仮採用の枠は本採用の枠よりは多めに設ける。

仮採用中も少しだがバイト代を日割りで出すことにして生徒たちの生活を助ける。

「そのうえで、どこに応募するかの優先順位は抽選」

「じゃあ、みんないっぺんにやった方がいいですよ？　そうするともしかして……」

「うん。明日の会合でそれも決めさせてもらうつもり」

明日、レンたちは今年の転移者と顔合わせをすることになっている。

住宅街建設の説明会も兼ねた集まりだ。少女たちはあまり街には顔を出していないらしく、レンが顔を見たのはほんの数人、その少女たちも話しかけてはくれなかつたので未だに話をしたことがあるのはシオン一人だけである。

とりあえずざっくりと——本当にざっくりとしたプランは立ったので、今度は当事者たちにそれを提示して話し合いや希望人数調査を行うつもりだ。

シオンからはダンジョン探索の感想も語ってもらう。

家賃の見積もりと合わせて説明すれば「じゃあダンジョン行こうかな」という生徒も出てくるかもしれない。

「でもさ。引越したいって子があんまりいないならあんまり私たち

が頑張る必要もないよね？」

ひとまず方針がまとまったところで、フリーがどこかつまらなそうに言った。

「説明会、反対か？」

「そうじゃないけど、レンに意地悪言う子に優しくするのは反対。嫌ならバイトで稼ぎながらギリギリの生活すれば？　って感じ」

これにはアイリスも「そうですね」と頷いて、

「狩人見習いを希望する方がいれば我が家としても歓迎なんですけど……今のところはいないようですね。お肉もきのこも食べられるとても良い職業なのに」

当然のように苦勞してきた側としては「なに甘えたこと言ってるの？」という感じらしい。

じゃあメイはどうか、と、視線を向けてみると、

「パンがないなら石を食べればいいのでは？」

「うん、お前はいつも通りだな」

石を食べて生きられるのはメイたちゴーレムだけである。



会合の舞台となったのは街の中心部付近にある集会所だ。

だいたいの時間は指定したものの、異世界には時計がない。念のため早めに会場入りしたレンたちは、既に到着していたグループから驚きの声を上げられた。

「悪魔」

「悪魔です」

「……いや、俺は悪魔じゃなくてサキュバスなんだ」

後から来たグループもだいたい同じ反応。

何度も同じ訂正をするのは少々面倒で、ゆっくり来れば良かったかもしれない……と若干後悔した。

それはそれとして。

集まった少女たちはみな育ちの良さそうな雰囲気を感じていた。

戸惑いは感じられるものの粗暴な振る舞いはないし、席にもきちんとしてくれる。何人かはわざわざ制服を纏ってさえいた。

全員の視線が集まる中、レンは前に立って、

「今日は集まってくれてありがとう。俺はレン。今からだいたい一年前にここへ召喚されてきた」

自分と仲間たちの自己紹介の後、本題を切り出す。

「君たちが困っているって聞いて、俺たちは森の傍に新しい住宅街を作ろうと考えた。女しか住めない、今の街から離れた静かな街だ」

住宅の数や家賃など大まかな想定も話した。家賃はなるべく安い価格に設定し、移りやすいようにしてある。

説明を終えた後で「どうかな？」と尋ねると、一瞬場が静かになった後、

「やっぱり納得できません」

一人が硬い表情で意見を口にした。

「サキュバスというのはいやらしい行為をする悪魔でしょう？ そのうえ、この人は元男性なんですよね？ そんな人に『女だけの街』を作らせるなんて」

「不安なのはわかってる。でも、俺には変なことをする気なんてない。この通り今は女だし、サキュバスって言っても——」

「そうです」

「信用できません」

説明しようとした声はお嬢様たちの声にかき消されてしまう。

久しぶりに全員集まったことで日本にいた頃の感覚が戻ってきたのと共に団結することで意見が言いやすくなったのかもしれない。

「そもそも、こんな世界には来たくなかった」

「うちに帰りたい」

一人が言えば別の一人が言い、騒ぎは少しずつ大きくなっていく。

「別に家を作ってくれたからって」

「普通に暮らしていければよかったのに」

どうしたものかと困り、多少強引にでも流れを引き戻そうかと思つた時、

「ねえ、ちょっと黙ってもらえる?」

隣に立ったフリーが低く冷たい声で集団に告げた。

一瞬で静かになるお嬢様たち。

最初に声を上げた少女が「な、なにを……」と口にするもフリーは退かず、

「愚痴は後にしてくれないかな? 今はレンが街を作ったら引越したいか引越したくないかの希望調査。それから意見や要望を言ってもらおう時間」

「だ、だから、この人は信用できないと」

「うん。つまりレンにどうして欲しいってこと?」

めちやくちや喧嘩腰である。慌てて「お、おいフリー」と囁いたが反応なし。

「なら、責任者を変えてください」

「そっか。森の傍に建てるのが許可されたのはレンが責任者だからなんだ。別の人になったら場所は選び直しだね。これからの開発で街に呑み込まれるかもしれないけど仕方ないか。あと、私たちがいったん肩代わりするはずだった費用も出せないから、新しい責任者さんに交渉して」

「ど、どうしてそうなるんですか。その人を下ろせと言っただけですよね?」

「え? だってうちのリーダーが気に入らないなら私たちが手伝う義理ないし」

「……そんな」

少女は絶句したまま固まってしまった。

レンはフリーの肩に手を乗せ、一歩下がらせた。

「悪い。憎まれ役を押し付けて」

「……なに言ってるの。私が我慢できなくなっただけ」

視線を向け直すと、件の少女はきつ、と睨み返してくる。

「なんですか?」

「いや。フリーの言う通りだと思ってさ」

「え……?」

「別に住みたくないなら住まなくてもいい。それならそれで俺たちは必要な分だけ——二、三軒分の家を建てるだけだ」

もともと、レンの容姿の関係で街から離れたところに家が欲しかった。

仲間が増えてきたので引越すのにもちようどいい。森の近くならアイリスの家にも寄りやすくしてさらにお得だ。

これはぜんぶレンたちの都合である。

「もちろん住みたいっていう人は歓迎するし、『もつといいアイデアがある』っていうならぜひ言ってくれ。でも、なにもせずに文句だけ言うつもりは奴はどうでもいい。俺たちは今でも生活には困ってない。むしろ少しくらい贅沢する余裕があるんだ」

「……なにそれ。自分たちさえ良ければいいってこと?」

「ああ。俺は自分と仲間、それから仲のいい人さえ幸せならそれで十分だ。全員を助けられるほどの余裕なんてない。まして、敵なんて一番どうでもいい」

「っ」

少女は唇を震わせて、

「なに、敵って。同じ人間でしょ?」

「俺のことを悪魔だと思ってるんじゃないやなかったのか? シオンが狐になるところを見るのに、俺が元人間だって信じられないんだろ? 都合のいい時だけ人間扱いする気かよ」

「……ひどい」

勢いよく席を立った少女はそのまま集会場から出ていく。同じグループから二人が後を追いかけた。

後には静寂だけが残る。

怖がらせたうえに嫌われてしまったかもしれない。まあ、それならそれで仕方ないかと思いつつ、レンは気を取り直して続けた。

「もう一つ話があるんだ。少し前と昨日の二回、シオンと一緒にダンジョンへ行ってきた。その時の感想を君たちに聞いてほしい」

加えて街での一般的な仕事をした場合の初期賃金と、ダンジョンの一階を二度に分けて探索した場合の収入の比較。

結局、ほとんど質疑応答もできなかったものの、おそらく聞く耳だけは持ってもらえた。

これでよかったのだと思う。

無理強いする必要はない。選択肢を増やしてやることさえできれば十分役目は果たしているはずだ。

そして、会合も少しは効果があったのか。

翌日、レンたちの家には何人かの少女が「ダンジョン探索のアドバイスをして欲しい」とやってきた。

新人後輩。パーティとシオンの成長

「それで、どうだった？ あの子たちは頑張ってた？」

「ああ。素直だし一生懸命ないい子たちだったよ」

レンたちのところへ「アドバイスが欲しい」とやってきた少女はぜんぶで四人だった。

アイシヤが言っていた見込みのありそうな子たちだ。

ぴかぴかの装備（祝福と同時に与えられたもの）を纏った彼女たちはやる気十分らしく、できれば実地での指導を希望。

レンは少し考えた末、メイと二人で少女たちを引率した。

罨の可能性を全く考えなかったわけではない。

ただ、相手はレベル1か2の素人。やろうと思えばレン一人でもあつさり全滅させられる。

身体が丈夫なうえに冷静なメイを連れて行けば奇策もほぼ封じられるので危険はほぼない。

そして結果的にはなにごともなく話が進んだ。

パーティ構成は聖騎士^{バラティン}、退魔師^{エクソシスト}、弓使い^{アーチャー}、聖紋使い^{クレストマスター}。

四人中三人が聖職者系。

聖紋使いは最大MPを消費して自分・他者に半永久的な強化を与えるという特殊なクラス。そのため「回復を含む魔法を使えるのが前衛だけ」になる。

ただ、意外とバランスは悪くない。戦闘中に回復をするというよりは速攻で戦いを終わらせてゆっくり傷を癒すスタイルが合っている。

『私、中学は外部の共学で、弓道部だったんです。高校ではアーチェリーを』

弓使いの女の子は少し照れくさそうにそう語っていた。

他の子たちも「見た目は少し怖いですけど……」と言いつつ、レンと普通に話をしてくれた。

『……が聖書の記述と地続きの世界だとは思えません。そのうえ、本物の悪魔ではないというのなら怖がらなくてもいいと思いました』

一緒に来てくれたメイが『ご主人様が乱暴をしようとしたら殴って

でも止めますので』と真顔で言ったのも効果があつたかもしれない。丁寧の説明をしながらゆっくりとダンジョンを進み、戦闘のたびに軽い反省会を行う。

危ない場面ではレンが防御魔法を飛ばして保護。

勝てるからと言って油断してはいけないと言い聞かせながら、メンバーのMPが底を尽きかけた頃に探索を終了した。一階全体の半分は残念ながら回れなかったものの、今回の経験値でレベルアップもあつたので次はもつとスムーズに探索をこなせるだろう。

週二で同じだけの収入があれば週五で働くより大きな稼ぎになる。

レンの話を聞いたフリーリは「そっかそっか」と頷いて、

「メイちゃん。レンはちゃんと真面目にやってた?」

「もちろんです。監視は怠っていません」

「いや、信用ないな俺」

「だって。口説くならちゃんと口説かないと可哀想でしょ? 中途半端はだめだよ。レンはただでさええっちなんだから」

普通にしているだけでえっちらしい。

「そんなにエロイか?」

胸の下で腕組みしつつ首を傾げると、フリーリが真顔で「うん」と答えた。

「ね、アイリスちゃん?」

「は、はい。その、少し」

「私は非常にいやらしいと思います」

「……わたくしも、レンさまの服装は煽情的かと。いえ、背中が開くのは仕方のないことなのですが」

ついでにアイシャからも「あの子が手を出したくなるのもわかるわ」と太鼓判を押された。

形勢不利とみたレンはこほんと咳ばらいをして、

「あの子たちはこれからもダンジョンに挑戦したいってさ」

「それは良かった。……でも、家がバラバラだと不都合がありそうね」

「ああ、そう思って引越しの手配をしました」

女子は群れる生き物だ。

レンたちのパーティーは癖の強い人間が集まっているうえに境遇もバラバラなので「暇な時は各自好きなことをする」のが当たり前だが、同じタイミングで転移してきた仲間が一人だけ別行動を取っていれば「あの子感じ悪くない？」となってもおかしくない。

ならいつそ、最初からダンジョン攻略組だけで一緒に住んでしまっただ方がいい。

幸い家はまだまだ空いているので、賢者に話をしたら一発でもう一軒貸してくれた。

「ついでに街ができれば引越しもしたいってさ」

「ほんと？ やったね。なら、予定通りの大ききで作ってもいいかもね」

「だな」

たった四人、家の数としては一軒分が増えただけだが、当初のタワーゲットから見向きもされない状況だけは避けることができた。

賢者からもそれとなく「良くやった」とお褒めの言葉をもらったので働きとしては十分だろう。

シオン以外にダンジョンへ潜る者もでてきたので、後はなるようになる。

「良かったな、シオン。これならたぶん無理に頼られたりしないぞ」

「はい。……本当にありがとうございます、みなさま」

泣き声というか鳴き声というか、不思議な感じで小さく音を立てながら、シオンは感情を堪えるような調子で言った。

制御しきれなかった耳や尻尾が揺れており可愛らしい。

なんとなく手を伸ばして抱き上げると本人は「きやつ!？」と可愛らしい悲鳴。フリーたちからは「ずるい」と文句を言われた。

「レンさん、シオンさんまで口説く気ですか？」

「口説くっていうか、シオンは抱き心地がいいからな。アイリスだって好きだろ、シオンの毛並み」

「す、好きですけど……なおさらずるいですー!」

わいわいやっている、腕の中から「ペット扱いですね」と苦情がきた。

「悪い、つい。……人間扱いされないとか嫌だよな」

「いえ、その。嫌と言えば嫌ですが、どちらかというところ『恥ずかしい』が強いかもしれません。この歳になると家族相手でも触れ合う機会はなかなかありませんから」

「ああ……抱き合うとかけっこう恥ずかしいもんな」

そういう意味ではこの世界はゆるくて楽かもしれない。

元いた日本ほど社会通念がガチガチではないので多少のスキンシップは許される。

文明の発展は人の生活を豊かにするが、人と人との繋がりとという意味では便利になり過ぎない方がいいのかもしれない。

「シオンも寂しくなったら好きに抱きついてきていいんだぞ？」

「いえ、それはさすがに……」

と、言いつつ、子狐になった少女は無自覚にか、すりすりと頭を擦りつけてきた。



初心者をダンジョンへ引率した二日後には再び仲間たちとダンジョンへ。

「ほんとこの辺は懐かしいよねー」

危険が生まれる前に排除するのが仕事で、一見楽しんでいるように見える盗賊のフリーが出てきた敵三体を次々急所狙いで沈めて見せると、シオンがレンの肩に乗ったまま「仕事人かなにかですか……？」と呟いた。

「うん。あのさ、シオンって時代劇とか戦国時代とか好きか？」

「？ 人並みだと思いますけれど、なぜでしょうか？」

「いや、聞いてみただけ」

無意識に和風な例えが出てくるあたり『種族・妖狐』は出るべくして出たのではないだろうか？

「ともかく。このまま行けるところまで行ってみるか」

「はいー」

しっかりとしたシオンの返事を聞きつつ、レンは魔力過剰蓄積マナストレージのスキルを発動させた。

「あの、レンさま、なにを?」

「いや。肩にシオンが乗ってるだろ? MPがちよつとずつ回復してもつたないから減らしておこうかと」

「ここにいるとなんだか心地いいのはそういうことだったのですか……!?!」

エナジードレインさまさままである。

まあ、いま本当にMPが必要なのはレンではなくシオンのほうなのだ。だが。

妖狐のスペック上、なにかで補ってやらないと魔法を撃てる回数があまりに心許ない。

「シオンちゃん、たしかまたレベル上がったんだよね?」

「ええ、レベル3になりました。スキルポイントはまだ取ってありませんが……」

「難しいな。欲しいものがいろいろありすぎる」

「そうなのです……」

なまじ尻尾の数Ⅱ魔法の同時発動数という目玉スキルがある分、他にどんなスキルを取るかがとても悩ましい。思わず人のスキルだというのにあれこれ考えてしまうくらいだ。

魔法攻撃力を上げて殲滅力を高めるのもいいし、少しでも最大MPを上げる手もある。

そしてもちろん、二尾のスキル取得と同時に現れた「三尾」のスキルを取得する手も。

「レベル10で九発の狐火発射などとても夢があるのでは」

「さすがにそれならボスも死ぬな、たぶん」

「わたくしのMPも勢いよく減りそうなのですが」

普通、MPは減ったら自然回復に任せるしかない。レンのようにあれこれ回復手段がある方がおかしい。

「んー。でも、せっかくだから長所を伸ばした方がいい気がするな」

「レンさんも長所を伸ばした結果ですもんね」

「そうなるよ、やはり尻尾の数を増やす方向でしようか?」

「魔法攻撃力を上げるのもいいんじゃない?」

攻撃力が上がれば少ない数の魔法で敵を倒せるようになる。

結果的にMPの節約になるので最大MPを上げるより効率がいいかもしれない。

「MP量が欲しいなら俺みたいに魔操師マナコンダクターになるって手もあるぞ」

「あ、そういうえば転職石余ってたっけ。使っちゃう、シオンちゃん?」

「1ポイント分のスキルに悩んでいるのに、職業がここから増えるのですか……!?!」

「でも、どうせなら早めに転職したほうがお得だよ。ね、レン?」

「相乗効果でレベルアップが早くなることもあるからな」

まあ、レンの場合は特殊な例の可能性が(以下略)。

ともあれ、シオンは少し考えてから「では、検討してみるだけでも」と答えた。

転職石を渡してリストを確認してもらうと、けっこうな数のクラスが表示される。この場にいる面々——アイリスの弓使いなどもその中には含まれていた。

ダンジョンの中だということのについていみんなで覗き込んでしまう。

「ですが、手を使う職業は相性が良くありませんね?」

「あー、人間の武器は持てないもんね」

そうなるよと多くの前衛系のクラスはもちろん、弓使いなどの後衛武器使いもシオンには合わない。

物理戦闘がしたいならマリアベルの蹴術士のような素手戦闘系クラスか。

妖狐のスキルリストには鋭い爪を生やすスキルもあったので、MPを使いたくない時は接近戦をするというのもアリだろう。

「シオンはどうしたい?」

「そうですね……。やはり、自分でも敵を倒せるようになりたいです。となると、素直に魔法の威力を上げるのが良いかと」

「うん、いいんじゃない?」

「だな」

もちろんレンたちに異論はない。

このままシオンがダンジョンに付き合ってくれれば十階でもう一個転職石が手に入るわけだし、使ってもらうのはまったく問題ない。方針を定めたいうえでさらにリストを眺めることしばし、シオンはひとつのクラス名に手を伸ばした。

『仙術士』

見たことのないクラスだ。

概要を確認してみたところ、気の力を操ることできざまなことを可能にする——らしい。

魔法自体よりも魔法の行使をサポートするタイプ、という意味では魔操師にも近いが、属性魔法の攻撃力を上げるなどアプローチの仕方は異なるようだ。

「それに見てみるか？」

「心惹かれるものはあります。……ですが、簡単に決めてしまっているものでしょうか？」

「いいんじゃないか？ 効率だけで決めるのも味気ないし、気に入ったクラスの方が愛着も湧くかもしれない。俺も最後はノリで決めただ」

「レンさまも、ですか？」

「信じられないか？」

シオンはしばしレンを見つめたあと「いえ」と首を振った。

「仙術士にしようと思います」

「ああ、いいと思う」

もちろん誰も反対しない。

可愛い小さな手がウィンドウに触れ、決定ボタンを押す。シオンに「仙術士」クラスが追加され、新たなスキルポイントが1追加された。これはクラススキル用だ。

序盤のスキルポイントは気軽に使ってしまったても問題ない。どうしても納得いかないならリセットストーンもある。

シオンは少し考えたうえで「三尾」と「属性魔法攻撃力UP」のスキルを取得した。

後者は単に魔法攻撃力を上げるスキルより効果が高い。妖狐には
manaボルトのような無属性魔法がなさそうなのでちよつどよかった。

「なんだか強くなったような気がします」

「うん、ぜったい強くなったよ、シオンちゃん」

試しに次の戦闘で三重の狐火を披露してもらったところ、まだ一人
でゴ布林撃破には至らなかったものの、レンがmanaボルトを一発撃
ちこめばそれで一匹が落ちた。

「やりました……！」

「おめでとうございます、シオンさん」

「お手柄ですね」

残りのゴ布林はメイが叩き潰したわけだが、さすがのゴーレム娘
もここで自分を誇ったりはしない。喜ぶシオンをみんなで囲んで
祝った。

勢いのまま二階のボスまで倒し、帰ってからは詳しいスキルの検
証。

例によつてみんなでじーつと眺めてみたところ、なんとMP回復ス
キルを発見した。「え？」と驚きの声を上げてからあらためてスキル
名を見て、また別の意味で驚愕。

『房中術』

皆まで言わずとも使い方がわかってしまうスキル名である。

狐の姿では表情の変化はわかりづらいものの、シオンは声までも上
ずらせて「このスキルは取りませんので！」と宣言した。

乙女として、こんなスキル目当てでクラスを選んだと思われては不
本意らしい。

「まあね……。これをダンジョンで使うとかいくらレンでも無理で
しょ」

「おいフリー。確かに無理だけど、そこで俺を引き合いに出すな」

いろいろ進行中

「森の近くに家を建ててるなら、一緒に薬草園を作ってもいいかな?」
「私は果物の加工をしてるんだけど、工房をそっちに移してもいい?」
新しい住宅街建設の話は街にも広がり、街の中からも「移住したい」という声がいくつか挙がりはじめた。

森に近いという点を一部の職業の人たちが評価してくれたのだ。

「男子禁制ってひどくねえか? 森に近いなら木材の加工も捗るつてのに」

「川と繋げたら製紙にももってこいなんだが」

男性の職人からも「女子専用じゃなければ工房を作るのに」という声がいくつか。ただまあ、こればかりは当初の目的から外れてしまうので譲歩できない。お嬢様たちのサポートだけでなく、レンが男たちと距離を取ることも叶わなくなってしまう。

「でも、薬とか食べ物とかが近くで手に入ると便利だよな」

「森で好き勝手に狩りをされるのは困ってますからね」

家だけでなく工房や店があればより街っぽくなる。

「ただ、上手く行きすぎて男が買いに来たりすると本末転倒なんだよな。どうするか」

「そういった場所は街の外周あるいは入り口付近に限定して、それより奥は立ち入り禁止としてはいかがでしょうか?」

「メイさまはこういう時に頼りになるのですね」

それなりに居住希望者も集まってきたので話をより進めていくことにする。

大工に依頼するために具体的な家の見取り図を作成する段階だ。

着手を始める前の今なら各種要望を盛り込み放題。初期の参加メンバーだけの特権である。もちろんレンたち自身の家はいちばん凝ったものを用意させてもらおう。

「部屋は俺、フーリ、アイリス、メイ、シオン専用のを用意するだろ。あと客間も二つくらい作っておくか」

「キッチンは今より広くしたいな。またみんなで料理することとか

あるとちよつと狭いんだよね」

「可能であれば書庫が欲しいです。本棚ひとつでは収まりきらなくなりそうですね」

「食糧庫も広いといいですね。なるべくいろいろな食材を長く保存しておけるように」

希望を募るとそれぞれのメンバーがいろいろとアイデアを出してくれた。

あまりにも変なものは却下するつもりだったが、意外と実用的なものが多かったためほとんどは採用である。

「シオンはなにかないか？ 遠慮なく言っていいたぞ」

「そうそう。もし気になるならこれから活躍してくれればいいんだから」

そう言うのと、静かに話を聞いていた少女は狐耳をぴこぴこ動かして少し恥ずかしそうに答えた。

「でしたら、ベランダかなにかがあると……。その、この身体になつてからお昼寝が無性に恋しいもので」

可愛い。

動物の可愛さというのは破壊力がものすごい。シオンの要望は満場一致で採用され、少女がひなたぼっこできるスペースが用意されることとなった。

「マリアさんはアイシャさんと一緒に別の家の方がいいですよね？」

「ええ。少し名残惜しいですが、みなさんと同じ家ですとアイシャが遠慮してしまいそうですね。と言つても近所に住むわけですから、遊びに行かせてくださいね」

「もちろん。むしろご飯だけ食べに来てくれてもいいですよ？ ね、

レン？」

「ああ、是非」

相談の結果、ダンジョン攻略にもこれまで通り参加してくれることに。

と言つてもしばらくはシオンと一緒に浅い階の攻略なので、無事再び二十一階にたどり着いてからパーティを再結成することにした。

新しい生活の準備でいろいろとやることもあるだろうからちよ
どいい。

「新しい家ができるまでは一緒に娼館へ住むという手もあったのです
が、さすがに外間が悪いのですよね」

「生徒さんたちも訪ねづらくなつてしまいますよね……」

「ええ。そろそろ本格的に経営から離れるべきかもしれません」

「そうするとオーナーは誰になるんですか？」

「経験豊富な娼婦の中から任命することになるでしょう。責任者に
なつたら客を取つてはいけない、ということもありませんし」

「まだまだ働きたいという子なら働けばいいし、ちよどいいから一
線を退きたいというのなら経営に専念してもらるので一石二鳥だ。」

「そういえば、引退後の住まいという話もありましたが、娼婦のみな
さんは引退後になにをされるのでしょうか？」

「一概にこう、ということはないかと。十分な資金を貯めておいての
んびりと暮らしてもいいですし、別の仕事を始めることもできます。
中にはダンジョンへ挑む子もいるかもしれませぬ」

「なるほど。人それぞれ、か」

この異世界自体、まだまだ新しい場所だ。

住人一人一人の生活が世界の在り方を少しずつ定めていく。

日本と違つて不便なところではあるものの、自分たちの働きがダイ
レクトに反映されるのは少し楽しいとも思うレンだった。



女だけの区画づくりがほぼ正式決定したことで、大工や石工、家具
職人などは材料の加工・備蓄をスタートさせた。

家の見取り図が出来上がるまでには少し時間がかかるので着工は
まだできないものの、職人たちにとつてもいくつもの家を一気に建て
るのはなかなかあることではない。早めに準備をしておくことに越
したことはない。

代金については娼館から借りて何割かを前金として支払った。

大金なので借入書を書いたのだが、

「まさかこの歳で借金をすることになるとはな……」

「気にしなくて大丈夫だってば、レン。生活に困ったんじゃないんだから」

実際、事業のために銀行から融資を受けたようなものなので個人の借金とは少し違う。

それでも実際に書面と向き合うと気持ちは引き締まるもので、

「これからも頑張らないとな」

「いざとなったら自分たちでお金を返せるようにならないとですね……!」

「そうだな」

事業の副責任者のような立場になったアイリスも張り切っている。

契約に立ち会ったマリアベルは微笑んで、

「いざという時が来たとしても、レンさんならばお一人でも稼げるかと」

恐ろしい仮定の話をしてくれた。それはまあ、サキユバスのレンなら娼館でも売れっ子になれそうだが……是非とも遠慮したい。

「もっとレベルを上げてモンスターをたくさん狩らないとな」

あれから後輩たちの指導も定期的に行っている。

危ないから自分たちだけでは行かないように、と指示を出したところ、レンのところへ「一緒に行ってください」と頻繁に声がかかるようになったのだ。

レンとしても一度関わった以上、途中で放り出すよりはいい。

手出し口出しはできるだけ少なく。必要なアドバイスはするものの過保護になりすぎないように気をつけながら、少女たちの攻略に同行した。

さすがにもう罠の可能性はないだろうと思ったが、それでもメイは「念のためです」とついてきてくれた。

表情が変わらないわりに愛嬌のある彼女は少女たちともあっさりと打ち解け、なんとというか動物園のパンダとかよく顔を見る野良猫とかそんな感じのポジションを確立した。

もちろん、レンも別に疎外感を覚えるとかそんなことはない。

適度に雑談を交わしつつ、戦闘では「ドレインボルト」で役に立っているのかいなのかわからない支援をしつつMPを回復させ、ついでに自分のMP最大値を増やしたりしていた。

結果、みごと三回の探索で一階の攻略に成功。

初めて手に入れる世界の欠片に少女たちは飛び上がりそうなほど喜んでいた。

「これがたくさんあれば土地が作れるんですよね？」

「そうだけど、けっこう高く売れるぞ。生活費が欲しいなら売るのがオススメかな」

「へー。レンさんたちは売ったんですか？」

「あー。最初の方はな。途中からはとっておいて必要な時にぱーっと使うようにした」

レンたちのような使い方は少数派である。

土地を必要とするのは普通、生産者や店をやる人。なので欲しい人に提供して代わりにお金をもらう方が一般的なのである。

なんだかんだ必要になったので結果オーライというか、そうやって自分で使っているから次々に使い道が降ってくるというか。

「必ずこうしなくちゃいけない、つてもものじゃない。無駄にするのは良くないけど、そうじゃないなら好きなように使えばいいんじゃないか？」

「そういうことなら……」

「使い道も思いつきませんし、売ってしまいましょうか？」

一階をクリアした少女たちにはなにも知らない素人は卒業である。

まだまだ初心者ではあるものの、ダンジョンの歩き方はわかってきたと言っている。ここから一歩ずつ手探りで進んで脱・初心者をして欲しいものだ。

ともあれ、もうしばらくレンの指導は続けることになる。

本人達から「ついてきて欲しい」と希望があったし、危なっかしい状態で一人立ちさせて全滅されたら目も当てられない。

「ドロップ品を売ればそれなりのお金にはなるし、あんまり焦らず攻

略するのがいいかもな。別にクリアした階をもう一回攻略してもいいんだし、攻略にかける回数が増えるほどレベルが上がって戦いも楽になる」

早く最前線に到達して欲しい、と賢者は言うかもしれないが、あのおっさんのことは放っておけばいいのである。

神殿に戻るために階段を進みながら言うと、少女たちは神妙に頷いてから、

「レンさんって変わってますよね?」

「……え。俺、変わってるか?」

「はい、とつても」

「見た目は綺麗な女の人のなのに、話し方は男性ですし」

元男だから当然なのだが、

「……そんなに変か?」

「はい、とつても」

もう一度確認したらもう一度念を押された。

さすがにそこまで言われるとへこむ。前に別の子たちから言われていたのもあって、帰ってからつい愚痴を吐いてしまった。

すると、

「私はレンさんの話し方好きですけど……」

「そろそろ諦めて喋り方、変えた方がいいかもね」

「マジか」

自分でも「そうかもな」と思ってしまうので余計にへこんだ。

「ご主人様。難しく考えずともよいのでは? 口調を変えたところで死ぬわけではありません」

「つても、習慣になってるからな。変えろって言われてもなかなか難しいぞ」

「年上の人には敬語使ってるじゃない。あれとおんなじだよ。立場と場面に合った話し方をしろってこと」

ふむ、と、レンは椅子の上のクッションの上に乗ったシオンを見てから、

「では、フリーリの意見を採用して、いったん敬語で話すようにしてみま

しょうか」

「うん、ごめんレン。めちやくちや違和感あるから敬語は勘弁して」

「うん、俺も言ってる違和感しかなかった」

「やっぱり話し方を変えるのはなかなか難しい。」

「まずは簡単なところから練習したらどうですか？ 一人称を変えてみるとか」

「一人称か。わたし、って言えばいいのか？ ……うわ、違和感凄いな」

「そのうち慣れるってば。ほら、練習」

「わたし。わたし。」

しばらく「わたしと繰り返すマシン」と化していたらアイシヤやマリアベルにも見られて「なにこの変な生き物」みたいな顔をされた。がつくりと肩を落としたレンを見てマリアベルはくすりと笑って、「フリーさん。自分が女性だということをレンさんが自覚できる状態で練習していただいてはどうでしょう？」

「え、それって…もしかしてそういうこと？」

「ええ、そういうことです」

「なんだその不安になる会話」

ジト目になったレンに、フリーは「いいからいいから」と答えてアイリスに耳うち。

「アイリスちゃんも手伝ってくれる？」

「え、そんな…でも、レンさんのためなら…」

「あの、レンさまになにをなさるのですか…？」

「シオンさんは知らない方がいいかと。夜は私と一緒に眠りましょう」

「は、はい」

夜つてなに、という顔をしつつも頷くシオン。それを見てレンもだいたい話の流れを察した。

予想通り、その日の夜、レンのところにはフリーとアイリスの二人がやってきた。

「はい、レン。大人しくしてね」

「レンさん、訓練のためなので安心して下さいね」

「待て、なんだそのロープ!? 安心できる要素がぜんぜんないぞ!」

レベルは高くても魔法職。ちゃんとした前衛ではないにせよ武器を扱うクラスに二人がかりで来られると(魔法を使ってガチで反撃でもしない限り)なす術はなく、レンはあっさりと服を脱がされてベッドに縛り付けられてしまった。

両サイドには少し恥ずかしそうにしつつも少しわくわくした様子の少女二人。

ある意味絶体絶命である。

「さ、レン。特訓だよ」

「わたし、って言えるようになってくださいね、レンさん」

「いや、これ縛る必要あったか?」

「縛らないと攻守逆転されちゃうじゃない」

特訓は痛くも苦しくもなかった。

というかむしろ心地いいものだったものの、だからこそ我慢も抵抗もできなかった。

マリアベルのアドバイス通り「女の子の自覚」をたっぷりとさせられながら繰り返し「わたし」と言い続けた結果、新しい一人称に一夜にしてだいぶ慣れることができたレンだった。

なお、フリーとアイリスには次の機会にそれぞれたつぷりとお返しをした。

ひとまずの決着

「なんか最近よく来るな、おっさん」

「なに。今回は相談ではない、ただの報告だ」

「報告？」

「ああ。一応耳に入れておいた方がいいだろう、と思つてな」

「またもレンたちの家へとやってきた賢者は、出された茶を飲みつつわかるようなわからないようなことを言った。」

「向かい合うように座つたレンは眉をひそめて、

「なにかあつたのか？」

「ああ。新規転移者の一人が仲間を連れて陳情に来た。君の横暴が目
に余る、とな」

「……ひよつとしてあの子か？」

「おそらく想像している通りだろうな」

「会合の時、レンに直接食つて掛かつてきた子だ。」

「成り行き上、反対派のリーダーみたいなイメージになっていたが、
的外れというわけでもなかったらしい。」

「あの子がなんて？」

「サキュバスのレンは利己的かつ独善的な性格だ。女だけの街なんて
聞こえのいいことを言つて女を集め、淫らな行為に及ぼうとしてい
る。しかも反対意見には耳を貸そうともしない。すぐに計画を止め
させて彼女の行動を制限してくれ……とか、そんなところだな」

「うわ。すごいな」

「行動力だけは目を瞠るものがあるな。方向性があまりにも惜しい
が」

「面倒臭い話に「うわあ」と思つたレンは、賢者が顔をしかめながら
言うのを見て目を瞬いた。」

「お、わたしに話すのが一応つてことは、もう解決済みなのか？」

「わたし？」

「喋り方を直そうと特訓中なんだよ」

「ぶすつとと言うと「それはいい」と喜ばれた。」

「一人称だけでは違和感は拭いきれまい。早めに口調全てを修正すべきだな」

「他人事だと思つて好き勝手言いやがって」

口調はレンにとつて自分が男だった頃の名残である。

これを変えてしまうと男だったことを忘れ、最初から女だったように違和感を覚えなくなってしまうのではないか。そんな風に思つてしまうのだ。

まあ、今の自分が女の子だということは普段からことあるごとに味わっているし、この前思いつきり自覚させられたので今更なのだが。「話を戻すと、彼女には丁重にお帰り願つた。その主張は一顧だに値しない、とな」

「いいのか？ もしかしたら向こうが正しいかもしれないぞ？」

「信用の問題だよ。君と彼女、双方の実績を考えれば答えは一つしかない」

レンはこの一年、ダンジョンに潜つて戦い続けてきた。

街の人との交流もあつたし、レベルだつて上がった。湖や川はレンたちが関わつたおかげで作られたものだし、一緒にダンジョンへ潜れるような仲のいいパーティや、シヨウたちのような後輩までいる。

対する少女はついこの間転移してきたばかり、あれも嫌これも嫌と文句をつけるばかりで実績など積んでいない。

賢者は肩をすくめて、

「極端な話、もし彼女の話が真実でも構わん。『魅了』のできる君なら相手も不幸にはならないだろうし、いつそ何人が指揮下に入つてしまえば楽になるかもしれん」

「それ、その子に言つたんじゃないだろうな？」

「他人のスキルについて口外するわけがなからう。伏せるべき情報は伏せたさ」

そこじゃない、とツツコミを入れてもあまり意味はなさそうだったので、レンはため息をつくだけで済ませた。

冷たく突っぱねられた少女が少し可哀そうになつてしまう。

「悪気があるわけじゃないだろうにな」

「何か手助けでもする気か？」

「いや。俺が話をしに行っても嫌だろうし、好きにしてもらうよ。向こうとしても俺が引越したら顔を合わせる機会も減ってちようどいいだろ」

「うむ。まあ、さすがに家ができるまでには少々時間がかかるがな」

本当に報告だけだったらしく、賢者は「では、また」とすぐに帰っていった。

一件落着。

かと思われた少女の件だが、残念なことにこの件はこれで終わらなかった。

『新住宅街建設反対』

シオンや仲間たちと共にダンジョン三階へ向かおうとしたところ、そんな風にかかれたビラが街角に貼られているのを見た。

でかかとした見出しの下には、賢者から聞かされたのと同じような批判文句がちらちらと書かれている。

「どうやら、引っ込みがつかなくなつて過激な手段に出てきたらしい。」

旗色が不利な以上、和解するには負けを認めないといけない。頭を下げるのはプライドが許さないとすれば、残る手段は徹底抗戦。

「なんとしても相手を潰して謝らせる、というわけだ。」

「これ、誰が貼ったのか知ってますか？」

「とはいえ証拠はない。」

近所の人に尋ねてみると彼は「さあ」と首を振った。

「少なくとも許可は出してない。こういうのは正直、こっちの街にはあつて欲しくないな」

「すみません。わたしが嫌われたのが原因みたいで」

「レンちゃんが気にする事じゃない。……つていうか、喋り方変えたんだな。そっちの方が可愛いよ」

「ありがとうございます」

とりあえず笑顔でお礼を言った。

可愛いと言われるのは嬉しいものの、男に鼻の下を伸ばされるのは

あまり嬉しくない。

最初に見つけた貼り紙は剥がされたものの、道中には同じものがかつもあつた。中には剥がされて地面に落ちているものもある。

レンはそれを拾って、

「せっかく綺麗な街なのにゴミが増えるだろ」

「レン、それ燃やしちやえば？」

「そうするか」

落ちてた分ならセーフだろうと、ドレインボルトを炎属性化して火を付け、燃やした。燃えカスはとりあえずストレージに放り込んで置いてあとで庭の肥やしにでもすることに。

アイリスが珍しく腹立たしげな表情を浮かべて、

「貴重な紙の無駄遣いです」

「どうやって紙を調達したのでしょうか。なけなしのお金を使ったのでしょうか」

「職業の斡旋も進んでいるようですから、日当を得てはいるのでしようけれど……」

ダンジョンへ行ってゴブリンを掃討しながらも、話題に上がるのは件の貼り紙のことだった。

「どうしよつか。殴りこんで抗議する？」

「そんなことしても解決しないだろ。向こうは話し合いをする気がないみたいだし」

「でも放っておいたら好き放題されるだけだよ？」

元はと言えばレンたちがきついことを言ったせい、と考えると申し訳ないところではあるが、さすがにこれはやり過ぎである。

放っておくと路上で演説とか始めかねない。

「……女子の喧嘩って面倒臭いんだよなあ」

「ご主人様。では、男子の喧嘩は面倒臭くはないのですか？」

「女子に比べたらさっぱりしてると思うぞ。陰口はだいたい聞こえるように言うし、なんなら直接文句言うし、通りすがりに睨んできたりとかそういうのが多い」

基本的には本人vs本人の争いなので、最終的には「物理的な喧嘩

をして勝てるかどうか」がキーポイントになる。

勝てる気がしない、あるいは痛い思いをしてまで勝つ意味を感じない場合には「気が合わない相手」ということで交流を断って終わりだ。「でも女子の喧嘩って派閥作ったり聞こえないところで悪口言ったり先生にちくつたりとかそういうのだから。まともな方法で解決する気がしない」

「ちよつとレン、ひどくない？ 事実だけど」

「事実なのかよ」

「わたくしの経験から申し上げても否定はしづらいです……」

お嬢様のシオンからも肯定されてしまった。

もちろん、男子の中にも陰湿な者はいるだろうし、女子の中にも面と向かって文句を言って終わり、というさっぱりした者はいるだろう。

ここで言っているのはレンたちの経験に基づく傾向の話であって、必ずしも正しいとは言い切れない。

「でも、私たちは悪くないですよ？ 黙っているのは不本意です」

森で狩りをして暮らしていたアイリスはどちらかというところと体育会系、男子に似たところがあるようでそんな風に言う。

帰ってその話をする、日本にいた時間の長いアイシャも意見をくれた。

「正論は確かに力だけど、正しさを重視しない人間というのも残念ながら意外と多いの」

口論というのはえてして「相手を言い負かした方の勝ち」になりやすい。

詭弁だろうと言っていることが二転三転しようと、とにかく言葉を叩きつけて黙らせてしまう。反論があるなら口を開くはずなので、そうなれば相手の負けという理屈。

相手の正論を「納得できない」と却下し続けるという方法もある。

もちろん褒められた方法ではないものの、真つ当な人間ほど泥沼の争いを避けるもの。万が一、物理的な手段に訴えられた場合には「話し合いで解決できないのか」と正論を突きつけ優位に立てる。

「女の場合、泣いて情に訴えるという手段もあるわ」

争いの中には当事者以外にはどうでもいいものも多い。

面倒ごとを避けたい第三者は高確率で弱みを見せたほうを庇い、毅然として話し合いを望む人間を「加害者」として責める。

人の心理を利用した「正しいかどうかに関係なく目的を達成するためのテクニク」だ。

「経験から言うと、育ちのいい子ほど暴力に訴えないからこそむしろこういうやり方が上手くなる」

「……お詳しいのですね、先生」

「女性社会で長く生きているとどうしてもね」

あまり経験したくない類の出来事である。

残念ながら現在進行形なわけだが。

「ですが、それでは八方塞がりなのでは？」

正論で攻めても搦め手で行っても、相手がなりふり構っていない時点でレンたちが不利ということになる。

どこか不満そうなメイの声にレンは「いや」と答えて、

「なら、無視しよう。別にわたしたちは悪いことをしてないし、直接なにかされたわけでもない。過剰反応しなくてもいいと思うんだ」

ついでに言えば犯人が誰かもわかっていない。

夜に見回りをして現行犯、なんていうのも面倒だし、そういうのは先人たちに任せたい。

「レン、それ実は面倒臭いだけじゃない？」

「それもある。けど、これなら向こうが『一方的に騒ぎ立てる迷惑なやつ』になるだろ。こういうのってけっこう効くんじゃないか？」

「あー、なるほどね」

というわけで、普通にダンジョンを攻略した。

シオンのレベルアップ方針はひとまず、妖狐からは独自のスキルを。仙術士からは魔法攻撃力を上げるスキルを取るということに。

妖狐の四レベル目で、妖狐の単体魔法の対象数を＋１するスキルを取ったシオンは瞬間的な火力をさらに上げた。対象数の拡大の方はMPを消費するものの、一回の狐火を二体に撃つても普通に二発撃つ

より多少MP効率が悪い程度。

(尻尾の効果による同時発動と違い、同じターゲットを狙うことはできないものの、両方を用いれば瞬間火力が飛躍的に高まる)

実際に試してみたところ、二体のゴブリンへひと息で三発の狐火が叩き込まれる様はまさに圧巻。ぽんぽん撃つてるとあつさりMPが尽きるのが本当に残念である。

というわけで三階も一気にクリアし、休みの日は新人たちの引率や住宅街建設のための作業に勤しんだ。

自分たちの分の見取り図は早めに完成したので大工に渡し、準備と作業を進めてもらう。

建設予定地はアイリスの母に立ち会ってもらいつつ欠片を使い、無事に確保。

トラックがすれ違える程度の道を伸ばした先に広い土地があるような形。敷地の外周には獣避けの壁を建設して守る予定である。

これならあとあと森に侵食されることになっても道と敷地だけは残るので生活は可能だ。

道には石畳を敷いてもらう。

土地を作ったので図面が出来上がった家から建設が可能だ。他の居住希望者の図面は相手の家に行ったり来てもらったりして相談して決める。

将来誰かが使うかもしれない家については三パターンくらい図面を作ってそれで作ることにした。

そして、そんな風にレンたちが慌ただしく動いている間に、件の少女についても動きがあつて。

「納得いきませんー」

会合でも使った集会場に集められたのはレンたち、今年の転移者たち、それから街の中心人物たちと街の住人の代表数名。

議題は街で繰り返される迷惑行動について。

勝手に貼り紙をしたり家々を訪ねて話をしたり、さらには別の家に住んでいる元クラスメートたちにまであることないことを吹き込んだり。

さすがに我慢できなくなった街の人から賢者に訴えが行き、こうして「止めてくれ」と正式に話し合いの場が持たれることになった。

「私は間違ったことなんて言ってません。その人は悪人です」

「ふむ。では、その根拠は？」

「今まで何度も訴えてきた通りです」

話し合いはいっこうに進まなかった。

少女たちが街側の要求を聞こうともしてくれなかったからだ。

ため息をついた賢者は仕方なさそうに宣言。

「この際、訴えの正当性は置いておこう。問題は我々を動かすために君達が繰り返し返した迷惑行動だ。止める気がないと言うのであれば強制的に止めさせるしかない」

「ど、どういうことですか……!?!」

「この街に専用の留置場はないのでな。君達それぞれの勤め先に住み込みでの雇用を依頼する。今後は雇用主の管理・監視のもとで仕事に勤しんでくれ」

「そ、それじゃプライベートがありません!」

「そのプライベートに余計な事ばかりしでかすのが原因だろう」

街の住人、および少女の取り巻き以外の新規転移者からも反対意見はなし。

アイシヤでさえ「寛大なご処置、ありがとうございます」と頭を下げたのを見て、少女は身を震わせた。

「どうして」

「君達には信用がないからだ。そして、レンたちには実績に裏打ちされた信用がある。彼女らを排除しろと言われてもそうするメリットがない」

どうしても話を聞いて欲しいと言うのなら一年で二十階を攻略してみろ、と言われた少女は顔を上げ、レンの肩に乗るシオンを見た。「なら、シオンさん。あなたも力を貸してください。あなたは強いのでしょうか？ だったら、他人の世話になる必要なんてありません。クラスメート同士、力を合わせて結果を出しましょう」

誘いを受けたシオンはレンの顔を覗き込んで「どうしたらよいで

「しよるか？」と尋ねてきた。

レンは微笑んで答える。

「シオンが自分で選べばいい。わたしたちに強制する権利はないしな。……でも」

「でも？」

「できればこれからも一緒に戦いたい。もうシオンのことは仲間だと思っっているから」

少女はこれに深く頷き、少女を見据えてはつきりと告げた。

「お断りします。わたくしはこれからこの方々と共に在ります」

こうして、反対派の中でも過激な一派が実質的に消滅。

どうなることかと思われた今年の転移者たちもどうにかこうにか街に馴染んでいくことになった。

騒動が収まって

「あれからどうですか、あの子たちの様子は？」

「文句を言いながらではあるけれど、真面目に働いているみたい」

反対運動が収まって数日後。

定期的に生徒たちの様子を見に行っているアイシャはそんな風に、例の少女たちのその後について教えてくれた。

「与えられた役割を放り投げられるような子ではないの。ただ、前触れもなくこんなことがあって精神的に不安定になって、プライドの高さが悪い方向へ行ってしまっただけ。……なんて、指導しきれなかった私が言うことではないけれど」

「いくらアイシャさんが先生でも、こんな状況で生徒全員の面倒を見るなんて無理ですよ」

「ありがとう。でも、できる限りのことはしないとね」

アイシャはそう言って微笑んだ。

例の少女たちは全員バラバラの仕事を与えられた。住み込みのうえ、週五日フルタイムでの仕事なので自由に動ける時間はそう多くない。監視の目もあるので休日以外、集まって話をするのも難しい。

賢者が「一年で二十階を攻略してみろ」なんて無茶を言っていたが、もちろん「じゃあやってやる」と無理な攻略をされては困る。

一人や少人数でダンジョンへ行こうとしないかは引受先の人がちエックするし、危険なことはしてはいけないと指導していくことになる。

もちろん、きちんと仲間を集めて休日に行く分には問題ないが、しばらくは仕事の疲れもあってそれもままならないだろう。

「仲間を集めるのも簡単ではないでしょうね……」

最初にダンジョン攻略を希望した少女四人は共闘を拒否。

『だってあの子、偉そうじゃないですか。みんなで生き残ろうっていう時に「自分が一番」っていう態度をされたら迷惑です』

それがわかっていているならもう指導は必要ないんじゃないかと思っただが、それを言ったら「もう少しだけ！　せめて三階をクリアするま

で！」と言われた。

三階クリア後、あらためて四人で一階から潜り直せばちょうどいいかもしれない。

レンはこれを了承し、もうしばらく一緒にダンジョンへ潜ることにした。

少女たちの件については、前にいろいろあって憧れられることになった異世界生ネイティブの少年、シヨウとケンとも話をした。

二度に渡って約束したデートはどちらも完了済み。

二度目のデートで思いきって「好きです！」と切り出され「お前たちはいい後輩だよ」と返答、事実上振ることになったのはまあ、いい思い出である。

少年たちの方はしばらくシヨックで立ち直れなかったようだが。

『レンさん、あの人たちってなんとかならないのかな？』

しばらくして街でばったり会った時には憤慨した様子でそんなことを聞かれた。

なんでもシヨウたちのところにもレンの悪口を言いに来たらしい。「馬鹿な事を言うなって追い返した」と若干自慢げに教えてくれた。

『あいつらも怒ってた。レンさんは誰彼構わず色目を使うような人じゃないって』

彼らは現在、レンの同期パーティに指導されて経験を積んでいる最中。

パーティには幼馴染の女の子二人が加わってさらに賑やかになったらしい。彼女たちはシヨウたちに惚れており、一時はレンを敵視してきたりもしたのだが、今はわだかまりも解け、むしろ「男心についてレクチャーしてくれるちょうどいい先輩」として変な尊敬を受けている。

シヨウたちが若干恥ずかしそうに彼女たちのことを口にするあたり、告白もうまくいったようである。

ありがとな、と頭を撫でてやると少年たちは恥ずかしがって、

『俺たちはもう子供じゃないんだぞ』

これには「そうだな」と笑って頷いてやった。

『でも、それならもう少し目線に気をつけた方がいいぞ。お前ら俺の胸ばかり見てるだろ』

『な、なんでわかるんだよ!?!』

『女つてのはそういう感覚が鋭いんだよ。で、あんまりエロい目で見ると人間じゃなくて野良犬とかと同じ扱いになるからな』

『なんだよそれ、怖すぎだろ』

レンとしても同意見だが、女子になってしまった今となっては少々複雑だった。

「今は異世界での生活を安定させようという時期だから、他の子たちを誘うのも難しいでしょう。上の世代の協力を頼れば探索はできるだろうけれど、目上の人間を立てられるようであれば長続きはしないと思う」

「指導してもらって、もう少し素直になってくれればそれはそれでいいんですけどね」

こればかりはなるようにしかならない。

レンも必要のない時は外に出ないようにしているし、買い物はもっぱらフリーやアイリス、メイが担当してくれているのであまり顔を合わせる機会もない。

(まあ、相談やらなにやらで必要な外出が多いのは確かだが)

新しい家が完成すれば行動範囲もほぼ被らなくなるだろうからそれまでは辛抱してもらいたい。



シオンとのダンジョン攻略は順調。

一階を余裕をもってクリアした後は潜る度にひとつの階をクリアするペースで進んでいる。

レベルアップも順調で、新しいスキルを取るたびに魔法の同時ターゲット数や属性魔法攻撃力がアップしていく様はまさに脅威。

MPのほとんどを費やせばボス戦の敵を一人で半壊させられるまでになり始めた。

「これならシオンちゃんも立派な戦力だねー」

毎回だと週二ペースになりかねないのでさすがに控えているものの、たまには、ということでも打ち上げで行った洋食店にてフリーがワイン片手に上機嫌に言った。

手持ち無沙汰なメイに抱きかかえられ、小さくしたパンやハンバーグ、フライドポテト、などを給仕されるシオンは「いえ、そんな」と恥ずかしそうに、

「他のところでお役に立てないのですから、せめてボスくらいは一人で倒せるようになりたいです」

ちなみに洋食店は基本的にペット禁止。とはいえシオンの場合は元人間なので鳴かないし暴れないし雑食なので店主が快くオーケーしてくれた。

むしろ店主的には水しか飲まないメイの方が「一人で来たら入店お断り」らしい。

それはともかく。

アイリスが鹿肉のグリルを口にしながらシオンへ、

「そうは言いますが、私の時なんてボス戦は本当に大変だったんですよ。それがあれだけ簡単に終わるんですから十分凄いです」

「アイリスの時は俺——わたしたちもレベル低かったからなあ」

レンの注文は赤ワインとパン、それからロールキャベツ。

料理はいつも通り美味しいものの、美味しさに気を取られて気を抜くことについて「俺」と言ってしまう。代わりにというわけではないが口調やイントネーションも少しずつ気をつけるようにしている。

「私は最初の頃から大活躍でした」

「本当に大活躍だったけど、メイちゃんは例外だからね」

「もつと褒めていただいても構いませんよ」

胸を張るメイには「さすが」「いつも助かってる」などと贅辞を贈つて、

「例外と言っても、みなさまといると『全員が例外なのでは?』という気分になってきます」

「まあねー。うちはレンもおかしいし」

「フリー、言い方。……でも、まあそうかな。異種族はみんな強いというか」

人間も突き詰めると強いし、異種族はクラスとの相性が悪いと苦勞しそうではあるものの、スキルの数が倍近くになるのはやっぱりチートである。

「つまりシオンちゃんも強いってこと。十階の時とか二十階の時とかきつと大活躍してもらええると思う」

「二十階は本当、シオンさんがいてくれると心強いです」

「本当に二十階は恐ろしいですね」

あらためて言われたシオンが遠くを見るような顔で壁を見つめ始めた。

慌てて「まだまだ先の話だから」とフォローしておく。一方で、遅くとも今年中には二十階までクリアし直したいとも思っていたりするが。

「それはともかく、そろそろ夏だな」

気づけばカレンダーは七月に入っている。

気温も順調に上昇しており、かき氷が美味しくなってくる頃だ。

するとアイリスが嬉しそうに、

「また湖の出番ですね」

「湖、ですか？」

「シオンちゃんには話してなかったっけ。こっちは海もプールもないけど、代わりに森の中の湖で泳げるの。アイリスちゃんが作ったんだよ」

「アイリスさまが？ それはすごいですね……」

「そんな、大したことじゃ……。でも、作った時は大変でした」

湖の管理は普段、アイリスの両親にお願いしている。

たまに家に帰っているアイリスによると、今年の夏は一週間ごとに男女入れ替える形で湖を解放するらしい。一日ごとに入れ替えだと日付を間違えて入りに来る者が頻出しそうなので、思い切って一週間ごとにしたのだとか。

「暑い日に水に入れるのは嬉しいですね。この身体なので泳げないの

が残念ですが……」

「水浴びくらいならできるんじゃないか？ わたしも泳ぐつもりはな
いし」

「あれ、レン、泳がないの？ あ、もしかして翼そと尻尾れのせい？」

「ん、翼こと尻尾れのせい。だから足を水につけるくらいでいいかなって」
ちようどいいのでシオンと一緒にいればいい。森の中だと小さい
シオンは紛れてしまいそうだし。

「そういえばメイちゃんって泳げるの？ 去年は見た覚えないけど」

「試したことがないのでなんとも。ただ、おそらくこのボディでは浮
力が得られないのではないかと」

「えー。じゃあ私とアイリスちゃんだけかー。まあ、しょうがないけ
ど」

「二面水中の階とかあったらピンチだな、うちのパーティー」

幸い、今のところそんな階は見つかっていない。

レンが水中戦対策に想いを馳せているうちにフリーが「ふむ」と息
を吐いて、

「二年で二十階……あと二、三年くらいは確実にこつちにいそうだし、
水着作っちゃおうかなあ」

「ああ、一応水着も作られてるんだっけ？」

「去年から需要が出てきたから少しずつ作ってるみたい。ほとんど
オーダーメイドだし高いけどね」

なにしろゴムは貴重品だ。

特に衣類は日本の高品質なアイテムが忘れられない人も多く需要
が高い。農作業する人には長靴も欠かせないし、他にも使い道はいく
らでもある。そのわりに供給は不足気味で、このあたりも改善が望ま
れている。

人手が足りていない生産品は多くあるし、専用クラスに就いていな
い人材では戦力として心許なかったりしてなかなか充足しないもの
の、今年の転移者たちがいろんな方面に振り分けられたので少しはマ
シになっていくかもしれない。

「水着かあ。下着つけるよりはいいよなあ」

「あれ、レンってば意外と乗り気？」

「だって、湖にいたらまた水かけられたりしそうだし。服着てると無駄に濡れるだろ。でも、人前でボロい下着つけたくない」

水のかけあいになったりして変な動きをすると消耗を早める可能性もあるし、あまりいい下着もつけていきたくない。

となるといつそ専用品を持っておいた方がいいのではないか。

「でもなあ、来年着られる保証がないよな……」

さらに大きくなってきた胸を見下ろしてため息。

頻繁にブラを替えないといけない問題は娼婦のお姉さん方の協力もあって少し緩和したものの、未だ成長は止まっていない。

あつさりDカップに入り、今は「これはEまで余裕で行くな」と思いつつ始めたあたり。

来年には確実にサイズアップしているので、フリーやアイリスのように「まあ何年か使えるでしょ」とは言いづらい。

と、フリーがジト目になって、

「レンがちゃんと女の子してるのは嬉しいけど、めちゃくちゃ贅沢な悩み方しててちよつと嫉妬する」

「私も、レンさんのを見てるとちよつと羨ましくなってきました……」

「いや、大きければいいってものでもないって。フリーは今のままが可愛いと思うし、アイリスは細身だから胸だけ大きくなってもバランス崩れる」

むしろ胸が大きくても小さくても女の子の身体は綺麗だと思う。

貧乳だから男の子に見える、という子が本当にいるとしたらそれは骨格の問題か、あるいは単に痩せすぎである。

と、メイが腕の中の子狐ことシオンを見下ろして、

「シオンさんはどう思いますか？ ご主人様の胸部装甲について」

「え、ええ……!?! いえ、その、特になにも思うところは……。強いて言うのであれば、レンさまに抱きしめられていると安心します。幼い頃、母に抱かれた時はこのような感覚だったのかな、と」

そういえば、シオンを抱いている時はどうしても胸に当てる格好になっていた、と今更ながらにレンは思った。

安心できていたのであれば苦しくはなかったのか。それはそれとしてちよつと羨ましい。いや、自分の胸なのでアレだが。

「シオンはすごく抱き心地いいんだよな。そのまま抱いて寝たいくらい」

「それは……わたくしもそのまま寝てしまいそうです」

「いいと思うけど、レンってけっこうぎゅつと抱きしめてくるからシオンちゃんのサイズだときついかも。なにかでもうちよつと身体が大きくなるまで待った方がいいんじゃない?」

「だったら私と寝ましょう、シオンさん!」

「あ、ずるいアイリスちゃん、私も!」

ふわふわもこもこの魅力には誰も逆らえない。

大人気のシオンを微笑ましく思っていると、メイがじつと視線を向けてきて、

「そろそろ冷感ボディに切り替えるべきでしょうか」

「あー、かもな」

そうしたらメイを抱きしめて寝るのもありかもしれない。

生やすスキルと房中術

「そろそろ必要なスキルはだいたい揃った感があるなあ……」

リビングでウィンドウを眺めつつ呟いていると、フリーが後ろから腕を回しつつウィンドウを覗き込んできた。

「なんか、レンっていつも悩んでるよね」

「そういえばフリーは悩んでいるイメージないな」

「私は罫対策と一撃必殺以外狙ってないもん」

極端な話「罫発見」「罫解除」「急所狙い」をローテーションしていればいいわけだ。実際にはもうちよつと細々したスキルも取っているが、まあ似たようなものである。

「でも確かにそうだね。MPの最大値はレベル上がらなくても伸びてくし、しばらくは困らなさそう」

「うん。だからスキルポイントをちよつと余らせてるんだけどさ」

暇を見てスキル一覧を確認し直しては「どうしようか」と悩んでいる。

ゲームのキャラ育成と同じで、こういうのは悩もうと思えばいくらでも悩めるものだ。いま必要に迫られているものがないなら猶更。

なくてもなんとかなるけどあつたら便利なスキルや、ダンジョン探索には直接貢献しないけどサキュバス固有のスキルなどもまだあるのでなかなか難しい。

「ノリで決めて良ければわりと簡単に決まるんだけどさ」

「例えば？」

「生やすスキルの派生とか」

言ってスキルの一つを指で示す。

前に取ったスキルでレンは自分に「生やせる」ようになっていたのだが、新しいスキルではこれを他人に適用できるようになる。

つまり一時的ながら「他人に生やせる」ようになる。

理解したフリーがびくつと身体を動かす、それとなくレンから身を離そうとする。すかさず腕をつかまえて逃げられないようにした。

「この前のは謝ったし仕返しもされたじゃない!？」

「わたしのを『弱点』とか言ってさんざんいじめてくれた件の仕返しはまだしてないし」

「それは私を普段いじめてる件の仕返しだし……!」

「あれはいじめてるつもりじゃなかったんだけど、嫌だったのか?」

「い、嫌じゃない……けど」

真っ赤になったフリーが顔を逸らしたので今回はレンの勝ちである。

「リビングでなんの話をしてらっしゃるのですか……!?!」

代わりにひなたぼっこしていたシオンから怒られてしまった。これには二人揃って「ごめんなさい」と謝る。

生粋のお嬢様である少女には刺激が強かったのか、子狐は窓際の寢床の上で起き上がると「もう」と拗ねたような声を出して、

「お二人が付き合ってらっしゃるのは存じておりますが、もう少し節度あるお付き合いをなさってはいかがでしょうか」

「え?」

「付き合ってる……?」

顔を見合わせると「付き合ってらっしゃらないのですか……!?!」と驚かれた。

「いや、まあ。あらためて付き合おうとか話したことはないかな」

「うん。アイリスちゃんとかメイちゃんとかマリアさんもいるし、私だけ付き合うって感じにはならなかったんだよね」

「アイリスさまもレンさまのことを好いていらっしゃるのは承知しておりますが……さすがに不健全なのは?」

「って言っても、ここは日本じゃないし。誰も困ってないなら別にいいんじゃない?」

不健全とか不自然とか言い出したらマリアベルとアイシヤの交際だってアウトになる。

むしろレンの場合はたぶん女性相手でも子供が作れてしまうし、体力的な問題もないので普通の同性愛よりOKなのではないか。

……と、もつともらしいような言い分を口にする。

「あらためて、これまでの常識が崩れていく感覚ですが……確かにそ

うなのかもしれないですね。レンさまが無差別に女性を口説いているわけではない、というのはわたくしもよく知っていることですし」「ああ。人の恋人を取ったりとかする気はないし、無理に迫ったりする気はないよ」

「でも可愛い子は大好きなんですよ?」
「そりゃ好きだけどさ。可愛いと思うのと付き合いたいと思うのは別だろ」

マンガとかで、他の女性にちよつと目移りしただけで彼女につねられたりしてるのはさすがにやりすぎだ。

浮気してるわけじゃないのだからどきどきするくらいは許して欲しい、と思うレンである。

これにしばらく「むう……」と考えるようにしたシオンは諦めたようにため息をつき、

「ですが、生やすスキルとは面妖な……。あの、普段はその、避妊はしていらつしやるのですか?」

「え? うーん、まあ、なるべく外には出してもらってるけど」「そもそも挿れてる回数自体多くないし」

こつちの世界ではゴムが貴重で、薬もそうそう用意できないため絶対、とはいかない。

ちなみに娼館には避妊魔法を使えるスタッフがおり、娼婦たちは仕事の前に必ず魔法をかけてもらっているらしい。

客がこつそり魔法解除なんかした日には最低でも出禁である。

と、シオンが半眼になって、

「育児休暇でダンジョン攻略が中断する可能性も考慮しなくてはなりませんね……」

「うーん、まあそうなる時はアイリスちゃんと一緒にって思ってるけど。攻略が落ち着くまではあんまりそうなりたくはないよね?」

「うん。ただ、サクユバスのスキル欄にもそういう魔法はないしなあ……」

あつても良さそうなものなのだが。

フリーが「うーん」と考えて、

「ね、サキユバスって妊娠するのかな？」

「さあ……？　しないような気もするし、下手したら一発でしそうな気もする。ってフリー、もしかしてわたしに挿れるつもりで考えてないか？」

「え？　せつかくだからレンも経験しておこうよ」

「いやいやいや、フリーに生やすとしてもそれは『弱点』をいじめるためだから」

「えー。ぜったい気持ちいいのに」

「っ」

気持ちいい、という言葉聞いて「……そんなに？」とつい考えてしまった。

それはまあ、指でされるだけで男の時の何倍も気持ちいいと思えるのだから、さらに本格的な行為となったらもっと気持ちいいのかもしれないが。

思わず唾を飲み込んで、

「それに、最後まで経験しちゃえばその中途半端な口調も直るかも」

「絶対面白がってるな……!？」

「じゃあ取るのやめとく？」

「……まあ、ここまで来たら取っところか」

スキルポイントを消費し、他人に生やすスキルを取得。

すると新たなスキルが解放された。自分の関わった行為における妊娠をコントロールするスキル。凶ったようなタイミングである。

これにはフリーが「あれー？」と笑みを浮かべて、

「やっぱり興味がある感じ？」

「っていうか、子供作る話になった時に『当然フリーに産ませる』ってなるのは嫌だし」

「産んでくれるの？」

「大変なんだろう？　二人一緒に産むか、じゃんけんでどっちにするか決めるくらいはしてもいいと思うんだよ」

男女の間柄なら男には産めないし、男が稼ぐ構図が一般的なので仕方ないが、こつちでは男女関係なく稼ぐ方法があるし、レンは女であ

る。

フリーにだけ辛い思いをさせるのは理屈的にもおかしい……と主張したら椅子ごとくに抱きしめられて、

「なにこのイケメン。いや美少女。でもやっぱりイケメン」

「なんかよくわからないこと言ってるぞ」

「ですが、わたくしにもフリーさまのお気持ちはわかります。いずれその時が来る、と思うと憂鬱になることはありますので」

「シオンの学校だと、卒業と同時に結婚する子とかもけっこういるのか？」

「さすがに少数ですが、いないわけではありませんね。あるいは婚約のうえで大学へ通い、大学卒業後に結婚ですとか」

生まれがよく教養のある令嬢を射止められるのは基本、金持ちの男性になる。

女性を働かせなくても生活していくことが可能だし、外に出ると出会うの場が増える⇨浮気の可能性が上がると考えて「専業主婦に専念して欲しい」となるケースも多いという。

ここまで言ってから、シオンは遠い目をして、

「……そういった意味では、ここに来たおかげで結婚までの期間が伸びたとも言えます。そのお陰で行き遅れてしまうかもしれません」「そうならたらレンがもらってくれるよ。ね？」

「ああ。シオンさえよければ、だけど」

狐のような、というか狐そのものの瞳が瞬きをして、

「こんな姿ですが、構いませんか？」

「もちろん」

「……なら、それも悪くないかもしれませんね」

話の流れから、ほんの少しだけしんみりとした空気が流れる。

そこへ、いつの間にか家事を終えて戻ってきていたらしいメイが「ところで」と口を挟んで、

「房中術とは男女、陰陽の気を混ぜ合わせる術なのでしよう？ ご主人様の力で女性に『生やした』場合は一人で条件を満たせはしないでしょうか」

「えっ？」

「あ」

その手があつたか、と言うべきか、よくそんなことを思いつくな、と言うべきか。

「シオン」

「や、やりません。やりませんからね……!!? 男性のものを生やすなんてそんないやらしいこと……っ!」

「ですが、仙人とは人を超えた存在——凡俗の性欲に振り回されない者なのでは? 淫らな行為だと房中術を忌避することの方が下賤だということになりはしないでしょうか」

「……………」

「……………」

メイのことだから面白がっているだけかもしれないし、房中術や仙人についての解釈が合っているかもアレではあるものの、ある種の説得力はあつた。

沈黙の後、シオンは「一時的なのですよね? 消せるのですよね……!?!」と何度も念押しした後、仕方なさそうにスキルを取得した。生やすスキルを受けた子狐の姿は正直全然変わらなかった。

毛で覆われているので特にじっくり見ようとしなければわからない。そのうえで適当なところ——水を張った湯船に狐火をたつぷり撃ちこんでもらい、MPを減らしたうえで房中術をソロで発動してもらうと、

「MPが、回復しました……!?!」

「マジか」

回復後のMPはまさかの満タン。

回復中は「あまり心地いいとはいえない奇妙な感覚です」とのこと。また、精神的にも肉体的にも疲れるらしく、MPが回復する代わりにHPがごっそりと減っていた。

HPはヒールで補充できるとはいえ、一回の探索につき一回使うのが限界だろう。

「でも、いざとなったら回復できるのは大きいな」

「戦闘中は基本的に無理っぽいから、使いどころを考えないとね」

なお、房中術を使ったことで経験値が入り、シオンのレベルが上がった。

「シオンさん。一日一回使えばレベルアップが早まりますよ」

「さすがにいざという時だけにしていただきたいです……」

そりやそうだと、無理強いするのは止めにした。

「ところで、レベルアップするたびに少し身体が大きくなっている気がするのですが」

「ああ、言われてみると……？」

ちよつとずつの変化なのでぱつと見わかりづらいものの、抱き上げてみると最初の頃より重くなっている気がする。

「太ったわけではありませんよね？　ありませんよね？」

「落ち着いてシオンちゃん。誰も疑ってないから」

「そうそう。わたしも似たような経験があるから、たぶんレベルアップの影響」

少しずつ大きくなっていて、最終的には立派な狐になるのだろう。

そのうえ九尾となるとポリウムがすごいことになりそうである。

「うーん、尻尾だけでも出し入れできたらしいのにね」

「突然生えてくるくらいなのですから、突然消せてもいいですよね？」
「念じてみたら意外とできるかもな」

それから暇を見て尻尾を消せるか試すようになったシオンは、数日後「できました！」と嬉しそうに教えてくれた。

一本は残さなければならず、また魔法の多重発動をする際は尻尾を出していなければならぬものの、普段は消すことができるらしい。

「これで邪魔になりませんね」

「よかったね、シオンちゃん」

「はいっ！」

こうしてレンとシオンに新たなスキルが増えた。

なお、他人に生やすスキルについて夜にフリーにも試してみたところ、体液摂取のほうがエナジードレインの効率がいいことがわかつ

た。

ちなみに試したのは口からである。

初めて生やされたフリーは未知の感覚に放心した後「味はどう？」と尋ねてきて、

「……なんていうか、変な味がする。こんなのを飲ませてたんだと思うとなんか申し訳ないな」

「あはは。まあ、慣れちゃえばそうでもないけどね。私も男子がどんな感じで切羽詰まってるのか身をもってわかったかも」

初めて味わう体液についてはエナジードレインのおかげで妙な満足感もあった。

それを口にしたところフリーは「え」と硬直して、

「さすがサキユバス。感じ方もけっこう違うんだね」

「あんまり嬉しくはないけどな……」

「まあまあ。また欲しくなったら夜にやってあげるから」

さすがにこれはダンジョンでは使えそうにない。

なんだかそんなスキルばかり増えていつている気がするが、これもやっぱりサキユバスの経験値取得には役に立った。

【番外編】妖狐といなり寿司

思い出すのは幼少期の記憶。

一度だけ連れて行かれた父方の祖父母宅。娯楽の少ない田舎にすぐ飽きてしまったシオンは、父に連れられて散歩に出た。

たどり着いたのは近くにある神社。

道の左右に立つ狐の石像に心惹かれ、じつと見つめていると父は「お稲荷様」という名前を教えてくれた。石でできた狐の目はがらんとしてとらえどころがなく、幼いシオンには恐ろしく思えたものの、同時にどこか深い思慮を湛えているようでもあった。

狐と油揚げの関係を知ったのもその時だ。

家では洋食が多かったものの、初午の日にはいなり寿司が出された。少ない時には年に一度しか登場しない料理はシオンにとって特別で、皿に盛られた焦げ茶色の塊を見るたびに歓声を上げた。

思えば、あの出来事がシオンと狐を結び付けたのかもしれない。

「お母さまのいなり寿司、来年は食べられないのですね」

呟いてから、シオンは自分がうたた寝をしていたことに気づいた。丸くなった身体と下の寝床には温かさが残っているものの、ぽかぽかとした日差しは柔らかな夕陽に変わっており、気温は少しずつ下がりは始めている。

狐の身体になってから手持ち無沙汰なものもあってつい寝すぎてしまうことが多い。仲間たちはそんなシオンに怒るところか「もっとのんびりすればいい」と優しく声をかけてくれる。それがありがたいこともあり、もっと役に立ちたいと歯がゆくなってしまう理由でもある。

そろそろ夕食の時間だろうか。

狐の身体ではろくな手伝いもできない。やはりアイテムを使わせてもらって人間になるべきだろうか。けれど、ダンジョンでまがりなりに役に立てているのは妖狐の力があってこそ。せめて戦闘でくらしい活躍したいという想いもある。

「……あれ、この匂い」

寝ぼけていた意識がはつきりしてくると、シオンはどこか懐かしい匂いを感じた。

しょうゆを使った煮物の匂い。

キッチンを見れば、盗賊のフリーと弓使いのアイリスが並んで立っていた。彼女たちはなにやら茶色い皮のようなものを開いてそこへ白い粒でできた塊を詰め込んでいる。

これは、もしかして。

目をぱつちりと開いたシオンは立ち上がると、フリーたちの足元まで駆けていった。

「いなり寿司、ですか？」

「そうだよー」

料理好きのフリーが楽しそうに答えてくれる。

「大豆は使い道が多いから、こつちでもけっこう作ってるんだよね。だからお醤油もあるし油揚げも買えるの。お米はけっこう高いんだけど、たまにはいいかなって奮発しちゃった」

「シオンさん用の小さいのもありますからね」

言ってアイリスが見せてくれたのは三角の形をした小さいいなり寿司だった。フリーたちの分は俵型。どちらも定番の形ではあるものの、三角のおいなりさんには「狐の耳を模した」という説もある。今のシオンにはぴったりかもしれない。

「美味しそうですね」

空腹が刺激されて思わずきゅう、とお腹が鳴ってしまう。

すると、フリーはくすりと笑って、シオンに「仕事」をくれた。

「そうだ。レンたちを呼んできてくれる？ そろそろご飯だよーって」

「かしこまりました」

こくと頷くとキッチンを出て、まずはレンの部屋へ。

子狐の身体は歩幅が小さいものの四足歩行なので意外とスピードが出る。あつという間に到着すると、シオンは右手——右前足でこんこんとドアをノックした。

すると「入っています」との返答。

レンではなくメイの声だ。続いてレンとメイがなにやら言いあうような声がして、

「あー、入っていいぞ、シオン」

「よろしいのですか？ お取込み中だったのでは？」

「ないない。いつものメイの冗談だから」

「で、では、失礼いたします」

ぴよん、と飛び上がるとドアを軽く蹴ってさらに跳躍。ドアノブに飛びつき、体重をかけるような形でドアを開く。

これさえできればシオンの身体でもドアを押し開けられる。

変身してからしばらく経って、狐の身体の使い方もだいぶうまくなってきた。妙に高く広い感じのする視界にも、だ。

中に入って見上げると、ベッドの上にぺたんと座ったレンがメイを抱きしめるような体勢でいた。二人は向かい合っているのではなく、一冊の本を二人で読んでいたようだ。

確かに、これはいかがわしい雰囲気ではない。

仲睦まじい恋人同士のように見えないかと言うとノーとは言いつれないが、どちらかという仲のいい姉妹か野良猫の世話をする心優しい少女といった感じである。

なんだか少しだけ悪戯をしたくなったシオンはぴよん、とベッドに飛び乗ると、レンたちの傍まで寄ってから口を開いた。

「もうすぐ夕食になるそうです。今夜はいなり寿司ですよ」

「おお。おいなりさんなんて食べるのいつ以来だろうな……。まあ、最後に食べたのもコンビニのやつだった気がするけど」

「レンさまはいなり寿司、好きなのですか？」

「わりと好きだよ。シオンは——ああ、うん。言わなくてもいい。見ればわかる」

「？ そんなに顔に出ていますでしょうか……？」

狐の顔なので喜怒哀楽はわかりづらいはずなのだが。

メイにまで「一目瞭然です」と言われてしまったのでよっぼどわかりやすいのだろう。恥ずかしくなりつつ鏡で確認すると、耳と尻尾がぴこぴこ動いていた。

これは、わかりやすい。

止めようにもほぼ無意識の動きなので止め方がわからない。シオンは「うー」と唸った末に諦めることにした。いなり寿司が嬉しいのは事実なので無理に心の動きを抑える必要もない。

それに、口元を綻ばせたレンが優しく背中を撫でてくれた。

エナジードレイン——生命力の吸収能力を持つレンは触れた相手のHPを吸ってMPを回復すると共に、相手にある種の快感を与えることができる。吸収と言っても手で触れた程度では微量、命の危険はまったくないし、ただ撫でられただけでは得られない心地良さがある。

思わず目を細め、もう一度このまま眠りたくなってしまったから、シオンはふるふると首を振った。

「わたくしは先生とマリアさまを呼んでまいります」

「ああ。二人の部屋は気をつけろよ。……もしかしたら本当に取り込み中かもしれない」

「ええ、と。冗談、と考えてよろしいでしょうか……？」

「うーん。ちよつとだけ冗談にならないかもしれないから怖いよな」

二人で遠い目に。

するとメイが「では思い切ってノックなしで開けましょう」とか言い出したものの、もちろんこれに従うわけはなく。

マリアベルとアイシャが一緒に使っている部屋へと駆けていくと、シオンはきちんとノックをした。

「先生、マリアさま。そろそろ夕食の時間だそうです」

「ありがとう、シオンさん」

幸い、二人はすぐに出てきた。表情にもおかしなところはないし服も乱れていない。

ただ、キスくらいはしていたかもしれない。

普段から距離が近く、仲の良さがにじみ出ている二人のことを思い、妙な居心地の悪さを感じたシオンは一足先にリビングへと戻ると椅子の足をかけ上がって自身の指定席についた。

メニューはいなり寿司に野菜の煮物、それから緑茶。

茶は紅茶も緑茶もウーロン茶も原料が同じなため、これまた重宝されている。この家では栄養面からミルクを飲むことが多いものの、今日は和食ということで料理に合わせたようだ。

ちなみにシオンも慎重にやれば湯呑みを持ち上げて茶が飲める。ある程度冷めてからでないと熱くて舌が火傷しそうになるのが難点だが。

「じゃ、食べよっか」

「ああ。楽しみだな、おいなりさん」

全員が揃ったところで「いただきます」をして、大皿にこんもりと盛られたいなり寿司をめいめいが取っていく。シオンの分だけはあるから分けられて指定席の前に置かれていた。

くんくんと鼻を鳴らし、まずは香りを味わう。

「この香り、落ち着きます」

「あはは。本当、シオンちゃんって大和撫子って感じ」

そうだろうか。自分では今の時代、西洋風の学校に馴染んできたつもりなのだが。

けれど、それならそれでいいのかもしれない。

いなり寿司が好きなのも、狐に思い入れがあるのも本当のこと。誰にはばかることもない。サキュバスがいて、ゴーレムがいて、エルフがいるこの家でなら、妖狐のシオンも違和感なく受け入れてもらえる。

ひとつ目のいなり寿司を両手で持ち上げて口に運ぶ。

母の味とは違う。

けれど、どこか安心できる「この家の味」が口いっぱい広がってシオンの心を満たしてくれた。

【番外編】アイシヤとレン

「もしかしてお暇、レンさん?」

「アイシヤさん。お疲れさまです」

休日、レンは相変わらず手持ち無沙汰になることが多い。

まず、家事における役割が少ない。外に散歩にでも出られればいいのだが、男たちから邪な視線を向けられることが増えたためなるべく控えている。暇だからと飲み食いしすぎるのも財布的に良くないし、小説やマンガも少しずつ手持ちを増やしているとはいえ限りがある。となると、できることは魔法の練習か、ダンジョン探索に備えての休養が主。

後者は休養と言えば聞こえがいいものの、簡単に言えば昼寝である。ごろごろしている、と取られても仕方のない絵面であり少しバツが悪い。

マリアベルやアイシヤのような働き者が傍にいと猶更である。

そんな働き者の一人であるアイシヤは、生徒たちへ顔を見せに行つた帰りなのだろう。外出用の服装で外から回り込み、窓際にいるレンと視線を合わせてきた。

「お疲れさま。自由に外出ができないというのも大変ね」

「アイシヤさんこそ、いつもみんなに気を配っていて大変じゃないですか?」

「私は教師だもの。生徒の助けになるのが仕事なの」

なんでもないことのように微笑む彼女だが、レンたちの担任はここまでこまめに様子を見に来てくれたりはしなかった。

もちろん、あの先生はあの先生でアイリスを紹介してくれたりきちんと仕事はしていたし、公立校の教師と私立のお嬢様学校の教師ではいろいろと立場も違う。先生自身、異世界で生計を立てなければならなかったはずなので一概には言えないのだが。

「でも、そろそろ私の仕事もなくなってきたかな。みんなこつちに馴染んできたみたいだから」

「頻繁に会いに行かなくても大丈夫な感じですか?」

「ええ」

アイシャの生徒——三十一年目の転移者たちもダンジョンへ潜る者、仕事をして生計を立てる者などそれぞれの道を歩み始めた。

仕事先もバラバラ、それぞれに新しい出会いもあった。仕事に関する悩みは雇用主の仕事だし、異世界での生活のコツについてはアイシャよりも過去の転移者たちの方が詳しい。

むしろ、転移する前からの付き合いであるアイシャがあれこれ世話を焼きすぎる方が馴染むための障害になってくる頃だ。

問題行動を起こした少女たちのように経過観察が必要な子もいるものの、それにしたつて週一か週二で会いに行けば十分だろう。少しは「担任の先生」も気を抜ける。

「そうだ。少しお話をしませんか？」

「話、ですか？ もちろんいいですけど……」

リビングにでも移動した方がいいだろうか。

思いつつレンが頷くと、アイシャは靴を脱いで開いた窓へと身を乗り出してきた。慌てて支え、部屋の中へと下ろしてやる。

「ありがとう」

「びっくりしました。アイシャさんでもそういうことするんですね」

「大人だって、羽目を外すことはあるのよ？」

確かに、今の自分があと十年やそこら生きたとして落ち着きと責任感のある立派な大人になれるかという怪しい気がする。単に愚痴の内容が変わるだけで、フリーと酒を飲んで馬鹿な話をしているのではないだろうか。

だとしても、アイシャが素に近い一面を見せてくれるとは。

教え子ではないレンだからこそ、だろうか。こっちに來てからの関係なら「立派な女教師」である必要もあまりない。

「レンさんとは二人きりで話をしてみたかったの」

レンの勧めた椅子に座ったアイシャはそう言っただけで微笑んだ。

「えっと、それはマリアさんの件で、ですか？」

「そうだけど、別に文句を言いたいわけじゃないから安心して」

レンとマリアベルの関係は言っただけで済まえばセフレ。アイシャと別

れていた間の人恋しさを埋めていた一人という扱いであり、アイシャにとつては恋人を誑かした一人とも言える。

なので恨みがあってもおかしくないと思うのだが、

「マリアの心の支えになってくれていたんでしよう？　感謝をすることがあっても、恨むことなんてあるわけないわ」

「そう、ですか？」

「もちろん。むしろお礼を言いたいくらい。娼館に籠もっていたあの子を外へ連れ出してくれたんだから」

マリアベルが娼館で暮らしているままだったら、会いに行く時に躊躇したかもしれない——そう、アイシャは語った。

「私の知っているマリアとすっかり変わってしまったかもしれない。そう思ったら気軽になんて行けない。ずるずる先延ばしにしているうちに気ままずくなつて、むしろ逃げていたかもしれない」

「そんなことないんじゃないですか？　だって、あんなに会いたがっていたのに」

「会いたかった。大切だったからこそ、再会が怖いことだってあるの」
最後に会ったのが高校生。それから長い時間を経っていたのなら、すっかり別人になつていてもおかしくない。

しかし、実際には二人とも変わつてはいても、昔のことを忘れてはいなかった。互いに大切に思つていて、また新しく始めることができ

た。

「会えてよかったですね」

「ええ、本当に」
立ち上がったアイシャはベッドに座るレンの手を取つて両手で握つた。

「ありがとう。マリアを誘つてくれて。私のことを受け入れてくれて」

「わたしは別に大したことはありません。アイシャさんたちが想いあっていたからこそです」

すると、アイシャはもう一度「ありがとう」と言ってから窓の外を見た。

青い空。

「この世界でなら女性同士でも結婚できるのよね」

「向こうでも今はそんなに人目も厳しくないですよね？」

「そうだけど、日本では同性婚は認められていないし、私のいた学校は閉鎖的などころだったから」

「女子校ってそういうの多いんじゃない？」

「多いからこそ、ね。そういうのは学生時代の流行病であって、大人になつたら男性と結婚する。それが普通なところでもあった」

同性愛だからだめ、という風潮は少なくなつてきているものの、女性同士では子供が作れないという事実はなにも変わっていない。法的な保護も追いついていない状況で踏み切れる人は多くないし、アイシヤたちに優しい環境とも言い切れない。

ただ、ここなら多様性が認められている。

白人黒人アジア系どころかエルフにゴーレムにサキユバスがいる場所だし、女でもダンジョンで戦う者が多くいる。賢者は「非生産的だ」と怒るかもしれないが、だからといって女性同士の結婚が認められないわけではない。

「結婚、するんですか？」

尋ねると、少し恥ずかしそうに答えてくれた。

「そのうち、ね。できたらいいなって話してる」

「式には呼んでくださいね」

「もちろん。……レンさんには友人代表はお願いできないだろうけど」

「ですね」

翼と尻尾が生えたのが代表で出て行つたらさすがに気まずい。

ふう、と。

息を吐いたアイシヤはレンの隣へ座った。拳一人分くらいの間が空いているものの、ふとしたきっかけで肩が触れ合いそうな距離。

「あれから、マリアとはした？」

「ま、まさか。アイシヤさんがいるじゃないですか」

「そう。……あの子には『してもいい』って言ったんだけど」

初耳である。レンは思わず「それでいいんですか？」と尋ねてしまった。

「レンさんなら、ね。新しい子と関係を持つのは嫌だし、本気にならるのは困るけど、再会する前からの関係を頭ごなしにだめとは言えない」

「別にいいんじゃないですか？ それくらい言っても」

自分が二股、というかなんというかな状態にあるレンが言うと言得力がないが。

アイシヤは笑顔で首を振った。

「ちよっと下心もあるからね」

「下心、ですか？」

「レンさんがいれば、あの子との子供が作れるかもしれないでしょう？」

「……あ」

話の流れとノリで先日取った「他人に生やすスキル」。

今のところフリーとじやれるくらいにしか使っていないものの、女性同士のカップルに使えば確かにそういうことができる。

今の今まで、自分が絡まない相手に使うことは考えていなかったが。

「必要になったら言ってください」

「ありがとう。……いつか、お願いすることがあるかも」

「はい。あ、先に一回練習した方がいいかもしれません。かなり独特な感覚だと思うので」

特に女性が好きな女性にとっては忌避すべきものと言える。フリーでも最初は戸惑っていたし、感覚を掴むのに時間は必要だ。

それを聞いたアイシヤはさすがに遠い目になったものの、やがて頷いて、

「じゃあ、レンさんに練習、付き合ってもらおうかな」

「え」

「冗談よ」

あつさりそう言った彼女はやはり、大人だと思った。

シオンのレベルアップ方法

「狐火！」

「マジックアロー！」

「ファイアボルト！」

五つの炎が三連射、敵集団に直撃したすぐあとに光の雨が降り注ぐ。

悲鳴を上げて消滅していくゴブリンたちの中、一体だけ生き残ったキングにひときわ大きな炎が着弾、ギリギリで残っていたHPをあつさり消し飛ばした。

「やった……！」

十階のボス戦、僅か一分である。

「うわ、もう私の出番ないね、これ。すっごく楽」

「役割分担がはつきりしているのはいいことです」

フリーが楽しげに声を上げてドロップ品を回収しに行き、同じく出番のなかったメイはその辺の壁を拳で砕いて石材をストレージに放り込めるだけ放り込んでいく。

ふう、と息を吐いたレンは肩に乗っていた子狐を抱き上げると「ご苦労様」と笑って、

「シオンのおかげで早く終わったよ」

「お役に立ててなによりです」

十階までのダンジョンを経験したシオンもだいぶ慣れてきた様子で声を弾ませた。

「アイリスさまも、とどめをありがとうございました」

「そんな。お二人が他の敵を倒してくれたからです」

謙遜して微笑むアイリスも日頃の研鑽の成果か、かなり腕を上げている。彼女の放つファイアボルトは以前よりも大きく高火力になり、低位のゴブリンなら一撃で消し飛ばすほどになった。ふらふらのところになんかものを喰らったゴブリンキングは理不尽を叫びたかったことだろう。

なにはともあれ、何回目かになる十階攻略が終了。

レベルが上がったらしいシオンは「次は四本目の尾を取得しようと思えます」と宣言した。

「本当に頼りになるなあ」

「ねー。狐火の威力も上がって行ってるから、少しずつなら雑魚戦でも戦えるし」

クラスの方のスキルポイントは主に属性攻撃力UPに使われているほか、「気の回収」という特殊なスキルも増えた。

これは「誰かがMPを消費するたび、消費MPに応じて微量のMPを回復する」という効果だ。

原理としては大気中に飛散した余剰魔力を回収するというところらしい。自分の使った狐火はもちろん、レンやアイリスの魔法にも反応するので、雑魚戦で少しくらいMPを使ってもボス戦に至る頃には回復している。ばんばんMPを使うレンとの相性もいい。

やるが増えてきたおかげでシオンもご機嫌で「もっとお役に立ちますね」と尻尾を振り、

「ですが、最近思うところがありました」

「ん？」

「わたくし、レベルアップ速度が人より遅いのではないのでしょうか」



レンの場合、サキュバスはエナジードレインや性行為などで経験値が入りやすく、マナコンダクター魔操師はMPを操作する行為全般で経験値が入ってくる。クラスに合った行動の幅が広いうえに噛み合っているので結果的に成長が早い。

一方、シオンの妖狐と仙術士はなにをしたら経験値の入りがいいのかよくわからない。魔法を使うのが有効なのはわかっているものの、周知の通りMPの消費量が多いために連発できず効率が出ない。

「妖狐らしい行動、仙術士らしい行動とはいったいなんでしょう……？」

「霞を食べるとか」

「油揚げを食べるとか？」

「そんなことで経験値が得られるのでしょうか。というか、霞を食べるといふのはいったいどうしたら……？」

まあでもいちおう試してみようか、と、油揚げを食べてもらったら経験値が入った。

「妖狐とはそれでいいのでしょうか。いえ、わたくしとしても好物です。ですので問題はないのですが」

「あはは。そういえばこの前、おいなりさんにした時もシオンちゃん、後で『いつのまにかレベルが上がっていました』って言ってたよね。あれも油揚げのおかげだったのかも」

シオンの成長に効果があるのなら、と、これからは油揚げの消費量を上げることにした。

煮物に使ってもいいし、肉を詰めて焼くとかしても美味しい。

「むしろもう、あぶって醤油かけるだけでも美味しいんじゃない？」

「いいですねー！」

「あはは。それはなんかもう、おかずっていうよりおつまみな気もするけど、でも私たちもお酒飲めるんだもんねー」

親が好んで食べていたような酒のつまみ系もこっちに來てから美味しいと思うようになった。もとからおやつとしては嗜んでいたものもあつたが、酒と合わせると格別なのである。オーク肉（仮）から作ったポークジャーキーなんか最たる例だ。

「そういえば、シオンってお酒飲んだことあつたっけ？」

ちよつと油断すると男っぽくなりそうな口調に気をつけつつレンが尋ねると、シオンは「いいえ」と答えた。

「みなさまが口に行っているのは存じておりますが、わたくしはこの身体ですので酒瓶を開けるのも一苦勞ですし……」

どうしても飲んでみたいとも思わなかつたので特に気にしていなかつたと言う。

これは、

「勿体ない」

「勿体ないね」

フリーと顔を見合わせて頷きあう。

苦手な人もいるので無理にとは言えないものの、試しに飲んでみることもしないのは損失である。

アイリスもこれに頷いて、

「強いお酒はいざという時の気付けにもなりますから、飲めるようになっておいて損はないかと」

「き、気付かって、そんな機会があるのですか……!?!」

「回復魔法も薬もなく、すぐには帰還もままならない状況がいつか来るかもしれない。そうなったら熱したナイフで患部を焼き切るのが最適な状況も——」

「そんな危機的状況になる前に帰りましょう。ね、そうしましょう?」
レンとしても同意である。

「というか、レンがいれば回復魔法が切れるという状況はほぼ起こりえない。高速で回復しようとする誰かとキスしながらヒールやキュアを連発する、というアレな絵面になるがMPが0からでもリカバリーは可能である。」

「アイリス、脅かし過ぎ」

「す、すみません、つい」

「焼き切るのとはかく、せつかくだからちよつとくらい飲んでみようよ? お神酒扱いで経験値増えるかもしれないし」

「それで増えたらますます妖狐が食欲の権化みたいになるのですが」

シオンの抗議はひとまず置いておき、どうせシオンに飲ませるならと街で買える酒の中からいろんな種類を揃えてみた。

赤白ワインにエール、蒸留酒、それから珍しいところで清酒。

米から作る酒は原材料の価格のせいで高いのだが、根強いファンがいるために意外と流通している。とはいえレンたちもさすがに日本酒は初めてだ。

(ちなみにエールは酒場で注文し、出してもらったものを密閉容器に入れてストレージで持ち帰ってきた)

つまみもチーズ、炒った豆、あぶった油揚げなどいくつか用意。

二十歳以下の少女ばかりで酒盛りというのも不思議な状況だが、

こっちの世界では合法である。いや、アイリスはもう二十歳を超えているから日本でも合法か。

「さ、シオンちゃん。どれからいく?」

フリーがわくわくした様子で尋ねると、少女は「少しだけですよ……?」とまずはエールを口に運んだ。

おちよこのような小さな器に入れてやればシオンの手でも持てる。炭酸入りの麦酒に口をつけた少女は一瞬間を置いてから「苦いですね」と口にした。

「夏場はこれが良い、と聞いたこともありますが、炭酸が重要ならばアルコールである必要はないのでは……?」

これについては後から話を聞いたマリアベル、アイシャの大人組が「わかってない」と反論することになるのだが、それはさておき。

続いて飲んだ赤と白のワインは「美味しいです」となかなかの高評価。ただ、小さな身体なぶん回りが早いのを警戒してシオンは一口で飲むのを止めてしまう。

すると今度は蒸留酒。

度の強い酒を少しだけ舐めたシオンは「舌がぴりぴりします」と口にしたものの、容器一杯分をなんとか飲み干して、

「……あれ? なんだか、美味しい気がしてきました」

「ふーん、へーえ? ねえレン、これってさ」

「うん。シオンは意外と『いける口』なのかも」

これは「そんなはずは」と否定されてものの、最後に清酒の番が来ると流れが変わった。

くんくんと匂いを嗅いだシオンはどこかわくわくした様子で「いただきます」と口にし、くいつと一気に酒を飲み干して――。

ほう、と、恍惚とも取れる息を吐き出した。

心なしか頬が赤らんでいるような、いないような。

「どうですか、シオンさん」

アイリスからの期待の問いにシオンは、

「……これは、良くないお酒です」

「なるほど。気に入ったということですね」

「違います。こんなものを飲んでではだめになってしまうということですよ。ですので飲むべきではないと」

よっぽど気に入ったらしい。

ちなみに酒を飲んでも経験値が入った。上昇量の差は微々たるものではあったものの、清酒が一番上のようである。やはり和風の色が強い種族だけに日本っぽい酒の方が良いらしい。

レンは頷き、自分の分の器にも酒を注ぎつつ、

「シオン、もうちよつと飲んでみたら？」

「いえ、ですが」

「いいじゃない。経験値も入るんだし、神様がお供え物を受けるのにも意味があるってことだよ」

適当な言い訳に効果があつたのかなかつたのか、結局、少女は「そこまで言うのであれば……」と、注がれるままにちびちびと酒を口にしました。

そこからはそのまま食べ物を追加しつつ夕食兼飲み会である。

シオンが一番気に入ったのはやはり油揚げと清酒の組み合わせだった。小さく切った油揚げを口に運びつつちびちびと清酒を飲む子狐の姿はなんとというか可愛くも微笑ましく、いつまでも見ていられそうである。こんな神様がいたら毎日のようにお供え物を持って行きたくなる。

「レンさんは清酒、どうですか？」

「うん、わたしも気に入ったかな。なんかわたしは強いお酒の方が好きっぽい」

「ご主人様、それは完全に？兵衛の発言です」

「べ、べつにいいだろ。たぶんサキュバスになつてる影響だし」

今のところ酒を飲んである種の気持ち良さは感じるものの、前後不覚になり過ぎたり翌日気持ち悪くなつたりした覚えはない。節度ある飲み方をしているお陰なのか、それとも「飲ませて取って食う」のが習性だからなのかは微妙なところだ。

フリーもにこにこしつつ清酒入りのグラスを傾けており、日本酒大人気である。

「うーん。これは一本くらい常備しておいてもいいかも」

「あんまり贅沢してはつきりもいられないのに、欲しいものが増えていくなあ」

ちなみにアイリスは清酒も好みではあるものの、果実の甘みを感じられるワインの方が好みらしい。主にチーズをつまみつつグラスを傾けていた。

なお、ゴーレムであるメイは例によって見ているだけ、たまに石を摂取する程度だったのだが、

「ご主人様。やはり私も燃料の摂取を希望したく」

「燃料って。いや、メイならスピリタスでもいけそうだけど」

飲用のお酒は燃料にするにはもったいないので、本来に燃料にするなら飲用じゃないアルコールにしてくれるよう頼んだ。

「ところで、霞を食べるって具体的にどういうことなんだろうな？断食？」

「なのかなあ。それともシオンちゃんが取ったスキルみたいに空気中の魔力を吸収してエネルギーに変えるみたいなの？」

「仙境に迷い込んだ男を美しい仙女が誘惑して精を吸い尽くす、などという話も聞いたことがありますか」

「なにそれ。仙女ってサキユバスとあんまり変わらないってこと？」

「確かにレンさんも食べなくても生きていける人ですよね……？」

食いだめもできるので、たまに会う人からたっぷり吸っておけば普段は飲まず食わずということも可能かもしれない。

「つまり、わたしも仙術士と相性がいい……？」

「魔操師で取れるスキルがなくなってきたら転職してみてもいいかもね」

気のせいな気もするが、スキル相性的にも悪くなさそうなので頭の片隅に留めておくことにする。

なお、シオンは仙女の真実(?)に愕然としていた。心配しなくてもそんな淫魔みたいな仙女はメイの妄想かラノベやエロ漫画の影響、あるいは主流ではない噂の類に違いない。

「後はなにがあるんでしょうね、シオンさんのレベルアップ方法」

「自然の気を取り込むのは効果があるのでは？ 具体的にどのようなのかはさっぱりわかりませんが」

「駄目じゃん」

と言いつつ、ものは試しにと森に行って新鮮な空気を吸ってもらったり、太陽の光でひなたぼっこをしてもらったりしたところ普通に経験値が入った。

「食べて寝ていればレベルアップできるということですか……!?!」

「わ、いいねシオンちゃん。特別なことしなくても成長できるっぽいよ」

「うう、少しだけ納得いきません……」

働きたがりなシオンは若干不満そうではあったものの、シオンがひなたぼっこをしたり森で遊んだりしているのはパーティーメンバーからもアイリスの家族からも評判が良かった。

家の完成

馬鹿みたいな数の魔法が降り注いで。

なんだよこれおかしいだろ、みたいな絶叫を上げながら十五階のボスモンスターが消滅していく。

もはやお馴染みとなったボス戦攻略方法——飽和攻撃による即時殲滅は（主にシオンの）レベルアップによって日々進化していく。

シオン、レン、アイリスと立て続けに魔法を放つことでシオンは大気中に飛散した余剰魔力を吸収、追加の狐火を放つことができる。

そうして時間を稼げばレンの二発目も余裕で間に合うというわけ、

「これなら十六階からも楽勝かな」

戦いが楽に済むのはいいことである。

レンは安堵の息と共に言葉を吐き出した。少なくとも十九階まではこの調子でいけるだろう。前のように後退しながら少しずつ削らなくてもすむ。

だんだん大きくなってきて、レンの肩にちよこん、と乗るのは辛くなってきたシオンが襟巻のように首に巻きつくようにしながら「ええ」と声を上げて、

「十六階からはゴブリンとオークの混成部隊なのですよね？」

「そうそう。相変わらずオークは出てくるからお肉が嬉しいよねー」

オークがたまにドロップする肉をジャーキーにするのもすっかりお馴染みになった。生のままストレージに入れておくとかさばるし、かといって氷室に入れておいただけだと使い切る前に悪くなってしまいうこともある。水分を飛ばしてやれば嵩も減るのでちょうどいい。

この前、みんなで酒を飲んでからシオンもたまに飲酒するようになったのでおつまみはたくさんあって困ることはなかった。

「しかし、さすがに攻略ペースが落ちてきましたね」

「広くなりましたし、一度に攻略するのは難しいですもんね」

十三階からは「いくら楽でもさすがに無理だ」と、二回の探索で一階攻略のペースに切り替えた。おかげで暦はあつという間に八月を

超えて九月に、季節的には夏から秋へと移り変わってきている。

まあ、といつても三か月程度で十五階到達はぶつちやけ非常識なほど速い。

仲の良いパーティーのリーダーが「俺達がしよぼく見えるからもう少し加減してくれ」と冗談めかして言っていたほどだ。

「レンさん。シヨウくんたちは今、七階を攻略しているんですよね？」
「うん。新しく入った二人は初心者だから教えながら進んでるってさ」

四人が増えたネイティブ世代の探索は週二回。

リーダーたちは四人いる転移者でローテーションしてシヨウたちの探索をサポートしている。それとは別に週一回、正規パーティーで二十一階以降を攻略中。これなら実質、ダンジョンへ潜る回数は全員週二回で収まる。

新しく入った女の子たちはシヨウやケンのように戦う力を磨いていたわけではない。親から多少教えられていた程度だったので、一つずつ経験を積みながら先に進んでいるところだ。

それでも致命的な喧嘩をする様子がないあたり、シヨウたちも上手く折り合いをつけてくれているのだろう。

「シヨウたちには負けていられないし、わたしたちもこのまま進んで行こう」

「お気に入りの後輩たちをさらに突き放すおつもりですか、ご主人様」
「アイリスさまやメイさまのように、この世界で生まれた方にはスキルがない……自分の力だけで進もうとすればどうしても危険が付きます。『祝福』とはかくも効果の大きいものですね」

シオンがしみじみと「わたくしはとても恵まれています」と口にする。

「そう。だからこそ、わたしたちの役目はアイリスたちみたいな子を下まで連れて行くことかもしれない」



森から少し離れた位置からまっすぐに伸びる道の先。

周囲を『闇』に囲まれながらもしつかりと太陽の光を浴びる新しい土地に、これまた新しい『家』が姿を現していた。

「すごい……！」

「これは食いでがありそうですね」

「いえ、メイさま。食べないでくださいませ」

「でも、本当にすごいですー！」

基調色は白。

現代的な建築法を取り入れられる範囲で取り入れ、せっかくだからと予算をたっぷりに設定して建てられた家は現代日本の基準なら立派に「豪邸」と言っている代物だった。

リビングやキッチン、倉庫等を含めない純粋な部屋数はなんと八。

これまで住んでいた家の倍以上の広さを誇り、しかもなんと二階建て。ベランダと庭まで完備した文句のつけようが思いつかない出来栄え。

「自信作だ」

と、大工のおじさんが胸を張るのも頷ける素晴らしさ。レンたちは頑張ってくれたおじさん以下、協力者の面々に「ありがとうございませ」とお礼を言った。

「いいって。こっちこそ大量の仕事をくれて助かってるんだ」

おじさんはそう言って笑うと周りを見渡して「まだまだ仕事は残ってるしな」と笑った。

レンたちの家からある程度の距離を離しつつ建つ複数の家。

ほぼ出来上がっているものもあるし、基礎しかできあがっていないものやまだ「建設予定地」段階の家もある。さすがに全部並行して完成とはいかないからだ。

これでも、できるだけ家の完成を遅らせてもらった方である。レンたちの家だけ先に出来上がって他の家は完全にこれから、なんてことになってしまうと「ずるい」という声が上がりがねないからだ。

とはいえ、男が立ち入らないから、という理由でここに越してくる女子の家を先に完成させても意味がない。さすがに大工や荷物運び

の人員をすべて女性にするのは無理だし「作業のためだとは言っても敷地に入るな」とか言うのは無茶だからだ。

というわけで、特にそういうのを気にしないレンたちの家を少しだけ先んじて完成させてもらった。マリABELとアイシヤが住む予定の家もすでにほぼ出来上がっている。

「既に出来上がってる家具は中に運び込んである。住もうと思えば一応、今からでも住めるようになってるぞ。引っ越し作業はどうするんだ？」

「とりあえず、自分たちでできる限りはやろうと思います。何日かかっても問題ないですし」

レンたちが住んでいた家は転移者、それもダンジョン攻略をする者向けの物件。

空くのであれば来年以降の転移者用に回されることになる。住み始めた時も家具はほぼ用意されていたので、状態のいい家具はそのまま置いていくつもりだ。乱暴な使い方はしていないのでたいていの品はまだまだ綺麗だし長もちするはず。

(なお、さすがにベッドは使いまわせないので代替りの品をレンたち持ちで発注してある)

というわけで、大型の荷物はあまりない。衣類や食料品、食器や調理器具などの家具に収める品々ならストレージに入れて運べばなんとかなる。

しばらくは工事の音などで騒がしくなるだろうから暇を見つけて運ぶくらいでちょうどいい。

「泥棒が入る心配はないでしょうか……?」

「うーん、たぶん大丈夫だと思うよ。さすがにリスクが高すぎるし」
昼間は大工たちが作業をしているので変なことをすれば人目につく。

また、街からここまでの道は街から森への道と途中まで共通している。夜間に森のほうへ行くこうとする者が目撃されれば明らかに怪しい。

加えて、盗品をどうするのかという問題もある。別の街まで行って

売る、といった手段が使えないうえに作った人間や売った人間からも簡単に証言が得られるのだから盗品かどうかなんてすぐにバレてしまうのだ。

街でも窃盗騒ぎなんてほぼ聞かないので街の人間もそれが十分にわかっているはず。

「じゃあ、少しずつこつちに荷物を運んで、適当なところで引越そうか」

「賛成！」

それから、レンたちが住居を新しい家に移したのは一週間後のことだった。

その頃には他の家もいくつか完成。マリアベルとアイシヤのほか、下見に来たグループもいて賑やかな雰囲気。

「よし、せっかくだから地鎮祭やつくか」

「あれ？　なんでしたっけそれ」

「あれでしょ。なんか新しい家を建てる時にやるやつ」

「そうだ。本当は建て始める前にやるんだけどな」

この世界ではその辺はアウトで、完成式を兼ねるような形で行われることが多いらしい。

まあ、ここに土地神的なものがあったとして、日本と同じ形式の地鎮祭で満足してくれるのか、という話もあるし、あくまで形だけだ。

そんな感じなので行い方もアウトで、

「そうだ。シオンちゃんちよつと協力してくれよ。なんか縁起良さそうだし」

「わ、わたくしですか!?!」

「良いのではないですか。本物のお稲荷様がいれば多少のご利益はあるでしょう」

と、シオンが五本に増えた尾を露わにした状態でみんなの前に出され、なんだかあがめられるような形になった。

「……で、なんでレンは隅っこに移動してるわけ?」

「いや、わたしは逆に悪影響ありそうだし」

隅っこも隅っこ、地鎮祭を遠巻きにする位置にぽつんといるとフー

リが寄ってきた。

「あー。まあ見た目悪魔だもんね」

「そうそう。また文句付けられても面倒だし」

とか言っていたらアイリスとメイまで近づいてきて、

「みんなこつちに來たら意味ないんじゃない？」

「でも、私たちはパーティーですし」

「形だけの式ならば人の輪の中にいる必要もないでしょう」

儀式が終わった後、解放されたシオンから「わたくしだけ除け者にしないでください！」と抗議された。

「ところでシオン。これで経験値入ったりとかは？」

「さすがにないと思いますが……いえ、入っていますね。どういうわけか」

「神事に参加するのも効果があるのですね」

妖狐は妖怪としても神としても扱われる。そのあたりが関係しているのだろう。

「いつそシオンさんを祀る神社でも建ててみてはいかがでしょう」

「わたくしを祀るなどと、それでは罰が当たるのでは？」

「でも、シオンちゃんってこの世界の妖狐の始祖みたいなものでしょう？ 神様で間違っていないんじゃない？」

「何の話だ？」

「あ、おっさん」

「おっさんと呼ぶな。レンよ、口調が戻っているぞ」

ちようど賢者がやってきたので話をしてみると、彼は「よいのではないか？」とあっさり頷いた。

「この世界が一度滅んだのであれば、神も死んでいるだろう。それに異世界の流儀を取り入れたり、新たな神が生まれるのが嫌なのならこんな適当な『祝福』を与えたりはすまい」

「確かに、それはその通りですね」

「シオンに抵抗があるのであれば、建前上は稲荷を祀る神社としておけばよい。シオンとは関係があると言えばあるし、関係がないと言えない。それなら良かろう？」

「はい。直接祀られるよりは幾分か気が楽ですね」

大工のおじさんにも話をしたところ「面白そうだな!」と乗ってくれた。サービスで大幅割引してくれるというので新住宅街の奥に建設してもらうことに。

「うむ。せっかくだから立派なものを建ててもらえ。そうすれば初詣の際、神殿ではなくこちらが使われるようになるかもしれない」

「神社に参拝する人が増えたらシオンちゃんのレベルが上がったりするかな?」

「可能性はある。そうでなくとも供え物がもらえることはあるだろう。勿体ないのでそれはシオンが食べれば良い」

これには再び「良いのでしょうか……」と言うシオンだったが、レンが「酒も備えられるかも」と囁くとぴたりと止まった。

「お酒、ですか。いえ、お酒に釣られるつもりはないのですが」

「なんだ、シオンもいける口なのか。レンのところは酒豪が揃っているな」

「別に弱いわけじゃないアイリスが一番弱いくらいですね」

順番としてはアイリス、フリー、シオン、レンといったところだ。マリアベルはアイリスの次くらい。アイシャを入れると彼女が一番弱いことになる。

なお、メイは別格。本当の意味でのザルというかプールというか、酔うという概念がないので容量いっぱいまで摂取できる。

ともあれ。

儀式も話も終わったので、レンたちは家の中に入ることにした。

「これでゆつくりできるねー」

「うん。遅くなっただけど、メイもシオンもこれからは好きなだけ自分の部屋で寛げるから」

「ありがとうございます」

ペこりと頭を下げた後「夜這いをかけてくださっても構いませんよ」と真顔で言うメイの額にデコピンをしてから、

「あの! せっかくお部屋をいただいたのに失礼かもしれません……これからも、みなさまと一緒に寝てはいけません!」

懇願するような様子のシオンにちよんちよんと足を叩かれた。

シオンの部屋はレンたちと同じ大きさ。キャットドア的なものがついているので出入りは簡単だが、彼女のサイズだと広すぎると感じるかもしれない。

レンたちとしてもシオンとの触れ合いは癒しになっているので「もちろん」と一も二もなく頷いた。

「じゃあ、私かアイリスちゃんかシオンちゃんと一緒に寝ようね」

「レンさんは一緒に昼寝してあげてください」

「うん。そうしようか」

レンだけ夜じゃないのは誰かしら他に、一緒に寝る人がいるから……。つまりそういう話である。

さすがにもういろいろバレているのでシオンもそこにはツツコミを入れてこなかった。

新しくなった家で

「やー、キッチンが広がって料理がまた楽しくなったよー」

「はい！ これならすごいご馳走だって作れちゃいそうですね！」

新居での夕食はいちだんと美味しく感じられた。

気のせいではなく、フリーとアイリスが言ったような効果もあるのだろう。毎日の食事がより楽しみになってしまった。

食糧庫も前より拡充。

氷室にする部屋と普通の保管庫の二部屋を地下に用意したので食材の買い置きもしやすくなった。

「これからも美味しいご飯を期待してる」

「うん、任せて！ いっぱい稼いで美味しいもの食べようねー」

レンが（少し虫のいい内容で）声をかけるとフリーは明るい笑顔で返してくれた。

調理助手であるアイリスも使いやすくなったキッチンに上機嫌、シオンも「美味しいです」と朗らかな声で感想を口にする。

新しい家での初めての夕食を共にするメンバーはあと二人いて、

「結局、ご馳走になってしまってますみません」

「そんな、いいんですよー。二人とも仲間みたいなものじゃないですか」

引越し作業の終わっていないマリアベルとアイシャも一緒に食卓へついていた。

広くなったりリビングには軽く十人は座れそうな大きいテーブルが置かれており、この程度の人数で手狭に感じることはない。

不便の多い異世界において「土地の広さ」は数少ない優れた点だ。

また、テレビやエアコン、音響機器がないのでスペースを広く使える。

「マリアさんたちはいつ頃引越しできそうですか？」

「二、三日中といったところですね。あまり荷物も多くありませんので」

「じゃあ、それまではうちでご飯食べてくださいね。私たちがほとん

ど荷物持って行っちゃったので不便だと思えますし」

「ありがとうございます、フリーさん。お礼になにか贈らせてね。お酒がおいしいらっ。」

「ありがとうございます。お酒ならいくらあっても全然OKですよー」

家が別々になるので、マリABELからの家賃支払いもなくなる。むしろ、これからはレンたちが娯館へ借金を返していかないといけない。

幸い期限は決まっていなしい金利もないので、返済は他の住民から徴収する家賃と冒険での収入次第だ。

逃げ場がない世界というのは借金の踏み倒しようながないという意味で信用を得やすく、こういう時はちよつとしたメリット。

「そういえば、アイシャさんはどうやって収入を得ているのですか？」
食事が進み、和やかなムードになってきたところでメイが質問。

暇だからってなんという質問をするのか。地雷だったらどうするのかと思つたレンだったが、アイシャは特に困つた様子もなく答えて、

「賢者様から多少援助してもらっているのと、後は家庭教師のようなことを少しね」

「援助って、いかがわしい話じゃないですよね？」

「もちろん。生徒たちの様子を見る代わりに手間賃のようなものをいただいているの」

歴代の担任にも支払われてきたお金らしい。各家を周つて相談に乗つたりしているとどうしても時間も取られてしまう。お金を稼ぐのもままならなくなるのでその分の補填、という形だ。

家庭教師のほうは主に転移者の両親から依頼されてネイティブ世代の子供に勉強を教えるというもの。

親が教えている家庭もあるものの、転移者たちは実質的に高校中退。ちゃんとした先生に頼めるならそうしたいと思うのは自然な流れだ。

希望者はけつこういて人手が足りていないのでアイシャのところ

にも依頼が来たらしい

「あとはいくつかの本の記憶を売ってお金をもらったりとか。これは主に教科書だったわ」

「ああ、私立のいい学校ですもんね。教科書もいいの使ってそう。特に英語とか」

教科書などの「アップデートされる書籍」は需要が大きい。人気マンガの続刊なども同様だが、こちらはアイシャに縁のない話だったらしい。

「でも、先生に教わりたい子がそんなにいるなら学校作ればいいのに」「作ろうという話も昔あったけど、問題や反対意見が出て結局取りやめになったみたい」

問題としてはまず子供の人数。特定の歳の子が多かったり、全体的に後の年代に産まれた子ほど数が多かったりする。学校を建てるにしても規模をどうするか判断が難しい。

それから教師の確保。年に一度、一人ずつ増えるとは言っても担当科目はバラバラ。しかも、欲しいのは高校教師よりも小中学校レベルの勉強を教えられる人材である。

学費設定も難しい。教師が食べていける程度には徴収しないといけないが、すると家庭によってはかなりの金銭的負担になる。

その他、ダンジョンに潜ることを想定した「戦闘訓練」を授業内容に含めるかどうか、建てるとしたらどこへ建てるか、帰れるかどうかもわからないのに日本に準じた教育をする意味があるのか……などなど。

また、勉強を教えるよりも戦う力を与えたり手に職をつけさせる方が有益だから自分達の子は学校には通わせないと宣言する人などもいたのだそうだ。

「私は小学校の教員免許も持つてるから、そういう場所があるならば非協力したいんだけどね」

アイシャは「クラス：教師」になるくらいの人だ。

人にもものを教えるのは好きなのだろうし、レンから見ても向いている。

と、メイがじーつとレンに視線を送ってきて、

「メイ？」

「いえ。この流れはご主人様が『じゃあ学校を作ろう』と言い出すところなのかと」

「いや、これはさすがにわたしたちだけじゃどうにもならないって」

家の件がようやく形になってきたばかり。このうえ学校までなんて明らかに負担が大きすぎるし、そもそもなにをどうしていいのかもわからない。

「アイシャさんやうちの先生が『学校を作ろう！』って言うなら協力するけど、いまは借金があるくらいの状況だしなあ」

すると、アイシャは「ありがとう」と言って苦笑した。

「私も無理に学校を作ろうとは思わないわ。家庭教師をするのも楽しいしね」

「アイシャには、落ち着いたら学校まで行かずとも、寺子屋のような場所を作ってはどうかと話していたんですよ」

マリアベルがそう教えてくれた。

個人経営の学校、あるいは塾のようなどころだろうか。それなら個人の裁量でもできそうだしいいかもしれない。もし、その話が本格化したらなにか手伝えるように心構えだけはしておこうと思った。

「それはそうと、レンさん。近いうちに二十階攻略でしょう？ 日取りが決まったら教えてくださいね」

「ありがとうございます。でも、そんなにすぐにはなりませんよ。まだ十六階をクリアしたところですから」

と、その時は答えたものの、わずか三週間後、レンたちは十九階をクリアして二十階攻略にリーチをかけることになった。



「……なんか、あつという間に戻ってきたなあ」

三週間の間に女性専用住宅街はひとまずの完成を見せ、居住希望者もぞくぞくと移ってきた。

女しかない空間というのは思った以上に快適で、レンとしては兼ねなく散歩をしたりその辺をふよふよ移動したりできるのがとても嬉しい。

多少ラフな格好をしていようとエロい目で見てくる男がいなし、女性から恋愛関係で敵視されることもない。

とても快適なので、ボス攻略時恒例のお祝いは洋食店から料理をテイクアウトさせてもらって家で行うことが多くなった。知っている相手に短い伝言を送る「メッセージ」という魔法スキルを取ったので、これを用い、ダンジョンを出たところで連絡して帰りがけにできたてを受け取るという寸法だ。

十九階攻略のお祝いはマリアベルとアイシヤも一緒。

みんなで乾杯して美味しい料理に至福の息を吐いた後、レンはしみじみとここまでの感想を呟いた。

「なんか、もうちょっとゆっくりでもよかったんじゃない？」

「レンってば、ノリノリで敵倒しまくってたくせになに言ってるの」「いや、ほら、つい」

あつという間とは言ってももう十月も終わりに近い。

秋が過ぎて今度は「冬の準備をしないとなあ」という頃合いであり、それなりに時間も流れてはいるのだが。ほぼ一年かけて踏破した道のりに約四か月で追いつこうとしているのだから明らかにハイペースである。

「次はいよいよあの二十階ですね」

「再びあの大群が敵ですか。腕が鳴ります」

既に覚悟を決めているのか、アイリスとメイからは頼もしい言葉。

なお、ゴーレム娘のボディは十分な硬度と耐久性があるため「実際に腕を鳴らしました」なんていうボケは発生しなかった。

それはともかく。

レンも二人に頷いて、

「うん。わたしたちだってあの時からかなりレベルアップしてる。前みたいに苦戦せずに勝ちたい」

これにフリーとシオンも応じてくれる。

「戦いに関しては私はもうおまけって感じだけど、レンとシオンちゃんがいればかなり楽に戦えそうだよね」

「わたくしも、悪名高い二十階を攻略するために経験を積んできたつもりです」

十九階のボスは予定通りというか予想通りというか、雨のように降らせた魔法攻撃で身も蓋もなく殲滅した。

ここまでの攻略で経験値も溜まり、スキルポイントもいくらか余っている。これを使ってさらに強化し再度の二十階攻略に臨むつもりだ。

いったんパーティから離れていたリアベルもここからは再び参加してくれる。

六人、フルパーティでの初めての戦いだ。

「みなさん。そのことで相談なのですが、今回は私たちだけで攻略しませんか?」

そのリアベルが重要な話を切り出してくる。

「二十一階からの戦いも階を重ねるごとに厳しいものとなります。以降の戦いを乗り越えていける、と自分たちに証明するためにもパーティのみで乗り越えるべきかと」

前回の攻略時、過剰とも思えるほどに警告してきたのも他ならぬリアベルなのだが。

「ね、リアアさん。それって私たちを信用してくれてるってこと?」
「その通りです」

恥ずかしげも冗談めかした様子もなく、リアアベルは頷いて、
「今のみなさんなら勝てます。……そうでなければこんな提案はしません。私はこんなところで死ぬつもりはありませんからね」

視線を送られたアイシャが微笑む。

「私は戦いには参加しないけれど、みんなの勝利を祈っているわ」
「アイシャさんも、ありがとうございます」

つい先日、リアアベルは娼館の責任者を任命し、運営から手を離れた。
た。

ここまで稼いできたお金がほぼまるまる残っているので十年くら

いはなにもせずアイシャと二人で暮らせるくらいだが「稼がせてくださいね？」と攻略に乗り気だ。

アイシャに会えた今、帰る理由もほぼなくなった彼女がそうして積極的に参加してくれるのはとてもありがたい。

高レベルの蹴術師であるマリアベルがいてくれれば百人力である。「私たちだけで挑戦するなら、やっぱり主力はレンとシオンちゃんだね」

「はい。お二人が敵を減らしてくださいさらなければさすがに多勢に無勢です」

「前衛が実質、メイさんとマリアさんだけですもんね……」

倒しきれなかった分は二人に処理してもらおうにしても基本はレンとシオンで近づかれる前に倒すのが目標になる。

「では、それを前提にスキルを取得するべきですね」

「うん。……と言っても、シオンの場合は攻撃力と手数を増やすだけでも十分かもだけど」

MPが切れたらレンがばんばん魔法を使つて余剰魔力を回収してもらえばまた戦えるようになる。

「でもそうすると、前とはちよつと違う戦い方をしてもいいかな」

「？　と言いますと……？」

「ええと、たとえば……」

軽くプランを説明すると、仲間からは「危険じゃないか」という声も上がったものの、同時にその有用性にも同意してもらえた。

話し合ったうえでレンたちはそのプランを採用することに決定。

「でしたら、いいスキルがあるのでそちらを取得しようかと」

「それって……なるほど。それはいいかもしれない」

打ち上げが終わった後、寝るまでの時間も使つて相談は続き、だいたい方向性が決まったところでマリアベルがもう一つの提案をしてきた。

「レンさん。念のためにもうひとつ。そろそろ本格的に武器の調達をしてもいい頃ではないでしょうか？」

「そうですね。二十階をクリアすればまたけっこうなお金が入ります

し、ここでいいのを買っておきましょうか」

翌日、レンたちは武器屋へ赴いてそれぞれに新しい装備を物色した。

今まではあまり武器にこだわってこなかった。フーリはナイフを使っていたし、メイもメイスを購入してはいたものの、これらもごくごく普通の品。痛んでくるたびに予備を買ったり修理したり買い替えたりして使ってきた感じだ。

得物に関係なく戦えるメンバーが多いからこその方針だったが、これからの戦いに備えてここでひとつ良いものを買っておきたい。

結果、いくつかの装備が新調され——二十階、再戦の日を迎えた。

二十階ふたたび

「……さて、と」

ダンジョンへの階段の終着点。

二十階への入り口を前にレンは立ち止り、仲間たちを振り返った。首には新たに購入した魔法のチョーカー。あしらわれている宝石はブラックオニキス。効果は防御力の向上だ。

この世界における防御の付与魔法は装備にバリア的な機能を付与するものらしい。鑑定スキルなどで確認すると「A+B」のようにステータスが表示され、B部分の防御力は身体はどこに当たっても効果を発揮する。

チョーカーにかかっているのは弱めの付与なので大きな効果はないものの、そのちよつとが生死を分けることもある。

また、右手の人差し指には銀製の指輪が嵌まっている。

こちらにもマジックアイテムで、効果は魔法威力の向上だ。どちらも決戦に備えて購入した新しい装備である。

杖や短剣を持つことも考えたものの、エナジードレインで誰かに触れたりシオンを抱きかかえたりする都合上、両手は空いている方がいい。なので手を塞がずに能力アップできる品を選んだ。

身に着けてみると地味にテンションアップの効果もある。

女が宝石だのなんだの目を輝かせるのが男時代は不思議で仕方なかったが、女になってファッションに興味を持ち始めてみると分かる気がしてきた。

「じゃあ、打ち合わせ通りにいこう」

レンの声に、五人の仲間たちが頷いた。

盗賊のフーリは防御魔法のかかった腕輪と自動修復機能のあるナイフを購入。これでナイフの買い替えがいらなくなるかも、と戦力向上とはズレた点を喜んでいた。

弓使い兼精霊魔法使いであるアイリスはエメラルドの嵌まった指輪を購入した。風の魔法が付与されており、矢の速度を向上させたり攻撃魔法の精度を上げる効果がある。

ゴーレムのメイは魔法のメイス。耐久性能の強化と自動修復機能のついたなかなかの高級品だ。本人は「私のボディに比べれば大した性能ではありませんが」と言いつつ嬉しそうにそれを磨いていた。

マリアベルは新しく購入した品はない。そもそも、前から使っている品が十分な性能のあるマジックアイテムらしく今回もそれを装備している。

妖狐のシオンは装備できるアイテムが限られること、レベルが上がって身体が大きくなると装備できなくなる可能性があることから新装備はなし。

ただし、この戦いで鍵となるのは間違いなくシオンだ。

「レンさま。どうぞよろしくお願いいたします」

ぴよん、と跳ねて腕の中に収まってきた彼女にレンは「うん」と微笑みを返して、

「せっかくだから、二人で奴らを壊滅させるくらいの勢いで行こうか」
出口から一歩足を踏み出すと、以前見たのと同じ広い戦場があった。

当然、前回の戦いの痕は残っていない。綺麗なままの荒野の上空へ、シオンを抱いたままふわりと浮かび上がる。

翼を大きく広げて。

これまでの浮遊能力ではありえない速度でレンの身体が上昇していく。新たに取得した「飛行」スキル。これがあれば空を高速移動することが可能になる。

「気をつけてね、レン！」

「もちろん！」

フーリの声に大きな声で返しつつ、レンはシオンと共に戦場の先へと向かった。

今回は出口の上に陣取らない。

弓を使うアイリスは自前の魔法で高台まで上がっているものの、主戦力であるレンとシオンはこちらから敵方へと近づいて積極的に殲滅を狙う。

「いたいた」

「お話を聞いていた通り、多いですね……」

「まだこのくらい、全然だよ」

適当にマジックアローを降らせてやると向こうも気づいた。叫び声と共にゴブリン、オークの群れが顔を上に向け、射撃能力を持つ者が反撃してくる。しかし、十分な距離があるうえに下から上への攻撃だ。慌てる必要もなくひよいつとかわす。

というか、足を止めた分だけ不利になっているのだが、奴らはそれを理解しているのだろうか。

「シオン、いけそう?」

「おそらく、当てられると思います」

尻尾が五本に増加。

同時に五つ生み出された狐火が五連射。合計二十五発もの炎が敵へと降り注ぐ。相手もさすがに回避しようとはしたものの、半分以上が命中。喰らったゴブリンは全て一撃で消滅していく。すかさずレンがブースト付きのマジックアローを降らせれば敵はほぼ壊滅した。今さら思い出したかのように、あるいはレンたちから逃げるように先へと進み始めるものの、見るからによろしている。あれはもう放っておいてもいいだろう。たぶんアイリスの矢で全滅だ。

「レンさま、MPは大丈夫ですか?」

「まだまだ全然。それに、シオンから吸わせてもらってるし」

日々最大値を拡張し続けているレンのMPは前回よりもかなり増えている。もちろんエナジードレインを用いたところで回復しきれはしないのだが、簡単に尽きるような容量でもない。

「とりあえずわたしがガンガン攻撃していくから、MPが回復してき次第撃つてくれるかな」

「かしこまりました。お任せください」

シオンが撃てない時はブースト付きのマジックアローを二連射して掃討する。

上空をうろろうろしている時点で足止めになっているので属性変更による足場崩し狙いはなし。そこにMPをつぎ込むくらいなら全部攻撃につき込むつもりでどんどん攻撃した。

敵からの攻撃は高度を上げたり下げたりしているだけでだいたい避けられる。

なんというか、高さというのがいかに強力かがよくわかるというものだ。

「うん、これ楽しいかもしれない」

「なんだかもう、敵を撃つゲームみたいになっていますが、これがゲームなら製作者の方は泣くのではないでしょうか……？」

とはいえ、射撃すべてを完全に避けきるといのはさすがに難しい。

七つめのグループを攻撃している際、ついにレンへ攻撃が届きそうになった。慌ててかわしたものの、その拍子にシオンが腕からこぼれ落ちてしまう。

「シオン！」

「大丈夫です……！」

落下したシオンはそう答えると、とん、と空中を踏みしめるようにして静止した。

新スキルの効果だ。名前は「空歩」。見えない足場を生み出して乗るというか、足を置いた場所に見えない足場が生まれるらしい。もちろん、普通にジャンプしたり落下したい時は発動しないこともできる。

エナジードレインの関係でできるだけ抱いていた方がいいものの、離れ離れになっても空で戦えるようにしておいたのである。やっぱり必要になったので取っておいて正解だ。

「お返しです！」

二十五の狐火が過剰とも思えるダメージを敵陣に与え、多くを殲滅した。

そして。

「十回目。ここまででは順調に來られたけど……」

「レンさま。なんですか、あの数は」

「うん。あらためて見ても非常識な数だなあ、あれ」

もはや軍勢と言つていいレベルのモンスター群れ。そこには上

位のゴブリン、オークも含まれているのだからたまらない。

数が多いということは射撃戦力も相応に多い。

心してかからなければ撃ち落とされて蹂躪されてしまう恐れもある。

「シオン！ これで最後だから出し惜しみなしで！」

「かしこまりました！」

斜めに撃ち降ろすようにして狐火をマジックアローを放ち、敵の数を削りつつ牽制。

反撃に対しては飛行能力をフルに使って回避を行い、合間を見て反撃を放つ。狙いはだいぶ雑になるものの、何割かが命中していればそれでいい。

弓兵と魔術師が静止して群れから離れてくれるだけでも十分な効果。

遅れ始めた敵は無視して本体を追い、抵抗する力のない敵へと一方的にダメージを与える。さすがに全滅はできないし、射撃部隊も追いついてくるが、

「よし。それじゃあ作戦二つめにいこう」

「ここで敵がどう出てくるかが肝心、ですね」

「うん。たぶん大丈夫だとは思うけど……」

答えつつ、レンはシオンを抱いたまま動きを変更。

回り込みつつ高度を下げて射撃部隊の後方へ。フリーたちのいる場所とは反対側、地面から一メートルもない位置について、

「マナボルト」

「狐火！」

単体攻撃で数の少ない射撃モンスターを確実に落としていく。

反撃は飛行能力と防御魔法でかわし、何度か攻撃を繰り返している
と、

「三分の一程度が引き返してきますー！」

「よかった。全部で来られたらさすがにきつかったけど、これなら……！」

地面へと降りたレンはシオンを手放し、

「避けたら後ろから来る仲間当たるぞ……！」
残るMPを使い果たしてもいい、という勢いで魔法を解き放った。



「もう、八割くらいレンとシオンちゃんて倒しちゃったんじゃない？
活躍しすぎ」

合流したフリーたちにも怪我らしい怪我はなかった。

レンたちが活躍しすぎたせいで理不尽すぎる文句を言われてしまったくらいだ。

その後、射撃部隊を壊滅。向かってきた本隊の三分の一もあっさり
と消滅させて残る本隊を仲間たちと挟み撃ちにまでしてしまったの
で言われるのもまあ、無理はないといえは無理はないかもしれない。
「いや、でもさすがにきつかったよ。MPもほとんどないし」

「わたくしも、回復してはMPを空にする作業の繰り返しでした……」
大活躍だったシオンはさすがにぐったりしてメイの腕に収まっ
ている。

基本的に疲労という概念のないゴーレムの少女は仕事が少なかつ
たこともあってぴんぴんしており、真顔のままシオンの毛並みをなで
なでしていた。

向かってきた敵を弓と魔法で撃ち落としまくったらしいアイリス
は疲れよりも達成感が勝っているらしく明るく笑顔で、

「強くなっただんですね、私たち。こんなにうまくいくなんて……！」

「レンさんとシオンさんのコンビネーションのおかげですね」

今回の勝因はリアベルが評した通りだ。

シオンがレンの、レンがシオンの疑似MPタンクと化すことによつ
て無理やり継線能力を底上げ。本来のMP量を大きく上回る魔法行
使を可能にした。

前回、別パーティの魔法使いと協力した時と同じかそれ以上の成果
を自分たちのパーティだけで挙げられたのだから快挙である。

「ドロップもいっぱいだよ！ しかも今回はこれをひとりじめ！」

二パーティで半分ずつ分けても大収穫だったものがまるまる入ってくる。

先行投資で良い装備を買った分を差し引いても十分な収入だ。

「これで当面の生活費は大丈夫かな」

「うん！ これからもどんどん稼ごうね？」

洋食店はこの前利用したばかりなので、今回は家で普通に夕食をとることにした。

と言っても、メニューはいつもよりかなり豪華だ。所要時間としてはいつもより少なく、早く帰って来られたのもあってフリーとアイリスが腕によりをかけてくれた。

当然のように酒も出され、アイシャも加えた七人で賑やかに食卓を囲んだ。

「うーん、それにしても最近酒量が増えてるなあ」

悩ましいのはそんな事実である。

前は蒸留酒一瓶を一週間で空けるようにしていたというのに、最近は下手すると毎日のように飲んでいる。まあ、食事の際に供される酒は自分用に買う酒とは別カウントでいいとは思うのだが、それにしてもこのままだと歯止めがきかなくなりそうな気がする。

「このへんで少し我慢を覚えた方がいいかも——と、シオン？」

呟いたレンはくいくい、と狐の少女に袖を引かれて、

「わたくしにお酒の味を教えておいてそれは薄情だと思います」
「う」

それを言われると弱い。レベルアップのため、それから親睦を深めるためとはいえ、潔癖な少女を墮落の道に誘ったのは事実。

シオンが飲みたいと言った時にはいつでも付き合う、くらいの気概はあつてしかるべきである。

フリーたちに助けを求めると、盗賊の少女と半妖精の少女は目配せをしあつて、

「私たちは健康のためにも適量を心がけようね」

「そうですね」

あつさり逃げられた。

まあ、このパーティの中で暴飲を繰り返しても大丈夫そうなのはレ
ンとシオンだけなので適役ではあるのだが。

「わかった。じゃあ、シオンとは飲み仲間ってことで」

「はい！……では、お小遣いでお酒を買ってもいいかもしれません
ね。油揚げも狐火の火力を調整すればひとりで炙れるでしょうし」

「おお。シオンちゃんのお小遣いがお酒と油揚げに消えそうだね」

「いっぱい買えそうですね」

「他に買うものも思いつきませんし……。嗜好品としては可愛い部類
かと」

確かに、賭け事とかマンガとかに使うよりはよっぽど妖狐っぽい。

「わたしもお酒は魅力的だけど、服とか下着とかも欲しいなあ。体
型がすぐ変わるから買い替えないといけないし」

「それはそれで羨ましいです……」

「着られなくなった服は古着屋さんとかに売ればけっこうお金戻って
くるよねー」

「うん。あんまり着られないうちに売ることが多いし」

ネットオークションを利用して服をとつかえひつかえするやり手
女子みたいな感じになってきた。



翌日。

「レンさん。なんか賢者様が来てますけど、どうしましょうか？」

律儀に住宅街の入り口で「誰か気づいてくれないかなー」とやって
いたらしい賢者に会いに行くと、彼は「二十階再攻略の祝いを持って
きた」と言った。

「お祝い？」

「ああ。本当は引越越し祝いにしようと思っていたのだが、準備も必
要だったのだな」

彼がくれたお祝いは住宅街の一角に設置された。

神殿に直通の転移陣^{ポータル}。一方通行なので帰りは使えないものの、一瞬

にして移動できる優れたものである。買い物をする時にも往復する必要がなくなつて若干便利。

この転移陣はありがたく使わせてもらうことにし、周りに鍵付きの小屋を建てて管理することにした。

リザードマンとアラーム

賢者の設置してくれたポータルは彼のスキルによるものらしい。

合計設置数に制限があり、さらに触媒となる宝石に大量のMPを注ぎ込まなければならぬ。そんな不便さを補って余りあるほど効果は高い。

「神殿まで歩いて行かなくていいのはほんと楽だなあ」

「階段も上らなくていいもんね」

設置から二日後、実際に使ってみたところ、光る魔法陣のようなものに入った途端、見ている景色が一瞬にして切り替わり気付いたら神殿に立っていた。

転送先をある程度ずらす機能がついているらしく、出た拍子に人つぶつかってしまう心配もない。

『ちなみに、バリケードとかで思いっきり埋まった場合は？』

『転送自体が行われない。かべのなかにいる、とはならないから安心するといい』

気力体力が充実した状態のまま、レンは仲間たちと共に階段を下り、ダンジョンへと降り立った。

着いたのは二十一階の入り口。

肌を撫でるのはどこか湿り気を帯びた空気だ。これまでの石の通路とは違い、上下左右を囲んでいるのは土である。地面は水たまりこそできていないものの少々柔らかそうな感触がある。

「この素材は硬度強化に使いつらいとメイには不評である。」

「二十一階……。ここからはリザードマンが相手なのですよね？」

「うん。前に少し戦ったけど、なかなか厄介だった」

簡単に言う和二足歩行をする爬虫類である。

二十一階の敵となる基本のリザードマンは皮鎧と湾曲した刀で武装しており、白兵戦が専門。体格はオーク以下、ゴブリン以上。俊敏さでは人を上回っており、筋力も人に劣っていない。

動きのリズムが爬虫類的でつかみどころがないこともあって向こうのペースに乗せられると苦戦は必至。

「わたしたちの場合はメイに攻撃を食い止めてもらって魔法で仕留めるのがいいかな」

「メイスの攻撃を簡単にかわしてくるので、そうしていただけると助かります」

「ま、でも、落ち着いて行けば大丈夫だよ。この階はまだ一回に出てくる数も多くないしね」

しばらく進むと小部屋があり、最初の敵グループが待っている。

リザードマン戦のチュートリアルとでも言えればいいだろうか。湾曲刀を手に襲い掛かってくる敵をメイがブロック。攻撃を当てることよりも味方を狙わせないことに注力してくれている間に、レンとアイリス、シオンで単体魔法を当てていく。

ここは範囲拡大や連射をする必要はない。

ゴーレムであるメイは皮膚が硬いために大きな傷を負いにくいし、合間を見てヒールをすれば治療は十分間に合う。むしろ魔法をかわされないように注意する方が重要だ。

ちなみにもう一人の前衛であるマリアベルはというと、

「そこっ！」

「ギツ!？」

リザードマンな特殊な動きにもうまく対応して蹴りを叩き込んでいく。見ていて惚れ惚れするくらいの手際であり、こちらもあまり心配はいらなかった。

結果、戦い自体は五分もかからず終了。

ただ、やっぱり気をつけることが多い。終わった後はついたため息が漏れた。

「もうちょっと数が多ければ範囲魔法で片付けるんだけど」

「敵も数が少ないと散開しやすいですもんね」

いつそのこともっと群れで出てきてほしい。数が多ければドロップ品も増えるので一石二鳥である。

と、フリーが「あ」と思い出したように声を上げて、

「数と言えば、新しい罠にも注意してね。今回は本当に危ないよ」

二十一階からの新しい罠は^{アラーム}警報だ。

名前の通り、けたたましい音が鳴り響いてエリア内のモンスターを呼び寄せる。攻略本には「ボス以外の敵はほぼ反応するので、必ず見つけて解除すること」と書かれている。万が一、引つかかってしまった場合は一刻も早く止めないといけない。

「では、私の新しいスキルも役立ちそうですね」

「うん。期待してるよー、シオンちゃん」

妖狐のスキル「危険察知」だ。

危ないものが近づくとなんとなくわかるというもので、小部屋から少し進んだところでさっそく反応があった。

シオンの耳がセンサーのごとくぴこぴこ動いたのだ。

「可愛いですねー！」

「しかも便利。いいなあこれ」

罫を見落とす可能性がぐっと低くなる。

思わずシオンの頭を撫でると、ふさふさの尻尾がふりふりと動いた。

レンは笑みを浮かべつつ、ふと二十階と、それからその前の階を思い出して、

「いっそのこと、わざと発動させるのもありかな」

「え。もしかしてレン、アレやる気？」

「ん。シオンがいてくれるならやってもいいかな、って」

「? どういうことですか？」

「アラームを利用して敵を集め、一度に倒してしまおうということですよ」

作戦としてはおおむねメイが答えた通りだ。

その階の敵を一度に倒しきる自信と実力さえあれば、アラームは「手頃な経験値・資金稼ぎ手段」に変わる。

古き良きRPGでも用いられていた伝統的手法だと攻略本には書かれていた。二十一階から二十五階までのエリアは全てこの方法で時短可能。

その気になればアラームで全ての敵を呼び寄せて倒す↓ダンジョンに入り直して繰り返すという手法も用いることが可能だ。

「通路が狭いから一度に襲われる心配もないし」

「なるほど、そっか。後ろにいつぱいいるなら避けられてもどれかには当たるし」

これにはフリーも頷いて、

「そういうことなら、やってみよっか」

無理そうだったら階段まで逃げ切れればいい。

軽い打ち合わせを行い、HPとMPを補充したうえでフリーが罫をわざと発動。

初戦を行った小部屋の出口で敵が来るのを待ち構える。隊列はいつもと違ってレンとアイリスが前衛。後ろにはシオンを頭に寄せたメイが控えた。

しばらくすると敵の鳴き声、足音が聞こえてくる。

反響して大きくなった音は警報のやかましさと合わせてなかなか鬱陶しいものの、たまったイライラはすべてのにぶつけてやればよい。

「エアブラスト」

「風刃！」

「ウインドバレット！」

三人は敵の姿が見えるのを待たずに魔法を発動。

選んだ属性は風。風刃は妖狐の属性攻撃魔法の一つで、エアブラストはマジックアローの風属性版だ。

同時に解き放たれた風の力は合流し、より大きな流れとなって通路を進む。敵にぶつかれば衝撃を与え、動きを止めさせる。相手が耐えきれなければそのまま吹き飛ばして壁や他の敵にぶつけられる。

ファイアーボールでも使えれば話は別だが、手持ちの中では最も閉所での戦いに向いているだろう。

結果。

この階に限ってはどうか、前階に引き続きというか——ジャンルがダンジョン探索ではなく拠点防衛タワーディフェンスになった。

敵を倒し終わったら罫にだけ注意しつつマップを埋め、アイテムを回収し、ごくごく少ない残りの敵を掃討。

なお、アラム発動中は敵がいなくなるまでが一戦闘とみなされるらしく、無数のドロップ品は戦闘終了後にまとめて回収できたことを付け加えておく。



というわけで、二十一階の探索はなんと一回で終わった。

HPとMPは回復できるし、時短のおかげでさくさく進めたのでついでにボスを倒してきたのだ。戦い方はいつもの通り最大火力を叩き込んだ後、残った敵を前衛に叩いてもらう方法。出し惜しみが要ないのでぶつちやけ雑魚戦より楽だった。

意気揚々と帰った後は夕食。

ダンジョン探索の日はいろいろ相談もあるので、マリABELにアイシャも含めてみんなで食べることにした。待っている間にアイシャが作ってくれた料理に帰りがけに買ったできあいの品を加えた豪華な夕食である。

「これなら意外と早く下に降りられるかもしれませんね！」

屋台で売っていた牛肉の串焼きを片手にしっかりと握りしめつつアイリスが笑顔を浮かべる。

急がば回れ、の理念は理解してくれている彼女だが、同時に「父が年老いる前に」というタイムリミットを抱えてもいる。それを良く知っているレンは笑って「うん」と頷いた。

二十五階までは今日と同じ戦法が使えるらしい。

難易度と広さの上がり方から言って三々四回の探索を覚悟していたので、それを思えばかなりのスピードアップだ。

年内には二十五階まで到達できるかもしれない。そうなったら年末年始はさぞ酒が美味しいことだろう。

「ですが、あまり過信し過ぎない方がいいかと」

根菜多めの野菜サラダを取り分けつつ、マリABELが控えめに釘を刺してくれる。

「楽ができたのはシオンさんの協力があつてこそ。二十階までの道の

りをもう一度踏破した結果と考えるべきです。それに、二十六階以降はあの方法も使いづらくなります」

「確かに、ここまで数か月をかけたわけですからね」

メイが頷いてこれに同意。

粘土質の土壁は使いどころと保存が難しいということで、彼女は二十階までで採取した石を吸収^{たべ}している。

「まーまー。ここで楽ができたのは事実なんだしいじゃない。ね、シオンちゃん？」

「はい。鍛錬にかけた時間の分、みなさまをお助けできるように頑張ります」

「でも、頑張り過ぎないようにね？ シオンさんは気負いすぎるところがあるから」

先生らしいアイシャの忠告に、シオンは「大丈夫です」と明るい声で答えた。

「ダンジョンの空気にも慣れてきましたし、休息は十分に取らせていただいていますから」

「ああ、このところベランダで気持ちよさそうに眠っているものね」

「先生。その通りですが、恥ずかしいのであまり仰らないでください……！」

「シオンちゃんとはとっても役に立ってくれてるんですよ。お買い物にも付き合ってもらってますし」

ある日、シオンを連れて買い物に行ったところ「その子は今年の子だろう？ 割り引くよ」と言ってもらえたことがきっかけだ。

さすがにレンたちの私物までは初心者割を適用してくれないものの、食料品などの生活用品ならみんな快く割り引いてくれる。ストレージを使えば荷物持ちもできるので、買い物に行くときはシオンを連れて行くのがデフォルトになった。

もこも可愛いので商店街の人々からも大人気であり、早くも街のマスコットになりつつある。ファングッズとか作ったら売れるんじゃないかと思ってしまうレベルだ。

行きたびに「撫でさせてくれ」と言われるのを思い出したのか、シ

オンが少し恥ずかしそうな声で「そ、そういえば」と話題を変えて、「疑問に思っていたのですが、わたくしたちはダンジョンから貨幣を得ていますよね？ お金が増える一方なのに、どうして急激なインフレが起きないのでしょう？」

「ああ。それは『神器』のおかげなんだってさ」

神器とはキリのいい階のボスを（他のパーティも含めて）初めて倒した際に与えられる特殊なアイテムの総称である。

効果としては定められた額のお金を投入することでアイテムと交換したり、逆にいらぬ品物を投入することでお金に変換することができる。

「ランダムでマジックアイテムを作り出す神器なんかもあって、いらぬのが出たらお金に替えて何度もチャレンジする場合もあるとかないとか」

「それは、噂に聞くガチャというものでは？」

「まあ、ガチャかな」

もちろんお金に変換する際に価値が目減りするのでえんえん回すことはできない。その代わり、すごいアイテムが出てくれば大成功である。

なお、断っておくが全部が全部ガチャではない。

品物をお金に変換する神器は価値から換算しているらしいし、ポーションなどの消耗品を定額で買える自販機のようなものもある。

「賢者から聞いた話だけど、ある程度、急激にインフレしないだけのお金を残してこれにつき込んで、街を発展させたりダンジョン攻略を進めるための役に立ててるんだってさ」

かなりの高額ではあるものの、転職石やりセットストーンなども神器から手に入れることができる。

賢者がいくつもストックしていたのにはそういう裏があつたらしい。

「まあ、一部の人以上には使えないように管理されてるから、わたしも見たことはないんだけど」

「それは、やっぱり悪用されないようにですか？」

「そういうこと。ちよつとやそつとじや壊れないらしいけど絶対壊れない保証はないし、どこかに隠されたりしたら大変だからね」

地面に埋められたりしたら見つけるのが大変である。

「そういうのがあるからドロップ品をどんどん買い取ってもらえるんだよねー。まあ、神器から出てくるお金より買い取り額はちよつと安くなってるらしいけど」

手数料と思えば仕方ない。

「ん。わたしたちはお金に困ってないし、そういうのがあるから街から支援してもらってるってことで」

「今日もたくさん稼ぎましたものね。この調子なら、借金を返せる日も近いでしょうか?」

「焦らなくても大丈夫ですよ。娼館の運営が困るほどの出資はしていませんので、いつでも好きな時に返していただければ」

「そうは言っても、借金という言葉がどうにも……」

お嬢様のシオンとしてはやはり気になるらしい。

いざとなったらアラーム戦法を使って資金調達してもいいかもしれない。

攻略祝いのご馳走に舌鼓を打ちつつ、レンはそんなことを思った。

川の完成とシオンの聖域

「ついに川が完成したぞー！」

ある日、レンたちはとある集団に声をかけられて外出することになった。

男子禁制のスペースから唯一の道を通って出た後、森から湖を経て長い川へ。直線距離なら近いのにかかなりの遠回りである。川の支流を作って家の近くまで引つ張れないか、アイリスの両親と相談したくなった。

ともあれ、川である。

レンたちを呼び出したのは去年の年末に出会った酔狂な人々——この世界で初日の出を見ようというグループである。

用件は彼らが口にした通り。

十分な長さの川が用意できたのでみんなで見に行こうと誘われたのである。

デザイン画の大本をアイリスが描き、そこからはグループのメンバーに丸投げ。メンバーが一部ずつ別個にデザインして完成した川はそれぞれの個性が適度に引き出された結果、なかなかランダム性のある感じに仕上がっていた。

途中には川から水路が引かれて田んぼが作られている。

また、釣りをする人などのために建てられた小屋もあって前より川も賑やかになってきた感じだ。

「こんなところがあつたのですね」

「あはは。そういうえばシオンちゃんは初めてだったっけ」

「はい。森には何度も入っておりますが、ここまで来たことはありませんでした」

「さすがに距離がありますね……。移動するのも一苦勞です」

グループの最終目的は山の上から初日の出を拝むこと。

高所から地平線を見ようとするとキロ単位の距離が必要になるため長い川が作られることになった。

しかも、この長い川でさえ計画の過程に過ぎない。

「この調子だと山を作るのはまた来年ですね」

「だな。まあいいさ。今年は川の端あたりで飲み会をすればいい」

「長年進んでなかった計画がやっと動き出したんだ。それだけで十分だよ」

さっきの田んぼのように川は生活にも利用され始めている。

川から湖へと水が流れ込むことによって新鮮な水に困らなくなつたし、淡水魚ではあるものの魚も獲ることができる。

近いうちに製紙業のための小屋も作られる予定だとか。

「ねえレン、川なら水遊びにちょうどいいんじゃない」

「確かに。転ばなきゃ服もびしょびしょにはならないだろうし」

「お、いいねえ。せっかく来たんだ。思う存分遊んでいくといい」

一応、今回来たのは山を作るための下見という意味合いもあるが、それは終点をしばらく眺めれば済んでしまう。端を見たから帰ろう、というのも味気ないため参加メンバーはそれぞれに遊んだり酒を飲み始めたり、隅の方で将棋を指し始めたりしている。

将棋盤をわざわざ運んで来たのか……？ とツツコミそうになったものの、ストレージに入れてきたに決まっている。つくづく便利な能力である。

「よし、シオン。少し水に入ろうか」

「はい！」

靴とタイツを脱いで足を水にひたす。涼しい季節なので水はかなり冷たいものの、これはこれで気持ちいい。簡単には風邪をひかない身体さまさまである。

ぱしゃぱしゃと音を立てながら水の中を歩くとけっこう楽しい。

シオンも軽く飛び跳ねるようにしながら遊んでいる。悪ノリしたメイがそれを追いかけはじめ、なんだか追いかけてこの様相を呈しはじめた。

「二人ともー、はしやぎすぎると転ぶ——あ、遅かった」

つるつと滑ったメイが顔面から川へダイブ。

びつくりしたシオンは水しぶきをもろに浴びてしまった。さつと川から出た彼女はぷるぷると身を震わせて水分を飛ばし始める。な

かなか堂に入った仕草である。

可愛いのでこのまま見ていたい、と思いつつ歩み寄って、

「シオン。乾かそうか？」

「お願いしてもよろしいですか？」

「もちろん」

風を起こすウインドの魔法と火をつけるファイアの魔法を同時に使って温風を作り出す。疑似的なドライヤーである。

適度な熱さに調節してから風を当ててやるとシオンは「気持ちいいです」と歓声を上げた。

「なんだかピクニックみたいで楽しいですね」

「お弁当も持ってきてるから後で食べようか」

濡れる原因になったメイの方はというと、濡れた服に無頓着なのをフリーに咎められ着替えさせられている。

アイリスはスケッチブックと鉛筆を手に山のデザインを構想中だ。

「自然が多いというのはいいいことだと思います」

温風を出し続けながら何気なくみんなの様子を眺めていると、同じく何気ない調子でシオンが呟いた。

「父の実家も緑の多いところでしたが、この異世界ほどではありません。あちらは長年かけて人の手が加えられ、意図的に残された自然ですから」

「で、こっちは人間が意図的に作った自然か。なんだかんだ言って自然への憧れみたいなのもあるんだろうな」

「人は自然の恵みなしに生きてはいけませんからね」

向こうでは田舎暮らしブームみたいなものもあった。

多くの人は「生活が不便でないなら自然の多いところの方がいい」程度のノリだろうが、中には移住して本格的に田舎暮らしを始める人もいる。

レンたちの場合は望んでそうしたわけではないものの、家電の類がなくなってもそれはそれでなんとかなっている。

「魔法のおかげっていうのも大きいのかな」

「そうですね。科学よりもずっと自然を犠牲にしづらい力だと思います」

す」

「シオン、だいぶ妖狐っぽく？ 仙人っぽく？ なってきた？」

「レンさんこそ、自然に魔法を使いこなしていらつしやいます」

二人はどちらからともかくくすりと笑った。

そうしているとフリーとメイがこつちにやってきた。

「レン。メイちゃんの服も乾かしてあげてくれる？」

「あ。ではそちらがわたくしが」

レンに乾かされているシオンが同じように火と風の魔法を使う。

自分で自分の身体は乾かしづらいものの、シオンも複数の魔法行使はお手の物である。

「ご主人様。少しそのあたりの石を拾って帰ってよろしいでしょうか」

「ああ。少しくらいならいい……のかな？」

「ごつそり地形変えようとかしなければ少しずつ元に戻るはずだよ。記念に石を拾うくらいならぜんぜん大丈夫」

「メイさまの場合は記念ではなく拾い食いですけれど」

川のほとりで食べるお弁当ももちろんとても美味しかった。

「良かったら大晦日の宴会にも参加してくれよ」

「あー。それは気が向いたらで」

ただ、グループのリーダーからの誘いにはとりあえずそう返答しておく。

楽しいだろうとは思っただけけれど、何度も歩いてくるにはさすがに遠すぎる。一人＋シオンくらいなら抱いて飛べるので次はそうやって来ようと思った。



ダンジョン攻略の方は順調そのもの。

二十二階以降もレンたちはアラムを利用した戦法でリザードマンたちを蹂躪した。

一回り大きな湾曲刀と盾を持ったソルジャー、槍持ちで射程距離の長いランサー、手甲装備で動きの早いグラップラー、動ける魔法使いのメイジと次々参加してくる新戦力も「顔を合わせる前に全部吹き飛ばす」戦術の前ではあまり関係がない。

二十五階のボス、回復と強化、弱体化を使いこなすリザードシヤーマンを含む敵パーティをフルパワーで吹き飛ばすと、

「あ、ストレージが増えたみたいです」

「やっぱり今回はストレージか」

レンたちの四分の一程度だったアイリス、メイのストレージが二倍——つまりレンたちの半分程度まで拡張された。

賢者のところへ報告に行くと彼もこれには「やはりな」という反応。「もう少し腕飯振舞してくれると助かるのだが、さすがにそう上手くはいかないか」

「ボーナスがあるだけマシってことかな。持っていける量が増えるのは助かるし」

特にアイリスたちは持っていける矢の量、持ち帰れる素材の量が重要になる。

ストレージを使えるようになってからのアイリスは「取り出した矢をノータイムで弓につがえて放つ」という技が使えるようになり、今まで以上に連射がきくようになっていたため矢の消費も激しい。再利用できそうな矢は回収しているとはいえやっぱり減っていくので、これは地味にパワーアップだ。

「でも、最近木をがんがん使ってる気がするなあ」

「そうですね……。お父さんたちは大丈夫でしょうか」

少し気になったので、川の支流の件も含めてアイリスの両親のところに話をしに行ってみた。

「確かに、このところ木材の需要が上がってきていてね。木材が不足気味になってきているんだ」

「森にはまだけっこう木がありましたけど……」

「木はすぐに育つものではありません。先を見据えて森を広げて行かなければあつという間に枯渇してしまいます。……もつとも、この異

世界では少々ずるができるのですが」

木こりであるアイリスの父やエルフであるアイリスの母がいることよって木々や草花の成長は早くなっている。地球のように二十年と待つ必要はないものの、だからと言って一瞬でぽん！と生えてくれたりはしないのである。

例外は世界の欠片を使って地形として指定した時。

「そろそろ森の広げ時、ということだ。ちようどいい。川の支流に沿って森を作ることにはどうか」

「いいの、お父さん？ 形がだいたいびつになっちゃうけど」

「構わない。あとあと周辺も森にするのだから一時の事だ。それに、神社の傍に森があるのはそちらとしても都合なのではないか？」

「確かに。神秘パワーが上がりそうな気がします」

問題は森と繋がることで動物たちが民家に近づく可能性か。

「森が広がってきたら街の周りを壁で囲うつもりでいたんです。ただ、そうすると神社と森と壁の位置関係が微妙ですよね」

「そうですね。神社を壁の外へ置くとすると管理の面で不安が残ります。何か番人のようなものを置けばいいのでしょうか……」

「さすがにそういうスキルはわたしも持ってないですね……」

レンはアイリスの妹たちと遊んでくれているシオンに視線を向けた。

「シオン。妖狐のスキルで式神とか作れたりしないか？」

「さすがにそのようなスキルはありませんね……。おそらく、式神を使役できるとすれば陰陽師のようなクラスかと」

申し訳なさそうにそう答えたシオンは、少し間を置いてから「あ」と声を上げた。

「番人ではありませんが、神社への侵入を阻止することならできるかもしれません」

「本当？」

「はい。『聖域』というスキルがあります」

指定したエリアにモンスター等が寄ってくるのを防ぐスキルらしい。

人指定ではなく場所指定なためダンジョン探索中は使いづらい(二十階のような戦場にしても「近づかれる前に叩く」戦法とは相性が悪い)ため取得する予定はなかったそうだが、神社を守るために使うのであればもってこいである。

というか、狐が御神体になっている神社が「聖域」になったら正真正銘のパワースポットである。

アイリスの母はふっと微笑んで、

「解決したようですね」

「はい。神社周辺だけ壁を作らないで森とダイレクトに繋がれば良さそうです。水場も神社の傍に作りましょう」

念のため帰って他の住人達にも相談したところ、本当に動物避けになるか先に試したいという意見が出た。そこで適当な動物を捕まえてきてシオンに「聖域」を作ってもらい、そちらへけしかけてやること。

「入れる動物と入れない動物がいるようですね……?」

「入れる動物はみな大人しいように見えます。害のある者だけを弾くということでしょうか」

同じ動物でも気性の荒い個体は入れなかったりしたため、おそらくそれが正解だろうということになった。これなら特に問題はなさそうだ。

持つべきものはスキルである。

ちなみに気性の荒い動物たちもレンたちを無暗に襲ってきたりしない。

「力の差がわかるんだと思いますよ」

と、アイリス。

ダンジョンに潜っていない者でも何か月か生活していればさすがにレベルが上がっている。本気で自己防衛すればある程度の獣には勝てるだろう。動物たちはそういったことを本能で察しているらしい。

なお、これには例外もあるようで、

「私だけ妙に攻撃されるのですが?」

「こいつらにとってはメイが人形かなにかに見えるんじゃないかな？」

怒れるニワトリから執拗に蹴りつけられているメイは「理不尽です」と言いつつもニワトリを蹴り返したりはせず大人しくしていた。そういう優しいところに付け込まれている可能性もあるかもしれない。

「ところでシオンちゃん、経験値のほうは？」

「ええと……上がっていますね。スキルを使うたびなのか、それとも聖域によつて獣を追い払うたびなのかはわかりませんが」

「便利だからいいと思います。ご利益もありそうですね」

神社の建築に関しては大工のおじさんも慣れていないということ。若干時間がかかっているものの、もう少ししたら完了する見込みだ。

今年の年末年始には余裕で間に合うので、この分だと本当に初詣の客が来るかもしれない。

「あれ？ もし神社に初詣客が来たら誰が応対するんだろ？」

「それは私たちでしょ。レン、今度は巫女さんの格好してみる？」

「ちよつと心惹かれるものはあるけど、わたしには確実に似合わないかなあ」

コウモリの翼を備えた巫女さんはあまりにも怪しすぎる。

ちなみに聖域には入れたのでレンは善のサキュバス扱いらしい。なお、善のサキュバスってなんだよ、というのはあまり考えてはいけない。

本格化するダンジョン

二十六階。

出現する敵は相変わらずリザードマン。

敵の数、種類が増えてきたこともあつて厄介ではあるものの、少しずつ相手の動きにも慣れてきた。範囲魔法や連射を駆使すれば対処自体は可能である。

ただし、新たに生じた厄介なポイントがひとつ。

いくつかの罠と敵を乗り越えたレンたちは、土の洞窟にひっそりと響く足音に気づいた。

「……来たかあ」

シオンの耳も小さくぴこぴこと揺れている。

今回は罠ではなく敵の襲来だ。ちなみに今、アラームは鳴っていない。単純に敵が自由行動を取っているのだ。

ワンダリングモンスター
徘徊する魔物。

今までの敵は基本的に持ち場から離れず、互いが視界に入るまで戦闘行動を取らなかった。しかし、二十六階からの敵の一部はダンジョン内を歩き回り、物音を察知するなどすれば侵入者に向けて移動、突如として襲い掛かってくる。

足音は少しずつ大きくなり、やがて歩行音から走行音へと変わる。かちやかちやと響く金属音は装備のたてるものだろう。

レンたちは顔を見合わせ、立ち止まって敵を迎え撃った。

アイリスの矢が最前衛を牽制、盾を構えて矢を防いだところに本命のファイアボルトを直撃させて大きくHPを削り取る。

二体目の前衛がトップに躍り出たところでレンの二重マジックアロー（ブースト付き）が発動。さらに敵を足止めする。

光の矢が全て消え去ったタイミングでシオンの狐火が五発連続で殺到し、前衛二体を見事消滅。後衛へのけん制を行って。

すかさず前に出たリアベルとメイが残る敵を順次叩き潰した。

「ふう、なんとかあったねー」

敵が抜けてきた場合に備えてナイフを構えていたフリーがほつと

息を吐く。

迎撃の始まりを担ったアイリスも微笑と共に弓を下ろして、
「ずつと緊張を強いられるのは大変ですね。本当はそれが普通なんですよけど……」

「敵のいる場所が決まっているのが当たり前でしたからね。勝手が違うのは仕方ありません」

ワンダリングモンスターの行動パターンは大まかに決まっているものの、レンたちの行動——戦闘によって立てる音や話し声によっても変化する。大きな音を立てれば当然、それを聞きつけてこちらに向かってくるというわけだ。

ある意味ではアラームと似たようなものだが、一部の敵だけがそうしてくるとするのが厄介である。

全部のワンダリングモンスターを倒しきらない限りは不意に襲われる可能性が否定できないし、三叉路や十字路の意味がこれまで以上に深くなる。現実的に背後からの奇襲が発生するようになるからだ。「ここからの階層では全てを探索しようとせず、ボス到達だけを目指すのも一つの手段です。複数回に分けて網羅するにせよ負担が大きいですから」

「こうなってくるとダンジョンの広さと復活する敵がものすごく厄介ですもんね……」

ある意味、二十五階までアラーム戦法が通用したのは「ここで十分稼いでおいてね」というダンジョン側の温情なのかもしれない。

いや、そんなゲームめいた狙いが本当にあるのかは不明だが。挑戦者たちに段階的に困難を強いる意図があることだけはここまでの経験からわかる。

「ですが、脅威度と同時に宝の価値も上がっています。無視するには惜しいかと」

「うん。じゃあ、やっぱりアイリスにアレをお願いしようかな」

水を向けられたアイリスはこくりと頷いて、

「ショートカットしちゃいましょう」

壁に手を当て、精神を集中して発動させるのは土属性の精霊魔法。

「トンネル」

アイリスが触れた箇所を中心に土が消失、ひと一人が余裕をもって通れるだけの穴が出現した。

攻略本によってマップは把握できている。今開けた穴は高額之宝が配置されているエリアへの大幅なショートカットルートだ。

「こういう時のために母から教わって練習していたんです」

「お見事です、アイリスさま。これなら時間短縮できますね」

シオンの素直な賛辞にアイリスは青い瞳を輝かせながら照れてみせ、それから真面目な顔になって言った。

「でも、気をつけてくださいいね。敵もこの通路を利用してくる可能性がありますから」

「うん。この穴を通っている間に襲われるかもだしね」

幸いなのはアイリスの開けた穴には罠が絶対ないということ。盗賊のフリーが先頭を歩く必要がないためメイにトップを任せられる。

率先して穴に立ったメイは手にしていたメイスをいったんストレージに収納。

「狭い場所では素手の方が有用ですね」

遠心力で威力を増す武器であるメイスは狭い場所では不向き。マリアベルの蹴り技にしても回し蹴り系が使いづらいので、最後尾は耳が良く小回りの利くフリーが務めることになった。

「じゃ、どうしても欲しい宝だけ取ったらボスを倒しに行くことで」

「お、おー……」

いつもの癖で「おー！」とやりそうになった仲間たちは敵を呼び寄せないように小声で返事をしてくれた。



「ふむ。では、二十六階も無事にクリアしたわけだな」

「うん。なんとか、って感じだけど。だんだん、みんなが苦勞して攻略

してきた意味がわかってきた」

飛行できるようになったおかげでレンの行動範囲は大きく広がった。

街を歩いていると人々（主に男）からの視線が気になるが、空を飛んで目的地に一直線ならその心配がない。視線が飛んでくるにしてもそれは「うわ、エロ」という意味ではなく「鳥か、飛行機か」といった好奇の意味合いである。

といっても、それで頻繁に買い物しては同じなので訪問先は限られるのだが。

アイリスの実家がある森や、女にうつつを抜かす気がないと態度で表明している賢者の家などは訪ねやすい場所といえる。

特に賢者は向こうからレンの家まで来られないのでこつちから行くことになる。

今回はシオンと一緒に二人で来た。

今まではみんなで来ることが多かったものの、パーティ人数も増えたしこれからはこういう訪問の仕方が多くなるかもしれない。

レンからの報告を聞いた賢者は「スムーズなのは良い事だ」と言っただ上で頷いて、

「君達が頼りにしている攻略本も元は先人が情報を集め、地図を描いて作り上げたものだ。新しい階層はそうして一つ一つ道を切り開いていかねばならない」

「気の遠くなる作業だと思うよ、ほんと」

ワンダリングモンスターやアラムを体験した今となってはしみじみと思う。

二十六階レベルでさえ一苦労だろうから、これが五十階クラスとなったらいったいどうなるのか。もし百階までたどり着かなければならないとしたらいったいどれだけの労力が必要なのか。

「あのさ。もしかしてだけど、攻略本の精度って先に進むほど落ちる？」

「無論だ。三十階までは問題なからうが、その先からは未確認の情報もあるかもしれない。心して進むと共に、新たな発見があれば共有す

るようにしてくれ」

「わかった」

レンたちの戦いが後の挑戦者の助けになるかもしれない。そう考
えると責任重大だ。

「でも、なんか少しずつ重要人物になってきた気分だよ」

「何を言う。君達が若手の代表だと前にも言っただろう。シオンには
その意味がよくわかるのではないか？」

「はい。レンさまたちの成してきたことは並大抵のことではありませ
ん」

「シオン。なんか恥ずかしくなってくるから止めよう」

「レンさまも、こちらへ来て半年程度で二十五階レベルまで導かれた
らそう感じるのではないかと……」

「……苦勞をかけてごめん」

抱き上げて撫でてやると、シオンは「問題ありません」と尻尾を振つ
た。

レベルが上がってきてきてそこそのサイズになってきたので抱き心
地もよりいっそう増してきている。そろそろ「寝ている時に抱きしめ
すぎそうで怖い」といった心配もなさそうだ。

そんなレンたちの様子を賢者はじつと見つめ、しばらく間を置いて
から口を開いた。

ひよっとしてシオンを撫でたかったのだろうか。

「ともかくだ。少なくとも君はあの住宅街のリーダーだろう？ 相応
の責任と信頼を集めていることを自覚しておいて欲しい」

「うん。……この歳で借金したうえにリーダーなんて責任重大すぎる
けど」

「君はこれまでも変化を柔軟に受け入れてきた。それと同じ事だと思
えばいい」

言われたレンは自身の姿を見下ろしてみる。

一年半前——ここに来たばかりの頃にはなかった豊かな胸。白く
滑らかな肌もすっかり見慣れてしまい、男だった頃の肌がどんな感じ
だったか正確には思い出せない。

背中の翼と尻尾もかなり思い通りに動かせるようになったし、露出を気にしつつお洒落をするのも当たり前になってきている。

ちなみに今日は飛んでいる時に下着が見えないようにパンツルックだ。

「もしかして、今日の話って説教がメインだった?」

「いや。そろそろ君にも特権を与えておこうと思っただけ」

言うのと、賢者は席を立てて外套を羽織り始めた。

「出るぞ。付いてくるといい」

言われるままシオンを抱き上げて外に出る。すると細身の中年男は小さく呪文を呟き、ふわりと空へ浮かび上がった。

魔法系のクラス、それも高レベルとなれば空くらいは飛べるか。あのポータルを作ったくらいだし不思議はない、とレンは後を追いかけてつづいた。

向かった先はなんとということはなく、神殿。

ただし、彼が下りたのは内部ではなく外周。それも四方にある階段を避けて外壁の傍だ。

しかし、よく見るとそこには小さな宝石が埋まっている。

「これは?」

「神器の収められた宝物庫への入り口だ」

「え」

賢者と共に宝石へ触れると小さな輝き。これでレンも利用者として登録されたらしい。

「登録するのはレンだけだ。だがまあ、シオンを連れて入るくらいは構わないだろう」

「わたしも今みたいに登録者を増やせるわけ?」

「いや。新規登録の権限はない。同行者を連れていくこともできない。ユーザー権限と管理者権限の違いと言えるかわかるか?」

シオンであれば抱き上げたままで連れていけるらしい。動物扱いというか荷物扱いな気がするが、色んな意味で気まずいのでツッコむのは止めておいた。

「どうやって入れば?」

「宝石に触れて『入りたい』と念じればいい」

言われた通りにすると、ポータルに入った時と似たような感覚。

中は石造りの小部屋になっていて、そこにいくつかのアイテムが置かれている。マジックキューザーとしてのレンの感覚はそれが非常識なほどハイレベルな品物であることを感じ取った。

見た目はコインを入れる穴の開いた箱だったり、ただの本だったり、ゴミ箱のような何かだったりといふアレなのだが。

「これが、神器？」

後から入ってきた賢者が「そうだ」と教えてくれる。

「これを使えばドロップ品を直接換金することも、ポジション類を好きなだけ購入することもできる。収集物を君一人で持ち込むのは骨が折れるかもしれないが、多少は収入増加に繋がるだろう」

「うん」

それこそシオンを連れてくればストレージが二倍になるので大助かりだ。

「まさか、噂の神器にこれほど早くお目にかかれるとは思いませんでした……」

「君達は特別だ。フリーたちの入室を制限したのも極力、入れる人数を少なくするためだと思ってくれ」

「じゃあ、どうしてわたしに許可を？」

「言っただろう。君にはいずれ街の中心に関わってもらおうと。その下準備のようなものだよ」

責任を負わせ、それを全うできているかをチェックする。

信頼に足る人物だと判断できたら上層部の会議にも呼んで意見を求める。

「先に会議のほうが良かったんじゃない？ ほら、壊されたり盗まれたりしたらいけないらしいし」

「呼んで欲しかったのか？」

「いや、できれば一生いらない」

賢者は笑って「そういう事を言える者は悪さなどしないさ」と言った。

「ここはシオンの『聖域』に似たスキルで守られている。歯に衣着せずに言えば、君達程度の力では破壊はおろか移動さえできないだろう」「そんなに嚴重だったんだ……」

「無理もない措置でしょう。一つしかない品物なのですから代えがききません」

とはいえ、これらの神器でできることには限りがある。

ポーションを多用するパーティ、例えば付き合いのある彼らであれば大喜びするだろうが、レンたちにはそれこそ「収入がちよつとアツプする」程度が関の山ではあるまいか。

「……お神酒なんかの代わりにポーションを売ってみるとか」

「初詣客を見込む程度なら構わないぞ。面白がって買う者もいるかもしれないし、価格が見合わないと思えば買わなければいいだけだ」

「あ、許可出るんだ？」

まあ、いざという時のためにポーションを常備しておくのは悪くない。

在庫切れを心配せず購入できるのは助かるし、神器の中には固定効果のマジックアイテムを生成する自販機的なもの（代わりに買える種類は限られる）もあるようなので、吟味すればなにかしらいい使い方があるかもしれない。

レンは笑って「ありがとう」と礼を言った。

「ここを使わせてもらう代わりにダンジョン攻略を頑張る……つてこととでいいのかな？」

「ああ。わかってくれたようだなによりだ」

今日は金もアイテムもろくに持ってきていないので使うのはまた後日にする。

レンは入り口の方へと移動しながら冗談めかして、

「ここなら誰も来ないから、とか言いながら襲われなくて良かったよ」「ここまで勝ち取ってきた信用をいまさら投げ捨てる気はないさ」

レンとしても、もし襲われたらフリーあたりにもッセージを送ってから死ぬ気で抵抗するつもりだったので、そうならなくて本当によかった。

聖域とポーション

「聖域とはこうやって使うものだったのですね」

ボス部屋前の床で香箱座りをしながら、シオンがしみじみと呟いた。

今、一帯には彼女の聖域が築かれている。

スキルのレベルを2に上げて同時使用数の上限を2に増やしたのだ。これはダンジョン攻略に際して必要に迫られたための措置。

「今まではこういうのいらなかったもんね。納得」

フリーリが言った通り、二十六階以降ワンダリングモンスターが出現するようになったのがきっかけだ。

これまでのダンジョンなら戦闘のたびに立ち止つてのんびり休憩を取ることができた。しかし、徘徊する敵がいるとなると本格的に襲撃を警戒しないといけない。

今までも念のためにと警戒してはいたものの、必要となる警戒のレベルが違う。戦闘でMPを大量消費した直後、別の敵に襲われる心配もしなければならず、階を追うごとに敵が強くなることと相まって「落ち着いて準備を整えたい」という欲求が強くなった。

特にボス戦前は重要ということで、こうしてスキルを取ってもらったのだ。

聖域があればワンダリングモンスターも近寄って来ないのでゆっくりと回復できる。

なお、聖域はボス部屋の敵には通用しなかった。

部屋の前に展開したまま外から魔法で攻撃したら近寄られることなく勝てるのではないかと試したところ普通に乗り越えてきたのだ。

さすがにそこまでうまい話はないらしい。

「ご主人様。MPの具合はいかがですか？」

「うん。そろそろ満タンになる。……よし、終わった」

ステータスを開いて詳しく確認していたレンは現在MPの欄が動かなくなったのを見て頷いた。

同じようにアイリスが領いて、閉じたままの扉に目を向けた。

「じゃあ、いよいよですね」

二十九階のボス部屋が開かれ、そして豪快な魔法音が室内に満ちた。



「三十階」

「三十階だね」

「三十階、ですね」

行きつけの洋食店からテイクアウトさせてもらったご馳走で祝杯を挙げ、ひとしきり二十九階の感想を言い合ったところで、話題は次の階層のこととなった。

だいたいの情報は攻略本から確認済み。

食事の参加者で唯一、ダンジョンには疎いアイシャが「三十階はどんなところなの？」とみんな（主にマリアベル）へ向けて尋ねた。

「二十階と同じでオープンフィールド型の戦場よ。相手はリザードマンで、今回は敵の大規模集落に私たちが攻撃を仕掛けることになるわ」

「集落……って、敵は何匹くらい？」

「正確に数えるのは難しいから大雑把にだけど、およそ二百」

「ん……っ!？」

絶句したアイシャがフォークからフライドポテトを落とした。

無理もない。

二十九階のボス部屋もなかなかのパーティ構成だったが、それでも敵の数は二十だった。一気に十倍とか加減して欲しい。

まあ、数だけで言えば二十階の殲滅戦のほうが合計は多いのだが。

「今回はこつちから攻めなきゃいけないですよね……」

「うん、そこが大きな問題になる。敵は当然こつちに対応してくるし、迎撃のための備えもあるわけだから」

集落の外へおびき出そうとしたところで遠距離から応戦してくる

だろうし、同じく空からの攻撃にも十分な数の弓や魔法で反撃してくる。

時間をかければ正面からだけでなく側面や背後に回られるかもしれない。敵が散らばっている分、乱戦になって味方と分断される可能性も高い。

「そんなの関係ない、とばかりに全て殴り倒せばいいのですが」「いくらメイさまでも無理ではないかと……」

メイのボディだって無敵ではない。

リザードマンの一撃なら少しずつ欠けたり砕けたりはしていくし、囲まれたら多勢に無勢だ。

「マリアさんは攻略した経験あるんだよね？」

「ええ。もちろん単独ソロではなくパーティを組んで、ですが。その時も決して楽な戦いではありませんでした」

「そっか。うーん、やっぱりさすがに厳しそうだなあ……」

難易度は二十階よりも確実に上がっている。

「二十階の時と同じように応援を頼むことはできませんか？」

「できるけど、あいつらはいま二十六階だからまだちよつと時間がかかると思う」

他の人間に頼むことももちろんできる。

例えば高レベルの年長者に同行を依頼すれば楽に攻略できるが、ベテランほどパワーレベリングで失敗した教訓を重く受け止めている。回復役が足りないとか前衛が足りないなどで一人臨時で補充する程度ならともかく、本格的な参戦依頼は受けてくるか怪しい。加えて言えば、レンたちはもうマリアベルという先達に助けてもらっている立場だ。

また、人を呼べば呼ぶだけ報酬も経験値も減る。

経験値には反映されない生の経験も軽いものになってしまうだろう。パーティ内で工夫して楽に勝つのと人に助けってもらうのではまた別だ。

自分たちだけで勝てるのがベスト。

気づけば二年目の十一月も終わりに近づいている。

年明けまでに三十階を攻略できると気持ち良く新年を迎えられるのだが、

「とりあえず、しばらくは二十五階あたりでレベル上げと資金調達をしようか。その間に作戦を練ったりするってことで」

仲間たちからもこれに賛成の声上がり、ひとまず相談は終わりになった。



「シオン。神社に行こうと思うんだけど一緒にどうかな？」

休日。

リビングにいた子狐——とは言えなくなってきた可愛らしい狐に声をかけると、彼女は「お伴いたします」とジャンプしてレンの腕に収まってきた。

サイズに比例した存在感。

ストレートに言えば重さも増してきているものの、小さい時は落としてしまいそうで怖かったし、このくらい大きいほうが気持ち良くもある。

しっかりと抱き留めてから、仲間たちに「散歩してくる」と伝えて外に出た。

それなりに近いので飛んでいく必要はない。

外はなかなかのいい天気。

敷地の周囲が闇に覆われているせいで太陽の姿はほとんど見えなものの、陽光はどういう原理か闇を越えてちゃんとやってくる。まあ、同じように雨雲もやってくるのはなんとかならないかと思わなくもないが。

いくつかの家では植物を栽培したりもしている。

我が家の庭にもアイリスの作った小さな家庭菜園がある。精霊魔法の影響なのか育ちが良く、そのうち収穫されたら美味しく食べられそうだ。

「近くに木々が多くなったせいか、空気がいつそう美味しい気がする

す」

「うん。森に近い場所にしたのはやっぱり正確だったかも」

シオンの聖域に入ると、なんとなく肌に感じるものがある。

日本でも「パワースポットは空気が違う」とか何とか言っている人はいた。当時のレンはまったく信じていなかったものの、そういう感覚のある人間というのは実際にいるのかもしれない。

聖域の中、神社の周りはどこか清浄な雰囲気がある。

少し前に完成した建物は敷地の奥、森と交わるような地点にある。短い石畳の先に、シオンがもつと大きくなったらこうなるのでは？

という感じの狐の石像が二体。その奥に木材で作られた小さめの建物がある。

入り口の前にはこれまた控えめサイズの賽銭箱と本坪鈴。ガラガラと鳴らして手を合わせる。祀られる側のシオンも真面目に目を伏せて祈る体勢を取っていた。

「あ、いくらか賽銭が入ってる」

「お参りしてくださっている方がいるんですね」

辺鄙な場所にあるうえに女しか入れないので別に期待はしていなかった。形だけ作っておくか、くらいのつもりだったのだが、意外と信心深い、あるいは物好きな人がいるものである。

「中の方はどうか」

本殿には誰でも入れるようにしてある。

ご本尊と言えるようなものはないので中はただの板張りの空間である。むしろ、こうしてシオンがやってきた時にこそ本来の意味が生まれるとも言える。

一応持つてきた掃除用具を入り口付近の壁に立てかけつつ、レンは中央に置かれた箱に歩み寄った。

これは神器を使って入手したマジックアイテムだ。

特定のアイテムを入れると中のアイテムを取り出せる機能がある。要は金庫のようなものなのだが、一定額の金銭を条件にすれば自販機のようにも用いられる。

レンはお金ではなく、もう一つの設定アイテム——箱の鍵を使って

箱を開くと中を覗き込む。中には数本のポーションといくらかのお金。

「こっちも売れてる……!?!」

「ありがたいことですが、少し申し訳ない気もしてしまいますね」

売っているのはなんの変哲もないHPポーション。しかも価格設定は市販よりも若干高めである。箱の購入にお金がかかっているのでも本末転倒感はあるものの、原価との差額が収入になる仕組み。それでも買ってくれるとは。ノリなのか、縁起ものパワーなのか。

とりあえず、何本か持つてきた追加分を加えておく。お金は回収してパーティの共有財産に入れる。

「あれ、でもなんか、ちよつとポーションの色が違うような?」

「え?」

「ほら、これ。間違えて買ったかな?」

一週間くらい前から入れてある分と新しく持つてきた分。一本ずつ手に取って見せるとシオンも「本当ですね」と首を傾げた。

ちなみにポーションは密閉されているうえに品質的にもかなり長もちする。冷暗所に保管している分にはこんなに早く劣化したりはしないはずである。

「購入時にはわたくしもいましたし、確かにHPポーションを購入されたのを確認しているのですが……」

「じゃあなんでだろ」

首をひねったレンは少し考えて、

「逆に神社の神聖パワーが影響したとか」

「それならば良いのですが、少々不安ですね」

顔を見合わせた二人はせつやかなので疑問を解消してしまうことになった。

二本のポーションをストレージにしまい、街の鑑定屋まで飛ぶ。鑑定料を払いスキルで確認してもらった結果は、

「ああ、こっちの方が品質が良くなっているな」

「マジですか」

「マジだね。ハイHPポーション……とまでは行かないけど、通常価

格と大差ない値段でこの効能なら『靈験あらたかな特製ポーション』つて言えるんじゃないか」

「まさかのまさかでしたね……」

聖域の効果がこんなところにも表れるとは。

「うちでも宣伝しておこうか?」

「えーっと……まあ、世間話のついでにでも話してもらえたら小遣い稼ぎくらいにはなるかもしれません」

「あいよ」

鑑定屋の店主は快く応じてくれた。

お礼を言つて店を出た後、ついでに神殿へ寄つてポーションをさらに買い足しておいた。そんなに売れないと思うが、念のためである。

「レンさま。しばらく時間を置かないと品質が上がらないのであれば、入れたばかりのポーションが買われてしまうのがっかりされるのでは?」

「あ、そっか」

ならばともう一つ、保管用の箱も買った。

ちなみに箱の代金をペイするにはポーションをかなりの数売らなといけない。しばらくの間——下手したら年単位で小遣い稼ぎどころかただの道楽になりそうである。

「ですが、少しでも人のためになるのであればやる価値もあるかと」

「ん、シオンはいい子だなあ」

褒めると、少女は「そんな」と恥ずかしそうに照れた。

思ったよりも長い散歩になってしまった。新しい箱を設置したりと作業をした後、本殿をさつと掃除する。その間にシオンは本殿の入り口前、短い木製の階段のところで丸まってひなたぼっこをしていた。

掃除が終わつて戻ると気持ちよさそうな寝息が聞こえていたので、レンは彼女のそばに座つて陽の光と森の空気をしばらく堪能した。

「レンさん、シオンさん、お昼ご飯ですよー」

「ありがとう、アイリス。すぐ戻るから」

「……ん。あ、申し訳ありません。いつの間にかうたた寝をしてしま

いました」

「気にしなくていいよ。わたしも気持ち良かったし」

それから、レンとシオンは暇な日はたまに神社でのんびりするようになった。

サキユバスのレンはともかく、妖狐であるシオンのほうは「ガチの神様がお昼寝している」と一部で話題になり、参拝客の増加に一役買うことに。

シオンが寝ている時はみんな鈴を鳴らす代わりにシオンをそつと撫でて帰っていく。この子に会えるならお賽銭くらい安い、なんていう声も複数聞こえた。

ついでにポーシオンを買っていつてくれる人もいて、結果、神社はプチ人気を獲得してそれなりに活躍することになったのだった。

その後、調子に乗ってMPポーシオンの販売箱も増やしたらまた設備投資が増えてお小遣い稼ぎが遠のいたりもしたのだが、それはまあ、また別の話。

三十階の戦い

「……結局、正攻法が一番かな」

レベル上げと資金調達に勤しむこと三週間余り。

戦力を底上げしつつ作戦を練ったり、三十階攻略に関する聞き込みをしたレンたちだったが、結果はあまり芳しくなかった。

以下が聞き込みの結果得られた情報の一例である。

『攻略法？ うーん、メテオでも降らせられれば手っ取り早いんじゃない？』

『そんなもの、近くにいる奴を片っ端から斬り伏せていけばそのうち終わる』

『鉄球を撃って片っ端から建物を叩き壊した話は聞いたことがあるけど』

参考にならないにもほどがある。

三十階クラスとなると攻略経験のある者はなかなかのベテラン揃い。それぞれ個性豊かな能力を持っているため、容易に他の者には真似できない戦い方をしているのだ。

レンたちのパーティは継戦能力が長所であって、派手な一発芸は持ち合わせていない。

もう少しまともな方法があれば良かったのだが、あいにくリザードマンの集落は小技で攻略するには向いていないらしい。

「わたしとシオンが空から攻撃して、フリーたちには地上から敵をおびき出してもらおう。アイリスがいれば敵の狙撃手も倒せるだろうから、一方的に不利にはならないと思う」

「普通だね」

「普通だけど、慣れた戦い方のほうが失敗しないし。相手が混乱しているうちに数を減らせればだいぶ楽になるはず」

マリアベルがこれに頷いて、

「戦力もだいぶ増しましたし、ポーシオン類の調達も可能になりました。正面から挑むのも決して無謀ではないと思います。……ただ、レンさんたちは危険な立ち位置になるかと」

「わかってます。対空射撃が来るでしょうけど、わたしたちは空で自由に分けますから」

レンは飛べるし、シオンは空中を飛び跳ねられる。

気をつけていればそうそう当たることはない。攻略本によると飛行できる敵はいないため、下さえ見ていれば攻撃の有無は全てわかるのだ。

メイも無表情のままに同意。

「私達は近づいてくる敵を叩けば良いのですね。単純明快です」

「狙撃手の撃墜……。責任重大ですね、頑張ります！」

アイリスには弓に魔法にと大活躍してもらうことになる。元氣よく応えてくれたのは嬉しい。

「わたくしはレンさまと共に行動すればよいのですね」

「私は今回、あんまり役に立てないかな。それとも潜入工作とかしてみる？」

「めちやくちや危ないからフリーはみんなと一緒にして欲しい。メイとマリアさんだけじゃ手が足りなくなるかもしれないし」

「おっけ。じゃあ、それで行くっか」

新しいスキルを取得し、ストレージにポジションを複数個用意。

攻略本に描かれたマップをもとに動き方を話し合っ——クリスマスが近づいてきたある日、レンたちは六人で三十階へと挑戦した。



三十階はダンジョン内ではあるものの、二十階同様に天井が高く屋外とあまり変わらない雰囲気となっている。

辺りに漂っているのは湿り気のある空気。

川の近くにある湿地帯に敵は集落を作っている。階段から出た先は集落から徒歩数分の距離にある木立ちの中だ。この中にいる分には即座に発見される心配はない。

耳を澄ませたりして様子を窺う限り、情報にはない異常事態が起こっている様子もなし。

「じゃあ、予定通りに」

「了解」

ワンダリンググモンスターを警戒するようになってしばらく。小声で合図し合うのにも慣れてきた。

レンはシオンと頷きあい、空中へと上がっていく。

大人の狐に近いサイズになったシオンは抱いて運ぶには少々大きいため、自分で空を走ってもらう。四足歩行なのでスピードは十分に出る……というか、スピードに乗っていればレンよりも速い。

十分な高度を保ちつつ進むと集落がどんどん近づいてくる。リザードマンの集落は土が主な素材だ。

土を固めた壁で敵を阻み、同じく乾いた土製のやぐらから物見を行う。住居も土でできた大きめのかまぐら、とでも言うべき代物だ。

木材を使ってくれていけば「燃やす」という手もあったのだが、土では燃えない。多少の物理ダメージも防がれてしまうのでレンやシオンの魔法だと破壊をメインにするのは難しい。

ただ、相手はレンたちによる襲撃があることを知らない。

まして、空から来るとは思っていなかったためか、物見の兵に発見されることなくかなり近くまで行くことができた。

「マジックアロー！」

「風刃！」

レンはおなじみ、ダブルキャスト一二重魔法によって生み出される百以上もの光の矢を。

シオンは修得した属性魔法の中から風属性を選んで連続発動させる。妖狐が空を駆けるたびに揺れる尾は七本。連射数は加減しているので全開ではないものの、風の刃はやぐらの上のリザードマンに見事命中、その身体を切り裂いていく。

光の矢もいくらかは敵に命中。空気の流れに影響されない代わりに物理的な攻撃力に乏しい矢は壁や建物には大したダメージを与えられないが、別にそれで構わない。最初から一撃で倒せるとは思っていないし、見張りを全部落とすのも諦めている。

生き残った見張りの悲鳴。

がながん、と原始的な警報（金属製のバケツ的なものをぶつ叩いて
いるだけ）が鳴らされ、集落内が一気に騒がしくなる。

見下ろせば、子供とおぼしき小さなリザードマンが母親らしき者に
連れられて住居の中に入っていくのが見えた。オスと思しきリザ
ードマンたちは逆に住居から武器を持ち出して迅速に戦闘の準備を始
めていく。

「うん。……ちよつと患者になった気分だなあ」

なにしろ生活拠点を襲撃しているわけで。

敵の中には幼いリザードマンや母リザードマンも交じっているの
だ。さすがに倒すのは少し可哀そうな気がするもの、オスだけを倒
すなどと悠長なことを言っている余裕はない。

母親だって戦う時は戦うのだろうし、子リザードマンも成長すれば
戦士となって人を襲うはずだ。

「彼らは人とは相いれない敵同士。神殿やダンジョンを作った者から
すれば報復のような気持ちだったのかもかもしれません」

「ん。手加減せず、思いっきり行こう」

レンたちは集落の上空を移動しながら魔法をバラまいていく。

狙いは絞らず、敢えて散らす。飛び道具を持っていないリザードマ
ンはそれでも、避けられなければ喰らうしかない。

弓やクロスボウを構えた者たちが撃ち落とそうと狙ってくるも、そ
れはかわすか、あるいはシオンの「風刃」が作る空気の流れによって
無力化していく。風の刃は地面や壁などに当たればはつきりとした
痕を残し、地上のモンスターたちを脅かす。

「と、だんだん数が増えてきた」

何度か魔法を放っているうちに飛び道具を手にした戦士が多く
なってくる。

さらには魔法使い系のリザードマンが混じり、炎や風を放ってく
る。

「ウインドブラスト」

シオンの風刃だけでは足りないと思つたレンは魔法属性を風に変更。
広範囲に影響する風の衝撃波は敵の飛び道具を散らし、敵にぶつかれ

ば動きを止めたり転ばせたりする。

それでも、あちこちから放たれる攻撃をすべてかわすのは神経を使う。

レンが防衛を担当、合間にシオンが着実に一体く二体ずつ仕留めていくように努めるも、このペースではいつまでもつか。

レベルアップでMP量が増えているし、スキルである程度は補えるようになったものの、シオンはまだまだ燃費が悪いのだ。

「ですが、そろそろみなさまが……！」

変化が起きたのはシオンが言った直後だった。

集落の外周からなにかが壊れるような大きな音。アイリスの行使した精霊魔法「ストーンブラスト」が壁を穿ったのだ。

レンたちが陽動を行っている間に地上の仲間たちが到着したのだ。

さらにはメイの振るうメイス、マリアベルの蹴り技までもが加わり、壁が本格的に壊され始めた。慌てたりザードマンたちは戦力の何割かを外へと向かわせ始める。ここまで、ほとんどの敵が空に注目してくれていたのは嬉しい誤算である。

「マジックアロー！」

「狐火！」

攻撃の手が緩んだ今がチャンス。二人はここぞとばかりに攻勢に出ると、我に返った敵からの反撃をかわすために上へと逃れた。

「シオン、今のうちにポジションを」

「はい！」

レンは散発的にウインドブラストを放って下を牽制しつつ、シオンの取り出したポジションの蓋を開けてやる。

「お手数おかけいたします」

「気にしなくていいって」

狐の手では蓋を開けるのはさすがに難儀するのだ。ただ、開けてしまえば飲むほうはなんとかなる。その間、敵を引きつける役目はレンが担った。

フリーリたちの方は大丈夫か。

壁を壊す音が止まったので敵との交戦に入ったのだろう。となる

と、レンたちがサボりすぎれば向こうがきつくなる。

念のため、片手間に自分もポーシオンを開けて一本分を飲み干すと、シオンが回復したのを見計らって高度を下げる。

シオンが狐火で敵を狙い、反撃はレンが風で吹き散らす。

正確な数を数えるのは難しいと言われていた通り、いったい何体倒したのか。あと何体残っているのかがよくわからない。

数は減っているはずのだが、メスのリザードマンが参戦してきているのか後から敵が湧いてくるような感覚さえある。

MPを温存したい気持ちと一気にいききたい気持ち。ペース配分を間違えれば最後までもたなくなる。

とはいえ地道に減らしては時間がかかりすぎるような気も、

「むう」

レンはうなつた後、思い切った手に出ることにした。

「よし、ちよつと一気に敵を減らそう」

ポーシオンは多めに持ってきた。

しかもHPはレンが治せるので、レンとシオンのポーシオンはすべてMP回復用だ。節約を考えなければまだまだ魔法は使える。

シオンが領いて防御に回ってくれるのに目でお礼を言いながら、複数のスキルを発動。

二重魔法、魔法増幅、そして新スキル「追尾魔法」。

レンのレベルアップによって百八十本まで増えた光の矢が、まるで複数の敵をロックオンするかのように降り注いで突き刺さっていく。

十体以上に命中し、半分以上が光となって消滅した。

「お、さすがにいい感じ」

「はい。このまま続けてお願いします——と申し上げたいのですが、消耗が激しいですよね？」

「いくつも補助スキルを重ねてるからさすがにね」

特に追尾魔法が重い。なんと消費MPで言ったら二重魔法に匹敵するのだ。しかも二重魔法と併用する場合、二回分のマジックアローにかけなければならぬ。いくらレンがMPお化けと言っても考えなしにばんばん使うのは難しい。

と言いつつ、勢いでもう一度同じ攻撃を繰り返して、
「ん、やっぱりこのまま押し通すのはちよつと怖いな」

「では、わたくしと接触していただいた方がいいですね」

「お願いできる？」

「お任せください」

答えたシオンも新しいスキルを使用。

「巨大化」。

と言つても一回りか二回り程度大きくなるだけ、巨大怪獣と呼べるようなサイズではないのだが。みるみるうちにサイズが大きくなつて頼もしい姿になる。

「乗ってください、レンさま」

「うん！」

これだけ大きくなればシオンに跨ることができ。

身体が大きくなった分だけの大きくなってしまふものの、レンとペースを合わせる必要がなくなる分、空を思う存分駆けられる。

サイズアップによって身体能力は上がっているため、レンとしては自動操縦のバイクにノーハンドで跨って全力で飛ばしているような気分になる。

「これ、シートベルトが欲しい……！」

「が、がんばってつかまってください！」

しがみつくだけで必死になる有様だったが、おかげでエナジードレインができるようになった。追尾できるならちゃん狙いをつけなくても問題ない、と、さらにフルセットでマジックアローを連発。いくつもの悲鳴が重なりあい、集落の中から動くものが減っていく。

そろそろ大きな脅威はなくなったか、と、動きを緩める頃にはレンのMPはほぼ底を尽いていた。

「後はドレインボルトでなんとか……っていうのは甘いかな。一応、もう一本飲んでおこうか」

「はい。その方がよろしいかと。……なにやら強敵らしき者も出てま
いりました」

数少なくなつたりザードマンを押しつけるようにして現れたのは

一回りか二回りは大きく、しかも豪華な装備を纏った個体。

傍には上位種——リザードマンエリートを二体従えており、体色もどこか厳かだ。

「キング、か」

「はい。三十階のボスですね」

精鋭兵を従えたまま、本格的にヤバくなるまで静観しているとかそれでも王か、とツツコミたい。いや、ボスにささと出て来られても微妙な気分になるだろうし、優秀な個体とメスが何匹か残っていれば立て直しは可能、みたいな理屈があるのかもしれないが。

ともあれ。

キングは上空にいるレンたちを睨みつけると、そのあたりに落ちていた斧を拾い上げて——。

「きやつ!?!」

「シオン!?!」

「大丈夫です、命中はしませんでした。でも……」

投擲された斧はものすごい勢いでレンたちの付近を通過していった。

さすがに強い。

ドレインボルトや狐火で応戦してみるも、単発ではあつさりとかわされてしまう。同時にキングはさらに斧を拾って、

「させません!」

「アイリス!」

キングの肩に突き刺さった矢が行動を制止した。

アイリス、フリーリ、メイ、リアアベル。仲間たちが集落の入り口から駆けつけてくる。全員大きな怪我はなく無事だ。

リザードマンたちも残った戦力をかき集めて応戦してくるも、

「ここまで来れば負ける気はしないな」

レンは急いでポーションを飲み干すと、シオンと共に降下。

地面に近い位置で止まって仲間たちとキングを挟み撃ちになると、追尾付きのマナボルトを放った。

賑やかなクリスマス

リザードマンキングが倒れたのは、それから数分後のことだった。「……しぶとすぎだつて」

護衛のエリート二体、それから生き残りのリザードマンたちがいたとはいえ、メイとマリアベルのツートップを相手にこれだけ持ちこたえたのだ。

王の名を冠するだけのことはある。

湾曲刀の一撃は鋭く、動きも早く的確。何度も攻撃を喰らいながらも動き続け、崩れ落ちて光に変わる瞬間まで威圧感を発揮し続けた。

レンやシオン、アイリスが取り巻きをさつさと片付けられなければ勝負はどうなっていたかわからない。

「ドロップ品だね」

三十階の勝利条件はキングの撃破。

生き残って隠れていたリザードマンも多少はいたかもしれないが、それらも戦闘終了と同時に消滅し、代わりにドロップ品が出現した。戦闘では出番が少なかったフリーが率先してそれらを回収しにかかり、みんなの疲れを吹き飛ばそうとするかのように歓声を上げた。

「わ、これすっごい豪華！ ダンジョンってやっぱり儲かるよね」

ドロップ品を整理して回収する間にHPの回復を行ったものの、さすがに仲間たちの疲労は濃く、すぐには動きたくない、という雰囲気が発散されていた。

これ以上の戦闘がないのいいことにしばらく休み、ついでに通常サイズに戻ったシオンを抱かせてもらってMPを回復する。フリーもアイリスも今は「ずるい」とは言っておらず、「私を抱いてくださっても構いませんが」と茶目つ気を出したのはメイ一人だった。

それでも、十分もすれば動く気力は回復して。

村を離れたレンたちは歩いて十分ほどの距離にある下り階段、および石碑へとたどり着いた。

『叶わなかった反撃を成し遂げ、我らの無念を晴らすために、子らへさ

らなる力を』

内容を確認し、書き写し終わったアイリスとメイがステータスを確認。

するとアイリスがすぐに歓声を上げた。

「種族の欄にレベルが増えてます！」

メイ以外の全員が集まり、アイリスのウィンドウを覗き込む。すると確かにそこには「種族：ハーフエルフ レベル：1」の表示が。

併せて経験値のカウントも始まっている。

メイの方もゴーレムのレベルがカウントされるようになっていた。つまり、ここからはアイリスたちもレベルアップできるということだ。

「じゃあ、アイリスの魔法が一気に強くなるし——」

「メイちゃんもボディをどんどん改造できるようになる？」

「はい！ 使いたかった魔法もどんどん覚えられそうです」

「長い道のりでしたが、母にドヤ顔される日々もこれで終わりにできるかもしれません」

レベル1から始まるというのも朗報である。

アイリスたちはすでに自前の努力によって複数のスキルを所持している。低レベルのうちはほとんどレベルアップできる——このあたりの階層ならモンスターを一体倒すだけでレベルが上がる勢いだろうから、スキルポイントはガンガン入る。

レベル上昇によるステータスアップも含めればレンたちの能力に一気に近づき、一線級の実力を発揮できるようになるだろう。

「でも、叶わなかった反撃ってどういう意味でしょう？」

首を傾げたアイリスにシオンが答えた。

「滅ぶ前のこの世界の方々の悲願——ということではないでしょうか」

翌日、レンたちからの報告を聞いた賢者も同じような見解を示した。

（三十階をクリアしたから明日会いに行く、とメッセージを送ったら「今から来い」という勢いの返信があったものの「疲れたから無理」と

返して待ってもらった)

「おそらく、二十階や三十階の戦いは滅ぶ前のこの世界において実際に行われた——あるいは、行われる可能性のあった戦いをなぞっているのだろうか」

「じゃあ、もつと下の階の戦いも?」

「ああ。節目の階においてはその傾向が顕著にある。我々は欠片による世界の構築と同時に、再現された敵勢力を打倒することによって世界の救済をさせられているのだ」

もちろん、滅んでしまった世界が元に戻るわけではない。

それでも、神殿やダンジョンを作った者たちはなにもせずにはいられなかった。

「ダンジョンを進み、最後の敵を討ち果たした時——我々は世界を脅かした敵に勝ったことになる。それでようやく本当の意味でこの世界は救われ、我々の使命が終わるわけだ」

「……それ、いったいどれだけ先の話になるわけ?」

「さあな。少なくとも五十階では終わらなかった」

三十階の時点で「二百匹レベルの敵集落を壊滅せよ」と言われているわけだが。

一パーティに命じるにはハードなミッションが続くのは世界一つを救わせるつもりだからなのか。ぶつちやけそんなの英雄でもないと無理である。

実際、英雄が足りなかったからこの世界は一度滅んだのだろうか。

「アイリスとメイが種族レベルを得たのも朗報だ」

レンたちが黙つたのを見た賢者は話題を変えた。

声も幾分か明るくなり、その顔には明らかな笑みが浮かぶ。

「君達の戦力はこれで大幅に上がるだろう。これからの活躍にも期待しているぞ」

「それはいいけど、また子供を投入しようとか無茶は言わない?」

「これまでのことを思い出しながら睨みつけると、賢者は「言わないさ」と首を振った。

「何しろ追加されたのが『種族レベル』だ。対応する人間があまりにも

限られすぎる」

この世界に住む多くの者は「種族：人間」である。その効果は基礎ステータスへの補正。クラス特性がより顕著になり、身体能力や魔法の威力が高くなる。

おそらく人間が三十階をクリアした場合はこの効果が発揮されて地味に強くなるのだろうが、死ぬほど苦勞して三十階までたどり着いて「地味なステータス強化です！」と言われても少々アレだ。

どうせなら人間以外の者を送り込んでどーん！ とスキルを強化してやりたいし、そうでないとさらに深く進ませるのは厳しいだろう。

「候補としてはアイリスやメイの妹等が挙がるが——数少ない異種族の子を危険にさらすのはリスクも伴う」

それを言うならアイリスたちだっけって同じではある。ただ、一人目と二人目以降ではその意味合いや重要度が大きく変わってくる。

アイリスたちに関してはレンたちが同行していることである程度の安全が確保できているという面もあるし、一概に同じようには考えられない。

「彼女達に関しては潜りたければ自分から言い出すだろう。そうでないのであれば結婚をして子供を儲けてくれればそれで良い」

「そうやって異種族の子供を増やして十年後、二十年後に期待するって?」

「そうだ。近い未来——五年程度のうちにダンジョンが攻略されるプランは別の者に託したからな」

皆まで言わずとも、それがレンたちであることは察しがついた。

レンはため息をついて、

「たぶん、しばらくはペースを落としてレベル上げを挟むと思う。下手したら三十五階をクリアするのは後半年かかるかもしれない」

「構わないさ。それでも我々よりはずっと速い。やはり君達を集めたのは間違っていないかった」

サキュバス、ハーフエルフ、ゴーレム、妖狐。

多様な種族とそのスキルがここまでレンたちを引っ張ってきた。

もちろん、レンとしてはフリーとマリアベル——レンたちについてきてくれている人間二人が弱いとは思っていない。むしろ彼女たちがいなければここまで来られなかったと思っっているが。

アイリスとメイが強くなってくればまたパーティの戦力は上がる。

「やれるだけのことはやるよ。わたしだって日本には帰りたいし」

結局、レンはそう言ってこれからの戦いについて約束した。



二年目のクリスマスは近隣住民に加えてアイリスの家族、さらに娼館のお姉さんたちも呼んで盛大にお祝いすることにした。

参加者は一人を除いて全員女子。

ただ一人の男性となったアイリスの父は、普段は男子禁制である空間の隅のほうで若干、いやかなり居心地悪そうにしていた。彼の参加が許された主な理由は森の中でひっそり暮らしているというストイックなところと、未だ若い妻を差し置いて他の女に手を出すか？というところだ。

（高レベルのエルフであるアイリスの母を怒らせたら絶対怖い、というのもある）

「お父さん、すみません。無理を言っただけです」

近づいて話しかけると、アイリスの父は「君にお父さんと言われると変な気分だな」と呟いてから、

「いいんだ。子供達も喜んでいて、妻にとっても良い息抜きになるだろう。君達が森の近くに引っ越してきてくれたのは本当によかったと思う」

「それなら良かったです」

微笑んで、屋外で行われている宴に目をやる。

シンプルなテーブルの上には各家から持ち寄られた料理がずらりと並んでいる。本職の料理店からテイクアウトしてきた品まである豪華なメニューであり、さらに酒の在庫もたっぷりだ。この住宅街が

できてしばらく経ち、住民たちも気心が知れてきているせいかな和やかなムードである。

レンの手にも料理の盛られた皿と赤ワインの入ったグラスがある。冬の冷たい空気をどこか心地良く感じながら料理をつまんでいると、

「しかし、その格好はどうなんだ」

「? これ、可愛くないですか?」

レンの格好は白と赤で構成された季節的コスチューム——要するにサンタ服である。

あれから何度か通わせてもらっているコスプレ店（メイのメイド服を購入した店だ）が何着もセットで売り込んできたものを購入した。セットで買えば安くなるからとつられてしまった面はあるもの、もこもこしていてなかなか暖かく、着心地も悪くない。

みんなから引っ張りだこの扱いを受けているマスコット役のシオンも頭には動物用のサンタハットをつけており、なんだか縁起の良さそうな装いだ。

しかし、アイリス父の表情はどこか硬く、

「まあ、なんだ。ここに男がいなくて良かったと心から思うよ」

そこまで言われればさすがにレンも「あー」と気づいた。

コスチュームの一部を膨らませている自身の胸と、ミニスカ気味のスカートを見下ろして、

「やっぱり男ってこういうの好きなんですわね」

「君だっけ自分に当てはめてみればわかるだろう」

「いや。わたしは彼女もいませんでしたし、コスプレしてもらおう妄想まではさすがに」

制服姿の彼女とデートするだけでも十分に夢だったのである。

女の子とそういう仲になったのはこっちに來てからなので結局、その手の妄想は実現していない。

……いや、制服自体はストレージに残っているのでフリーに着てもらうことは可能なのか。想像してみたところ、なし崩しにレンが着せられる様が浮かんだ。

軽く首を振ってから「男には目に毒か」と思う。なにか羽織ろうにもレンの身体は重ね着に向いていない。仕方ないので身体を抱きしめて身を縮めるようにして気休め程度の効果を狙った。

「奥さんにこういうの着て欲しいとか思えますか？」

「いや。……ここだけの話、昔着てもらったことがある。彼女の姿は今でもあの頃のままだから、今でも容易に思い出せるよ」

「それはそれは」

頻繁に腰を痛めているらしいメイの父親ほどではないにせよ、彼もなかなか男性らしいところがあるらしい。男とは誰しも若い頃はそういうものなのだが。

レンはどうかというと、男のそういう切羽詰まった感はもうない。

依然として「そういうこと」への興味というか欲求は強いのだが、定期的な相手をしてくれる人がいるので「我慢できない」という感覚は味わったことがない。

たぶん、数日くらいお預けを喰らうと大変なことになるのだろう。

そうなったらどうなるのか、少し想像してみたところすごいことになったので中止。

「……わたしも、すっかり『女の子』になってるってことですな」

「君は魅力的な女の子だよ。自信を持っていい」

「ありがとうございます」

レンは微笑んで答え、そつとその場から身を離れた。

一人きりになっているアイリスの父に少しでも楽しんでもらおうと声をかけたものの、レンではもう「男同士で気楽な話」にはならないらしい。少し寂しくもあり、同時に今の自分を楽しめているという事実にも少し嬉しくもあった。

ちやうど挨拶回りなどを終えたアイリスの母がこちらに向かってくるところだったのでちやうどいい。会釈をしてすれ違い、仲間たちのところへ向かう。

と、少し酔った様子の子のアイリスに腕を取られた。

「お父さんとなにを話していたんですか、レンさん？」

「ん。クリスマスっぽい服装だね、っていう話だよ」

アイリスもレンと同じくサンタ衣装である。ただし、レンのものがロングスリーブなのに対し、アイリスの衣装は動きやすそうなノースリーブ。会の中央ではたき火も行われているので寒くはないだろうが、こうして見るとなかなか煽情的である。

とはいえ、そんな風に感じるのはレンくらいなものらしく。

普段着に帽子を被ったアイリスの妹たち二人は姉の格好を気にした様子もなくレンたちに駆け寄ってきた。

「お姉ちゃん、これもう食べた？」

「レンさん。お酒、お注ぎしましょうか？」

アイリスと顔を見合わせてふっと笑いあう。

「ずいぶん賑やかになったね」

「はい！ 賑やかで楽しいです！」

転移からこれで一年半。

思えば早いものである。あつという間だった一年半の間にくつもの出会いがあった。自分の居場所もできて、目標もまだまだ残っている。

突然始まったこの生活だけど、良い感じに進めている気がする。

「これからもよろしく」

人の輪の中に入って行って、近くにいたフリーに声をかけると、彼女は「なに、あらたまつて」と笑った。

「どっちかが死んだりしない限り、私たちは一緒だよ。でしょ？」

「確かに」

相棒と笑いあっていたら誰かに後ろから抱きつかれた。

柔らかな感触。

「いかがですか、ご主人様。試作品です」

「んー。柔らかいけど、ちよつと違和感があるかな」

「改良の余地ありますか、残念です」

いつも通り淡々としたメイの様子にまた笑った。

やっぱり退屈できそうにない。

これからも、この仲間たちと一緒に戦いを続けていこう。レンはあらためてそう思った。

【番外編】童貞を殺すセーターとレン

男の目を気にしなくていい、というのは本当に楽だ、と、引越してからしみじみと実感する。

人の視線というのは思った以上にわかりやすい。特に異性からのいやらしい視線はバレバレ。サキュバスの鋭い感覚もあって、時には見られるだけで肌を撫でられているような錯覚さえ覚える。

昔は自分も「視る側」だったと思うと申し訳なくなる一方、「視られる側」になってみると「これだから男は」という身勝手な思いも生まれてしまう。

その点、同性だけの空間は楽だ。

もちろん、異性よりも同性の方が厳しい面もある。

なにあの格好、的に見られるのは実際かなり堪えるのだが、女子とこのお洒落だったり可愛かったりする格好にはわりと寛容である。

本人に似合っていて、かつ、異性の気を惹く気がないと判断できる場合においては素直に褒めてくれることが多い。

わざわざ「女性だけの住宅街」などいうものを作り、なるべく男と会わないようにしているレンの場合、多少露出の多い格好をしているも「それ可愛いね」と好意的に接してくれる。

レンは翼と尻尾の関係上、どうしても肌を見せる割合が多くなるのでこの対応はとても嬉しい。

……ただ、

「これはさすがにどうなんですか……?」

ある日、馴染みのコスプレショップを訪れたレンは、店主から勧められた衣装を見て眉をひそめた。

「え、駄目? 可愛いと思うんだけど」

それは「コスプレ」と呼ぶには日常感が強く、かといって「普段着」や「外出着」と呼ぶには煽情的すぎる、なんとも反応に困る代物。

大まかに言えばニットとかセーターとか呼ばれる品で、特徴としては背中側が大きく開いていること。

防寒用という意味合いが強いはずの服をこう使うというのはなんと
とも大胆であり、だからこそ洒落で解放感もある。レンとしてはめ
ちやくちや着心地がいいだろうな、とも思うのだが。

「童貞を殺すセーター、オススメだよ？」

「いや、主に名前そのへんが問題なんですつてば」

一時期、オタク文化的なところで広まり知名度が上がった——とい
う歴史(?)がある通り、これはエロ衣装的なイメージが強い。

もちろんセーターなので普通に着ていても問題はないのだが、後ろ
が大きく開いている関係上、これだけで着ていると横から胸が見えて
しまう可能性もある。というか積極的に見せに行くくらいのノリこ
そがある意味、本来の使い方だろう。

楽なのはいいけどエロいのは困るレンとしては気になるところで
ある。

すると店主は「でもさ」と口を開いて、

「あなたの場合、いやらしく見られるのはどうしようもないじゃない」
率直かつ的確な指摘がレンの胸に突き刺さった。

「同じ女から見ても羨ましいくらいの体型だし可愛いし、香水もつけ
てないののにいい匂いがする。着ぐるみでも着ない限りエロいと思う」
「諦めろつてことですか……？」

「そうそう。むしろ堂々としてた方がいやらしい目で見られないん
じゃない？」

それは確かに。

背中が開いているとはいえあつたかいはあつたかいははずだし、家
の中にいたりそのへんを歩くくらいの用事ならこれくらい楽な方が
助かる。

「安くしとくから、買って見ない？」

提示された金額はこの店の基準どころかこの世界の相場から見て
もお得なもの。

「そんなに安くて大丈夫なんですか？」

「大丈夫。材料種類だし、形決めたら編むだけだからそんなに手間
がかからないの」

服飾系のクラスに就いている者は作業工程を大幅に短縮することができる。

ある程度の腕さえあれば後は単純作業になるこのセーターは片手で作ったものらしい。

「あなたがいららないなら若い奥さんのいる男性にでも売るけど」

「それはそれで良いのかもしれませんが、それならわたしに買わせてください」

「お買い上げありがとうございます」

意気揚々と買ったはいいけど奥さんに断られ、セーター片手に絶望する旦那さんとかあまり見たくない。セーターとしてもその結末は浮かばれないだろう。

というわけでレンは代金を払い、セーターを購入。

試着室を借りてその場で身に着けてみると、

「あ、思ったよりいいですね、これ」

「でしよう?」

背中がものすごく楽だ。

素肌これだけ着るとエロすぎるので下になにか着る必要があるものの、それさえ気をつければ冬場の部屋着として優秀である。

意外と良い買い物をしたかもしれない。店主にお礼を言つて家に戻り、仲間たちにも披露してみる。

「へー。うん、可愛い。いいの買ったね」

相棒的な存在であるフリーは素直に褒めてくれた。ただし、その後で目を細めて、

「でも胸が強調されてすごくえっち」

「それはフリーがエロい目で見てるからじゃ?」

「うん。それはまあ、好きな人がえっちな格好してたらドキドキするよね」

「っ」

ストレートに言われるとむしろレンの方が照れてしまう。

慌てて視線を逸らしながらアイリスたちを見て「どうかな?」と尋ねると、

「可愛いと思います！ でも、レンさんが羨ましいです。私が着ても似合わないでしょうし……」

「そうかな？ こういうのは胸が大きすぎない方が可愛いと思うけど」

試しに着てみてもらったところ、スレンダーなアイリスが着るとやや大きめサイズになっていやらしさよりも可愛らしさ、お洒落が際立つスタイルになった。

普段、外に出る時は機能的な服装の多い彼女なので、いかにも部屋着っぽいスタイルは新鮮。プライベートのアイリスを見慣れていない男性陣が見たら一発でノックアウトされてしまうかもしれない。

「えへへ、可愛いですか？」

「すごく可愛いよ。それで街を歩いたらみんなから口説かれそう」

「む。ご主人様。私も着てみてよろしいでしょうか」

アイリスを褒めていたらメイが自分もと言いつ出した。

肌が白く滑らかな彼女にも背中出しスタイルは似合うだろうが、

「メイはメイド服が似合ってると思う」

「ではこの上から着るのはどうでしょう」

「うーん……。メイちゃん、さすがに合わないっていうか、ごわごわしちゃうんじゃないかな」

メイド服自体が身体にぴったりしたデザインではないため、セーターの生地が伸びてしまいかねない。無理やり着ようとメイが頑張り始めたところでみんなで止めた。

「ふう、危なかった。……それで、シオンはどう思う？」

「わたくしが自分で着るとなるとまず間違いなく躊躇いますが、レンさまにはよくお似合いかと。それにとても暖かそうです」

「ありがとう。でも、シオンの毛には暖かさで負けるんじゃないかな」

試しにセーターを着たままシオンを抱きしめてみる。

すると、狐の少女は触り心地を確かめるようにセーターへと頬をすり寄せ「暖かいです」と感想を漏らした。

あまりにも可愛いのでずっとこのままでもいたくなる。表情を緩めた他のメンバーもこぞつてシオンを撫ではじめ、レンの周りは一気に

暖かくなった。

さすがのセーターも人の温もりには敵わない。

とはいえこのアイテムはその冬を過ごすのにとっても重宝した。

これでお菓子片手にこたつでごろごろできたら最高だろう。残念ながらこたつは用意できないので、代わりに暖炉の前でのんびりした。気温の低い日や日差しがあまり出ていない日はシオンも火の近くがお気に入りらしく、レンの傍で昼寝をする。

家事を終えたメイも熱の蓄積ついでにレンにくっついてきて、三人揃って「自分の部屋があるのに」とフーリに呆れられてしまった。

【番外編】 聖域の水

「実験をさせてくれないだろうか」

神社に置いたポーシヨンが高性能化する事件からしばらく経った頃、酒造家の男性が尋ねてきた。

男子禁制なので敷地の入り口まで来て誰かに言伝を頼まなければならぬ、そんなシステムを不便だと愚痴りつつ、彼はレンたちにそんなことを言った。

なんでも、同じように酒を置いておいたら美味くなるのかどうか試してみたいそうだ。

「美味しくなる保証はできませんけど」

「もちろん、それは構わない。協力してくれたら酒を一瓶、タダでプレゼントしよう」

「お引き受けします」

酒につられたわけではない——決して酒につられたわけではないが、彼から何本かの酒を預かって神社の保管箱の中に入れた。

それから一週間後。

取り出した酒を持って酒造所を訪れ、試飲会を開いた。

結果は上々。

「ワインは味に深みが出てくるかも」

「清酒はすつきりした口当たりになっているな」

聖域となった神社の効果はポーシヨンだけでなく酒にも及ぶらしい。

他にも応用ができるだろうか。

なにかいいものはないか、レンはしばらく考えてから挫折した。食べ物系はあまり長く置いておくと悪くなってしまうそうだし、液体系となるとポーシヨンと酒が最たる品だ。ジュースとかでも美味しくなるかもだが、これはそこまでして味を追求しなくてもいい気がする。

ともあれ、小さな杯を大事そうに抱えてちびちび清酒を飲んでいるシオンのおかげだ。

「長い時間置いたらもつと味がよくなるのかな?」

「可能性はあるな。試してみたいところだが……せつかくの美味しい酒もみんなに届けられなければ意味がないか」

「完成してから神社に置いて、じゃ時間もかかりますし、防犯の意味でもあんまり良くないですからね」

スペースもあまり広くない。本殿にずらり、と酒を並べられてもちよつと困る。

酒造家の男は「ううむ」としばらく考えて、

「なあ。シオンちゃんにもう一つ聖域を作ってもらうことはできないか? 神社の近くに小さめの湖というか水場というか、そういうところがあるだろ? あそこがいい」

「えつと、それはどうしてですか?」

「酒造りに水は欠かせないからな。神聖な水を使って酒を作れば完成品をわざわざ寝かせる必要もないし、味ももつと良くなるんじゃないかと思うんだ」

なるほど、道理である。

新鮮で神聖な水があれば使いたい、という人はたぶん他にもいる。料理にも良いだろうし、薬師なんかは喜んで使うだろう。

「どうかな、シオン?」

聖域を増やすのはスキルレベルを上げれば可能だ。

ただ、貴重なスキルポイントを使ってしまいうわけだし、そのぶん攻略が遅れる恐れもある。聖域がそんなにたくさんあっても……という話もあるので、レンはスキルを持つシオン本人に尋ねてみた。

清酒を飲み終えた少女はこくと小さく首を振って、

「はい。わたくしでよろしければご協力させてください」

「本当か!? ありがとう、恩に着るよ!」

戻ったレンたちはさつそく水場を聖域化した。神社のすぐ傍、森との境界にあたるため、野生動物が家の方に入って来るのをよりしつかりとガードすることにも繋がる。今回の申し出はある意味ちようどよかったかもしれない。

「スキルの効果範囲が広がれば一つの聖域で済みそうなんだけどな」

「確かにそうですね。範囲はどのように決まっているのでしょうか……？」

範囲拡大のスキルが別にあったりはしないので固定なのかもしれない。その場ではそう結論を出した。後にシオンのレベルに応じて少しずつ範囲が広がっていることが発覚するのだが、いずれにしろこの時点では二つの聖域を作るしかなかった。

「今度から料理用の水や飲み水なんかはここに汲みに来ようか」

「そうですね。つつい魔法で出して済ませてしまっていますし」

聖なる水ならきつとより美味しいに違いない。

「でも、あんまり大量に汲まれてしまうと水がなくなってしまうかもしれませんね」

「なにか立札とかしておいた方がいいかな？ 大事に使ってくれてありがとうございます、とか」

近隣の家からなら水場は遠くない。隣人たちにこの話を伝えると、あつという間に利用者が増えた。心配していた水の枯渇も利用者の多くが生活利用の範疇に収まっていたため発生しなかった。ただ、薬師や酒造家が本格的にここの水を使い始めると危ないかもしれない。「でも、この水ほんとに効果あるみたいだよ。お料理が一味美味しくなった気がする」

「はい。あの水場にいる水の精霊も生き生きしています！」

「聖域の水ですから聖水ですね」

この話を賢者にしたところ「売れば儲かるのではないか」なんて言われたものの、レンたちは聖水で商売しようとは思わなかった。

みんなの生活が潤うのが一番。そう思っただけみんなが使えるように、やるとしても利用量を制限するくらいにしようと思っただ。

「そうでなければ聖域の効果も薄れてしまう気がするのです」

「確かに、それはそうかも」

シオンの希望もあってこうした方針を取ったところ、水を利用した商売人——薬師や酒造家から売り上げの一部を提供したいという話が来た。

「これはお礼だ。手間賃のようなものだと思って素直に受け取ってくれると嬉しいんだが……」

そういうことなら受け取ってもいいかもしれない。レンはシオンと話をした末、

「それなら現物でいただいてもいいですか？」

お酒とポーシオンを毎月一本ずつ提供してもらおう、ということを手を打った。ある意味、神社への貢ぎ物である。

もちろんこれはシオンの取り分。

ポーシオンの方は必要なら使わせてもらってもいいかもしれないが、お酒は好きに飲んでいいと言うと、シオンは、

「いえ。わたくし一人で飲むのは申し訳ないので、みなさんでいただきますでしょう」

欲がないというか、聖域を作れるのも納得してしまうくらい優しい少女である。

仕方ないので他の仲間たちと相談し、食費から購入しているお酒や油揚げをシオンへ多めに勧めることにした。結果的にレンたちの食卓も品質向上したので言うことなしである。

「シオンちゃんの妖狐はこんな風がいいことがあるんだねー。アイリスちゃんたちの場合は森とか動物にいい影響があるんだっけ？」

「はい。私が森の近くに戻ってきたので森がさらに元気になった、つてお母さんたちが言っていました」

「良いことですね。メイさまの場合は……？」

「私たちゴーレムは働くのが仕事ですから、そんな大層なものはないと思われませぬ。鉱山にでも住めば別かもしれませんが」

つるはしを振るって採掘をするゴーレム……確かに似合うかもしれない。

「わたしのサキュバスもなにかそういうご利益あるのかな」

「レンの場合はあれじゃない？ 子宝とか」

「それこそ神社にありそうな感じだけど」

「では、わたくしとレンさまは相性がいいのかもしれないね」

シオンが嬉しそうなのはなによりだが、もし本当にサキュバスに子

宝のご利益があるとすると女だけで住んでいるのは宝の持ち腐れかもしれない。

むしろこのエリアに住む女子が増えたと行き遅れ女子が増えるかもしれない。

「うーん……難しいなあ」

などと言っていたら、後にアイリスの両親から「アイリスが家を出る前よりも動物の数が増えた」と聞かされることになった。

もしかすると動物相手でも子宝パワーが効いたのかもしれない。

少しは役に立ったようであり、なによりである。

【番外編】大晦日と初詣

大晦日はマリアベル、アイシャを含めた仲間たちと家でのんびりと過ごした。

年越しそばの代わりにパスタ、こんにやくがないので湯豆腐の味噌がけ。後は油揚げにひき肉やネギなどを詰めて焼いたギョウザ的なものや、揚げたじゃがいもに塩をかけたものなどおつまみっぽいメニューが中心。

酒を飲みつつ料理をつまみ、面倒な話はまた今度にして楽しい話に花を咲かせた。時計がないので日付変更がいつだとか気にする必要はないし、テレビがないので年越し番組を見るのに忙しくなることもない。とてもゆつたりとした時間。

そうして夜も更けた頃、レンはシオンに声をかけて立ち上がった。

「じゃ、ちよつと向こうに顔出してくるよ」

「うん、みなさんよろしくねー。あとこれ、差し入れ」

「ん、ありがとう」

暖かい外出着に身を包み、シオンを抱いて飛ぶ。

ショートカットルートができたことで川に向かうのは格段に楽になった。川沿いに進むと中ほどにさしかかったところで初日の出組を発見。

案の定、こちらも酒盛りムードである。

たき火で肉やチーズをあぶってみたり、強めの酒で身体を温めたり。飛んできたレンたちを発見した彼らは歓声を上げて出迎えてくれた。

「お、来た来た」

「レンちゃんにシオンちゃん、ほら、こっち来て座りなよ」

「酒もつまみもまだいっぱいあるぞ」

「ありがとうございます。でも、あんまり飲むと明日に差し支えるので」

「ははは。明日っていうかたぶんもう今日だけだな」

「あけましておめでとは日の出を見るまで我慢だぞ」

フリーリたちに用意してもらった差し入れ（夕食の余り＋酒）を差し出し、酒を飲まされたりお酌をする。シオンは主に女性陣に声をかけられ、抱っこされながらたっぷり酒を与えられていた。

人数もなかなか多く、飲み屋を貸し切ったような騒ぎようである。

酒が入っているせいかなレンには邪な視線も送られてくる。ついでに手まで出されたので軽く払って「奥さんに言いつけますよ」と言つてやる。

「つれないなあ、レンちゃん。せっかく可愛いんだから男の一人や二人作らないと勿体ないぞ」

「せっかくですけど、わたしは可愛い女の子のほうが好きなんですよ」フリーリやアイリスの可愛さを力説してやると酔っ払いどもも「確かにあの子達は可愛い」と納得してくれる。女好きだけに「美少女よりも俺の方が」などと口が裂けても言えないのだ。そこで自分を騙せないあたり、彼らも悪い人間ではない。

「レンさま、なんのお話ですか?」

「ああ、シオン。いや、そこのおじさんがわたしにセクハラをね」

「……へえ。あんた、今の話は本当?」

「えっ!? いや、待て。違うんだ。これはレンちゃんが可愛すぎるのが原因で——」

言い訳になっているんだかなくていないんだかな返答を最後まで言い切ることもなく、セクハラしてきたおじさんは奥さんにしつかりわき腹をつねられた。少し可哀そうな気もするもの、まあ自業自得である。

「じゃあ、わたしたちはそろそろ帰ります」

「えー。日の出まで居ればいいのに」

レンは主に男性陣から、シオンは主に女性陣から惜しまれながら家に帰った。

その頃には仲間たちも片づけを終えて休息モード。レンたちもさつきも言った「明日（今日）」のために仮眠を取り、普段よりは少々早めの時間に起きた。

「あけましておめでとうございます」

「今年もよろしく願います」

挨拶の後はお雑煮で簡単な朝食。

手早く済ませたらさっそく準備にとりかかった。着替えを行い、荷物を持って移動するのは神社だ。まだ寝ている人も多いだろうから移動はなるべくゆっくり、物音を立てないようにする。荷物をストレージに収納すればスムーズに歩けるので便利だ。

「お客さん来るかなあ」

「まあ、来なかったら来なかったでばーつとしてればいいし」

などと言っていたものの、ふたを開けてみたら結構お客さんが来た。

「こんにちはー……わ、レンさん、可愛い！」

「そ、そうかな？　ありがとう」

レンたちは揃いの巫女服姿。

レンのものは背中とお尻の部分にスリット入りのため邪教徒っぽいものの、まあそれはそれ。あまり気にしないことにした。

小さな神社にこの人数は明らかに多いが、そこは一応理由がある。来てくれた人に酒や食べ物を振る舞うためだ。酒の方は製造元の好意により格安で購入させてもらい、スープはフリーの手作り。さらに、レンが獲ってアイリスが調理したジビエの串焼きもある。

「これ、白いご飯が食べたくなる……」

「お餅で良ければこちらで焼きますよ」

ガスコンロなどはもちろん存在しないが、七輪はある。これを使えば屋外でもちよつとした調理くらいは可能だ。

なお、値段はなんとすべてタダである。

「え、これお金払わなくていいんですか？」

「うん。日頃の感謝の気持ちと、お祭りってことで」

用意したものはすべてなくなり次第終了。

余ったら自分たちで食べればいいや、くらいのノリで多めに作ったものの、思ったよりもどんどんなくなっていく。

近所の女の子たちやレンたちの担任、アイリス一家（お父さん除

く)、娼館のおねえさんたちなどなど、知り合いが次々と初詣に訪れてくれたおかげである。

聞けば、神殿にも行く(あるいは行った)ものの、せっかく神社があるんだから……と思いついたらしい。どうせ今日はダンジョンには入れないのでみんなわりと暇なのである。

「ところで、おみくじはないんですか？」

「簡単なやつなら用意してあるよ」

コインを入れると紙ではなく、薄い木の板に紙を張ったカードがランダムに出てくる形式。数を用意できなかったため誰かが引くたびに引いたカードを中に戻してもらい使い回すつくりだ。

内容自体はみんなで話し合いながら丁寧に作ったし、字もできるだけ綺麗に書いたもののチップなのは否めない。それでもみんなわいわいとくじを引いてくれた。

おみくじの管理はメイが引き受けてくれ、箱を抱いたまま真顔で立っている彼女にもなんだか注目が集まっていた。動かないのかな？ とじーつと見つめていると「何か？」とか突然口を開くので相手はびつくりする、という寸法である。

「よし、お賽銭多めに入れようっと」

「ただで美味しいもの食べさせてもらっちゃったもんね」

飲食代のかわりにと賽銭を弾んでくれる人もいた。

「こういうの、なんか嬉しいな」

「ええ。やった甲斐がありました」

嬉しそうに呟いたシオンは来客者たちからも大人気。可愛いから、あるいはご利益にあやかろうとそのふわふわの毛をみんなから撫でられてもみくちやにされていた。

おかげで酒と食べ物なくなる頃には少々お疲れの様子で。

「お疲れさま、シオン」

「ありがとうございます。……こちらの世界ですと、これだけ多くの人と会うことはなかなかないので、少し新鮮な気分でした」

「うん。新年の行事っていうのもなんかいいかも」

レンたちもなんだかんだ疲れてしまったため「神殿までは行かなく

てもいいかな……」と言う気分になる。

こつちから行かなくても会いたい人にはだいたい会えたし、思ってたところで、

「あ、でも、よく考えたら行きは一瞬なんだよね」

「あ、そういえばそうだった」

ポータルを使えば神殿まではあつという間だ。道のりが半分になると思うと「行ってもいいかな」と思えてくる。片付けを終えた後、まあせつかくだし、とみんなでポータルをくぐる。

幸い、転移先が人で埋まりきっていることもなく神殿に到着。

「おお、君達も来たか」

「あ、そう言えばおっさんには会ってなかったっけ」

「私の扱いがどんどんひどくなっていないか？ ……まあいい、今年は例年よりも暇だからちようど良かった」

「あれ、賢者様暇なの？ どうして？」

「君達が新しい参拝場所を作ったからに決まっているだろう」

両方に参拝する人が多くとも滞在時間は減る。そうすると人の密度も下がるというわけだ。

「それから、皆にも挨拶しておけ。これから世話になることも多いかもしれない」

「え、わたしたちさつと帰るつもりだったんだけど……」

なんだかんだ、まだ会っていなかった人たちに挨拶したりでけつこう時間を喰うことになったレンたちだった。

第四章

一年半が過ぎて

「マジックアロー！」

「狐火！」

湿気の多い空を大型の妖狐が駆け抜ける。

シオン、そしてその上に乗ったレンはリザードマンの集落を最高速度で強襲、全開の魔法で見張りのすべてを葬り去った。

もちろん、やぐらの上の相手を殲滅したところで敵はまだいくらでもある。地上にいたリザードマンが異変に気づいて声を上げるのに、そう時間はかからなかったが――。

敵が状況を理解し口を開くまでの十数秒。

それだけあれば、レンたちが二発目の魔法を放つには十分。追尾性能を付与された光の矢が五、六体ものリザードマンを貫き、別の五体を狐火が焼き尽くした。

そして。

「ファイアーボール！」

大型の火球が土壁に直撃。

壁の一部に大穴が開いたことによつて敵集落の防衛機能は著しく低下した。

リザードマンたちが弓を取つて空を狙うか、それとも武器を持つて地上の敵を叩くか迷っている間にレンとシオンは次々と、ペース配分もろくに考えないまま火力を解き放つていく。

今回はそれで構わないのだ。

地上からも仲間――共闘するパーティの戦力を含む頼もしい面々が接近している。

先の火球を放った女魔法使いがさらなる火球を生み出して土壁を破壊。

風を纏わせることで速度・威力を上げたアイリスの矢が容赦なく敵を貫く。

左腕の肘から先を取り外したメイが内蔵した砲身から鉄球を放ち、リザードマンの一体ごと後ろの家の壁を砕く。

混乱が深まっていく間に突撃した青年剣士、そしてマリアベルが女聖職者の補助つきの身体能力で一気に活路を開いていく。

「ホーミングは味方がいると使いづらいから——」

「奥の敵を片付けてしましましょう！」

リザードマンキングが急ぎ立てられるようにして現れるまでに大した時間はかからなかった。

三十階のボスはさすがのタフさを披露したものの、取り巻きを剥がされ前衛三人に囲まれてしまえば大した抵抗はできなかった。

武器を持つ腕を斬り飛ばされ、足を蹴折られ、頭蓋をメイスに砕かれた彼は怨嗟の声を上げながら消滅、残っていたごく少数のリザードマンもまた王の消滅を機に消えていった。

「……はあ、終わったか。いや、こりゃきついわ」

敵の消滅と入れ替わりに現れたドロップ品を眺めつつ、共闘パーティのリーダーである剣士が息を吐いた。

空から降り、翼を畳んだレンは彼のぼやきに首を傾げて、

「そう？　これ以上ないくらいスムーズに終わったと思うんだけど」

「馬鹿、だからこそだつての。俺達だけで挑んでたらただ苦勞したか」

そう。

今回の三十階攻略はレンたちではなく、友人たちのものだ。

後進（ネイティブ世代のショウとケン、それから二人の少女たち）を育成する傍ら少しずつ自分たちの攻略を進めていた彼らは年明けから一か月以上をかけてようやく二十九階をクリアするに至った。そして、道中の難易度から「三十階の単独攻略は難しい」と判断し、レンたちにサポートを依頼してきたのだ。

レンたちはこれを「報酬の三割」を条件に了承した。結果はこの通り。自分たちだけで一度クリアしているうえにアイリス、メイが大幅にパワーアップしているため、負ける要素はほぼなかったと言っている。

逆に言うと、経験者なし、パーティ四人だけで攻略した場合はどうなるか。

「ほんと、このダンジョン鬼畜すぎだろ。どこまで大変になるんだよ」
戦闘中は出番のなかった盗賊二名、フリーと相手パーティの男子がドロップを回収していく中、リーダーは再びぼやいて、

「お前らはもう次も見たんだろ？ どうだった？」

「ん……まあ、なんていうか、また一段と面倒臭くなったなって感じ？」

答えたレンは苦笑を浮かべた。

「わたしたちもまだ本格的に攻略したわけじゃないけど、ダークエルフの森はなかなか手強いよ」



新たな敵はダークエルフ——褐色の肌を持つエルフの亜種だった。闇の神を信じたせいだとか肉食のせいだとか作品によって設定はまちまち、この世界のダークエルフが具体的にどういう種族なのかは不明であるものの、少なくとも彼らがアイリスたちと同じく弓や精霊魔法に長けていることは実際に確認した。

彼らの棲み処は洞窟ではなく森である。

立ち並ぶ木々が壁の代わりを果たしており、木のないところを歩いていくと今までのダンジョンと似たような感覚で攻略できるという仕組み。しかし、じゃあ今までと大差ないんじゃないかというところ、これがそうでもなかった。

進行を遮るのが壁ではなく木なので、その気になればショートカット可能なのである。

上の階のように「トンネル」などの魔法を使う必要もない。狭いし歩きづらいのさえ無視すれば最短ルートを通ることも可能。

なので当然、敵も同じように木立ちを突っ切って来たりする。

ワンダリングモンスターの数も上階より増えているうえ、ダークエルフはデフォルトで弓を装備している。壁だと思って油断している

と急に側面から矢が飛んできたりするので本当に気を抜けない。

「んー……音があんまり反響しないから奇襲に気づくのも一苦労だよ」

盗賊であるフリーリの負担がまたしても大きくなった。

自然のフィールドだと思つて油断していると普通に罠が仕掛けられていたりするうえ、隠し方も巧妙になってきている。敵の奇襲によつて集中が途切れると距離感が狂つて罠の位置を誤認する恐れもある。

「任せてください！ 森の中なら得意ですから」

「わたくしの危険察知もありますので、協力しあつてまいりましょう」

「うん、ありがとうアイリスちゃん、シオンちゃん」

森育ちのアイリスがいてくれたのは幸運だった。

彼女には葉擦れの音に惑わされずかすかな足音を察知できる耳がある。ダークエルフの天敵はエルフ、というわけである。

ちなみに同族に近い相手を倒すことに忌避感はないのかと尋ねたところ、

「あれは同族ではありません。モンスターで、敵です」

エルフには種族的にダークエルフへの嫌悪感があるらしい。ハーフェルフであるアイリスも部分的ながらそれを受け継いでおり、むしろ倒すべき相手と感じるのだとか。まあ、これに関しては母親の影響もあるかもしれないが。

ダンジョン内のダークエルフがモンスターなのは実際その通りだった。

彼らは言葉らしきものを話すものの、翻訳は機能しておらず何を言っているのかわからない。また、侵入者にも敵意満点のため話し合いは通じない。結局のところ、ダンジョンの用意した障害であることに変わりはないらしかつた。

「火の使用が制限されるのも厄介ですね」

「いっそのこと森を焼いてしまえば早いような気がします」

「それやったら逃げ場がないからなあ……」

森の中なので当然、火を使えば引火から火事になる恐れがある。

炎に巻かれたら体力も酸素も奪われて終わりだ。敵も一網打尽にできるだろうが、同時にレンたちも倒れてしまう。

新しい罫は存在しないものの「敵が壁をすり抜けてくる」という仕様が新しい罫と言って差し支えない。森の広さも相当なため、まともな全域を調べようとしたら恐ろしく大変だろう。

「で、お前らはどうやって攻略したんだ？」

「うん、森を焼いた」

「いや、逃げ場がないんじゃないよなかつたのかよ!？」

「逃げ場なら一応あるんだよ、上に」

二十階や三十階同様、新しい階の天井は高いところに位置していた。

つまり、火の手が届かない位置——木々の背の高さよりもずっと上まで行ってしまうえば火に襲われる心配はないのである。

レンがフリーを抱きかかえ、シオンがマリアベルを上に乗せる。アイリスはハーフエルフのレベルを上げ、新しいスキルを覚えたことで単独であれば飛行可能になっている。

「で、メイは暑さとか感じないし呼吸もしてないから下にいても平気ってわけ」

「絶対真似できない類の攻略法じゃねえか……!」

「万能ってわけでもないけどね。ドロップまで燃えるし」

メイもボディがこんがり焼けてしまうためノーダメージとはいかない。素材となる石や金属もこの階では調達しづらいため、在庫を消費して作り直してもらおう必要はあった。

まあ、敵が全滅したあたりでボス部屋付近だけ消火、地上を歩いてきたメイと合流したら後は階段を下りるだけ。ボス戦すらショートカットである。モンスター分の経験値はパーティ全員に均等に分配された。

「めちやくちや効率良くないか……?」

「でも、収入ゼロどころかマイナスだからなあ」

しかも、魔法を使ったりで入る追加の経験値はナシ。

結局のところ、二十五階あたりで資金調達＋経験値稼ぎをしなければあとあと苦戦するのは目に見えている。全てうまくいく解決策なんてそうそうありはしないのである。

「俺はそれでも羨ましいよ。またお前らに差をつけられそうだし」

「気にしなくてもいいのに。仲間は一人居ても多いに越したことはないだし」

ダンジョン攻略——というか、最下層への到達を目指すために必要なのは人海戦術である。

レンたちがここまでの階を楽にクリアして来れたのは先人が積み上げてきた情報の力が大きい。加えて、ここから先の難易度はこれまでに以上に跳ね上がる。

一パーティーでも多く下に到達させ、情報収集と攻略法の発見を進めることが必要になる。

ものすごく強いパーティーがひとつだけあっても、そのパーティーがもし倒れてしまえばそこで終わり。そうならないためにもみんなで力を合わせなければならぬ。

異世界でリーダー役を務める男、賢者と呼ばれるあの中年男性がなんとかして人をダンジョンへ送ろうとするのにはそういう理由があるのだ。

「もし、そっちより先に行けそうならそれはそれでいいんだよ。わたしたちが手にいれた情報でそっちが楽になるわけだし」

賢者のやり方には異議を唱えたくなることはあるものの、ダンジョンをクリアして元の世界に帰りたい気持ちはレンたちも同じなのだ。



一年に一度、日本のどこかの高校で一クラスが神隠しに遭う。

交通事故に遭うような確率で「被害者」となってしまった高校一年の男子、レンはクラスメートたちと共に異世界へと召喚され、戦うための力として「サキュバスの力と身体」を与えられた。

多くの者が職業を与えられる中、種族を与えられたレンは徐々に女サキユしかいない種族スとしての自分を受け入れ、仲間たちと共にダンジョン攻略を続けてきた。

あれから一年半と少し。

攻略した階数は三十階に達し、盗賊のフリーにハーフエルフのアイリス、ゴーレムのメイ、蹴術師のマリアベル、妖狐のシオンと仲間たちもだいぶ増えた。

女としての自分に慣れた今、男に戻りたいという欲求は薄くなった。

それでも、ダンジョンは攻略しなければならない。

故郷への執着はあるから。

帰りたいと思う者がいるから。

攻略によつて手に入る「世界の欠片」を使い、世界を広げていかなければこの異世界の未来も暗いから。

「でも、もう一年半かあ。本当早かったなあ」
夜。

自室のベッドに座つて窓の外の星空を見上げる。

独り言のような呟きに応じたのは黒髪黒目——異世界に来てても本にいた頃と容姿の変わらなかつた少女、成長によつて以前よりも少し大人っぽくなったフリーである。

ショートからボブくらい長さまで伸びた髪。細身ながら触れると柔らかさを感じられる手足。黒い揃いのブラとショーツを身に着けた彼女はくすりと笑つて、

「ねー。本当ならもうすぐ私たち三年生だよ」

「うわ。つてことは受験に追われる時期かあ。大変だなあ」

思わず遠くを見たくなった。

「帰るとしても一年後にしたいな。これから受験とかしたくないし」
「心配しなくても、一年生からやり直しなんじゃない？ 出席日数も足りないしテストも受けてないし」

「それこそ同級生が卒業してからにしてほしい」

「あはは。それはあるね」

隣に座り、身を預けてくるフーリ。彼女の体温を感じながら、レンは「実際は一年じや済まないだろうな」と思った。

今は二月。

同級生たちは二か月もせずには三年生になる。彼らがこちらへ転移してくるとしたら次がラストチャンスだ。そこで出会えなければ再会はもつとずつと先になる。

別に、どうしても会いたい同級生なんていないけれど、かつて恋人と引き離されたマリアベルがどれだけ焦燥感にかられ、そしてどれだけ絶望したか、ここまでするとより深く理解できる。

果たして、今年の転移者はどんな感じになるのか。

気づくと「今年も召喚が起こる」前提で考えている自分に気づき、苦笑する。

「どうしたの、レン？」

「いや」

答えて、なんとなく素直に話すのではなく別のことを言った。

「バレンティンまでにカカオの調達、間に合うかなって」

ダンジョンでたまに手に入るといいうレア食材、カカオ。

その出所は三十一階からの森だったのだが、せつかくたどり着いたというのに森を焼いてしまったため、ろくにドロップ品を手に入れないレンたちだった。

森とカカオ収集

ダンジョンからカカオを手に入れる方法は大きく分けて二つある。一つはダークエルフを倒した際のドロップ、もう一つは三十一階などで木を破壊した際のドロップである。

ただの地形、障害物であるはずの木からもドロップ品が出るというのは先人たちがショートカットを試行錯誤している際に偶然発見したものだ。

モンスターだけを狙うよりはずっと楽にカカオを手に入れられると、当時の住人たち(特に女性陣)はたいへん喜んだらしい。また、それがぬか喜びというか、確率が上がってもなお数を集めるのが大変だと知るまでにあまり時間はかからなかったそうだ。

「燃え尽きた木が灰や炭になるんじゃないやなくて消滅するのはそういう理由だったんですね」

と、金髪碧眼のハーフエルフ、アイリスがしみじみと言った。

「木が倒れてる中にぽとと落ちてきても見落としてしまいそうですし、助かります」

「燃やしてしまうとどの道、ドロップ品も燃やしてしまうのですけどね」

少女の言葉にマリABELが苦笑。

森を攻略するためとはいえ、豪快すぎる戦法を取ったことにはやはり思うところがあるらしい。あるいは、普通にやっていたら手に入っただであろうカカオの数を想像してもつたいたいと思っただのか。

「まあまあ、これからあらためて集めればいいよ。私たちが使う分だけあればいいんだし」

「うん。今日はカカオのために少し粘ってみよう」

相棒、フリーの楽天的な台詞にレンは頷いて笑った。

「せっかくバレンタインなんだし、できればチョコを作りたいよ」

「では、ご主人様。張り切って木を切り倒しましょう」

相変わらぬ無表情で言ったメイはストレージからメイスではなく大振りの斧を取り出してみせる。戦闘用というより木こりが仕事に使うためのそれは、言うまでもなくカカオを集めるために用意した

ものである。

バレンタインが終わったならアイリスの家にプレゼントするか、あるいは木こりのお手伝いでもする時のために取っておけばいい。

「ん。……って言っても、大部分はシオンに頼むことになっちゃいそうだけど」

「お任せください。狐火が使えない分、MPが続く限り木を攻撃いたしましょう」

見事な毛並みを持つメスの狐——転移と共に妖狐となってしまった少女・シオンは恭しく答えると、さつそく入り口近くの木々へと二三発の「水刃」を飛ばした。

魔法攻撃力の強化によって十分なサイズに達している水の刃は水平に撃ちだされると木々の根元に直撃、数本をまとめてなぎ倒していく。

倒れた木々は消滅してなにもないスペースを作る。

これを繰り返せば通路を作り出すこともできるし、カカオがドロップすれば高確率で発見できるというわけだ。

そうすると問題は徘徊する敵だが、

「じゃ、わたしは敵を倒してくるよ」

「よろしくね、レン。でも、あんまり無茶しちゃだめだよ」

「わかってる、大丈夫」

上空からなら敵の動きを把握しやすい。

翼を広げ、「飛行」スキルで舞い上がったレンはワンダリングモンスターを見つけては「マジックアロー」で攻撃する作業にかかった。

反撃はかわすか、ふだんはあまり出番のない防御魔法で防ぐ。豊富なMPに任せて攻撃し続けていればいつかは倒せるし、レンに気を取られてくれればそのぶんだけシオンたちへの攻撃が減る。

「なんとかうまく集まってくるといいんだけど……」

しかし、そうそううまくいくわけもなく。

バレンタイン直前になって慌てて集めた程度では、十分と言える量のカカオは手に入らなかった。



「けっこう頑張ったのに、たったの二個かあ」

リビングのテーブルにごろん、と置かれたのは大きき二、三十センチほどの大振りの実である。レンの言った通り数は二個。

「それにしても、カカオの実ってこんなに大きかったんだ」

「ね。私も見たのは初めてだよ」

「実の状態で売られていることなどそうそうありませんものね……」

レンにフーリ、シオン。

日本から転移してきてあまり時間の経っていない三人にとって、この実はまさに未知の食材だった。

チョコレートといえばコンビニやスーパーでも気軽に買えるお菓子であり、バレンタインにチョコを作ると言えば板チョコを溶かして型に流し込んだりトッピングをしたり、フルーツを中に仕込んだりするのが定番。

カカオの実を入手してきて一からチョコを作ろうなんていう剛の者にはあいにくお目にかかったことがなかった。

一方、異世界での生活が長いアイリスやメイ、マリアベルは見たことくらいはあるらしく、興味ぶかそうにはしていてもあまり驚いてはいない。

「この実の中にカカオ豆が入ってるんですよ？」

「ええ。こうしてみるとかなりのサイズですが、実際に使える部分は少ないようです」

「工程については事前に調べましたが、よくこんなものをあれだけ手間をかけて加工したものです。人類の英知というのは馬鹿にできませんね」

カカオの実一つからは数十個のカカオ豆が取れる。

この豆を数日かけて発酵させた後、乾燥させてから焙煎。軽く砕いたら必要な部位だけを取り出してペーストにし、砂糖やミルクを加えた上でチョコレートの元となるものに。ここからさらに細かくしたり細かくしたり温度調整したりを繰り返してようやくできるのが

チョコレートだ。

「つて、ここから発酵させたらバレンタインに間に合わないじゃん」

今日は二月十二日。バレンタインの二日前である。

レンたちが三十一階以降に行けるようになったのも去年の年末。年末年始は忙しかったし、それ以降もレベル上げやらでやるが多かったため、余裕を持ったスケジュールを組むのは難しかったのだが、それにしてももうちよつと早く思い立てばよかった。

愕然とするレンにフリーは「あはは、そういえばそうだね」と笑って、

「でもまあ、いいじゃない。向こうでもチョコ渡すのは十五日とか十六日だったりすることよくあったでしょ?」

「ああ、そういえば十四日が休みだと月曜に持ち越しだったりしたっけ。……わたしは学校の女子からチョコなんてろくにもらったことないけど」

もらえたのは明らかに義理、クラス全員に配ってます的なやつくらいである。

するとフリーはなぜか楽しそうに「そっかそっか」と頷き、

「中学から私が一緒だったら良かったのにねー」

「うん。でも、あの頃のわたしじゃフリーの気持ちを素直に受け取れなかったかな。恥ずかしがってお礼言えなかったり、ただからかわれるだけだって思っちゃいそう」

実際、高校で出会ってからもそんな感じだった。あのまま約一年、一緒に付き合っていたらどうなっていたかはさすがにわからないけれど。

「お二人は昔からのお知り合いではなかったのですね。とても仲が良いようなのでてつきり幼馴染だったのかと」

「残念ながら違うんだよー。逆に幼馴染だったらレンのこと好きになっただけだかもだけど」

「む。フリー、それってわたしに魅力がないってこと?」

「違うよ。ちっちゃい頃から見慣れちゃってるとレンの良さに気づかないかもってこと」

と、これはなかなかの殺し文句である。

レンは少し照れくさくなりつつも嬉しさから「そっか」とはにかんで、

「じゃあ、お互いこれでよかったのかな。わたしもフリーの良さに気づかないなんて嫌だし」

そのまま見つめ合ったところで、メイが「はいはい」と空気を中和するように口を挟んできた。

「いちやいちやするのは夜に二人きりの時にしてください。そうでなければ私もご主人様に子作りを要求します」

「こ……っ!?! メイさま、急になにを言い出すのですか!?!」

「落ち着いて、シオン。メイの場合、子供を作るのに『そういうこと』は必要ないから。ロボット作るような感覚だから」

「あ……そ、そうですよね。それならまだ——いえ、それでも十分、いやらしいのでは?」

「メイさんずるいです。私やフリーさんはそういうの、ダンジョン攻略が落ち着いてからにしようねって話してるんですよ?」

「なんだか話がややこしいことになってきたので話題をチョココレートづくりに戻した。」

「ええと、この実二つでどれくらいのチョコが作れるんだっけ?」

「だいたい板チョコ二つぶんくらいかな? 途中で失敗しないで作れて、だけど」

「うわ。みんなに配るにはぜんぜん足りなさそう」

なお、砂糖やミルクなどを加えてかさ増しというか味を調えたうえでの分量である。ミルクを多めにしたり、中にアーモンドや果物を加えることで多少は見た目の量を増やせるだろうが、六人、アイシヤを入れれば七人分のチョコとしてはぜんぜん足りない。

足りない分は買えばいいとは言ってもカカオは慢性的に不足しているため、どれだけ手に入るかわからないし買うと高い。

「うーん。チョコづくりにはチャレンジしてみるとして、他のお菓子も作るしかないか」

「だね。じゃあ、今年は何に作る?」

「そうだなあ……煎餅とか？」

「え、なんでそこでおせんべいなのか!？」

チョコでコーディングした煎餅とかたまにあるよね、的なイメージからの発言だったのだが、フリーには「バレンタインっぽくない」と不評だった。

しかしながら煎餅なら主原料は米である。

和食好きなシオンも「良いと思います」と言ってくれたので、チョコづくりと並行して煎餅やおかきを作った。

肝心のチョコづくりのほうは失敗はしなかったもののあまり上手くはいかず、一から手作りしたわりに板チョコから作るよりも美味しくないという微妙な結果。仕方なくさらにクッキーを焼き、それぞれがお世話になってる人へ詰め合わせとして贈った。

結果、いちばん評判が良かったのは餅を小さく千切って炒るような感じで作ったおかき。

季節柄、甘いものが多くなるところにしよっぱいものを出したのが逆によかったらしい。

「これはお返しというか、私たちからのバレンタインです」

「みんなで食べてね」

知り合いの女性たちからも思い思いのお菓子をもらった。

特に娯館のお姉さんたちは毎年チョコを用意しているらしく、レンたちとは雲泥の出来の美味しいチョコを贈ってくれた。

普通にお店で売れるレベルなのは、と褒めると「実際、営業の一環だからね」との返答。

バレンタインにお店に来てくれた男にチョコを渡す、というイベントによって客足が伸びるらしい。さすが、男心はこれでもかと単純にできている。つまり、お姉さんたちのチョコはある意味有料、商品なのであり、ただでもらってしまったレンたちはとても恵まれていることになる。

「わたしたちのお菓子だけじゃなんだか申し訳ないです」

「じゃ、お互いお休みの日にお部屋デートしようよ」

さすが、普段から男を誘惑しているだけあって、彼女たちの囁き声

は同性相手でも多大なる効果を発揮した。

これまでは似たような誘いをそれとなく断ってきたわけだが……考えてみると、断る理由があるのだろうか？ 同性相手だし、お金で買うのではなくプライベートならフリーたちとの関係と大差ない。

ひとまず「考えておきます」とはぐらかし、後でフリーに相談してみると、

「んー……私も参加していいなら行ってもいいよ」

彼女としては冗談のつもりだったのかも知れない。

しかし、レンとしてはフリーがいても構わない。女同士だし、目の届かないところで浮気(?)されるよりはずっといい。むしろお姉さんを交えることであるんな意味で勉強になりそうだ。

じゃあ一緒に行こう、と、わりと本気で答えかけて、

「……わたし、地味に思考がサキユバス化してるよね?」

「地味かどうかは話し合いたいところだけど、うん、わりと。レン、今ならシヨウくんたちとえっちしなきゃいけないなくても『まあいいか』で済ませられるんじゃない?」

「え? んー……あー、うん。いけるかも」

ただの知り合いでしかないおっさん相手、とかだとまた話が変わってくるものの、相手がある程度交流のある若者ならあまり忌避感はない。男性特有のアレについてはフリーに生やしたりして触れているわけで、いまさら嫌だとか言う領域にはない。

今のレンが男相手を避けているのは男だった頃の名残と好きな人が女性だから、それからフリーたちに生やせる以上は別に男を相手にする必要がないからだ。

シヨウたちと「○○しないと出られない部屋」とかに閉じ込められたらわりとすんなりやってしまいそうだし、一度一線を越えてしまつたら精神的な抵抗があつさり取り払われてしまう気がする。

「サキユバスって意外とやばい種族なんじゃ?」

「いまさらなに言ってるの。……っていうかレン、そういうこと言うなら、いまだに処女なのそろそろ本気でどうにかして欲しいんだけど?」

「え。いや、だって。さすがに挿れられるのは抵抗があるっていうか」「ふーん。私に入れておいて自分はダメなんだ。シヨウくんたちとしなきゃいけないようになったら『まあいいか』でできるのに、私にはさせてくれないんだ?」

あ、これ逃げきれないやつだ。

悟ったレンがその後どうなったのかは推して知るべし、である。

レンの悩みと変化したシオン

「ふう……」

家の屋根の上。

飛んでやってきたその場所で、レンは太陽を見上げていた。

マンガなどでよく見るシチュエーション。昔は「わざわざそんなところに行かなくても……」と思っていたものの、飛べるようになってみるとついついやりたくなる。簡単に行ける、落ちても対処できるというのがポイントなのかもしれない。

物理的に一人きりになれる場所は考えごとにちようどいい。

思えばこっちに来てからいろんなことで悩み通しだ。ダンジョンのこと、仲間のこと、身体のこと、お金のこと。ただの高校生だった頃には想像もできなかったほどさまざまながめまぐるしく動いている。

「うーん」

これまではひとつひとつなんとか解決してきたわけだけれど、

「レンさま?」

「わっ!?!」

背後から突然聞こえたシオンの声に、レンは尻を滑らせそうになった。慌てて浮遊能力を使い、事なきを得る。

それにしても、少女の気配に気づかないとはよほどぼんやりしていたらしい。

反省しつつ、慣れ親しんだ狐の姿があるはずの後ろを振り返って、

黒髪黒目の大和撫子が巫女服のような衣装を纏ってそこにいた。

「え……っ!?!」

目を見開いた拍子に浮遊の集中が切れかけた。

連続して二度も落ちそうになるとは、と、それはまあいいとして。

「シオン、それって……!?!」

すると少女——狐の少女ではなく真正正銘の女の子——はほんのり頬を染めて「はい」と答えた。

「チョコレートづくりに参加できなかったのがとても残念でしたの

で、『人化』のスキルを取得いたしました」

「ああ、なるほど。って、そこが重要だったんだ」

「だって、みなさまがお菓子作りをしている中、わたくしだけ食べる専門だったのですよ？」

さすがにお菓子作りは人型でないと厳しい。さらに言うとき毛でいっぱいなのはシオンは「できれば完成するまで別の部屋で待っていてくれないかな？」という対象でもあった。

確かにレンがその立場だったら嫌かもしれない、と納得する一方で、

「でも、それなら急に驚かさなくても」

今度はシオンの顔に悪戯っぽい色が浮かんで、

「申し訳ありません。レンさまを少しでも元気づけられたら、と思いますまして」

「そっか。……うん、ありがとう、元気出たかも」

浮遊を解除して座り直すと、シオンもそのまま隣に座った。

失礼かとも思いつつも興味に勝てず隣を見ると、少女の新しい姿をあらためて観察できた。

妖精めいたアイリスや人形めいたメイとはまた違う、和の趣を備えた美少女。どこからどう見ても人の姿で、彼女が「実は妖狐」だということとは見た目からではわかりそうにない。強いて言うとき美少女すぎて生の人間にしては不自然、といったところか。

「人化って、本当に人の姿になるんだ」

「ええ。魔法などを使わなければ人のままでいられるようです。魔法を使おうとするとこのように――」

空へと右手を差しのべ、水刃を放つシオン。

彼女の髪色が黒からきつね色へと変わり、頭にびよこん、と狐耳が生える。さらには巫女服のお尻部分にスリットが入ってふさふさの尻尾が一本飛び出した。

「人と妖狐の中間のような姿になってしまうようです」

「うわ、これは可愛いなあ。わたしと違って耳も尻尾もふわふわだし」「ありがとうございます。ですが、わたくしはレンさまの翼や尻尾も

好きですよ」

「ありがとう。……ねえ、シオン？　今のシオンってもとのシオンに似てるのかな？」

「そうですね……似ていると言えば似ていますし、似ていないと言えばあまり似ていません。面影程度、といったところででしょうか」

姿を自在に変えられるわけではなく、人化するとこの姿になる、ということらしい。

つまりはこの姿が妖狐としてのシオンの人型形態。

女子高生だった頃のシオンとは似て非なるもの、というわけだ。

「でも良かった。人間になれた方がいろいろ便利だもんね」

「そうですね。これからはいろいろとお手伝いができそうです。狐の姿も慣れてみると快適なので、普段はそちらの姿でいようと思っておりますが」

「うん。シオンを撫でられなくなったならみんな残念がるだろうし、それがいいかも。……もちろんわたしもだけど」

付け加えるような呟きにシオンはくすりと笑って「では、決まりです」と言った。上品ながら親しみやすさも感じる仕草。こうして見ると彼女のイメージにぴったりである。

そこで少女は小さく首を傾げて、

「ところで、レンさまのお悩みはどのような？」

「あ、いや。実は悩みっていうほどのことじゃないんだけど」

「ぶごによごによと濁してみるものの誤魔化せそうにはなく、

「お悩みでなければあのようにほんやりされないでしょう？　……それとも、わたくしではお力になれませんか？」

「う。シオン、それ反則」

いろいろな意味で可愛い後輩にそう言われてしまうと白状しないわけにはいかない。

レンは気まずい思いに襲われつつ空を見て、

「なんていうか、気持ちの落としどころがよくわからなくなっちゃって」

「落としどころ、ですか？」

「ちよつと心境の変化があつてき。心境というか、むしろ変わったのは身体のほうなんだけど」

要領を得ない説明にシオンは目を瞬いて、

「あの、その、もしかしてご懐妊……ですか？」

「ち、違うから！ まだそこまでは……あつ」

語るに落ちるとはこのことである。

全てを察したのか、少女が若干遠い目になって、

「考えてみれば、わたくしも房中術の際にお世話になりました。……レンさまは『他人に生やす』ことができるのでしたね。ちなみに、どなたと？」

「……えつと、フリーとアイリス」

今さら隠しても仕方ないかと素直に答えた。

フリーに迫られた後、アイリスにも「ずるい」と言われてなし崩しである。

そんなわけで、今は今までずっとあつたものがなくなった感覚というか、最後のプライド的なものが崩された感覚というか、どこかふわしてとらえどころのない感じが続いている。

おそらく、その正体は違和感なのだろう。

シオンは「なるほど……」と頷いて、

「お疲れなのではないでしょうか？ ……毎日のようにどなたかと夜を共にしていらっしゃるのでしょうか？」

「あー、うん。それはそうなんだけど……」

「？」

「それ自体は特に問題ないっていうか、むしろ元気の源なんだ。むしろ疲れるのはフリーやアイリスの方」

恐るべきはエナジードレインの力である。

誰かと肌を重ね合わせているだけで活力が得られる。言ってしまうと性行為をしながら食事をしているようなもの。体力、HP自体はいちおう減っていくわけだが、それだってヒールで回復してしまえばいい。

サキユバスの性質か、誰かと夜を共にすることで気疲れする感覚も

ない。

ぶっちゃけレンの方は毎日でも全然OKなのである。

「特に、完全に女の子役をやるのは本当にだめだった。あれはハマったら抜け出せないっていうか、いつまででも続けたくなくなっちゃって」
今までも押し寄せでいけばそのまま勝っていたのにこれはまずい。
このままでもいくといつか嫌そうな顔で「疲れたからまた今度」とか
言われてしまうかもしれない。

「まるで夫婦間のトラブルですね……?」

「似たようなものかもなあ」

フリーのほうは「あれだけ嫌がっておいでいざやってみたらドハマりしちゃって」とか思っているかもしれない。

「だいたいさ、ある程度経験のある同士だったら女の方が強いと思うんだ。男は回数制限があるのに女にはないんだから」

しかも男は一回ごとに戦意ダウンのバッドステータスがかかる。これで勝てるのは経験少なめで受け身な女が多いからだ。

実際、多くの男を虜にする魔性の女というのがたまに登場する……
というのがレンの経験から来る持論である。

これを聞いたシオンは眉を寄せて、

「つまり、レンさまとしてはもつとしたい。けれど、フリーさまやアイリスさまを休ませてもあげたい、というわけですね。それで、どうなさるおつもりなんですか?」

「うん。まあ、相手を増やした方がいいかも、とか」

相手を女性に絞っても希望者はいる。

フリーたちを独占しておいて自分だけ他の相手を作る、ということもなかなか最低だとは思っているのだが、一人相手で満足している側とたくさんしないと満足できない側では事情が違うのも事実。そのへんは話し合っつて折り合いをつけられないなら関係の変更も視野に入れるしかないのかも、と思う。

「だいぶサキュバスに染まってらっしゃいますね」

「だよ。でも、それがわたしなのかなって気もするんだ」

「わかります。わたくしも妖狐の性質に染まっているところがあります」

すから」

強いてそうしようとしているわけではなく、気づくとそうなっている。

どこからどこまでが元の自分なのかわからない以上、抗ったり否定することもなかなか難しい。特に嫌だと思っていないのならなおさらだ。

少女は小さなため息をついて、

「ですが、痴情のもつれでパーティが解散するのは困ります。きちんとお二人と話し合ってください」

「それはもちろん。フリーたちの意見も聞かずに決めたりはしないよ」

「それならばよかったです」

小さく微笑みを浮かべると軽く肩が触れ合うように身体を近づけてきた。

「もし、そのうえでもっとお相手が必要なでしたら、わたくしを求めてください」

静かで穏やかな声音。なのにとまらなくどきつとした。

指を持ち上げたくなるのを堪えて答える。

「冗談、じゃすまないよ。わたしの場合」

「構いません。動物的な本能、なのででしょうか。レンさまの傍にるのは心地良いと感じます。これからあなたと共に在りたいとも」

「……そっか」

迷いのない返答に深く頷きを返した。

サキュバスと妖狐。お互いに寿命の長いであろう種族同士。人間に戻らない限り、同じ時を長く過ごすことになっていくことになるのはほぼ確定している。

なら、そうなるのはある意味必然なのかもしれない。

レンはシオンの深い漆黒の瞳を見つめると、囁くように告げる。

「わたしも、シオンが欲しい。もっとシオンに触れて、感じて、わたしの気持ちを直接伝えたい」

「……レンさま。それは、あまりにも殺し文句が過ぎます」

顔を真っ赤にした少女はぽんつ、と一瞬にして狐の姿に戻った。
そうしてレンの腰、脇腹に身を擦りつけるようにしながら、
「今度は夜にも添い寝をさせてくださいね」
それがなによりの答えになった。



その後、フリーたちともしつかり話をした。

欲求が強すぎて求めすぎてしまうかもしれない、とか言っても
すぐく恥ずかしかつたものの、思い切つて打ち明けた甲斐あつてか二
人はレンの事情を理解してくれた。

「前にも似たようなこと言つた気がするけど、別にいいよ。私たちつ
てこんな感じだし、浮気だったら許してあげる」

「私もフリーさんと同じです。……フリーさんがいるのはもともと
知つてましたし、他の人が増えても変わりません。これからもレンさ
んが傍にいてくれるなら、それで」

フリーの「浮気だったら」はつまり、新しい誰かに入れ込んで自分
を放り出すのは許さない、という意味だ。

アイリスの言葉もそれに近い。二人ともパーティが解散したり、レ
ンがいなくなつたりすることのほうを嫌だと思つてくれている。

「ありがとう。でも、本当に大丈夫？ ……二人にばかり我慢させ
ることにならない？」

せつかくの機会だ。

聞けることを聞いてしまおうと尋ねれば、フリーがむつとした表情
になつて、

「本音を言うなら嫌」

飾らない生のままの気持ちを教えてくれた。

「私だけを見て欲しい。二十四時間、毎日私のためだけに生きていて
欲しい。私がレンだけを好きなのに、レンは他の子のことも好きなん
で不公平だと思う」

率直なだけに刺さる言葉。それでも全てを受け止めようと聞いて

いると、少女は「でもね」と苦笑して、

「私のほうがもらい過ぎてるのも事実なんだよね。レンを満足させるのなんてアイリスちゃんと二人がかりでも大変だし。毎日そんなに頑張ってたらぜったい疲れちゃう。体力がもっても気疲れする」

「フリー」

「だから、そんなに我が儘は言わない。アイリスちゃんやメイちゃん、シオンちゃんと喧嘩するのも嫌だしね。……これで、どう？」

「……っ」

涙が出そうになった。

女になってから感情の揺らぎが強くなりやすくなった。高ぶりを抑えきれないまま愛しい少女を抱き寄せて「うん」と答える。

「ちゃんと、大切にやるから」

「あはは。……レン、苦しいってば」

恥ずかしそうなフリーの声。

見れば、顔が真っ赤になっていた。恥ずかしさもあるだろうが、興奮しかけている感じ。密着したことで魅了が強めにかかってしまったのかもしれない。

慌てて離れようとしたところで腕の片方が引っ張られた。

真剣な表情をしたアイリスがレンを抱き寄せるようにして、

「……私のことも、ちゃんと愛してください」

「……うん」

腕を回して逃げられなくした少女の身体には想像以上の熱が籠もっていた。

変わっていく関係と変わらない関係。

日常の中で言葉を重ねながら、レンたちはひとつずつダンジョンを進んでいった。

次なる難関は三十五階。

そこは挑戦者たちに「エルフの森をダークエルフの侵略から守る」という目標が課されるエリアだった。

ダークエルフとレン

三十五階の入り口は森の中にあるエルフの集落のはずれ。

集落には木製の家屋が立ち並んでいる。家々の間に残っている木々も多く、森を切り開いて作ったというよりは森の中に存在しているという印象が強い。

一目で全貌を把握することはなかなか難しくそうだ。レンたちは攻略本から大まかなマップを把握しているものの、二次元の図だけを見て迷わず進めるといいうのもそれはそれで一つの才能だ。

「私たちがここに来た時点で敵の動きは始まっているはずですが」
階段から出たところでリアベルが言う。

彼女は事前の作戦会議にてこうも言っていた。

『三十五階がかつて私が最後に経験した大きな戦いになります』

もうそんなところまで来ていたのかと驚くレンに彼女は「その頃にはもう三年以上が過ぎていましたから」と苦笑した。

アイシャとすぐに再会する望みは断たれ、新しい恋人もできていた。当時でも攻略階層は「少なくとも五十階」と予想されており、そこまで到達するのにあと数年はかかるという推測だった。戦いの後、なんとしてでも日本に帰るといいう願いが萎えてしまっても無理はない。

「エルフ族は決して敵対的ではありませんが、ここまでのダークエルフ同様、私たちの言葉は通じません。協力するのではなく敵対せず、ダークエルフを叩くことを優先しましょう」

これに全員が黙って頷き、

「じゃあ、作戦通りに」

レンたちは四方向に分かれて動き出した。

翼を広げて舞い上がるレン。巨大化したシオン（狐形態）の背にはリアベルが乗り、アイリスは風の魔法により空へと飛びあがる。飛べないメイとフリーはなるべく物音を立てないように注意しつつ陸路で移動を始める。

三十五階の戦いはこれまでとはだいぶ勝手が違う。

攻撃ではなく防衛が目的であり、防衛対象がエルフの集落および森と幅広い。敵のダークエルフたちはほうっておくと森を焼き始めるため、村でぼーっと待っていては手遅れになってしまう。

なんとという初見殺しのミツシヨンなのか。

三十五階に挑むにあたって過去の経験者にも話を聞いた。さすがの賢者もここにはあまりいい思い出がないのか苦い顔になりながら、『とにかく迅速に行動することだ。間違っても「エルフの言語を解析しよう」などと考えてはいけない』

『ああ、やったんだ？』

『対話が可能になれば後々役に立つだろう。決して知的好奇心だけの理由ではない。……それはともかく、気をつけることだ。パーティの分断はそれだけ危険に繋がる』

勝てないと思ったら迅速に引き返すか、あるいは森から離れることだと賢者は言っていた。

勝利条件は防衛の成功。勝利条件を満たせなかった場合、階段から神殿に戻って入り直せば再挑戦が可能である。命を落とすくらいなら森を見捨てて生き残る方が賢明だということである。

もちろん、勝てるのならそれに越したことはない。

「うわ、けっこう広いな」

2〜30平方キロメートルはありそうな広大な森林。

かなりの高度まで上昇したレンは、森の外に広がる草原を進行してくる敵を見つけた。褐色の肌を持つ長身の長耳種族。ダークエルフの軍勢は四方に分かれてエルフの森へと進んでいる。

数は、合計で300といったところか。

四つに分ければ百足らず。少ないと言えば少ないものの、ダークエルフである以上、補給要員などの後方部隊であつてもある程度の弓や精霊魔法を操るはず。決して油断していい相手ではないし、それだけの数を少人数で相手取るとなればなおさら危険だ。

「まあ、いきなり森を焼きには来ないのが救いかな」

向こうもダークとはいえエルフだ。広い森があるなら焼くよりも奪って自分たちのものにしたらしい。なのでエルフの逃げ場を奪

うように四方から囲んだ上で根絶やしにしようとする。相手が降伏するならばそれはそれでOK。奴隷にしてあれこれと利用すればいい。だから、時間的には多少の余裕がある。

敵が森に到着して攻撃を開始するまではあと十分といったところか。森の中に入られて乱戦になるといろいろ厄介なので、できればその前に止めたい。レンは森の北側、他の部隊に比べて数の多そうな一団を見定めるとそちらへ全速力で向かった。

警笛のようなものが鳴らされたのは敵に接近する前のこと。

単騎とはいえ自軍に向けて飛んできた何者か（おまけに悪魔っぽい姿）に対し、彼らは進軍速度を緩めつつ警戒態勢を取った。

大きな声で投げかけられてきたのは、おそらく誰何を意味するであろう異世界語（？）。

悪魔やサキュバスならダークエルフとは相性がいいだろう。言葉さえわかれば騙して油断させる道もあったかもしれないが、あいにくレンにはなにを言っているのかまったくわからない。

無視して接近すると二重魔法・魔法増幅・追尾魔法つきのマジックアローを発動。

味方が一人もいないというのはある意味素晴らしい。ホーミングの効果で光の矢はすべて敵へと確実に襲い掛かった。

悲鳴と怒号。

二、三体が消滅するも、部隊に大きな被害はなし。お返しとばかりに精霊魔法が発動し、軽く十を超える矢が向けられた。

「うわ、これ、さすがに怖いな……っ!?!」

びゅん、と、すぐ脇を擦過したのは風の加護を受けて高速で飛んできた敵の矢だ。

アイリスが使った似たような攻撃はある程度の木板くらいなら砕いてぶち抜く。腕や足がぶち抜かれるところを想像して身震いしつつ、不規則な機動を描いて狙いを外そうと試みる。

当然、魔法も可能な限り連発して敵の戦力を削っていく。

ブースト付き、レンの魔法攻撃力も上がっているとは言ってもマジックアローでは火力が足りないのか、一回の攻撃で撃破できる数は

さほど多くない。二、三体ずつでも繰り返せばそのうち全滅させられるだろうが、その前に敵もさらなる動きを見せた。

伝令と思しき者が部隊から飛び出し、風の魔法で高速飛行を始めたのだ。

「っ!?!」

撃ち落とそうとしたところに矢の牽制。

地面すれすれ、低高度を飛ぶ代わりにスピードを上げているのか、伝令はあっという間に去ってしまおう。これで、他の部隊に攻撃命令、あるいは合流の指示が飛んだことだろう。

まあ、それはそれで構わない。

他の部隊にもシオンやアイリス、メイが向かっている。ある意味では「無駄なことに戦力を割いてくれてありがとう」とも言える。

とはいえ、

「……うわ」

一団からひとつの影が空へ飛びあがってくるのを見て、レンは思わず呻いた。

見るからにグレードの違う旅装を纏い、年季の入った黒い弓を構えるダークエルフの美女。その赤い瞳には困惑、それから怒りの色がある。

ダークエルフの女王、あるいは姫。

この三十五階のボスという位置づけではあるものの、この勝利条件は彼女の撃破ではない。倒しても戦闘が少し楽になるだけだ。

勝利条件になっていないボスだけこうして気軽に突撃してくるのは嫌がらせかなにかなのか。

「!?!」

「悪いけど、なにを言ってるのかわからないだよねっ!」

美人すぎて傷つけるのはもったいない。

不謹慎なことを考えつつ、レンは再び魔法を発動。光の矢の半分を姫（仮）へと向かわせるも、彼女は思わぬ動きでこれを回避した。

直撃する直前、空中で宙返りをしてみせたのだ。戦闘機同士の戦いで行われるようなそれ。こっちに來てから本で読んだものの、こんな

ことなら洋画かなにかで勉強しておくんだった。

いくら追尾機能があるとは言っても矢の機動は急に変わらない。大きく後方へと通過していった矢をマニュアル操作で戻そうとすれば、黒い弓矢がレンを狙った。

「マジックシエルっ！」

防御魔法で矢の勢いを弱めつつ、ギリギリで回避。

ちらりと下を見れば敵部隊は再び進軍を開始していた。最強の個体が足止めを行い、その間に作戦遂行。指揮官が危険に晒されることを除けば極めて合理的な作戦。実際、こうして釘付けにされている以上、向こうにも勝算があつての行動だろう。

レンは舌打ちしつつ、いったんターゲットを姫に絞った。

節約のため補助スキルの使用を止め、通常のマジックアローとマナボルトを織り交ぜて手数で攻める。でたために動き回りながら魔法を放てば敵の攻撃もそうそう当たらない。逆にこっちの攻撃も有効打にならなかったが、その間にせめてポーションを使おうとして、

中身の入った状態のポーション瓶を矢が正確に打ち砕いた。

「もつたない！」

抗議と共に睨めば、姫はレンにやりと笑ってみせた。

ホーミングを連発したせいでMPがかなり減ってしまったている。ここで姫個人に消費させられるわけにはいかないのに——と、歯噛みしつつも攻撃の手は止められない。節約してはいても使えば確実に減っていく。膠着状態で助かるのは相手のほうだ。

数で劣るレンたちはできることなら早く敵を片付けて味方の救援に向かいたい。

シオンとマリアベルが二人で向かったところはまあ、ある程度心配ないだろう。メイもなんだかんだ生き残りはするだろうが、アイリスとフリーは心配だ。いくら上手くやつても不意の一発で致命傷を負ってしまうかもしれない。

できるだけ早く様子を見に行きたい。

「ああ、もう！　しょうがない……っ！」

残り少なくなってきたMPに焦れた。

一か八か。

レンは機動を大きく変更、姫に向かって真つすぐに突っ込んでいく。これに相手は目を見開き、距離を離そうとしてくる。始まった追いかけてこ。全速で逃げながらだときさすがに狙いもずれるのか矢の攻撃が少し楽になった。避ける気がなくなったため、防御魔法で防ぎつつも何発か直撃をもらってしまおうが。

ダークエルフの飛行能力は精霊魔法に依存している。

飛行したまま他の精霊魔法を使うのはかなりの高等技術らしく、姫もそれを試みようとはしてこない。飛びながら魔法が使えるレンはその点において相手よりも優位にあった。範囲魔法で牽制も行えるし、矢の攻撃を防御することも、

「ヒール！」

治療魔法で傷を癒すこともできる。

矢が身体から抜けていく感覚に顔をしかめつつ、距離を少しずつ詰めていく。風の精霊魔法による飛行はスピードの調節と細かいコントロールに難がある。一方、サキュバスの飛行は翼に依存しているように見えてその実、翼には関係のない異能のようなものだ。

緩急もつけやすいし細かい動きもやりやすい。

二、三分にもおよぶ追いかけてこの末、

「捕まえた！」

レンは姫の細い腕を掴まえることに成功した。

暴れようとする彼女をぐいっと引き寄せる。エナジードレインの効果に驚いた姫は背中側で羽交い締めされた格好となり、手にしていた弓を落としてしまう。

せつかくなので背中の中矢筒も外して下に落とし、

「うわ、っ！」

飛行魔法を解除した姫の体重がぐつと重くなった。

振り返り、レンの肩を掴みながら新しい魔法を発動させようとする彼女。可愛い見かけに反して肝が据わっている。この至近距離で攻撃されてはたまらないので、姫の身体を押さえつけると唇を奪った。

まさか敵、それも同性にキスされるとは向こうも思っていなかった

かもしれない。

レンとしても別に趣味だけでそうしたわけではない。キスはエナジードレインの効率を飛躍的に高めてくれる。ドレインによる生命力の吸収、およびある種の快感は動きを止めさせ精神集中を鈍らせるのにももってこいだ。

実際、しばらくキスを続けていると姫の身体からは力が抜け、ただレンにしがみつくだけになった。

おかげでMPも回復。

発声なしでヒールを追加発動し、念のためストレンジに入れてあつたロープを使って姫の身体を拘束。後ろ手に両腕を縛り、足も二箇所を拘束しておけばそうそう抜け出せないだろう。

魔法を使われないためにさらにキスをして生命力を奪って、

しかしこれ、どうしたものか。

流れで捕まえてしまったものの、敵部隊はすでに移動して森に到達しようとしている。姫を連れたまま追いかけると面倒なことになりそうな気がするし、せっかく捕まえたものを消滅させてしまうのも少々もつたいない。

とりあえず仲間たちに簡単な事情をメッセージで送り、しばらくしてぐったりしてしまった姫と共に地上へ降りた。

「人質にして部下を脅すとか?」

と、思ったところで森を迂回するように誰かが走ってくるのが見えた。再び飛んでこちらから合流すると、メイと別行動を取ったらしいフリーだった。

「メイは大丈夫そう?」

「うん。私はむしろ邪魔だから逃げてきちやった。飛び道具無視して突っ込んで無双してたから大丈夫。……それにしても、レン、こんなところで浮気?」

「いや、そういうわけじゃないんだけど。この子、連れて帰ったらどうなるのかなって」

「あー。それは確かに気になるね」

などと言っていると、別の方向から大きな狐と金髪の少女がやって

きた。シオンの上にはマリアベルもいる。どうやらみんな無事だったらしい。

「でもこれ、攻略は失敗だね」

かなりの敵を削ったものの、一部に森へ入られてしまった。

戦力が減って正攻法は無理と悟ったのか、ほどなく森からは火の手が拳がり始め、最終的に森は三分の一ほどが全焼。

エルフの集落も何割かが損壊する有様で、当然、下への階段も出てこなかった。

「……やり直しかあ。ごめん、わたしのせいだ」

「いいよ。それより、せっかくだからその子、連れて帰らないと」

目立った戦利品と言えれば生け捕りにしたダークエルフの姫くらいのものである。

ダークエルフの姫

「……これは、なんとも興味深いな」

「おっさん、いまめちやくちやうずうずしてない？」

「当たり前だ。今までこんな状況は無かったからな」

捕らえたダークエルフの姫をレンたちは街に連れ帰り、そのまま賢者のところへ連れていった。

手足は拘束したまま、口には布を噛ませた状態である。魔法は詠唱がなくても使えるので万全とは言えないものの、複数人に囲まれた状態から抜け出すのは容易ではない。拘束とは別に胴体へくくりつけたロープの端をメイに持つてもらっている。

当然ながら、彼女の表情はかなり険しい。

自由になったら殺してやる、とばかりの剣幕でレンたちを睨みつけているものの、賢者は全く臆する様子を見せずしげしげと姫の全身を観察している。

「ね、賢者さん？　今まで捕まえようとか思わなかったの？」

「もちろん、思わなかったわけではない。実際、ダンジョンにいるエルフやダークエルフを捕らえたこともある。しかし、その時は階段へ足を踏み入れると同時に消滅してしまっただけだ」

「賢者様？　エルフにまでそんなことをしたんですか？　母に言いつけてもいいですよ？」

「仕方なからう、異世界語の話者を用意できれば言語の解析が飛躍的に進む。無論、上手く連れ出せた暁にはきちんとした待遇を用意するつもりだった」

まあ、それにしたって「知らないところからいきなりやってきた侵略者に村から誘拐され、高圧的に協力を命じられた」ことになる。下手したらアイリスの母を完全に敵に回していてもおかしくない暴挙である。

「では、どうして今回はそのようにならなかったのでしょうか？」

「彼女がボス——重要人物だから、なのかもしれない。さすがに『主役級』の人物をここまで連れ帰って来られたのはこれが初めてなのだ」

そもそも、ほとんどの階ではボスの撃破が勝利条件に含まれていない。

倒さないと先に進めないのが普通はそのまま倒す。姫の場合は倒さなくても進行可能だが、レンの足止めを買って出たように積極的に戦いへ参加してくるため、彼女だけを生け捕りにするのは困難だ。味方戦力を多く用意して安全に取り巻きを排除——などとやろうとすれば、勝ち目がないのを悟った敵が撤退を始めたたり自害してしまう恐れもある。

「あるいは、何か特別な条件を満たしたのか」

「条件って言っても、レンはただこの子にえっちなことしただけだよ
ね?」

「ご主人様、そこを詳しく」

「いや、MP回復のためだから。抱きしめてキスしただけでそれ以上はしてないし」

「戦闘中にそれだけやっていれば十分ですが」

マリABELにまでジト目で言われてしまい、レンはさすがに気まずくなつて目を逸らした。

こほん。

賢者がわざとらしく咳払い。

「それで、彼女をどうするつもりだ?」

「どう、って言われても。あんたが喜ぶかなと思って連れてきただけで」

「ふむ。では私の好きなようにしていいと?」

「……やっぱり連れて帰ろうかな」

動けない美少女に好き放題する中年男性。明らかに事案である。まあ、実際は姫のほうが年上だったりするかもしれないが。

「だいたい、話を聞くには口を自由にしないと。その辺の対策はあるの?」

「ある、と言えばある」

「(そご)そと戸棚——これも一応、決まった者にしか開けられないマジックアイテムらしい——から取り出されたのは金属製のチョコ」

カー、というか首輪。

「これは装着させた者にしか外せない呪いのアイテムだ。加えて、着用者の魔法攻撃力を大幅に落とす効果がある」

「まるつきりエロ漫画とかにでてくる『都合のいい無力化アイテム』なだけで?」

「別に狙って作ったものではない。マジックアイテムのランダム生成でたまたま完成したものだ。こんなこともあるかと取っておいた」
本当にピンポイントな「こんなこともあるのかと」である。いや、本来はベテランが街に反逆しようとした時用の備えか。

それにしても絵面がやばい、と思っていると、ぽんと首輪を投げ渡されて、

「レン、着けてやれ」

「え、わたし?」

「私がやるよりはいくらかマシだろう?」

「……まあ、確かに?」

捕まえたのがレンなのでどっちもどっちな気もする。

ともあれ、レンは少女に首輪を嵌めた。一瞬、全体が輝いて効果の発動を教えてくれる。これで魔法を使われても大した威力にはならない。

顔を見合わせた後、賢者の「早くしろ」という視線を受けて姫の口に噛ませた布を外し、

「なんなのよ、ここは!? お前たちは何者なの!」

口を開いたダークエルフの姫は、どういうわけか明瞭な日本語でレンたちへ問いかけてきた。

「……………」

「……………」

「ねえ、聞いているの!? 言葉が通じているんでしょう!? それについても一緒に説明しなさい!」

きゃんきゃんやかましい。

レンの周りにいる女性陣は明るくはあっても理性的な子ばかりなので新鮮な反応である。ゆくゆくはこういう子ともうまく付き合え

るようにならなければ……と、それはともかく。

「あれ、どうして言葉が通じてるの？」

「翻訳機能が働いているのか？ ……いや、ここと向こうは別世界、向こうに大規模な干渉はできないということか。あるいは、あの石碑はあらかじめ用意したメッセージを表示するだけ。対して、現在進行形の会話を全て翻訳するには処理能力が足りないのかもしれない」

「わけのわからないことばかり言わないで！ 結局、ここはどこなの！？」

「んー……たぶん、異世界だよ。あなたたちが滅ぼした世界のなれの果て。わたしたちは別の世界から召喚されてきて世界を作り直している最中」

これには、さすがの姫もぽかんとした表情を浮かべた。

数秒をかけて意味を咀嚼し終えた彼女は信じられないというように、

「世界が滅んだ？ じゃあ、私がさっきまでいた世界は？」

『神殿』が再現した世界の記憶——だと、私は考えている。実際はどうなのかわからないがな。おそらくは似たようなものだろう」

「そんな、まさか。でも、ヒトの世界を滅ぼして世界を闇に包むのは『計画』のうちだった。魔王は最終的に邪神を呼び出そうとしていたはずだから……」

ぶつぶつと呟くような台詞には、これまでは求めても手に入らなかった核心に近い情報が多分に含まれていた。

「くつ、くくく！ はははっ！ ……よくやった、大手柄だぞ、レン！ 今の一言だけでも十分過ぎる価値がある！ これからの攻略が大きく変わるかもしれない！」

よほど興奮したのか、賢者は突然高笑いである。

姫はびくつと身を震わせて「な、なに？ 大丈夫なのこいつ？」と正直な反応。レンたちでさえぶつちやけドン引きである。念のため、姫を座らせる位置をちよつと賢者から遠ざけておく。

「えーつと、その、なんていうかさ。来ちゃったからにはいろいろ教えてくれないかな？ 大人しくしていてくれれば痛いことはしないし、

わたしたちは話を聞きたいだけだから」

「……それは」

相対的にまともだと判断されたのか、姫はレンを幾分か信頼するよ
うな表情で見えて、

「つて、騙されないわ！ お前が私にしたことを忘れたわけじゃない
んだから！」

「……あー」

それはそうだ、としか言いようがない。

どこの世界に「突然自軍を襲撃した挙句、キスしてきた女」に従う
馬鹿がいるのか。強いて擁護できる点を挙げるなら男よりはマシ
だったんじゃないか、という程度である。

「それは本当にごめん。でも、こっちにも事情があつたわけで」

「事情つて、どんな事情よ?! お前はサキュバスで、そっちはハーフェ
ルフでしょう? エルフとダークエルフに伝わる風習を知らないと
は言わせないわ」

「え?」

「え?」

顔を見合わせ、首を傾げるレンとアイリス。

あいにくだが初耳である。

「いや、その。わたしは生粋のサキュバスじゃないんだ。この子の母
親もそうなんだけど、わたしたちは異世界から来た人間で、不思議な
力によって種族を変えられてしまった。だからエルフの伝統とかは
知らないんだ」

「……な、なによそれ」

ぷるぷると震えて怒りを表す姫。

極上の絹糸のような白い髪とルビーのような赤い瞳。顔立ち自体
も非常に整っているため、怒つていても美しい。

レンたちとしてはあまり刺激したいとも思わないためしばらく落
ち着くのを待って、

「なんだ。じゃあ、あの件は無視してもいいわよね? 知らなかった
んだもの。これからも知らなければなんの問題もないわ」

なんだか妙な結論を出し始めた。

まあ、その風習とやらがなんなのか知らなければ確かに追及のしようもないのだが。

「伝統的な風習を破ることに呵責がないのであれば構わないのではないだろうか」

「シオン」

「ぐっ!? この獣、ずいぶん偉そうじゃない!? ……っていうか、もしかしてそいつ、狐? この地方にはいないはずなのに」

「ここが彼女のいた場所とは違う証拠が積み上がっていく。

ついでに良心の呵責に堪えきれなくなったららしい姫はしばし口ごもると、俯いて言った。

「私たちにとって、口づけを交わす相手は将来を誓い合った相手だけなの。……初めてだったのに! 私はお前に大切なものを奪われたの!」

「――」

しん、と、部屋が静まり返った。

大喜びしていた賢者でさえもいたたまれない表情を浮かべてレンを見つめてくる。

「事あるごとにいろんな人へ子作りを薦めているくせに。いや、経験がないからこそ潔癖などところがあるのだろうか。」

「いや、初めてを奪ったは人間きが悪くない!」

「同じようなものでしょう!? 風習に従うなら私はお前の妻になるしかないんだもの!」

「女同士で結婚すること自体は大丈夫なの?」

「他者との性行為は認められているから、子供は作ろうと思えば作れるわ。実際、王族の中にはそういう人もいたし」

「ご主人様の場合は女性同士でも子づくり可能ですから余計に問題ありませんね」

「っ!」

姫は真っ赤になって俯いてしまった。

純潔の重要性が低そうなわりには初心な反応である。王族だけに

大切に育てられてきたのか——って、それはともかく。

姫は捨てられた子犬のような目でレンを見上げて、

「……それに、きつと私はもう、あの場所に戻れないんでしょう?」

「……うん。ごめん。たぶんその通りだと思う」

ダンジョンの状態は攻略中のメンバーが全て脱出した時点でリセットされる。残るのは「何階まで攻略したか」などの一部の情報だけだ。

だから、姫を連れて戻ってもあの場にはもう戻れない。

逆に森を襲撃する以前の部隊に戻ることは可能かもしれないが——それが彼女のいるべき場所なのかどうかはなんとも言えない。

「私は作戦に失敗したわ。お前たちがいなければ成功していたでしょうけど……兵を失い、エルフの殲滅も成し得なかった以上、戻ったところで待っているのは糾弾よ。なら、サキユバスと契つて子を成すのも良いかもしれない」

「ダークエルフなんかとレンさんが結婚する必要もないと思いますけど」

「ふん。ハーフでもしつかりエルフなのね。これだから肌の白い奴らは。お高く留まっているくせに敵には残酷なくらい攻撃的」

アイリスとにらみ合い始めた姫だったが、その表情にもどこか力がない。

「……ごめん」

レンは、ここに来てようやく本当の意味で彼女の状況を思いやつた。

「わたしは、あなたから帰る場所を奪った」

これに姫は意外そうな顔をして「別に」と答えた。

「単なる利害の相違でしょう。私たちに力が足りなかったから負けただけ。……それに、あそこが魔力によつて作られた仮初の世界だったっていうのなら、あのままあそこにいるも私は消えるだけだったのでしょう?」

「ほう。理解力が素晴らしいな。やはり我々に比べて深い魔法の知識が——」

「賢者さんはちよつと黙つててくださいいねー」

余計なことを言う男が黙つたところで、姫はつんと顔を上げて、
「私は仮にもダークエルフの姫よ？ あなたには私を相応に遇する気
はあるかしら？」

「……そうだね」

気丈な彼女に甘えて、レンは笑顔で答えることにした。

「お気に召すかはわからないけど、せいっぱいお世話させていただけ
きます。……あ。そう言えば自己紹介もまだだつたっけ」

レンが名乗り、仲間たちもそれぞれに自己紹介を口にする、最後
に褐色の少女が名乗った。

「私はミーティア。姓は必要ないでしょう？ まあ、別に期待はして
いないけれど、お手並み拝見と行かせてもらおうわ」

こうして、レンたちの家に一人、新たな住人が増えることになった。

歓迎パーティー

「狭い家ね。獣の小屋かと思ったわ」

「ご主人様。殴ってもいいでしょうか？」

「いや、メイに殴られたら最悪死ぬから」

家までの道中はわりと平和だった。

ダークエルフの姫——ミーティアは街をきよろきよろしながら悪態をつくだけで、突然魔法を放つたりとかはなかった。街の人も「珍しい」という表情を浮かべることこそあれ、必要以上の反応をしてはこなかったのだ。

家の傍で出会った後輩、数少ないダンジョン攻略組の少女は、

「こんにちは、レンさん。そちらの方はどなたですか？」

「ふん。頭が高いわ、人間。私は高貴なるダークエルフの——」

「ダークエルフのミーティアだよ。わたしたちの家に住んでもらうことになったからよろしく」

「わかりました。みんなにも伝えておきますね」

こんな感じである。

「……ねえ。私が言うのもなんだけど、警戒心がなさすぎじゃないかしら？」

「そう言われても、見た目の違う人とか見慣れてますし」

数少ない異種族はほぼ全員が顔と名前を把握されている。そういう意味では奇異に映るだろうが、サキュバスが街を歩いているのが当たり前前のこの街では「ダークエルフだから」で迫害されることはない（エルフとの敵対関係は除く）。

連れ歩いているのがレンであれば猶更だ。

というか、見るからに敵っぽい種族でもすんなり受け入れられる土壌を作ったのは他ならぬレンのような気もしないでもない。

「ダークエルフは森に住んでいるんじゃないんですか？」

金髪碧眼のハーフエルフ、アイリスの問いに白髪赤目のダークエルフ、ミーティアは「そんなことも知らないの？」とでも言いたげに胸

を張って答えた。

「私たちダークエルフは森の中に国や集落を作るけれど、エルフと違って『木を極力切り倒さないように』なんて考えたりはしないわ。木を切ったらその分だけ植えればいいのよ」

エルフは「少ないスペースを有効活用しよう」。ダークエルフは「スペースが足りないなら広げればいいじゃない」。

無計画に木を切ることのある人間としてはどっちが正しいとかは言えないものの、ミーティアの意見の方がダークっぽいのは確かである。

「ダークエルフの考え方は乱暴すぎます!」

「うーん。でも、日本の林業とかもそんなもんだよね」

「むしろ地球温暖化とかで『木を切り過ぎないようにしよう』とか言われてるくらいだしね」

「はっ。無計画に森を破壊するとはさすが人間ね」

形は違えど森を愛していることには違いないのか。ミーティアの台詞に、ここは同意できると思ったのかアイリスがうんうんと頷いた。

それを見たシオンがくすりと笑って、

「アイリスさまとミーティアさまは仲良くできそうですね」

「はあ? 誰がこんなハーフエルフの小娘と」

「わ、私だって嫌です!」

わいわいとやっていたらリビングにいたアイシヤが玄関先まで帰ってきて、

「マリア、この子は?」

「ああ、ええと……説明すると長くなるんだけど、レンさんが捕まえて連れて帰ってきた、ダンジョンのボスなの」

「ええ……!?!」

收拾がつかないため、ひとまずみんなでリビングに落ち着くことにした。

家の中を観察したミーティアは「不思議な様式ね」と呟く。

「話に聞く人間の生活文化とも違うみたい。……本当に異世界の住人

なのね、あなたたち」

「アイリスちゃんとメイちゃんはこっちで生まれた子だけどね」

今日はボス戦だけで比較的早く終わる予定だったため、アイシヤが用意してくれていたのは昼食だ。打ち上げをするつもりで予約していた洋食店のテイクアウトもある。

攻略には失敗したので少々アレだが、代わりにミーティアの歓迎パーティーということにした。

「それじゃあ、乾杯！」

酒の入ったグラスを掲げて挨拶。

敢えて氷を入れて冷たくした赤ワインが疲れた身体に染みる。これはこれで良いが、せっかくの酒が薄まってしまっているので二杯目は氷を入れずに飲むことに決めた。

乾杯をスルーし、不思議そうにグラスを手を取ったミーティアは恐る恐るワインを傾けて、

「……なかなかいい味ね」

「そう？ それなら良かった。私たちは本場のワインって飲んだことないもんねー」

「お酒が飲めるようになったのはこっちに来てからだもんね」

テイクアウトしてきた料理は唐揚げにフライドポテトなどパーティーっぽいものを中心。昼間から飲むことを考えてポリウムとカロリーのあるものを選んだ感じた。

お姫様の口にも合ったらしく、一口ずつ味見した後はもくもくとフォークを動かしている。特に気に入ったのはタルタルソースをつけた唐揚げらしい。

「ダークエルフは肉食系なのですね？」

「まあね。せっかく獲物が豊富にいるのだから食べないともつたいないじゃない。ねえ、 HALF エルフ？」

「エルフだってお肉は食べます。でも、野菜とバランスよく食べるべきですー！」

「そんなこと言っているから駄目なのよ」

ふん、と笑ったミーティアは軽く腕を組んでみせる。寄せ上げられ

た胸はなかなかのポリウムだ。これが食文化の差なのだろうか。

レンは自身の胸を見下ろし、Fカップはあるだろうそれに苦笑した。

食べるもので大きさが変わるとしたら、一番良いのは「知的生物の生命エネルギー」なのかもしれない。

「あの、ところでミーティアさまのお部屋はどうするのですか？」

「ああ、とりあえずわたしの部屋にいてもらうのが安全かなって思うんだけど……」

「却下。あなたたちに攻撃の意思がないのはわかったけれど、それは別の意味で危険でしょう？」

戦闘中にキスした身としてはあまり否定できない。

「うーん、そうだね。ミーティアちゃんが一緒だと私たちもレンのところにいきづらいし。……ね、アイリスちゃん、シオンちゃん？」

「は、はい」

「え、ええ」

「……ふーん？ ああそう。なるほどね。あなたって気が多いうえに手が早いよね、レン？」

「あ、あはは。まあ、うん。そうかも」

あつさりとバレてしまい、もう笑うしかない。

と、メイがどこか恨みがましげに視線を向けてきて、

「ご主人様。夜の相手でしたら私も仲間に入れてください。レベルを上げて獲得した柔らかかボディで何時間でもお相手いたします」

「確かに前触った時も柔らかかったけど、戦闘の時とか不便じゃない？」

「柔軟性と硬度を可能な限り両立するように配慮しております。加えて、四肢はボディに比べて硬度や筋力を優先しておりますので」

「なるほど、それはすごいなあ」

人間の身体というよりロボの発想ではあるものの、それだけに生き物を超えた性能がありそうだ。メイの父が腰を悪くしたというのも頷ける。

そういえば、メイの実家では三人目の妹が生まれたとか。先日、

パーティ共同で石や土や鉄をたっぷり贈った。

「普通に新しい部屋を使っていたらいいかがですか？　まだお部屋は空いているのですよね？」

「ですが、さすがに一人にさせるのは不安では？」

何をするかわからないという意味ではメイとどっこいどっこいくらいな気がする……と若干思ってから、レンは「うーん」と悩んだ。「どうしようか」

「ふん。この首輪も外れそうにないし、いまさら暴れる気なんてないわ。……と言っても、捕虜に対して警戒するのは当然のことよね」

「うん、じゃあいつそアイリスちゃんと一緒に居てもらおうのはどう？」
「絶対嫌」

「私も嫌です！」

似たような種族なのだから一番話は合うと思うのだが。

「でしたら、わたくしの部屋はいかがでしょう？　身体のサイズ的にベッドも広く使えますし、わたくしは体型的にベッドでなくとも気持ち良く眠れますので」

「え、お前、獣の分際で部屋を与えられているの？」

「シオンは幻獣とか神獣とかの類なんだ。人間にもなれるし」

「ええ、この通り」

と、実際に変身してみせるとミーティアは「……森の守護獣クラスの権能ということね」と納得。深く頷いて、

「なら、彼女と一緒にの部屋で我慢してあげる。でも、早くこの首輪を取って妻として遇って欲しいものね」

「努力するけど、結婚するのはいいんだ？」

「仕方ないでしょう？　あなたの実力も戦いの中で見たしね。……まあ、異議を申し立ててきそうな相手が何人もいるようだけれど」

ちらりと視線を送った先にはフリーヤアイリスの姿。

「そうだね。別にレンと結婚するのはいいけど、正妻が誰かははっきりさせておいて欲しいかも」

「正室に側室……。権力者でも一番の奥さんを決めるのは普通なんですよね」

「ちよつと待ちなさい。私がこの女の妻になるんじゃないやなくて、この女が私の妻になるのが筋でしょう」

「でもミーティアちゃんっていま捕虜だし」

「……ふん」

姫は忌々しげに黙り込んだ。

なんだかんだ言いながら料理と酒はしつかり味わっているあたりふてぶてしいというか、ちゃっかりしているというか。食事をとつてくれていればとりあえず心配はないだろう。

「シオン、悪いけど気にかけてあげてくれるかな？」

「お任せください」

その日は、特に何事も起こらないままゆつくりと過ぎていった。



「待遇改善を要求するわ」

翌朝、食事の席にてミーティアは堂々とそう宣言してきた。

一晩大人しくしてくれていた実績を考慮して首輪以外の拘束はすでに解いた。

着替えはひとまずレンのものを使ってもらった。胸のサイズは問題ない……むしろ余るくらいだったものの、着丈がちよつと短いのと背中に穴が開いているのがお姫様には不満らしく渋々といった様子だった。

昨日とはうって変わってシンプルになった朝食にもぶちぶち文句を言つてから、あらためて声を大にしたのが先の宣言。

「というと、具体的には？」

「服と食事ね。寝床はまあ、悪くなかったし、シオンも抱き心地も褒めてあげる。でも、こんな庶民の食事では満足できないし、この服じや背中が寒すぎるわ」

「あー。まあ、レンは後ろにいろいろついてるからねー」

「我が家の食事は十分贅沢だと思っただけ……」

予算的にもほいほい了承できるところではない。特に服はミー

ティアアの満足いく品質となるとなかなか高価そうだな。

しかし、

「無償で応じろとは言わないわ。対価として差し出すのは知識よ。あなたたちが私に求めているのはそれなんでしょう?」

「う、そう来たか」

「当然よ。話を聞いていればそれくらいのこととは考えつくでしょう」
「今日もおっさんのところに行こうと思ってたんだけど……」

待遇改善に了承しないと素直にに応じてくれなさそうだな。

実際、お姫様はぶるつと身を震わせて、

「あの男はなんだか気持ち悪いから、できれば会いたくないわ。これは私の話をするのとは別問題よ」

「ミーティア様。できればそのセリフは当人に直接言っていたら良かった」

「メイさまはどうしてそこで話をややこしくしようとするのですか」

まあ、賢者を警戒するのは年頃の女子なら仕方ない話だ。

彼は身の危険という意味では特に問題ないものの、デリカシーとかそういうものが根本的に欠けている。放っておいたら「エルフとダークエルフの混血はいつたいどうなるのか」とか言い出しかねない。

レンはひとまず頷いて、

「じゃあ、話を聞くにしても私たちで対応して、後でおっさんのところに持っていきようか」

「いいの? 自分で言うておいてなんだけど、かなり我が儘を言っているつもりよ?」

「別にそれくらい構わないよ。向こうにも強制する権利はないんだし」

「……そう」

生返事をしてなにかを考えるように目を細めるミーティア。

なにか気に障ったのかと様子を窺うと、

「賢者なんて呼ばれているから、それなりの地位にあるのかと思っていただけけど、あなたは『おっさん』なんて呼ぶのね。……それとも、あなたの方がやんごとない身分なのかしら?」

「まさか。わたしはただの一般人だよ。わたしたちの世界は、なんていうか、凄い人はいっぱいいるけど、本当の意味での特権階級はほんとは少ないんだ。それ以外は尊敬する相手ではあってもただの一般人。あのおっさんもそう」

「変な世界ね。国なんて王が統治して民が従うのが当たり前でしよう」

「民主主義という考え方なのですが、さすがに説明すると長くなりそうですね……」

おまけに知識を分けるのがレンたちの側になってしまふ。日本のことを教える対価にそっちのことを教えろと言いたくなる。

「服と食事はなんとかするよ。昨日の昼のはさすがにご馳走だけど、普段の食事もワンランクくらいは上げられると思う」

「レン、いいの?」

「うん。なんだかんだ言ってる最近では余裕があるし」

ダンジョン一階だって週二回くまなく探索すれば四〜六人が一月普通に暮らして余るだけのお金が稼げる。二十五階あたりでアラム狩りを繰り返せば生活費自体はぶっちゃけ余裕である。

黒い算段をするならミーティアからの情報を賢者に売ったらいくらになるか……という話もある。

「ただ、この資源には限りがあるから、お金をかけても限界はあるよ。そこは先に分かっておいて欲しい」

「仕方ないから我慢してあげる。……って言っても、私にはあなたたちの技術水準が低いようには見えないのだけれど」

確かに、この建築も料理も裁縫も、多くの人が長い年月をかけて積み上げてきた基礎の上に成り立っている。道具の問題でできない作業は数あれど、現代日本人がある程度納得できる品質のものが普通に手に入る時点で十分贅沢だと言える。

「じゃあ、わたしたちが着ているくらいの服で納得してくれる?」

「デザインさえ私の好みに合えば構わないわ」

そのデザイン次第で値段はだいぶ変わる気もしたが、譲歩してくれるのは正直ありがたかった。

続・ダークエルフの姫

「なかなかいい品揃えじゃない。気に入ったわ」

「ありがとうございます。ぜひ今後ともご贖員に」

新しい服を身に纏い、くるりと回ってみせるミーティア。

彼女の眼鏡に合う衣装は意外と身近なところにあった。以前、メイのメイド服を購入した店。その後も何度か利用させてもらっている、女店主が一人で営むコスプレショップである。

メイド服を売っていたように、コスプレと言ってもキャラクターもの以外も置いている。要するに非日常的な衣装はぜんぶコスプレという扱いだ。デザインや縫製にもこだわっており、そのぶんお値段はお高めではあるものの、メイやアイリスのような美少女にはぶつちやけ似合う。

フリフリの白いロリータ衣装を纏ったダークエルフのお姫様も文句なしに可愛かった。

濃い色の肌と白い衣装のコントラストが良い。地味に所作が整っているため、こういうドレス的な服を着ると本当にお姫様のような。でも、少し意外かも。エルフとかダークエルフつってもっと動きやすい服が好きなのかと

レンが言うと、少女は「まあ、それはそうだけど」と肩を竦めた。

「王族はしょっちゅう森を駆け回ったりしないもの。必要な時は着替えればいいわけだしね」

「そっか。お姫様だもんね」

「メイドの一人もいないのは不満だけど、まあ、そこは我慢してあげる」

今回はレンが着替えを手伝ったものの、ミーティアは一人でも身支度ができるようだ。狩りや戦闘の際、自分のことが自分でできないようでは役割が務まらないのだとか。

レンは他にもいくつかお姫様の気に入った服を購入。

このさい値段については目をつぶることにして下着類もいくつか買い求めた。意外とちやっかりしている女店主はこれ幸いとミー

ティアにオーダーメイドの話まで持ちかけている。料金はお得意様価格で安くしてくれるそうなので、まあ悪い話ではない。

「さあ、レン。帰るわよ。私をきちんとエスコートしなさい」

「かしこまりました、お姫様。ではお手をどうぞ」
荷物はストレージにしまい、少女をお姫様だっこして空に舞い上がる。

飛行すれば家まではそれほど時間がかからない。

「こういうのも悪くないわね。自分の魔法だと制御に忙しくてゆっくり景色を見渡せないもの」

「それなら良かった。飛ぶだけならタダだからいつでも言っ」

「ええ。あなたには私のご機嫌を取る義務があるものね」

「どうやらお姫様は上機嫌のようだ。呼び方も「お前」から「あなた」になってるし、少しは打ち解けてくれたらしい。

しばし街の景色を上から眺めて、

「でも、不思議ね。さっきの店を見る限りだと腕前はともかく、文化的には私の世界とそう変わらないようにも見えるのだけれど」

「あー。わたしたちから見るとさっきの店の服は特殊な部類だから。普通はああいうの着ないんだよ」

「そうなのね」

レンたちの日常がミーティアにとってはファンタジーであり、その逆もまたしかりというわけだ。

「じゃあ、レンの故郷はどんなところなのかしら？」

「んー……よくある表現だと、鋼鉄と歯車でできた馬が道を行きかたり、魔法を使わず空を飛ぶ乗り物があったりすると、かな」

「鋼鉄の馬？ 魔法を使わず空を？ なんなのよそれは。そんなものに攻められたら勝てる気がしないわ」

「大丈夫。わたしたちの世界からは年に一度、少人数が召喚されてきているだけだから」

道中でレンたちの事情を簡単に話してきかせると、少女はしばらく黙ってから「そう」と言った。

「あなたたちも苦労しているのね」

「まあね。だから、できれば故郷に帰りたくなって」
「故郷、ね」

ミーティアは空の向こう——世界を断絶する闇を見つめて、
「私のいた世界が滅びたのだとして、いったいそれは何年何月の出来事だったのかしら」



ミーティアのいた世界——おそらく、滅びる前のこの世界とイコールだろう——は、人と魔が争いあう世界だったらしい。

人間やエルフは人の側に。

ダークエルフやサキュバスは魔の側に属していた。

争いが激化したのは最近のことで、魔の陣営を統べる存在——すなわち魔王が即位したのがきっかけだった。

魔族は混沌を尊び、破壊を喜びとする。先代の魔王は比較的穏健派で「破壊の前には創造が必要である」として人の存在を認めていたのだが、新しい魔王は無制限の破壊を求めた。

長い膠着状態の間に人の勢力が拡大していたこともあり、魔の陣営は新魔王の方針を歓迎した。ミーティアたちの一族もそうだった。

「私たちは別に世界そのものの破壊を望んでいたわけじゃない。ダークエルフは秩序を破壊し、弱肉強食の理念に則って人の上に立ちたかっただけ」

本当に人の陣営を根絶やしにできるなどとは、おそらく多くの者が思っていないかった。

魔王が邪神降臨を企てているという話も耳にはしていたが、ミーティアは成功するとは考えていなかった。

「人と魔の争いの歴史は長いわ。どうせ今回も人の側から英雄が現れて痛み分けで終わる。そう思っていたのよ」

「でも、そうじゃなかった？」

「おそらくは、ね。私がエルフの集落をひとつ滅ぼしたくらいで歴史が大きく動いたとは思わないけど」

小さな勝利の積み重ねが徐々に人の陣営を脅かしていったのだろう。

世界が滅びるまでにどれだけの時間がかかったのかはわからない。もしかしたら数十年、百年経っていたかもしれない。

「でもまあ、きつと私の生きている間だったでしょうね。世界の記憶とやらの詳細が残っているんだもの」

ダークエルフの寿命は長い。

果たして、本当に世界が滅びるとわかった時、この少女はどう思ったのか。

「あのまま行ったら世界ごと滅んでいた——なんて言われても、正直実感は湧かないわ。あなたたちの推測がおそらく、そう外れてはいないとわかっていても、ね」

少女の語った内容は文章として記録し、賢者に渡すことにした。

滅ぶ前の世界についてわかったところでダンジョン攻略にどれだけ役立つか、レンとしては疑問だったりもするのだが、賢者ならなにかしらのアイデアを思いつくだろう。

「ミーちゃん、こうやって生きながらえちやっただけには長生きしようね?」

「そうね。そうさせてもらう……って、なによそのミーちゃんって」

「え? ミーティアちゃんだと長いからミーちゃん。だめ?」

首を傾げて問うフリー。

レンとしては可愛いと思うのだが、お姫様はお気に召さなかったのか微妙な顔をして「なんなのこの子」と囁いてきた。

「ああ、フリーはちよつと悪戯好きだから。でも、仲良くなりたいたいで悪気はないと思う」

「それはまあわかるけれど……。私たちはある意味敵というか、ライバル同士じゃない。そんな風にすり寄られても調子が狂うわ」

「敵とかライバルとか堅苦しく考えなくてもよくない? 同じ人を好きになったんだから友達ってことで。ね?」

「そういうものかしら……って、私はしきたりで結婚を決めただけで、レンのことを好きになったわけじゃないんだからね!」

「はいはいツンデレツンデレ」

「ちよつと、私の知らない言葉を使うのは止めなさい！」

さすがに翻訳機能を用いても相手の知らない概念を伝えるのは難しいらしい。

「ところで、レンさま、ミーティアさま。ミーティアさまは現状、翻訳によってわたくしたちと会話をしている状態だと思うのですが」

「うん」

「ええ」

「もし、ミーティアさまにダンジョンへ同行していただいた場合、やはり会話は通じなくなるのでしょうか。……それから、三十五階にもう一度赴いたとして、そこにミーティアさまは存在しているのでしょうか」

「……………」

レンとしても考えていなかったわけではない。

ダンジョンの障害が利用のたびに自動生成される、MMORPGなどで言うところのインスタンスダンジョンのようなものだとすれば、もう一度挑んでも普通にミーティアがそこにいて、しかも頑張れば捕縛可能だったりする可能性はある。

ユニークNPCの増殖。

もし起こったとしたらあまりにもゲーム的だ。絶対にないとも言い切れないが、

「たぶん、三十五階にはもうミーティアは現れないんじゃないかな。少なくともわたしたちの行く三十五階には」

ゲーム的に考えても「ミーティアを連れ帰る」というフラグが立っている状態なわけで。

この状態でダンジョンに行つてミーティアが現れるのはなんとうか作りこみが甘いと言わざるをえない。

これに当の少女はため息を吐いて、

「そうでしょうね。……というか、そうでないと困るわ。最悪、私が私と会話するようなことだつて起こりえるじゃない」

「自己同一性が保てなくなつて発狂しそうですね」

「いや、本気でやばいやつだからそれ」

「私たちゴーレムは同性能の個体がいたとしても『そういうもの』で済ませられるのですが」

そうは言っても、さすがのメイも記憶まで同じ個体が登場したら狼狽えるのではないだろうか。

「ねえ、その三十五階とやらが私のいた戦場なのよね？　また行くの？」

「行くよ。エルフの村を守らないと三十六階に進めないから」

「そう。……つまり、私たちが悪者なのね」

「わたしたちは滅んだ世界を作り直す側だからね。守ろうとしていた側の味方になるのは仕方ないよ」

ミーティアにとっては部下が殺されるのを見過ごすことになる。いい気分じゃないに決まってる。もちろん、あの階に彼女を連れて行く気はないが、それでもだ。

レンの内心を察したのか、少女は「勘違いしないでよね」と睨むような表情を浮かべて、

「私だって世界に滅んで欲しかったわけじゃない。魔王が本気で邪神降臨に踏み切ったら敵に回ったかもしれない。……まして、あなたたちの行く場所はかりそめの作り物に過ぎないんでしよう？　必要以上感情移入しても仕方ないのはわかっている」

「でも、完全に割り切れる？」

「難しいかもしれないわね」

当然だ。レンは少し考えてから「すぐに行く必要はないから」と言った。

「ずつとは無理だけど、一か月くらいなら伸ばせる。その間は他の階の攻略でもするよ」

「ちなみはその階には何が出るのかしら？」

「ゴブリンとか、オークとか、リザードマンとか」

「ああ、まあ、それならいいわ。あいつら好戦的過ぎて話が合わないし」

「ダークエルフも人のことは言えない気がするんですけど」

「アイリスちゃん、ちよつとだけ我慢して。私もわりとそう思うけど」
「聞こえてるわよそこの二人。……まったくもう。ここにいと退屈しなさそうね」

苦笑気味の呟きは良い意味なのか悪い意味なのか。

いずれにせよ、ある程度割り切つたらしいお姫様はレンに視線を向けて。

「今夜、付き合いなさい。酒とつまみを用意して待っていること」
そんなことを言ってきた。



好きになったわけじゃない。

フリーに答えたのは嘘ではない。出会って数日。しかも出会い方は最悪だった。突然現れて攻撃してきたサキュバスに一对一で負け、唇まで奪われたのだから。

けれど。

そのサキュバス——レンは、悔しいくらいに強く美しかった。力を象徴するかのようにな大きな翼、どこか艶めかしく揺れる尻尾。蠱惑的な光を宿す瞳。近づけば嫌味のない、それでいて甘い香りが鼻をくすぐる。一般的な攻撃魔法を信じられない威力と精度で操り、ダークエルフの中ではかなり腕が立つはずのミーティアでさえ足止めするのがやつとだった。

だから。

自由を奪われ、深くて長いキスをされたあの出来事は心に深く刻み込まれた。

「ちゃんと酒とつまみは用意したかしら？」

昼間とは別の、深い青を基調としたドレスを纏い部屋に赴くと、レンは背中が大きく開いた部屋着姿で出迎えてくれた。

彼女はミーティアを見て目を丸くして、

「夜だから下着姿とかで来るかと思った」

「まさか。そんな安売りはしないわ。私を誰だと思っているの」

夜這いだとも思っていたのだろうか。しかし、それにしてはしつかりと要望のものは用意されていた。

「ミーティアは果実酒のほうが好きなのかな？　ワインの他に日本酒もあるんだけど」

「二ホンシユ？」

「米のお酒だね。すっきりした味がして美味しいよ」

「じゃあ、それも飲んでみようかしら」

ベッドに座ろうとしたレンを引き留め、テーブルを挟んで向かい合う。

グラスに注がれた日本酒とやはら透き通った見た目で、まるで水のようにだった。水だと思って一気に飲むと大変なことになる、と警告されたので少量を口に含めば――。

「これは、ワインとは別物ね」

「口に合わなかった？」

「いいえ、美味しいと思うわ。余計な香りも苦みもないから飲みやすい」

「じゃあ、ウイスキーとかエールはだめなのかな」

「そうね。人間やドワーフが好んでいる、と聞いて、似たようなものを飲んだことはあるけれど」

つまみはチーズと、オーク肉を乾燥させたもの。塩漬けにしたうえで燻製にしてあるらしく、なんとも酒の進む一品である。

「あなたって何歳なの？　なかなか飲みなれているように見えるのだけれど」

「まだ十七歳だよ。慣れているように見えるとしたら、先輩方がいろいろ教えてくれるせいかな」

「ふうん。まあ、人間の十七なら成人なものね。ある程度精神が出来上がってからサキユバスに変化した――珍しい事例だけれど、それならこうもなるか」

「ちなみにミーティアは何歳なのかな？」

「レディに歳を尋ねるものじゃないわ」

なんとなくそう言っつて窘めたものの、ミーティアもそれほど歳を

取っているわけではない。ダークエルフとしては若者である。二人とも長寿の種族であるのを考えれば、年齢差も微々たるものと言つていい。

「……一緒に飲める相手がいるというのも悪くないものね」

「えつと、じゃあ今までは？」

「同格の相手なんてほとんどいかなかったもの。まして、酒を飲むなんて、弱みを見せるようなものじゃない」

「ここは敵地だ。」

それを考えれば気を緩めるのは良くないのだろうが、レンたちが自分を害さないことだけはなぜか確信できた。既に英雄級に近い実力を持つているくせにお人好し過ぎる。

「だからこそ、こうして絆されてしまったのかもしれない。」

「せっかくだから、どちらが先に潰れるか勝負しましょうか」

「そういうくらいだからけっこう飲めるんだよね？ ……お財布も考えるとあんまり無茶はしたくないんだけど」

「タダで、とは言わないわ。私が負けたら後は好きにして構わない」

「レンは結局、この誘いに乗ってきた。」

結果については敢えて語らないが、一言だけ言うのであれば——サキュバスがこれほど酒豪だとは知らなかった。

ミーティアは翌朝、ベッドの上でそれをしみじみと実感したのだった。

お姫様の変化とフリーリの悩み

「レン？ 暇なら部屋に行きましよう？」

日常においてレンの仕事は相変わらず少ない。

シオンが人化できるようになり、フリーリやアイリス、メイを手伝うようになったので猶更だ。料理の際の着火や風呂の支度もレンでなければいけない、というわけでもなくなり、主な役割は氷室の状態を調整するかそのくらいになっている。

せめてこれくらいは、と気合いを入れて「フリーズ」を使い、リビングに戻ると腕に柔らかな感触がきた。

普段づかいにはかなり重めのドレスを見事に着こなした褐色白髪
の美少女——ダークエルフの姫ことミーティアである。

レンの左腕を抱いた彼女が耳元で囁いてくる声は、甘い。

男心を「これでもか」とくすぐられる声である。その辺の男なら一撃だろうと思いつつ、二つ返事をするのはぐっと堪えて、

「いや、わたしはちよつと魔法の練習でもしようかなって」

「魔法？ そんなの別にいいじゃない。あなたたちの魔法は毎回安定した効果が得られるんでしょう？ 練習したって大した意味はないわ」

「それはそうなんだけど……」

困った。

相手に悪気はない——どころかレンとしても嬉しい申し出だけに
なんとも断りづらい。思考が鈍つてうまいこと考えられなくなつて
いるのを感じつつ、とにかくなにか言葉を発しようとして、

「ミーちゃん！ ちよつとレンを構い過ぎじゃない？ 私たちにも気を遣って欲しいんだけど」

食糧庫の方で備蓄のチェックをしていたフリーリが地下への階段から顔を出して怒った。

するとミーティアは「ふん」と笑って、

「いざれ結婚する相手と愛を育んで何が悪いのかしら。ずるい、と言う暇があつたらあなたたちもレンを誘惑したらどう？」

これである。

どうしてこうなったかというところ、二、三日前に二人で酒を飲んだこと……というか、その後にあつたことが原因だ。

誰かとそうした経験のなかった少女はそれがたいへんお気に召したらしく、レンへの態度を軟化、というか一変させた。ことあるごとにくつついてきて誘惑してくるようになったのだ。

それも朝昼晩、時間も人の目も気にせずである。

さすがに外では自重してくれると思うのだが、そんな姿を見せられる他のメンバーはたまつたものではない。

「や、こういうのはできるだけみんな平等じゃないとだめでしょ。レンは一人しかいないんだから」

「あら、甘い考えね。そんなことを言っていたら後宮では何もできないわ」

「レンは王様じゃないし、ここは後宮でもなんでもないでしょ」

別にフリーもミーティアと喧嘩がしたいわけではない。

一人だけレンに甘えつぱなしの状況が気に入らないから文句を言っているだけである。ただ、女子的なプライドからストレートに口を出すのはできるだけ避けたい。どうしても遠回しな言い方になってしまうのだが、そういうのは価値観の違うミーティアには通用しない。

「とにかく、そういうのは夜だけにして。あと毎日レンのところへ行くのも禁止」

「それを決めるのはレンでしょう？ それと、判断材料としてアップローチするのも」

ミーティアはレンに抱きついたまま話しているので話すたびに息がかかってくすぐりたい。

「むー。もう！ レンからもなんとか言ってよ！」

「やめなさい。この子から見たら役得なんだから、下手に『嫌だ』なんて言えるわけじゃないでしょう。そんなことしたらうま味が減ってしまうもの」

「うん。いや、その通りだけどはつきり言われるとそれはそれで困る」

この状況はさすがにレンも予想外である。

「本当、どうしてそんなにハマったのかな」

こうなったら話題を逸らしてみよう。そう思って口を開くと、ミーティアは「そうね」と首を傾げて、

「ダークエルフはもともと欲望に忠実なところがあるから、その影響もあるかしら。お母さまにも愛人が何人もいたしね」

「なにそれ。お父さんはそれでOKしてたの？」

「ええ。口づけをするのは結婚相手とだけだけれど、性行為は禁じられていないもの。むしろ欲求不満を解消できて夫婦円満に行くのなら言うことはないわ」

なかなか特殊な価値観である。

それは一般には受け入れられにくいのでは、と思ったが、考えてみるとレンたちがやっていることも大して変わらない。

それにしても、そういうことをする相手とキスなしというのもなかなか寂しいものがあるのではないか……と、話がさらに逸れた。

フリーは「うーん」と唸って、

「じゃあミーちゃんも愛人作ればいいんじゃない？」

「嫌よ。人間の男なんてロクなものじゃないもの。強引に口づけを迫られても困るでしょうし」

ダークエルフ同士であれば「キスはNG」という共通認識があるので問題は生じないという話。

「それに、レンにされる心地良さを知ってしまったら他の相手で満足できる気がしないわ」

「それは私もそう思う」

「なんか、嬉しいけどめっちゃくちや恥ずかしい」

「自信持てばいいわ。きつと、あそこまでできるのは一握りよ。……同性愛者のサクキュバス、なんて稀有な存在だしね」

「でも、いくら気持ちいいからって独り占めはだめでしょ」

逸らしたはずの話が気づいたらもとに戻り始めている。

「……うん。わたしとしてもフリーたちを除け者にはしたくないな。もちろんミーティアの気持ちは嬉しいけど、順番を守るというか、み

んなの気持ちも考えて欲しい」

仕方なく告げると、腕を抱く力が強くなった。

「それはフリーたちに遠慮しているということかしら」

「つていうか、みんな大切だから失いたくないだけかな」

利己的な返答が逆にお気に召したのだろうか。ミーティアはふつと笑って「……仕方ないから許してあげる」と囁いてきた。

甘い声を出されると夜の彼女を思い出して変な気分になってしま
うが、なんとか興奮を追い出して「ありがとう」と微笑む。

「納得してくれてよかった。そろそろダンジョンに潜るのも再開した
いところだったから」

ミーティアと出会った三十五階攻略以来、レンたちはダンジョンに
潜っていない。あれからももう少しで一週間である。

バタバタしていたというのもあるし、それ以上に「潜っている間、
ミーティアをどうするか」という問題があったからだ。

「しばらくはリザードマンでも狩るつもりだけど、一緒に来る？」

「遠慮しておくわ。そこでは話を通じなくなるでしょう？ なんと
かの方法で意思疎通できるようにならないと行ってもつまらないも
の」

「そっか」

そもそもミーティアを連れて行った場合、一階から再挑戦なのか三
十五階から始められるのか、という問題もある。

三十五階にいた人物を再度ダンジョンへ行かせるのに一階から挑
戦しないといけない、というのもおかしな話だが、あのダンジョンの
ことなので可能性がないとは言い切れなかった。

「じゃあ、わたしたちが行っている間はおっさんにでも預かってもら
おうかな」

「待ちなさい。どうしてあの男の所に行かないといけないの」
「さすがに一人でこの家に置いておくわけにもいかないし」

ミーティアが信用できないわけではない。ただ、百パーセントな
もしないと断言できるかと言えばノーである。

「そうだねー。アイシヤさんも出入りするだろうから、二人つきりに

なっちやうし」

アイシヤは去年やってきたばかりで、しかもダンジョンには一度も潜っていない。教師のクラスは「人にものを教える」ことで経験値がどぼつと入るためそこそこのレベルは上がっているものの、そもそも非戦闘系のクラスである。一対一でミーティアを一蹴するのはさすがに無理だ。

警戒すること自体はお姫様も「当然の判断ね」と理解を示したものの、

「だからってあの男は嫌よ。他にちょうどいい相手はいないのかしら？」

「うーん、そうは言ってもなあ……」

娼館は夜の活動が主体なので迷惑になるかもしれないし、ミーティアほどの美人だと客や男性従業員に変な刺激を与えてしまうかもしれない。

洋食店の店主は忙しいだろうからとてもわがまま姫の相手なんて頼めない。

アイリスの両親——エルフとダークエルフの相性の悪さはアイリスとの会話で実証済み。

「コスプレの店の店主さんにでも頼んでみるかな」

さつそくメッセージを送り、その後直接相談しに行くと、思ったよりあっさりとOKが出た。向こうとしてもオーダメイドのための採寸をしたり、衣装デザインの参考としてモデルになってもらえれば大歓迎ということらしい。

ミーティアのほうも「あの店ね。それならいいわ」と了承してくれたのでひとまずこれで解決である。

長年こっちで生活しているあの店主ならさすがに首輪付きのミーティアよりは強い。しばらくこうして様子を見てなにも問題が起これないようなら警戒レベルを下げていくこともできるだろう。



アラームを使って敵を集める方法なら向こうから敵が来てくれるため短時間でたくさんドロップ品を集められる。

敵のいなくなったダンジョン内は平和そのもの。念のためシオンに「聖域」を展開してもらえばもはや休憩スペースと変わらない。

「ダンジョンの中でも意思疎通する方法かあ」

左腕にアイリス、右腕にメイ、膝の上にシオン。くつついてくれた仲間たちからエナジードレインを行いつつ、レンは呟いた。

それに応じたのはマリアベルと共にドロップ品の整理をしてきているフリーだ。

「ミーちゃんに日本語覚えてもらうか、私たちが異世界語覚えるのが一番なんじゃない？」

「そうだけど、それだとどっちにしても時間がかかるんだよ」

例えば英語。日本で三年以上も勉強していたが、レンの英語力はともネイティブと話せるレベルではない。簡単な指示を出せるレベルでいいなら時間はかからないかもしれないが、ミーティアの言っていた「つまらない」がそれで解消するかというとおそらくノーだ。

すると今度はマリアベルが、

「ひとまず間に合わせられそうなスキルがあるのですか？」

「なくはないんですけど」

最近になって現れた新しいスキルだ。

名前は「運命のつがい」。要はパートナーを設定するものであり、設定された相手とはテレパシー的な会話が可能になるほか、接触していなくても微弱なエナジードレインが可能になり、通常のエナジードレインの効率もアップする。

「至れり尽くせりではありませんか」

「ずっとレンさまからドレインを受けることになるとは、普通に生活を送れるのでしょうか？ 慣れるまではなにも手につかなくなりそうなのですか……」

「それもそうなんだけど、問題が他にもあって……これ、対象を『一人』設定するスキルなんだよね」

「！」

少女たちの目が良くない感じにぎらりと輝いた。

「ふーん」

「……そうなんですね」

「……それは、また」

「ご主人様？ 当然私ですよね？」

メイの言葉は半分冗談だろうと思いつつも、レンは「だよね」と頷く。

「いちおう、レベルアップすると人数を増やせるんだけど。みんな一緒に設定しようとするスキルポイントがぜんぜん足りなくてさ」
どうしたものか。

とりあえず必要なのはミーティアの分だけなのだが、それをやらせすぎに不公平すぎる。それに、あのお姫様のことなのでここぞとばかりに「じゃあ私が正妻ってことね」と調子に乗りそうである。

「ここはリセットストーンの使い時かなって」

前に入手した「取得スキルを一度リセットしてスキルポイントを回収する」アイテムである。

使ったからと言って総スキルポイントが増えるわけではないが、今まで持っていたスキルを諦めて他に回すことができる。

五ポイントくらいならなんとか確保できなくもない。

「具体的にはどんなスキルを外されるのですか？」

「エナジードレインの効率アップとか、魔法発動間隔の短縮とかかな」

前者は新しいスキルで代用可能。後者は当時、総合的な火力アップのために取得したものの、ダブルキャスト二重魔法やホーミング追尾魔法で破壊力を上げられるようになった今となってはどうしても必要なものではない。

「じゃあそれでいいんじゃない？」

「そうなんだけど、こういうのって『いらない』と思ったスキルが意外といい働きしてたって後から気づくとかゲームなんかでもよくあるから」

例えば魔法発動間隔が変わると戦いの時に微妙なタイミングのズレが生じ、ここぞという時に不利に働くかもしれない。それこそミーティアとの一騎打ちみたいな状況だと致命的である。

「試してみて駄目だったらもう一つ石を使えばいいではありませんか。複数余っているわけですし、今となつては金銭でも購入できま
す」

「そうだけど、もったいないしギリギリまで悩みたいなつて」

「レンさん、なんだかんだ言つて楽しんでいきますね？」

「はい、実はそうかもしません」

「買い物にしても「なにを買おうか悩んでいる時」が一番楽しかったりする。これもその手の話に近いのかもしれない。」

すると、フリーが「スキルかあ」と呟いて、

「私も種族変えられないかなあ」

意味深なセリフがその唇から紡がれた。

フリーリの転生

「だって私だけ人間で寿命短いんだよ？ レンたちばかりじゃないじゃない」

リザードマン狩り二周目を終えた後で詳しく聞いたところ、少女の言い分はそんな感じだった。

「気にしてたんだ、フリーリ」

「そりや気にするよ。将来、私一人だけ先におばあちゃんになって死ぬんだなあ……って思ったらすごく寂しいもん」

自分が彼女の立場だったら……と考えればその気持ちはレンにもわかる。

「というか死にたくない。老化とかも考えたくない。そういうのはできるだけ先の話にして欲しい。」

ただ、

「わたしやシオンはずっとこのままってわけじゃないのに」

「わかんないじゃない。それに、たとえばあと五年くらいで日本に帰れるとしても、レンたちと歳の差だいぶ離れちゃうし」

もし、ダンジョンを攻略したら日本に帰れるとして、姿が変わっていった組はいつたいどうなるか。

仮に「人間に戻る」のは確定とする。

その上で疑問なのは、戻った時の姿が実年齢と外見年齢のどちらに影響するかだ。二十二歳（見た目は十五、六歳）のレンが男に戻った時、二十二歳の男性になるのかサキユバスになった時とほぼ変わらない姿になるのか、という話。

なんとというか前者はめっちゃくちゃやらしいことになりそうなので、よりありえそうだと思えるのは後者のほうである。

となると、フリーリとはここにいた時間の分だけ歳が離れてしまう。

「二十歳超えるといういろいろ気になってくるって言うし、私なんかもう今から怖くて。だから、種族変えるなら早い方がいいんだよ」

「ああ。寿命の長い種族になっちゃえば老化も抑えられるから」

「そうそう」

若くて可愛い姿を少しでも長く維持するために人間をやめる。

……ちよつと焦り過ぎではないかという気もするが、女子になった今のレンにはフリーの気持ちもよくわかった。誰かに可愛いと言われているからこそ、可愛くなくなった時のことを考えると怖くなる。歳を重ねることで自分の価値が目減りしていくとか本当にやめてほしい。

レンの立場から「歳を取ってもフリーのことは変わらず愛せるよ」と囁くことはできる。

けれど、そんなのはしよせん誤魔化しだ。先のことなんて確約できはるはずがないし、レンだってぶつちやけ、どうせなら若くて可愛い女の子が相手の方がいいに決まっている。

「……そういうことなら、わたしからは『止めた方がいい』とは言えないなあ」

なので、レンは早々にフリーの説得を諦めた。

「でも、種族を変えたら日本に戻ってもそのままになるかもしれない。それは大丈夫？」

「うん。それは覚悟してる」

頷いたフリーは「攻略でも役に立ちそうだしね」と続けた。

ここしばらく彼女の出番はトラップ対策とドロップ品の整理が主になっている。三十五階のように手が足りない時は戦ってもらうことになるものの、スキルの大半を戦闘系以外につき込んでいるため不安は大きい。

本人としても「もつと役に立ちたい」という思いはあったようだ。

マリアベルも複雑そうな表情で頷き、

「私にも言えることはなさそうですね。これは皆さんで決めるべき問題です」

彼女の恋人であるアイシャは人間。だから、二人が添い遂げるにあたって年齢の問題はない。どちらかというところ、出産するなら早い方がいいとかそういう方向性の話になりそうだ。

……そう考えると二人には早めに腰を落ち着けてもらった方がいいのだろうか。

レンたちが引つ張り回さなければすぐにも結婚できるはず。子育てをするなら時間はあればあるだけいいだろう。

こちらの話も頭の片隅に留めておくことにして、

「アイリスたちはどう思う？」

水を向けると、真つ先に答えたのはゴーレムの少女。

「ゴーレムになるのであれば歓迎いたします」

「や、生身じゃなくなるのはまた別の勇気が要するというか」

これで答えやすくなったのか、アイリスが「私もいいと思います」と微笑んだ。

「もし、フリーさんがダークエルフになっても嫌ったりしませんから安心してください」

「ありがとう、アイリスちゃん」

心温まるやり取り。ミーティアともこれくらい仲良くしてくれれば……というのは難しいか。

「わたくしもフリーさまが納得されているのであれば異論はありません。けれど、種族を変更する手段は少ないのですよね？」

「あー、それね。そっちは賢者様にも聞いてみるしかないかなって」

「うん。種族変更アイテムは神器を使っても買えないし」

神殿の内部には「神器」と呼ばれる特殊なアイテム、あるいは装置が収められている。

その多くが金銭を支払うことで特定のアイテムを手に入れられるものであり、その中には転職石やリセットストーンを手に入れられるものもある。

ただ、種族変更用の石は販売リストには存在していない。本当に入手手段が限られるレアアイテムだ。

「ひとまず、おっさんのところに行ってみようか」

「そうだね」

神殿に戻った後、レンたちは二手に分かれることにした。

レンとフリーで賢者のところへ行き、他のメンバーにはミーティアを迎えに行った後で家に戻ってもらう。

メイやシオンたちと分かれて賢者の家を探ねると、彼は一人暮らし

の中年男らしいラフな服装で出迎えてくれた。

「賢者様、もう少し身嗜みに気を遣った方がいいんじゃない？」

「失礼な。普段はもう少ししまとめだろう。そちらの都合で尋ねてくる君達にも問題があるのではないか」

これに関しては何もつとも。

賢者が着替えというか服を追加で身に着けるのをあまり見ないようにしつつ部屋の片づけを手伝い（または強行して）、行きがけに屋台で買ってきた軽食を渡した。

「で、今度は何の相談だ？」

「うん。種族を変えるアイテムを売って欲しいって言ったらいくらくらいになる？」

「ふむ。二人で来たということとは、希望者はフリーか」

腕組みし、少し考えてから彼が告げてきた金額はレンたちでも払えないことはない、しかし、気合いを入れて稼がないと大幅に生活を圧迫しかねない高額だった。

「滅多に手に入るものではないからな。絶対に必要、というわけでもない以上はそれなりの額を要求しなければならん」

「ん、そうだよな。シオンちゃんみたいな子がこれからも出るかもだし」

「まあ、フリーが希望するのは『人間になるアイテム』ではないだろうがな」

「あ。じゃあ、種族を変えるアイテムは種族ごとに別扱いなんだ」

「そうだ。仮に『転生石』と呼んでいるが、それは『人間への転生石』などという風になれる種族が決まっている」

どうやって入手しているのかと言えば、主にガチャ——金銭と引き換えにランダムなマジックアイテムを生成する神器からになるらしい。

転生石自体の出現率が低いうえに種族ごとに別々なので超レア、というわけである。

「しかも大半が人間への転生石だ。これは良い事でもあるがな」

「なった後、戻りたくなかったのに石がないとか困るもんね」

「ああ。一部、大きな制約を持つ種族もあるからな。例えばこれだ」
「ごっこん、と、大きめの音を立ててテーブルに置かれたのは赤い寶石だ。」

半透明の多面体で、内側にはなんとというか血管のような模様が張り巡らされている。色が赤なせいもあって心臓をイメージしてしまう。

「これは吸血鬼への転生石。この種族は転生した瞬間から『日光に弱い』という特徴が発揮される」

「え、まさか、明るいところで使ったら即死……?」

「安心しろ。まっさらな状態の者が使っても十秒程度は生き残れるはずだ」

「全然だめじゃないかな、それ」

盗賊^{シニフ}として経験を積み、HPが増えているフリーならばばらくは大丈夫なのだろうが、もし使うなら夜、あるいは日の当たらない場所ではないとまずい。ダンジョン内で転生して即、パワーレベリングに入るのがベストか。

「細かい仕様は転生してみないとわからないが、おそらくはスキルを取得することでデメリットを軽減していく種族なのだろうな。初期の段階では銀製の武器にも弱く、流水や鏡にも嫌われるかもしれない」
「招かれた家にしか入れない、とかなかったっけ。気軽に買い物にも行けなくなるんじゃない?」

「さすがにそれは不便かなあ。吸血鬼には憧れるけど」

「? どうして?」

視線を向けると、少女はまっすぐレンを見返してきつぱりと答えた。

「レンにドレインされた分、私もレンの血を吸わせてもらおうかなって」

「ああ、それは確かにちようどいいかも。……吸血鬼に吸われるのも気持ちいいのかなあ」

「どうなんだろうね? 映画とかだと『吸われたい』って言うてる人多い気がするけど、あれは永遠の命が欲しいからなのかもしれないし」
レンならちよつとくらいHPが減ってもヒールで治せるわけだし、

吸血鬼は耐久性能が高そうだからフリーの安全にも繋がる。

弱点が多すぎるのに目をつぶればこれで決定してしまってもいいくらいだ。

「うーん。……賢者さん、他にはどんなのがあるの？」

「無理に転生せずとも良いと思うが……まあ、君達の場合は特殊か。今のところ、私の手持ちはあとこれだけだ」

さらにテーブルへいくつかの転生石が置かれた。サイズと形は一緒だが色が異なる。やはり転生石は種類ごとに別アイテム扱いのようだ。

レンはフリーと共にそれらの説明を聞き、ひとつひとつの特徴とデメリットを吟味したうえで、

「うん、これかな」

「そうだね。わたしもそれがいいと思う」

ひとつの転生石を選び出した。

賢者もしばし考えた後「妥当かもしれない」と頷いた。

「良いのだな？ 未使用の状態なら返品は受け付けるが、一度使用してしまえば取り返しはつかない。人間の転生石をさらに購入するのはさすがに辛いだろう」

「わかってる。後悔はしないから安心して」

手持ちのお金から石の代金を支払うと、残りの額はだいぶ心許ないものになった。

「お金はまた頑張って稼ごうか」

「うん。私も今までよりもっと頑張るから」

受け取った石は薄く透き通るような緑色をしていた。



「ダンジョンへ行って帰ってきたと思ったら、フリーが人間を止めるって……あなたたちは本当に常識外れの存在のようね」

家に帰って報告すると、先にアイリスたちから話を聞かされていたらしいミーティアが呆れた表情と声音で感想を口にした。

彼女からしてみれば種族とは生まれ持ったものであり、そうほいほいと変えられるものではない。それは驚くのも当然だ。というか、レンたちだってこっちに來るまではそう思っていたし、むしろ地球には人間以外の人型種族がいなかったのだが。

「変わりたい気持ちにはわからなくもないわ。……正直、人間は私たちダークエルフより劣った種族だと思うもの」

「あはは、そうだね。寿命なんて長いにこしたことはないもんね」

生き死にのサイクルが短いと知識の継承が大変になる。教育によるコストパフォーマンスも悪いし、天才がその能力を發揮できる期間も限られてしまう。

だからこそ人間は技術を發展させ、文字や書物、コンピュータといったものを作り出してきた——作り出したのかもしれないが。

集団ではなく個の力を見た時に強力なのはやはり、人間よりも他種族のほうがだ。

「それで、どんな種族になるつもりなのかしら？」

「うん、石はこれなんだけどね」

リビングのテーブルに置かれた石を見て、アイリスが「綺麗な色ですわね」と感嘆の声を上げた。

「色も関係があるんでしょうか」

「ないわけじゃないんじゃないかな。吸血鬼の石は赤かったし、これは風系の種族だから」

「風？」

「これはね、風の精——シルフィードの転生石なんだって」

精霊使いいわく、この世界の自然物には精霊と呼ばれる存在が宿っているらしい。

これは自我を持った力のようなもの。彼らは自分たちと對話できる存在の呼びかけに応じて力を貸してくれるものの、基本的には暴れたりすることはない。

この石でなれるのはそうした精霊とは一線を画する存在、強い力を持ち、自由意思によって力を振るうことができる上位種のようなものらしい。

「上位精霊——風の精霊のお姫様みたいなものですか？」

「あ、それいい。ミーちゃんだけお姫様なのはずるいもんね。アイリスちゃんもエルフのお姫様みたいなものだし、私は風のお姫さまってことで」

「お姫様なのか女王さまなのか親分なのかはともかく、フリーリにはぴったりだと思うよ」

こつちにいると使う機会がないものの、フリーリの本名——漢字表記は「風里」だ。

悪戯好きで気まぐれなところがある本人の気質にも当てはまっている。アイリスやその母の苗字も「森野」らしいし、意外とこういう語呂合わせ的なものも馬鹿にできない気がする。

「では、フリーリさん。使うのはいつにしますか？ 今から使いますか？ 使いますよ、使いますよね？」

「メイちゃん、なんでそんなに食い気味なの」

「いえ、滅多に見られる光景ではないので、つい」

メイのなんとも「らしい」態度にフリーリは「しょうがないなあ」と笑って、

「じゃあ、使っちゃおっか」

いともあっさり石の使用を決断した。

風精には吸血鬼のような致命的な弱点はない。みんなが見守る中、フリーリは転生石を抱きしめるように握ると目を閉じた。

輝き。

石と同じ色の光が室内に溢れ、少女の全身を包み込んでいく。

服、そして肉体が分解されていくような光景がしばらく続いた後、光が徐々に収まって——後には、薄緑色の髪に白い肌をしたフリーリが立っていた。

「——」

変化した部分と変化していない部分、呑み込むのに時間を要している間に、少女は自身の身体を見下ろして「へえ」と声を上げた。

「こんな感じになるんだ。……っていうか、レン？ みんな？ せめてなにか感想言つてよ」

「いや、その。綺麗になったけどフリーはフリーだな、って」
髪の色や肌の色は変わった。

顔立ちや体型も多少変化はあった——全体的に美形よりになった気はするものの、大きく変わっているわけではない。知っている者が見れば「ああ、フリーだ」と自然にわかる範囲で容姿が整えられた感じ。そもそもともと可愛らしい女の子だったのでそう変化させる必要もなかったのかもしれない。

「綺麗だよ、フリー」

心からの賛辞を紡ぐと、少女は「そう？　なら良かった」と朗らかに笑った。

「さ。まずはスキルをチェックして、それからレベルアップの計画を立てないかね。畏対策にもなるスキルがあるといいんだけど」

当然のことながら、中身のほうは特に変化がないらしく。

レンはそのことに内心、少しだけほっとするのだった。

変化と決断

警報の鳴り響く中、人型の爬虫類——リザードマンたちが殺到してくる。

部屋の入り口で待ち受けるレンたちは慌てることなく、それでいて迅速に彼らへと対処。

しかし、その体制には少々の変化があった。

「風刃！」

「ウインドスラッシュ！」

風の魔法を発動させたのは、二人。

レンに抱きかかえられるようにして前を見据える妖狐——シオンと、白く滑らかな右手を通路へと向けた風の精——フリーである。

形のない奔流ではなく刃として放たれた風は敵を押しとどめる効果は最小限ではあるものの、代わりに触れる者の肌を容赦なく切り裂いていく。

悲鳴を上げつつも前に進むことを止めようとしないうちはさらなる攻撃、

「ファイアアロー！」

「ファイアボルト！」

レンの放った大量の炎の矢、そしてアイリスの用いる大きな炎のつぶてが降りかかる。

風と炎。一緒にしてしまうとお互いの良いところを殺しかねないものの、波状攻撃なら次の発動までの隙を埋められるうえ、対処もしづらくなる。

魔法による遠距離攻撃の嵐にリザードマンは先頭の方から次々に消滅、レンたちの攻撃は最後まで切れることがないままに大量の敵を捌ききった。

動く者がなくなりやかましい音だけが残ったところで、風の刃が駄目押しのごとく警報装置を破壊。

「んー、気持ちいい！ 魔法が使えるようになったただけでも転生した甲斐あった！」

罨を壊した張本人であるフリーりはぐつと伸びをすると明るい声を上げた。

胸を張った拍子に細い身体のラインが強調され、レンは唾を飲み込みそうになってしまう。残念ながら（本人も若干残念がっていた）胸のサイズは変わらなかったものの、だからこそ滑らかでスポーティな曲線は健在。色白かつ肌が滑らかになったことで艶めかしさはむしろアップしている。

これにアイリスが微笑んで、

「風の精霊が、風の精霊魔法を使えないわけなんですもんね」

「うん。風の魔法ならアイリスちゃんより上手くなっちゃうかも？」

実際、フリーりが魔法を使えるようになったのは大きな戦力アップだ。

風精——シルフィードはどちらかというと魔法系の種族だ。フリーりが若干自慢げに言った通り、風系の精霊魔法がずらりと揃っている。

風の刃を放つウインドスラッシュは基本的な魔法のひとつであり、近距離から中距離において大きな効果を発揮する。盗賊であるフリーりなら敵のふところに忍び込んでから発動させるのもアリだし、今のように遠間から攻撃してもそれなりの威力がある。

魔法攻撃力の問題があるのでダメージでアイリスに並ぶのは難しいかもしれないが、今まで使い道のなかったMPを運用できるようになったこと、レベルアップしていけば風で伝言を届けたり空を飛んだりもできるようになる。幅の広さという意味では本職に勝るかもしれない。

（というか、アイリスやミーティアは精霊の力を借りている立場なので、むしろ風の魔法に関してはフリーりの方が本職である）

「物理攻撃に強くなったのもいいよね。罨に強くなったし」

「そうそう。乱戦でもだいぶ楽に戦えるようになったと思うよ」

物理攻撃に強いのもシルフィードの特徴だ。

通常状態でも以前までより被ダメージが下がるうえ、スキルを使つて「非実体化」すると物理ダメージが半減以下になる。魔力を伴う風

の集合体になるため、殴られても斬られても「ちよつと痛いかも？」くらいのもので致命傷にはならない。

スキルをさらに取得していけば防御力はもつと上げられる。

非実体化中はフリーの方からも物理干渉できなくなるのが難点ではあるものの、新しい身体に慣れて咄嗟に実体化・非実体化を切り替えられるようになれば万が一の時でも安心だ。

「レベルが上がったから新しいスキルも取れそう。ありがとね、みんな」

「気にしないでください。私たち、仲間なんですから」

転生石の購入にけっこうなお金を使ってしまったため、レンたちは現在金欠気味。

ダンジョン探索のペース自体は変えていないものの、お金を稼ぐため積極的に周回を行っている。フリーのMPは一周すれば尽きてしまうものの、アイリスはMPがなくなっても弓矢がある。レンのMPは尽きても補充できるし、そのレンがばんばん魔法を使っていればシオンが大気中の魔力を集めてMPを回復できる。

MPの補充と言えば、

「触ってなくてもみんなからMPもらえるようになったし、どんどん行こっか」

悩んだ末にリセットストーンを使い、新たに取得したスキル「運命のつがい」。これによってレンはフリー、アイリス、メイ、シオン、ミーティアと魔法的なつながりを持った。

おかげでなにもしていなくてもエナジードレインが発動する。

入ってくるMP量は僅かではあるものの、五人分ともなるとなかなかの量。これが継続的に、戦っている最中も移動中も行われるのだから馬鹿にはできない。少なくとも休憩時間の削減にはなるし、決戦的な戦いにおけるレンの戦闘力も大きく上がった。

「私は別に触られるのもキスされるのも嫌じゃないけどね」

「フリー。それより早くドロップ拾っちゃおう」

冗談めかして抱きついてきたパートナーにそう告げると、彼女は「はーい」と離れ、誘うように視線を向けながら通路へと歩いていく。

レンも微笑んでその後続いた。

フリーの戦闘参加が増えたため、ドロップの回収はなるべく手伝うようにしている。レンの休憩時間が減ったので戦後処理を手早くやっても良くなった、というのもある。

ストレージを石・土の回収に充てるためあまり役に立たないメイがレンたちの共同作業を眺めながらぽつりと、

「これなら三十五階は次でクリアできそうですね」



今日の探索を切り上げて神殿に戻った後、レンはミーティアへ「これから帰る」と伝言を送った。

『遅い。待ちくたびれたわ。早く帰ってきなさい!』

間髪入れずに返事が来る。

スキル「運命のつがい」のもう一つの効果である。もともと別の魔法で伝言は送れたのだが、スキルで対象にした「つがい」相手なら双方向にテレパシーが可能になった。

ただ、試してみたところダンジョン内からダンジョン外とは交信できなかつた。ダンジョン内は別世界のようなもので、さすがに効果範囲外なのだろう。

レンは苦笑しつつ了承の返事を送り、仲間たちと帰路についた。

「お帰りなさい。疲れたでしょう? 荷物を置いて着替えたら食事にしましょう」

「やつと帰ってきた。もう少し手を抜いてもいいんじゃないかしら」
帰るとエプロン姿のアイシャとドレス姿のミーティアが出迎えてくれる。

コスプレ店の店主に預けること数回、特に暴れたりしなかつたため、お姫様には家で待つていることを許可した。若干不安は残ったものの、アイシャと喧嘩をすることもなく仲良く待つていてくれたらしい。

……エプロンを身に着けていないところを見ると夕食の支度を手

伝ったりはしなかったようだが、まあ、お姫様にそこまでは求めていない。

簡単な身支度を終えてリビングへ行くとすぐに夕食になった。

舌の肥えた同居人のために食事のメニューは以前より豪華になっている。おかげでレンたちとしても日々の楽しみが増えた。

「今日はミーティアさんと言葉の勉強をしていたの」

食べながらアイシヤがそう教えてくれる。

「へえ、そうなんだ？」

「ええ。私がアイシヤに教えて、私はアイシヤから教わっていたわ。日本語とかいうのはなかなか独特な言語ね？」

「そうですね。ネイティブでなければ修得には苦労するかと」

「ああ。ひらがなにカタカナに漢字もあつてややこしいですもんね」

ミーティアの感想にメイ、アイリスが同意。

異種族ばかりになって日本人感のなくなったレンたちパーティーだが、レンとフリー、シオンはもともと生粋の日本人。メイとアイリスも日本人の両親から言葉を教わっているので日本語ネイティブだ。

外国の人が「日本語難しい」と言っている気持ちはわからないものの、その理由のほうはなんとなくわかる。

「本当よ。どうしてこんなに文字の種類が必要だったのかわからないわ。あなたたちの先祖は馬鹿なの？」

「あはは。まあ、その、他の国の言葉を取り入れてるうちにこうなったみたいだよ」

フリーが苦笑交じりに答えると、ミーティアは「共通語を作りなさいよ」とため息をついた。

「ミーティアのところは種族が違って言葉が通じてたの？」

「種族や地域によって訛りはあるけど、ある程度はね。別にダークエルフの固有言語もあるけど、古い言葉だから話せない者もいたわ」

そういうところはファンタジーの方が進んでいる。違う種族がたくさんいるので言葉が通じないと本気で困ったことになるからかもしれない。

「そういうわけで、日本語の修得には時間がかかりそうね。あなたた

ちに共通語を教えるほうが早いかしら」

「うーん。わたし、英語でもけっこう苦戦したからなあ」

異世界語は基本文字の組み合わせによって構成される単語を繋げていく仕組みらしい。カテゴリとしては英語等と同じだが、単語をたくさん覚えなさいといけないうためこれはこれでけっこう難しい。

「必要な単語だけ先に覚えてもいいと思うわ。『敵』『来る』『危険』くらい話せればエルフに警告くらいはできるんじゃない？」

「そうですね。ハーフエルフのアイリスさんが伝えればある程度は信用してもらえるかもしれません」

警告さえ行えれば敵を食い止めきれなくても被害を減らせるかもしれない。

三十五階の戦いを思い返したレンは敵のリーダーだった少女を見て、

「……覚悟は決まった？」

「……そうね」

返答には僅かな躊躇いがあった。

それでもミーティアはレンの目を見返してはつきりと告げてくる。

「行ってきなさい。行って、あなたたちの目的のために戦ってくるといいわ」

「ダークエルフを殺すことになるけど、それでも？」

「あなたたちは嘘を言っていない。……少なくともここが私から見た異世界で、あなたたちが私たちの世界に突然現れたのは事実よ。なら、あつちにはもう私の居場所はないわ」

あの戦いで配下のダークエルフはほとんどが死んでいる。

もしも戻ることができたところで単身国へ帰ることになる。そうしたら責任を問われるのは目に見えているし、レンにキスをされた事実も消えない。加えてレンたちから聞かされた「世界の終わり」への疑念がある。今までと同じように過ごすことは不可能だろう。

また、もしもあの戦いがもう一度繰り返されるのだとしたら、それはもう「ここにいるミーティアが経験した戦い」ではない。

「本当は先にダンジョンとやらをこの目で見たいところだけど、それ

は止めておくわ」

「どうして？」

「行ったら、あなたと出会う前の私に戻ってしまうのではないか。……そんな不安が拭えないのよ」

おそらくそんなことは起こらない。しかし、絶対には言い切れない。

「だから、もう一度行って確認してきなさい。そこに私がいるのか、いないのか」

別のミーティアが存在していれば、それはもう今のミーティアとは別の存在だ。

三十五階にミーティアがいなければ、彼女という存在の唯一性が保たれる。どちらにしてもある程度の保証にはなる。

「ただし、なるべく早く帰ってきなさい。……あなたがどこかへ行っている間は『繋がり』が断たれているから不安なのよ」

「繋がり？」

「レンさま。おそらくスキルによるエナジードレインのことかと」

「あ、そっか」

テレパシーが通じないのならエナジードレインも通じないのが道理だ。

吸っている側としては五人分が四人分になるだけ、MPが回復していることに変わりはないので細かい数値をチェックしていなければわからないが、吸われている側としては吸われているかいないかは大きな違いが出る。

「これ、けっこう幸せな気持ちになれるもんね。確かに切れたら禁断症状が出るかも」

「そうですね。レンさんと離れ離れになったみたいできつと寂しいです」

「ご主人様は罪な男……もとい、罪な女ですね」

「レンさまとの繋がりはおたくしにとっても大切なものです。できれば、これからも末永くお傍に置いてくださいませ」

それぞれからそれぞれに言葉を向けられたレンは恥ずかしさと照

れくささ、それから大きな嬉しさを感じながら「うん」と答えた。
「これからも一緒に戦おう。……ミーティアも、できたら一緒に」
「なら、さっさと役目を果たしてきなさい」

素直になったと思っただら変なところで素直じゃないお姫様は、つんと顔を背けながらそう言っただけの言葉を贈ってくれた。

三十五階への再挑戦

広い森を見下ろしながら一直線に飛ぶ。

三十五階への再挑戦。

今回は前と少しだけ作戦を変えた。ミーティアのいた本隊へ向かうのは変わらずレンだが、他の三方へはメイ&マリアベル、シオン、アイリス&フリーというふうに分けた。

アイリスにはフリーを抱いて飛んでもらい、移動ついでにエルフへの警告を行ってもらおう。「お前たちが侵入者じゃないのか!」とか言われてややこしいことにならないよう、長居はせず何度か声をかけたらさっと飛び去ってもらうことにした。さて。

「……見えてきた、けど」

本隊の様子が変わったところは見られない。

急接近しつつ全力の範囲魔法を放てば、弓や魔法で応戦してくるのも同じ。

ただ、そのうえで観察してみると、

「いない」

リーダーとして采配を振るっていたはずのミーティアがそこには存在していなかった。

やはり、もう一人現れたりはしないのか。

だとすると指揮系統はどうなっているのか。見たところ動きに乱れは見られない。よく訓練されているのか、それとも、規定された動き以外はできないのか。

いずれにせよ、あの少女がいないのなら戦力は半減だ。

雨あられと矢を射かけられ、風の魔法を放たれようとも高速飛行するレンにはそうそう当たらない。対してこちらの魔法はホームミング効果によって着実に敵の数を減らしていく。敵が減ればそれだけ攻撃も弱くなる。

前回やられた足止め戦法も行われる気配がない。

部隊に変則的な命令を与えられる者がいないのだろう。よって、十

分な脅威と認定されたレンを全力で狙ってくる。

「こつちとしては好都合……！」

さすがに何発か攻撃は受けてしまうも、この際それは無視した。致命傷にさえならなければ問題は無い。

遠隔エナジードレインによるMPの補充もあつて消耗しきる前に敵を八割壊滅させることに成功。

こうなってしまう場合はや烏合の衆。ダークエルフの兵たちは散り散りになって逃げ始めた。森の方へ向かう者もいるものの、ほんの二、三名でいったいなにができるというのか。

レンは自分にヒールをかけて傷を癒すと、念のため森に向かった者たちを追撃、マナボルトで一体ずつ確実に仕留めた。

あつけないほどスムーズな勝利だった。

しばし呼吸を整えた後、レンはテレパシーを仲間たちに送った。

『こつちは終わったよ。みんなはどう？』

『こつちは大丈夫です！ フーリさんのおかげでとても戦いやすくなりました』

『わたくしも一人で問題ありません。既に敵は半壊させました』

『こちらにも問題ありません……と、言いたいところですが、さすがに面倒なのでお手伝いいただけると助かります』

『了解。じゃあ、メイたちのところに向かうよ』

別行動の時に使うとめっちゃくちや便利である。

再び翼を広げて飛翔し、メイとマリアベルのいる戦場へ。そこでは二人がダークエルフの集団相手に無双していた。

生半可な攻撃ではびくともしないメイは無造作に敵へ近寄ってはメイスの重い一撃を繰り返して致命傷を負わせていく。混乱に乗じて近づいたマリアベルが散発的な攻撃をかわしつつ蹴りを叩き込み、頭だろうと腹だろうと、当たった箇所を骨を砕いてみせる。

なんだかレンがいなくても大丈夫そうではあるものの、二人とも範囲攻撃ができないので確かに面倒くさそうだ。メイたちの相手で手いっぱいらしい敵へ高速で近づくとマナボルトで二、三体を葬り、マリアベルへヒールをかけてやる。

「助かります、レンさん！」

「一気に片付けましょう、マリアさん！」

レンは空から、メイとマリアアベルは地上から。

一人増えただけで殲滅効率は倍以上に上がった。味方を巻き込みかねない範囲攻撃は使えなかったものの、敵の攻撃がレンに向かう分、地上にいる二人が好きに行動できるようになったからだ。

「よし、っと」

出現したドロップ品の回収は後回し。

メイたちに大きな怪我がないのを確認してから、今度は一人で戦っているはずのシオンのところへ。すると、着いた頃にはもう戦いが決着するところだった。

部隊は壊滅。森のほうへ逃げようとした者を狐火で仕留めたシオンが「レンさま」と声を上げる。

ぽん、と、狐娘状態となった彼女はレンが地上に降りたところですかさず抱きついてくる。

「わ。……シオン、いきなり飛びついてきたら危ないよ」

「申し訳ありません。戦いのせいで気分が高揚してしまいました」

恥ずかしそうにする彼女だが、レンから身を離そうとする様子はない。視線で問いたですと「魔力がお辛いではありませんか？」と言いつつ、い訳するように言ってきた。

『フリー、アイリス、そっちはどう？』

『ん。こっちもそろそろ終わるかなー』

シオンと顔を見合わせ、頷きあう。再び狐に戻った彼女と空を駆け、念のために救援に向かうと、その頃には戦いはもう終わっていた。

「レンさん！」

「来てくれたんだ。私たちだけでも大丈夫だったのに」

手を振ってくれるアイリスと、さっそくドロップ品の回収に入っていて忙しいフリー。見たところ被害もほとんどなさそうだ。念のためヒールをかけて「どうだった？」と尋ねると、

「フリーさんと一緒だと風の魔法が強くなるんです！」

「アイリスちゃんとちよつとしたコンボまで開発しちゃった」

普通に魔法を使う他に、アイリスがMPを消費してフリーに魔法を使わせることができるらしい。一般の精霊にお願いするところをフリーにお願いする感覚だ。

この方法だとフリーが魔法を使って発動待機時間クールタイム中であつても魔法を再使用させることができる。

「実体化解いた状態で近づいて『ウインドスラッシュ』二連発とか自分でもちよつと反則じゃないかと思う」

「うわ、えぐ」

もちろん、非実体化状態でも魔法は効くのでそこは注意しないといけないが。

「ほんと、みんなすごく強くなったなあ」

「えへへー。いつまでもレンにばかり頼つてられないからねー」

手を動かしながらも「褒めて褒めて」とばかりに笑うフリー。彼女を軽く抱きしめてから、レンは自分の持ち場のドロップを回収するため再び飛び上がった。

そして。

エルフの森、そして集落へと戻ると、

「……誰もいない」

集落は驚くほどがらんとしていた。

戦いのために出払っている……というわけでもない。移動中の上から見下ろしたところ、森の中にも人影は見当たらなかつた。

異世界に來た時のレンではないが集団神隠しの様相である。

「アイリス。声をかけた時はどんな様子だったの?」

「はい。突然の侵入者に驚いたみたいで、矢を射かけられそうになつたので慌てて離れました」

「じゃあ、その時はちゃんといたんだ」

別動隊の仕業……であればそいつらと出くわしているはず。
となると、

「マリアさん。もしかしてこれって仕様なんですか?」

「はい。クリアすると守つたエルフも消滅します。もう守る必要がなくなつたから、なのでしようね」

「うわあ。そこはさすがにもうちよつとどうにかして欲しい」

これではNPC——ダンジョンに設定された駒の一つだと声を大にして主張されているようなものである。守った達成感もなにもない。これならまだ「敵の仲間か」と疑われた方がマシだったかもしれない。

とはいえ、

「ミーちゃんが他とは違うっていうなによりの証拠、だよな？」
「うん」

これで、家にちゃんと彼女がいれば。

「……ちよつと急いで帰りたいんだけど、いいかな？」

レンの提案に反対するメンバーは一人もいなかった。



三十六階への下り階段と石碑は、三十五階の入り口と対照的な位置に出現していた。

新たにアイリス、メイへ与えられた能力はストレージの拡張。これで彼女たちのストレージはレンたちの四分の三ほどになった。

これならもう戦力として大きな差はないと言っている。

石碑の内容を手早く書き写し、階段を下りて——三十六階ではなく神殿の入り口へ。

下っていたはずなのに気づいたら上り階段に変わっていて平らな地面に一步を踏み出す、という異様な感覚は何度味わっても慣れないものの、今回はそれに文句を言うよりも先にテレパシーを送る。

『ミーティア、三十五階、無事に終わったよ』

一秒、二秒——五秒。

前回は即返事があったのになんの反応もない。

まさか。

目を見開いた仲間たちがいつせいにテレパシー送り始める。

『ミーちゃん！』

『ミーティアさん、返事をしてください！』

『ミーティアさま!』

『ミーティアさん、返事をしないと今日の食事は抜きに——』

『うるさいわね! 昼寝くらいゆつくりさせなさいよ!』

返事が、あった。

『え。なに? もしかして寝てただけ?』

拍子抜けしたせいで思わずそんな風に送ってしまったのも仕方のないことだと思う。幸い、ミーティアも悪い意味には取らなかったようであっけらかんと、

『そうよ。今日は暖かくて気持ちが悪かったから。……あ、あなたのベッド借りたわよ』

『……良かったあ』

ひどく安心すると膝から崩れ落ちそうになる、というのは本当だったらしい。足に力が入らなくなったので代わりに飛ぼうかと本気で悩んだ。

『じゃあ、帰るから待っててくれる?』

『はいはい。すぐじゃなくてもいいわよ。二度寝するから』

これでわかった。

ダークエルフの姫、ミーティアは一個の存在としてこの世界に再び生を受けたのだ。

「……そう、私はいなかったのね。そのうえ、用が済んだらエルフもダークエルフも消えていった、か」

少し遅めの昼食の席にて。

レンたちの報告を聞いた少女はその内容を噛みしめるように押し黙り、やがて深いため息をついた。

「ありがとう。これで少しは胸のつかえが取れたわ」

「ダンジョンに行く気になった?」

「そうね。……本当は元の世界に戻れたらいいんだけど。そうして、なんと少しでも魔王に会いに行つて暗殺してやれたら」

実際にはそうもいかない。世界が滅んでいるのなら当の魔王も死

んでいるわけで、わざわざ殺しに行く意味もあまりない。
時を超えて過去を変えられるというのなら話は別だが。

ミーティアは軽く肩を竦めて、

「ま、そのダンジョンとやらを攻略していけば、いずれ魔王と相まみえる機会もあるかもね」

「ああ。ありそうな話ではあるよね」

魔王なんていかにもラスボスっぽい。もつと言えばラスボス一歩手前っぽい。ラスボスだと思っていた奴を倒したらもつと強いやつが現れる、はRPGの定番シチュエーションである。この世界の場合は高確率で邪神とやらが出てくるだろう。

と、フリーが「え、待って」と引きつった笑みを浮かべて、

「最後は邪神討伐ってこと？ 神様倒すとかさすがに無理なんじゃない？」

「殴ってダメージが入るなら神だろうと殺せるのでは？」

「普通に殴ってダメージ入るかなあ……」

思わず遠い目になる。レンたちの能力も人間離れしてきているとはいえ、神様はちよつとスケールが大きすぎる。そんなの英雄たちが死力を尽くしても勝てたり勝てなかったりするレベル。再封印とかでなんとかありませんか、と言いたくなる。

「先の話をしたところで仕方ないでしょう。少なくともダークエルフの一団程度に苦戦しているようじゃまだまだね」

「自分で言わなくてもいいと思いますけど……」

「うるさい。言っておくけれど、ダークエルフだってあれが全力じゃないわ。あなたたちが戦ったのはあくまでも一部隊に過ぎないことを忘れないで」

「エルフの集落ひとつを相手取るにはだいぶ過剰戦力でしたが、あれで一部隊ですか……」

ふう、と息を吐くマリABEL。

「三十六階からの戦いはさらに激しくなります。かつて私が攻略を断念した理由の中には四十階に挑む恐怖もありました」

「マリA。……そんなに大変なの？」

「ええ。もちろん、私もあの頃よりずっと強くなった。レンさんたちとなら勝てるとは思わけれど……生半可な気持ちで挑めるところじゃないのは間違いないわ」

「っ」
アイシャがなにかを言いかけてぐつと堪えた。そんなに危険ならやめて欲しい、と言いたいのだろう。ただ帰りを待つだけ、というのも思った以上に辛いものだ。いつそ一緒に戦えた方が精神的には楽かもしれない。

とはいえ、アイシャにこれから戦いを覚えろというのも酷な話。
なにより彼女たちは年齢的に衰え始める頃合いだ。

「マリアさん、相談があります。……もしミーティアが協力してくれるのなら、わたしたちは七人になります。そうすると適性人数を超えてしまいますよね？」

言いたいことはすぐに伝わったらしい。

マリアベルはレンを見つめ返して、

「パーティを抜けて欲しい、ということですね？」

「戦力外通告とかそういう話じゃないんです」

そこはわかって欲しい、と、はっきり強調して伝える。

「ただ、もしマリアさんになにかあったらアイシャさんにどう謝っていいか……。お世話になっておいてこんなことを言うのは失礼だと思わんですけど、でも、マリアさんたちはもう十分苦労しました。これからは幸せになってもいいと思うんです」

娼館の経営もマリアベルの手を離れた。

アイシャと二人の新しい家もあるし、貯金だって十分にある。障害となるものはなにもない。

アイシャが瞳に涙を浮かべて「マリア」と呼ぶ。伸ばされた手がマリアベルの片手に重なる。

「一緒に子供たちの相手をするのはどう？ きつと、それも楽しいと思うの」

「レンさん、アイシャ……。でも、道半ばで人任せにするなんて」「いいんですよ。だって、わたしたちは丸投げされるんじゃないで、後

をつなぐんですから」

「後を、つなぐ？」

「はい」

レンは深く頷いた。そんなレンの手をフリーが取って、

「そうだね。マリアさんがいてくれたから、私たちはここまでこれた。あのおみせ娼館がなかったら街の人たちはもつと辛い思いをしていたかもしれない」

アイリスたちも微笑んで同意してくれた。

「後は私たちに任せてください。マリアさんが、皆さんがつないでくれた道は絶対無駄にしませんから」

「後は若い者に任せて、というやつですね」

「わたくしはまだこちらに来て日が浅いですが……先生方には安全なところで見守っていていただきたい、と思います」

「だ、そうよ？ まあ、あなたが抜ける分くらいは私がいればどうともなるでしょうから、安心して休んだら？」

「……皆さん」

ミーティアの齎した情報によって道の先はだいぶ明るくなった。

よく見えるようになったことで数々の困難もまた見えるようになってしまった。本当に乗り越えられるのかわからない。気が遠くなるほどの強敵が待ち受けているかもしれない。

それでも、そろそろ本当に独り立ちする時だ。

アイリスが両親を日本に帰りたいと奮闘しているように、レンたちもマリアベルたちを安心させたい。

そんな気持ち伝わったのか。

マリアベルは涙を流しながら、それでも笑って頷いてくれた。

「では、今度は子供たちに格闘技でも教えましょうか」

もしかすれば、マリアベルたちに教わった子供たちが新しい道を切り開く未来が訪れるかもしれない。

もちろん、そうなるまでなにもせず待つつもりはないのだけだ。

ミーティアのダンジョン挑戦

「……三十五階まで、みたいね」

神殿の階段に足を載せたミーティアは噛みしめるようにしてそう呟いた。

今、自分が挑戦できる最下層がどこかは階段を下りようとした時点でわかるようになっていた。普通は一階から下りていくのが当たり前なので「次に挑戦するのって何階だっけ？」とド忘れした時くらいしか役立たない仕様が今回ばかりは役に立った。

クリアした階層はない。けれど、三十五階の環境を経験している、という特殊な立ち位置の者。

「そっか。ミーちゃんは三十四階までクリアしてる扱いなんだね」

「どうせならもうひとつ次の階まで進ませて欲しかったのだけれど、ね」

三十五階に行ったことがある。けれど、その階をクリアしたことはない。そう考えると妥当なのだが、ボスを務めていた本人に配下を蹴散らせとはなかなか鬼畜である。

「ですが、そうするとミーティアさんの扱いはご主人様たちとも私たちとも違う、ということになるのでしょうか」
ネイティブ

「ミーティアさまはストレージもステータスウィンドウも操れませんものね……」

「ミーティア。いちおうもう一回試してみてくれないかな？」

「ん……駄目ね。やっぱりできないわ」

合言葉を試したミーティアはふるふると首を振った。わかっていたことではあるが少し残念である。

「ま、仕方ないわ」

当のお姫様はさっさと気持ちを切り替えたのかふつと笑みを浮かべて言った。

「便利な力ではあるけれど、ないと戦えないわけじゃない。さっさと行きましょう。目標は予定通り二十五階でいいのかしらっ？」

「うん、それでいいっす」

最初から下の階まで選べたらそうしよう、とあらかじめ決めていた。ミーティアを含む六人は頷きあい、ひと塊になって階段を下りていく。

マリアベルとの共闘は話し合いの通り終わりになった。

これからは本当にレンたちだけで戦っていくことになる。といってもマリアベルたちの家はお隣と言つていいほど近くだし、朝空気を吸いに外へ出たついでに挨拶を交わしたりもする。たまには夕飯に呼んだり呼ばれたりもしよう、と約束もしあった。

パーティでなくなったからといって知人・友人でなくなるわけではない。

新しくメンバーとなったミーティアも十分な実力者だ。

弓と精霊魔法を得意とする射撃手&魔法使いであり、いざとなればナイフを抜いて接近戦も可能。大まかな能力としてはアイリスと同じと考えていい。

前衛の代わりに加入したのが後衛、という意味でバランスは悪くなくなってしまったものの、レンたちはもともと「近づかれるまでに大勢を決する」戦法がメインだ。そういう意味では手持ち無沙汰になるメンバーがいなくなった（メイもいざとなったら腕から鉄球を撃てる）し、フリーが接近戦をしやすくなったことである程度補えるだろう。さて。

『ミーティア、わたしの声が通じる?』

『ええ、通じるわ。あなたとの繋がりも切れてはいないようね』

テレパシーによる会話の後、ダークエルフの姫は口を開いて何事かを発した。案の定、その声はレンたちには聞き取れない。

『なるほど。階段に入った時点で異界なのね』

『慣れるまではちよつと不便だけど、ダンジョンの中ではこっちでやりとりしよう。慣れたらむしろ口で言うより早いかもだし』

『声が敵に聞こえる心配もなくなるね。うまく使えばかなり便利かも』

興味深そうに壁や床を眺めるミーティアのために普段よりややゆっくりと足を運びつつ、二十五階へ。

『……話に聞いていた通りの迷宮ね。しかも、入り口をくぐった瞬間にかすかな違和感があった。通路とここも別の空間ということかしら』

『おそらくそうなのでしょう。モンスターが階段に足を踏み入れたという話は聞いたことがありませんから』

強制的に連れて行かれた場合、ミーティアのような特殊な例を除いて消滅する。ゲーム的に言うとな画面の切り替えポイントを超えられないようにプログラムされているわけだ。

『ミーちゃん。ここからは私とレンの指示に従ってね。罠とかあつて危ないから』

『わかったわ。でも、指揮官が二人いるのは不便じゃないかしら？』

『リーダーはレンだよ。私は罠担当。専門家の指示には従ってください』

本格的なダンジョン探索は初めてだというミーティアだが、足取りに不確かなところはなかった。

『森や草原とはだいぶ勝手が違うけれど、全く心得がないわけじゃないわ。棲み処は城だったし、秘密の抜け道や罠もあったもの』

『ダンジョンを攻略する側ではなく管理する側だったわけですね……』

ちなみにミーティアの装備は三十五階での戦闘で身に着けていたもの。肌を覆うタイプの旅装に漆黒の弓と小ぶりのナイフ。それから装身具がいくつつか。それぞれに品質強化や防御力向上などの魔法が籠められており、王族らしくなかなかの高級品らしい。

……彼女を捕まえたのが性格の悪い連中だった場合、身ぐるみ剥いで店に売る、なんていうこともあったかもしれない。ゲームのNPC相手だとぶつちやけレンもやったことがある。

『あなたたちもさすがに慣れているわね。兵士ではないけど戦士ではある、と』

『そうだね。ここまで来るのにそれなりの経験はしてるよ』

『なら、せいぜい息を合わせられるようにお互い頑張りましょうか』

敵のいる部屋の近くまで来たらテレパシーで作戦を立て、せーので

実行。

メイの鉄球は元手がかかるので他の五人で魔法を叩き込み、終了。フリーが魔法を使えるようになったうえ、風の精霊魔法が強化、さらにミーティアが加わったことで遠距離火力は一気に跳ね上がった。ぶつちやけ集中すると馬鹿みたいな火力である。

『なんというか、若干リザードマンに同情するわ。こんなもの英雄クラスでないと対処できないでしょう』

『でも、次はちよつと大変だよ。この階にいる敵をぜんぶ呼んで一気に倒すから』

『あなたたち、本当に馬鹿みたいな戦い方をするわね?!』

などと言いつつも、ミーティアの力はアラム戦法においても大活躍した。

五人で息を合わせて風の魔法を放つだけで通路にちよつとした嵐が巻き起こり、それが一方的にリザードマンたちを襲う。狭い通路に逃げ場はないし、掴まれるようなでっぱりもそうそう存在しない。飛ばされれば後ろの味方にぶつかり、連鎖的な衝突が起こる。

結局、敵が近づいて来るのを見ることもなく戦いが終わった。

『ねえ。先の通路を確認してもいいかしら?』

ミーティアの希望がなくともドロップ品の回収は必要となる。

フリーに罠の対処してもらいつつ移動すると、そこにはリザードマンの死体は一つもなかった。それどころか血の跡すらもない。

『さっきもそうだったけれど、本当に消えるのね。……あいつらがかりその命だったというなよりの証拠だわ』

続けて、少女は異世界語でなにかを呟いた。

レンにはその意味はわからない。それでも推測することはできた。

自分も死んだら消滅するのか、と、彼女は思ったのではないだろうか。



二十五階でのダンジョン攻略を経験したミーティアは帰宅後「次は

「三十五階に行きましょう」と提案を口にした。

もちろん、レンたちとしては願ってもないことではあるが、

「もう行くの?」

「ええ。別に後回しにする意味もないでしょう? 戦場としてはむしろ見知った場所だし、一月や二月訓練したところで大きな戦力向上はないもの」

「それはそうだけど……」

ミーティア以外の面々は一月どころか三日もあれば劇的にパワーアップしたりする、というのはこの際置いておく。

三十五階はつい先日クリアしたばかり。人数的にもあの時と変わらないのだからクリアは十分可能だ。

レンが気にしたのは戦力面以外のこと。

「辛い?」

「覚悟はできているわ。……裏切り者と呼ばれることについても、部下から認識されない可能性についてもね」

「……わかった。そこまで言うなら」

数日後、レンたちは再び三十五階へと挑戦した。

強制力が働いてミーティアがボスに戻ってしまうのではないか。そんな不安は杞憂に終わり、少女はテレパシーによる意思疎通のできる、我が儘で気の強いお姫様のまま。

少し悩んだ末、彼女にはレンと共に本隊へ向かってもらうことに。

エルフへの交渉をお願いしたい気持ちもあったものの、ダークエルフが「ここに襲撃者が来る!」と警告しても「お前だろ!」と言われるだけである。むしろ姿を見せるだけ見せてさつと飛び去り、周囲への警戒を強めてもらう作戦となった。

本隊へは異世界語で呼びかけを行ってもらい、

『……ふふつ。やっぱりね』

『ミーティア?』

『ダークエルフがエルフに味方するのか、ですって。私の顔も名前も知っているはずの者たちが随分と荒い口調なこと』

ミーティアは「見知らぬダークエルフ」として扱われた。

一度仕様の外へ出てしまったことでダークエルフたちの姫、指揮官とは認識されなくなってしまった。ダンジョン内の生き物が思考や記憶を全て再現されているわけではなく、本当の意味で生きているのは限られた一部だけである、ということが証明された。

『これで気兼ねなく戦えるわ。こいつらは私の可愛い部下じゃない。ただのまがい物よ』

二人がかりの攻撃によって本隊は前回よりも早く壊滅。

一人で敵を食い止めることになったメイと合流し、そちらの敵も片付けた後は二手に分かれてシオンやフリー、アイリスたちを援護した。

『あつけないものね』

『ミーティア。……三十六階からはダークエルフ以外が相手だから』
『そう。変わらないと言えば変わらないけれど、それでもやっぱりその方が気は楽ね』

問題は石碑の内容だった。

もしかしたらまた変わっているかもしれない。そう思っ注視すれば、

『古き世界の落とし子よ。我らの意思に共鳴するというのなら歓迎しよう……だ、そうよ』

『やっぱり読めるんだ』

『当然でしょう。私たちの世界の言葉だもの、これ』

ミーティアが文章を読み終えると、石碑から小さな光が生まれて少女の身体へ吸い込まれた。

『わ。ミーちゃん、なんともない!?』

『ええ、痛み一つないわ。むしろ、身体が軽くなったような気がする』
ステータスの表示を試してもらったものの、レンたちと同じウィンドウが表示されることはなかった。意味ありげな内容だったのでつきり特典がもらえるものと思ったのだが。

レンたちの落胆を察したミーティアは空へ向けて風の魔法を放つて、

『手ごたえあり。……どうやら、私には直接、力が与えられたみたい

ね』

身体能力や魔力が増した感覚がある、とのこと。

『これはこれでよかったわ。あなたたちの言うウィンドウだのストレージだのってじっくりこないもの。こっちのほうは力を持って余さなくてすむ』

この件を賢者に報告したところ「やはり『祝福』の形は固定ではないのか!」と大喜びされた。

新たな難関と見た目の変化

三十六階はこれまでの階（特殊なボス階を除く）とは一線を画す特徴を持っていた。

『……山、かあ』

地面に傾斜がついている上に視界が大きく開けているのだ。

山、と言っても多くの緑を持つ豊かな山ではなく、まばらに草や樹木が茂るほかはむき出しの土や岩ばかりの荒れた山。

世界の欠片で山を作るとして、間違ってもこの山を参考にしてはいけない。

攻略本によると、今回の下り階段は山の頂上付近に位置しているという。平坦な道に比べて上りは体力を使うし、足を踏ん張れないので荒事をするのにも向いていない。

『これは、マリアさんがああ言ってたのもわかるねー』

軽い身のこなしが売り、かつ蹴り技がメインのマリアベルにとっては鬼門と言っている。

しかも、

『入り口付近はともかく、少し移動しただけで敵に察知される……の、でしたよね？』

『そうらしいですね。下手に動き回れば多数の敵に囲まれることになりかねない、と』

視界が開けているということとは遠くから敵を見つけやすいということであり、逆に敵からも発見されやすいということである。

戦闘を避けづらいうえ、大きな音を立てたり戦闘を長引かせれば新たに寄ってきた敵と連戦になる。これまで以上に慎重かつ迅速な行動が求められる。

『とりあえず、ゆつくり進んでみようか』

『賛成よ。まずは一度、敵の戦力を確認しないことには始まらないわ』
レンたちは周囲を警戒しつつ山を登り始めた。

重装備のメンバーがいないのは幸運だった。そこまで急な傾斜ではないとはいえ、重い鎧を身に着けて歩くのではあっさり疲れてしま

うだろう。ストレージで荷物を収納できるのも追い風だ。

もちろん、これがただの登山なら遭難した時用の備えなどいろいろな装備を用意しておくのも大切なのだろうが、

『いました。右斜め前方に二体。……大きいですね』

程なくして敵の姿を確認した。

三メートルを超える巨体を持つ人型の生物。身長に比例する体格を有し、手には木の幹を荒く削り出しただけ、という雰囲気のコング棒を持っていて。肌は岩を連想させるほど硬く頑丈そうで、その眼光は明らかに危険な光を宿している。

食人鬼——オーガである。

オークを超える筋力と耐久性を持ち、身長から来る歩幅の大きさによつてスピードも十分に持ち合わせている。殴つても殴つても倒れず攻撃を続行してくる上、誤つて捕まりでもすればそのまま丸かじりされかねない、と、マリアベルは「思い出したくもない」とでも言うふう語ってくれた。

『あれがいつぱいいるのは嫌だなあ』

『そんなことを言つても敵はいなくならないわ。……まだ気づかれてはいないようだけれど、奇襲しましょうか?』

『それしかないかな。必要になるとこん棒を投げてきたりもするらしいから気をつけて』

ぼーっとしながら歩いているらしい、大きな足音を響かせるオーガに向けてアイリスとミーティアが矢をつがえる。

風の精霊魔法を用いて射程・威力を強化された矢は精霊であるフリーの加護も受け、遠間からの射撃を見事に成功させた。一本ずつ矢を受けたオーガは耳障りな悲鳴を上げ、血走った目でレンたちの方を振り返る。

『このまま矢を浴びせるわよ、アイリス!』

『もちろんです!』

弓使い二人は狙撃を続行。

二本、三本と矢が突き刺さる中、オーガたちは早足でこちらへと向かってくる。先頭を歩く個体がこん棒を持つ腕を振り上げたのを見

て、メイが腕の中に仕込まれた鉄球発射機構を展開。重量のある弾を打ち出して相手の手を見事に直撃した。

怒りの籠もった大声に空気がびりびりと震える。

『恐ろしい声ですね……。ミーティアさま、これは言語なのでしょう？』

『少なくとも共通語ではないわね。私は習得していないし、オーガには大した知能はないと言われているから会話は期待できないでしょう』

『そうですか……。では、成敗するしかありませんね！』

距離が縮まってきたところでレンたちも攻撃に参加する。無数の炎の矢に交じってシオンの狐火が飛び、アイリスたちも魔法を矢の強化からファイアボルトに切り替えて火責めを慣行。

しかし、オーガは本当にタフだった。

高いHPを削り切る前に敵がすぐ傍まで接近してくる。後退する四人と入れ替わるようにしてメイとフリーが前に出る。

メイスを構えたメイの姿がオーガの前だと頼りなく見える。体積で言えば倍ではすまないのだからそれも当然だが、

「ほら、こっちを狙いなさい！」

敢えて声を出して挑発したフリーが「ウインドスラッシュ」で敵の肌を浅く切り裂く。

大した傷ではないものの、気に障ったのかオーガはこん棒を振り上げる。振り下ろされたそれは非実体化したフリーの身体をすり抜け、地面を強く打った。

『うわ、大丈夫だってわかってても怖いね、これ』

『ですがお手柄です、フリーさん』

注意が逸れた隙にメイが獲物を振るい、敵の足を強く打った。身体は小さくともパワーは十分。離れた場所からでもわかるような痛い音。

『シオン！』

『はいっ！』

ここは畳みかけるべき場面。

出し惜しみなし、最大強化を施したマナボルト二発と七発もの狐火がもう一体に叩き込まれ、そのHPを奪い去ると共に世界から消滅させ、

「ウインドスラッシュー！」

フリーの魔法がオーガの足の腱を切り裂くと、メイスと矢が殺到して形勢を決定、レンたちも加わって一気に片付けた。

『……はあ、なんとかなったわね。あまり何度も戦いたい相手ではないけれど。こんなの普通、部隊レベルで相手取るものでしょう』

『ああ、十人とかで矢を撃ちまくったらさすがに楽そう。残念ながらそんな人数、そうそう集められないけど』

フィールドが広いので人海戦術もアリかもしれない。二パーティ以上で協力して各個撃破していけば危険度はかなり下が리そうだ。

一パーティで比較的安全に攻略するとしたら、

『やっぱり飛ばうか』

『では、どなたか私を運んでいただけると助かります』

ドロップ品をとりあえず拾った端からストレージに放り込むと、レンたちは空へと高く舞い上がり、一気に頂上を目指した。

頂上にいたボスはレンとシオンを中心にしこたま攻撃魔法を空から撃ち込み最短で終わらせた。こん棒やその辺の岩を投げて来られても注意していれば十分避けられるし、空なら足場の不利も関係ない。

レンたちの攻略レポートは「特殊過ぎて参考にならない」と先輩方からは不評で、今回の攻略方法もやっぱり似たような評価を受けることになったものの、安全には代えられない。普通の階は後からでも再攻略可能なだから調査はまた別にやればいいのである。



「遅くなりましたが、九尾になりました」

「おめでとう、シオンちゃん。これで夢の九発同時発射だね！」

「超兵器か何かのようですね。どうせなら炎よりもビームを撃って欲

しいところですよ」

他のスキルを優先したりスキルポイントを保留していたために七尾で止まっていたシオンの尻尾がついにカンスト、九本になった。

フルで尻尾を出した状態だともうふさふさもふさふさ。身体が成獣サイズになったのに比例して一本一本も太くなっているため、尻尾をふりふりしただけで「新手の掃除道具かな?」というくらいわざわざする。もちろん触ると尋常じゃなく気持ちいい。

みんなでひとしきり触らせてもらったところで、

「加えて、サイズを自由に換えられるようになりました」

ぽん、と、シオン（狐モード）の身体が出会った頃の子狐サイズになった。

「なによこれ、可愛すぎるでしょ……!?」

「そっか、ミーティアが来た頃にはシオンはもう大きかったんだっけ。大きいシオンも可愛いけど、小さい動物って独特の可愛さがあるよね」

「ええ、これは反則ね。ねえ、シオン。今夜一緒に寝ましょう?」

「はい、もちろんです。……ですが、いやらしい意味ではありませんよね?」

「それはまあ、あなたたちとより親密になるのもやぶさかではないけれど、今のは普通の意味よ」

さらりと余計な情報を交えて答えるミーティア。普通に女の子大好きなのか、と指摘すると「あなたに言われたくないし、そもそもあなたのせいよ!」と怒られた。どうやらレンの影響だったらしい。

「ところで、シオンさん。その状態で人化するとどうなるのでしょうか?」

「えっと、身体のサイズに比例した姿になりますね。……このように」

再びぽん、と変化すると、今度は十歳行くかいかないかくらいの狐耳美少女の姿に。

「可愛い……! うう、シオンちゃんってばいろいろ変わり過ぎてちよつと反則じゃない?」

「まあまあ。フリーだって美人になったんだから」

「ありがとう、レン。でも、レベルアップするたびに大きくなる子に言われるのもちよつと複雑」

恨みがましい視線が向かったのはレンの身長——ではもちろんなく、胸のほうである。

「あー、これね。さすがにそろそろ邪魔なんだよね、正直」

レンの成長に伴って成長し続けた胸はオーダーメイド以外だと服も下着もかなり限られるレベルになっている。

男子だった頃のレンが街で見かけたら二度見どころか三度見まで確実にするだろうし、画像に収めた不届き者が友人にいたら恥を忍んで「俺にもくれ」と頼んだことだろう。

サキユバスパワーが働いているのか、これだけのサイズになっても体型が崩れた印象はなく、女子としてもぶつちやけ自慢というか「わたし、めちやくちやエロくて可愛いよね？」と自画自賛しそうにはなるのだが、

「サイズ調整——っていうか見た目を調整できるスキルが出てきたから取ろうかな」

スキル「魔性の美」。

今のままでも十分に美しい（エロい）容姿を好みにカスタマイズし、自分の望む完璧なバランスに作り変えることができる。

もちろん戦闘能力には全く影響がない（思い切つてムキムキにでもすれば筋力が上がるかもしれないが）ものの、胸のサイズをちようどいい感じに収められるというだけでも十分に価値があるだろう。

すると、フリーは「え」と驚いたように目を瞬いて、

「せつかくのそれを小さくしちゃうの!?!」

「なんでフリーがそんなに驚くの」

「その恩恵に預かるのはあなたよりも私たちなのだから当然でしょう?」

「だよね、ミーちゃん!」

がし、と、何故か握手しあうフリーとミーティア。

確かに、自分の胸を自分で揉むよりも誰かに揉まれる機会の方が圧倒的に多い。

「今更だけど、フリーたちでも揉んで楽しいものなんだ?」

「だって気持ちいいじゃない。ね、アイリスちゃん?」

「えっ!? は、はい、そうですね。柔らかくて気持ちいいですし、なんだか安心します」

「豊かな胸は母性の象徴です。わたくしとしても大幅に小さくなってしまうのは少し残念ですね……」

アイリスまで反対派に回ったうえにシオンまでしょんぼりしだした。

「だ、大丈夫。そんなに大幅に小さくする予定はないから」

「なんだ、そうなのね。ならそれはそれでいいかしら」

あつさりとOKが出た。実際、レンとしてもどうせなら胸が大きい方がいいし、また服や下着を買い直すのもできれば避けたいところである。

「ちなみにその気になれば美少年になったりもできるみたいなんだけど」

「あー。そういうのはそこまで興味ないかな。たまにならアリかもだけど」

「そっか」

ひよっとするとみんな男子に興味がなくなっているのだろうか。だとしたら確実にレンのせいなのだが、若干心配になってしまう。

と、くいくいとレンの服の袖が引かれて、

「どうかした、メイ?」

メイにじーつと見つめられた。

なにも言わない彼女としばし見つめ合っていると、ぴんと立てられた人差し指でメイ自身を指し始める。

「ご主人様。私にも餌を与えてください」

「あ。例の生命力の提供ってこと?」

「そうではなく。いえ、それでも構いませんが、私のことも構っていただかないと不満です」

彼女がそんなことを言い出すとは。いや、以前から「仲間外れは嫌だ」という主張をすることはあったのだが、性欲のないメイはそうい

うことをしなくてもいいものだと思っていた。

心境の変化でもあったのだろうか。それとも、もつと単純な理由なのか。

「私の柔らかいものをお好きなだけ揉んでいただいて構いませんし、挟んだり擦りつけたりしていただいてももちろん構いません。こんなこともあるかと身に着けたテクニックをお見せしましょう」

そんなことを言われると逆に「じゃあお願いします」と言いづらくなるのだが。

「うん。じゃあ、今度からはお世話になります」

夜に「一緒に寝る」相手がまた一人増えてしまった。

ここまで来ると当番表かなにか必要なのではないかというレベルだが、誰のせいかというところでも間違いなくレン自身のせいだった。

【番外編】三十二年目のとある転移者（前編）

正直、当たったらどうしようとは思っていたのだ。

三十年以上続く神隠し。

最近——ここ十年くらいはニュースで報道されるたびに「ああ、もうそんな季節か」なんて呟かれていたこの現象は、三十年を超えたあたりから再び大きく問題視され始めた。

最初の世代が四十代中盤になって金も立場も持つようになったことも関係しているらしい。

警察の捜査とは別に独自に情報提供の呼びかけなんかも行われているし、なんとかしてこの現象を阻止するべきではないかという話も大きくなった。

例えば、神隠しの時期だけすべての高校を休校にするとか。

しかし、現実的ではないということでは進んでいない。神隠しが起こる日付が一定ではないのもあるし、私立の高校全てに協力を取り付けるのも不可能に近い。なにより、そこまでしてもどこか別の場所で神隠しが起こるだけだったら目も当てられない。

というわけで、結局のところ世の高校生は「自分が被害者にはなりませんように」と祈りながら登校する者がほとんどで。

かくいう彼もそういう一人だったのだが。

まさか本当に神隠しに遭ってしまったとは思わなかった。

移動した先が異世界だったのは良い。賢者を名乗る男からダンジョン攻略を求められたのも良い。ラノベやマンガを好み、毎シーズンの新作アニメ情報に一喜一憂する彼にとって異世界転移・転生はありふれた概念だったし、もしかしたら「そういうこと」が起こっているのかもしれないという妄想もしていた。

問題なのは、楽しみにしていたマンガやラノベの新刊、アニメの続きが見られなくなってしまったことだ。

こんな娯楽の少ない世界で何を楽しく生きていけばいいのか。

「帰ってきたら命がけで戦えとかふざけてんのかよ!？」

「いいからうちに帰してよー!」

クラスメイトたちがやり場のない気持ちを言葉にしている。

神殿と呼ばれた石造りの建物内には同じクラスの全員が揃っていた（欠席者は除く）。公立の中堅校なので個性は豊かだ。

ただ、彼と同じ理由で憤っている者はいないようだ。まあ、部活の大会がどうか好きなアーティストのライブがこうとか言っている者はいるが。

「……気持ちはわかる。私もかつてはそうだったからな」

賢者は三分の一ほどの年齢しかない集団を相手に怒ることもなく言葉を続けた。

「だが、帰る方法は現状存在しない。帰ることができるのなら君達の見たニュースの内容は大きく変わっていただろう」

異世界に行く方法、そして帰還の方法がある。そんなことがわかったら大騒ぎになるだろう。国が大々的にチームを発足して調査に向かわせるなんて話にもなるかもしれない。

ある意味残酷なやり方ではあったが、クラスメートの多くが黙るか語調を弱めるかした。

そこに、さらなる説得の言葉。

「私一人の見解では不足かもしれないな。そこでもう一人、転移者の仲間に来てもらった。彼女の姿を見ればここが異世界だと理解しやすいだろう」

そう言って、賢者は神殿の隅の方へと合図をした。

変だとは思っていたのだ。隅に衝立が置いてあって、一人か二人が隠られるスペースがある。件の人物はそこにいたらしい。

無駄なサプライズだ、という感想は現れた少女を見て一気に吹き飛んだ。

——翼と尻尾を備えた美少女。

歳は彼らと変わらない。十五、六歳くらいだろうか。白い肌は見るからにすべすべ。悪魔のような翼と尻尾は対照的に黒く、それが全体的なフォルムを引き締めている。

紫紺の髪と瞳は妖しくも艶めかしく、やや幼さの残る顔立ちや細い腰つきはどこか清楚さを感じさせる。

一方、胸や尻にかけての曲線は豊かで、つまりデカイ。特に胸の方はちよつとした物なら挟んだり置いたり余裕でできそうだ。

胸はもちろんだが、手足も細いのに柔らかかそうな質感がある。見る者が「太い」と思わないギリギリのラインでのむっちり感というかエロさというか、そういうものを備えているのだ。

彼女は何か。

悪魔娘、と形容するのは簡単だが、ここはもっと相応しい言葉があるだろう。

「サキユバス……！」

「ほう、知っているのか。そう。彼女はサキユバスだ。悪魔の一種と
言うべきかそうでないかは議論の余地があるが、ともかく、他者の精
気を吸ってエネルギーとする種族だ」

もつと端的に言えばエロい事が食事になる。

クラスメートたちがそこまで知っているかは不明だが、男子どころ
か女子まで釘付けになっているあたり説明しなくてもなんとなくは
伝わっていきそうだ。

そんな中、彼女はにこりと微笑んで流ちょうな日本語を紡いだ。

「はじめまして、レンです。わたしも二年前、みなさんと同じようにこ
こへ転移してきました。こんな見た目ですけど、元は平凡な日本人
だったんですよ」

「マジかよ」

「マジです。みなさんに与えられる『祝福』……特典のようなものは人
それぞれ違っていて、中にはわたしのように種族まで変わってしまう
人もいます。でも、みんな新しい生活になんとか折り合いをつけて暮
らしているんです」

「レンは若手の中で最も深くダンジョンに潜っている。もしかすれ
ば、彼女のパーティがいずれダンジョンをクリアするかもしれん」
情報が多すぎて理解が追いつかない。

とりあえず、レンなら確かにダンジョンとやらにも挑戦できそう
だ。いかにも魔法とか使えそうだし。

とか言っている間に彼らにも例の『祝福』が与えられ始めた。再び

騒ぎが起こり、力が付与されるとお互いの姿——服装の変化にわいわいと声上がる。

残念ながらというべきか、それとも幸運にもと言うべきか、種族が変わった者はいなかったようだ。

どうせなら可愛い女子にネコミミでもつけば良いのに。

「みなさん、職業ククラスが与えられたようですね。その力があればみなさんでもダンジョンに潜れます。……もちろん、危険はありますし注意は必要ですけど、みんなで協力して頑張れば必ず道は開けるでしょう」「ダンジョンか。ちよつと面白そうだな」

「でも危ないんでしょ？ それともレンさん？ がついてきてくれるの？」

「わたし一人では指導の手が足りませんし、最初から先輩に頼る癖がついてしまうと後で困る可能性が高いんです。だから、なるべくクラス内でパーティを組んでください」

残念だ。こんな美少女と一緒に冒険できるならダンジョン攻略もさぞかし楽しいだろうに。

「あの。レンさんのパーティはどんな感じなんですか？」

参考に、と言いつつ彼は質問した。すると驚いた様子もなく返事が来て、

「風精シルフィードのフリーにハーフエルフのアイリス、ゴーレムのメイ、妖狐のシオン、それからダークエルフのミーティアだよ」

全員異種族のうえに女の子。

瞬時に浮かんだ妄想で頭の中がひどいことになった。そして恐ろしいことに、妄想した美少女達の姿は当たらずとも遠からず、あるいは妄想以上と言ってもいい美少女達を後に彼は見ることになる。

しかも美少女サキュバスと目が合った。わざわざ敬語を崩して答えてくれたということはもしかして自分に気が（以下略）

「戦うのが怖いという人は街で働いてもらうこともできます。得意なことがある人はそっちの方がいいかも。でも、稼ぎたいならダンジョンがおススメです」

家と家具、当面の食料と軍資金は提供されるものの、そこから先は

自分たちで稼いで調達していかなければならない。

生産を主とする裏方の職業は仕事量が人口に比例するため、いくらでも受け入れてもらえるわけではないし稼げる額にも限界がある。その点、ダンジョンなら頑張った分だけの報酬が約束されている。

とはいえ罨やモンスタースターとやりあうのは恐ろしいわけだが、

「……ちなみに、街には息抜きできる場所もあるよ？　お酒を飲んだり食事できるところや服が買えるところ、それから、男の子にはえっちなお店とか」

「……えっちなお店!？」

「最低」

「変態」

釣られるように男子の一人が声を上げ、女子からゴミのように侮蔑された。

仕方がない。あんなエロい美少女がほんのり頬を染めながら「えっちなお店」とか言ったら反応しない方がおかしい。誰も声を出さなかったら声を上げていたのは彼だったかもしれない。

なお、当のレンは女子から敵意の眼差しを向けられていなかった。彼女たちも圧倒的格上に表立って喧嘩を売りたくはないのである。それはそれとして、えっちなお店である。

レンとお近づきになるのはおそらく難しい（彼氏くらいいるだろう）としても、欲求不満は解消したい。お店があるのだから利用してもいいはずで、つまり金はいくらあってもいい。

「ダンジョン、行くのかな」

男子を中心に、クラスからダンジョン攻略希望者が多数発生した。かくいう彼もその一人だったのだが、

「……なあ。お前のクラスってなんだっけ?」

「え?　超能力者だけだ」

「っ!　じゃ、じゃあ、あのレンさんの裸とか透視できるんじゃない?」
「なん、だと……!?!」

さっそく（ある意味で）道を踏み外すことになった。

なお、レンが同性愛者で、パーティーメンバー全員と深い仲だという

事実を彼が知るのもう少し先の話である。

人生そんなに上手くはいかない。それはわかっているが、なにも美女同士でくつつかなくてもいいじゃないか、と思わざるをえなかった。

【番外編】三十二年目のとある転移者（後編）

サキユバスのレンは街から外れた「女だけの住宅地」に住んでいる。神殿を中心に開拓、というか作成された場所しか存在していないこの狭い異世界でどうしてそんな事になったかと言えば、元々は去年転移してきた女子校の生徒が我が儘を言ったせいらしい。

女子校とか羨ましい。一度でいいから転入してみたい——ではなく、余計な事をしてくれたものだ。

件の住宅地は男が侵入することさえ許されていない。

お陰でレンを街で見かけるチャンスが激減だ。同じパーティの美少女たちまで一緒なのだから、これは重大な損失である。街に住む男の中にも同じ事を思っている人は結構いるようで、世間話のついでに尋ねると（女性の目がないことを気にしながら）内心を吐露してくれたりする。

「レンちゃんが挨拶してくれるだけでも、いや、その辺を歩いているだけでも『頑張ろう』って気になれるのになあ……」

「わかります」

美少女なうえにエロい身体をしているとか「視てください」と言っているようなものだ。

女子が聞いたら怒るだろうが、そもそも女子という存在自体がエロい。エロいと感じるのは男の本能だ。おかしいと言うならイケメンにきやーきやー言うのを止めてからにして欲しい。もちろん、面と向かって文句を言われたら「はい、すみません」と平謝りすることしかできないが。

「やっぱり、どうにかして調べるしかないな」

彼と仲間達は自然とその結論に達した。

彼がパーティを組んだのはクラスメイトの中でもエロ方面への興味が強^{グラデイエーター}い二人の男子だった。クラスは剣闘士^{ダークブリスト}と暗黒神官。性癖はドMとドS。気づいたら自然と「俺達の代の問題児三人組」と呼ばれるようになっていたが、そこはもう諦めた。

問題児と言っても暴れたり脅したりするわけではない。ただエロ

いだけだ。少人数なりにバランスはそこそこ良いのでダンジョン攻略はできているし、生活費＋αくらいは十分稼げている。ただ、今のところ娼館えらいみせに行けるほどの小遣いはない。

欲求不満解消のためのエサが必要だった。

「俺としてはやっぱりお前の超能力だと思うんだ」

「そうですね。調査に役立つのは既にわかっているわけですし」

仲間二人が口を揃えて「お前が頼りだ」と言う。性癖は正反対な癖にこういう時は息が合う。

「レンさんは絶対DSだからな。夜な夜な仲間の女子を性的にいじめて楽しんでいるに違いない。羨ましい、じゃなくてけしからん、でもなくて代わって欲しい」

「いえ、ああいう女性ほど支配者を求めているものです。拘束して一晩中いじめてやれば簡単に堕ちますよ。そうすれば従順な奴隷の出来上がりです」

ちなみに二人とも童貞なのでこれらはただの妄想だし、犯罪被害に遭った女子も存在しない。どうか安心していただきたい。

それはともかく。

「確かに。俺の超能力で透視自体はできたんだよな」

超能力者のクラスは「超能力っぽいことならだいたいなんでもできる」構成になっていた。火も出せるし物を動かすこともできるし、応用すれば空だって飛べる。その中には透視能力も含まれていた。

ただ、使ってみると意外に使い勝手が悪い。

持続している間MPを消費するうえ、距離が離れば離れるほど、透視する物が分厚ければ分厚いほどMP消費が高くなる。自宅にいながらにしてレンたちの夜の営みを観察するのはさすがに無理があった。

と、

「贅沢言うなよ。女子の服透かすくらいなら余裕なんだろう？」

「本当に羨ましいですね。それさえあれば視姦プレイが楽しみ放題です」

「いや、近くで女子を凝視してたら普通に通報案件だからな？」

透視ができるのかもはや関係ない。エロい目で見ていた、という時点でギルティである。本当にエロい目で見ているわけなので否定もしづらい。

「まあ、何回かは使ったけど」

「使ったんじゃねえかこの野郎」

そりゃ、使えるんだからチャンスがあれば使う。透視の度合いを調整して服だけ透かすようにすると特に興奮した。初めて使った時は思わず神に感謝したものだ。

ただ、まだレンたちパーティには使えていない。

「たまに見かけることはあるんだけど、すぐ視線に気づかれるんだよな」

「なかなか鋭いですね」

レンは皮膚感覚が鋭いのか自分が視られているとすぐ気づくし、アイリスとミーティアは自分の名前が出たりするとかかなり遠くからでも反応してくる。

ふわふわもふもふの狐——シオンなどは目も合わせず音も立てず、ただ邪な事を考えているだけで「？」とこつちを見てきたりする。

シオンに関してはむしろエロい事関係なく抱っこして撫でまわしたいのだが、なかなかままならないものである。

「だから、俺としては念写とか、視覚を飛ばす方がいいと思うんだ」

「なるほどな。それなら遠くからでもいけるか」

検討の結果、より使いやすそうな視覚を飛ばすスキルを採用することにした。

「スキルポイントを3使って距離延長と効率上昇スキルも取れば実用できるな」

これなら遠距離からでも覗きができる代わり、本体が過剰集中状態になるので家からでないと使えない。また、その時に起こっている行為しか覗けないので決行は夜、人々が寝静まり始める頃とした。

(なお、日本にいた頃ならまだまだ寝る時間ではない。彼は余裕でゲームとかしていた)

今日一日、MPをなるべく使わないようにしていたので余力は十

分。

「じゃ、始めるぞ」

「おう」

「はい」

邪魔しないように、と、仲間達は静かに答えて先を促してくれる。そんな頼れる二人に頷き返してから、彼はスキルを起動した。

結論から言うと、希望したシーンを覗くのにはしばらく悪戦苦闘する必要があった。

視線を飛ばすスキル自体が感度の極端なドローンを操っている感覚で使いづらかったことと、家の中に視点を移動させるのが大変だったこと、レンたちが「始める」まで待たなければならなかったことなどが理由だ。

しかし、

「……うわ、エロ」

望みの光景を目にした彼は「待った甲斐があった」と心から思った。興奮しすぎてスキルが中断してしまったのも無理はないと思う。

「おい、何が見えたんだ!」

「ちゃんと説明してください!」

「ああ、レンさんとフリーさんが下着姿でキスしてた」

フリーは見た目通りスレンダーで、レンは対照的に巨乳。その二人が頬を赤らめて身体を押し付け合いながら舌を絡める様はエロいにもほどがあった。これはもう一生覚えていられるのではないか。下手なAVでは興奮できなくなりそうだ。

「で、その先は?!」

「いや、集中が切れたから見られたのはそこだけだけど」

二人から思いつきりぶん殴られた。

暗黒神官はともかく剣闘士の拳は普通に痛かったので、翌日同じくらしい時間に再挑戦した。

そんな事を数日繰り返した結果、

「なんと、レンさんは毎日、相手日替わりでエロい事をしているらしい」

「マジかよ」

「最高ですね。……いえ、ある意味残念過ぎますが」

最初の日はフリー、次の日はミーティア。その次はメイだった。ローテーションが決まっているのか、それともその日の気分次第なのかはもつと調査が必要だろう。それから、三人以上でベッドを共にする日があるのかも気になるところだ。

MPが切れたり集中が途切れたりで一部始終を見られたわけではないものの、プレイは基本的にレンが責めの模様（剣闘士がガッツポーズしていた）。ただ、流れ次第で受けに回るとレンも恍惚の表情を浮かべてされるがままになっていた（暗黒神官が天を仰いだ）。

「プレイ内容についてももつと調査しないと。あと音が聞こえないのが残念過ぎる」

「俺達が見られないのよな」

「念写か何かと組み合わせ、見たものを出力できないでしょうか」

まだまだ試行錯誤の余地はありそうだ。彼らは頷きあうと、今日の分の調査に入った。

彼のMPを節約するために肝心のダンジョン探索の方がスロークラスになっていのはまあ、エロの探求のためには仕方ない事だろう。

「今日は誰だろうな」

「順番的にはアイリスさんかシオンさんでしょうか」

「お、来た。……シオンさんだな」

人型モードのシオンはレアである。剣闘士はジト目で睨んで欲しいと妄想し、暗黒神官は麻縄で縛ってやりたいと息を荒げる。

彼としても狐耳美少女は大好物。その巫女服っぽい衣装がはだけられる様は是非とも見たいところで――。

「ん？」

「どうした？」

「いや、なんかこつちを見られたというか」

「気のせいじゃないのか？」

確かに、普通に考えたら気のせいだ。今は視覚を飛ばしている状

態、空中に目玉が浮いているわけでもなんでもなく、気づかれるはずがない。

なのに、シオンは彼から目を離さないうまま一直線に歩き始める。レンも伴い、そのまま現在の視点を「通り過ぎて」。

「あ、これ、やばいかも」

「どうしたんです？」

「俺の視線を辿ってこっちを追って来てる、かも」

「馬鹿、だったらさっさとスキルを切れ！」

慌ててスキルを中断し、家の明かりを全て消した。まるで泥棒を警戒するののかのように息を鎮めてしばし様子を見てみると、

「……来ないな」

「気のせいだったのでしょうか」

「こんばんは」

「ひいつ、出たっ!？」

「出たとはなんですか、人間きの悪い。……それよりも、伺いたいことがあるのですが」

シオンは妖狐姿。その後ろにいるレンは寝間着に一枚羽織っただけでなんとも眼福だったが、窓の外、月を背にして浮かばれるとむしろ「あ、死ぬのかな？」という気分になる。

「勘違いであれば申し訳ありません。ですが、もしなにかお心当たりがあるのであれば早めに申し出てください。でない、なにがどうなるか——」

「本当に申し訳ありませんでした」

三人は覗きの罪を負い、神殿前で半日土下座させられた。そのうえ彼は一週間にわたって目隠し生活、首からは「私は覗き魔です」という札を下げさせられた。

殺されなかったただけマシと言えばマシだし、刑期が開けたらみんな表面上は許してくれたが、

「レンたちが寛大で良かったわね。……私が決めていたらお前たち今頃、本気で後悔していたでしょうね」

女子の怒りというのは本当に恐ろしいと、あらためて思い知った三

人
だ
っ
た。
。

二年が経って

「……もう二年かあ。時間が経つのもって早いなあ」「なによ。二年なんてあつという間じゃない」

リビングのテーブルに頬杖をついて黄昏れていると、褐色肌のお姫様が横から抱きつくようにして身体を押し付けてきた。

片手を伸ばして髪を撫でてやると嬉しそうに目を細めて「んーっ」と声を上げる。なんとというか猫みたいな反応である。

「人間の二年は長いんだよ。寿命の四十分の一なんだから。エルフとかダークエルフで言うところ……何年くらいだろ？」

「難しいわね。私たちの場合、死の要因のほとんどは寿命以外だもの。人間に比べると個体数も少ないから一般論を語りづらいわ」

「そうなんだ」

「ええ。とりあえず、普通に暮らしてれば千年は生きるけど」

「桁が違う」

現代日本でも百歳はなかなかの高齢である。そう考えるとざっと十倍。当たり前前みたいに出てきたあたり実際はもっと差があるだろう。

「ってというか、人間の寿命が八十年？ 随分長生きするのね？」

「ダークエルフに言われると嫌味に聞こえるけど……考えてみると、わたしたちの世界でも昔はもっと平均寿命低かったんだよね」

「食事の質や病への対策が徹底していたのね。人間の知恵っていうのも馬鹿にはできないわ」

遠い目をしながら「最近の若い者は」みたいな顔をしたミーティアは素の表情に戻って「で？」と首を傾げた。

「例の話について考えていたのかしら。毎年、あなたたちの世界から二、三十人ほど転移してくる、とかいう」

「うん。鋭いね」

「話の流れから推測すれば簡単よ。そうでなくとも、惚れた相手のことくらい察せられなくてどうするのかしら」

変なところで素直じゃない癖に、平気でそういうことを口にしてく

るから困る。

顔が近いのもあってキスしたくなってしまうが、それを口に出すと会話どころじゃなくなるのは確定なのでレンは欲求を抑え込んだ。「ほら、また犠牲者が出るんだなあ、とか。早くダンジョンを攻略できれば新しい転移者も出なくて済むのかな、とか」

「あなたが気に病むことじゃないでしょう。文句なら三十年もかけて五十階ちよつとしか攻略できていない奴らに言うべきじゃない」「いや、まあ、うん」

なお、現在到達できている最下層は五十四階だそうだ。ろくに伸びていないのは敵が強いのもあるが、情報収集と五十五階攻略の準備のためである。

なのであまり文句は言えないものの、もつと頑張ってくれないと追いついてしまいそうである。

……と、前に賢者につい愚痴をこぼしたところ「君達のパーティと一緒にするな」と言われてしまった。

『君達でさえ二年かけて四十階に到達していないのだぞ？ 二年あれば恋もするし、結婚する者だっている。家庭を持ってはどうしても保守的にならざるを得ないし、子供が生まれれば世話に追われなければならない。攻略が鈍化するの当然だ』

『十八歳くらいで結婚とか昔みたいだね』

『今だって高卒者などは若年婚の傾向があると聞いたぞ。生活環境によって結婚年齢など変わって当然だ』

結婚を急がなくても全然大丈夫なうえに種族スキルが使えるレンたちは例外中の例外なのである。そして、だからこそ活躍を期待されている。

「で、おっさんから新人への挨拶を手伝ってくれ、とか頼まれちゃってさ」

「あら。あいつの後を継いで街のリーダーになるのかしら？」

「このままだと本気でやらされそうで怖い」

賢者の後継者問題は確かに重要だ。

下手な者にリーダーを任せるとダース単位で人死にが出かねない。

かといって数年ごとに町長選？ 市長選？ をするのも面倒である。いつそ寿命の長い者に任せて長老的なポジションになつてもらおう、というのは理に適っている。お前やれ、と言われている状況でなければ賛成するところだ。

「まあ、挨拶くらいなら引き受けるけどさ。うさくさいおっさん一人よりはマシかもしれないし」

「……そうやって甘やかすから頼られるんじゃないかしら？」

そんな気もしたが、こればかりは性分なのでどうしようもなかった。



賢者と話し合ったところ、レンの役割は転移者たちへの説得のサポートということになった。

基本的な説明は賢者が行い、難色を示されたり質問が多発した場合にレンが出ていく。また悪魔だとか言われる懸念はあったものの、見た目のインパクトは抜群のためとりあえずみんな黙つてくれるだろう。そのうえで歳が近い女の子が話せば少しは聞いてくれるはず。

結果的に、この目論見は良かった。

神殿の隅に設置した衝立に隠れ、いいところで登場すると一同（特に男子）の視線が釘付けになったし、レンの話もちやんと聞いてもらえた。

一番食いつきが良かったのはえっちなお店の話を出した時だった。

まあ、お陰で男子はこぞってダンジョン攻略を希望してくれたし、想い人がいるらしい女子数名も危機感を持ったのか「一緒に戦う」と表明してくれた。

「よくやったぞ、レン。これだけ新人がいれば去年の分は取り戻せるだろう」

賢者は大喜びである。

去年と言えば、今年の転移者はごく普通の公立・共学校からで女子

校だったり問題児ばっかりだったりもしなかった。初日から波乱の幕開けとはならなくて一安心である。

まあ、透視がどうか盛り上がっていた男子もいたが、悪さをする前から問題視するわけにもいかない。タクマたちのように物理的危険を生み出すわけではなさそうだし、怒るのはやらかしてからでもいいだろう。

(結果的に彼らは本当にやらかして土下座する羽目になるのだが、それはまた別のお話)

「レンってば後輩から大人気になっちゃったりして」

翌日の朝食の席でフーリにそんなことを言われた。

笑顔の彼女は特に気にしているようには見えない。いまさら知らない男子に言い寄られたくらいでレンがなびくとは思っていないのだ。

実際、もし告白されたら嬉しいとは思う反面、その告白を受けたいとは思わない。

「ここに引越してきて良かったよ、本当」

「無理に会いに来ようとすれば人の目が刺さりますものね」

頷いたシオンが「入り口にも聖域を張ればいいのですが」と続けて呟く。神社と水場に張っている聖域がレベルアップに伴い拡大してきているので、そろそろ一つにまとめられるかもしれない。一つ枠が空いたら入り口に設置するのも良さそうだ。

「二年で三十五階まで来られましたし、六年あれば百階まで行けるかもしれませんね!」

「アイリスさん。さすがにその計算は楽観的すぎます。せめて七年は見ましよう」

メイの見積もりもかなり甘い、これは自信の表れか。

「うん。ここからは慎重に行かないと。レベル上げの回数も増えるだろうしね」

「そんなこと言って、また強引に突破するつもりじゃないの?」

「慎重に準備して、強引に突破するんだよ」

クリアだけを最短で狙ったら案外六、七年で行けるかもしれない。

いや、レンたちだけで最下層に到達したらラスボス戦が絶対に地獄だ
が。

「あの、レンさん。山の件なんですけど、スケッチができたので見ても
らえませんか？」

「あ、うん。もちろん」

食事が終わりにさしかかったところでアイリスが思い出したよう
に言った。

川が完成してからはや数か月。山づくりは水面下で計画が進んで
いるものの、まだ具体的な段階には達していなかった。

レンたちもなんだかんだ忙しいので丸投げされても困るのである。
山一つ作るとなると川に比べてスケッチの量も膨大になるわけで。

「面白そうね。私にも見せなさいよ」

「……また何か文句をつける気なんですか？」

「失礼ね。出来が良ければ文句なんてつけないわ」

ミーティアも興味を示したので二人でスケッチを眺めることに。

リビングのテーブルに置いたそれを覗き込むと、

「綺麗だ。アイリス、また腕を上げたんじゃない？」

「そ、そうですか？　ありがとうございます」

描かれていた山の絵は相変わらず繊細なタッチで、できる限り写実
的になるよう意識されていた。これなら欠片を使用する際にそのま
まいメージとして使えそうだ。森が好きなアイリスだけに緑も豊か
で、きのこや木の実なんかもたくさん獲れそうである。

レンの賛辞に照れくさそうにしたアイリスはふと表情を引き締め
ると「どうですか……？」ともう一人の顔を見た。

ミーティアはさらにしばらく絵を眺め続けた後で「上手いじゃな
い」と笑った。

「想像以上だわ。あなた、絵の才能があるのかもね」

「……ありがとうございます。まさか本当に褒めてもらえるなんて」

「だからそう言っていたじゃない。まあ、褒められるのは絵の腕だけ
だけれど」

「とらうと〜」

ふん、と、悪ぶったお姫様はどうということもなさそうに「山のデザインが甘いわ」と断言。

「自然ならではの無作為な地形が表現しきれしていない。それに、別の地方の山を複数、一部ずつ合わせたようなちぐはぐな感じが拭えないわ。本物の山を駆け回った経験があればこうはならないでしょう」「う。だ、だって私、山なんて本でしか見たことないので……!」「そうなんだよね。わたしだって似たようなものだよ」

この世界で生まれたアイリスはこの世界にあるものしか知らない。地球の知識は転移者の記憶から再現された本が頼りなので、どうしたって知識が偏る。ちぐはぐな地形は本に掲載された写真から全体像を想像するしかなく、やむなく色んな別の山の写真を参考にしたからだろう。

レンはテレビなどで山なんて何度も見たことがある。小学校の遠足でも登ったが、全体を把握できるほど駆け回ったわけではない。基本的にはテレビやゲームで遊ぶ方がメインの現代っ子である。

そんな二人を見たミーティアは「揃いも揃って駄目ね」と苦笑。アイリスがこれに頬を膨らませて、

「じゃあ、あなたはもうなんですか?」

「私はもちろん経験があるわ。これでもあなたたちよりはずっと長生きしているもの」

鉛筆を手に取り「便利な道具ね」と目を細めた彼女はさらさらと白紙の上で手を滑らせ、

「どうかしら?」

「……上手い」

「……悔しいけど、上手いです」

アイリスとはまた少し雰囲気が違う。描かれたのはラフスケッチだが、本気で描いたらおそらく写真のような精密画になるのだろう。言うだけあって自然な雰囲気もある。それを裏打ちしているのは豊かな記憶力と実際の経験か。

「昔の人って記憶力が良かったって言うけど本当なんだなあ」

「誰が昔の人よ!」

尻尾を掴まれそうになったので慌てて避けた。ごめん、と謝ったら頬をつねるだけで勘弁してくれたのでよしとする。

「アイリス。これ、ミーティアと合作にしたらどうかかな？」

「そうですね……。癪ですけど、そうできたらとても良いと思います」
山を知っていて絵が上手く、自然にこだわりのある人材なんてそうはいない。さすがのアイリスも「ダークエルフの協力なんて」とは言えないらしく、悔しそうにしながらもミーティアを認める。

実力を褒められた少女は嬉しいのか口元を綻ばせながら胸を張って、

「どうしてもって言うなら手伝ってあげてもいいけれど？」

「ミーティア、調子に乗らない。仲間なんだから手伝ってあげなよ」

「む。……レンがそう言うなら仕方ないわね」

こうして、ハーフェルフとダークエルフの強力タッグが結成された。

以後、ときどきアイリスの部屋から言い争うような声が聞こえるようになり、時には二人してアイリスの実家を訪ねていつてアイリスの母にまで協力を仰いだりするようになった。

これがきっかけで二人の関係が改善——したかというとなんか簡単には行かなかつたものの、馬が合わないなりに「やるじゃん」と認め合ったのか、以前よりも多少マシな感じにはなった。そもそも戦闘の際はむしろ息が合っている二人なのでそれで十分だろう。

これはまだ先の話だが、山を望む街の人の意見も取り入れつつ、二人のデザインした山の絵は年末までにはなんとか完成し、三年目の年末には見事、山に入ることができるようになった。

四十階攻略と新たな悩み

二年目の転移者からも女子グループがひとつ、レンたちの近所に住みたいと希望してきた。

同期の男子が覗き騒ぎをやらかしたことで警戒心が強まったらしい。

覗かれたのが他でもないレンたちなので、同様の手口——超能力による覗きには無力なのだが、街中（というか世界中）の人々に「スキルでエロいことをしました」と知られてしまった彼らが再度やらかすことはおそらくないだろう。

（万が一、再犯がバレたら「どんな罰を受けてもいい」と宣言しているようなものである。女子全員から袋叩きにされ、その結果命に支障が生じても文句は言えない）

毎年少しずつ人口は増えていて、六月の時点で千二百人を突破したらしい。

初めての召喚から三十二年。

ネイティブ世代同士の結婚・出産もそろそろ増えてくる頃である。ここからは人口の増加率がどんどん良くなっていきそうだ。

そうなると家もたくさんいるし、家を建てる土地も必要になる。世界の欠片の需要がまた高まってくるかもしれない。

「欠片のためにもダンジョン攻略を頑張らないとね」

レンたちは三十六階からの「オーガの山」を飛行作戦で攻略している。

飛んでいてもオーガの投擲攻撃には気をつけないといけないし、頂上に到達しても殲滅能力がある程度ないと登ってきたオーガたちから袋叩きに遭いかねない。意外とスリリングな攻略になってしまったものの、クリア階数自体は順調に増えた。

そして。

「いよいよ、次で四十階」

三十九階をクリアしたところで恒例の作戦会議を開いた。

情報についてはあらかじめみんなにも確認してもらっている。そ

んな中、まだまだ日本語練習中で攻略本が読めないミーティアが軽くワインなどを嗜みつつ尋ねてきた。

「三十五階同様の激しい戦いがあるのよね。……でも、今度の階は少し毛色が違うのでしょうか?」

「うん。今回は三十六階から三十九階までが屋外で、四十階がダンジョンなんだ」

位置づけとしては山の中に存在する広い洞窟ということになるらしい。

通路の広さはオーガが二体並べるくらい、ということ人間が通行するにはかなり広い。ただ、敵の脇をすり抜けて突っ切ったり上を飛んでいくのはほぼ不可能。

「厄介ね。接近戦を挑もうにも空間に限りがある中、リーチの違う得物で襲われるわけでしょう? 距離を離そうとしても移動できる範囲は少ないわけだし」

「マリアさんでも厄介、っていうか、マリアさんみたいなタイプじゃないと本当に大変なことになりそうだよね」

身のこなしに優れたマリアベルはまだマシなほう。耐えるタイプのメイにはかなりきつい。

「敵の数も多いのですよね。各個撃破できるのはありがたいですが、それだけに厳しい戦いを何度も何度も強いられることになります。肉体的疲労よりも精神的疲労が問題になるかと」

シオンの発言にアイリスが「じゃあ、やっぱり」と口を開いて、

「あの作戦で行くしかないでしょうか」

「うん。たぶん、それが一番かな」

この階なら前にも使った「あの作戦」が効果を発揮しそうだ。



「トンネル」

四十階のスタート地点は洞窟の入り口だった。

本来なら外と繋がっているはずの場所に階段がどん、と口を開けて

いるため、実際に外へは出られない。

ただ、ステージ的に「外」が用意されている可能性は高いのでは？ レンたちはその推測を基に通路へと穴を空けた。その穴を上へと伸ばしていつて洞窟の外、山の表面へと繋げると、

『出られたわね』

呼吸を我慢していたように大きく息を吐いたミーティアが表情を緩めてテレパシーで呟く。

『でも、こっちにもオーガがいるね』

出た先はこれまでのステージと同じような荒れた山。そこらにオーガが徘徊しているのも同様だ。洞窟が外と繋がっているのであれば当然と言えば当然なのだが、そんなところまで作りこまなくても良いのに、と言いたい。

ひとまず全員で大きく飛び上がって襲われるのを避け、

『やはり、目指すは頂上ですね』

『今回はそこにボスはいないけどね』

ボスがいないからこそ、頂上が一番腰を落ち着けやすい場所のはずだ。

案の定、そこに居座っているオーガはいない。これなら、と、レンたちは地上へ降り立つと魔法を全開。追ってきたオーガたちを迎え撃った。

しばらくしてあたりが静かになったところで休憩を取りつつ様子を見る。

『外から追加が出てくる様子はないか』

『繋がっているようで繋がっていないんでしょうか』

『相手側だけ出たり入ったりできるんじゃないや不公平じゃない。私はこれでいいと思うわ』

敵が来ないのならこちらから行くまで。

攻略本の地図を頼りに「この辺りかな？」とあたりをつけ、ボス部屋へと直接穴を空ける。二度ほど失敗した後、なんとかうまくいった。

最奥の部屋の入り口あたりにすとん、と降り立てば、二十体近い

オーガたちが侵入者に対して怒りの咆哮を上げた。

洞窟全体に響き渡るような大声。

『多すぎませんか、いくらなんでも』

『アイリスちゃん、ミーちゃん。他のところから増援が来ないように落とし穴掘れないかな?』

『やってみます!』

『いいけど、その間、奴らの相手は任せるわよ』

『うん。そっちはわたしとシオンでなんとかするよ』

素早くテレパシーでやり取りをしつつ動きだすレンたち。

「マジックアロー!」

「狐火!」

成長に応じて数が増える光の矢はついに最大数に達し、最大までブーストをかけた時の本数は二百本に至った。

九発×五連発の狐火と合わせれば目くらましとしても十二分。ついでに前の方にいたオーガへと痛烈な痛手を負わせることに成功する。

その間にフリーリは非実体化して物理攻撃への耐性を上げ、メイはメイスではなく腕の鉄球砲を使って狙撃を敢行した。

オーガたちは基本的に接近戦型だ。

通常のオーガに加えて強い個体のハイオーガ、戦いに長けたオーガウォーリア、さらに強力なグレートオーガ、最強にしてボス格であるオーガチャンピオンまですべて、優れた体躯を武器にしてくる。洞窟の中であり、投げる岩の落ちていないここでは手持ち武器を簡単には投げてこない。

近づかれるまでに牽制も兼ねて最大魔法を連発、一体でも多くの敵を葬ろうとして、

「早っ!」

敵の足の長さを馬鹿にしていた。

思った以上の速度で肉薄してくるオーガたち。悲鳴じみた声を上げたレンは再度マジックアローを放ちつつ、慌てて飛翔。

フリーリとメイが移動する時間を稼ぎつつ敵を攪乱する。

『駄目だ。これ、通路に逃げた方がいい』

『え？ 思いつきり落とし穴作っちゃったわよ？』

『その方がいいよ。敵には簡単に越えられない』

飛べないメイだけは他のメンバーで運び、落とし穴地帯と化した通路の上空から魔法を連発。

なんとかか四、五体までは葬るも、業を煮やしたオーガが手にした武器を振りかぶって、

『やばー！』

フリーリの風魔法とレンの土属性変換魔法をぶち当ててなんとか防ぐ。

『ちよつとレン！ いったん退却した方がいいんじゃない!?』

『うん。もう一回トンネルで外に出よう！』

大慌てで頂上まで戻ってくると、一行は安堵の息を吐いた。

『……きつい。HPが馬鹿みたいに高いからなかなか数が減らないし、こっちは一発ももらっただけで大ダメージだから』

『敵がここまで追ってこられないのが幸いですね。正攻法で戦っていたらどれだけ大変だったことか……』

これは簡単にはクリアできそうもない。

『こうして休憩している間に敵のHPは回復するのかしら?』

『回復魔法や再生能力でもない限りはそう簡単に回復しないはず。もちろん、多少の疲れは取れるんだろうけど』

レンたちはヒールなどで回復できるのでそのぶん有利だ。

『これ、あれかなあ。わたしとシオンで削っては戻ってくる、っていうのが一番いいかも』

『わたくしがレンさまを乗せて、ですね。それでしたら攻撃を受ける可能性も低そうです』

『大丈夫? それでもけつこう危険だと思うけど』

『フリーリたちはMPかなり使っちゃったはずだし、しばらく休んでて。他の方法が必要になったらまたお願いするから』

ボス部屋へ繋げて掘った穴は縦穴に近いため、自由落下の感覚で突っ込んでいける。

シオンに乗った状態で突入したレンはオーガチャンピオンと視線を合わせた。敵もレンたちももう一度来ることは予想していたのか。何体かが武器を投げようと構え始める。

「穴から出た瞬間を狙われなかったのは良かったけど……！」
「次に同じことをしたら狙われるかもしれないね……！」

シオンに空中を駆けてもらいつつ、何度か魔法をバラまいて再び撤退する。逃げる時は小さくなったシオンをレンが抱いて飛べば速い。「お帰りなさい。どうだった？」

『んー……倒せたのは五体くらいかな。やつとこれで半分になったと思う』

『敵が増えていないのは幸いでしたね。作っていただいた落とし穴が効いているようです』

加えて、突入はできてあと一回。

これは全員で行ってフルパワーで叩き潰すしかないかもしれない。出費は覚悟でフリーたちにMPポーションを飲んでもらい、十分に回復したうえで、

「トンネル」

念のためにもう一工夫。

さらに二本ほど穴を作り、どこから出てくるのかわからなくしたうえで突入。これが効いたのか、穴を抜けた瞬間になにかが飛んでくることはなく、

「マジックアロー！」

「狐火！」

「ウインドスラッシュ！」

数を減らしたオーガたちはフルメンバーでの魔法攻撃にさすがに耐えられなかった。

最後に残ったチャンピオンはメイに相手をしてもらいつつ他のメンバーで遠巻きに囲み、ランダムに攻撃を浴びせて翻弄した。

恨みがましそうにボスが消滅していった後、ほっとひと息ついたところ、部屋の外からなにやら大きな音。見れば落とし穴の向こう側、本来なら通り道で戦はずだったオーガたちが通路の落とし穴を埋

めようと土木作業を始めていた。

『やば。レン、早くここから撤退しよ!』

『うん。ドロップ品だけかき集めて——』

『石碑の文言があるんでしよう? 私が見て覚えるから文章に起こすのは後にしなさい!』

『ありがとうございます、ミーティアさん!』

大慌てで戦後処理を終え、出現した下り階段から神殿へと帰還。

戻ってこれたと思った瞬間にみんなして床に座り込んでしまった。

「さすがに今回はきつかった……」

今度こそ本気で、しばらく新しい階には行かないほうがいい、と思った。



「……それで? 今回はどんな報酬を得たのか教えてもらおうか」

「おっさん、さすがに慣れてきたね」

翌日、賢者の元へ報告へ向かうと、彼は「待ってました」と言うようにレンたちを出迎えてくれた。

慣れてきた、と言ってもその目は爛々と輝いており、部屋の掃除から始められてはたまらないとばかりに部屋の中もいつもより片付いている。

遠足前日の小学生のような有様であり、要するに慣れたのは「五の倍数ごとになにか新しいことが起きる」というジンクスについてであり、それを期待し喜ぶのはなにひとつ変わっていない。

それはそれとして、レンは彼に告げた。

「ようやく、アイリスとメイにクラスレベルが増えたよ。これで二人もほぼフルパワーだね」

「やはりか……!」

ぐっ、と拳を握って喜ぶ中年賢者。

がたん、と音を立てて椅子から立ち上がった彼は興奮を抑えきれないとはかりにそのあたりをうろろし始める。

嬉しいのはわかるが、ここまでのパターンからだいたい予想はしていただろうに。

「さすがに喜び過ぎだつてば」

「何を言う。これで戦力増強の目途が完全に立ったのだぞ!? 四十階まで到達すればネイティブ世代も我々と同等の戦力となるのだ!」

「それはそうだけど、四十階攻略がきつすぎだよ」

あれは生半可な実力でクリアできるところではない。

ベテランが引率するにしても正攻法では難儀するだろうし、レンたちがやった攻略法はメンバーのほとんどが飛べる前提だ。

「それに、四十階まで来てやっとわたしたちと同じって、子供たちに厳しすぎじゃないかな?」

「いや。それは仕方なからう。異種族で固めたパーティの強さは君達の活躍でよくわかった。これまでは転生アイテムに限りがあったし、戦力増強のためとはいえ人を辞めることに忌避感がある者も多かった。しかし、祝福さえ受けられるのであれば異種族を増やす方法は他にもある」

「それって、もしかして」

前々からの賢者の言動を思い出したレンは「うわあ」という顔になって、

「そう、異種族の子供だ。彼らは強力な戦力になる。ダンジョンをクリアすれば強くなれるとわかれば挑戦する者も増えるかもしれない。……これは、子育て支援的な援助を検討するべきかもしれない」

異種族の血が入った子供を作るとお金がもらえる的なプランらしい。

レンたちのように両方が異種族の場合は二倍もらえるのだろうか……って、そうではなく。

「前にアイリスの妹たちには強制しない、とか言つてなかったけ?」

「強制はしないさ。しかし事情が変わった。拝み倒して検討してもらう価値は十分にある」

「ああ言えばこう言うなあ、本当」

「仕方なからう。君達だって激化する難易度の恐ろしさを味わったは

ずだ。すぐにクリアできないのであれば次善の策を練っておかなければならない」

「……確かに、ね」

四十階の戦いを終えてみて、レンは脳内の攻略プランを大幅に修正しなければならなかった。

なんならこのまま百階（仮）まで戦い続けるのではなく、先に子育てした方がいいかもしれないとすら思った。

二年。

長いようで短かったが、ここからさらに十年先を見据えるのであれば、決断が必要な時なのかもしれない。

目標の決定

湖の淵に腰かけて足を下ろす。

冷たい湖の水に足首のあたりまでが浸かつて心地いい。シオンが子狐の姿で膝に乗ってきたので軽く撫でてやりながらひなたぼっこをする。

「レンは念願の水着姿である。」

しかも黒の露出多めなタイプ。ある意味、男の頃から憧れだった。こんな水着、スタイルに自信がないととても着けられない。せつかくスキルで体型を安定させられるようになったのだから着ないと損だった。

男子だった頃にはまさか自分が着ることになるとは思わなかったが。

「背中の翼もこういう時には難儀なものね」

「ミーティア」

褐色肌の美少女が肌を着衣を濡らした状態で近づいてくる。

ファンタジー世界の住人であった彼女の「水浴びは裸でもの」らしいのだが、同時に「姫の裸はみだりに晒すものではない」ということで浴衣のような薄い衣を纏っている。

当然、濡れた布地は肌に張り付いて見事なボディラインを強調、さらにはうつつすら透けてある意味「裸よりもエロい」光景になってしまっているが、まあ、例によって今、この湖には女子しかいないので問題はない。

「そっちは楽しんでるみたいだね」

「ええ。入浴もいいけれど、やっぱり水浴びは格別ね。この水は綺麗だから猶更だわ」

言つてその場にしゃがみ、手のひらでお椀をつくる彼女。しばしそれを見つめた後「ちよつと悪戯してやろうかしら」とでも考えたのかレンたちを見てくる。敏感に察したシオンが「やめてください」と視線で訴えると、しぶしぶ水を湖に落とした。

と、ミーティアの褐色肌へ対照的な白さを誇る細い腕が巻き付く。

後ろから抱きついたフリーはお姫様へと胸を押し付けながらレノたちに微笑みかけて、

「湖、みんなで来られて良かったねー」

「そうだね」

オーガとの戦いに明け暮れている間に季節はあつという間に春から夏へ。八月に入って本格的に暑くなってきたのを受け、レンたちは湖へと泳ぎに来ていた。

周りには同様に水に浸かりにきた女子のグループがいくつもあつた。山の方は今年中にできそうな勢いだが、いまだ海の方は目途すら立っていない状況。水で遊べるのはこと川くらいなので大人気だ。

「海ね。そっちはさすがに私も見たことないのよね」

「あ、そうなんだ?」

「ええ。だって海の近くは緑が少ないでしょう?」

「あー」

すぐ近くに森があるようなところも皆無ではなかったような気がするが、確かにあんまり記憶にない。おそらく、一部を除いた樹木は塩に弱いのだろう。そうなると森に住む種族であるエルフやダークエルフにとって無理に行く場所ではないのか。

「海エルフとかいないのかな?」

「海はマーメイドやシーマンなんかのテリトリーね。さすがの水の精霊魔法じゃ奴らには敵わないんじゃないかしら」

「さすがファンタジー、いろいろいるなあ」

そのうちこの世界にも人魚系の種族が現れるのだろうか。

「下半身が魚になってしまうと生活が大変そうですね……。わたくしはまだ地面を歩くことはできましたが、それもままならないわけですから」

「確かに。水がないところじゃ長時間生きられそうにないか。普通の家じゃお風呂を占領してもらうしかないね」

それこそこの湖か、あるいは神社傍の水場にでも住んでもらうしかない。その間に専用の池かなにかを作って移動してもらおう感じか。

「服も水着じゃないと着られなさそう」

「慣れたら裸でも気にならなくなるんじゃない？ シオンちゃんも狐の時は服とか欲しがってないし」

「そうですね。あまり裸に慣れ過ぎると人間に戻った後に難儀しそうですけど……」

人間に戻った後。

悩みを思い出したレンは思わず遠い目をしてしまった。フリーにミーティア、シオンまでもが「あー」という顔をして、

「……本当、どうしようね」

「そうね。私としてはあなたたちは悩み過ぎだと思うけれど。十年や二十年かかったところでそれが何？ とは言えないんでしょうね、人間の場合」

「うん」

今、レンたちは「このまま突き進む」か「いったん長めの準備期間を置く」かという選択に迫られている。

準備期間は長めも長め、妊娠・子育ても視野に入れるのだから少なくとも年単位だ。もちろんその間もダンジョンへまったく潜らないわけではなく、手の空いている二、三名でレベル上げがてら資金調達には向かうことになる。そうやっていけば自然とレベルも上がるといふ計算なのだが。

当然、攻略にかかる時間は増える。

——初期転移者たちの寿命、というタイムリミットが気になるところだ。

このまま突き進むのはかなりリスクが高い。

少なくともレベル上げは必要だろう。ある程度安全に突破できるようにするためには今まで以上に経験を積む必要がある。

なるべく時間をかけず、となると「週二回」だった探索をもっと増やさなければならぬ。極端な話、週七まで増やせばレベルアップのペースは三倍以上だ。

もちろん、そんなことをすれば心にも身体にも大きな負担がかかる。

ただ、異種族パーティであるレンたちならやってやれないことはな

い。

「さすがに無茶よ。できないことをやろうとするのは愚かだわ」

「さすがに毎日ダンジョンに行く気はないよ。でも、ここに腰を据えるつもりで行くかどうかは本当に考えたほうがいい」

今までだって考えていなかったわけではない。

ただ、わりと順調に攻略できていたので「このまま一気にいけるんじゃないか」という思いがあった。それが四十階の戦いによって「普通に攻略してもあと十年かかるんじゃないか」という思いに変わってしまったのだ。

先を見据え続け、レベル上げと綱渡りを繰り返して十年はさすがに辛い。

ミーティアがわざと聞こえるようにため息をついて、

「どうしてあなたたちがそこまで頑張るの？ 別にできる範囲でやればいいじゃない」

「人間だからだよ。ここで諦めたら、日本に帰れない人がぐっと増えるかもしれない。新しく召喚されてくる人も」

ダンジョンの難易度はどんどん上がる。

賢者の言っていたような大海戦術を取らないのであれば、強力な個の力で突破するしかない。そして、おそらくそれができるのはレンたちだ。

英雄めいたパーティが他に出てきてくれれば任せてもいいのだが。

レンたちが街の人たちから期待視されまくっているのを見る限り、そう簡単には行きそうにない。来年以降の転移者に賭けるといってはあまりにも無責任すぎる。

「ちゃんと目指し続けないと、どうでも良くなっちゃう気もするんだ」今のレンたちには長い寿命がある。

普通にしていれば人間よりもずっと長く生きられる。おまけにレンに関しては人間だった時から大きく姿が変わってしまったている。

今から男に戻ったとして喜べるか、普通に生活できるかというところが怪しい。これがさらに数年経ってしまえばおそらく「ダンジョンはクリアしたいけど人間に戻りたくはない」という気持ちに変わるだ

ろう。

そうだったら日本に帰る理由がない。

「……まあねー。帰れなかったら帰れないで別にいいかな、っていうのはあるよね」

フリーが目を細めて空を見上げる。木漏れ日が眩しい。

「そりゃ、お父さんやお母さん、友達には会いたいけど。みんなが高校生とか社会人になっていいる中、私たちだけ高校中退。……だったらいつそ、戻れないなら戻れないで諦めちゃった方が楽じゃない？　って思ったりする」

若者故の感覚かもしれない。あるいは、これも異種族になったせいだ。

街の人の多くは「帰れるなら帰りたい」と言っている。年月によって故郷への想いが強くなっているのかもしれない。

誰だって死を意識したら心残りを晴らしたくなる。

「なら、それでも戦おうとするのはどうしてよ」

「アイリスのため、でしょう？」

答える声は背後から聞こえた。

振り返ると、そこにはよく似た二人の少女——もとい、少女と女性が入っていた。共に金髪碧眼でよく似た顔立ちながら、女性の方は少女よりもはつきりと耳が尖っている。

アイリス、そしてアイリスの母親だ。

少女の方はどこかしゅんとしており、親に叱られた子供のようだ。

アイリスの母は微笑んで、

「アイリスから聞きました。レンさんたちが今後の身の振り方で悩んでいる、と」

「……はい」

レンたちとしても少々決まりが悪い。指摘された通り、ダンジョンを攻略したい一番の理由はアイリスのため。それをさらに突き詰めるとアイリスの両親——特に父親のためになる。

エルフとしては若い、それでもレンたちよりはずっと長く生きている女性は全てわかっていいるという風に頷いて、

「私たちのことはお気になさらず。皆さんは皆さんのしたいようにしてください。これは私だけでなく、夫も同じ意見です」

「でも、それは」

彼女はともかく、アイリスの父はもう二度と日本に帰れないかもしれない。

当人たちにレンたちの想いが知られば「そこまで頑張らなくていい」と言われるのはある意味当然だ。レンだって立場が逆ならおそらくそう言う。自分たちのために他の誰かがそこまで頑張るなんておかしいと思う。

ただ、だからといって諦められないのも事実。

しかし、

「レンさんたちだけが背負うことではありません」

アイリスの母は少しだけ語気を強めてきっぱりと言った。

「アイリスにもそう言いました。もちろん気持ちは嬉しいですが、それはアイリスやレンさんたちが私たちのことを思ってくれていること自体に対してです。みなさんが無理をしてまでダンジョンを攻略しようとすることは望んでいません」

「お母さん」

「もちろん、日本に帰れば嬉しいでしょう。ですが、そのために誰かが辛い思いをしたり怪我をしたり、亡くなったりすれば、ただ喜ぶだけというわけにはいかないでしょう?」

同じようなことを諭されたのだろう。アイリスも強くなにかを言うことはできないでいる。アイリスの母が言ったことは正論だ。

先にタイムリミットが来る側からの意見だからこそ重みもある。

「そもそも、どうしても帰りたいと言うのならその当人が身体を張るべきでしょう。……いざとなれば私にもその覚悟があります」

「あら、戦うの? たかだか三、四十年しか生きていないエルフの癖に」

「必要とあらば。私も元は人間ですからね」

年齢で言えばミーティアのほうが上なのだろうが、大人なのはアイリスの母のほうだった。親だから、というのもあるだろうし、人間は

精神的に成熟するスピードが速いからというのもあるだろう。

彼女は少し悪戯っぽく微笑んで、

「娘たちももう全員、手がかからなくなりました。下の子たちもダンジョンに興味を示しているようですし、いつそのこと母娘三人で挑戦しましょうか」

「それは……あのおっさんが大喜びしそうですけど」

「賢者様は放っておいて構いません。大事なのは、レンさんたちに『他人に期待してもいいのだ』と知っていただくことです」

今なお攻略を続けている先達もいる。

後輩たちだっただけそれぞれに頑張っている。その中にはレンたちの存在によってダンジョンに潜り始めた者も交ざっている。

レンたちだけが頑張る必要はない。

「それを踏まえて考えてみてください。……アイリスが我が儘を言うようならもう一度叱りますので、遠慮なく言ってくださいね」

「……ありがとうございます」

家に帰った後、アイリスは「すみませんでした」とぼつりと言った。「私もどうしていいかわからなくなっちゃって。レンさんたちに不満があったわけじゃないんです」

「ありがとう、アイリス。大丈夫だから落ち着いて」

今にも泣きそうな少女をなだめ、リビングに落ち着く。

ちなみにメイは川のほうで石を食べていた。合流した彼女は「ご主人様の判断に委ねます」と一言である。嫌なことは嫌だと言う子なのでこれは本心だろう。信頼されている、ということなのかもしれない。

しばらくして落ち着いたアイリスは「もう大丈夫です」と言って、「お母さんに叱られちゃいました。……お父さんを日本に帰したいのは変わりませんが、無茶をしてまで頑張るのは止めようと思います」

「そうだね。わたしもそれがいいと思う」

頷いて答えると、フリーが「それって、つまりどういうこと？」と首を傾げた。

「お休みするの？ それとも続けるの？」

「ん……もうしばらく続けてみない？ もちろんレベル上げは挟むけど、ダンジョンに行くのは今まで通り週二回。十分に強くなってから挑戦して、五十階までクリアしてからまた考えよう」

判断を先延ばしにしたいだけ、とも言える。

ただ、五十階まで到達できればキリがいいのも事実だ。若手がそこまで到達した、という事実が残れば後続も出てくるかもしれない。しばらく休むにせよ、再開する時に「あと半分だ！」と思うのと「あと半分以上あるのか……」と思うのでは気分も違うだろう。

仲間たちも反対はしなかった。

「いいんじゃない？ 力を蓄えながら、と言うのであれば反対する理由はないわ」

「だね。ぶつちやけ、いきなり子育てしろって言われても『まだ早くない？』って思っちゃう感じだし」

「わたくしも賛成です。休む前に行けるところまで行っておきましょう」

「誰にも破れない五十階到達記録を打ち立てておきましょう。そうすれば当分の間ドヤ顔できます」

「ありがとうございます、レンさん。私もたくさん頑張りますね……！」

こうして、レンたちは目標を「五十階攻略」に定めた。

ネイティブ世代がクラスレベルを得た今、果たしてそこではなにが得られるのだろうか。

五十階攻略に向けて

『神器』に大量の硬貨を投入して開始ボタンを押す。

すると、神器の上部、平らになった部分に一つのアイテムが現れ、代わりに輝く文字で表示された残り金額が減少する。

「……うん、ガチャをやってる気分」

「これは精神上よくありませんね。射幸心を煽るにも程があります」

レンと一緒にあれば入室を許されているシオンが子狐の姿でレンの頭に座りつつ息を吐いた。

「やはり、他の方から購入する方が良いのでは？」

「かな、やっぱり」

今日は神器を使ったマジックアイテム生成に挑戦しようとしてやってきた。

フーリの転生石を買うのに使ったお金は既に稼ぎ終え、またお金が余るようになってきていたため、今度は装備を良くしようと思ったのだ。

余裕があれば一度やってみたかったのがこのランダム生成。

一定額を消費することで効果も形状もバラバラのマジックアイテムを生み出すというまさに博打なのだが、これを用いることでしか手に入らないアイテムもある。うまくすれば街の付与魔法使いでは到達できないような性能の品を安く手に入れられるのだが、言うまでもなく結果は運次第。

「わたしたちだとその場で鑑定もできないしね」

要らないアイテムが出たら別の神器に突っ込んでお金に替えることができるのだが、レンもシオンも鑑定スキルを持っていない。

フーリが一応持っているものの中には入れないし、盗賊としての最低限であって商人系の本格的なスキルには劣っている。

生成物を持って鑑定してもらいに行つて、また戻ってきて換金、はちよつと面倒くさい。

「結果的に割高になってしまいかもしれませんが、出来合いの品を購入する、あるいはオーダーメイドを行う方が安心確実です」

「さすが、シオンはしっかりしてるなあ」

レンは残った金額を再び硬貨として取り出すと、生成したアイテムと一緒にストレージに入れた。

ちなみに出てきたのは鍋つかみトシのようななにか。高レベルの打撃力強化でも付与されていたらメイに使ってもらうが、まあ普通に考えてありえない。いちおうフリーに鑑定してもらって家で使うか売り払うか、あるいは神器で換金するか。

「全員分をオーダーメイドするならまだまだお金を貯めないとなあ」
「先は長いですね」

五十階攻略に向けた準備はなかなか大変そうである。



五十階までは攻略する。

そう決めたレンたちは四十一階以降の探索をひとまず後回しにしてレベル上げや資金調達に精を出すことにした。

基本は二十五階でアラム戦法だが、そればかりだと飽きてくるので他の階のマップ作製やまだ見つからない仕様がないかの調査をしたり、菓子職人に頼まれてカカオの収集などもしている。

第一はもちろんレベルアップ。

ただ、資金調達も重要だし、後続が攻略しやすくなるようにするのも必要なことだ。街の資源が豊かになればそれだけみんなの生活も潤う。結局のところすべてのことがなにかしら今後に繋がっていくのである。

かつてはラスボス戦だと思われていた五十階の戦いは厳しい。

難関へ挑むにあたって先人たちはどんな準備をしたのか。賢者やアイリスの母から紹介してもらって何人かに話を聞いたりもした。

人間種族はスキル数でゴリ押すことができないため、基本は「レベルを上げて基礎スペックでゴリ押す」か「人海戦術で敵に対抗する」かの二択、というか両方を並行して試みていたらしい。

山などの広いフィールドなら二パーティ以上での合同攻略もしや

すしい、四十階のような長いダンジョンでは複数パーティが交代で敵を食い止めては残りが休む、などといったこともできる。

単純に時間をかけて準備すればそれだけレベルも上がる（人間はステータスに補正がかかるためかなり重要）し、ポーション類を大量に準備しておけば出し惜しみせず火力を發揮できる。

ボス戦でまで収入を気にしていたレンたちが異常というか、下手したら様子見や調査の段階から大赤字が前提、それを補填するために何度もダンジョンへ潜ってお金を稼いで、を繰り返すのがデフォルトらしい。

それはなかなか先へ進めないわけである。

もちろん、レンたちとしても他人事ではない。ここからはさすがに先人たちを見習っていかなければならない。

レンたちの場合、他のパーティと組もうとするといろいろ不都合もある（レンがいるだけで男性陣を誘惑してしまうとか、ミーティアと言葉が通じないとか）ので共闘路線は保留にするにせよ、レベルアップと消耗品の充実、それから装備のバージョンアップは必要だった。一線級の武器や防具は本当に強力らしいので、そういうのを一つでも手に入れられれば世界ががらっと変わる。

「わたしたちは使う武器が偏ってるけど、メイならだいたいなんでも使えるよね」

「お任せください。特定の武器が必要なスキルは今のところ保留にしてあります」

メイは怪力を乗せやすく扱いに技術が要らないという意味でメイスを愛用しているものの、別に鈍器しか使えないわけではない。

クラスレベルが解放されたことで、スキルを習得すれば技術を補えるようになったため、剣や槍、斧などに持ちかえるのもアリになった。

他のメンバーは武器なし（レン、シオン）、短剣（フリー）、短剣に加えて弓（アイリス、ミーティア）と得意武器が決まっているため、なにかしら掘り出し物の武器が手に入ったらメイに使ってもらえばいい。剣使いとかだと新しい武器も剣になってしまうのでこのあたりは利点だ。

「そういえば、メイのクラスってなんなんだっけ？」
「戦士です」

ド直球だった。

「私は基本『まっすぐ行ってぶっ飛ばす』しかしていませんでしたので、他のクラスになりようがありませんでした。まあ、母が『兵器使い』などという物騒なクラスを持っていますので、いずれ転職を頼んでも良いかもしれませんね」

戦士のスキルをひととおり取ってからでも遅くはない。

メイの母の「兵器使い」とやらは兵器がないと力を発揮しない。その兵器はゴーレムのスキルで作成するしかなく、運用も基本的にゴーレムでないとできない。種族レベルの解放が比較的最近のメイだとまだ活用しきれないし、兵器の種類によっては戦士の戦い方も役に立つ。

「ミーちゃんは戦法も装備も固まってるから楽でいいよねー」

「ええ。生半可な品じゃ今の装備の足元にも及ばないし、特に困ってもないわ。私は精霊魔法と弓の修行を重視するべきでしょうね」

既に長年修行してきているのでそうそう劇的な変化はないだろうが、幸い近くにアイリスの母がいる。彼女に教わったり対抗する相手として意識することですらなるパワーアップが狙えそうだ。

「私は弓の技をさらに磨けるようになったので、魔法を使わなくても威力を出せるようになりたいです」

アイリスのクラスは弓使い。

連射や長距離射撃などをサポートしてくれるので今まで以上の活躍が期待できる。

「アイリスとミーティアのために上質な矢も準備しておきたいね」

「そうですね。消耗品なので申し訳ないんですけど……」

「ポーションは買うんだし、矢だって同じだよ」

普段は普通の矢を使い、いざという場面では高い矢を使えばいい。

レベル上げや資金調達で行く階の敵相手なら精霊魔法だけでも戦えるため、節約した分の費用を矢のグレードアップに使う、という考え方でもいい。

「レンさまとフリーさまはどうなさいますか？」

「うーん、わたしは魔法の威力を上げようとする装飾品系になっちゃうからなあ。かなり高くつくし、防御系の装備優先かな」

「私も無理に装備更新しなくてもいいんだよね。精霊になってれば防御力上がるし。その状態だと短剣も使えないし」

「あなたたちは本当になんというか……チート、と言うんだっかしら？」

レンは常時MPポーションを使用しているようなものだし、フリーはスキルを充実させることで物理攻撃をほぼ無効化できる。

ただ、お金がかからないという点ではある意味さらなる上手がいて、

「わたくしも防御用のアイテムがあれば、といった程度でしょうか……。妖狐の姿の方が便利ですし、この身体ですと大抵の装備ができませんので」

子狐モードなら敵の攻撃もそうそう当たらない。

誰かに抱いてもらったり頭の上に陣取ったり、空中を足場にして狐火を連発するシオンも負けず劣らずの強者である。

なんとというか、思ったよりも必要な装備は限られそうだな。もちろん、できる限り集めていくつもりではあるものの、

「じゃ、最優先はメイちゃんの武器ってことでもいいかな？」
「異議なし」

マジックアイテムを手に入れるにはガチャ（神器）以外だと市場をこまめにチェックするかオーダーメイドするくらいしかない。

レンたちの防御系装飾アイテムについては付与魔法使いに頼むとして、メイの武器はそれ専用の積み立てをしつつ掘り出し物が出てくるのを待つことにした。



アイリスの母はあの後、本当に二人の娘たちを連れてダンジョンに潜り始めたらしい。

女子ばかりとはいえアイリスの母は経験者。その彼女から教えを受けていたアイリスがあれだけの腕だったのだから、妹たちだって十分強いに決まっている。

ゴブリン程度なら一蹴できる程度の強さはあるので、娘たちにダンジョンの心得を教えながらゆつくりと進むつもりだという。

「お陰で最近、家に誰もいない日が増えて寂しいんだ」

とは、木こりであるアイリスの父親の談。

彼には木を切り、森の資源を管理するという重要な役割がある。自分もダンジョンへ行く、などとは言えないし、なによりそこまで無理のきく年齢でもない。

妻や娘たちの手伝いが減ったこともあって仕事に精を出すしかないのだが、愚痴を言うのはさすがに我慢できないらしい。

「だからアイリスやシオンちゃんを連れてもつと遊びに来て欲しい。アイリスやシオンちゃんを連れて」

冗談めかして「わたしじゃだめですか？」と尋ねると真面目な顔で「君と二人きりだと間違いが起きるかもしれないから」と言われた。

「わたしの魅力、そんなに強いですか？」

「スキルの問題なのかどうか……。そもそも、君自身があまりにも魅力的すぎる」

「そこまでですか」

あらためて自分の身体を見下ろしながら無意識に胸を抱きしめるようにすると「そういうところだよ」と言われた。

アイリスの父を元気づけるためにクリアを目指しているのに一人ぼっちで寂しがらせるのも本末転倒だし、森の管理が滞っても困るので、レンは言われた通り暇な日にはなるべく森へ通うようにした。

半々くらいの確率でミーティアもついてくるし、フーリも転生してから自然が恋しくなるようになったらしくちよくちよくついてきてくれる。

シオンやアイリスが来るようになるるとアイリスの妹たちはそれ目当てで家にいる時間が増え、結果、アイリスの父の寂しさ解消はうまく達成された。

「レンさん、そのうち追いつきますから楽しみにしててくださいね?」「お姉ちゃんたちと冒険するの楽しみです!」

それはそれとして妹たちはダンジョン攻略もやる気満々である。アイリスに比べると樂觀的な感じなのが気になるが、逆に言うところくらい気負わない方がマイペースに進められていいかもしれない。母親が一緒なら無理しすぎることもないだろうし、いつか追いついてきてくれたらそれはそれで嬉しい。

「妹といえば、私の妹もダンジョンへ挑戦することにしたようです」
アイリスの実家へ通うようになってしばらく、メイがそんなことを報告してきた。

メイの母は定期的に子供を作っており、メイの下にも何人か妹がいる。レンはなんだかんだまだ会ったことはないのだが、ゴーレムは肉体的にも精神的にも特殊なため、メイを見ていれば「だいたいこんな感じなんだろうな」と思える。

精神的な成熟も早いだろうから若くしてダンジョンへ挑戦するのでもそれほど不思議ではなかった。

「へえ。誰か一緒に行ってくれるパーティ見つけたのかな」

「いえ。どうしようかと相談されました、どうしようかと思っているところですよ」

「そっか。わたしたちが付き合ってもいいけど、ずっとっていうのは難しいかもしれないなあ……」

「いつそのことアイリスの妹たちと組んでもらうのがいいかもしれない。」

「なんだか賢者の思惑通りに進んでいる気がして若干癪ではあったものの、レンはメイの妹とアイリスの妹たちを引き合わせることにした。」

初めて会うメイ以外のゴーレムはと言うと、

「初めまして、レン様。姉様がいつもお世話になっております」

メイと同じ銀髪をした可憐な少女は丁寧な挨拶と共にお辞儀をし、にっこり微笑む代わりに軽く目を細めて親愛を示してみせてくれた。「姉様がご迷惑をおかけしてはいないでしょうか。たまに帰っていら

しても自分の武勇伝を語るばかりで半信半疑だったのですが」

「メイ？　なんだかものすごくまともな子なんだけど、別のところの子だったりしない？」

「失礼な。ご主人様は私をなんだと思っているのですか」

ちよつとお茶目な天然系メイドゴーレムである。

むむむ、と視線を交わしあう二人を見たメイの妹はくすりと笑って、

「仲がよろしいのですね。……レン様のような素敵なお主人様を私もいつか見つけたいものです」

ゴーレム全員が無表情系毒舌娘ではないことが期せずして発覚した。

五十階攻略に向けて 2

「お姉様は効率主義ですからね。お母様の変なところばかり真似てしまったのでしよう」

言い方は悪いが、メイの妹の話は面白かった。

今まで知らなかったメイのことを聞くことができたからだ。

「む。……」主人様、騙されなくてください。この子の振る舞いもある種の処世術です。『男性は徹底的に甘やかせば簡単に落ちる』が口癖なのですから」

「え」

「まあ、お姉様。相手の希望を叶えるだけでは思考停止、自分でなにも生み出していないも同じではありませんか。快適な生活環境とは男性を操縦して意図的に手に入れるものです」

話を聞く過程で妹のほうもなかなかいい性格をしていることが発覚したが。

要するにこの姉妹は共に人間的な感覚には疎いのだ。生まれた時からゴーレムなのでそこは仕方ないし、性質上、主を求めるのも当然ではある。

ただ、主人の求め方というか主人への尽くし方がなかなか極端だ。

姉は主人には絶対服従（その方が楽だし）という方針であり、妹は主人には甲斐甲斐しく世話を焼くべし（そうすればうまく誘導できる）という思想。参考資料とした本が姉妹で違ったのかもしれない。

一応、一般的には妹の方が付き合いやすいのだろうが。

メイの言動に慣れてしまっているレンとしてはどちらもなかなかユニークで可愛いと思う。

「レン様もそう思われませんか？ 男性の欲をコントロールせず、生のまま受けていては身体がいくつあっても足りないでしよう？」

「え？ うーん、わたしは受け身も好きだから難しいかなあ」

そもそも男とどうこうなろうとは思っていないのだが、まあそこはこの際置いておく。

「私には肉体的快樂というものが理解できないので、受け身に回って

しまうと『待ち時間』と大差ないのですが……そうですね。男性が必死に頑張っている姿を冷静に観察しながら『応援』したり『激励』するものもなかなか趣深いものがあるかもしれない」

「あ、わかった。二人って性格ってどうか性癖が違うんだ」

メイはどつちかというM、妹の方はDSだ。

やっぱり彼女たちゴーレムにもなかなかサキュバス感がある。生身のレンと違って無限に近い体力があるので本当に相手を翻弄できそうだから困る。

「ふむ。……レン様とはお話していて楽しいです。いつそのこと姉様と一緒に可愛がっていたたく、というのもアリでしょうか？ レン様でしたら生命力にも余裕がありますよね？」

「うん。そこに困ったことは今のところないけど……そうやって受け入れてるとアイリスのところの二人も真似しちゃいそう」

「おや。そうなるかと十人を目指せそうですね。良かったですねご主人様。……いえ、この子には別の主を探して欲しいのですが」

「ひどいでお姉様、私を除け者にするなんて。ではレン様、考えるだけでも良いので、よろしくお願いいたしますね？」

ダンジョン攻略に参加するようになれば自分の食い扶持を自分で稼げるので「今すぐご主人様を探さないといけない」ということもない。

アイリス一家の家にも引越してくればアイリス父としても働き手が一人増えて大助かりだろう。ダンジョンへはレンたちの住宅地にあるポータルから行けばいい。

「あの子が変な影響を与えなければいいのですが」

「大丈夫じゃない？ 普通にしていれば礼儀正しい子みたいだし」

エルフにハーフェルフ二人にゴーレム一人。

後衛に偏っていることを除けばかなり強力なパーティが誕生した。これはそのうち本当に追いつかれるかもしれない。

そうなってくれたらレンたちとしても安心だ。

是非、こうしたパーティにどんどん出てきて欲しい。



「お前ら先に進み過ぎ。どんな魔法使ったんだってレベルだぞ。俺達が追いつけないだろうが」

付き合いの多い友人パーティからはある日そんな文句を言われた。気心の知れた相手同士だからこそ言える冗談&文句である。

「あはは。まあ、そのせいで足踏みしてるけどね。そっちは？」

「三十三階までは攻略したけど、だいぶきつかったからな。今はあいつらの指導をしながら鍛え直し中だ」

「うちのメイン魔法は火だっただろ？ それもあっているいろいろ考え直しなんだよ。ゲームなら森でファイアーボール撃つてもなんともないのにな」

森の木が燃えるから魔法使いがファイアーボールを撃てない。戦力大幅ダウンという罠である。森は三十五階でいったん終わりとはいえ、特定属性の魔法だけだと詰みやすいという教訓にはなる。同じようなことを起こさないためにも別の攻撃手段を持つておくのはいいことだ。

「シヨウたちの方は？」

「敵がゴブリンからオークに変わったらだいぶ苦戦してるな。特に前衛のシヨウに負担がかかっている。あいつらはレベル上げもできないから筋トレとか素振りして身体づくりからだな」

「そっか。育ち盛りだもんね。今のうちに運動しておかないと」

後輩の少年たちとはたまに街で挨拶する。見かける度に身長が伸びていて「子供は凄いなあ」と年寄りのような感想を抱いたりもしていた。本当は二人を連れて飲みに行ったりとかしたいのだが、二人の彼女でありパーティメンバーでもある少女たちに悪いのでなかなか踏み切れていなかった。

せめてシヨウたちが初恋を忘れてくれればいいのだが、今のところレンに会うたびわりと鼻の下が伸びている。

だんだん遅しくなってきたとはいえ可愛かった頃を知っているので彼らの想い自体は嬉しいのだが、酔ったところを襲われるのは

勘弁である。

(なお、レンは酔っても言動に影響しづらい体質なので、酔って理性のなくなった少年二人の相手を素面ですることになる。それはそれでたぶんキツイ)

「わたしたちが攻略手伝おうか？ こっちもレベル上げ中だから暇と言えれば暇だし」

「あー。本格的に攻略しにかかる時は頼むかも。でも普段は一緒には行かない」

「女子だけ連れて行ってもらならアリかもだけど……いや、やつぱ無いか。あいつらをお前に取られかねないもんな」

「うわ。わたしをなんだと思ってるの？ そんなことしないよ」

「自分が何人の女に声をかけたか数えてから言え」

ぐうの音も出なかった。

「……まあ、な。三十階越えると攻略のペースが落ちてくるってのはみんなそうらしいんだよな。いろいろ考え始める時期に来るし」

「もしかして、二人も結婚とか考えてるの？」

「一応な。家をどうするのか、とかいろいろややこしくなるから保留にしてるけど、このまま一年とか過ぎたら強引に話を進められそうない気がする」

「あー」

こっちでは結婚年齢が若い、というのは事実だ。

みんなやっている、と言われると焦るのは当然の話。相手がいるのならさっさと捕まえてしまいたいだろう。男はお金のこととか理屈を優先して「今は時期が悪い」とか言うが、女は思い立ったら押せ押せである。

「金も準備もできてないのに結婚してもしようがないと思うんだが、その辺の気持ち、お前ならわかるか？」

「あー。まあ、ほら、そういうのは極論『準備させる』ものだからかなあ」

「うわ」

「俺達がどれだけ大変だと思ってるんだよ!？」

「うん、がんばれ」

将来性や稼ぎが期待値より低いと思っただらそもそも結婚なんて提案しない。

期待値が十分なら「妻」という立場を得た上で「稼げ」と要求することができる。実際問題、女は妊娠したら動けなくなるし生まれた子供だって母親に懐きやすいのだから稼ぐのは男の仕事になりやすい。

日本なんかはそういうのがだんだん変わりつつあったが、それは機械によって生活が楽になり、社会制度が充実して選択の幅が広がったからだ。

「ある意味、わたしたちはその点楽なんだよね。みんなで役割分担できるところから」

「分担って……お前も子供作ったりするの？」

「それはまあ、必要になれば？」

自分のお腹を見下ろして「これが大きくなるのかあ」と妙な感慨を抱いてしまったりはするが、「痛いのは嫌」という以上の忌避感もなくなってきたりしているあたり馴染んだというか。

と、男二人は生暖かい目というか偉人でも見るような目というか、なんだか不思議な目をして深く頷いた。

「……うん、やっぱお前はすげえわ」

「俺なんか、もし女になっても絶対出産なんてしたくないもんな」

「そんなもんだよね」

お前らそういうところだぞ、と言いたいところではあるが、レンだって男だったらきつとそうだっただろう。ない機能について想像はできても実感はできない。男として生まれて男として育ってきたのだから、女のことを十分理解できる方が少数派だ。

「がんばろうよ、いろいろ」

「ああ」

「そうだな」

結局、三人でしみじみと誓い合っただけで別れた。



結婚と言えば、マリアベルとアイシャの結婚は来年二月に決まったらしい。

一緒に夕食をとった日に嬉しそうに教えてくれた。

「けっこう先なんですね？」

「ええ。なんだかんだバタバタしてしまっているから、そのくらい先にした方がいいかと思って」

アイシャはきちんと子供たちに教えられる場を作ろうと個人経営の教育施設——寺子屋あるいは塾的なものを立ち上げることを決めた。

場所はレンたちの住む住宅地と元の街の間くらい。

座学の先生はアイシャが、音楽や体育の先生はマリアベルが務めるらしい。現在は大工によって建物を建設中。この世界なら子供たちが走り回る場所はたくさんあるものの、せっかくだからと校庭とか庭といふかな場所も用意するらしい。

建物が完成して設備を整えて生徒募集をして、とやっていたら確かに時間がかかりそうなので、ある程度余裕を持ったほうがよさそうだ。

「それにね。二月の結婚には言い伝えがあるの」

「それって、どんな？」

「二月の結婚は運命、なんだって」

これにはシオンが真っ先に「素敵ですね」と言った。

「おめでとうございます、先生」

「ありがとう。あなたたちの式もいつか見られるといいけれど……あなたたちの場合、式は挙げるのかしら？」

そう言われると、今のところなんとも難しい。

レンたちは顔を見合わせて曖昧な笑みを浮かべた。「さあ？」と言うのもアレだし「他の子の希望次第」とか言うのもアレである。

これにはマリアベルがくすりと笑って、

「レンさんたちはそれでいいのかもしれないね」

「そうね。まあ、式を挙げるにせよ挙げないにせよ、ちゃんと婚姻は結

んでもらうけれど」

答えたミーティアはなかなか強気というか、彼女らしい答えを返した。

ちゃんとした婚姻というかどうかすればいいのだろうか。役所があるわけでもない。神にでも誓えばいいだろうか？

「というか、わたしたちにはもう強い繋がりがあるわけだし、結婚してそのようなものなんじゃない？」

「なっ！ あ、あなたね、いきなりそういうことを言うんじゃないわよ！？」

怒られた。実際、スキルによってテレパシーさえ可能なわけだし、スキル名からして「運命のつがい」なのだから合っていると思うのだが。

無然とした顔のレンを見てアイシャまでが笑い出し、

「あ、それと結婚なんだけど、シオンさんに式の進行をお願いできないかしら？」

「わ、わたくしですか?! 光栄ですが、もしかして神社で式を？」

「ええ。できれば男性も呼びたいから、場所は相談になるけれど」

アイシャと同じ元教師の中には男性も多いし、マリアベルに「お世話になった」男性は結構いる。男子禁制の場所だと彼らが参加できないので不満が出るだろう。

「これは、本格的に男道を整備しないとだめかな」

「大工さんにも頑張ってもらわないとだね。……それとも、欠片を使った方が手っ取り早いかな？」

「壁はもうありますから、外に道を作るだけなら欠片でもできそうです！」

この手の作業に慣れているアイリスがいるので意外とぱつと作れるかもしれない。神社への来客が今まで以上に増えそうではあるものの、神社周辺は聖域になってるので悪意ある者は入れない。昼寝するシオンが変なことをされる心配はないだろう。

「わたしたちもいろいろやることがあるなあ。どうせなら年内にもうちよつと先に進めたら、とか思ってたけど、さすがに厳しいかな」

「後一年かけたとしても十分前人未踏でしょうから問題ないかと。ご主人様」

この調子で、今年があつという間に年末がやってきそうだ。

いざ、四十一階へ

年末年始は昨年以上の大忙しになった。

男子禁制の住宅地に入らず神社へ行ける、通称「男道」が整備されたことで参拝客が増え、おみくじやお神酒の補充が頻繁に要るようになった。

初詣も大繁盛が予想されるため、そのための準備にも追われることになった。

人手確保も重要になったが、新たな仲間であるミーティアはというと、

「なんで私が下々の者のために働かないといけないのかしら？」

と、食べ物飲み物を配る仕事にはきっぱり「ノー」を宣言。

「本来、主人はどっしり構えて客が来るのを待っているものでしょう」

「んー……まあ、この場合、神社の主人はシオンであってわたしたちじゃないし」

結局「客の話し相手になるだけなら」ということで協力を取り付けた。お姫様だけあって挨拶回りに対応するには慣れているらしい。

ただ、それだけだと手が足りないのでアイリスの妹たち、それからこの間会ったメイの妹にも手伝ってもらうことにした。

用意した食材・甘酒は去年よりもだいぶ多め。

奮発して今年は清酒も用意した。その代わり、クリスマスと大晦日の夜は多いにみんなで飲み食いして盛り上がった。

初日の出は家の屋根の上で見た。

アイリスとミーティアが主導で作り上げた山は見事に完成し、街の人の中から二十人以上が「いざ日の出を見に行かん」と登山＋宴会を決行していたが、レンたちは例によって「寒いし明日早いし」ということで一行と森の入り口あたりで挨拶し、それ以上は関わらなかつた。

そうして大盛況の一月一日を乗り切り、年明け初のダンジョンは、

『さ、四十一階だ』

入り口を抜けると、そこはどこかの砦の中だった。

物置かなにかなのか、木箱などが雑然と積まれた部屋。その奥にぽっかりと階段が口を開けている。例によつてレンたち以外にはこの階段は知覚できないはずだ。

外に出ると当然のごとく通路が伸びている。

砦は石造りで、人間なら二、三人が並んで歩ける程度の広さ。この時点で大型の魔物が棲んでいるわけではないことがわかるが、それもそのはず。

ここは魔物ではなく『人間』の砦だ。

『さて、どつちに行きましょうか』

左右に伸びる通路を見回しながらミーティアがテレパシーを発する。その眉は若干顰められており「風情がないわね。これだから人間の建築物は」とでも思っていそうだ。

『とりあえず、人の多そうな方かな』

四十一階以降の攻略本情報は不確かなものや抜けが多く、完全には信用できない。それでも入り口付近からの鉄板ルートくらいは整備されているので、レンたちはそれに従うことにした。

砦の中は静かだ。

なにかが起こっているという様子ではない。人の気配もあり、その証拠にしばらく歩くと剣を腰に下げた男二人と出くわした。

彼らはレンたちの姿を確認すると「え？」とばかりに二度見してきた後、

「何者だ!？」

という意味だと思われる異世界語を発してきた。

剣を手にかげ身構える彼らの前にミーティアが進み出る。なんにも持っていないことを示してから両手を組み、胸の上に置いて「戦う気がない」ことを表明。

会話の内容は異世界語を勉強中のレンたちには断片的にしかわからなかったため、後からミーティアに聞いたものだが、

「落ち着きなさい。私たちは敵じゃないわ。お前たちに警告と協力をするために来たの」

「協力だど？」

「ダークエルフが何を言う！ それに後ろにいるのは悪魔だろう！」
「なら、精霊とハーフエルフがいるのもわかるでしょう。私たちは魔
の軍勢には属していない。むしろ敵対している者よ」

男たち——砦に所属する兵士たちは半信半疑といった様子では
あったものの、レンたちが一行に敵意を見せないこともあってある程
度の理解は示してくれた。

「それで、用件は何だ？ どうやってこの砦に侵入した？」

「侵入方法は悪いけど言えない。用件はさつきも言った通り警告よ。
もうすぐこの砦は多くの魔物に襲われる。このままだと全員殺され
るわ」

四十一階から続く砦のダンジョンはクリア条件が「防衛の成功」。

区切りの階で繰り広げてきたような戦いをごくごく普通の階で求
められるのがこの先の戦いだと、攻略本にはどこか憤りを感じるタツ
チで綴られていた。



兵士たちは仲間を呼んだうえ、レンたちを取り囲んだ状態で責任者
の元へと連行した。

『さつきと警備を強化して欲しいのだけれど、面倒なものね』

『まあまあミーちゃん。ミーちゃんのおかげで戦いにならなかっただ
けありがたいよ』

レンたちは異世界人と会話が通じない。

文字はある程度解読できているものの、なにしろ話者が一人もいな
かった。今までの攻略者たちは砦の兵士と意思疎通がほぼできない
状態で対処しなければならなかった。

ダークエルフやサキユバスのいるレンたちと違って人間だけの
パーティならすぐさま敵とは見做されないとはいえ、いつの間にか砦
に入り込んでいた言葉の通じない者たちだ。当然警戒されることに
なり——最初の頃は砦の兵士も蹴散らしつつ敵に対処するのがデ
フォルトだったらしい。

賢者が異世界文字をある程度解析した後はあらかじめ用件を書いた手紙を用意してそれを提示、なんとか「敵ではないが味方でもない」くらいの立ち位置を獲得して戦いを開始していた。

なので、すんなりと責任者に会いに行けたのはレンたちが初めてかもしれない。

「貴様らが協力者だと？ 俄かには信じがたいが」

話を聞いた中年の大柄な男性は腕組みをしてしかめ面を浮かべ、「虚偽だとすれば危険を冒してまでこの砦に乗り込んできた意図がわからん。敵意があるのならさっさと行動に移しているだろうしな。それを思えば——」

瞬間、金属を叩くような騒がしい音が砦中に鳴り響いた。

「敵襲！ 敵襲！ 魔物の群れが砦へ向けて接近中！ 方角は北、北東、北西！ 数はそれぞれ五十、百——た、大群です！」

「信じないわけにはいかなかったか。……敵を倒すまでは協力できる、と考えて良いのかな？」

「ええ。お前たちを害するつもりはないから安心なさい。それより、早く動かないとまずいわよ」

「そのようだ」

ミーティアは相手方に自由行動の許可を取ると証明書代わりの腕章を人数分受け取り、

『さ、行きましようか』

と、レンたちを促した。

適当な物見塔まで飛んで見渡すと、確かに三方向から魔物の群れらしきものがこちらへ向かってきている。到着までにはあと十分もないだろう。

周辺警戒にあたっていた兵が偶然見つけて知らせてくれたため、比較的準備の時間が取れた。まあ、この数にこれだけ近づかれてしまった時点で壊滅的被害は免れないのだが。

他の街や砦に伝令を出したり兵を集めたりは砦の者たちがやってくれるはずなので、レンたちは敵を倒すことに集中する。

『一手に分かれようか。わたしとフリーで右に、シオンとアイリス、

ミーティアで左に。メイはゆっくり中央の敵を迎え撃つてくれる?』
『メイちゃん一人で真ん中?』

『左右が攻撃されてるのを無視されたらきついけど、砦の兵士もいるはずだし』

応援を送りたくなるくらいレンたちが頑張ればいい、という話。

『おっけ。じゃあ、私はレンに運んでもらおうかな』

『あ、アレやるんだ?』

『うん』

パートナーの意向を確認したレンは、直立したフリーを後ろから抱きしめた。

すると、少女の身体が溶けるようにして形を失っていく。非実体化とも少し異なる状態となった彼女はそのまま、後ろにいるレンの身体へと吸い込まれていく。

手が、足が、顔が重なり、レンが動くとそれに応じてフリーも動く状態に。

「精霊憑依」。

誰かに乗り移ることで相手に力を与えるフリーのスキルだ。この状態なら二人で一人、一人で二人なので思いつきり力が出せる。

『みんな、十分気をつけて』

『わかっているわ。あなたこそ、下手を踏まないようにね』

『こちらはお任せください、レンさま』

『では、私はのんびり待ち構えさせていただきます』

メイは砦の外までシオンに運んでもらうことにした。

その間にレンは翼を広げ、空へ。

《んー、気持ちいい!》

フリーの声がテレパシーではなく、まるで自分が考えたことのように頭に響く。憑依状態だとしてノータイムで意思疎通が可能だ。

加えて、レンの身体には風の魔力が漲っている。

飛行のスピードは通常状態よりも明らかに速く、接敵するまでにその時間はかからない。

敵は大群だ。

二十階のボス戦と変わらないか、むしろ多いくらいの数。

構成はゴブリンにオーク、リザードマンにオーガ。さらにダークエルフまでいる。明らかに突発的な攻撃ではなく、組織だった軍勢による攻撃だ。

彼らもさすがにレンたちに気づいていて攻撃態勢を取ってくる。しかし、動いたのはレンの方が速い。

「ウインドブラスト！」

ブースト付き、風の精霊の力によって威力を強化された突風はもはや目に見えない超巨大な鈍器で殴りつけているようなものだ。

ダブルキャスト
二重魔法によって威力はさらに倍。

軽いゴブリンやリザードマン、ダークエルフはこれに耐えきれず吹き飛ばされていき、オークやオーガもさすがに動きが止まる。

そこへ、

《ウインドブラスト！》

駄目押し之三発目。

憑依状態だとレンはフリーのスキルを全て使用できる。また、フリーのほうもレンの風属性スキルを利用可能なのだ。

魔法攻撃力も二人のうち高いほう——この場合はレンのものが採用されるため、

《これ、二回行動してるようなものだよね？》

《うん。わたし、ちよつと大魔王になった気分》

立て続けに放たれた三発の風槌に敵軍は大混乱。

最も身体が大きく耐久力もあるオーガが真っ先に立ち直って投石を仕掛けてくるも、レンたちは攻撃しながらも動きを止めてはいない。ちよつとした岩ほどもある石が次々と狙いを逸れてどこかへと飛んでいく。

投石器代わりに砦の壁に投げつけるつもりだったのだろうから、石の数を減らすことができただけでもなかなかの戦果だ。

もちろん、位置を変えながら魔法攻撃は続行。

四発目からゴブリンを筆頭に体力の低い者、魔法が直撃した者が消滅し始めた。レンの風魔法は殺傷能力が低めだったのだが、この域ま

で達してくれば防御と攻撃両方を兼ねられる。

《レンのMPが使えるから魔法撃ち放題だね》

《いや、さすがにえんえん撃ってたらわたしのMPも尽きるからね?》
とは言え、仲間たちからのエナジードレインもあるしフリーのMPを使うことももちろんできる。

レベルアップに加え、暇を見てはスキルで最大値を増やし続けているレンのMPはもはや非常識。それこそ魔王クラスなのではないかという有様であり、

《レン、ダークエルフ隊が離れようとしてる》

《ほんとだ。じゃあ、周り込みながら風を叩き込んで、つと》

気を抜くことはできないものの、敵軍の三分の一を二人で食い止めることに成功した。要は風から逃れようとする敵にさえ気をつければ風で足止めができるのである。

と、レンの視界に別方向から飛行してくるダークエルフの一団が入った。

《あれ、真ん中の部隊じゃない?》

《だね。これはさすがにやつかいかな》

作戦変更。位置取りを変え、新たにやってきた敵と今までいた敵を両方狙えるようにしながらフルパワーの「マジックアロー」を降らせしていく。

防御はフリーが「ウインドブラスト」で担当。

《これはこれでラッキーかも。中央の敵が減ってくれば》

《メイちゃんの負担も減るし、砦の人たちも楽になるよね》

ダークエルフ隊の後方からは数体のオーガまでやってきた。

さすがに楽な戦いではないものの、こういう戦いのためにレンたちは時間をかけて準備をしてきた。

四十階で手こずった時と同じ強さではないし、なによりこのフィールドなら飛び回れるだけの空間がある。

あつという間に殲滅、とまでは行かずとも着実に敵を削っていく、辺りに敵がいなくなった頃には、

《やってるね》

《うん。でも、あれくらいならなんとかかなりそう》

砦の兵士たちと（数を減らした）砦の中央部隊との戦いが始まっていた。

兵士たちに交じって最前線にはメイの姿。彼女は左右の腕につけた砲門（！）から火球を撃ち放って敵を撃墜していた。えぐい。

あれは何か月かかけて掘り出し物を探したものの「これ！」という武器がなかったことから代わりに用意した攻撃手段だ。

高いお金を出して火の精霊石——火の精霊が宿ると言われるマジックアイテムを購入。メイはこれを内部に組み込むことで火の属性を操れるようになった。これで以前苦労した体温問題も解決したのだがそれはともかく、

『これでメイさんもファイアボルトが撃てるようになったんですよ？』

『そうなのですが、このまま撃つと私の活動エネルギーを削りながら放つことになるので、さらに一工夫します』

あらかじめ炎のつぶてを発生させる特殊な弾丸を作成、戦闘ではそれを発射することでエネルギーの消耗タイミングを分散、弾の在庫という問題はあるものの活動停止にならずに戦えるようになった。

なお、武器を買えなかったぶん、接近戦が弱いのではないかといえば、人に比べてはるかに硬質な両手でぶん殴って補っている。

結局、メイがスキルで強化することにした武器種別は「打撃武器」だ。

《実は素手も打撃武器なんだよね》

《うん。メイが特別みたいだけど》

ゴーレムの腕は生身ではないので鈍器として扱われる、という話。もちろん蹴りも同様なので、戦士のスキルをある程度網羅できたらマリアベルに弟子入りして蹴術師になるという選択肢も出てきた。

《よし、わたしたちは後ろから攻撃しよう》

《おっけー！》

ほどなくシオンたちも合流してきて、結果的に砦は損害軽微。死傷

者僅か。砦の責任者に言わせれば「奇跡的な大勝利」で幕を下ろしたのだった。

新しいステージ

『なんか喋らなくなっちゃったね、兵士さんたち』

四十一階に挑戦した日の夜。

後片付けが終わりがらんとし始めた砦の食堂で、フリーがぼつりと呟いた。

少し前までここでは宴が行われていた。

砦の防衛に協力したレンたちは「素性はともかく大きな戦果を挙げた」ということで大いに感謝され、せめてものお礼にと宴に誘われたのだ。

せっかくなのでご馳走になり、タダ飯（保存食的なものが多く、調味料も限られている感はあるものの普通に食べられた）とタダ酒をたっぷり味わった。兵士たちも歌ったり踊ったりと騒がしく、なかなか楽しいひとときだったのだが。

宴がお開きになるあたりで雲行きが怪しくなり始めたというか、みんなが急によそよそしくなり始めた。

レンたちは声をかけられることがなくなり、話しかけても「ああ」とか「おう」とかの生返事しかしてくれない。

『なんだか私たちのことが見えていないみたいですね』

『と言いますか、決められた受け答え以外は出来なくなったのでは？』

アイリスの声にメイが意見を口にする。

『やっぱりこの人たちもNPCなんだね』

『ふん。……私もこんな風だったのかしらね』

『ミーティアさまは特別だと思われます。……この階の方々についても誘拐、いえ、街に連れ帰る試みは行われていたようですので』

ある程度まではレンたちの行動に対応できるよう指針が組み込まれているが、いつまでも多数の人の行動をシミュレーションし続けてくれるほどダンジョンは優しくないらしい。

勝ったんだからお前ら早く帰れ、ということか。

可能であれば都へ行って偉い人に会って欲しい、なんていう話も砦の責任者から出ていたので少し残念——というか、そういう事態にな

ると困るから行動を打ち切られたのか。

『今日はここに泊まっていたてもいいかなー、って思ったんだけど、この分なら帰ったほうが良さそうだね』

『夕食代は浮いたしね。さすがに帰らないと心配する人もいるかもしれないし』

この辺りの階になると泊まり込みで攻略することも珍しくないよ、うで、ベテランの中には翌日とか二日後に帰ってくる人もよくいるらしい。ただ、レンたちの周囲には若いメンバーが多いし、そこまで遅くなるとは言って来なかった。

レンたちは決まった反応しかなかった兵士たちに一応挨拶をしてから帰る支度を始めた。

せつかく砦がまるまる残っている、砦の見取り図や周辺の地形図をざっと描いていく。これは後で賢者にとても喜ばれた。

『攻略本をアップデートできそう。こういった情報はどんどん寄越して欲しい』

帰りに話したのは今回の戦いについてである。

『ですが、通常の階としてはかなりの強敵でしたね』

『そうね。挑むたびに事情を説明して責任者に会って、とやるのも面倒だわ』

だいぶ階が進んだだけあってドロップ品は豪華なのだが、ここで資金稼ぎをするのはなかなかハードだ。いくら「当たらなければどうということはない」とはいえ、集中力を切らせばそこで終わり。運が悪ければまぐれ当たりもあるのだ。

『そうそう。それとメイちゃん。本隊の中に見覚えのないやつがいなかった？』

『いましたね。ご主人様と似た翼と尻尾を生やしていました。他の部分はご主人様とは似ても似つかない姿でしたが』

さつきと殲滅してしまったのできちんと観察している暇はなかったが、その敵の姿はレンも見た。ダークパープルの肌を持った人型の敵。

『悪魔——デーモンね。高い魔力を持った厄介な奴らよ。それと性格

が最悪』

『ダークエルフよりも性格が悪いんですか?』

『失礼ね。私たちは魔族の中では温厚な方よ。今日だって人間との交渉に協力してあげたでしよう?』

ついに悪魔まで現れてしまった。

ここまでで戦ってきた相手の混成軍というだけで十分手強いというのに、本当にこのダンジョンは鬼畜難易度である。

当然、次の四十二階はもっと手強いのだろう。

『ほんと、準備してから来てよかったよ』

基礎を固める重要性をレンはしみじみと実感したのだった。



四十二階では別の砦が舞台となった。

やることは大きく変わらないものの敵の数は増え、一体だったデーモンが三体に増えた。どうやら彼らが指揮官を務めているらしく、本隊以外の敵も指揮によって一層手強さを増した。

それから、レンとしては自分に似た姿の敵に若干イラつとする。思わず魔法を叩きつける勢いも強くなり、雑魚へのダメージが過剰気味になった。

終わった後は感謝され宴が開かれ、終わった頃に素っ気なくなるのも同じ。

「本格的に魔の軍勢との戦いになってきた……って感じかあ」

「やはり、今後はずっとこのレベルの戦いが続くのでしょうか」

「もしかしなくてもそうでしょうね。砦を落とすにしては過剰戦力だけど、人間は放っておくと増えすぎるものね。私たちダークエルフもこの程度の争いなら文句は言わず、むしろ率先して参加していたでしょう」

正史では次々に砦が潰されていたということだ。

もちろん、どれくらいの間隔で襲撃が起こっていたのかはわからないし、どの砦も壊滅していたとは限らない——潰された砦ばかり選ん

でダンジョンに再現されている可能性もあるのだが。

「あちこちで壊滅的被害が出てたつてことだから……人間、ダメダメだったんじゃない？」

「まあ、人間だしなあ。他の種族はみんななにかしら長所があつてズルいよね」

人間がドヤ顔できそうなのはゴブリンあたりが限界か。ただ、彼らは彼らで繁殖力では人間を上回っている。一概に格下扱いもできない。

四十三階はさらに難関になった。

飛行する敵——ハーピイが加わつたのだ。数は少なめだったものの、これはさすがにきつい。地上と空で分散されると魔法一発で全体を押さえることができなくなるからだ。

そもそも敵の数自体も増えてきて魔法一発で食い止めきれなくなつてきた。一応ここでも快勝を収めたものの、レンたちは次の階から戦法の変更を余儀なくされた。

「こつちからうつて出ると危ないから、防衛戦にしよう」

岩の物見塔や壁の中に用意された射撃用の空間などを借りて攻撃を仕掛けていく。

ここではフリーとひとつになつて戦うのはレンではなくアイリスにした。風の加護を十分に受けたハーフェルフの矢は通常の射程距離をはるかに超えて見事に連続命中し、迫りくる魔物たちを着実に撃墜。ハーピイへのカウンターとしても役に立った。

もちろん、レンやシオンの魔法もばんばん敵を蹴散らした。

岩に詰めていた魔法使いが「なんだよこの魔法……」とでも言いながらにぼかん、とこちらを見てきたのがとても印象に残っている。余裕のある時ならウインクのひとつでも返してやってもよかつたのだが、あいにくその魔法使いに贈られたのは「前！」というたどたどしい異世界語と鋭い視線だった。

と、ここまで攻略するのにおよそ二か月。

挑戦してしまえばわりとハイペースで攻略できている、と考えるべきか、あれだけ準備したのに半月に一階進むのがやつとだと考えるべ

きか。

準備して作り上げたアドバンテージがじわじわ削られていくのも心臓に悪い。それでも順調。

ここまで攻略する間にマリABELとアイシヤの結婚式も無事に行われた。

マリABELが白無垢、アイシヤがウエディングドレスという和洋折衷、一般的な結婚式のイメージからすると「？」となるような絵面だったものの、それはそれで華やかで絵になっていた。二人ともとても幸せそうで「この二人が別れることはきつとないだろうな」と思えた。

式を取り仕切ることになったシオンは作法の勉強などでなかなか大変そうだったものの、無事に大きな失敗をすることなく役目をやり遂げた。

参加者から「良い式だった」と声をかけられると嬉しそうに「ありがとうございます」と返答。

さらには、

「俺達の時もお願いしようかな」

なんて言い出す者までいた。これにもシオンは「頑張ります」と答えており、どうやらこの役割にやりがいを感じたようだ。

もしかすると本当に神社での結婚式が増えるかもしれない。そうしたらそのうち本当にシオンが崇められたりもしそうだ。

ただ、この異世界での結婚式事情はなかなかカオス。

昔は神殿を利用してうる覚えのなんちゃって結婚式が主流だったのだが、最近は西洋式の式をわりときつちりなぞるのも人気。そこに神社で行うという選択肢が増えたことで不思議な対立図(?)が生まれつつあった。

「わたしたちがやるとしたらどうなるんだろうなあ」

と思わず呟いたところ、フリーとミーティアから、

「私たちの場合はそもそも人数がねー」

「そうよ。シオンに仕切ってもらうわけにもいかないわけだし、なるようにしかならないでしょう?」

やるとしたらみんないっぺんに、が基本らしい。確かにそのほうが

招待客も楽だし、レンたちの気持ちとしてもすつきりする。

レンが何人もの女の子を娶る、というよりはみんなで一つの共同体になる感じ。そう考えると結婚するのも悪くないな、とあらためて思った。

「……さて。いよいよ四十五階なんだけど」

三月の頭。

家のリビングでみんなと作戦会議。次の階はまた一段と激しい戦いが予想された。

「砦じゃなくて街を守る戦い、ね」

「戦える人の数が少ないうえにパニックが起きやすいんだよね」

襲われるのは内陸にある人間の小さな街。そこに突如としてモンスターの大群が襲ってくるらしい。軍事拠点ではないので敵の発見も遅れるうえ、防衛戦力も心許ない。おまけに守らなければならない範囲が広いために気が抜けない。

「勝利条件は詳しくはわからないですよね？」

「街を守らなきゃいけないのは確かだけど、どこまでならOKなのかはわからないみたい」

具体的に守るべきが「人」なのか「街」なのか。何パーセント程度までの被害率なら許されるのか。過去の事例ではだいたい半壊程度の状況で失敗と判断されたことがあるようなので、大まかに「大きな被害が出たらアウト」と考えておけばいいだろうか。

出現場所は街中にあるとある空き家。

敵の襲撃までの猶予時間は十分といったところ。街にも防衛兵はいるものの、彼らに会って事情を説明、責任者に繋いでもらって、とやるには心許ない。

「……警告できないまま襲われることになった場合、パニックから逃げ出そうとして別動隊に殺される人も多数出てしまったそうです」

せめて街の人たちには自分の家に引きこもっていてもらいたい。

「少しでも早く警告ができれば兵も心の準備ができるでしょうね。街には冒険者や傭兵の類もいるはずだから、そいつらをうまく焚きつけられれば少しは楽になるはず」

兵士たちの詰め所の場所はわかっている。スタートと同時にそこへ急行して直談判する、という手もあるにはあるが――。

「わたしたちの異世界語はまだまだ危ないんだよねえ」

「危ないなんてものじゃないわ。カタコトよ。必要になったので最低限だけ覚ええました、っていうのが丸わかり。あなたが口にしたら逆に怪しいんじゃない？」

というわけで、今回は別の作戦を取ることになった。

「敵が来ないと信用してもらえないなら、いつそわたしたちが暴れよう」

「都合よくレンとミーちゃんが悪役っぽいもんね。それなら手っ取り早いかも」

今回は敵っぽい容姿が役に立ちそうである。

四十五階攻略

「アースバレット！」

四十五階、昼下がりの街中にて。

スタート地点から一気に兵士の詰め所まで移動したレンは土属性の範囲魔法を建物へと叩き込んだ。

ブーストなし、ダブルキャスト二重魔法も当然使っていないものの、百発の石弾。どがががが、と気持ちのいい音を立てて壁や天井、付近の石畳へとめりこんでいく。

幸い、通行人はレンの姿を見て逃げ出していたため被害はなし。

「あれ、これでもけっこう威力高いな……ま、いつか」

壁や天井の厚みの半分くらいまで削れているのを見て、今度は敢えて魔法を空に放つ。一度上空へと舞い上がった石弾は勢いを殺されながら落下し、詰所の天井をがんがんと叩く。

「な、何事だ!？」

「あれは、まさか悪魔か!？」

慌てて出てきた兵士たちが叫ぶ。内容は追いかけてきたミーティアがテレパシーで教えてくれた。

そのミーティアはミーティアで兵士の一人——の頬すれすれを狙って射かけ、かつ！ と壁に矢を突き立てて見せた。

平和な街に突如現れた悪魔（サキュバス）とダークエルフ。

兵士たちは一気にパニックに陥り、どうするべきかと視線を巡らせ始める。

「ほらほら、街の人を避難させたり飛び道具を持ってきたり、仲間を呼んだり、やることはいっぱいあるでしょ!？」

「我々はこれからこの街を襲撃する！ 本隊はまもなく到着よ！ 恐怖するがいいわ、愚かな人間どもよ！」

ミーティアは異世界語だが、レンのほうは日本語である。この場合、わけのわからない言語を話す敵、というのは逆に怖いはず。

警告した後は二人でその場を離れながら何度か同じようなことを叫んで回っただけだが、効果は抜群。街の外に出る前に警報代わりの

鐘が鳴らされ、兵士たちがばたばたと走り回り始めた。

『うまくいったよ。みんなも適当に追いかけてきて』

『おっけー』

レンたちが飛び去ったのは当然、敵が来ると予想される方向。

複数部隊があるのでこっちはばかり警戒されても困るのだが、まあそこは仕方ない。

少ししたところでスタート地点で待機していた他のメンバーが後を追いかけてくる。ちなみにメイはフリーに憑依してもらって飛行中だ。

レンたちとしては単に仲間と合流するつもりなのだが、傍目からは冒険者(?)の団がいち早く敵を追いかけているように見えるはず。意外と兵士たちも頑張っているのか二、三度矢を飛ばされたものの、その程度でどうにかなるはずもなく、一気に街の外壁を飛び越えた。

『うわ、けっこう近くまで来てる』

『ももとの猶予が十分ですものね。少しでも守りを固める時間を稼がなくては』

敵の構成は大きくは変わっていない。一般兵扱いのゴブリンにエリート相当のリザードマン、タフなオークに弓も魔法も使えるダークエルフ、攻城兵器代わりのオーガに飛行するハッピー。それからデーモンが数体。ハッピーやオーガの数と割合が増えているのが厄介な点か。

今回は敵も街攻めということと準備をより万端に整えている。

レンたちの接近を受けて兵糧など物資を運ぶ後方部隊が足を止め、それを守るように部隊が展開し始める。サキュバスやダークエルフが交じったパーティ相手に判断が早い。まあ、知らない顔が街の方から飛んできたら警戒するのも当然か。

「ファイアアロー！」

「狐火！」

「ファイアボルト！」

「今回は私も射撃に参加させていただきます」

防御のため手を休めているフーリ以外の面々が魔法と矢、砲撃によって先制攻撃。風を使うと味方の攻撃まで散らしてしまう恐れがある。なので今回は火属性で統一した。

レンの二百本の火の矢に加えてシオンの九×五発の炎、そこにアイリスたちの攻撃まで加わるともはや雨である。魔物たちは手痛い攻撃に一瞬手を止め、悲鳴を上げる。

遅れて反撃も飛んでくるものの、レンたちはバラバラに空を移動してこれを回避。

飛んでくるハーピイたちには、

「マナボルト」

「ウインドスラッシュユー！」

鋭い爪と牙を持つ凶悪な魔物も翼がなければ攻撃を届かせることができない。消滅させるには足りなくとも地面に落としてしまえば落下の衝撃で勝手に消えていつてくれる。

なお、メイとシオンはそれぞれハーピイをぶん殴ったり蹴っ飛ばしたりして対処していた。

鈍器扱いの腕でぶん殴られたり、巨大な狐に蹴飛ばされたハーピイも少々哀れである。

と、それはともかく。

『これ、けっこうきつい……！』

『そうね。できれば本隊をさっさと始末して他に回りたかったのだけれど』

レンたち全員が釘付けにされてしまっている。

敵も街まで到達できていないのでどっちもどっちだが、別動隊の攻撃を街の人間だけで乗り切れるかどうか。

『メイ、あれを使おう！』

『ボムですね。かしこまりました』

テレパシーで答えたメイはストレージから小さな結晶のようなものを取り出す。振りかぶって下に投げられたそれは敵陣に吸い込まれ、爆発。

炎と爆風を撒き散らす様はさながらファイアーボールの魔法。

通常の炎の弾よりも高いコストをかけて作成した、その名の通りの爆弾である。実は範囲攻撃手段が限られているレンたちにとってはこれがとてもありがたい。

指揮官と思われるデーモンはこれに対して新たな号令。敵部隊が小さな塊ごとに別の方向に散り始めた。ファイアーボールを警戒して被害を分散させるつもりらしい。

『ですが、組織だった行動ができなくなるのはそちらにとっても痛手のはず』

レンたちは小集団をひとつずつ潰せばいいだけだ。手始めにレンはそのひとつにマジックアローを降らせようとして、

「!？」

不発。

当然、MPが足りないのではない。発動しかけた魔法が急に消えてしまったような感覚。見れば、指揮官のデーモンがこちらを睨みながら不敵に笑っていた。いや、悪魔の表情はわかりづらいのでそう見えただけかもしれないが。

『魔法解除。この距離からレンの魔法を打ち消すとはやるじゃない』

『むう。これはちよつと嫌な感覚かも。あんまり食らいたくないなあ』

TCGでカードの効果が打ち消されるならまだしも、実戦でやられると「なにをされたんだ!？」と混乱してしまう。おそらくばんばん使える魔法ではないのだろうが、そういう心理的效果も合わせるとなかなか嫌らしい。

『まあ、打ち消されようが使える時に使うだけなんだけど……!』

仲間たちと視線で合図しあい、それぞれに分かれて別の敵を狙う。

レンは敢えて急降下、接近しつつボスのデーモンへ。

「とつておき、これも打ち消せる!？」

トリプルスペル
三重魔法

オーバーブースト
過剰増幅

マナコンダクター
魔操師の切り札

魔操師の切り札中の切り札。レンが使ってもなおMP消費がきついこれらのスキルを乗せて放たれたマナボルトは一発目が打ち消さ

れたものの、残る二発がデーモンの身体へと吸い込まれた。
どん、と。

疑似的な衝撃と共に空いた風穴をデーモンは見下ろし、なにかを小さく呟いてから消滅していく。

「指揮官、撃破」

敵陣に広がり始める動揺。

無視してさらに降下したレンはオーガの後方に回り込むと尻尾を一閃、

「ドレインスラッシュ……！」

魔法攻撃力を上乗せした物理攻撃を浴びせつつMPも吸収する、射程距離とそもそもの消費MPが高めな点に難のあるサキュバスのスキルは、使いどころさえ選ばばかなり強力。オーガにも頸動脈はあるらしく一気に血が吹き出し、絶叫を上げ始めた。

「後は、ドレインアローでっ！」

マジックアローの属性変化——ではなく、吸収魔法であるドレインボルトの範囲版だ。威力が低い代わりにMP吸収効果が高く、MPを気にせず使えるのが利点。

ここまで来るとレンに構って足を止めた時点で敵の負けである。

ほどなく、他の仲間たちによって残ったデーモンが撃破されると本隊は壊滅が決定した。

まず、後方支援部隊が一目散に逃げ出していく。戦う力の弱い者たちで構成されていたのだろう。まあ、人間相手なら十分戦えるのだろうが、人間の群れ——街を襲うには力不足。その街を守るように実力者が配置されているなら猶更だ。

『レン、ミーちゃん、先に行つていいよ。ここにいるとややこしいでしょ？』

『ありがとう。じゃ、別の部隊を潰してくる』

『さっさと合流しなさいよ。あなたたちだって人間と話は通じないんだから』

戦闘要員だった魔物もいくらかは逃走。残った敵程度ならメイ&フリーだけで十分だ。アイリスとシオンには街を突っ切る形で移動

してもらい、街に入り込んだ魔物がいそうなら退治してもらおうことにした。

レンとミーティアは街に入るとややこしいので大きく迂回する形で別動隊へと向かう。

『あら、意外と頑張っているじゃない?』

『こつちに兵士が来なかったし、手薄な方を優先してくれたのかな』
敵の別動隊とは兵士、それから冒険者や傭兵が戦っていた。勢いを食い止めきれではないものの、完全に劣勢というわけではない。街という守るべき対象がなければそこそこ善戦できるかもしれない。

『でもまあ、人数がいてもその程度。本隊がいたらあつという間にやられていたでしょうし、オーガの相手は複数人でかかってもなお大仕事って感じね』

『ダークエルフでも結構人数が必要なんじゃなかったっけ?』

『安全に殺すためには、ね。こいつらは命をかけてそれ。所詮は人間よね』

ミーティアの発言をどこまで信用していいかはともかく、レンたちも加勢。最初は人間側から攻撃されそうになったものの、レンたちが魔物ばかり狙っていることに気づくとひとまず後回しにしてくれた。

唯一、言葉の通じるミーティアは戦いながらなにやら言い合っていたものの、要するに「お前達は結局何者なんだ!」「ああでも言わないとお前達は動かなかったでしょう? 嘘も方便よ」といった会話だったので詳細は省く。

すぐにアイリスたちも合流してきて、大勢は決した。

完全に戦線が瓦解するまでにはさすがにもう少し時間がかかったが。

『さて、これなら後はもう大丈夫そうかな。ミーティア。誤解はちゃんと解けた?』

『どうかしら? 戦いが終わるまでこの場にいるとややこしいことになるかもね。……というか、これって私たちは帰れるの?』

『……あ』

攻略本によると下り階段も街の中だ。

ひよつとして未知の階だと次の階への入り口も一生懸命探さないといけないのだろうか。街とかになるとそれだけで半日くらいかかりそうなのだが……それはともかく。上りを使うにせよ下りを使うにせよ街中に行かないといけないとなると、

『襲われるね?』

『襲われるねー。レンとミーちゃんがいなければなんともかなるだろうけど』

『……あー。夜になってからこつそり忍びこもつか』

頑張つて誤解を解く、という手もあるにはあるものの、破壊活動を行っていた言葉の通じないサキユバスはどう考えても怪しい。というわけで、レンたちはいったんこれ見よがしに街から離れ、適当なところに潜伏した後、夜、人々が寝静まるのを待つてから空き家内の下り階段から神殿へ帰った。

「はー。……これだけ遅くなったのって初めてだよな? もうちよつとで朝帰りだったんじゃない、私達」

「ね。泊まり込みも珍しくないらしいけど、これは大変かも」

具体的には花摘みとか食事とかである。まあ、実はフリーも非実体化状態や憑依状態だとそのへん大丈夫なので、レンたちのパーティはわりと戦い続けられる者が多い。そういう意味ではだいたいぶ楽だ。というか、そういう意味でも異種族はチートかもしれない。

「でも、これで四十五階も制覇ですね!」

「これならドヤ顔は確定でしょうね」

ちなみに四十五階のクリア報酬はアイリスとメイのストレージ完全開放だった。

これでアイリスたちもレンたちとまったく変わらない戦闘力を手に入れたことになる(ミーティアは『祝福』の形式が違うのでひたすら地力が強化されている)。

というか、アイリスたちは特訓によってスキルレベルを直接上げられるため、スキルポイントに頼っているレンたちより強いと言っている。

今はまだレベル差の関係でレンたちに分があるものの、そう遠くない。

うちに追い抜かされるだろう。

ダンジョン内で夜になったということはこのつちの世界でも夜。

近所迷惑にならないよう、なるべく静かに夜空を飛びながらテレパシーで、

『さて。四十六階からはどうしましょうか？ またしばらく準備期間かしら？』

『敵の強化具合を考えるとその方が良いかもしれませんが。少数精鋭で複数の部隊を相手取るにはさすがに練度が足りていないでしょう』

『ん……。それなんだけど、さすがにそろそろ他の人の手を借りた方がいいかなって』

レンは仲間たちの声に答えながら苦笑した。

他の人とは組みづらい事情もあるわけで、できるだけ仲間内だけで済ませたいのは山々ながら、ここは方針を転換すべきところだと思っ

先達の協力

「奴なら今は山籠もりをしているはずだ。空から探せばすぐに見つかるのではないか？」

賢者の情報をもとに、レンはフリーとメイを連れて山へと向かった。

空を飛んで行けば移動時間もそれほどかからない。大部分を緑で覆われたその場所を上から見下ろすと、手製と思われる小さな小屋を発見した。

小屋の前にはキャンプをしたような跡もある。

あそこで確定だろう。

小屋の前に降り、フリーはメイとの融合を解除。レンが代表して戸を叩くと、中からはなんの反応もなかった。

「留守かな？」

「っぽいね」

「寝ているだけなのでは？」

がながん戸を叩こうとしたメイを「やめなさい」と止めて、

「どうしようか。森の中にいるとするとちよつと探しづらいんだけど」

「適当にその辺で待たせてもらおう？」

「それがいいかな？」

鍵がかかるような造りではないので勝手に入ってしまったもいいのだが、さすがにそれは初対面の相手に失礼だろう。

山籠もりなんていうマンガくらいでしか聞かないようなことをしている相手にそんな配慮が必要なのかはともかく。

「お？ ……珍しいな、俺に客か？」

幸い、待ち人はさほど時間をかけずに帰ってきた。

片手には野草の山盛りになったカゴ。もう一方の手には息の根を止められた野兎の姿。どうやら食材の補充に行っていたらしい。森には自然が豊富なので自給自足生活は十分可能である。

相手は四十代後半と思しき男性。

身長は百七十センチオーバー。腕の太さはレンの倍ほどもあり、肌には治療しきれなかったのかいくつもの傷痕が残っている。

「初めまして、ケントさん。わたしは——」

「サキユバスのレン、だろ？ さすがに知ってるよ。山ができるまでは街にいたし、お前さんを見たことだって何度もある。ちゃんと会うのは初めてだけどな」

彼——ケントは「あいつから場所を聞いたんだろ？ 入れよ」とレンたちを促し、率先して小屋の中へと入っていった。

中は雑然と物が置かれた、半分倉庫のような状態だった。

賢者の家もなかなか「男の家」感が凄かったが、ここはまた少し違い、ワイルド的な意味で散らかり方がすごい。どうせ一人しかいないのだし、仮の住まいだから整理しても仕方ないといったところか。「こいつを捌くのは後にするか。さつさとやつちまった方がいいんだろうが、どうにも苦手だな。話しながら上手くやる自信がない」

「あ、じゃあ私がやりましょうか？」

「いいのか？ じゃあ、頼む」

ひよいと渡された野兎をフリーが嬉々として捌き始める。

「上手いもんだな」

「こつちに来てからずっと料理やってますからねー。うちにはアイリスちゃん——ハーフェルフの子がいるのでいろいろ教えてくれますし」

「ああ、アンナちゃんの子だろ。あの子もすっかり大きくなったよなあ。俺も歳を取るわけだ」

「あはは、またまた。そんな歳には見えませんよー」

「んなことないって。俺、ここじゃほとんど最年長だぞ？」

「ケントさんはあのおっさん——賢者様と同じ『一年目』の転移者ですもんね」

レンの言葉にケントは「ああ」と頷いて、

「あいつを『あのおっさん』扱いとはなかなか良いな。そうだ。あんな奴ただのおっさんだからな。リーダーなんてやって偉そうにしてるんだからたまには雑に扱ってやるくらいでいい」

「おっさんは『あいつがリーダーをやらなかつたから私が任されたんだ』と愚痴ってましたが」

「はっはっは。いい気味だ」

豪快に笑った彼の本名は石澤健人。

ケント、とカタカナだとなんとなく眼鏡の細い白人をイメージしてしまうレンだが、当人は見ての通り豪快なおっさんである。

クラスは戦士。賢者とは性格的に合わないらしくレンは賢者からだいぶ愚痴を聞かされたが、話してみた感じ悪い人ではない。

前衛がリーダーを務める、なんていうルールがあるわけではない。はいえ、前に立ってみんなを引っ張る者が指示を出してくれるとなんとなく従いやすい、という面はある。そう考えると確かに彼がリーダーを務めるといふ選択肢もあつたのだろう。

どうして引き受けなかつたのかは、まあ、この様子を見ていればなんとなくわかる。

「そうだ。奥さんからいろいろ預かってきたんです」

「お、ありがたいな。あいつは何か言ってたか？」

「『ほどほどにね』だそうです」

一年目の生き残りは五人。

賢者を除いた後の四人は結婚しており、彼の奥さんも同じ一年目の転移者だ。夫の無茶は慣れっこなのか軽く苦笑を浮かべながらレンたちに届け物を頼んできた。

「ですが、どうしてこんなところで生活をしているのですか？」

「ああ、修行だよ修行。鍛えてないと身体が鈍っちゃうからな」

修行のために山籠もりとかまるでマンガである。

「今でも定期的にダンジョンに潜っていらつしやると聞きました」

「潜ってるよ。最前線のパーティに入れてもらったり、昔の仲間に声をかけたりとかだな。俺が声をかければ結構みんな協力してくれるんだぜ」

「そりやそうでしょ。なにしろ最強の戦士だもん」

さつきまで敬語だったフリーが素の口調に戻った。この人相手なら大丈夫だと判断したらしい。こういう人好きのするところは本当

に羨ましい。

と、レンは胸に注がれる視線を感じて、「ふむ。しかし、本当に良い身体してるな。男から言い寄られて仕方ないだろ」

「いや、まあ、何度か告白されたことはありますけど。ここの人たちつてだいたい結婚してるじゃないですか」

「ちなみに奥様から追加の伝言です。『可愛い子相手だからって鼻の下伸ばさないこと』と」

「はっはっは。今更あいつ以外の女に現を抜かしたりしないって。せっかくだから目の保養にはさせてもらうけどな」

本当に豪快な人である。

こつそりと視られるよりはこうして無遠慮な方がまだマシだ。レンは持ち上げかけていた腕を下ろし、視たいなら好きだけ見てもらうことにする。

ケントはレンたちが持ってきた物資の中から干し肉を取り出すとナイフで削って齧り始める。ファイアの魔法であぶってやると「おお、便利だな」と喜んでくれた。

「で？　ここに来たのは何の用だ？」

「はい。四十六階から五十階までの攻略を手伝っていただきたくて、お願いに来ました」

「……ああ、あそこか」

すつ、と、最強の戦士の目が細くなる。

「あそこは確かにきつかったな。……つていうか、四十五階までをもう踏破したのか。俺達が何年かけて攻略したと思ってたんだ。泣くぞ」
「みなさんが必死に情報を集めてくださったおかげです。初見だったらこんなに早くは攻略できませんでした」

「そう言われると悪い気はしないな」

最初から泣くつもりなんてなかっただろうに、彼はそう言うてにっくと笑う。

「別にいいぜ。助っ人は慣れてるし、もう一回あそこで戦うのも良い修行になるだろ」

「本当ですか？」

「ああ。……ただし、一つ条件がある」
来た。

さすがになんの支障もなくOKしてもらえとは思っていない。
なにかしら無茶振りをされるくらいは織り込み済みだ。

多少の面倒を受け入れてでもケントには力を貸して欲しい。

果たして一体どんな条件を出されるのか、緊張しながら待って、

「どうせならあいつも連れて行く。どうせ体力落ちまくってるだろうから少しは運動させないとな」



「……で、私まで同行しろと？ 君は本当に自由だな」

「そう言うなつての。健康的な生活してないと早死にするぞ、リーダー様」

「私が死んだらそのレンに引き継ぐので問題ない」

「いやおっさん、問題大ありだから」

しれっと言い放った賢者にレンはジト目でツツコミを入れた。

あの後、レンたちはケントの撤収作業を手伝ったうえで街まで戻ってきた。レンとメイの二人がかりなら体重の重いケントでもなんとか飛んで運べる。歩いて山を下りなくて済んだケントは「飛べるってのは本当に便利だな！」と上機嫌だった。

そして、賢者の家へ。

ケントの言った「あいつ」というのは当然のごとく賢者のことだった。街のリーダーを「クラスの隅っこにいるモヤシ野郎」みたいな扱いで連れ出そうとするあたりがクラスメートという感じである。誘われた賢者の嫌そうな顔もまたどこか少年のようでなんだか新鮮である。

「今から死ぬ準備してないで野菜を食べよう。あと運動もしよう」

「君が面倒な役目を引き継いでくれればストレスが減って長生きできると思うのだが」

「わたしが早死にするよ、そんなの」

「サキユバスが何を言っているのだ」

にらみ合っていると、ケントがまた豪快に笑って、

「心配するな。いざとなったら無理やりにも引つ張って行つてやる」

「あのね。魔法を使って抵抗してやろうか？」

「お、いいぞ。俺達二人が本気でやりあつたらこの辺りが壊滅するだろうけど、やるか？」

「いやいや、二人とも本気でケンカしたら駄目でしょ」

フリーと二人で慌てて止めた。おそらく本気ではなかったと思うが、五パーセントくらいは本当に始まる可能性もあった気がする。

「ケンカをするのでしたら私が避難してからでお願いします」

「メイ、ステイ」

「わんわん」

相手が戦士ということ。「腕つぶしで俺に勝ったら協力してやる！」みたいなノリを想定してメイを連れてきたのだが、結果的には特に連れて行かなくてもよかつたかもしれない。

「まあ、おっさんもたまには活躍してくれないかな。わたしたちにばっかり戦わせてたら説得力がないよ」

「私だってダンジョンへ潜つていないわけではないぞ。五十四階まではクリアしているしな」

「俺よりずっと頻度低いだろうが。忙しいとか言つてどうせ本ばかり読んでるんだろ」

「失礼な事を言うな。私の仕事は主に交渉と相談だぞ」

「ほー。それは確かに可愛い女の子に任せた方が捗るかもな」

「だろう？」

「そこで意気投合しないでください」

なんとか後継者の話題からは離れてもらって、

「とにかく、協力してくださいありがとうございます。わたしたちはもう少し、一緒に行つてくれる人を探してみたいと思います」

「おう。で、アテはあるのか？」

「声をかけられそうな人なら何人か」

川と山を作る過程で知り合った人たちとか、コスプレショップの店長さんとか、マリアベルとか。

四十五階までクリアしてない人がいるのなら手伝ってもいいし、あと二、三人くらいは集められるのではないだろうか。

するとケントが「だったら」と、

「どうせなら美人で揃えようぜ」

また変なことを言い出したよこの人、と、微妙な顔をしたら賢者も似たような表情を浮かべていてお互いさらに微妙な顔になった。

◇ ◇ ◇

とはいえ、話を聞いてみるとそんなに突飛な提案でもなく。

「構いませんよ。アイリスと一緒に戦うのもいい経験になるかもしれませんが」

ケントが誘おうと提案してきたのはパーティメンバーの親世代だった。つまり、アイリスの母とメイの母である。

彼女たちはエルフとゴーレム。

年齢的な衰えは存在しないし、レンの魅了で変なことになる心配もない。知り合いなので息も合わせやすいといいたいことづくめだ。

試しにお願いしに行ってみると、アイリスの母——アンナは微笑と共に了承してくれた。

「えー。お母さん、私たちとの冒険はー?」

むしろ難色を示したのは妹たちのほうで、レンは彼女たちを宥めるために一緒に遊ぶことになった。

「メイの妹も一緒なんだよね? だったらしばらく別の人と一緒に……あ、シヨウたちならちようどいいんじゃないかな」

「レンさん、私たち、男の子は子供っぽいのであまり好きではないんです」

「アイナたちだってそんなに歳変わらないでしょ」

アイリス
姉の協力もあつて二人はなんとか納得してくれた。

シヨウたちも「一時的になら」と変則パーティを了承してくれ、ネイティブ世代の有望株が期せずして協力しあうことになった。

「後はメイのお母さんかあ。なにげにちゃんと挨拶しそびれてるんだよねえ」

「別にうちの母には挨拶など必要ありません」

「いや、メイちゃん。今回はそういうわけにもいかないでしょ」

「あの女は『彼との時間が減るから』とか言って難色を示すかもしれないません。ここは先んじて対価を示すのが良いでしょう」

「具体的には？」

「ご主人様のエロ技術を伝授するのが良いかと」

「……わたくし、対価と言われたのでお金や物を想像していたのですけれど」

真面目なシオンはドン引きだったが、結果的にメイの母は同行をOKしてくれた。

条件はレンとのエロ談義の他にもう一つ、ダンジョンに潜っている間はアイリスの家に旦那を預かってもらうことだった。理由は悪い虫が付かないように。歳を取らない美人が甲斐甲斐しく世話をしてくれているのにそうそう浮気なんてしないと思うのだが……心配なものは心配、ということらしい。

ともあれ、これで協力者が四人。

前衛一人、後衛一人、アイリスの母とメイの母は状況に応じて動きを変えられるオールラウンダー。強いて言うなら回復役が足りないが、

「アイリス。生命の精霊の扱いはまだ苦手なの？ この機会に覚えておきなさい」

「う、はい」

戦闘中に使うのは難しいタイプであるものの、精霊魔法の中にも治癒魔法はあるということで、五十階攻略に向けた強化パーティがここに結成された。

ベテランたちの大暴れ

四十六階から四十九階まではドワーフの鉱山街が舞台だ。

人より小柄な代わりにながしりとした身体つきをしたドワーフたちはその筋力から優れた鍛冶屋になる。鉱夫にも向いているため、鉄などが取れる山のふもとや中腹あたりに鉱夫と鍛冶の街を築くことが多い——多かつたらしい。

スタート地点は鉱山の入り口にほど近い山の傍。

「さてと。問題は敵の数だな。手分けして片付けるとしようぜ」

階段から外に出るとすぐ、歴戦の戦士——ケントが言った。

なんともあっさりした調子である。あまり人のことは言えないものの、レンは少しだけ「大丈夫かな？」と思ってしまう。

四十六階への挑戦はメンバーが集まってから僅か三日後のことだった。

他でもないケントが「連携の訓練とか悠長にやるくらいなら実践した方が早いだろ。とりあえず四十六階に行つて戦おうぜ」と言ったからだ。

確かに戦力的には十分である。経験者かつ、ここまで生き残つてきた猛者が言っているのだからと乗っかることにした。ぶっちゃけ、ケントと賢者が役に立たなかったとしてもレンたちだけで戦えないこともない。

「そうだな。ここは敵部隊の数が多い。特に厄介なのは完全に別ルートで進行してくる魔法部隊だ」

これには賢者も同意した。

鉱山街は背後を山に守られているため、平地にある街に比べると守りやすい。

敵は不利を補うように三方向から街を攻めると同時にさらにもう一部隊を山へと向かわせてくるのだという。

「各種族のメイジ職、シャーマン職で構成されたこの部隊は炎の魔法で山を崩す事を目的としている。採掘によつて強度が下がった状態だ。繰り返し爆発を起こされれば崩れて街が飲み込まれる」

「めちやくちや回り込んでこつそり作業始めるから鬱陶しいんだよな。初めての時はまんまとしてやられた」

「え、それどうなったの？」

「当然、攻略は失敗だ。我々は帰るために土砂や岩をどかさねばならなかった」

「あの時はお前のファイアーボールが役に立ったよな」

「君の馬鹿力もな。人力であれだけ作業できるのだからその筋肉も無駄ではないということだ」

まとめると、レンたちはパーティを四つに分けなくてはならない。

「じゃあ、魔法部隊はわたしとシオンでなんとかします」

「大丈夫か？ 敵は遠距離攻撃の使い手だぞ」

「問題ありません。レンさまと二人だけならば身軽ですから」

「シオンは空を走れるから、機動力ならたぶん一番ですよ」

おまけに火力もやばい。

そういうことなら、と、ベテラン勢はあっさり頷いて、

「では、左翼は私とアイリス、ミーティアさん、フリーさんで。能力の近い者同士ですので連携しやすいと思います」

「おう。じゃ、真ん中は俺とこいつでやるか」

「右翼は残りの二人に任せよう。右翼が最も別動隊に近い。レンとシオンは終わり次第、メイたちを援護してやってくれ」

「わかりました」

そうと決まれば早速行動開始。

今回は「街の人にかけて守りを固めてもらう」作戦は使わないことにした。

なにしろ相手がドワーフである。エルフなうえにダークなミーティアは最悪なレベルで相性が悪い。

加えて、ドワーフたちはわりと普通に襲撃を警戒しているため警告しなくても戦ってくれるのだとか。この辺り、既に世界が戦争状態になった後の話なのかもしれない。

「じゃ、行こうか、シオン」

「はい、レンさま」

巨大化したシオンに跨り、一気に空を駆ける。

賢者たちから教えられた方角へ向かうと確かに敵がいた。ゴブリ
ン、リザードマン、ダークエルフを中心とする魔法部隊。

少数精鋭、と言っても数は五十近い。その全てが魔法使いなのだか
ら戦車の砲や重火器が服を着て歩いているようなものである。彼ら
は周囲を警戒していたのか、山のほうから飛来してきたレンたちにす
ぐさま気づいた。一斉に足を止め、魔法を準備し始める。

しかし、止まってくれるならレンたちにとっても好都合。

「狐火！」

「マジックアロー！」

ここは火力最優先。

文字通り空を駆けながら九×五〇四十五発の狐火と百×三〇三
本の光の矢を降らせると辺りに光が満ちて目がちかちかした。

敵の中に混ざっていた聖職者系が咄嗟にシールドを張って味方を
守るも、魔法の全てを防ぎ切ることは不可能。敵の二割以上が直撃を
受けて消滅していく。

ばんばん飛んでくる反撃は高さを変えながら走り抜けることで回
避。次の魔法を準備し終える前に方向転換してこちらの二発目。

「数が減ったから狙いやすくなったかな……！」

最初の半分にまで敵が減ったところで、レンはシオンの上から飛び
降りた。

シオンはそのまま敵の上空を駆け抜け、二人とも別々に反撃を回
避。敵集団の前後を取って挟み撃ちにすると、敵の混乱が収まらない
うちにこちらから距離を詰めていった。

肉薄した相手を尻尾でぶった斬り、足で蹴飛ばしながら単発のmana
ボルト、狐火を叩き込む。魔法使いしかいない以上、近づいてきた敵
には弱く、あつという間に数を減らして壊滅した。

出現したドロップ品はとりあえず全部拾って端からストレージに
収納し、

「意外と早く終わったなあ」

「油断は禁物です、レンさま。こちらが楽だったということは、他の部

隊は強敵に違いありません」

「そうだね。メイたちを援護しに行かないと」

再びシオンに乗って敵の右翼を叩きに向かう。

すると、近づくにつれて爆発音が聞こえてきた。既に戦闘が始まっている。

この音からしてこの部隊にもなかなかの数の魔法使いが配備されているのか、と一瞬思ったものの、蓋を開けてみるとそれは味方の生み出す爆発音だった。

ほぼ瓜二つの銀髪美少女二人が砲門となった片腕から例の爆弾――火の魔力をあらかじめ封じこめた使い捨てのファイアーボール発生装置――を発射しては迫りくる敵を吹き飛ばしているのだ。

以前、メイがやっていた「腕から石弾を撃ちだす」戦法と爆弾のコラボレーション。弾の装填はストレージを使って自動かつ高速で行えるため、爆発が間断なく巻き起こる状態。おそらくメイの母の発案なのだろうが、なんというか、

「これ、わたしたち必要がある……?」

「下手に割って入ると逆に危険そうですね……」

さすが、初代ゴーレムは格が違った。

念のため、二人の邪魔にならないよう横合いの遠間から敵にドレインアローを降らせて援護。シオンにはMPを温存してもらいながら様子を窺っていると、三十体程度まで数を減らした敵がメイたちに肉薄し始めた。

そろそろ本格的に加勢すべきかと思えば、

「名付けて炎熱拳です」

「光の剣。それとも光の剣かな?」

加熱された拳で片っ端から敵をぶん殴るメイに、腕から生やした光の刃で敵をぶった斬っていくメイの母。

危なげない、どころか、ちよつと敵が可哀想になってきた。

レンたちが接近する頃には敵なんてほとんど残っておらず、申し訳程度にマナボルト、狐火で一体ずつを片付けたら終わってしまった。

「加勢に感謝いたします、ご主人様」

「久しぶりにたくさん敵を狩れて楽しかったなあ。私もまだまだ捨てたものじゃないでしょう?」

「お母様はむしろもう少し自重してください」

「えー。まだまだ本気出してないのに」

異種族には、というか、四十階以降もノリノリで攻略するような輩には頭のおかしいやつしかいないのかもしれない。

「いや、うん。とりあえず、おっさんたちのヘルプに行こう」

「そうですね。さすがに二人だけでは厳しいかもしれません」

「そう? さつき隕石^{メテオ}が降ってたからたぶん大丈夫だと思うよ」

「メテオって」

ドン引きしつつ四人で向かうと、中央部隊は壊滅寸前だった。

地面には二、三個のクレーターができており、残存兵力は僅か。賢者は後ろの方で「やれやれ」という顔をして待機中。

一方のケインは、

「はっ、これで終わりか!? おい、ちよつと敵の数削り過ぎだぞ! 歯ごたえがない!」

手にした大斧を振り回しては敵を光の粒に変えていた。

「うるさい奴だ。たまには活躍しろと言ったのは君だろう。……と、レンたちも終わったようだな。無事で何よりだ。後はフリーたちか。早めに向かつてやらねばならんな」

「いえ、賢者様。このパターンですとおそらく拍子抜けして終わりかと」

メイの言う通りだった。

そもそも、四部隊に分けたうちの一部隊、しかも本隊でないのならフリーとアイリス、ミーティアだけで十分勝てる。そこにアイリスの母が加わっているのだから勝てないはずがない。

敵を蹴散らし終わったケインが「暴れ足りないからこの後もう一戦しに行こうぜ」と言い出すのを宥めている間に三人の精霊使いと一人の精霊は揃って帰ってきた。

「お帰り。何やら竜巻が発生したようだが、君達の仕業か?」

「ええ。フリーさんのおかげで風の魔力に満ち溢れておりましたの

で、三人で」

「いやー。あれは反則としか言いようがなかったねー」

「……隕石に竜巻ですか。さすがに自然現象にはモンスターもそうそう太刀打ちできませんものね」

ひよつとして四十六階つて難易度低かったんじゃ？　と思つてしまふほどの快勝である。

「なあ、おっさん？　みんなこれだけ強いならもつと先に進めるんじゃ？」

「こいつを基準に考えるな。妻子がいる癖に自分を鍛えるのを止めず、最前線に潜り続けている男だぞ」

「はっはっは。って、お前が言うなよ。お前のクラスは研究で経験値が入るんだろうが。俺と同じくらいレベル上がってるんじやないのか」

「さすがに君の修行馬鹿には及ばないだろう」

ナチュラルに喧嘩し始めた二人は放っておくとして、つまり彼らは上澄みも上澄みなのでさすがにみんながみんなこんなに強いわけではないらしい。

「私とレイも衰えを気にする必要のない身ですからね。生活に追われて鍛錬の機会が減っている方や戦いの勘を忘れている方も多いでしょう」

アイリスの母がまとめてくれたところでみんなで帰ることになった。

帰りは徒歩、ではなく賢者の魔法でテレポートである。まさかの一瞬での到着に呆然となってしまう。レンたちもたいがいチートだと思っていたが、他の職業も極めると馬鹿みたいなことができるらしい。

「ところで、報酬の件なんですけど。わたしたちと皆さんで二等分で大丈夫ですか？　全部持つていつていただいてもいいくらいなんですけど」

「人数割りで良からう。別に我々は金に困っていない」

「ああ。全部お前らが持つて行ってもいいくらいだぜ。いや、レイに

消耗品代くらいは渡してやった方がいいか」

「報酬は別でもらう予定だから気にしなくてもいいよ。でも、せっかくだから『実地で』報酬をもらうくらいの色は付けてもらおうかなー」
「え」

「あ、もちろんレンちゃんが自分の身体にやるんだよ？ 私はそれを見せてもらうから」

「お母様、暴走しすぎです」

「うーん。メイちゃんがいい性格してる理由がなんとなくわかってちゃったかも」

実地はともかくとして、四人には消耗品代＋手間賃として最低限の額を支払い、それ以外はレンたちがもらうことになった。

神殿まで戻ってきたところで、部外者がいるせいであまり会話ができなかつたミーティアが息を吐いて、

「この調子なら五十階まで簡単そうね？」

「そうでもないぞ」

賢者がこれを否定。

「前にも少し話しただろう。五十階はこれまでよりも遥かに手強いかつて我々はあそこを終着点だと思っていたのだ、と」

「そういえば、そんなことも言ってたっけ」

これまでダンジョンは五階区切り、十階区切りで難易度が上がってきた。

なら、五十階区切りでは？

少なくとも賢者たちが勘違いするくらいには手強い、ラスボスのような敵がいたはずだ。

「いったい、五十階にはどんな敵が出現するのですか？」

「敵は一体だ。飛行船の如き巨体を鋼よりも硬い鱗で覆い、丸太のように太い尻尾をうねらせて触れる者をなぎ倒す。その牙は大岩をあっさりとかみ砕き、体内の炎袋からは高熱の炎を吐き出す。地球の生態系では説明できない異形。ファンタジー世界においてなお畏怖を受ける最強の生物」

ドラゴン。

「人間の都を襲ってくる竜を撃退する。言ってしまったえばただそれだけのミツシヨンだ。……一度味わえば『この世の終わりか』と目を疑うような地獄だが、な」

ダンジョンを攻略し始めた頃は遙か遠い話だった「その場所」がすぐそこにまで迫っていた。

伝説の一ページ

四十七階から四十九階の戦いは取り立てて語ることもなく無事に終了した。

次は五十階。

レンたちにとっては大きな節目である。

気づけばすでにカレンダーは五月。推定百階まで同じペースで行ってもあと四年かかる計算であり、これが終わったらさすがに一度休んだ方がいいのでは、という気持ちが大きくなってきている。

ともあれ、全ては勝つてからだ。

「さてと。それじゃあ作戦会議つてやつを始めるとしますか」

男性がいるのでレンたちの家は使えない。

事前会議のために集まったのは賢者の家である。物がごちゃごちゃしているこの家に十人はぶっちゃけ狭いのだが、この際仕方ない。

家主の賢者が仏頂面になっているのも見なかったことにする。

自然と話の進行役となったケントが宣言の後、さっそく口を開いて、

「相手はドラゴンだ。こいつとの戦いにはいくつか問題がある」

この場における五十階経験者は賢者とケントの二人だけ。アイリスの母やメイの母も初めてらしく、圧倒的に未経験者が多い。

一同、息を呑むような形で続く言葉を待つと、

「最初の問題は待ち時間だな。スタートしてからドラゴンが来るまで一時間くらいかかる」

「は？ そんなのどうでもいいじゃない」

「そこかよ！ とツツコミを入れたくなるような話が出てきて拍子抜けした。」

「というか、好都合じゃないですか？ それだけ時間があれば避難してもらおう時間も取れるんじゃない」

「我々の時はそうもいかなかったのだ。何しろ場所が都だからな。城が鎮座している上に兵の練度も高い。最高責任者に会おうと思った

ら城に入りこまねばならないが、我々は言葉が通じなかったからな。散々な目に遭った」

街中で騒げば怪しまれ、ドラゴンの前に兵士と一戦交えることにさえなつたらしい。その回は結局帰って仕切り直すことになり、次回は再び一時間待ちからスタート。

そう考えると確かに「敵が来るまで一時間」はかなり厳しい。

まして初回は何が敵か、いつ頃来るのかさえわからないわけで。初めて攻略した者たちは「こうしている間に敵がこっそり侵入しているのでは」という疑心暗鬼にさえ囚われたのではないだろうか。

「今回はミーティアがいるから最低限の交渉はできそうだね」

「もちろん構わないけれど、あなたたちもいい加減、最低限の受け答えくらいはしなさいよ?」

「うん。まあ、単語レベルの会話ならなんとか……?」

白髪赤目のダークエルフのお姫様はふん、と鼻を鳴らすと「都の特徴を教えなさい」と賢者たちから詳しい話を聞き出し始めた。

いくつか特徴を聞くと見当がついたらしく「ああ、あそこね」と頷く。

「……あの国の王都にドラゴンなんて。本気で世界の終わりのようじゃない」

せつかく会話ができるのだから説得・交渉を試みる、というのには全員が同意した。

説得できなかつたらできなかつたでレンたちだけで戦うとして、話はドラゴンとの戦いへと移る。

「賢者さん、勝利条件ってなんなの?」

「確定できるほどのデータがないが、おそらくはドラゴンの討伐だな」

「それだけ?」

「それだけだ。最悪、都が滅んでいてもドラゴンさえ殺せば達成になると思われる」

「俺らの時も六割がた壊滅してたもんな」

「六割って、それだけ壊れたら復興にどれだけかかるかわからないじゃないですか……!」

アイリスが悲痛な声を上げるのも無理はない。

ただ、これに賢者は「焼野原から数十年で世界有数にまで上り詰めた都市もある」と淡々と答えた。

無慈悲すぎると言うべきか、「どうせ作り物なのだから」と言わなかっただけマシと言うべきか。

「戦術はどうするのですか？　遠距離攻撃で片を付けるに越したことはないと思いますが」

「近づかれる前に私がメテオを撃てるだけ撃ち込む。だが、それで倒すのは不可能だろう。そうなったら私は君達へかけられるだけのバフをかけてお役御免だな」

「フリーだっけか。お前が飛ばしてくれりゃ俺もドラゴンと接近戦ができるぜ」

「えー。男に憑依するのなんか気分的にやなんですけど」

「んなこと言ってる場合かよ。こいつに飛ばしてもらってもいいけど、それだと一撃入れて終わっちまいかねないんだって」

賢者の魔法で他者を飛ばそうとすると文字通り「飛んでけー！」という感じで制御とか一切ないらしい。ケントならまあ、落ちてもし生き残りはするのだろうが、なんというか普通に自殺行為である。

ケントにはシオンに跨ってもらおう、という手もあるが、守りの薄いシオンに重量物を搭載して接近戦をさせるのはさすがに怖い。

「しようがないなあ。じゃあ、今回はケントさんで我慢してあげる」

「私たちは弓による遠距離狙撃と風の魔法によるブレス対策に専念しましょう」

アイリスの母の提案にアイリス、ミーティアが頷く。風の精霊魔法でブレストをかければかなりの遠距離からでも矢が届く。ケントが接近戦を始めたら街への被害を減らすため、風でブレスを防ぐ方向にシフトだ。

「わたしやシオンの魔法だとけっこう近づかないとだめだよね」

「人間大の生物にとっては遠距離攻撃だが、ドラゴン相手ではブレスはおろか、下手をすると尻尾ですら射程内だな」

「おまけにあいつ、ちよつとした傷なら再生するからな。ちまちま

やっても効果薄いぜ」

「うわ。じゃあ尻尾で切ってもあんまり意味ないかあ」

再生能力のできるのは傷の治療だけのはず。体力の消耗までは抑えられないので無駄ではない。ゲーム風に言くと最大HPはちよつとずつ削れていくはずだが、ちよつと気が遠くなりそうだ。

「メイさまたちはどうなさいますか？」

「私たちも基本は狙撃かなー。ドラゴンに殴られたら即死しかねないし。とっておきの兵器を持って行くことにするよ」

「当然、ポーション類は各自、可能な限り携帯していくように。ドロツプ品の分を空けておく、などとは考えるな。ストレージに詰め込めるだけ詰め込んでおけ。容量が足りなければ捨てて帰ればいい」

なんとも贅沢な話だが、安全のためには当然の措置。

その他、装備もできるだけ強化しておく。例によって魔力強化・防御用のマジックアイテムが中心だ。

同じ効果のマジックアイテムをいくつもつけると二つ目以降の効果弱まるという欠点があるらしいのだが、装備しないよりはマシ。ファクション的にやりすぎなものもこの際我慢してじやらじやらつけておく。

例えば魔法防御力UPと物理防御力UP、耐火はそれぞれ別の効果として扱われるのでこの辺りも上手く活用する。マジックアイテムをぼんぼん買えるようになったのもここまで来たおかげ。ここで死んで台無しにならないよう、やりすぎなくらい投資しておく。

「各自、十分に注意するように。決行は明後日だ。体調も整えておけよ」

「みんな生きて帰って打ち上げをしよう……!」

おう、という元気な声が唱和して、その日は解散。

決戦の時がいよいよやってきた。



大陸有数の都市である聖王国の首都。

都が誇る大神殿で巫女見習いをしている少女——エルは先輩から命じられたお使いの帰り道、見慣れない集団へと目を留めた。

眉目秀麗な五人の若い女性。

金髪のハーフェルフに、人間とは思えないほど顔立ちの整った銀髪の女性。緑の髪をした神秘的な美女。紫紺の髪と瞳を持った美女には何故か目が惹きつけられる。彼女の頭には見たことのない小さな獣がちよこんと乗っており、集団の注目度を上げている。

そして、なんとと言っても最後の一人。フード付きのコートで姿を隠し、手袋まで嵌めて徹底的に肌を隠した女性。怪しい。他の四人がその美貌を晒しているだけに余計に怪しい。どこかの国の王族がお忍びでやってきたのか、あるいは神の化身か。

そうでなければ魔物が化けているのでは。

お使いが遅くなると叱られる。わかってはいるのについつい目で追ってしまったエルは、不意に吹いた強い風に手にしたカゴを慌てて押さえて、

「——っ」

顔を上げたところで、あの怪しい女性のフードがほんの少し乱れているのを見た。

フードの端から覗くのは褐色のとがり耳。

何度もまばたきをした後、周りをきよろきよろ見渡して「夢じやないよね……？」と訝しむ。フードはすぐに直されてしまったため見えたのは一瞬。気づいたのはどうやらエル一人だけのようだ。

女性たちは視線を交わしあい、言葉を発することもなく分かり合ったように城の方へと向かっていく。やっぱり、怪しい。

「あの人、ダークエルフだったよね……？」

人の側に属するエルフと違い、ダークエルフは魔の側に属する種族だ。森を好むため人里に現れることは多くないものの、人間を下等な存在と考え支配することを好んでいるという。ダークエルフに攫われた人間は一生深い森の中で奴隷として扱われる、というのは有名な伝承だ。

平和なこの街に、ダークエルフが。

巫女見習いとして日々「善行を積み」と教えられているエルは「もしかして一大事なんじゃ？」と考えた。彼女たちがなにか悪いことを企んでいて城を狙っているとしたら、今のうちになんとかしないとまずいかもしれない。

でも、見間違いだったら？

でも、見間違いじゃなかったら？

「追いかけてみよう……！」

しばらく考えた後、エルは女性たちの後をつけることにした。

見習いとはいえ巫女の制服を着ているエルは王城の近くまで行っても咎められない。神殿自体が城の隣（といっても城の大きさに結構距離は離れているのだが）にあるからだ。

だから、謎の集団をつけることができた。

まさか本当に城へ行くなんて思わなかったけれど。

「どうしよう」

ダークエルフは魔法を使える。城に攻撃されたら取り返しがつかない。

エルは見習いで、使えるのはすり傷を癒す程度の回復魔法だけ。年齢的にも成人している女性たちよりはだいぶ若い。できることなんてほとんどない。

それでも、知っていたのに見過ぎすなんてできない。

「あ、あのー！」

思った時には駆け出して、怪しい女性のコートを掴んでいた。

「離しなさい」

流暢だが訛りを感じる発音。強引に振りほどかれそうになるのに抗いながら「あなた、ダークエルフでしょう!？」と叫んだ。

人通りは決して多くないものの、それは周囲の警戒が強いからだ。すぐに衛兵が寄ってきて「何の騒ぎだ!？」と尋ねてくる。

「この人、ダークエルフです！ きつと悪い人です！」

子供の戯言、と片付けられても仕方のない話。

実はこの人はダークエルフでもなんでもなくて、衛兵と女性たちから二重に怒られた挙句、神殿に帰っても怒られるという最悪の事態を

想像したエルは、フードの女性がちっ、と小さく舌打ちするのを聞いた。

信じられないと目を見開いたところで、

「まあ、いいわ。いずれにしても名乗るつもりだったわけだしね」

フードごと脱ぎ捨てられたマントの下からダークエルフの美少女が現れた。

「私の名前はミーティア。黒き林檎の紋章を掲げるビーカネイリンの森の部族、その第二王女！ 見ての通り敵意はないわ。緊急の用件よ。今すぐ王に会わせなさい」

「なっ……!?!」

「ダークエルフの王族……!?!」

なんだか、とんでもないことになってしまった。

ぽかん、と口を開けて立ち尽くしているうちにエル、というか女性たちは衛兵に取り囲まれ、エルはあつという間に外へと押し出されてしまう。

気を利かせた衛兵の一人が「帰りなさい」と言ってくれたのでとぼとぼ帰り、当然のように先輩から叱られた。城の前であったことを話すと「嘘は止めなさい」と全く信じてもらえなかったものの、程なく城から騎士がやってきて、

「ダークエルフが都に!?! エルが言っていたことは本当だったのね」

「だから、そう言ったじゃないですか!?!」

頬を膨らませて怒ってみたものの、反応してくれたのは同期の見習いたちだけだった。その間にも話は進んでいて、ひそひそ声だったのでエルに聞き取れたのはごく僅か。

「都に危険が?」

「可能性はあります。ですから至急、聖女様に面会を——」

ダークエルフの姫だというミーティアはその発言を端から信じてもらえたわけではないらしい。ただ、ダークエルフが現れて王族を名乗り、意味深な発言をしているというだけでも事件だ。念のために警戒を強めようとするのはおかしいことではない。

もし、悪いことが起こった場合、神殿は人々の助けになるのが務め。

怪我をした人がいれば癒しを与えなければいけないし、天災でもあれば緊急の避難場所にもなる。エルたち見習いが有事のために集合して待機していると、先輩巫女がやってきて、

「都に魔物が襲撃してくる可能性があります」

驚くべき事実を告げてきた。

ざわつく神殿内。そんなことを言っただけでどうせ大したことはないのだろう。多くの同期がそんなことを呟いたし、エルでさえ何事もなく終わることを予想した。

けれど、事態は悪い方向へとどんどん進んでいった。

都中に警報が鳴らされ、神殿は最大の警戒態勢に移行。エルたち見習いまで総動員して窓や出入り口の閉鎖と補強、避難してきた住民の受け入れ、食事の支度などを行うことになった。

こんなことになった原因はダークエルフの暴走、ではなく、

「ドラゴンです。間もなくこの都を悪しき竜が襲いに来ます」

伝説的存在の襲来。

竜の力なのか、少し前まで穏やかだった風は嘘のように激しくなり、空にも雲が目立ち始めている。

まさか、そんなことが。

誰もがそう思う中、ドラゴンは本当にやってきた。大空に響き渡るような咆哮。そして聞いたこともないような大きな爆発音が閉め切った神殿内にまで響き渡ったからだ。

戦いには大神殿の長である聖女様までもが駆り出された。

激しい戦いが行われているのか、残った聖職者によって防壁を張られた神殿にさえ大きな衝撃が何度も襲った。壺や花瓶が割れ、窓に嵌めた木板が砕け散る。

居ても立ってもいられなくなったエルは制止の声も無視して窓に駆け寄り、空を見上げて、そして見た。

空を舞い竜と戦う英雄たちの姿を。

英雄の戦い

『まったくもう、あの子供に引き留められた時はどうしようかと思っただわ』

『まあでも、おかげで話が早く済んだよね』

スタート地点は都の中、あまりグレードの高くない住宅街の一角にある空き家だった。

城へ説得・交渉に向かうにあたってレンたちは大人組といった別行動を取ることにした。レンたちだけなら気兼ねなくテレパシーが使える。メインになるのが日本語勉強中のミーティアなのでこの方が動きやすい。

あらかじめ変装道具は用意していたためさつそく外に出て城を指したのだが——いよいよ城へと近づいたところで見習いの巫女らしき少女が「この人はダークエルフだ」と騒ぎ出した。結果的にはこれによって注目が集まり、ミーティアの名乗りにインパクトが生まれた。

周囲を衛兵に取り囲まれた状態で城内へと連行されたレンたちは対応に出てきた騎士へドラゴンの出現を訴え、特例として国王への謁見を許された。

(ちなみにレンは容姿を変えるスキルで翼と尻尾を一時的に消滅させ人目を逃れた)

ミーティアの所持品にダークエルフ王家の紋章があったのも大きかっただろう。

「もうすぐドラゴンが都を襲撃する、だと?」

「ええ。もはや一刻の猶予もないわ。被害を減らしたいのなら今すぐに行動するべきよ」

例によって異世界語の会話は「だいたいこんな感じ」と単語と雰囲気から読み取ったものである。

四十代の国王は「にわかには信じがたい」と唸りながらも騎士や宮廷魔術師に指示を出し、五分も経たず遠視などの魔法によってドラゴンの接近が確認された。

一気に緊迫感を増した国王以下、異世界人たちは最大レベルの警戒態勢で動きだした。騎士や兵士を総動員して門の閉鎖や住民への警告、神殿への協力要請などを行うと共にドラゴン迎撃の準備を開始。「警告に感謝する。其方らの報がなければさしたる対応もできないままに最悪の局面を迎えていた事だろう」

「礼には及ばないわ。私たちはただ少しでも楽がしたかっただけだもの」

おそらく、ミーティアの警告がなくてもドラゴン自体は発見されただはずだ。

城壁には二十四時間警備の兵が配置されている。なにしろ巨大な生き物なので、ある程度接近してくれば否応なくわかる。

慌てて城まで連絡が行ったとして——警告があつた場合となかった場合の時間差は十五分から二十分といったところか。この差は小さいようで大きい。

「楽、だと? ……まさか、竜と戦うつもりか?」

「そうよ。一番の目標は最初からそっち。警告はあくまでもついでに過ぎないわ」

「……馬鹿な」

「虚言でも冗談でもない。たとえあなたたちが何もしなかつたとしても、ドラゴンは私たちが必ず倒す」

ちらり、ミーティアの視線を受け取ったレンはサキュバスとしての真の姿を現す。

ついでにフリーリが非実体化し、シオンが身体を大きくすると大きなざわめきが発生。

「静まりなさい。私たちに害意があるならこんな悠長な話し合いはしていないわ。邪魔をするなら殺す。それだけよ」

「……むう。ミーティア王女。其方らの目的はなんだ?」

「ドラゴンを殺すこと。あなたたちに要求するのは私たちと、街で待機している仲間の邪魔をしないこと」

「よかろう」

どのみち言い争っている時間はない。王は「毒を食らわば皿まで

だ」と口にする。「この者達の邪魔をしないよう全ての騎士・兵士・魔術師に伝達せよ」と部下に命じた。

「なら、私たちは行くわ。できる限りのことはするから、そちらはそちらで被害を減らす努力をしなさい」

「わかった。其方らの助力に感謝する。……その言葉に偽りが無いことも、な」

「疑り深いのね。まあ、無理はないけれど。安心しなさい。目的を果たしたらさっさと消えるから」

廊下へと出たレンたち。

時間が惜しいので適当な窓から空へ。賢者へはレンが魔法で伝言を送り、空き家の屋根の上で合流。

「ご苦労だったな。ドラゴンの到着まではあと十分だ」

以前に転移してきた教師——既に老衰で亡くなった男性の遺品だというねじ式腕時計を確認しながら賢者が宣言。必要なくなった腕時計は万が一にも壊れないようストレージに収納され、

「始めるとするか」

「うん。行こう、みんな」

ドラゴンとの戦いがいよいよ幕を開けた。



一行はまず城壁まで移動した。

ケントにはシオンに乗ってもらい、壁の上に作られた見張り台および連絡通路へと陣取る。既に連絡が済んでいるのか、兵士たちはレンたちに敬礼をして場所を開けてくれた。

「お、来てやがるな」

空の彼方から飛来する竜の姿が遠目に見える。

体色は赤褐色。身体のサイズはレンたちの高校の校舎よりは明らかに大きい。学校サイズというのは子供の数が多かった平成初期の感覚か。その大きさの身体に極太の手足が付いており、その手足には鋭利な鉤爪、さらに後方には凶悪な尻尾まで備えているのだから意味

が分からない。

もはやモンスターというより怪獣と言った方が正しいサイズ感と威圧感。

こうしている間にも少しずつ大きくなっていくその姿を睨みつけながら、

「おっさん、頼んだ」

「ああ」

MPポーションを2ダースか3ダースか実体化させた賢者は軽く足を広げて立つと、ストレージから長い杖を取り出し両手で握った。

ポーションはレンとフリーが抱えてすぐに差し出せるようにする。

たん、と、杖が床に突き立てられると同時に魔法陣が展開され、中年魔法使いの魔法をさらに強化していく。

「――隕石招来」
メテオストライク

一瞬、空でなにかが輝いた。

直後、高速で落下してくるのは赤熱した岩の塊。サイズはちよつとした犬小屋程度。

ゲームだともつとでかいのがぼんぼん落ちてきたりもするが、

「衝撃が来るぞ。念のため注意しとけよ」

ケントからの忠告。

直撃した隕石はレンたちのいる地点にまで軽い衝撃をもたらした。光と熱が辺りの空気を温め、兵士の何人かが悲鳴と兜を脱ぎ捨てたが、マジックアイテムに守られたレンたちにはこの程度ではなんの影響も及ぼさない。

開栓したポーションを賢者の口に直接当てて飲ませる。レンとフリーから一本ずつを飲まされた賢者はさらにメテオを召喚。

咆哮。

ドラゴンの頭上に半透明のシールドが大きく展開され、隕石を受け止めた。

力を失った岩は小さく砕けながら地面へと落下していく。

「やつぱ直撃するのは最初の一発だけか。二発目からは魔法で防いできやがるな」

「いや、魔法も使うのあいつ……!?!」

「防御魔法だけけどな。いや、身体強化とかも使ってるのかもしれないし、ブレスも魔法だったりすんのかもしれねえけど」

「構わん。HPだろうとMPだろうと消耗させられればそれでいい」
次々と空になっていくポーション。防がれ続ける隕石。到着し始めた魔術師隊と聖職者たちが衝撃波や熱波を魔法で防ぎ始める。

「じゃ、私たちもやろっか、メイ」
「ええ」

メイの母がストレージから二本の長い筒のようなものを取り出し、片方を娘に渡す。

筒と言うより砲と言うべきか。ゴーレムの母娘はそれを互いの背中に装着するどがしやんと、肩に担ぐようにして展開。

立膝をして体勢を安定させた二人は砲から勢いよく球体を射出し、ドラゴンへと直撃させる。

爆発。

ファイアボム ロングバレル
「火炎爆弾・長距離砲撃仕様」

「コストは通常ボムのさらに二倍ですが、威力は二倍以上です」

「もう本当に爆弾っていうか……」

「いつそプチメテオって呼んだ方が良い感じだよね」

この砲撃も二発目以降はシールドで防がれ始めたものの、展開範囲を広げたうえに頻繁にダメージを受けていけばMPがどんどん削れていくはず。

周りの兵士たちも隕石と爆発の余波で被害を受けているにもかかわらず「すげえ」「なんだよこの威力」と大興奮。凶らずも士気が上がっている。

そして。
レンとフリーの抱えていた瓶が全て空になったところで頃合いが来た。

「潮時だな。後はお前たちに任せるとしよう」

魔法陣を消した賢者は杖を下ろすと新しいMPポーションを取り出し、一気に飲み干す。その後には紡がれたのはありったけの補助魔法

だ。

「では、アイリス、ミーティアさん」

「はいっ！」

「ええ」

風の精霊魔法で強化されたエルフの矢は通常の射程を大きく超えて飛び、ドラゴンの鱗へと傷を作った。

鬱陶しそうに怒りの声を上げるドラゴンだが、MPが心許ないのかダメージが小さいためかシールドは展開して来ない。

接近するにつれ、兵士たちの弓（ロングボウの他にクロスボウも含む）と魔術師隊のファイアーボールが加わってもそれは同じ。

矢や魔法で小さな傷が生まれてもそれらは端から少しずつ治癒されていく。

再生能力。

盛り過ぎなくらいの能力だが、だからこそそのファンタジー最強生物の称号か。

「つし、俺達も行くぞ、レン、フリー、シオン」

「え、もう行くのケントさん。まだみんな攻撃してるよ？」

「後ろまで回り込めば奴が盾になってくれるだろ。それに、壁を超えられる前の方が戦いやすい」

「ん、もう、しょうがないなあ」

精神体となったフリーがケントに同化し、彼のMPを使ってふわりと浮き上がる。戦士はMPを使わないのであるだけ飛行につき込める。ある意味、相性はいいのかもしれない。

「じゃあ、シオン。わたしたちも」

「はいっ」

レンとシオンもそれぞれ自分の方法で空へ。

動きだすとみるみるうちにドラゴンが近くなってくる。爬虫類特有の眼、人間くらい軽く丸のみできそうな口、軽く撫でられただけで骨折してしまいそうな手足。

威嚇の咆哮にぴりぴりと震える空気。

顔をしかめながら速度を上げたその時、大きく開いたドラゴンの

口、その奥に輝きが見えた。

ブレス。

あれは撃たせる前に止めた方がいい。レンとシオンは同時に自らの魔法を起動。

「マジックアロー！」

「狐火！」

光の矢が全身を襲い、炎が次々と顔に着弾するとドラゴンは集中を乱されたのか口の輝きを消した。

代わりに両翼が大きく羽ばたき、ただそれだけで突風が巻き起る。

「わっ」

「きやつ!？」

「ご、ごめんシオン」

「いえ、大丈夫です！　ですが……」

もろに吹き飛ばされてしまったレンは近くにいたシオンに衝突。幸い、羽毛の効果もあつて二人とも怪我はなかったものの、

「レンさま、わたくしの背に乗ってください」

「でも」

「わたくしならば空中でも踏ん張りがききます。翼で竜に接近するのは困難かと」

「……ん、わかった。ありがとう」

ここは大人しく言うことを聞くことにした。

レンが背中にしがみつくと、シオンは大きく高度を落とし下から狐火を放ちながらドラゴンの後方へとまわりこんでいく。

一方、風自体を操って飛んでいるケント+フリーは比較的影響がなかったらしく、大きく横に回り込む形で移動していく。

そこへ風を切つて振るわれる尻尾。

「うおっ、危ねえ!？　フリー、あれ思ったよりリーチあるから気をつけろよー」

「わ、わたくしたちも気をつけましょう」

「う、うん」

ケントはともかく、レンたちだと一撃で気絶くらいはしかねない。ドラゴンの後ろを取ったレンたちは尻尾が届かない距離を維持しながらマジックアローと狐火を連射。

そこへケントが追いついてきて、

「ちっ、もうすぐ壁に着いちまうな。さっさとぶった斬るとするか。お前ら、牽制を頼む！」

「はいー！」

レンたちの魔法を追いかけけるように最速で飛んでいくケント。

鞭のようにしなる尻尾をかわし、ドラゴンの背中へと肉薄すると巨大な斧を振るい——金属同士が衝突するような音を立てて硬い鱗がはじけ飛んだ。

刃が肉に食い込み、重油のように黒ずんだ血液が宙を舞う。ドラゴンの悲鳴。

壁の上の面々が退避していく中、ドラゴンは怒りに任せて腕を振るった。頑丈に築かれた城壁が玩具のブロックのようにバラバラになって崩れていく。瓦礫は都の内部にも落ちて建物の屋根を一部砕いた。

街に人の姿はない。

既に家の中へと隠れるか神殿などに避難したのだろう。もちろん、このドラゴン相手では家の中にいたところで安全とは言えないが、生身でいるよりは幾分かマシだ。

レンたちにできるのは、少しでも早くドラゴンを倒すこと。

「つと、暴れんなよトカゲ野郎！ 上に乗っちゃえばこっちのもんだ！ フーリ、もう行ってもいいぞ！」

「いいの？ 落ちたらさすがに大怪我するよ？」

「怪我が怖くて戦士なんてやってられるかよ！ いいから行け！」

「わかった。じゃ、私も私にできることをするよ」

分離したフーリが非実体化状態のまま飛んできて、レンのところへ。

「シオンちゃん、レンは私が預かるよー」

「かしこまりました。では、わたくしたちでケントさまを援護いたし

ましよう」

久しぶりにフリーと溶けあうと、風の加護により身体が一気に軽くなった。これならドラゴンの羽ばたきにも負けはしない。

レンはシオンと目配せをしい、時にはテレパシーで合図を出しあいながら飛び、それぞれ別々の方向から魔法を撃ち込んでいった。

「マナボルト！」

「狐火！」

次々と着弾する魔法。悲鳴を上げたドラゴンが大きく身をよじる。ケントは器用にしがみつきながら斧を振るい、敵の身体に傷をどんどん増やしていく。

直後。

下の街から眩い光が生まれたかと思うと、ドラゴンを直撃。熱ではなく清らかさを感じるその光の出所は、一目で神聖とわかる衣を纏った二十代後半の美女だった。その傍には数名の巫女が控え、いつでも魔法を使えるように備えている。

「すごいな。さすがに都にはああいう人もいるんだ」

「レンさま、お城の方からもなにかが来ます！」

「っ、と！」

閃光。

次いで飛んできたのは巨大な、光でできた刃だった。展開されたシールドを切り裂き首へ浅くない傷を作ったその攻撃の主は、城のバルコニーに立ち大振りな両手剣を構える国王。

『この国の国宝。陽光を受けることで魔力を蓄え、光の刃を成す伝説級の宝剣。まさかその一撃をこの目でみることになるとはね』

テレパシーによって届けられたミーティアの声には感嘆と畏怖の色があった。

レンは「まあ王様がすごい剣持ってたらビームくらい撃つよな」というゲーム脳を恥ずかしく思いながら、頼もしい援軍に負けられないようさらなる攻撃に取り掛かった。

決戦の終わり

ドラゴンとの戦いは熾烈を極めた。

あの空飛ぶ大怪獣は炎のブレスを毎回阻止されるのに業を煮やしたのか、やがて圧縮された空気を吐き出し始めた。さしずめ風のブレスと言ったところか。

炎に比べると溜めが短く、これはなかなか阻止できない。

屋根を飛び移るようにして追いかけてきたアイリスたち、あるいは街中に立つ聖職者たちが可能な限り阻止したものの、見えないものを全て撃ち落とすのは至難の業。多少街が破壊されても火事にさえならなければ再建は容易なのでむしろ多少は無視しても構わない。

ドラゴンが狙ったのは王城だ。

さすがに王の立つその場所への攻撃だけは防がないといけない。ブレスの出に合わせて顔を攻撃し、風の軌道を逸らしてやる。何発かが隣に立つ神殿を直撃したものの魔法のバリアが防いで大きな被害にはならなかった。

王の振るう光の刃もまた溜めが必要らしく連発はできなかったものの、やがて二発目、三発目が放たれて竜の身体に大きな傷を作っていく。

劣勢を察したドラゴンはなりふり構わず暴れ始める。

空中で姿勢を変えながら振るわれる四肢と尻尾。その巨体が動くだけで突風が生まれ、攻撃の全てをかわすのはかなりの集中力を要した。加えて放たれる風のブレスだ。狙いが付いていないので辺り構わず適当に破壊するだけだが、破壊された瓦礫に潰される人がいるかもしれない。

「この野郎、いい加減大人しくしやがれ！」

こどもも暴れられるとさすがのケントもなかなか斧を振るえない。

このままでもそのうち倒せはするだろうが、それまでに被害が増えそうだ。

《地面に落とせばもうちよつと攻撃しやすくなるかな》

《あ、そうかもね。落ちた場所が凄いいことになりそうだけど》

この大怪獣を空中で光の粒に変えるのはおそらく不可能。

ならば、と、レンはドラゴンにしがみついているケントに向けて叫んだ。

「翼を斬って下に落としましょう！」

「あ!? 斬るっても、さすがに俺も手いっぱいだよ!？」

「大丈夫です、わたしがやります！」

歴戦の戦士は一瞬、思案するように黙ってから「わかった！」と答えた。

「落とすなら城の庭だ！ 角度くらいはこっちで修正してやる！」

そうと決まれば話は早い。

《行くよ、フリー》

《うん!》

風を纏い、最速で接近。

用いるのは憑依状態でないと使えないフリーの十八番。そこに三重魔法と過剰増幅を乗せて、

「ウインドスラッシュ！」

シールドはもう張られなかった。

巨大な風の刃がドラゴンの左翼に迫り、半ばあたりから見事に切り落とした。

咆哮。

レンへと首を振り向けるドラゴン。その口内から放たれる圧縮大気にぞくりと背が泡立つ。かわす余裕はない。残ったMPを総動員して、

「マジックシエル！」

「ウインドブラスト！」

風の魔法がブレスの勢いを殺し、魔法防壁がダメージを軽減。

車に跳ね飛ばされたような衝撃を覚えながら数メートルも吹き飛ばされ、それでもなんとか飛行能力を取り戻す。自分にヒールをかけながら戦況を確認すると、

「おらっ！ もうちよつと向こうに落ちやがれ！」

ドラゴンの背に仁王立ちしたケントが大振りの一撃を叩きつけ、強

引に落下軌道を変更していた。

さらに下から放たれたゴーレム母娘の魔力爆弾が次々と着弾。落下の衝撃を殺し滞空時間を伸ばしていく。そこにアイリスたちの風魔法も加わって、

《あれ、ちよつと行き過ぎじゃない？》

《あ》

城の広い前庭に突っ込んだ巨体は勢いを殺しきれず城の建物に激突。

防御魔法との激しい争いを繰り広げた後、壁を大きく破壊しながらなんとか止まった。

うん、まあ、建物が倒壊したわけではないし許容範囲だろう。城の魔法使いたちは気が気じゃなかっただろうが、結果オーライである。敵が落下したのを受けて騎士、兵士たちも勢いづき、剣や槍を握って殺到していく。とはいえ竜もまだ戦う力を失ってはいない。翼をもがれ落下のダメージを受けてもなお、一人でも多くの人を道連れにしようとするかのように爪や牙を振るう。

爪がかすっただけで兵士の鎧は大きく抉れ、衝撃が骨を破壊する。仲間に引きずられながら交代した彼らは即座に聖職者の治癒を受け始めた。

相変わらず背中にしがみついたままどつかんどつかん斧を叩きつけているケントの方が異常というか、うん、あれを参考にはしていない。

これならあともう一息か。

手こずらされたものの、街に大きな被害は出ていない。ドラゴン相手にこの結果なら十分に大勝利と言えるだろう——と。

『まずいな。敵の最後の悪あがきに城が耐えきれないかもしれないかもしれん』

賢者からの魔法の伝言。

独り言みたいに言っているが「相談に付き合え」ということだろう。レンは地上に降りると賢者の傍に立った。

「最後の悪あがきって？」

「敗北を確信したドラゴンは自爆するのだ。体内に溜め込んだ炎の工

ネルギーに残る生命力を注ぎ込み、特大の爆弾となって辺り一帯を吹き飛ばす」

「そういうことは早く言おうよ!？」

「必ず自爆するとは限らなかつた。それに、街への被害がどれほど出ようと所詮はかりそめの存在だ。我々が生きてさえいればそれでいい」

「……おっさんは本当にさあ」

要はHPが残っているのが問題らしい。今のドラゴンにメテオでも撃ち込めば自爆する余力は残らないだろうが、そんなことをしたら自爆されたのと大して変わらない被害が出る。

「レン。あの馬鹿をなんとか連れ戻してくれないか。奴が退避すれば後は範囲外まで皆を連れて行くだけだ」

「いや、ここまで来て街を壊されました、じゃ締まらないよ……!」

「だが、ならばどうする?」

「HPを削ればいいんなら一応手はあるよ。足りないかもだけど、やらないよりはマシだよね」

「でしたら、わたくしにも協力させてくださいませ」

降りてきたシオンが狐耳巫女姿に変身し、両手で何かを差し出してくる。

一見するとなんの変哲もない石だが、

「スキルで作り出した殺生石です」

周囲に永続的なダメージを与え続ける特殊アイテム。シオンの性質に影響を受けて神聖よりの属性になっているためモンスター以外には大きな影響がないものの、ほいほい使えるものではない。

設置型であるという点も使いづらさを後押ししているが、今なら。「ドラゴンの体内に埋め込んでいただければ十全の効果を発揮するかと」

「なるほど。……ありがとう、シオン。わたしのやりたいことも一度、あいつに近づかないといけないし、ちようどいいよ」

レンは石を受け取り、再び舞い上がった。

賢者は「まったく、無茶をする」と苦笑いするとレンに再び補助魔

法をかけてくれた。

《レン、やるなら早くしないと》

《うん》

高速でドラゴンへと接近し、

「ケントさん！　ひとつ大きな傷を作ってください！」

「ん？　なんかよくわからんが、わかった！」

既にできていた切り傷に渾身の一撃が振るわれ、肉を通り越して骨が見えた。そこをめがけて急降下したレンは、手にした殺生石を深く埋め込んで、

「ヒール！」

適度に調整された治癒魔法が肉を再生、石を包むようにして保護させる。

「おいおい、なんでここで回復魔法なんか」

「いいんです、これで」

答えた直後、ドラゴンがまるで毒でも喰らったように苦しみだした。

ヒールをかけたのは再生能力で殺生石が体外に押し出されるのを防ぐため。そして、今度は両手でドラゴンの鱗を撫でて、

「デッドリー・リンク強制接続・デイトアップ・ドレイン深化吸精」

こんな時でもないと言う機会のない、サキユバスのスキルを起動した。

サキユバスのスキルを「離れていても使用可能」にするスキルと、対象へ命に関わるレベルのエナジードレインを行うスキル。

対象が弱っていないければいけないうえに接触の必要があり、そこまですべて即座にHPを刈り取れるわけではない。ただし、一度決まってしまうばどうあがいても「精気をすべて吸い取られて干からびる」他にない。

ある意味、サキユバスの奥義と言っていいそれは決まると同時に勢いよくドラゴンの豊富な生命力を吸い上げ始めた。

底を尽きかけていたMPがものすごい勢いで補充されていく感覚にレンは、ほう、と恍惚の息を漏らしてしまう。

「……おいおい」

その様子を傍で見っていたケントが呆然と口を開けて、

「お前な。今の表情、悪いサキュバスそのものだぞ」

「え、わたし、そんなに悪い顔してますか？」

「ああ。その辺の男どもがダース単位で狂ったからな。責任取れよ」

「取りませんよ!?!」

レンは「取らない方が悪女っぽいな」とか言っているケントと一緒にその場を離れた。呪いめいた二重の必殺技にさすがのドラゴンも本格的にやばくなってきたらしく、暴れ方が殺すためというよりも苦しみを紛らわせるためになってきた。

じたばたともがくだけで地面がえぐれ、城の外壁に被害が出てはいるものの、ブレスを吐かれたりする様子はない。

「死に際のドラゴンは爆発を起こす可能性があるわ。できるだけ離れておきなさい」

念のためミーティアに警告を行ってもらい、周囲の兵を退避させる。

爆発を防ぐための防御魔法も準備されたが、結果的には必要はなかった。レンが余りだしたMPを回復魔法に変えてあちこち癒して回っているうちにドラゴンはぐったり衰弱し、そのまま息を引き取っていったからだ。

「あ、死んだみたい」

「いや『死んだみたい』じゃないでしょ」

エナジードレインが止まったのでそれを報告したところフリーリ（分離済み）にジト目でツッコまれた。

「ほんとにもう。そのスキル、私たちには絶対使わないでよね」

「使わないよ。使ったらフリーリたちが死んじゃうし」

「死んじゃうから使わないでって言うてるの!」

ほどなくドラゴンの巨体は消滅。後に残された殺生石はケントの斧があと腐れなく破壊してくれた。

「悪しき竜はここに息絶えた。我々の勝利だ!」

国王が高らかに宣言すると、その場にいた兵士・騎士・魔術師・聖

職者たちがいつせいに声を上げ、その勢いは次第に都全体へと広がっていった。

『歴史的勝利ね。この戦いで過去が変わればいいのに』



ドラゴンは倒された。

その知らせをエルは負傷者の治療にあたっている最中に聞くことになった。

本当なら彼女が治療を任されるはずはなかった。何しろ回復魔法なんてろくに使えなかったのだ。なのにそんなことになったのは急に力が芽生えたから。

窓から見上げた神話の戦い。

悪魔めいた姿の女性と大きくなった見知らぬ獣。敵なのか味方なのかわからない謎の英雄達はしかし、ドラゴン以外を攻撃することはなく、ドラゴンの討伐に大きく貢献した。彼女達がいなければ都への被害はもつとずっと大きかっただろう。

それでも被害者がゼロとは言えない。

神殿にも外の聖職者だけでは治療しきれなかった者が運び込まれてきて、さらに慌ただしい雰囲気になった。

——私に、もつと力があつたら。

みんなを助けてあげたい。歯がゆさから唇を噛みしめ心の底から思った時、今までとは比べ物にならない神聖魔法の力が溢れてきたのだ。

「エル。聖女の力が目覚めたそうですね」

「聖女様……!?!」

戦いの後、事後処理も一段落してひと息ついた頃、エルに声をかけてくる女性がいた。

一目で神々しさを感じる美貌の聖職者。神殿が誇る聖女がただの見習いに向けて微笑んでいる。もともと気さくで心優しい人ではあるけれど、ドラゴンとの戦いで疲れているはずなのに。

「はい。でも、私には怪我の治療くらいしかできなくて……」

「聖職者としての急激な成長。それは聖女としての覚醒だ。」

今の聖女様もかつてそういう経験をしたと言われている。それに従うとエルは次代の聖女ということになるのだが、今はまだまったくピンと来ていない。

彼女はただ人を助けたかっただけで、偉くなりたいわけではないのだ。

すると聖女様は「それでいいのです」と優しく言って、

「あなたはまだ目覚めたばかり。あなたが活躍すべき戦いはこれから先にあります」

「先……う？」

「ええ。……私は、竜殺しの英雄たちと言葉を交わしました。そこでさらなる災いについて聞かされたのです」

ドラゴンを倒してもまだ終わらない。

大陸全土、人の領域全てが魔の軍勢に淘汰される可能性があるという。そんなことになれば世界は闇に包まれ、いずれは滅んでしまうだろう。

「戦わなくてはなりません。魔の者たちと我々、どちらが生き残るか。そんな『戦争』がすぐそばまで迫っています」

「確かに、あちこちで魔物が暴れていますけど、でも」

「私も完全に信じられたわけではありません。ですが、あの者たちのような強者が突然現れたこと、それこそが『変化』の始まりなのだと思います」

「じゃあ、私もその戦争に……?」

戦争なんて怖い。

癒しの力は増したけれど、聖女様のように聖なる光で魔物を消し去るなんてできるだろうか。

すると聖女様は「いいえ」と首を振って、

「あなたにはもう一つの道があります。あの英雄たちと共に行く道です」

エルに思いがけない「道」を示してきた。

戦いの成果

戦いが終わった後、レンたちは城に招かれた。

ミーティア以外はカタコトでしか喋れないのであんまり気は進まなかったのだが、こっそり帰れる雰囲気でもなかったので仕方なく了承。

幸い、城の重要部分にはほぼ被害がなかったため話をするのに支障はなかった。

「人払いをしてもらえないかしら」

詳しい話をするのならしかるべき人間のみの場で、とミーティアが要求すると当然の如く大反対を受けたものの、他でもない国王が了承。聖女や騎士団長など数名のみが貴賓用の応接室に集まってレンたちと向かい合うことになった。

当然、レンたちに争う気はないのだが向こうにそれがわかるはずもなく。

ミーティアが「世界の真実」を口にすれば混乱と警戒はさらに強まった。

「この世界が既に滅んでおり、我々は復元された仮初の存在だと……!？」

「ええ、そうよ。私はこのレンたちによってそこから救い出された存在。運よく彼らに見いだされた僅かな者だけが再び命を得て戦うことを許されるの」

ヴァルハラに英雄を誘う戦乙女みたいに言われて妙なむず痒さを覚えている間に国王たちはなんとか衝撃から立ち直って、

「それが真実だという証拠はあるのか？」

「この子たちの強さをあなたたちの常識で説明できる？」

「……………」

ミーティアの言葉を信じるしかない——少なくともミーティアに嘘を言っているつもりがない、ということとは受けいれてくれた。

「では、其方らが去れば我らはすぐさま消滅する、と？」

「そうよ。もちろん、それを認識する手段はないわ。生物は死ねば無

に還る。そして、精巧に作り出された『世界』は本物と見分けがつかない」

世界が五分前に作り出されたもので、記憶も記録も作り物でしかないとしても誰にも証明する手段はない。それと似たようなことだ。

「国王陛下。あなたとそちらの聖女様には『私と同じ』資格があるかもしれないわ。この世界の弔い合戦に参加してみる気はない？ ……なんならその剣だけでも渡してくれると助かるのだけれど」

「……悪いが、すんなりと応じるわけにはいかんな」

国王は首を振り、重々しい声で答えた。

「其方の話を頭から否定する事はできません。しかし、端から信じる事もできません。この生が仮初か真実か区別がつかないと言うのなら、我らにはやらねばならぬことがある」

「ええ。……ここに残り、民のために戦わねばなりません。一縷の可能性に縋って役目を放り出すなど愚か者のすることです」

「そうですね。……私だつてこの子たちに無理やり連れだされなかったら同じ決断をしたでしょう。かといって、あなたたちを捕らえて連れて行くこともできない」

「そのような仕打ちを受け、帰還の目がないと知れば、我はすぐさま命を絶つだろう。悪しき企みに利用される可能性とてないわけではない」

厄介な話だ。

彼らが来てくれればきつと大きな戦力アップになる。しかし、例えば立場が逆だったとして「はいそうですか」と相手の誘いに乗れるかと言ったら答えはノーだ。

『仕方ないかあ』

『だね。私たちぜったいいうさんくさいし。話聞いてくれただけでありがたよ』

ドロップ品は現地人には見えないらしく普通に回収できた。

戦勝パーティーに参加する雰囲気でもないのでさっさと帰ろうか、とレンたちが考え始めた時、

「あの、皆さま。……よろしければ一人、連れて行っていただきたい者

「がいるのですが」

「え？」

「聖女が意を決したように口を開き、一人の巫女見習いの名を口にしました。」

「……ああ、誰かと思っただらあの時の子供じゃない」

「ひっ!？」

「安心しなさい。別に怒ってはいないわ。もう終わった話だしね」

「連れて来られた少女——エルとはレンたちも面識があった。その彼女はなんと、この騒動の中で聖女と同等の素質に目覚めたのだという。」

英雄候補。

「戦いが起こる前からミーティアに干渉してきたあたり彼女も「メインキャラ」の一人なのかもしれない。確証はないが可能性は十分にある。」

「いいの？ そんな人材、あなたたちにとっても貴重でしょう？」

「エルの人生はこれからです。この子はまだ責を負う立場にはありませんから、必ずしもここにいる必要はありません」

「もつと言えばレンたちが来てドラゴンと戦わなければ力に目覚めなかったかもしれない。それどころか普通に死んでいた可能性も高い。」

「ならば、一縷の望みに賭けて高みへと昇ってもらうべきかと」

「なるほど、ね。……私たちは構わないけれど、あなたはそれでいいの？」

「見下ろされた少女は一瞬、ぐつと言葉に詰まった後で「はい」と深く頷いた。」

「聖女様のお話は難しく半分もわかりませんでした。でも、みなさんが悪い人じゃないのはわかります。きっと嘘を言っていないもの。だから、他にもあのドラゴンみたいなのがいて、苦しんでいる人がいるなら助けたいです」

「親しい人と二度と会えなくなっても？」

「私は孤児です。……もともと、家族はいません。それに戦争になっ

たらみんな離れ離れになってしまいかもしれないから」

ミーティアが振り返ってレンたちを見る。

レンはみんなを振り返ってから頷きあい、ミーティアを見た。

「わかったわ。一緒に行きましょう、エル」

少女——エルには聖女から急遽、聖女としての新たな名が授けられた。

「聖女エレオノール。神殿の長として命じます。竜討伐の英雄と共に異なる世界へと赴き、救世のためにその身を捧げなさい」

「かしこまりました、聖女様。重大なお役目、命に代えましても実行いたします」

見た目からしてエルは十二歳くらいなのだが、ファンタジーの住人は幼くてもしつかりしているな、と、レンは自分の十二歳当時を思い出しながら感心した。



「あの、ところで、その。ミーティア様？ 以外の方はどうしてお喋りにならないのでしょうか？」

「ああ、こいつらこっちの言葉はほとんど喋れないのよ」

レンたちは兵士・騎士たちから盛大に見送られながら都を去ることになった。

可能なら宴に出席して欲しいとも言われたのだが、また急に冷たくなる現場を見ることになりそうだし、エルまでそうなって連れて帰れなくなったら大変である。

丁重に辞退すると「せめてもの謝礼」として大量の金貨やら何やらを持たされた。

「ふむ。この物資がどうなるかは興味があるな。それと、いつたいどの時点から我々は彼らから認識されなくなるのか？ 空き家に入るところは目撃されるのか？ だとすると、このエルにとっては壁の向こうに連れて行かれる感覚なのか？」

「おっさん。エルが怖がるから戻るまであんまり喋らないで欲しい

な」

「むう、手厳しいな」

下りの階段はやはり街の中の空き家だった。

家の前に立ったエルは不思議そうに「あの、ここですか？」と首を傾げる。

(エレオノールだと長いので普段は引き続きエルと呼ぶことにした)

「そうよ。……ええと、そうね。念のためそのサキュバスの手を握っていなさい。怖かったら目を瞑っていてもいいわ。痛くもなんともないし、死んだりしないから」

「え、あの、私、それならミーティアさんが……」

レンの見た目が怖いからか、言葉が通じるミーティアをちらちら見上げるエル。

フリーがにやりと笑って、

『いいじゃない。手、繋いであげなよミーちゃん』

『あなたね。そうやってミーちゃんとか呼ぶから私の威厳がなくなるのよ』

『エルちゃんには聞こえてないから関係ありません。ほら、早く』

「……ああ、もう仕方ないわね」

「あつ！　ありがとうございます！」

なんだかんだ言っでちゃんと手を繋ぐあたり面倒見がいい。

エルのはミィティアに頼み、レンたちは空き家に入るなり辺りを見回す。あつた。石碑だ。

「少女よ。あの石碑が見えるか？」

「え？　ものすごく下手な言葉……あ、えつと、見えます」

「よし」

満足そうに頷く賢者。彼のことはいったん無視してレンは石碑へと近寄った。その前に何か箱のようなものが置かれている。箱というか、石でできた台座？

これはまさか、アレだろうか。

似たような印象のものは見たことがある。神殿の地下に収められた特殊なアイテム。

「おっさん。これ、もしかして神器かな？」

「む。この階の攻略は初回ではない。前例から行くと手に入るはずはないのだが……見た目からして神器に違いないな」

「いいじゃねえか。もらえる物はもらっておこうぜ」

豪快に言ったケントが神器をひょいっと持ち上げてストレージに収納する。

「ケインさまなら抱えたままでも神殿へ帰れそうですね……？」

「おう、いけると思うぜ」

「こいつはこういう面でも重宝するのだ。荷物持ちが必要ならこれからも呼びつけるといい」

「言いやがったな。なら、こいつもテレポートのために呼びつけていぞぞ」

エルが怖がる、とか言いながら思いっきり日本語で話してしまったが、こほん、と小さく咳払いをして石碑を見つめた。

さすがに読解のほうはかなり習得している。

『異世界の子らよ。子供達と共に戦い続ける汝らに新たなる力の可能性を授けよう。ただし、力には大いなる代償が伴う』

異世界の子ら、はおそらくレンたちのこと。

子供達、は同じ子供でもアイリスたちのことだろう。

新たなる力の可能性は、その解釈に従うとレンたちに向けたもの、ということになる。もしかしなくても神器がキーだろう。

「なるほどな。ネイティブ世代と共にクリアすることが条件か。……」

やはり、君達に頼んで正解だった」

「喜んでいいのかなあ……」

神器の解明については帰ってからということにして、階段へと足を踏み入れる。

心配していたエルにも普通に見えているらしく危なげなく足を運んでいる。賢者の話だと資格のない者はこの時点で消えているそうなので、資格者はレンたちのようなダンジョン攻略者が同行していれば不可視の階段が見えるようになるらしい。

「こんな階段……こんなところにあるはずなのに。これが、神の世

「界への道なんですか？」

「神の世界って言うほどいいところかはわからないけれど、ね。下りなのは帰りだからで、深い意味はないから安心しなさい」

「ちなみに報酬としてもらった金貨その他は階段に入った途端に消えた。」

「火事場泥棒や宝物庫荒らしをしても収入は増えないということだ。前に賢者たちがあれこれ試した時もこれは同じだったらしい。「正式に渡された物でも駄目か」と中年男は残念そうに呟いていた。」

「そろそろね。出るわよ、エル。最後の一步は注意しなさい」

「ふえっ？ わ、わわわ、わ!？」

「だから言ったでしょう。仕方のない子ね」

「下りの一步が急に上りになったことで転びかけたエルをミーティアが抱き留める。」

「あはは、しょうがないよミーちゃん。これは初めてじゃぜったい転ぶってば」

「え？ あれ？ ここは……？ どうしてみなさんの言葉がわかるんですか……!？」

「この世界ではお互いの言葉が翻訳されて伝わるのだ。……ようこそ、聖女エレオノール。悪意によって破壊された世界のなれの果て。そして、世界を再生しようとする者達の街へ」

「世界の、なれの果て……」

「神殿の端まで駆けていったエルはそこから街を見下ろし、さらには遠くにある『闇』を見据えて、

「神の世界でなければ、邪神の住まう闇の世界です」

「似たようなものかもしれませんね。あの闇を払い、世界を取り戻すのがわたくしたちの役割の一つです」

「……………」

「呆然と黙り込むエル。」

「普通に生きてきた十二歳の少女には理解が追いつかないだろう。賢者が珍しく配慮してくれたのか「レポートを使おう」と言つて、「エルを連れて帰るといい。ただしレンとシオンは残つてくれ。神器

の設置ついでに効果を調べておきたい」

「了解。じゃ、フリー、ミーティア、アイリス。エルのことをお願い」
「うん、任せてー」

「レンさんも頑張ってください!」

「ご主人様。私を除いたのは何故なのでしょうか」

「いや、メイは張り切り過ぎないくらいのほうがいいかなって」

「心外です。命令していただければ賑やかしとして活躍する所存なのですが」

「……うん。メイも普通に頑張って」

賢者のテレポルトでフリーたちが送られた後、ケントに運んでもらって新たな神器を設置した。さすがにアイリスの母やメイの母もここに入る権利はあるらしく特に驚いた様子もなく、新しいそれを興味深そうにのぞき込んでいる。

「さて、それじゃさっさと調べてくれ」

「君は本当に他力本願だな」

「戦士に何を期待してるんだっての」

調査は賢者とメイの母が活躍した。その結果は、

「この神器を使用可能なのは我々転移者のみ。効果は使用者に制約を与える代わりにさらなる力を与えるものだ」

「制約? なんだそりゃ?」

「複数の項目が存在し、自由に選ぶことができる。……子供達と共に戦い続けるつもりならばこれを使い、という事らしいな」

やはり、神殿を作った側としては転移者からネイティブ世代への世代交代を想定しているということだ。

そのうえで「子供たちに任せきりにせず自分たちが戦う」という強い意志を持つ者向けに救済措置を用意していた。

「賢者様。例えばどのような制約が存在するのですか?」

「寿命を縮める代わりに年数に応じた経験値を手に入れる。肉体年齢を五歳まで戻し、レベルを初期化する代わりに基礎ステータスにボーナスを得る、などだな。それから、最も効果の高いものとしては――」

賢者の視線がレンに向けられて、

「現在の種族を固定化する代わりに『ネイティブ世代と同じ扱い』になる」

「賢者さま、それはまさか——」

「そうだ」

重々しい声で事実が告げられる。

「わざわざこんな制約が設定されている理由は一つ。ダンジョンをクリアすれば転移者の種族は元に戻る。しかし、この制約を用いればたとえ帰ることができたとしても、家族に自分だと認識してもらえなくなるかもしれない」

しかし、ネイティブ世代——アイリスたちと同じ立場になれば確実に強くなれる。

スキルポイントを用いることなく習熟によってスキルレベルを上昇させ、さらには鍛錬によって新しいスキルを習得することさえ可能だからだ。

さすがに鈍化してきたレベルアップが変わって「修行」というパワーアップ手段を得られる。そうすれば帰還の可能性が大いに高まる。

その代わり、制約を用いた者は大きなリスクを負うことになる。

未来の展望

「え、あの、こんなご馳走をお腹いっぱい食べるなんて贅沢すぎるんじゃない……!?!」

今日はもう疲れたので打ち上げは明日、ということになった。家に帰りついた頃にはなかなか良い時間になっていた。そのままた夕食に。

並べられた食事を見た異世界の新人聖女——エルは悲鳴とも歓声ともつかない声を上げてくれる。ミーティアが眉をひそめて「そうかしら?。」と首を傾げた。

「少し質素なくらいだと思っただけけれど」

「ミーちゃん? お姫様の食事と比べないで欲しいんだけどー?」

「これでも前よりだいぶ豪華になりましたもんね」

調理担当二人が苦言を呈すると(元)お姫様はふんと鼻を鳴らしてから「まあ、味は悪くないしね」とツンデレめいたことを言った。

これにエルは「どうしていいかわからない」という表情を浮かべて、「見るだけでも調味料をたくさん使っているのがわかりました。これは絶対美味しいです」

「エルの住んでいたところはご飯、美味しくなかったの?」

「いえ、そんなことは……。でも、私は見習いでしたし、聖職者は『贅沢をしすぎてはいけない』と教えられていますから、お腹いっぱい食べるなんてとても」

「それは良くありませんね。育ち盛りはたくさん食べて大きくなるべきです。なんなら私の食事も分けましましょうか?」

「いえ、メイさま。石と鉄はさすがに食べられないかと」

鉄塊を取り出し始めたメイは相変わらずちよつとズレているが、ともあれその意見には賛成だ。みんなして生暖かい表情になってエルに「いっぱい食べろ」と促す。

見おぼえない料理の数々にエルは恐る恐るスプーンを持ち上げ、ぱくりと一口。はつと目を見開いた彼女は何故か涙ぐみながら勢いよく二口目以降に向かい始めた。

「……神殿のみんなにも分けてあげたいです」

「そう。残念だけど、彼女たちにはもう会えないわ。と言うより、彼女たちはもうどこにも存在していない」

「ミーちゃん、はつきり言い過ぎー」

「隠しても仕方ないでしょう。この子はその覚悟があつて来たのだから、事實はきちんと認識すべきよ」

「いえ、大丈夫、です……っ。私は大事なお役目を授かつて来たんですから……っ」

案の定、エルは泣いてしまったものの、結局最後まで食事を止めることはなかった。食い意地が張っているのではなく「食べられる時に食べておけ」という教えが染みついているのだ。

都も神殿も十分に豊かだったが、日本のように物で溢れかえっているわけではない。いつ満足な食事ができなくなるかわからない状況には違いなかったのだ。

「まあ、食べられるなら心配なさそうね。……それで、レン？ 新しい神器のほうはどうだったの？」

「うん。なかなか面白い効果だったよ」

賢者から聞かされた話を伝えると仲間たちは揃って微妙な顔をした。

「面白い、で済ませていいのかしら、それは」

「確かに強力ではありますが、リスクが大きすぎますね……」

「私や母が寿命のオプションを選ぶとどうなるのでしょうか」

「メイちゃん、真っ先にそこなんだ」

「あ、うん。レイさんが試そうとしたらその項目は表示されなかったよ」

寿命を削るオプションは年数の他に割合も参照しているのだろう。エルフの十年と人間の十年では後者のほうが高いボーナスが得られる。メイたちのように「寿命∞」の種族の場合は千年捧げようとボーナスが得られないというわけだ。

「寿命が削られるってどういう仕組みなのかしら。使い方によっては即死するわけ？」

「そこまではわからないけど、おっさんは『捧げた年数に応じて老化が早まるのではないか』って言ってた」

だとすると即座に十年歳を取るとかいう話ではない。死ぬつもりでダンジョンに挑む前なら寿命をギリギリまで捧げても大丈夫かもしれない。……嫌な使い方すぎるし、知り合いがやろうとしたら全力で止めるが。

「それよりも、問題は『種族の固定化』です」

シオンが言うともみんなさらに微妙な顔になった。

「まず疑問なのですが、その機能は人間が使うとどうなるのですか？」

「おっさんが使ってたけど普通に機能してたよ。スキルのレベルが一気にがっ、って上がってた」

「待ちなさい。あの変態はさっそく使ったわけ!？」

使ったのである。

自分で調べたアイテムなわけだし自己責任ではあるのだが、なかなか思い切りがいい。

そして、結果的にはかなりのパワーアップになった。

「それはすごいですね。お父さんに使ってもらったら木こりの能力が一気に上がった!……?」

「うーん。でも、人間が使うのも要注意かもしれないだよね」

「え、そうなんですか?」

「うん。これもおっさんが言ってたんだけど、『種族：人間』と転移する前のわたしたち——日本人は完全にイコールなのかって」

種族固定化の制約を受け入れた場合、表だつて起こるデメリットは「転生石の使用不可」。予想される他のデメリットとしては「ダンジョンをクリアしても異種族から戻れなくなる」だが、ここで「果たして『種族：人間』は日本人から見た異種族ではないのか?」という問題が浮上したわけだ。

「おっさんは見た目的には日本人だけど、魔法が使える。制約を受けてしまったからには日本に戻っても『魔法が使えるまま』になるかも」「なにそれ便利——とも言いきれないのかな?」

「魔法が使える人間、なんて日本ではありえませんかからね……」

バレれば恐れられ、遠ざけられ、一方でその力にすり寄ろうとする
不届き者が発生するだろう。

日本は魔法使いを許容するようにはできていないので便利に使お
うにも使いどころは相当に限られる。これは大きなデメリットだ。

まあ、そもそも日本に帰れるかどうか分からない、という話では
あるのだが。
と。

「……果たしてそれで済むのかしらね」

「どういうこと、ミーちゃん？」

「要するに、それを使うと『この世界の人間になる』ということでしょ
う？ そうなった人間はここが故郷になる。ちゃんとあなたたちの
世界に帰れるのかしら？」

「あつ……」

帰還不可。

可能性としてはないわけではない。だとすると賢者はもう、日本に
帰れないかもしれない。あの男のことだからそれを理解したうえで
飄々となにも言わずに実行した可能性はある。

けれど。

「わたしの意見は、だけど、そこは大丈夫じゃないかと思ってるんだ。
だって、それだと例えばアイリスも家族と一緒に日本には行けないこ
とになるでしょ？」

もちろん可能性としてはあるものの、それはあまりにも無慈悲だ。

召喚された人間を元いた場所に戻す——そんな効果が働くとする
と「いしのなかにいる」で即死する人間も出かねない。それよりはこ
ちらの人間を日本に飛ばす転移陣のようなものが起動する方があり
える話だ。

これにミーティアはなんとも言えないという表情を浮かべて、

「仮定に仮定が重なり過ぎてわけがわからないわね」

「かもね。でも、どうせ可能性の話なんだったら軽い気持ちで使っ
てもいいんじゃないかな」

「……待ちなさい。レン、まさかあなたも『もう使ってきた』なんて言

わないわよね?」

みんなの視線が一気に集まる。エルだけは「なんの話かわからない」とぼかんとしているだけだが。

「大丈夫だよ。さすがにまだ使ってない。使おうかなとは思ってるけど」

「え、ちよつとレン、思い切りすぎじゃない? なんぞ?」

「だってわたし、もう人間に戻りたくないし」



レンがサキユバスになってからかなりの時間が経ってしまった。

もうすぐ転移してから丸四年。

これだけの期間変わっていればさすがに今の状態が板につく。今から元に戻ったとすればもう一度、今度は男の姿に慣れるところから始めないといけない。

男からサキユバスに変わる時もさんざん「嫌だ」と言っていたわけで、要はそれと同じことである。

「男に戻ったら可愛い服着られなくなるし、フリーたちとも距離ができる気がするし。……女の子の身体でえっちできなくなるし」

「ご主人様。最後の理由が何割を占めていますか?」

「レン? 頭の中もうほとんどサキユバスになってるでしょ?」

「だってサキユバスだし。フリーだってもう攻め側体験できなくなるんだよ?」

「う。……そう言われるとちよつと困る」

「フリーさん?」

「フリーさま?」

「あ、アイリスちゃんやシオンちゃんだって困るでしょ!? 私だけじゃないよ?」

逆ギレするように声を荒げたフリーを見てミーティアはふんと笑って、

「私はレンにはこのままできて欲しいわ。別にスキルとやらで美少年

になるのならそれはそれで構わないけれど、元に戻ったら別人なのでしょう？ そうしたら私の結婚相手はどこにも存在しないことになってしまう」

「物語では『姿が変わっても変わらぬ愛』が定番ですが」

「種族が変わると性格にも影響が出るんだから、そんなの別人じゃない。どこで同じだって判断すればいいのよ」

確かにごもつともである。

「というわけで、わたしはアレ使おうかなって」

さつき言った以外にもいろいろ理由はある。

こつちにいる間にフリーたちと子供を作った場合、男に戻った時に子供たちにいるいろいろ混乱を強いことになる。お母さんが二人（というかいつぱい？）だったのだが一人、急にお父さんになるわけで。果たしてそれは理解してもらえるのか。

あと、日本に帰ってもいまさら受験勉強とかしたくない。だったらサキュバスの美貌を活かして飲食業とかで働くほうがまだマシだ。モデルとかもできるかもしれない。

トイレ行かなくていい生活とかめっちゃ楽だし、なんなら食事すらわりと抜けるし。

「もし、クリアしただけで帰れなくなったら、それはそれで別の方法を探すよ。おっさんなんてレポートできるんだから、必死に頑張ったらなんとかなるんじゃないかな」

「なかなか希望的観測ですが」

「それ言ったら、日本に帰れること自体が希望的観測だし」

「確かにその通りですね……」

これにフリーは「そっかー」と息を吐いて。

「レンがそう言うなら止めないし、それはそれで私も嬉しいけど。じゃあ私も使おうかな？」

「フリーはよく考えた方がいいんじゃないかな。精霊って下手すると『寿命∞』でしょ？」

長生きするのと死ねないのでは大きな開きがある。

固定化するにしてもエルフとか、長生きだけど老衰のある種族に転

生し直してからのほうがいい気がする。

「ん。今のところは寿命問題困ってないし、もうちよつと考えてからにする」

「それがいいよ。……シオンも。別に固定化する必要ないからね？」

「はい。……その。あらためて考えると『この身体も悪くないかな』とは思ってしまうのですが」

それこそがレンたちを召喚した者の罠なのかもしれない。変身したばかりの頃は抵抗があっても、そのままにいるうちに愛着が湧いてくる。今の姿ならではのメリットがあるとなれば猶更である。

「で？ この先の挑戦はどうするの？ しばらく休むの、進むの？」

これについても答えは決まっていた。

「しばらく休もう。先に進んでも絶対大丈夫、って自信がつくまで積極的な攻略はナシで」

攻略を諦めるわけではない。

けれど、レンたちの冒険はここで一区切りだ。

見習い聖女と、英雄たちのこれから

「ホーリーライト
聖光！」

手のひらから放たれた聖なる光がオークの一体を包み、消滅させていく。

ゴーレムの少女——マイの振るう鋼鉄のロッドが別のオークを強かに叩き、ハーフェルフ姉妹の放った矢がトドメを刺す。

監督役であるエルフの精霊使い、アンナが特になにもすることがないくらいに戦いは今日も順調だった。

「エレオノールさんの魔法はいつ見ても強力ですね。頼もしいです」

「そんな、私なんてまだまだです。レン様たちのようにもっともっと強くならなくては」

「そうだね。お姉ちゃんたちに追いつくにはまだまだ大変だもん」

「もっと頑張らないと、ですね」

階段から神殿に戻り、途中まで仲間たちと一緒に帰ったエルは「家」へと続く道の前でみんなと別れた。

「それでは、また」

「はい、また」

今日も頑張ったので空にはもう夕陽が浮かんでいる。

この世界はとても穏やかだ。野には獣こそいるもののモンスターはいないし、家の周りなどはその獣ですら害を成せないように結界(?)が張られている。

食事は美味しいし量もたっぷり。広い一人部屋には暖かい寝床までついているし、家自体も石造りの神殿と違って室内の熱が逃げづらい。夜更かしをしても誰にも怒られないし、早起きして水汲みや掃除をする必要もない。

この世界に来てからはや二か月。

すっかりここでの生活にも慣れてしまった。

生活が楽になった分はエルにできることで返すようにしている。料理の支度や掃除を手伝ったり、ミーティアの代わりに文字や言葉の教師を務めたり。

それからゴーレムやハーフエルフの女の子たちと一緒に「ダンジョン」へ潜るようになった。入るたびに定められた状況が形作られる不思議な魔法装置。自分もその中から出てきたのだという事実を思うと震えそうになるけれど、一方、ダンジョンで戦っていると妙に落ち着く。

最初は恐ろしかった戦いにも少しずつ慣れてきた。

エルの理解を大きく超えた概念、知っている人のいない環境に最初は泣きそうになったし途方に暮れたものの、竜殺しの英雄——レンたちはとても優しい、良い人たちだった。

リーダーのレンはサキュバスで、見るからに煽情的で、実際仲間と毎夜えつちなことをしているようなのだが——悪魔が人を唆すような後ろ暗い雰囲気はどこにもなくて、恋人というか友人というか、独特の距離感が彼女たちの間にはある。

もちろん、エルに「相手をしろ」なんて迫ってきたりもしない。

教義的に異性との姦淫は結婚相手以外を除いて禁じられている。逆に言うと同性ならば構わないという風潮があり、実際、神殿内には疑似的な交際をしている巫女もいたりはしたのだが、そういうのはエルにはまだ早いと思っている。

「世界の弔い合戦、かあ」

腰に着けたポーチに大事にしまっている綺麗な石——世界の欠片を一つ取り出してため息をつく。

エルのいた都は「ダンジョンの五十階」。なのにエルは「一階」から戦いを始めなければならなかった。これについてレンやミーティアはエルが「五十階では戦闘要員としてみなされていなかったから」だと言っていた。意味は完全にはわからないが。

わかるのは、この石一つでは大きな効果はないということ。一階一階積み重ねていくのは仲間と一緒にでもなお楽ではないこと。

憧れの聖女様よりも強いかもしれない美しき英雄たちに手が届く日はまだまだ遠い。

「あ、いい匂い」

家が近づいてくるといかにも美味しそうな匂いが鼻をくすぐった。

今日はシチューだろうか。

異世界の料理はエルの世界のものにはなかったものが多いうえ、似ている料理も洗練されていてとても美味しい。毎日楽しみでしかない。

「ただいま戻りました」

玄関のドアを開けて靴を脱ぎながら告げる。家の中で靴を脱ぐのは最初変な感じだったけれど、慣れてしまうととても楽で癖になる。毎日お風呂に入って足の裏まで綺麗に洗えるようになった——臭いを気にしなくてよくなったのも理由の一つだと思う。

声に反応したように家の中から小さな足音。

「お帰りなさいませ、エルさん」

「ありがとうございます、シオン様」

子狐姿のシオンが駆けてきてエルを見上げた。

犬とも猫とも違う不思議な姿をしたシオンは大きくなったり人間になったり耳の生えた人間になったり姿を自由自在に変えるうえ、無数の炎を一度に操ったり悪しき者を排除する結界を張ったりもできる偉人だ。

エルの崇める神とはいろいろ異なっているものの、聖なる存在としてエルは彼女のことを特に尊敬している。本人はくすぐったそうにしているものの、小さな姿でそうされるとそれはそれでとても可愛らしく——閑話休題。

「今日はシチューですよ。荷物を置いて着替えてきてください」

「わ、やっぱり。遅れないように行きますね」

さっぱりした格好でリビングに移動すると、もうみんなが食卓に揃っていた。

「すみません、お待たせしました」

「ううん、大丈夫。いま準備が終わるところだから。疲れたでしょ？

いっぱい食べてね」

「わあ……！」

風の精霊であるフリーリはハーフエルフであるアイリスと共にこの家の調理担当だ。

優しく明るく、面倒見のいい二人。エルが美味しそうに食べているとにこにこして見守ってくれる。若くて綺麗なのどこか大人っぽいところもあって、すっかり憧れの人の一人になった。

「むう。表情の変化というのも破壊力が高いものですね。非効率的ですが、やはり機能を追加するべきでしょうか」

無表情のまま淡々と、なのどこか悔しげに呟くのはゴーレムのメ
イだ。

エルと共にダンジョンを攻略しているマイの姉。類稀な戦闘力を持ちながらユーモアに溢れており、この家のムードメーカーになっている。

疲れを知らないボディで家の掃除を黙々とこなすその姿は神殿の掃除に何度も泣かされそうになったエルにとってとても偉大である。「身重なんだからまた今度にしなさい。……機能を追加してもあなたの場合、あんまり変わらなさそうだし」

ダークエルフのミーティアはエルにとってある意味一番親近感の湧く相手だ。

故郷——元いた世界の話が通じるし、翻訳がなくても言葉が通じる。一方で種族も年齢も育った環境も違うので戸惑わされることも多い。

最初はよく彼女を頼っていたものの、我が儘で尊大などころのあるミーティアよりもフリーたちを頼ることも多くなった。そうすると若干拗ねたようにエルに声をかけてきたりもして、少し親しみのようなものを感じてしまったり。

「身重といえば、レンもね。少しは大人しくしているのよ?」
「大袈裟だよ。まだ一か月なんだし全然大丈夫だつてば」

パーティのリーダーであるサキュバスのレン。

エルの知識にあるサキュバスのイメージとはだいぶ違う。いや、淫らな一面も少しは、だいぶ、結構あるのだが、男嫌いという珍しい性質のせいなのだろうか。それとも、異世界人が後天的にサキュバスになったせいなのだろうか。相手は選んでいるし精気全てを絞りつくすようなことはしない。人間を見下すこともないし、エルにもとても

良くしてくれる。

左右の翼で空を駆け、無数の光の矢を生み出す様は恐ろしくも美しい。

そんな彼女はしばらく前にフリーの子供を妊娠した。

女同士の子供。常識からは外れているが「サキュバスだから」問題ないらしい。

「ほんとごめんねー、レン。押し付けちゃって」

「いいってば。むしろフリーが妊娠したほうがいろいろ大変だし」

そう言つて笑う紫紺の髪の子キュバス。彼女の下腹部に風のシンボルに似た紋様がぼんやり輝いているのが服越しにもどこことなく感じられる。妊娠しようと思えば妊娠できるしそうでなければ必ず避妊できるサキュバスには「現在妊娠しているかどうか」「誰の子供なのか」をはつきりさせる機能まで備わっているらしい。

フリーの子をレンが孕むことになったのはフリーが風の精霊という特殊な存在であるせいだ。

風そのものに近い身体になることができるフリー。果たして非実体化した際にお腹の子はどうなるのか。試してみるのも恐ろしすぎるから、というのが一番の決め手になったそうだ。

「それにしてもフリーに先を越されたわ。……やっぱり今のうちにレンの子を産んでおこうかしら」

「ミーティア。初めての子供だし、一人ずつにしておこうってみんなで決めたでしょ」

「それはそうだけど」

フリーだけずるい、とばかりにレンを睨むミーティア。

シオンは困ったように首を傾げ、何気なく胸に手を当てて、

「わたくしは心の準備ができますので、むしろ有難いです」

「……私も、いざとなったら怖いと言いますか」

「あはは。いっそみんなレンに産んでもらえば」

「それだとわたし、十年くらいダンジョンに潜れなくなりそうなんだけど」

ちなみにメイの子供も一応、レンとメイの子ということになる。

ゴーレムは夫役の人間から生命力だけを受け取って妻側のゴーレムが自身の複製を作るような形式らしく、そのため「子供は一人ずつ」の約束の中には含まれていない。

メイも生まれた時点で人間で言う五歳くらいの身体を与えられ、人間よりもずっと早く言葉を覚えたとか。母親も出産前後、普通に活動していたそうだ。

便利というべきか情緒がないと言うべきか。

ちなみにエルは子供がどうやってできるのか詳しくは知らない。男女がいやらしい行為をして作るくらいいは理解しているものの、具体的にどういうことをするのかは知識になかった。夜、レンの部屋を覗けば——いや、ただでさえ覚えることや考えることが多いのだから変なことをするのは止めておこう。

「でも、ほんとに妊娠するだけでレベルが上がるとは思わなかったよ」

「レン。子供を作るのは『だけ』って言えるほど簡単じゃないよ?」

「そうだけど。普通それで経験値入ったりしないじゃない」

「ゴーレムも経験値が入りますが」

「……そう考えるとわりと普通のことなのかな?」

「落ち着きなさい。間違いなく特殊な事例よ」

サキユバスにとっては子供を作ることさえも種族的な特性・習性に含まれるらしい。

「案外、妊娠の負担も人間より軽かったりするのかな」

実感がないと言いつつお腹をさすりながら呟くと、フリーヤミー

ティアが半眼になって、

「ずるい」

「ええ。そこはきちんと苦労しなさい」

「えー。楽ならその方がいいと思うんだけど」

サキユバスと精霊の子が十月十日で生まれてくるとは限らないものの、出産して子供を育てて、子供がある程度しっかりしてくるまでには年単位の時間がかかる。

レンと同じく女性同士で愛し合っているお隣さん（レンと違って結婚しているものの子供はまだで「先を越されました」と冗談交じりに

苦情を言っていた)が「いざという時は預かる」と言ってくれてはいるものの、レンが再びダンジョンへ潜るのはしばらく先になりそうだ。

「あのドラゴンでさえ敵の尖兵に過ぎないんですよね」

あの恐ろしい巨体を思い出しながら呟くとミーティアが「そうね」と答えて、

「竜族はそう簡単に言いなりににはならないはずだけど、魔王もそれだけ本気ということかしら。魔王や上位のデーモンは竜族と同等かそれ以上の力の持ち主だし、各種族の中にも英雄級の実力者はいる。先のダンジョンではそういった者達が相手になるのでしようね」

本当に神話級の戦いだ。しかも「神の世界」に來たエルにとっては他人事ではない。

この世界にはレンたちの他にもたくさん戦士がいる。同時に彼らの中でもレンが目置かれていることも事実。レンの「ひと休み」が戦いの停滞に繋がっているのは間違いないだろう。

ならば、せめて。

「レン様が復帰された時、お力になれるよう私も力を磨きます」

レンはこれに「期待してるよ」と微笑んで、

「でも、無理はしないでね。死んじゃうのが一番良くないから」

「肝に銘じています」

マイたちもエルと同じく、レンたちに追いつくのを目標にしている。

少し前に知り合ったショウやケンたち「この世界の人間」である子供たちもダンジョンを攻略すべく頑張っている。

レンたちだけを頑張らせないようにする環境は少しずつ整ってきている。

「賢者様とケント様が年甲斐もなく頑張っているようですから、ご主人様がしばらく休んでも問題はないでしょう」

「ああ。おっさん、なんだかこき使われているらしいね」

「ケントさんがスイッチ入っちゃったみたいだねー」

賢者とケントはレンたちと一緒に戦っていた男性二人だ。この世

界において中核をなす存在であるらしく、あまり頻繁にふらふらするのは好ましくないらしいのだが、同時に最大級の戦力でもあるため扱いが難しい。特に最近ではケントが精力的に活動し、賢者がそこに巻き込まれているのだとか。

「フリーたちも誘われてるんでしょ？ わたしだけ遅れないように少し参加してこうかな」

「だめでーす。妊婦は安静にしててくださいーい」

「だからまだ全然大丈夫なんだってば」

一か月目でこれは確かに過保護すぎる。しかし、何かにつけて何かをしようとするレンを休ませるにはちょうどいい口実なのだろう。

彼女はダンジョン攻略をなるべく控えるようになって落ち着いたかと思えば街のことで駆り出されたり、魔法の特訓と称してあれこれ始めたりしている。少しくらい大人しくしてくれていた方が周りとしても安心なのだ。

「きつと、こういう方だから周りに人が集まるのでしょうね」

「？ エル、なにか言った？」

「いいえ、なんでもありません」

エルは、不思議そうに首を傾げるレンに笑顔で答えた。

レンたちはダンジョンを攻略しないと故郷に帰れないらしい。

これは滅びた世界の弔い合戦でもあると同時に、他の世界のために戦う英雄たちに幸せを与えるための戦いでもあるのだ。

道は険しい。

けれど、いつかきつと必ずたどり着ける。

確信に近い予感が少女の胸にしつかりと宿っていた。

エピソード ― 帰還した者たちと、さらに挑み続ける者たち―

ある日突然、とある学校の校庭に千人を超える人間が現れた。

神隠し事件の新たなページとして歴史に刻まれることになったこの出来事は、連続神隠しが始まってから四十年目のことだった。

人々が現れた場所は三十年目に神隠しが起こった学校の校庭。

現れたのは神隠しによっていなくなった人々―そして、その子供たちだった。

彼らは口を揃えて「ファンタジー世界に突然召喚され、そこでダンジョンを攻略させられていた」と証言した。

現実的に考えてありえるはずのない現象。しかし、他でもない神隠し事件と彼らの出現こそが証言の信ぴょう性を高めていた。

何よりも、彼らを連れてきた「紫紺の髪のスキュバス」の存在が通常では絶対にありえない。

彼らの出現は即座に日本中に伝わり、大騒ぎの中でしかるべき措置が取られた。

事実関係の聞き取りも大々的に行われた。

なんと、神隠しに遭った者たちは別の世界でずっと生きていた。故郷に帰るための戦いの中で喪われた命も多くあり、同時に新たに生まれた命もあった。

どうやって帰ってきたのかと言えば、

「魔法を使いました。レポートを基に改良を重ねた時空転移魔法を付与魔法で装置化して、わたしの供給した魔力でゲートを―って、言ってもわかりませんよね、すみません、つい」

驚くべきことに、帰還のために尽力した一人であるスキュバスの少女も神隠し被害者の一人であり、元は平凡な男子高校生であったという。

もはや何がなんだかわからない。

わからないが、彼女（彼）と引き合わされた家族は当人と話し合い

を重ね、間違いなく自分たちの家族であると証言した。

つまり、異世界では地球の常識ではありえない事態がいくつも起こっていたということだ。

だとしても、皆こうして無事に——とは言えなくとも——帰ってきただけ。

これでもう事件は終わり、もう神隠しも起きないし彼らも日本にいられるのだろう、と思いきや。

「いいえ。神隠し——召喚はまだ止まっています。ダンジョンもまだクリアされていないんです」

戻ってきた者も全員ではないと言う。

帰ることを拒んだ者もいるし、帰ってきた者の中にもまた戻るつもりの方がいる。

何故か。

「だって、あそこはもう、わたしたちの世界ですから」

頻繁に帰ってくることはできないとサキュバスの少女——レンは語った。大きな準備が必要になる。大勢が一気に抜けてしまったことで向こうの世界の物流も滞っており、それもなんとかしなければいけないのだと。

「向こうで留守番してくれている娘もいますし」

異世界にいる間に種族すら変わってしまった者たちの中には人間ではない子供を儲けた者も多にいる。

異種族の子供が日本で生きていくのはなかなか難しい。馴染める者もいるだろうが、どうしても生きづらい子もいる。そうした者たちのためにも異世界は存続させていくつもりらしい。

神隠し被害者——転移者の中には長く不在だった者も多い。その家族・友人は思わぬ再会に喜んだものの、実際問題として「突然帰ってきた人間」への対処に困った。

原因の一つである「金」については彼らが異世界から持ち込んできた金銀・宝石などによって解決されたが、

「世界間で大規模な貿易をするつもりはありませんし、この世界で魔法を便利に使う気もありません。それをすると世界のバランスが崩

れてしまいます」

日本の食材や調味料、植物の種や各種書籍などは購入して持つて行くつもりでいるが、その程度。

戦争に協力するなんてもつての他だし研究対象モルモットになる気もない。もしも強要するということのなら抗うために力を振るうつもりだとレンは告げた。

そして、一か月の間を置いた後、帰還を希望した者たちと共に帰つていった。

「心配はない。レンならばうまくやるだろう」

最初の転移者の一人であり、不思議な力によつて子供に戻つたと主張する八歳の少年（傍らには同じ年齢のやんちゃ坊主もいた）がそう証言した。

「またそのうちこちらに来るはずだ。案外、次に会う時にはダンジョンを攻略しているかもしれない」

転移者たちの帰還からしばらくは各種マスコミがしきりにその話題を持ち上げ、出版業界では異世界転移ブームが巻き起こつたものの、一年もする頃にはその騒ぎも落ち着き。

レンの言葉通り継続した神隠しについても「どこに行つてるかわかつたんだし、まあなんとかなるでしょ」程度の認識となつた。

実際、帰還を希望した者は一年もせずを送り返されてきたし、そのせいもあつて「自分も異世界に行つてみたい」と希望する者まで続出した。

しかし、レンは基本的に希望者を異世界へと連れて行くことはしなかつた。

「右も左もわからない場所で戦つていく覚悟がないなら、ほいほい行くべきじゃないと思います」

無理やり連れて行かれて戦つてきた者たちと、自分から軽い気持ちで行こうとする者では大きく違う。

若さとは裏腹に実感のこもつたその言葉は人々の心に大きな影響を与えた。異世界転生もののラノベはだいぶ減つた。

異世界に戻つた者、残つた者がどのような戦いを繰り広げているの

か、実際に確認する術はない。

それでも、彼らの無事を祈らずにはいられない。

いつか彼らの戦いが終わり、異世界に平穏が訪れることを私は人知れず願っている。

(とある個人ブログの記事より抜粋)



「……それにしても、七十階が魔王で七十五階が邪神だとは思わなかったよね」

「ねー。しかも邪神倒してもまだ終わらなかったんだから」

ダンジョンの攻略階層はどんどん進んでいるというのに、街の賑やかさは大きく減ってしまった。

来た頃に比べると圧倒的に広くなった世界。女だけの住宅街として作ったあそこの周りからも『闇』が消えたとし、海もできた。

豊かになったこの世界に十分な人が溢れるにはまだまだ時間がかかりそうだ。

「本当に百階で終わるかなあ、これ」

「終わるんじゃない？ さすがにこれ以上の敵はいないでしょ」

七十六階から先の階で現れた敵は『闇』。

世界を覆い尽くす「無」そのものとの戦いは戦闘能力だけではどうにもならない。創造を可能にするだけの想像力こそが攻撃力を敵に届ける手段になる。世界の欠片を使って世界を再生していたのはこのための準備でもあったのか、とようやくわかった。

「なら、もう一息だね」

世界を狭め続ける『闇』をすべて祓ったその時、もしもの戦いはきつと終わりを告げる。

あるいは、もしかしたら。

レンたちの街の外——わだかまる闇も同じもので、なんらかの力によって押しとどめられているのかもしれない。

ダンジョンを攻略し終えた後に待っているのは「世界を守るための

戦い」なのかもしれない。

だとすれば。

『闇』がレンたちの故郷をも蝕む可能性もあるのだろうか。だとすれば、これは必然の戦いだっただろうか。

「やるよ。ここまできたら、最後まで」

レンの周りには頼もしい仲間たちがいる。

彼女たちと一緒にならきつと、いや、絶対に大丈夫だ。

確信から笑みを浮かべて、レンは光の矢を解き放った。

番外編・後日談

【番外編】永遠のパートナー

「レーンっ」

夜。

部屋で二人きりになるとフリーリが妙に上機嫌だった。

ベッドで隣に座って横から抱きついてくる。片手ですりすり撫でてくるのはレンのお腹だ。

今は下着しかつけていないので浮かび上がった紋様が露出している。紋様が象徴しているのは風。どう考えてもフリーリのことである。……というか、レンにはそれが誰を表しているのか感覚でわかる。

まだ一か月目なので体調に違和感とかはまったく言っていないほどないのだが。

「えへへー。なんか嬉しいよね。好きな人が私の子供を育ててくれるって思うと」

「フリーリ、おっさんみたいだよ?」

「え、それはひどくない。……でも、今だと男の人の気持ちもよくわかるよ」

それはまあ、レン相手にえっちなことをした結果——男役を果たした成果なわけで。むしろ「ぜんぜん実感湧かない」とか言われても困る。

「妊娠つてすぐく大変なことじゃない?　なのにしてくれるってことは、私にぜんぶ許してくれたってことなんだよね。なんていうか、すっごい征服感?」

「なんかすぐくえっちなこと言ってる?」

「言ってるかも」

その理屈で行くとレンはフリーリにぜんぶを征服されてしまったわけだ。

好きな人にならそれも悪くないかな、と思ってしまうあたり、やはり感覚がすっかり女子に染まっている。

「レンはどうなの？　これからお母さんになるの」
「まだぜんぜんわかんないよ。お腹も痛くないし」

お腹を痛めた子、という表現があるが、あれはぶっちゃけガチだ。世の母親は痛い思いをしながら自分の中に命があることを感じて親になるという実感を育てていく。出産なんてそれはもう大変らしいので、そうやって産まれてきた子供を溺愛したとしても不思議はない。

男親との間に感覚の相違が生まれやすいのは性差以外にそういった部分もあるのだろう。

「でも、わたしたちの子どもってお腹蹴ったりしてくるのかな？」

「え、なんで？　……って、私に似たらどうなるかわかんないか」

「そうそう。フーリに似たら『風』が生まれてくる可能性とかありそうじゃない」

精霊の「本来の姿」はどちらかというと非実体化状態だと思われる。そうすると精霊の子は当初、実体化できない可能性が高い。蹴る足がないかもしれない。それとも代わりにどっかんどっかん体当たりしてくれたりするのだろうか。

「風かあ。……っていうか、そもそも精霊って子供作るのかな？」

「あー。単に自然現象が意思を持っただけ、って可能性もあるよね」

「だとすると『だいたいどんな相手とでも子供を作れる』のもサキユバスの能力ってことになるのかな？」

「そうかも。さすがに無機物とはできないだろうけど」

「メイちゃんならいけるんじゃない？　試したことあったっけ？」

「そういえばなかったかも。……今度試してみようかな」

だとするとそれはばんばん子供を作らされるフラグな気もする。そうなるとかつて賢者の言っていた要望通りなのではないか。

まあ、好きな人との子供ならそんなに悪くは、

「いやいや。まだまだこれからなんだから今決めるのは早い」

「そうだねー。私だって赤ん坊の世話とかちゃんとしたことないし。親戚の子を抱かせてもらったくらいはあるけど」

「私はしなかったなあ。なんとなく怖かったし『落としそうだからだ

め』とか言われて貸してくれなかった」

「あはは、レンらしいね」

一か月の今のうちにイメトレくらいはしておくべきかもしれない。泣く子をあやしてミルクを与えておむつを替えて……夜泣きへの対応はえつちの時に使っているマジックアイテムを応用できそうだ。レンは睡眠時間が減ってもエナジードレインさえできていればわりと平気なので、一緒の部屋に子供を寝かせて逐一対応すればいい。

……サキユバスの身体というのはつくづく便利である。

「ミルクかあ。母乳のほうがいいよね。こつちの世界だと粉ミルクとかないし。……ないよね？」

「たしかあったと思うよ。向こうの世界と同じものかはわからないけど、お母さんになった人たちの希望でなんとか作ったって」

例によつて高級品だが売ってはいえるらしい。

「そういえば、レンの胸、また大きくなったりするのかな？」

「しないんじゃないかなあ。わたしの場合、たぶん今すぐでも母乳出せるし」

「え、なにそれ初耳」

体型を調整するスキルの応用である。母乳が出るようになる程度であれば胸のサイズを変更するついでのように変えられる、と思われる。

試しにやってみたらあっさりできた。胸から液体が出てくる感覚はなんともむず痒く、慣れないと変な感じだが。

「うわ、すごい。じゃあ、レンは母乳が切れたりもしないんだ」

「かな？ ヒールがあるし、フリーたちからドレインさせてもらつてから栄養補給も切れないよね」

「うわー、すつごく便利。すごい」

「もう、ずるいとか言いながら胸揉まないでよ」

女同士だし、そういう関係なわけだし、別に揉まれるくらいいいと言えればいいのだが、なんとなく気恥ずかしい。そういうのはそういう雰囲気の時によつて欲しい。

「ねえ、レン。ちよつと飲んでみていい？」

「いいけど。……んんっ、フーリ、早い！」

許可を出したら即座に吸いつかれた。出すだけじゃなくて吸われるとなると余計に変な感じである。慣れたらちよつと気持ちいいかもしれない。

「あ、なんか甘い。母乳ってこんなに美味しいんだ？ レンも飲んでみる？」

「自分のを自分で飲むのはなんか変態っぽくないかなあ……」

ちなみにレンならやろうと思えば自分の胸から直接吸うこともできる。サイズの意味で。

「うーん。サキュバスだから甘いのかな。誰に聞いたらわかるだろ」

「赤ん坊だった時の母乳の味を覚えてる人はいないんじゃないかなあ……」

直接飲み比べをするのは「っばい」どころか絶対変態なので却下である。

「なんにしても、ちゃんと育てないとね」

「それはもちろん。……責任重大だなあ」

子供を育てるとなるとお金もその分さらにかかる。

五十階を攻略してからの一か月、攻略済みの階を積極的に回ってお金を集めた。前に話していた通り、今でもパーティーメンバーでペアヤトリオを作って安全な階で資金調達は続けている。五十階で得た報酬がなかなかとんでもない価値だったのもあって、現状でも生活するだけなら数年は大丈夫なくらいの蓄えはある。

レンはみんなから「ダンジョンへは行くな」と言われてしまっているのどこ最近では戦えていないが、代わりに街の人の頼みを聞いてちよつとした謝礼をもらったりしている。

大きかったのは娼婦のお姉さん方にえっちなテクニクを教える依頼だろうか。メイの母に協力のお礼として教えたところ、どういうルートを辿ってかお姉さん方にも情報が行った。で、「私たちにも教えて欲しい」と言われた形だ。

歴戦の女性に教えられるようなことは……と思っただのだが、意外とみんな喜んでくれた。サキュバスの本能はかくも強力だということ

か。

「ダンジョンに復帰できるまでにどれくらいかかるかなあ」

下腹部に当てられたフリーリの手に分の手を重ねながら呟くと、フリーリは「どうだろうね」と首を傾げた。

「人間の子供なら三歳とか？ マリアさんたちに預けるにしてもすぐには無理かなあ」

「三年……お腹にいる時間も含めたら四年かあ。それだけあったらレベルも上がりそうだなあ」

「子供育てながらばんばん強くなる気なんだ、レン」

「それはまあ。少なくとも普通に生活してるだけでエナジードレインのレベルは上がってくし」

深化吸精はエナジードレインのレベルも参照して威力が変わるので、そのうちオーガくらい触れただけで殺せるようになるかもしれない。

【番外編】半妖精の少女

「ディープ・ドレイン
深化吸精」

胴体に軽く触れてスキルを発動すると、対象——狼は一瞬にして「きゆう」と息絶え、ぐったりと身を横たえてしまう。

身体になんの傷もないというのは逆に罪悪感がすごい。

レンは狼の身体を抱きかかえたまま同行者——金髪碧眼のハーフェルフを振りかえった。

「終わったよ、アイリス」

「ありがとうございます、レンさん」

念のために弓を構えていたアイリスは武器と共に両手を下ろすと微笑んだ。

「でも、やっぱりそのスキルは怖すぎますね。命をいただく責任を忘れてしまいそうです」

「だよね」

仲間も同じ意見だったことにほっとするレン。自然と笑みを浮かべると、二人で笑いあった。

この狼は皮を剥いで肉を取って、可能な限り有効活用させてもらう。レンには捌けないのでその辺りはアイリス一家にお任せだ。

「わたしも獣の捌き方覚えたいなあ」

「え、でもけっこう難しいですよ？」

「暇なんだよ。ダンジョンに行かなくなったら時間が空いちやつて」

料理も「私たちがやるからレンは駄目」と主張するフリーに無理を言っただけで少しづつ覚えている。心配しなくてもフリーたちのことは今までもこれからも頼りにするし、一緒に料理をするのも楽しいはずだ。

裁縫は前からちよくちよく練習しているし、なんだかんだだけっこう家庭的になってきた気がする。

「少しはゆっくりしてくれてもいいと思いますけど……獣の捌き方なら私が教えられそうですね？」

「うん、頼りにしてるよ、アイリス」

「っ」

飛び跳ねそうなほど笑顔になったアイリスはレンのすぐ傍まで寄ってくる。と耳元で囁くように、

「約束ですよ？ 妹たちやミーティアさんには内緒にしてくださいね」

「わかった、内緒にする」

こういうのも悪くない。レンはちよつと悪い笑顔を浮かべて二人だけの約束をした。



狼の他にも何匹かの獲物を狩って帰るとアイリス一家からとても褒められた。

種族の固定化を行ったことで風の刃の魔法「ウインドスラッシュ」を習得できたので、それを使えば木材の伐採にも貢献できる。

「レンさんならすぐにでも私たちを手伝えますね」

アイリスの母が微笑んで言うと、アイリスの父は認めたくないという顔で、

「アイリスを連れてきてくれる事には感謝してるけどな」

「私たちは大歓迎だよ！」

「レンさん、もっと遊びに来てください！」

「うん。しばらくはもう少し遊びに来れるかも」

アイリスの妹たちは相変わらず可愛い。

これに対して姉はあまり面白くなかったのか、若干頬を膨らませて、

「二人とも。そんなことより、そろそろ恋人くらい作ったほうがいいんじゃない？」

「何を言い出すんだアイリス！」

お父さんが悲鳴を上げた。

妹二人（言動は幼さが残るが見た目も実年齢も年頃だ）はこれに対して顔を見合わせて、

「じゃあレンさんに恋人になつてもらおうかなー」

「別の人を探すより一緒の方が安心ですよね？」

「なんで二人とも私の好きな人を取ろうとするの……!？」

「きゃあきゃああと仲良く(?)騒ぎ出した娘たちを見た母親は首を傾げて、

「まだそんなに焦らなくてもいいと思うんだけど……」

と、のんびりと呟いた。



「なんていうか、アイリスって嫉妬深いよね? 嬉しいけど、ちよつと意外」

「それは……だって、レンさんのせいじゃないですか」

帰り道。

飛ぶとすぐに着いてしまうので敢えてゆつくり歩きながら言葉を交わした。

拗ねたように答えたアイリスは隣に立つレンに若干恨みがましそうな視線を投げかけてくる。身に覚えがたくさんあるので、これには「ごめんなさい」と言うしかない。

「フリーさん、私、メイさん、シオンさん、ミーティアさん。……もう五人なんですよ? あと三人で一週間に一回も私の番が来なくなっちゃいます」

「さすがにあと三人は増えないと思うけど」

「エルさんを入れたらあと二人じゃないですか」

さすがに十二歳の女の子を誑かす趣味はない。いや、メイは出会った当時十三歳だったが、彼女は精神的にも肉体的にも歳相応ではないので除外だ。

するとアイリスは「三年後ならいいんですか?」と追撃をかけてきた。

「それは……うん。ちよつと色目使いたくなつちやうかも」

「私たちだけじゃ不満なんですか?」

「もう。アイリス？……そんなに欲求不満？」

長い耳に唇を近づけて、半ばキスするように囁いてやると少女は途端に真っ赤になった。

「ち、ちちち、違います！ 別にそういうわけじゃ……！」

「別にいいのに。……そういえば最近、生やすのにも慣れてきたもんね？ わたしの名前呼びながらいっぱい求めてくれて嬉しい——」

「風の精霊よ。彼女の周りの音を遮断し無を作り出——」

「沈黙の魔法!? しかもわざわざ長い詠唱付き!？」

多くの魔法は詠唱を入れると精度や威力が向上する。唱えている暇があったらさっさと撃つて二発目に入った方が強いので使った覚えがないが。

デバフ系の魔法は精度が特に重要なのでアリかもしれない。あとは儀式っぽい魔法？ 種族を固定化したことによるボーナスで魔法の開発が可能になったのでそっちの方向性も探ってみたいところだ。

「レンさん？」

「あ、ごめん。つい魔法のこと考えてた」

「……嘘じゃなさそうですね。それならいいですけど」

他の女の子のことだったらもつと怒るつもりだった、ということだろうか。

レンは嬉しさからくすりと笑って、アイリスの細い身体を抱きしめる。

「きやつ、あ、歩きにくいですー！」

「いいじゃない、少しくらい止まっても。……今日はアイリスの番だから、いっぱいしようね？」

「……い、いっぱいって」

「あれ？ わたし『えっちなこと』とは言っていないけど？」

ちよつとからかいすぎてしまったのか、真っ赤になったアイリスは「レンさんは本当にサキュバスなんですから！」と大きな声を出した。森と平地の境目に響き渡る声。下手をすると近くの家にも聞こえてしまったかもしれない。

しまった、という顔をしたアイリスはしゅんと肩を落として、

「……レンさんのせいです」

「気にしなくていいよ。こつそり付き合ってるわけじゃないんだし、わたしはアイリスのことが好きだから」

なにも間違っていないし知られても困らない。

こういうところでサキュバスの気性はありがたい。えつちなことが大好きなだけではなく、というかそういう性格だからこそ、細かいこともあまり気にならない。

再び歩きだしながら、しばらく頬の色が戻らなかったアイリスだったが、やがてふう、と息を吐いて、

「フリーさんとレンさんの子供、どんな子になるんでしょうね?」

「気になる?」

「はい。だって、それによっては私たちの子供も想像できるでしょう?」

レンが妊娠したことは賢者にも報告してある。

その関係で、この前会った時、彼はこんなことを言っていた。

『サキュバスに他種族との子を儲ける特性があるとすれば、君の産む子の性質は相手の種族のものにかなり偏るかもしれない』

だとすると、フリーの子供は風の精霊に、アイリスとの子はハーフエルフになる。

クォーターではなくハーフが生まれてくるとしたらエルフ系の子を増やすのに一役買いそうだ。

「わたしとしてはアイリスがちゃんと子供のこと考えてくれてるのが嬉しいけど」

「もう、レンさんはまたそうやって茶化すんですから!」

二人つきりだどついつい距離が近くなって意地悪してしまう。

二度目の大きな声にアイリスが「しまった」と口を押さえた。

【番外編】ゴーレムの少女

「ほーら、ご主人様。大好きなおっぱいですよー」
相変わらずの棒読み口調で言いながらメイド服の前をはだけるメイ。

彼女のメイド服コレクションは増え、今では日替わりで着られるレベルに達している。着こなしもなかなかのもので、体型補正の意味では特に必要ないブラもしつかりと身に着けていた。

漆黒の大人びたブラの下には大きな膨らみ。調整可能なのをいいことに理想的な形と張りを維持しているそれは「見事」としか言いようがない。

ムードの欠片もない棒読みは減点対象だが、本人が自信満々なだけはある。

「いつ見てもすごいなあ、これ」

「研鑽に研鑽を重ね、日々改良を施していますからね」

こういう時は心なしかドヤ顔になるあたりがメイらしい。

少女の双丘に手を伸ばしたレンは強くしすぎないように気をつけながら指でその質感を楽しむ。押すと指が沈み込むと同時に軽く押し返されるような感触。

極上のクツションのようなそれは、いやらしい意味を除いてもなお気持ちいいと言わざるをえない。

火の魔石を内蔵して「体温」の保持が可能になったことで温かさも完備。さすがに心臓の鼓動までは再現できていないが、これはまあ、音に煩わされる心配がないということでもあるのでマイナスとも言い切れない。

メイは時折、棒読みで喘ぎっぽい声を漏らしながら、
「もつと強くして頂いても構いませんよ。後は吸うとか、顔を埋めるとか」

「それ、すごく変態っぽくない？」

「ご主人様はおっぱい大好きな変態では？」

「否定はしないけど、ものすごく不本意だなあ」

メイと二人つきりの夜はだいたいこんな感じである。

甘いトークというか漫才というか。メイ自身はこれをととても楽しんでるようだし、レンとしても気負わずにいられるのでこれはこれで楽しくはある。

接触していればエナジードレインによる充足感はあるし、ついでにメイにもレンの生命力を送り込むことができる。

メイが相手なら眠くなって中断してしまう心配もないし、夜にのんびりしたい時などにはぴったりである。

「ゴーレムの子供ってどれくらいで生まれてくるんだっけ？」

しばしメイの胸を堪能した後、膝枕をしてもらいながら尋ねるレン。例によって翼が邪魔になるので寝るのは横向きである。

「私の裁量次第ですね。完成度に拘ればその分、製作期間も必要になりますし、材料の集め具合にもよります」

「製作期間って。でも、時期を調整できるのは助かるかも」

普通の子供は夜だろうと早朝だろうと生まれてくる。父親の出張と重なって大変、なんていうこともあるだろう。そういうのを避けられるだけでもけっこう大きい。

「母親の胎内でも思索はできますしね。私は生まれてくる前の記憶がありますよ」

「え、それはちよつと羨ましいかも」

「視覚も出来上がっていましたが、逆に暗いところに閉じ込められている感覚でしたが」

ゴーレムの場合、母の視覚や聴覚とリンクして外の情報を取り込むこともできるらしい。なかなかの英才教育である。

へー、と言いながら聞いていると、なんだかカンガルーとかそつち系のイメージになってきた。

「メイに似て可愛い子なんだろうなあ」

「それはもう。私の子ですから。母に似てしまうと可愛くない子が生まれてしまうのでそれが心配ですね」

なお、メイとその母親は本当にそつくりである。

「できればご主人様の子供よりも早く産みたいところです」

「? どうして?」

「そうすれば私の子が長女ということになるでしょう」

「そこ気にするんだ」

むしろ長女、長男はいろいろしがらみが多くて大変じゃないだろうか。しかも、子供が長女になったからといってメイが威張れるわけではない。

「ああ、でも、うちは別に家業があるわけじゃないしね。後継者問題とかなないから気楽か」

「街のリーダーを継ぐことになるかもしれませんが」

「わたしが継いだとしても、わたしが継がせる必要は当分なさそうだしなあ……」

やろうと思えば百年くらい平気で続けられる。

まあ、日本に帰れるとなったら話は別なのだが。その辺はダンジョンの攻略状況と報酬次第である。

「跡継ぎなんてやりたい子がやればいいよ。小さいうちから教育しなくてもわたしたちの場合は間に合うし」

幼少期から後継者を決めて英才教育を施す、というのは人間の寿命が短いことが大きく関係していると思う。

実際、アイリスの家などは勉強こそきちんと教えているものの、娘三人ともかなり伸び伸びと育っている。

「子供たちを連れて帰るかとか、いろいろ考えないといけないこともあるけどね」

「日本ですか。いつか行ってみたいものですね」

「メイは大人気だろうなあ。なにしろメイドロボみたいなものだし」
「私の時代というわけですね」

それとも、帰る頃にはメイドロボが実用化していたりするだろうか。

いや、さすがに十年とかで実現するとは思えない。どこかから未来技術でも降って来ない限りは大丈夫だ。メイのような無口無表情系にも強力な愛好家がいったりするし、きつとメイは大人気である。

「そうだ、メイ。ちよつと思いついたんだけど、メイも『生やして』み

る?」

二人っきりの今が試すならチャンスだ。

だめでもともとという気分で尋ねると、ゴーレムの少女はきよとんとした表情を浮かべた（真顔のまま硬直したとも言える）。

「人間の生殖器官ですか? ……いいかもしれませんね」

「本当?」

「ええ。生えた傍からもぎ取って吸収すれば生体素材が無限に手に入るでしょう? 人間そっくりのボディを作るのに役立ちそうです」

「いや、できるかもだけど、アレを素材に全身を作るのは止めて欲しい」

「どこの部位でも肉は肉、皮膚は皮膚でしょう?」

「そうだけど、気分的にアレすぎるってば」

無表情のまま「残念です」と呟くメイに、レンはさっそくスキルを試してみる。

後ろから抱きしめるようにして身体に触れてスキルを起動すると、メイは「む」と小さく呻いた。

「成功したようですね。身体に妙な感覚があります」

「本当にできたんだ……。っていうか、感覚?」

「ええ、初めての感覚ですね。むず痒い、というのはこういうことを言うのでしょいか」

もぞもぞとメイド服のスカートを持ち上げて下着をずらし始めるメイ。

銀髪美少女がやっているのと妙に煽情的である。ついでにこれでもかと倒錯的でもあるが、本人はおそらく無自覚である。

「うん、確かに生えてる」

「ご主人様。こんな敏感なものを付けて歩いているとは、人間の男性は欠陥品なのでは?」

「まあ、正直普段は邪魔だよねえ、これ」

自分の身体からなくなって久しいそれをつんつん指で突くと、メイが「ひうつ」と声を上げる。心なしか演技ではなく真に迫った声。

可愛い、と、掛け値なしに思う。

「……ちよつと楽しくなってきたからいろいろいじってみようか」
「ご主人様？ 目が怖いのですが？」
「大丈夫大丈夫。痛くしないから」

その夜は、珍しくメイの悲鳴が室内に響き渡った。

【番外編】優しい妖狐

きつね色の髪。ぴよこんと立った一対の大きな耳。

巫女服に似た衣装を身に纏った少女は、湖へと足を垂らしながら手にした杯をゆつくり傾けた。桜色の唇からほう、と吐息がこぼれ、降り注ぐ月光の中に消えていく。

酒の美味を示すようにふさふさした尻尾が揺れる。

少女の隣に座ったレンは自分の分の杯を両手で包み込んだまま、シオンの美しさに思わず見入った。視線に気づいた少女は恥ずかしそうに頬を染めて「あまり見ないでくださいませ」と抗議してくる。「いいじゃない、二人つきりなんだし。それに、シオンの可愛いところを見逃したらそつちのほうが良くないよ」

「もう。レンさまはそうやってすぐにからかうのですから」

「からかってないよ。シオンは本当に綺麗だし、絵になると思う。太陽の下も良いけど、こうやって月の下でも映えるよね」

今日はシオンと二人つきりの夜。

吸音のマジックアイテムを用いてベッドの上でというのでもいいけれど、たまには別の趣向を、と二人で湖にやってきた。

広い湖の上には木々がないため星空がはつきりと見える。

夜、森に踏み入ってくる者は皆無に近いし、二人のいる場所はいまシオンのスキルによって聖域化されている。スキルがなくとも森の獣たちがシオンを攻撃することはない。動物には自分より強い相手が本能的にわかるらしい。

「うう」

呻いたシオンは照れを隠すように杯を再度傾ける。

酒は十分な量を持ってきている。節度さえ守れば食に困らない程度の資産はあるのでけちけちする必要はない。

レンも一口、清酒を喉に流してその味と風味を楽しみながら少女の顔を横目に見て、

「月が似合うというのならレンさまこそお似合いではないですか」

「ん……それって、もしかして悪魔的な意味？」

「ええと、そうですね……映えるという意味では、そうなるかもしれない」

黒い翼と尻尾。紫紺の髪と瞳も夜闇に紛れやすく、白い肌が良いコントラストとなって月明かりに映える。月に向かって飛んでいく蝙蝠のシルエットなんてよく描かれるモチーフだし、それだけ象徴的で印象的な題材だということだ。

「サキュバスだからね。悪魔とはちょっと違うけど、夜の住人なんだろうなあ」

「レンさまは昼間でもお変わりないように思います」

「む。シオン、さてはお返しのもりで言ってるでしょ」

「わたくしにも少しくらいはお返しをさせてくださいませ」

静かな森の中では大きな声を出す必要もない。

虫の声や風の音、葉擦れの音を聞きながら囁き合うように言葉を交わす。

つまみはストレージに収納した油揚げだ。

二人とも火の魔法が使えるので食べたい分だけあぶってかじりつけば良い。和の食材である油揚げは当然ながら清酒に合う。

「静かだね」

「本当に。……都会の喧騒を忘れられるのは、この世界の良いところですね」

「日本じゃなかなかこうはいかないもんね」

異世界にはテレビも自動車もスマホもない。その分、時間はゆっくりと流れていく。合わない人にはとことん合わないだろうが、レンはけっこう気に入っている。シオンもそう思っていることはわざわざ尋ねるまでもなくわかった。

「これ絶対、帰った時大変だろうなあ」

「本当ですね。予定と時間に追われる生活は絶対に大変です」

「遅れそうだからって空飛ぶわけにもいかないしね」

学生をやっていた頃は某猫型ロボットのどこでも行けるドアが羨ましくて仕方なかった。時短を追求するなら空飛ぶ方向性じゃなくてあつちが必要か。やはり賢者のテレポートはチートだ。そのうち

転移魔法が取れる職業に転職してもいいかもしれない。

「レンさまは、日本に帰ってやりたいことはありますか？」

「わたし？ ……そうだなあ、やっぱりモデルとか、ウエイトレスとかかなあ。シオンは？」

「わたくしは……そうですね。田舎の神社で巫女などできたらいいかもしれません」

「こんな可愛い巫女さんがいたら大繁盛しちゃうよ、その神社」

その気になれば神社をガチのパワースポットに変えることもできる。巫女さんが有能すぎて神主さんの立場がないかもしれない。

シオンはふう、と息を吐いて、

「駄目ですね。わたくしが今のわたくしのままでいる前提で想像してしまいます。日本に溶け込むことを考えれば、人間に戻るほうが良いはずなのですが」

「無理に戻らなくてもいいんじゃないかな。シオンの場合は特に、日本にいてもぜんぜん違和感ないだろうし」

なにしろお狐様だ。拝まれて祀られるまでである。黒髪の人間状態でも絶滅危惧種の大和撫子なので巫女さんにはびったりである。

「そう言っていただけだと、少し気が楽になりますね」

微笑むシオン。

「今の身体、気に入ってる？」

「ええ。最初は戸惑いましたが、今となっては元に戻るのが惜しいくらいです。みなさまがわたくしを肯定して保護してくださいましたおかげですね」

「わたしたち、少しは役に立てた？」

「返しきれないほどの恩をいただきました」

「わたしたちも、シオンにいっぱい助けられたよ。シオンがいなかったら死んでたかもしれない」

少女はくすりと笑って「では、おあいこですね」と言った。

「先の道のりはまだ長いです。……もうしばらくは、みなさまと一緒にこうしていられますよね？」

「もちろん。感傷的になるにはまだ早いよ。これからモンスターより

手強い相手を迎えないといけないんだから」

「そうでした。……子供の相手はわたくしもほぼ経験がありませんから」

レンのお腹にいる子はフリーとの子だ。なので基本的には二人で育てるつもりだが、みんなにも協力してもらおうことはどうしてもある。その代わり、シオンとの子が産まれても他のみんなが助けてくれる。

親が二人しかない普通の家庭とは違うレンたちならではの利点だ。

「では、こうしてのんびりできるのはもう少しの間だけかもしれないね」

そつと、少女がレンの肩にもたれかかってくる。軽いシオンの体重、柔らかさと体温を感じながらレンは微笑んで杯を空にした。

シオンが黙ってお代わりをついでくれる。

夏の初めの夜の空気はとても心地よく、湖の少し湿った空気が落ちて着いた雰囲気さらに強めてくれる。

「レンさま。今夜はずっとこうしていても良いでしょうか……？」

「もちろん。お酒もおつまみもまだまだあるしね」

二人だけの夜がゆっくりと更けていった。

【番外編】ダークエルフの姫

「ねえ、レン。キスしましょう?」

二人きりになるとお姫様はすぐにキスをねだってくる。

特にディープキスがお好みだ。白く細い前髪を指でそつと後ろへ流しながら唇を合わせてやると、レンの背中へ腕を回して身体を密着させてくる。

女同士。柔らかな身体は他者を拒まない。ただ、大きな胸はこういう時はちよつと邪魔だ。お互いに大きいと猶更である。

息苦しさから呼吸が荒くなり、興奮を助長してキスが激しくなる。剣の試合でもするように舌を交わしあい、唾液を流し込み合っている。とついつい時間を忘れてしまう。

唾液の糸を伸ばしながら身体を離すと、お姫様は恍惚の表情を浮かべて息を吐いた。

「本当、えつちだよね、ミーティアは」

「……あなたに言われたくないわ。そうなるように私を染めたくせに」

紅玉のような美しい瞳が真つすぐにレンを見つめてくる。

彼女にとってキスは神聖なものだ。

結婚相手としか交わしてはいけないもの。行為の相手は何人持つてもいい、という価値観であることも合わせるとその特別さがよくわかる。

はじまりが無理やりのキスであっても、ミーティアは他の誰ともキスを交わさない。レンだけを求め、レンだけのために技を磨いてくれる。

サキュバスの舌技を模倣することでテクニクは日に日に向上、今となつては教えたレンでさえたまに驚かされるレベルに達している。

「一回じゃ足りないわ」

ベッドに引き倒され、二回目のディープキス。

唇の端から漏れる互いの吐息、舌が唾液を絡めて立てる音に鼓動が高鳴る。鼻腔をくすぐるミーティアの匂いも意識をキスへと没入さ

せていく重要なスパイスだ。

夜の静寂の中、ベッドの上で互いの着衣が擦れあいかな音を立てる。

足と足が交差し、細かく位置取りを変えながら主導権を奪い合った。



「次は私だから、覚えておきなさい」

月が最も高くに昇った頃、穏やかで退廃的な余韻に浸っていると、お姫様が起き上がってレンのお腹をそつと撫でた。

細くしなやかな指。

ミーティアは休みの日でも弓の訓練を欠かさない。にもかかわらず美しさと滑らかさを維持したその指先は、彼女が人とは違う種族であることを感じさせてくれる。

指の下にあるのはお腹の子がフリーとの間にできたことを示す紋様。

「一番だから偉いとかそういうものじゃないと思うんだけど」

むしろ、初めての子は不慣れで至らない点も多くなるかもしれない。

そう考えると後に生まれた子のほうが得をするんじゃないかという気もするのだが、そこは理屈ではないらしく、

「私のものが他の女に先に孕まされたのだから嫉妬くらいするでしょう」

「ん……それは、確かに」

レンが男だったとして、普通に男女の交際として——恋人が他の男に、と考えてみると物凄く嫌だ。相手の男を思い切りぶん殴るくらいはしないと収まらないだろう。

女子同士の場合はいろいろ条件が違う気もするが、それでも。

「まあ、最初がフリーだったのは良かったのかもね」

「どうして？」

軽く息を吐きながらの言葉に目を瞬いて尋ね返す。

「あの子は自分で子供を産めないからよ」

正確には、産めるかもしれないが制限がかかる、あるいはいろいろ大変かもしれない、ということ。

「フーリとの子でいろいろ慣れた後なら二人いつぺんに育てるのも多少は楽になるでしょう?」

「二人いつぺんに……って、この子も含めて、って意味じゃないよね?」

「もちろん。私たちの子が二人、よ」

レンより遥かに年上の少女は大人びた艶やかな笑みを浮かべて、
「母親が二人いるのだから不思議なことでもないでしょう?」

つまり、レンに双子を産め、という意味でもない。

レンの能力なら好きな時に子供を妊娠できるし、相手に妊娠させることもできる。それを使えば同時期に子供を作るのも簡単だ。

さすがに誕生日は多少ズレるだろうが、生まれてきた子はある意味双子みたいなものである。

二人が同時に動けなくなってもこの家には他に四人もいるので連携して対処できる。……とはいえ、

「ちよつと大変そうだなあ」

「大変なら使用人でも雇えばいいじゃない」

「ミーティア。それ、自分が頑張る前提で考えてる?」

「王族の子育ては『子供の相手』ではなく『子供の教育』よ」

泣く子をあやしたりミルクをあげたりは使用人の仕事であって、母親が直接行うものではないという話。

庶民出身のレンとは感覚の違いがすごい。

「そもそもここだと使用人とか雇えないんじゃないかなあ」

「メイの妹でも籠絡すればいいじゃない」

「本当にできそうなアイデアをすぐに出さないで欲しい」

ゴーレムは睡眠不要なので赤ん坊の相手をしても気疲れしない。メイの妹は前に当人から似たような話を持ち掛けてきたくらいなので声をかければ二つ返事でOKしてくれそうだ。

S っ気の強い性格が心配ではあるものの、さすがに小さい子供をいじめたりはしないはず。

「それに、できればわたしたちで育ててあげたいよ。だってわたしたちの子供なんだから」

「別にそれを忘れているわけではないのだけれど」

少女はふつと笑うと「仕方ないわね」と呟いた。

「そこまで言うなら努力してあげる。……けれど、私に子供をあやした経験なんてないわよ」

「わたしだってないよ。だからこれから頑張つて覚えるんだよ」

「そうね。母親になるんだものね」

自分たちの出自を考えれば当たり前の話。男だったレンと違ってミーティアにとっては生まれた時から「いつかやってくること」だっただろう。

不思議なものだ。

誰もが経験すること。そうわかっていても怖いものは怖いし、上手くできる自信もない。経験してしまえば「なんだこんなものか」と思えるのかもしれないが。

「母親、ね。……私たちの子は王家の血を受け継ぐことにもなるのよね」

ミーティアは滅んだ世界の生き残りだ。

当然、王家の他の者もみんな死んでしまっている。

「血を残す意味でも、たくさん子供を作らないとね」

「ちよつとミーティア。わたしに何人産ませる気？」

「いいじゃない。お互い、長生きするんだし」

サキユバスもダークエルフも寿命は長い。

レンに関しては同族の先輩がいないので目安さえわからない。もしかしたら気が遠くなるほど長生きできるかもしれない。

だとすれば、

「そうかも、ね」

ダンジョン攻略が終わったら、とにかく次代をたくさん育てるのもいいかもしれない。

レンは笑ってお姫様の頬を、首筋を、お腹を撫でた。

「とりあえず、エルで予習をしておきましようか。あの子は良い感じに元気があるから」

「さすがに赤ん坊と一緒にされるのはエルが可哀想じゃないかなあ……」

なお、件の見習い聖女が「神殿には捨て子も多いので」と赤ん坊の扱いに慣れていることが判明するのはもう少し先のことである。

【後日談・番外編】 ささやかなエール

宝石職人という職業について、最初は「自分にぴったりだ」と思った。

裕福な家庭に育った彼女にとって「本物の宝石」付きのアクセサリーは決して手の届かないものではなかった。両親にねだって買ってもらったいくつかの品は宝物だったし、次の誕生日には新しいアクセサリーを買ってもらおう約束になっていた。

高価で煌びやかな宝石は自分のような者にこそふさわしい。

異世界に連れて来られたせいで誕生日のプレゼントはもらえなくなった。お気に入りだったアクセサリーも、服も、もう身に着けられなくなってしまうた。

だったらせめて宝石に触れ、宝石を売ってお金持ちになるくらい許されるはずだ。

——あのレンとかいう奴に馬鹿にされた時は本当に怒りでいっぱいだったけれど。

宝石加工の技術を覚え、金を稼ぐことが彼女の新たな目標になった。

お金があればいろんな物が買える。生活に余裕ができれば良い装備を買ってダンジョンに潜ってみよう。あんな奴らにできるのだから自分にだってできるに違いない。

決意を胸に雇い主にして師である男性に教えを乞い、職人としての一步を踏み出した。

挫折はあつという間にやってきた。

職人の作業は思った以上に地味だった。

切断や研磨には技術だけでなく力もある。練習をしようにも高い物だから気軽には使えない。だから研磨をしながら師匠の作った品を見て勉強したり、デッサンをして立体的な造形について知識を深めることから始めさせられた。

煌びやかな世界だなんてとんでもない。

毎日、汚れてもいい服装で汗をかきながら格闘する日々。師匠は頭

ごなしに叱るような人ではなかったが、泣き言や抗議という名の文句は決して聞き入れてくれなかった。サボれば容赦なく給料を減らされる。高い物を扱っている割に給料の額は決して高くなかった。

「宝石なんて買ってってくれる人は限られる。モノが高いって事は失敗作一つで大きな損が出るって事でもある。商品を生み出せない見習いに高い給料は出せない」

辞めます、と啖呵を切れば、

「好きにすればいい。ただ、生活費を得るあてがないのなら軽々しく口にしない事だ。……誰か、無償で施してくれる相手でもいるというのならそれもいいかもしれないが」

冷や水を浴びせかけられたような気分だった。

収入ならダンジョンへ行けば得られる。しかし、毎日の仕事（というか修行）でくたくたになっただけはとてもそんな気力はない。一人では危険だし、付き合ってくれそうなのは二人のクラスメートだけ。彼女たちもそれぞれの仕事で同じように疲れきっていた。

助けてくれる人。そんな相手、いるわけがなかった。他のクラスメートからは白い目で見られて距離を取られていたし、家族も恋人もない。男に媚びて守ってもらう？ まさか、そんなのをプライドが許すはずがない。

結局、彼女は宝石職人の修行を続けた。

成果を実感し始めたのは一年を過ぎた頃。真面目に頑張ればその分だけレベルが上がる。スタミナや筋力は作業のしやすさに直結するし、スキルを取得すれば劇的に成果が上がった。給金も少しずつ上がり、少しは美味しいものも食べられるようになった。

ダンジョンには行けずじまい。

自分のクラスは戦闘に向いていないとよくわかってしまったからだ。戦いに使えるスキルも皆無ではないが、それを取るくらいなら加工向きのスキルを上げる方がいい。気づけば少しずつ、宝石と向き合うのも楽しくなってきた。

「師匠。宝石の何割かは見た目の美しきではなく均一な形と透明度に拘っていますよね？ これは何故なのでしょうか？」

「魔法使い、特に付与魔法使いが使うからだ。触媒にするには美しさよりも均一さが大事なんだとさ」

「貴重な宝石を魔法のために消費するんですか？」

「重要だぞ。マジックアイテムはダンジョン攻略に欠かせないし、生活を楽にしてくれるマジックアイテムだってある。それに、ここでは比較的楽に宝石を手に入れられるしな」

一つはダンジョンからの産出。

モンスターが落とす宝石はカットや研磨がされていない状態のものが多いため、職人が買い取って加工を施す。観賞用やアクセサリー用に加工された宝石を買ってくれる者は希少だがいないわけではない。数少ないベテラン女性探索者は金払いが良かったため上客だ。

もう一つは工房の地下に作られた宝石鉱。

師匠が「世界の欠片」で作り出したものであり、各種の宝石が一度に取れる物理法則を無視した夢のような場所だ。生産スピードは工房に所属する職人の数と練度に応じて上がる仕組みになっており、僅か数年で新しい宝石が採取可能になる。

「ここ一年は宝石の生産スピードが僅かだが上がった。何故かわかるか？」

「私が来たから、ですか？」

「正解だ」

まだまだ見習いの自分でも役に立っているのだ。そう思うと仕事にも身が入った。

次の一年はあつという間。

「だいたい顔つきになってきたな」

「職人の顔だと？」

「それもあるが、来たばかりの頃のお前はひどい顔だったからな。恨みや不満を少しは忘れられたんじゃないか？」

「……そうですね」

自分は選ばれた人間だと思っていた。

クラスでも中心人物だったし、ここに来てからもそのつもりで振る舞った。しかし上手くはいかなかった。貶められたのだと憤りもし

だが、今思えば単に、自身が至らなかつたのだろう。思慮も、上に立つ者としての素質も足りていなかった。

「こうして地味な作業を繰り返していると気持ちが悪くなります」

「地味な作業ばかりじゃないだろ。宝石は人の目を楽しませる物でもある」

「はい、師匠」

あのパーティー——レンたちに謝るべきだろうか。

シオンとは知り合いだから、仲介してもらえば話はしやすい。彼女は悩んだ末にそれを断念した。敵意はほぼなくなったものの、今更謝るなんて気まずいし、顔を合わせるとまた変なことを言ってしまうし、うな気がしたからだ。

そんなある日。

「結婚指輪用の宝石を六つ、ですか？」

「ああ。全てレディースで頼みたい」

街のリーダーである賢者が工房に来て妙な依頼をしてきた。

結婚指輪は普通男女で一つずつだ。レディース二つなら少し前に請け負ったが、六つとはいったい……と思ってから「ああ」と理解した。

女ばかりで共同体を作り、しかも恋愛関係がある奴らなんて他にいない。

「先日、レンが妊娠した。この街にとっても欠かせない人物だ。どうせなら盛大に祝ってやりたいと思ってるな」

「それで指輪を。しかし、六つもプレゼントとは豪勢ですね」

「こちらから準備しなければ式を行わずに済ませそうなのでな」

女同士な上に六人での式とか前代未聞にも程がある。結婚式をする前に妊娠してしまったこともあって「どうしよっか」で話が止まってしまうらしい。そこはまあ、わからないでもない。

異世界に来るまで男だった女が相手（女）の子を妊娠ってどういうことなのか。

彼女が首を傾げているうちに師匠は依頼を承諾した。料金は前払いで支払われ、賢者は「では頼む」と平然と帰っていく。以前の一件

から彼女としては苦手な相手になっていたので話さずに済んでほつとした。

「というわけだ。数が多いからお前にも手伝ってもらおうぞ」

「私が？ いいんですか？」

「不満か？」

「いいえ。嬉しいですけど……」

言い淀むと、師匠は仕事に戻りながら彼女のほうを見ずに言った。

「言葉で伝えづらいなら、良い仕事で返したらどうだ」

その言葉は小さな救いになった。

「私は、なにをすればいいでしょうか？」

「デザインを描いてみる。俺も描くが、何しろ六点だからな。しかも全部レディースとなると心許ない。お前の方が良いアイデアが出るかもしれない」

「わかりました」

そこからはしばらく睡眠時間を削る日々が続いた。デザイン画にあまり多くの時間はかけられない。加工の手間はスキルとステータスによってかなり短縮できるものの、加工した宝石を指輪にする作業は別の職人に委ねなければならぬ。

幾つも描いてはボツにし、これと思ったものを師匠に見せる。改心の出来だと思つたものが次々ボツにされ、気落ちしながらも奮起してさらに描く。この繰り返し。

そして。

「……できましたね」

「出来たな」

最終的に彼女の案がまるまる採用されたのは一つだけだった。ただし、他の宝石にも部分的にアイデアが流用されている。

レンの石は淡いブルーの中に虹色の輝く宝石——ウオーターオパール。

希少な天然ものの中でも透明度が高く、角度によって見え方の大きく変わるとっておきの品をチョイス。最も綺麗に見せるため大胆なカットを施した上で丁寧研磨して仕上げた。

ほかの五人の石は紫サファイアで統一した。

こちらも特別なお客様のためのとっておきを使い、一人一人違うカットを施した高級品。

レンの色でもある紫を揃って身に着けることで少女たちの結末はより高まるだろう。そして、レンには複数人を守り愛する責任を忘れないように多色の宝石を。

「良い出来だ」

出来上がった宝石を賢者も褒めてくれた。

「一時はどうなる事かと思つたが……案外、将来は良い職人になるかもしれないな」

「恐縮です」

結局、結婚式は賢者たち大人主導で計画され、レンのお腹が大きくなり始めた頃に実施された。

場所は神社ではなく神殿。

神社の主であるシオンが花嫁役だということと、僻地では人が集まりにくいという判断からだ。その日はダンジョン探索が禁止され、花などで美しく飾り付けられた神殿で式が盛大に執り行われた。

来場者は百名以上。

一目見ようと立ち寄つた者、バージンロード代わりに歩いた商店街に集つた者を含めると街のほぼ全員になつたかもしれない。彼女でさえ「いいから行くぞ」と師匠に引きずられるようにして見物に行つたくらいだ。

純白のウエディングドレスに身を包んだ六人の花嫁。

「……ぜんぜん似合ってない」

漆黒の翼を携えた紫紺の髪の子キュバスには白よりも黒のほうが似合つただろう。

拗ねるような呟きが聞こえたわけではないはずだが——不意に、レンが彼女のほうを振り向いてにこりと笑つた。

ありがとう、と。

唇の動きだけで語り掛けられた瞬間、彼女の頬を一筋の涙が伝つた。

「なによ、それ」

これでは完全に彼女の負けだ。

格の違いを見せつけられた。

「そこまで言うなら、せいぜい幸せになりなさいよ」

式の進行役は「真の異世界人」だという幼い少女、エルが務めた。

全部見たわけではないが、巫女として育てられてきたという彼女は旅立ちに際して与えられたという大きな教典を抱えるようにしながら最後まで役目を務めあげたらしい。

異世界式と日本式、西洋式がごちゃ混ぜになった結婚式。

「あなた方はこれからの生を共に歩み、共に悲しみ、共に喜び合い、いつか死が訪れるまで愛を全うすると誓いますか」

「誓います」

街に大きく響き渡るような拍手の音。

過去最速で五十階を制覇したというパーティの結婚式は過去最大の規模で執り行われ、笑顔で溢れたままに終わりを迎えた。

後日、たまたま街で見かけた彼女たちの指には、しっかりと結婚指輪が嵌まっていた。

日の光に照らされた宝石の輝きに彼女は思わず目を細め、

「ま、悪くないんじゃない?」

職人としてより成長し、あの宝石たちよりもっと素晴らしい作品を作り上げてみせると心の中で固く誓った。

【番外編・後日談】 あいつらのその後と年齢退行の効果

「昨日、リアン、アキ、レナの三名が年齢の退行を希望してきた」

レンが賢者からそう聞かされたのは新しい神器を獲得してから半年ほどが経った頃のことだった。

前にも増して雑然とした感のある賢者の家。テーブルを挟んで向かい合うように座ったレンは「それはまた」と、感嘆とも呆れともつかない息を吐いた。

「思い切ったことするなあ」

妊娠はもう四か月目。

お腹は大きくなってきて、身体が重くなったような感覚もある。ただ、レベルアップによる筋力・体力の向上もあつて生活に支障が出るほどではない。浮遊や飛行による移動も可能なので、ここまでやってくるのもそれほど苦勞はしなかった。

支障がないとは言っても一人では心配、ということ、ここにはシオンと一緒に来てくれている。人間モードに変身した彼女はせつせと片づけをしながら、

「たしか、レンさまと同期で——娼館で働いてらっしゃる方ですよね？」

「うん。『クラス：娼婦』の男三人」

レベルアップに伴い職業適性が向上した彼らは筋肉量が落ち、代わりに柔らかな身体を獲得。体毛は細く薄くなり——要するに女性的な身体つきに近づいている。放つておいても入ってくる「男を喜ばせるための知識」の影響、娼館での教育もあつて性格や言葉遣いも女性的になっていった。

最後に会ったのは結構前なので今はもっと変化しているだろう。

そうなったのは他でもないレンのせいなのだが、元はといえば自業自得だし、終わった話なのでそこは置いておく。

問題は彼らというか彼女らが神器の「年齢を五歳まで戻す効果」を希望したということだ。

「おっさん。それ、許可したの？」

「無論だ。雇い主の許可が出ているのなら止める理由もない」
「うわ。……じゃあもうあいつら五歳児なんだ」

「帰りは同僚が引き取っていった。神器への扱いも丁寧で、態度も大人しいものだったよ」

なんとリアクションしたもののやら。

レンは目を細めて宙を見つめた。アキとレナはともかくリアンまで大人しいというのがもはや理解を超えている。しかもすでに年齢退行済みとは。

いや、別にレンに許可を取る必要もないのだが。

「どうしてまた、その方々は退行を選んだのでしょうか？」

「歳を取って容姿が衰えるのが我慢できなかつたらしい」

女子か。

「レンさまと同年齢であれば十九歳か二十歳ですよね？ 衰えを感じるにはまだ早いのでは？」

「彼らの場合は男性的な二次性徴が既に敵だからな。正確には容姿の衰えというより感性の変化によるところが大きいかもしれない」

要するにヒゲとか筋肉とかが我慢できなくなつたわけだ。

自分の身に置き換えてみればわかる。わかるが、

「随分変わったなあ、ほんと」

「環境は人を変えろという見本だな。……まあ、私としては良いサンブルができた」

「おっさん。それが本音でしょ、絶対」

「利害が一致しているのだから構わんだろう。彼らの子供姿はなかなか可愛かったぞ」

「あ、それは見たかったかも」

ついでにひとしきりからかってやりたかった。

子供というのは不思議なもので、ついつい甘やかしてやりたくなる。少し前までそういう対象だったショウやケンはすすく成長してすっかり「男子」になってしまったので代わりに撫でたりできる相手がいるとちようどいい。

「なるほど。成長をやり直せる、というのは何も戦闘能力や技術的な

話ばかりではないのですね」

「そうだな。彼らの場合は肉体の成長そのものに意味がある」

肉体の成長にはホルモンが大きく影響している。若いうちから女性ホルモンの多い状態に置かれれば男の身体もかなりのレベルで女性的なものへと変化する。

地球だと外部からの投与が必要だが、リアンたちの場合はクラスが似たような効果を発揮してくれる。そのうえ決心がついてから子供に戻って成長をやり直せるのだから「そういう人たち」にとってはこれ以上ない方法かもしれない。

普通に性転換できたうえに彼女たちの元の姿を知っているレンとしては「そこまでするんだ」という感想になってしまうが。

「あまりそういう顔をしないでやれ。彼らも君にだけは言われたくないと言うか、できるものならサキユバスになりたいはずだ」

「自分からサキユバスになりたがるなんて変なの」

「あの、それこそレンさまが仰ることではないのでは……?」

「うーん。わたしはなつてから『戻りたくない』って思っただけで、なる前は絶対嫌だったしなあ」

しかしまあ、そういうことならリアンたちに突つかかられることはもうなさそうだ。

「今度会ったら女の子として相手してあげようかな」

「それがいいと思います。きつと喜んでくださいますよ」

「幼少期は男子か女子か見分けのつかない子も多いからな」

年齢まで戻した以上、リアンたちはこれから娼婦のクラスを維持するのだろうか。

何年かは下働きをして、それからは——うん、あまり考えないことにしよう。

「今更ではあるが、クラスが肉体や精神へ与える影響というのも興味深い研究テーマだ。彼らの娼婦は稀有な例だろうが、他のクラスも少なからず影響を与えているはず。幼少期からクラスに就いていた場合、どの程度その影響が大きくなるのか」

例えばケントもあれだけのタフな肉体・精神を得られたのには『ク

ラス：戦士』の影響があるはず。高校生の時点でアレなのだから五歳から戦士だったらもつとタフになるかもしれない。だとすると、単にポーナスを得て鍛え直せるという以上の効果が期待できる。

それでも、本当に使ってしまうのはなかなか思い切っているとは思うが。

種族の固定化に比べたらリスクは低いとはいえ、年齢の変化だって「帰った時に家族から認知してもらえなくなる」という可能性はあるというのに。

「彼らの場合はそのうち種族固定化も行うのではないか」

「むしろ戻りたくないってこと？」

「君なら気持ちが変わるだろう」

確かにわかる。わかるが、やっぱり「思い切ったな」という感想だ。いや、傍から見るとレンの決断もこれくらい思い切っていたというところか。

「……うん。わたしくらいは理解してあげないとだめだね」

「そうしてやれ。あの一件は君達にとって互いに重要な出来事だったはずだ」

「うん。じゃあ今度飴でも持って会いに行ってみようかな」

「それは『馬鹿にされている』と取られかねないのでは」

レンとしてはあんまり真面目な顔で会いに行くのは気恥ずかしいのでそれくらいの照れ隠しは許して欲しいのだが、ままならないものである。

【番外編・後日談】同窓会に来たあの子

卒業から十一年目。

二度目になる中三のクラスの同窓会は、とある洋食店で開かれることになった。ちよつとお洒落な街の洋食屋さん、といった雰囲気のお店ながら「美味しい」と評判の店。最近、店主夫妻の一人娘が修行から帰ってきてさらに美味しくなったという話で、貸し切るのほのかなか大変だったらしい。

店の評判は同窓会への参加を決めた理由の一つだったが、当日、彼女の思考の大部分を占めていたのはまったく別の事柄だった。

仲のいいメンバーと待ち合わせをして、雑談がてら店へ向かいながらも頭からは「そのこと」が離れない。

どうやら友人たちも、そして他の同級生たちもそれは同じだったよ
うで、

「なあ、来るんだよな？」

と、幹事に確認する者が何人もいた。
特に男性陣。

無理もない。「あんな子」が参加するとなったら気が気じゃないだろう。同性である彼女でさえそわそわして仕方ないのだ。

手持ちの中で一番高級品のパーティドレスが今はなんとも心許ない。
い。

幹事も心なしか落ち着かない様子で、

「ああ。駄目もとで連絡してみたけど『前向きにスケジュールを調整する』って。急な用事が入ったら行けなくなるかもしれないけど」

「それ、結構な確率で来れないんじゃないかね？」

「めちやくちや忙しそうでもないなあ……」

件の人物は今や日本中誰でも知っている有名人だ。

テレビには連日引っ張りだこ。雑誌やネットでもびっくりするくらい取り上げられており、その顔を見ない日はない。

急な用事が入っても全くおかしくないため、会の雰囲気は始まる前だというのにニランクくらいダウンした。

結局、そのまま待ち人は来ないまま開始時間を迎え、

「なあ、もうちよつと待つてみねえ？」

「いや、店の人の都合もあるからそうもいかないだろ」

流動的に話ができるように大きめのテーブルがいくつか用意され、料理はつまみやすいものを中心に用意された。この形式だとハンバーグなんかの一品料理は食べられないか……と少し残念に思ったものの、一口メンチカツにてまり寿司風のオムライスや手作りのビーフシチューまんなど街の洋食店らしい自由かつ心憎いラインナップがメニューには書かれている。

彼女は「当初の目的通り、料理と会話を楽しもう」と思い直し、白のスパークリングワインを手にして、

来客を告げるドアの音が、幹事の声を待っていた全員の耳にしつかりと届いた。

集中する視線。

その少女は皆の注目に気圧された様子もなく、きよろきよろと店内を見渡した後でにつこりと笑みを浮かべた。

「遅れてごめん。……でも、もしかしてギリギリセーフだった？」

「レンちゃん！」

「本当に来たんだ！」

店内に歓声が起こった。

紫紺の髪と瞳、白く滑らかな肌を持った美少女——美少女にしか見えない美女。初めてその姿を目にした時に生えていた翼と尻尾は邪魔になるからか消されていたものの、人目を惹くには十分すぎる容姿が彼女にはあった。

高級品だろう漆黒のパーティドレスにも同じく黒いレースのシヨールにも、艶めいた手袋にもその美しさは負けていない、どころか衣服のほうが負けてしまっているような印象さえある。負けていないのは指に嵌められた結婚指輪くらいか。

彼女の名前は藤咲蓮。

十年前、高校一年生の時、謎の神隠し事件によってクラスメイトと共に消失した少年だ。彼は異世界で過ごす間に人間ではなくサキユ

バスという異種族になり、男から女へと変わっていた。

急いでスパークリングワインのグラスを手渡された彼女は期待の視線にすぐさま応え「乾杯！」を口にして、皆とグラスをこっんと合わせた。

「でもさ、藤咲君……って言うの、なんだか変な感じだよ。レンちゃん、って呼んでもいい？」

「もちろん。向こうだとみんな名前呼びだったから、わたしもその方が落ち着くよ」

会が始まるとすぐ、レンは女性陣に囲まれた。

高い声上がる様をつかず離れずで見守りながら男性陣をちらりと窺うと、彼らは「いいなあ」と「ずるい」を織り交ぜたような表情でレンのほうを見ていた。

心なしか既婚者まで悔しそうである。

奥さんが知ったらどう思うか、という気もするが、レンが相手では仕方ない気もする。なにしろ、

「肌きれー」

「髪もさらさらだしつやつや。反則でしょこれ」

「しかもめっちゃくちやいい匂いするし」

ハリウッドスター級、下手をしたらそれ以上の美貌である。

日本人とは思えない肌の白さ。メリハリのついた体型。神秘的な髪と瞳の色合い。おしつけがましくないのにはつきりと感じられる不思議な香り。

しかも二十代中盤のはずなのに十代としか思えないような若々しさ。本当ならいろいろ気になってくる年頃だというのに、あまりにも羨ましすぎる。

「これはモデル扱いされるわ」

「むしろ写真集とか出すべきでしょ」

「あー、うん。実際そういう話は来たよ、いっぱい」

「やっぱり！」

二週間と少し前。

突然帰還してきた神隠し被害者たちを率いていたのがレンだった。

リーダーというか代表者的な立場だったこともあってレンはマスクミ対応に追われ、その知名度を一気に増した。異世界だの魔法だのだけれどもびっくりなのになこれだけ可愛いのだからそりゃ男子も女子も注目するに決まっている。

今ではもうすっかり芸能人みたいな扱いがされている。というか、このままなら普通に芸能人として定着するだろう。

何しろ可愛いし人当たりがいいし日本語ぺらぺらだし。

これだけインパクトがあると元同級生でさえ「藤咲君」ではなく「レンちゃん」としてしか認識できない。有名芸能人が自分たちのことを知っていて親しげに話しかけてくるようなものだ。それはもう大事件である。

しかし、

「レンちゃん、異世界？ に帰っちゃうんだよね？」

「うん。まだやり残してきたことがあるからね」

レンは帰還から一か月後に再び異世界へと戻ることを表明している。

一緒にやってきた千名ほどのうち約半分の五百名が彼女と共に異世界へと帰還することも決まっている。帰っていく者の多くは異世界にいる間に生まれたという子たちだ。

最初に神隠しが起こってからは四十年。最初の被害者と同世代は五十代中盤なわけで、下手すると子供どころか孫がいてもおかしくない。そして、子供たちにとっては異世界のほうが生きやすかったりする。

「……ね、レンちゃんも子供いるって本当？」

「本当だよ。自分で産んだ子が五人に、産んでもらった子が三人……じゃなくて四人」

「いや、テレビで聞いた時も思っただけだし、多くない!？」

「サキユバスだと十月十日もかからないんだよ。最初の子も八か月くらいだったし、慣れたらもっと早く出産だったし。ウサギみたいに二重妊娠もできたし。……あ、もちろん未熟児とかじゃないよ。みんな無事」

なんだそれ、意味がわからない。

出産までにかかる期間は百歩譲っていいとしても、産んでもらった子ってなんだ。レンのお相手が女の子でしかも複数いるのも聞いてはいたものの、自分でも産むし相手にも産んでもらうとかもはや理解の外である。

男性陣はどう思っているのかと目と耳を向けてみると、

「……あれで五人産んでるとかヤバすぎだろ」

「毎晩女同士で……？」

あ、こいつらダメだ。

レンで淫らな妄想をしながら「俺にもチャンスあるんじゃないか？」と
か思っているのが丸わかりである。

まあ、当のレンはといえば、

「レンちゃん、ストーカーとか痴漢とか大丈夫？」

「大丈夫だよ。目も耳も人より良いから結構見つけられるし、直接来たら関節極めてあげたりしてる」

「いや強すぎ」

スポーツやってる子が「腕相撲をしよう」と誘うも、あっさり敗北。
ムキムキには全く見えない細くて綺麗な腕なのに。

「じゃあ俺にも挑戦させろよ！」

「俺も俺も！」

ここぞとばかりに男性陣が挑戦してきた。お前ら手を繋ぎたいだけじゃないのか。ジト目で眺めているうちに次々敗北していったくらいいいけど。

これを機に男子がレンに近づいてくるようになり、レンにばかり集中していた空間が少しずつばらけた。

男子がレンとどんな会話を繰り返したかという点、

「女の子同士で結婚とか不毛じゃない？」

「ぜんぜん。わたし女同士でも子供作れるし。子供作れなくても養子もらえばいいじゃない。自分で産んだ子を『いらぬ』とか言って捨てちゃうお母さんよりずっといいよ」

「男には興味ないの？」

「ないわけじゃないけど、今のところ間に合ってるかな」

だいたいこんな感じではっきりである。下心を隠せていない男性陣にも問題があるが、ぼつさりぶつた切りながら自然な笑顔を崩さないレンは驚異的すぎる。おかげで冷たい印象は全くなく、本心を伝えきっているのに嫌な感じがない。ヘイトコントロール完璧である。

これだけモテると女子から恨まれそうなものだが、女子は女子で「すごいよねー」という反応。スペックが高すぎて「ケンカを売ってはいけない」と本能的にわかるうえ、男子を奪っていく気が本人に全くないのが原因だろう。

「久しぶりにみんなと話せるなー、と思ってきたけど、なんかわたしの話ばかりしちやつたなあ」

「お疲れ様。……って、どうして私のところに？」

話を一通り終えたレンが逃げるように寄ってきた。

彼女とは別に仲が良かったわけではない。同じクラスだった頃に話したのはせいぜい二、三度くらいだったのだが。

疑問を呈すると、レンは小さく首を傾げて、

「嫌だった？　女の子に興味なさそうだから普通に話せるかなって思ってたんだけど」

「いや、普通でしょそれ」

「そうかな？　思ったより同性愛が広まっててわたしはびっくりしたよ」

のほほん、と言うレンはなんだか嬉しそうに見えた。素っ気ない返答が逆に良かったのだろうか。

彼女の言う通り、同性愛はこの十年でかなり普及した。まだまだ異性愛に比べたらマイナーもいいところだが、批判の声はかなり小さくなり公言する人も増えた。

案外、レンの登場によって今後はより一層そういう流れが大きくなるかもしれない。

今だってレンに熱い視線を送っているのは男子ばかりではない。多くは単なる羨望だろうが、中には、

「……私だって、こんな近くに来られたらドキドキするんだけどな」

小さな眩きに、レンはきよとんと目を瞬いて、

「ね。二次会も、行く？」

全部わかってやってるんじゃないだろうなこの子。

彼女は胸の高鳴りと共になんとか物凄く納得いかないものを感じて、手にしていたグラスの中身をぐいっと飲み干した。

「レンのご両親とか大変だったでしょ、絶対」

「あー、うん。最初は泣かれたし小言も言われたよ。でも話し合って納得してもらった、っていうか諦められてからはむしろ仲良くなれたかな。娘も全員じゃないけど連れてこられたしね」

同窓会はまだまだ続きそうである。

レンの帰還から始まった夢のような現実も、また。

【番外編・後日談】 子供たちは元気いっぱい

「いってらっしゃーい！」

今日もまた、すっかり頼もしくなった少女たちが光に包まれてダンジョンへと旅立っていく。

レンたちの姿が消え、光の残滓もなくなったのを確認したリアベルは「さあー！」と声を上げた。

「行きましようか。みんな、今日もよろしくお願いね」

「はーい！」

「かしこまりました。どうかお任せください」

元気よく返事をする子供たちと、微笑を浮かべる少女たち。後者を代表して答えたメイド服姿の銀髪少女——ゴーレム一家の次女であるマイだ。

アイリスの妹であるアイナとアイシア、メイの妹であるマイに、異世界から来た聖女エル。

四人の少女たちは週二回、レンたちの家にお手伝いに来ている。しばらくダンジョン攻略を休止していたレンたちが再び戦い始めたのを受け、不在の間、子供たちの世話を代行するためだ。

こうしてレンたちを見送り、ポータルのある小屋の鍵を閉めるのもはや恒例。

レンたちの再参戦から一年余りで攻略はぐんぐん進み、既に最前線は七十階に到達しつつある。

以前からたびたび遊んであげていたのもあって、子供たちも慣れたもの。リアベルやマイたちと一緒に素直に移動してくれる。

微笑ましい光景に心を和ませながら、リアベルはその人数を見て、

「それにしても、さすがに産みすぎじゃないかしら……？」

九人。

これで、お休みしていた期間はたった三年半程度なのだから恐ろしい。

九人の女の子たちに交じってリアベルとアイシアの娘も一緒に

いるが、こちらは一人だけである。二人目を作っていないのは忙しいことだけでなくこの子たちの相手で十分満足してしまっているから、というのには正直かなりあると思う。

アイシヤと一緒に経営している寺子屋まではそこまで長い距離ではないので子供たちの運動にはちょうどいい。

「アイシヤせんせー!」

「いらっしやい、みんな。マイちゃんたちの言うことを聞いて、仲良く遊んでいてね?」

「はい!」

寺子屋はだいたい小学校中学年〜中学生程度の年齢が対象。この子たちにはまだちよつと早いので、運動場や空いている教室を使って遊んでもらい、マイたちに保護者役をお願いしている。

幸い寺子屋のほうも盛況で、今では十五人ほどの子供が学んでいる。時にはこの子たちも一緒になって遊ばせたりもして伸び伸び教える方針だ。

マリアベルは体育の授業を行ったり、アイシヤの授業を手伝ったり、マイたちと一緒に子供たちの面倒を見たり、その時々でいろいろできることをやっている。

「アイシヤ、準備はどう?」

「少しばたばたしてる。掃除を手伝ってもらってもいい?」

「もちろん」

マリアベルが掃除をしている間にアイシヤが教材の用意を整え、寺子屋の生徒たちを迎える。

今日はサポートの必要ない授業なので生徒たちに挨拶をしたら教室を出て、運動場にいる子供たちの元へ向かった。

「あ、お母さん!」

母親の姿を発見した娘のクリスがとととと走ってくる。しゃがんで迎えてあげると嬉しそうに「えへへ」と笑った。とても愛らしい。ぎゅっと抱きしめたくなるが、それを始めるとキリがなくなるので頭を撫でるだけに留めた。

クリスはどちらかというともマリアベル似だ。

妊娠しても座学は教えられるけど体育は難しい、という理由で出産はアイシャが行った。女の子は父親に似ることが多いというのは本当らしい。まあ、マリアベルたちの場合、通常の医学知識やジnkスがどこまであてはまるかわからないのだが。

「お母さんも一緒に遊ぼう？」

「ええ」

「やったあー」

クリスはとても甘えん坊な子だ。

女親が二人だと少し甘やかしすぎになるのだろうか。

……それにしても、レンたちの娘はなかなかに逞しい。

「マリアさんだ！」

「追いかけてっしょー！」

「はいはい。でも、運動場の中だけよ？ 外に出るのは禁止」

「はいー！」

母親以外の人間が家にいるのが当たり前前の環境で育ったからだろうか。両親にべつたり、というわけではなく、色んな人に屈託なく接することができる。マイやアイナ、アイシャは彼女たちの母親によく似ているのもあって相手役にはびつたりだ。

九人の内訳は、レンの産んだフリーの娘が一人。アイリス、メイ、シオン、ミーティアとの間の子が二人ずつ。

長女はメイの娘でゴーレムのメル。

精神的成長の早いゴーレムの特性もあって姉妹の良いお姉さん役だ。母親であるメイに比べると真面目でしっかり者。ボディ自体も人間で言う十歳程度のサイズであり、既にちよつとした家事なら手伝うことができる。最近は調子に乗ったメイへお説教をすることもあるとか。

次女はフリーの娘で風精シルフィードのフウカ。

メルとは対照的に元気いっぱいいなやんちゃん子で、気分によって実体化・非実体化を無意識に切り替えながら文字通り飛び回って遊ぶ。周りの大人の言うことはちゃんと聞いてくれるのが救いである。そうでなかったらハーフェルフ姉妹がどこまでも飛んで追いかける羽

目になる。

ただ、運動場の中、手が届く範囲に限ってもマリアベルが捕まえるには本気の八十パーセントくらい出さないとイケなかったりする。

もしかして少し身体が訛っているのだろうか。この際、子供たちに鍛え直してもらうのもいいかもしれない。

三女と四女はミーティアの娘でミレイとレミイ。

誕生日には一か月ほどの差があり、産みの母親も違うものの二卵性の双子くらいにはよく似ている。

性格はレミイのほうが大人しく、ミレイは自己主張が強め。男の子と一緒に遊ぶと半ば自覚的、半ば無自覚に惚れさせていろいろ助けてもらったり優しくしてもらうのがレミイで、男子相手に命令したり言い合いを始めるのがミレイ。

二人とも母親、特にレンに懐いており、ミレイに関しては最近「大きくなったらお母様と結婚する！」と言い出したらしい。

五女はレンの産んだメイの娘、レム。

ハーフゴーレムといふかなんというか。生体に近い質感と金属に近い強度を持つボディを備え、ところどころに継ぎ目が入ってはいるものの見た目はほぼ人間同様。

肉体を自在に改造する機能が備わっていない代わりに飲食が可能で、エネルギーさえ足りていればある程度の傷は自然に治る。

ゴーレム一族とは思えないほど表情筋も豊かで、姉妹の中では最も泣き虫でもある。

六女、七女はアイリスの娘でレイリとレリス。

二人ともアイリス譲りの耳を持ち、精霊と意思疎通を行うことができる。

風の精霊に愛着を持ち、フウカを追いかけて走り回るのが好きなレイリに対し、レリスは生命の精霊に興味があるらしく、虫や小動物の様子をじっと観察したり触れて感触を確かめたりするのを好んでいる。

もしかすると、レンのサキュバスの性質は父親役になった時のほうが強く出るのかもしれない。

実際、賢者も時折子供たちの様子を見に来てはそんな分析を（特に尋ねなくても）マリアベルやアイシャに語ってくれる。

『逆に言えば、種の保存をしたい種族——例えばエルフなどはレンに子供を産ませれば良いわけだな』

『賢者様。その話をアイナさんにするのは絶対に止めてくださいね』
言葉に少し殺気を乗せたお陰か、これにはさすがの賢者も「う、うむ」と快く答えてくれた。

最後に八女、九女がシオンの娘でランとアヤメ。

子供の姿がデフォルトで狐にも変身できるランと、狐の姿で生まれてきて人間形態にもなれるアヤメ。人間状態の髪・瞳の色は若干紫の入った黒（ラン）と黒がかった紫（アヤメ）。

小さな火であれば息をするように操れるランと、姉妹最年少にして最大の魔力量を誇るアヤメ。シオンの性格が遺伝したのかそれとも教育の成果か、二人とも性格は礼儀正しいいい子。子供らしくときどきはしやぎすぎしてしまうのが逆に可愛らしさを増してくれている。

外で遊ぶ時はだいたいフウカが率先して動き回りレイリが追従、妖狐姉妹がさらにそれを追いかけて、ミレイが文句を言いながらもついていく。マイペースなレミイとレリスは土にお絵描きをしたり蝶を追いかけてたり。レムは時々によってどちらのグループに参加するかが異なり、最年長のメルはエルたちと一緒に姉妹が怪我をしたり喧嘩をしないか見守る——というのがパターンだ。

まだ小さいとはいえ才能あふれるレンたちの娘。

遊びに付き合っているとだんだん息が切れてくる。そういう時はハーフエルフ姉妹にバトンタッチしてひと休みしたりする。

「お疲れ様です、マリアベルさん」

「エルちゃん、ありがとう」

エルが差し出してくれた冷たい水を笑顔で受け取り、身体に染みわたらせるようにして飲み干す。

この世界に来て四年以上が経ち、エルはすっかり成長した。身長も伸びたし身体つきも年頃らしくなった。神聖魔法の実力はそれ以上にぐんぐん伸びて、今では活動休止前のレンたちに匹敵するのではな

いかというレベルの実力者だ。

聖女の資質を見出されただけのことはある。

本来ならもっと長い時間をかけて積むはずの経験をダンジョンという特殊な環境が短期間で積み重ねさせた。いずれ来る魔王との戦いでは彼女の力も欠かせない戦力になることだろう。

もう、自分の助けはいらないだろうか。

レンたちがどんどん遠くへ行ってしまるのが頼もしくもあり、歯がゆくもある。もっと力があれば彼女たちの助けになれたかもしれないのに。

「……人には向き、不向きがあります。こうして平和な場所を守るのだって立派なお役目ですよ」

「エルちゃん……」

これも聖女の力なのだろうか。

エルはときどきすごく鋭いことを口にする。マリアベルの悩みを和らげるような優しい微笑みに、つられて笑みを浮かべてしまう。

「ありがとう」

彼女の言う通りだ。

こうしてレンたちが不在の間、子供たちの面倒を見るのも立派な仕事。レンたちがこうして預けてくれるのもマリアベルたちを信頼してのことなのだ。

それでも。

もし、レンたちの戦いに今後、助けが必要になるようなことがあれば。

もう一度、戦いの場に立ってみたい。さすがにもう年齢的に身体が言うことを効かなくなってきたているけれど、それを解消する方法が幸いにもある。

(アイシヤと一緒に過ごせなかった時間を取り戻すためにも、考えてみてもいいかもね)

子供の姿になってしまうと「先生」としては威厳がなさすぎるのが難点だが、

「この分ならみんなにも『先生』を任せられるかも」

子供たちは育っていく。大人が思ってもいないような凄いスピードで。

だから、マリアベルたちももつともつと頑張つて成長していかなくては。

ライバルという意味で最たる例である若き聖女は、マリアベルの発言に妙に慌てたような表情をして、

「わ、私には先生なんて大役務まりません！」

さつきとはうって変わった反応に、マリアベルはつい、くすりと笑みをこぼしたのだった。

【番外編・後日談】魔王殺しの英雄たち

階段を下りると同時に邪悪かつ強大な魔力が膨れ上がるのを感じた。

「みなさん、下がってください!」

押しつけるようにして前に出た巫女服姿の少女——エルが叫ぶと同時に聖なる防御結界を展開。

衝突した二つの力は拮抗、弾けるようにして消滅。がくん、と膝を折ったエルをすかさずハーフエルフの妹姉妹が後ろから支えた。

「いきなり攻撃なんて、ひどいんじゃないかな!」

光の矢、火の粉、銀製の矢。

牽制のつもりで放った反撃は前方に立つた一人によつて難なく打ち消された。腕の一振り。殺すつもりの一撃ではなかったとはいえ、たったそれだけで。

返ってきたのは厳かな声。

「来たか、異界の戦士よ。……もう少しで邪神召喚の儀が完了するといふのに、それほど、私の所業は看過できぬか」

敵は、魔王はまさに異形の姿をしていた。

体長は二メートルを優に超えている。

頭部は骸骨。人のものとは異なる複雑な骨格の奥に不気味な輝きが宿り、背中には二対の翼。尻尾は蠍、蛇、触手の三本。

左腕は鱗と鉤爪を備えた竜のそれ。右腕は無数の触手を束ねたもの。左足は獅子、右足は蹄を備えた馬のような形状。

自身の身体から生えた鎧で胴体を覆い、全身から強烈な魔力と威圧感を発する様はまさに最強の魔族。

「わたしたちが来るのを待ち構えていた、つてこと?」

「左様。貴様らの干渉を受けた時点で運命がズレたのは認識している。……否、囚われたのか? それとも今、こうして思考している我自体が貴様らの作り出した仮初か?」

「なんであろうと構いません。……無数の命を奪い、建物を壊し、大地を焦土と化した邪悪。破壊の象徴そのもの。私は聖女としてあなた

を絶対に許しません！」

「聖女か。……まさか、この局面でこれほどの聖なる力と相対するのはな」

魔王は骸骨の口部分を大きく開くと「良かろう」と高らかに告げた。「どの道、貴様らを倒さぬ限り我は死ぬのだろう！　ならば全力で抗うだけのこと！　邪神召喚の儀はそれからでも遅くはない！」

巨人が数百は押しかけられそうな広大な広間に複数ある扉から無数の魔物が飛び出してくる。彼らの目には殺気。主である魔王の膝元において士気は最大。ここまで温存されていた戦力である以上、個々の能力もずば抜けているだろう。

レンは頷き、笑みを浮かべながら右手を持ち上げた。

「こつちだつて本気で来てるんだ。簡単にはやられないよ……！」

戦いは熾烈を極めた。

シオンの生成した殺生石をメイが射出すれば、魔王はそれを竜の手で受け止め渾身の力で握りつぶす。

ハーフエルフ、ダークエルフ、風の精霊の生み出した暴風が魔物の群れを叩き、千切り、吹き飛ばす。その勢いにも負けず、仲間の屍を乗り越えるどころか仲間を盾にするようにして突っ込んでくる魔物たち。

ゴーレム母娘の撒き散らす爆弾が次々と爆風を撒き散らし、広間の中央付近に発生した階段を守るように背にした友人パーティ、シヨウたち若手パーティが雑魚からレンたちを守るように展開。

エルの生み出す巨大な聖光が魔王の邪闇を相殺。

高速飛行しながら次々と連射するレンのmanaボルトが触手の腕や三本の尾に弾かれ、あるいは一瞬吹き飛ばして再生を促す。

装飾のように飾られていた数々の魔剣がひとりで浮いて次々に殺到。半数以上をかわしながら防ぎ切れない分は魔力を籠めた尻尾と両手で叩き、砕き折る。

竜の腕が手のひらの奥に隠されていた罅を開き、途方もない熱量を放てば、文字通り飛んできたフリーがレンの身体に溶けて烈風を生成、炎を切り裂くようにして吹き散らした。

「っ、はははっ！ その程度で我は殺せぬぞ、異界の戦士！」

氷柱が、石畳の変化した槍が、思いもよらない方向からレンを襲う。九×九〇八十一にまで達した妖狐の炎がそれらを焼き尽くし、さらに魔王を襲う。展開された防御結界が炎を防ぎ、一対の翼が極上の魔剣へと変化。

床を蹴って近接戦を狙ってきた魔王とレンは目まぐるしい舞いを演じた。

光と闇が飛び交い、巻き添えを喰らった魔物が冗談のように消し飛んでいく。二人分の魔法と両手、尻尾をもつてしても決定打を掴めない地獄。切り札の深化吸精でさえも狙った瞬間に該当箇所を切り離されて大きな効果を発揮できない。それどころか切り離された箇所が爆発してダメージを与えてくる始末。

やつぱり、賢者とケントを連れてくるんだったか。

彼らは長期戦を見越して年齢退行を選んだばかり。魔王がこんなに早く——七十階で出てくるとは思いもしなかったものの、逆に言うところの先にまだ大きな敵がいる可能性が高い。ここまで来て「七十階で終わり」なんて優しい結末があるとは思えない。

なら、このくらいはレンたちで乗り越えられなければ先はない。

ゴーレム母娘が光の刃を生成して割って入ると形勢は逆転。しかし、魔王は数度の交錯で母娘の剣筋を見切ると逆に魔剣でその四肢を切り裂いて見せた。

バターのように入り裂かれるゴーレムの身体。

痛ましい光景に一瞬息が詰まるも、すぐさまヒールを使用。エルの治癒魔法と重なって一瞬にして損傷が消えていく。

痛覚を持たないゴーレムたちは損傷もものともせず残った武装で魔王を狙い、追撃を許さない。徐々に魔王の身体へ傷が増えていき、「ならば、これでどうだ！」

爆風のごときプレッシャーで吹き飛ばされるレンたち。

体勢を立て直して見やれば、そこには四体の巨大な魔物がいた。四天王。その後方には四肢をデーモンのような姿に変えた魔王の姿。

「驚いたか。四天王はもともと我が被造物。戦いの経験を得て成長し

た奴らよりは一段か二段劣るが、こうして同じものを生み出すことも

「なんだ、その程度か」

「何……？」

「四天王なら倒したよ。一度と言わず二度も三度も」

「このメンバーをここに集めるために頑張りましたからね」

聖炎——スキルによって威力強化・聖属性付与を施された狐火が乱舞し四天王の身を焼き尽くす。三百本の光の矢がさらにその身に穴を空け、飛来した銀の矢が風の加護を受けて心臓を正確に射貫いた。

「ドレインプレイド」

吸精の力を半物質化させたサキユバスの剣が魔王に迫る。魔剣で弾かれれば籠められた魔力の一部を奪ってレンの魔力へと変えていく。

「メテオストライク」

レンによってアレンジされた上位魔法は威力を減じた代わりに虚空から生み出され、普通の火ファイアーボール球のごとく着弾する。憑依したフリーの放つ風の刃が逃げ道を奪い、接近戦は吸精の剣とレンの尻尾、そして深化吸精が封印する。

「調子に乗るなよ……!!」

二度目の衝撃。

骨でできた巨竜が咆哮。肉を持たないとは思えない腕力で暴れまわりながら、竜は広間で生まれた『死』——部下の命を吸収してパワーアップしていく。

レンたちの攻撃によって骨が砕けたかと思えば飛び散った骨が武器と化して飛び、死角からの一撃を狙ってくる。やっとのことで半身を削り取ったかと思えば内部から特大の邪闇。エルが魔力を振り絞りながらそれを打ち消せば、魔王は残った骨を剣と鎧に変え、人間大の姿となって飛び出した。

レンと剣を交えるかと思えば前触れもなく瞬間転移。

あらかたの雑魚を倒し終え、遠巻きに戦いを見守っていた友人たちやシヨウたちが狂刃に倒れていく。すぐさま治癒が行われるも、次々

転移しては刃を振るう魔王は被害をどんどん増やしていく。ダメージが生じれば生じるだけ魔王の力はアップして手が付けられなくなる。

「いったい何度変身すれば気が済むのか。」

魔王の名に恥じない力。下手をすれば彼一人でも世界を滅ぼせるかもしれない。

しかし、それでも、

「調子に乗るなはこっちの台詞！」

デイスベル。

転移魔法を打ち消された魔王の身体に吸精の剣が深く突き刺さった。ようやくの深化吸精。剣の引き抜かれてできた穴に殺生石が叩き込まれ、最上級のゴーレム製爆弾が三発まとめて魔王の身体を直撃する。

「まだまだ……まだ、終わらぬ！」

まともな身体を維持できなくなった魔王はその身を触手に変え、広間を埋め尽くさんと身体を広げ始めた。

「それが、どうしたって……！」

炎が触手を焼き、風が触手を切り刻む。MPポーションより高級なハイMPポーションを水のように飲み干しながらエルが片っ端から邪気を浄化し、再生を防ぐと共に魔王の力を削り取った。

やがて、姿を現した触手の中心。

触手の塊となったそれをレンの光の矢が削り取り、露出したのは赤黒く明滅する魔の宝石。

「こんなの吸収したらお腹痛くなりそう……！」

言いながら吸精の刃で思いつき二つに断ち割れば、砕けた宝石は十を超える小さな宝石となって四方に散った。

あるいは、力の残滓から復活するつもりなのか。

「そうはさせません……！」

仲間たちの力がその一つ一つを砕いて消滅させ、

『おのれ、おのれ……！　こんなところで、我が野望が潰えるというのか……！』

怨嗟の声が広間に大きく木霊した。

『邪神を召喚し、世界の全てを破壊する！ 大地も空も海も、そうしてこそ真の安寧が訪れるというのに！』

「そんなことをしたって、残るのは虚無だけだよ。夜の闇とは違う、本物の闇。全てを飲み込んでなにもなくなるだけ」

『素晴らしいではないか。そんな破壊を我が成し遂げたのなら、それは——』

声の消え去った後、静まり返った大広間に大量のドロップ品が降り注いだ。

持ち切れるか心配になる程の貨幣に宝石。数々のマジックアイテムに、世界の欠片も通常の十倍に相当する大盤振る舞い。転生石やりセットストーンすらも多数含んだそのラインナップに、最近盗賊としての役割がご無沙汰気味のフリーが歓声を上げ、

「……やりました。聖女様、陛下。みんな。私は、私たちは、魔王を討ち果たしました」

広間の最奥、魔王が死してもなお光を放ち続ける不気味な魔法陣へとエルがゆつくりと近づいていく。

「本物の闇が素晴らしい、ね。……やっぱり、世界を滅ぼしたのは邪神なんですよ」

「だね。最初は邪神自体が闇を広げたのかと思ってたけど」

ミーティアの呟きに頷いて答える。

レンたちはここまでの戦いの中で人類側の魔法都市を守り、そこに住む賢者（あのおっさんとは当然別人である）と話す機会があった。

彼の見解によれば、世界に根本的な滅びを齎すのは邪神の力ではなく世界の綻び。例えるなら腫瘍のようなそれがどんどん広がって世界を飲み込むのではないか、ということだった。

確かにそれならば納得がいく。

レンたちが召喚された神殿は闇に呑み込まれた世界に唯一残された場所。闇の浸食を防ぎながら世界の欠片を生み出し、綻びを修繕していくための場所なのだろう。

レンは、残りのポーションを使いながら必死に魔法陣を浄化する工

ルをじつと見つめた。

「もしかすると、わたしたちの故郷もいつかそういう闇に吞まれるのかな」

ここで魔王を倒したことに大局的な意味はない。

邪神召喚を止めたところで元の世界が救われるわけではない。んなら魔法陣を取り除く必要すらない。あれはエルの自己満足だ。

それでも、きつとすべてが無駄ではない。ここでやれることをすべてやることで彼女の心には一つの区切りがつくだろうし、次なる戦いへと赴く心の準備もできる。

元の世界では邪神が召喚されたはず。

ならば、次のボスはまず間違いないとそいつだ。下手したら次の階ではしれっと召喚されていて、そいつの配下と戦わされる羽目になる。

「さあね。世界を滅ぼしかねないような無茶をすれば、世界の死期が早まることもあるんじゃないかしら」

「……あー。心当たりはあるなあ」

「あるの？ あなたたちの世界もなかなか無茶をするのね」

辺り一帯を吹き飛ばしたうえ、生き残った者や大地にまで悪影響を残す悪魔の兵器。その爪痕はレンもよく知っているし、それを除いたとしても恐ろしいバイオ兵器やら無人兵器が秘密裡に開発されている、なんていう話もある。

環境問題なんてもう何十年も騒がれていたはずだし、決して他人事ではないかもしれない。

「やっぱり、帰る方法も並行して用意しないとね」

ダンジョンをクリアしたら、なんて悠長なことは言っていられない。

最終的にクリアするにしても、先に地球に帰れば精神的な安心感が違う。帰りたい者を帰すことができればじっくり攻略することもできるのだから、戦いはずっと楽になるだろう。

するとミーティアは深くため息をついて、

「あなたなら本当にやってしまいそうね」

「やるでしょ。だってレンだし」

憑依を解いたフリーが笑ってそれに答えた。

レンも二人に向けて微笑んでから、ストレージから残っていた自分のポーションを取り出して、

「エル。ポーションが足りなければまだあるよ」

とても頑張ってくれた頼もしい仲間へと声をかけたのだった。

【番外編・後日談】世界の終わりに

二週間前、地平線の彼方にあつた『闇』が今はもう半分以下の距離にまで迫っている。

人類に、否、世界に残された時間はもう殆ど無いだろう。

女は結界の外にある大地にそつと手を伸ばし——深いため息をついてその手を下ろした。

「こちらにおられたのですね、姫」

背後からの声に振り返ると、そこには長身かつ細身の男がいた。

本来なら陽光を受けて煌めくはずの金髪はくすんで見る影もなく、青く美しい瞳にも疲労による翳りが見える。長い研究生活によつて視力は落ち、眼鏡によつて補っているものの、レンズの替えなどもう世界のどこを探しても存在しない。

憐憫を覚えるのには十分な姿だ。

しかし、それは女自身も同じだろう。月の女神に例えられた銀髪も全盛期の輝きはもはや無く、儂げな美貌と謡われた身体も単なる痩せすぎの魅力に欠けたそれになつてしまっている。

それでも、想い合った相手にくらいは今できる最高の美しさを届けようと優しく微笑んで、

「王子こそ。研究はもう良いのですか？」

「これは耳が痛い。……打ち込みすぎて貴女に怒られた事が何度もありましたね」

「ええ。世界のためだとわかつていても、愛する人に自分だけを見て欲しい——女というのは本当に、ままならない生き物ですね」

「姫」

女と同じく十分な食事のできていない男の細い腕に抱き寄せられる。

情熱的なキス。

身体の火照りを感じながら唇を離すと、彼もまた切なげな表情でこちらを見つめていた。限界ギリギリの生活。男性の裸を見た経験は何度もある。彼の「あの部分」がどうなっているか想像することも難

しくはない。

衝動のままに触れて、求めて、与えてもらえればどんなに良いか。しかし、二人で交わした誓いを破ることはできない。それに今更求めあったところで、子を孕み、産み落とす時間は残されていない。

「……こんな時くらい、名前で呼んでくださいばいいのに」

「私達に名前など必要ありません。この世にはもう『姫』も『王子』も私達しかいない。そして、いずれ来る救世主達にはその役職名ですら不要です」

「私達には会うことも叶わない救世の英雄たち。彼らには、酷な事を強いてしまいますね」

「仕方ありません。我々には時間も選択肢も残されてはいなかった」

完全に身を離れた王子が視線を下へ。

石造りの床。

壁はなく、外周に設置された何十本もの柱が石の天井を支えている。

四方には階段。敵の侵入経路を限定するための策であり、同時にこの場を神殿として機能させるための措置でもある。

神殿。

そう。ここは神殿である。祈り、願い、救い手を求めるしかなくなつた者たちが作り上げた最後の場所。

「滅びゆくこの世界がせめて、ここに存在していた事だけは伝えなくては」

「ええ。……そして願わくば、ここに新しい世界が築かれますように」

世界最高の学術都市を有する『知』の大国の第三王子。

王都に大神殿を擁する神聖王国の第二王女にして、未完の大聖女。

魔の軍勢による攻撃が王都にまで及んだのを受け、最小限の配下と共に大陸中央に位置する小国へと避難させられた二人。

未だ成人年齢にも達していなかったものの、既にその才能を認めら

れ将来を囑望されていた二人は受け入れ先の小国で人類が生き延びるためにあらゆる策を講じた。

新しい戦術。新しい兵器。新しい魔法。少ない労力で育つ作物。幾つもの策によって人類の生存日数は確かに伸びた。しかし、神聖王都をたつた一匹で滅ぼしたドラゴンでさえ魔の軍勢にとつては一つの駒に過ぎない。力の差は歴然。対抗しうる力を持ったごく一部の英雄たちもまた、力を結集する前に敵の先制攻撃によって各個撃破されてしまった。

新たな魔王が真の滅びを狙っている事は明白。

学術都市の大賢者が唱えた「世界の終わり」。

姫自身が神託によって教えられた『迫りくる闇』。それらの情報から世界の滅亡は避けられないものと判断され、二人の策は人類が滅びないためのものから「たとえ滅びても世界だけは存続させる」ための策へと変わった。

築かれたのは神殿。

魔術の理論を用いて神聖魔法の効率を最大限に高め、魔王が奉じる邪神と対となる善の女神の力を借り受ける魔術要塞。

建設は成功した。

そのために貴重な魔術師、学者、建築家を酷使してしまつたが、その価値はあつただろう。

しかし、そこまでして建てた神殿も決して広いものではない。

結界によって外敵の侵入を防ぐことのできる要塞には発案者である王子と姫を中心に、その協力者が入ることとなつた。

—— 混迷の中、他国の王族を保護し続けてくれた小国の王族を差し置いて。

抗議の声は聞き入れられなかった。

王も、王妃も、親交を深めた王子王女ですら「二人が適任だ」と笑つて延命の手段を手放した。残り少ない兵を率い、少しでも時間を稼ぐために散つていった彼ら。その遺品はおろか遺髪すら回収することは叶わなかつた。

代わりに。

選りすぐられた魔術師と巫女を収容したこの神殿は迫りくるありとあらゆる脅威を退けてきた。そして迎えたのだ。

真の滅び。

無の象徴、否、無そのものである深い闇が彼方から迫る光景を。

魔王も、邪神も、この神殿には現れなかった。

おそらくは力を使い果たしたか、一足先に滅ぶことを選んだのだろう。

『闇』は邪神の力ではない。邪神の力によって誘因された滅びの運命。運命にはたとえ神でさえも抗えない。女神は人類側の味方だが、邪神の力を打ち消すことはできても『闇』を打ち払うことは難しい。しかし、

「世界の縮小を逆手に取る手段がある」

世界とはいわば大きな器だ。

神の力は強大だが、それでも世界をあまねく満たすことはできない。だが、世界が小さくなれば？ たった神殿一つ分の世界ならば女神の力を十分すぎるほどに満たすことができる。

女神の力を十分に引き出すことさえできれば理論上、迫りくる闇から永久に神殿を保持することさえ可能だった。

これで、滅んだ世界にたった一つだけ「世界があった証」が残る。「世界が滅びなかった可能性を手繰り寄せて、世界を作り直ししよう」

この世界の人間では打ち倒せなかった敵。防ぎ切れなかった脅威。回避できなかつた滅び。

対抗できる戦士たちへ試練を与えて鍛えながら「世界の欠片」を回収し、新たな世界を生み出す。『闇』とは世界の寿命そのものであり、新たな世界を滅ぼすことはできない。

綱渡りどころか夢物語と言われても仕方ないような構想。

世界で最高峰の知者でさえも鼻で笑いそうなほど斬新で驚異的で幼稚で希望的な発想ではあったが、王子と姫は最後まで諦めなかった。

「世界を作り直すのは私達ではない」

「滅びを防げず、受け入れるしかなかった私たちにその資格はありません」

異世界から戦士を招こう。

無限の可能性を知り、無限の可能性を持つ者を。一人ではなく大勢を。一度ではなく何度も。そうして世界を作り直してもらおう。

逃げてから十年以上。

長い戦いの終わりに待ち受けていたのは決死の作戦だった。

「試練の構築は完了しています。……後は『世界結界』さえ起動できれば」

「わかりました。……いよいよ、ですね」

頷いた姫は、彼方の『闇』をじっと見据えた。

この瞬間にもゆっくりと近づいてきている滅び。もはや猶予は殆どない。起動するのであれば早い方がいいだろう。

外から内へと踵を返し、一步踏み出そうとしたところで——腕を引かれた。

見上げれば、王子の真摯な瞳。

今まで一度も見たことのないほど悲痛な表情。

「私達は十分頑張った。ならば、ここで終わりでも良いのではないでしょうか」

「王子」

「世界のために貴女が犠牲になる事はない。……いや、私は貴女を失う事が耐えられない」

現在張られている結界は主に魔術的なものであり、外敵を滅ぼす事はできても『闇』には対抗できない。

滅びから神殿を守るには女神の力を可能な限り強く引き出さなければならぬ。それには聖女級の力を持つ者が己の魂を捧げて神威を召喚しなければならぬ。

儀式の中核となれる者は王女ただ一人。

神殿には共に逝くために残された十二人の処女巫女たちがいる。姫の魂は彼女たちと共に砕かれて女神の糧となり、世界を守る結界を紡ぐ。

死んだ者は輪廻転生の権利を得るが、魂まで砕かれた者は真の死を得る。

しかし、姫は微笑んで答えた。

「世界が滅びれば神にも死が訪れます。そうならば、あらゆる生命が転生の機会を失う。いずれにせよ私たちを待ち受けているのは滅びです」

「ですが!」

「王子。……私は、あなたを愛しています。他の誰よりも。だからこそ、私はあなたと築き上げた『希望』を信じたい」

「姫」

王子の唇から一筋の血が流れだした。強く噛みしめすぎて裂けてしまったのだ。

拳を握りしめて耐えるように立ち尽くした王子は、やがてそつと手を離して、

「申し訳ありません、取り乱しました。貴女の言う通りだ」

「王子」

「もう大丈夫です。我々は最後まで自分に出来る事を――」

その時だった。

結界からなにかが震えるような、あるいはひび割れるような音。確認すれば、二足歩行する山羊のような魔物が数十の魔物を率いて神殿に向かってきていた。

まだ、あれだけの数の魔物がいたとは。

今になって攻めてきたということは、この時を待っていたのか。あるいはしぶとく生き残った結果、終わりの時が近いことを悟ったのか。

「あれは、まさか四天王の一角……!?!」

「だから、結界が警告を発したのですか?」

「おそろくは」

四天王のうちの一体。二足歩行する山羊の姿をした邪神官。利己的な性格と恐ろしい魔力の持ち主であると言われている。四天王級の魔物が直接攻撃してくるとなるとさすがに結界が危ない。度重なる戦闘によつて脆くなつていこうえ、儀式が近い今、補強し直すだけの魔力はない。

「どうやら、いずれにせよ他に道はなかったようですね」

「王子！」

笑つて、男は一步足を踏み出した。

神殿の内部。そこへ待機したいくばくかの兵、そして魔術師に命令を出すためだ。

神殿を守つて死ぬ、と。

儀式に必要なのは巫女と姫のみ。倉庫に残された食料ももう少ない。儀式の後、神殿以外に何もなくなった世界で生き残るのと今ここで死ぬのに大きな違いはなかった。

それでも、

「王子！」

「姫。私は私にできることをします。……だから、貴女は貴女にできることをしてください」

今度は自分が王子の腕を引き、縋りつく王女。

自分の背中を涙で濡らす女に男は優しく囁いた。

「もしも世界が生き残つて、輪廻転生が許されたら——その時は、またお会いしましょう」

「っ」

姫は「約束、ですよ」と呟くように言つて身を離れた。

最後にもう一度だけ口づけをして。

互いの涙を指で拭い合つた時には、二人は、世界に残された最後の指導者としての顔を取り戻していた。

「兵と魔術師はここへ！ 敵襲だ！ 結界と神殿を守るため、これより我々は最後の戦いに出る！」

「巫女は全員、儀式の準備を始めてください！ 残つた水と酒は全て

清めに使って構いません！ ……今日まで守ってきた私たちの魂と純潔を捧げ、女神様に降臨していただきます！」

全員がいなくなることが前提の戦い。

儀式が終われば、神殿の内部は全て閉鎖されることになっている。人間がここで生きていた名残は消え、残るのは人類最高の魔法的・神的装置としての神殿のみ。

しかし、それさえ残れば後はきつと、希望が繋がる。

慌ただしく動き出した世界で、二人は一度だけ視線を交わして――

その日。

世界を大きな光が包み込んだ。



「転移、成功したみたいだね」

「うん。ほんとにもー、鬱陶しいくらいに闇ばっかり。いかにも世界の終わりって感じで本当やだ」

「あそこに敵がいます！ ……あ、でも、四天王の一人ですね。あれくらいなら私一人でも」

「面倒ですから早く焼き払ってしましましょう。倒してもドロップ品が出ないのが残念です」

「皆さま。ここはダンジョンではないのですから、軽はずみな行動は控えるべきかと」

「どっちでもいいわよ。元気があり余っているくらいでないと言ってられないでしょう。 ……私たちだけでこの闇を払うなんて、ね」

夢か幻なのだろうか。

光が収まった後、天から幾人かの少女たちが舞い降りてきた。

色とりどりの髪を持った彼女たちはあまりにも気楽に、そして自然に世界を見渡すと神殿へと舞い降りてきた。

一団の中から進み出てきた少女——否、女性。一団の中では最年長に見えるその巫女を見た姫は、かつてドラゴンと刺し違えて亡くなった『聖女』の姿を思い出した。

「遅くなって申し訳ありません。私はエル。大神殿の聖女様より聖女の位を賜った者です。……只今、遠い時の彼方より、異界の英雄を連れてやって参りました。私たちが来たからにはもう、誰も殺させませんし滅ぼさせません」

「……遠い時の彼方だと。まさか!？」

「ええ。……きつと、そうなのでしょう」

涙が溢れる。

決死の覚悟だった。後を託すつもりで、自分が助かることなんて考えていなかった。

なのに。

困難をすべて押し付けたはずの異界の戦士たちはきちんとやり遂げてくれた。それどころか、姫たちが考えもつかなかったような手段を用いて時さえ超えてここへやってきた。滅んだあとの世界を作り直すだけではなく、滅びようとしている世界を救うために。

こんな、こんな奇跡があつていいのだろうか。

「皆さんが最後まで諦めなかったお陰ですよ。……さあ! あんな魔物と闘なんてさっさとやつつけてしましましょう!」

文字通り世界を作り直すように消し去られていく闘。

英雄たちの活躍を目にした姫は、傍らに立つ王子と共にただその光景を目に焼き付けた。

新たな神話。

これがその最初の一ページになることは、疑いようもなかった。

【番外編・後日談】 未来と過去を目指して

『闇』との最終決戦は熾烈を極めた。

世界を覆い尽くす寸前まで迫ったそれはまさに最強の状態。複数体のドラゴン、さらには魔王の姿までも象り、無数の配下までも含めて具象化し、レンたちに戦いを挑んできた。

呑まれるか打ち払うか、二つに一つの戦い。

転移してから十年目。開発した転移装置を使つて日本への帰還を果たしてからさらに五年。百階に到達してから数か月の時間と数度に及ぶ撤退を経てようやく、レンたちは『闇』との戦いに勝利した。

レン、フリー、アイリス、メイ、シオン、ミーティア。

妹たちとエル。

友人パーティにシヨウたちパーティ。

アイリスの母とメイの母。

コスプレショップの店長、その他街の人たちやベテラン探索者の面々。

さらには十三歳になった賢者とケントまで日本から来てもらい、戦える者、戦う意思のある者フルメンバーによる犠牲者ゼロの勝利だった。

『闇』との戦いには七十五階までを攻略していなくとも参加できる。気づいたのは百階を攻略するために試行錯誤していた最中のことだった。八十階くらいで訓練をするか、と階段に入ったレンたちにとある若手転移者がついてきてしまったのだ。彼のことはきつく叱つた上で「これってどうなるんだろう？」と試しにそのままダンジョンへ出てみたところ普通に八十階へ行けてしまった。

もちろん入ってすぐ出て若手は帰したが、この気づきは大きかった。

『闇』相手の戦いにおいては通常の戦闘力だけでなく希望を捨てない強い意志が必要となる。子供を得て守るべきものができた者——街の年長者たちはこの点においてレンたちを上回っている。彼らの一撃は闇で形作られたオークを粉碎し、ドラゴンの鱗を剥がし、ゴブ

リンやオークをまとめて吹き飛ばした。

勝利の後、世界には光が満ち——下り階段は現れなかった。

「終わった、の?」

「うん。終わったんだ。……これで、ダンジョンはクリアした」

階段の代わりに現れたのは鍵の形をした神器。

ドロップ品は物凄い量の世界の欠片。

解析の結果、鍵には日本へのゲートを開く効果があることがわかった。開いた時点で異世界召喚——神隠しも停止され、日本に帰属する全ての者は『祝福』を失う。

神器を使えるのは一度きり。

レンのように種族を固定化した者はそのままだが、そうでない者はスキルもレベルも失い、「召喚された時の姿に戻る」。

日本でもう一度やり直せるのだ。

「でも、死んだ人は生き返らないんだ」

「当然でしょう? 神だって完全に死んだ人間を蘇らせることはできないわ。過ぎた時が戻らないのと同じようにね」

フリーの呟きにミーティアがそう答えたが、レンとしても少々不満な結末だった。

ダンジョンをクリアすれば全てがうまくいく、そんな結末があつてもいいじゃないか。

「……時間を戻せればなんとかなるのかな?」

思いつきのままに呟けば、メイがどこか面白がるような雰囲気です首を傾げて、

「ご主人様。異世界転移の次はタイムスリップですか?」

「うん。それができたら滅んだ世界も死んだ人たちも助けられるんじゃないかな」

「……机上の空論ですが、もし可能なら助けられる可能性はありますね」

百階の戦いで、レンたちは亡国の王子と王女と出会った。

神殿を作り世界の残滓を守った者たち。

彼らにも一緒に来ないかと誘いをかけたが、断られてしまった。奇

跡を目の当たりにし救済を受けて、これ以上望むことなどない、と。

別れ際まで彼らは笑顔だったが、レンたちとしては複雑だった。

「私は、助けられるなら助けたいです！ 聖女様も、陛下も、みんな！」
「エルちゃん……。私だってもちろんそうですけど、でも、もし過去に戻れても救えるかどうかはわからないと思います。タイムパラドックスが解決できませんから」

読書家のアイリスは日本の図書館に一ヶ月通い詰め、帰る時もストレージに本を詰められるだけ詰め込んだことでより博識になった。

（メイも似たようなことをしていたが言動には特に影響が出ていない。メイはメイである）

その成果を発揮しての発言には説得力がある。

過去を改変すればレンたちにとっての現在にも影響が出る。

例えば召喚自体が起らなかったことにすればレンたちはここに来なかったことになり、そうするとレンたちが過去に干渉した事実さえもなくなる。

これに説明をつけた理論がパラレルワールドや世界の枝分かれである。

過去に戻って何かを救っても「救われた世界」が別に生じるだけで未来は変わらないという説だ。もしこれが正しければ過去を変えてもレンたちの前に死んだ人が現れるわけではない。

「いいじゃないですか！ 別の世界でも、みんなが救われてくれれば！」

「そうだね。わたしもエルと同じ意見」

「じゃあ、レン。今度はタイムスリップの研究をするんだ？」

「わたしはサキュバスのままで確定だしね。エルも手伝ってくれらだろうし」

「もちろんです！」

この世界で生まれた子たちはゲートを開いても力を失わない。もしかすると追加で得た祝福はなくなるかもしれないが、そんなものがない彼らは剣も魔法も使うことができる。

娘たちも多くが異世界に残るだろうから母親が一人は必要だ。

「わたしはごっつちで頑張るよ。そのほうが性に合ってそうだし」
別に帰れなくなるわけではない。

ゲートは一度しか使えないが、自前で行う異世界転移がある。たまには帰ることもできるので今生の別れにはならない。

「また会えるんだし、みんなも気楽に決めたらいいよ。もちろん、向こうであらためて誰かと結婚するならそれも——」

「しようがないなあ。なら、私も一緒にいてあげる」

「フリー」

「あんなに可愛い子放り出せるわけないし、前にも言ったでしょ？
レンのこと、そんなに簡単に忘れられるわけないんだから」

「せっかくやり直せるのにな？」

「二人で高校生でできるなら考えたけどねー」

笑って前から抱きついてくる彼女。首に回された腕がなんとも心地良い。ここにいてほしい、と、深く思った。

「それとも、私なんか必要ない？」

「まさか。……一緒にいて欲しいよ。フリーにも、みんなにも」

「でしょ？　なら最初からそう言えばいいのに」

ね？　とフリーが後ろを振り返ると、ハーフエルフの少女とダークエルフの姫が笑って、

「私のふるさととはもともとここですから」

「私にはあなた以外の結婚相手はいないので。忘れたのかしら？」

「アイリス。ミーティアも」

次いで、ゴーレムの少女が頷いて、

「向こうのネットやゲームはとても興味深いですし、メイドロボとしてちやほやされるのにも心惹かれますが。私の産んだ娘は一人でもなんとかなるだろうとも思いますが」

「うん。メイちゃん、行つてくれば？」

「止めておきます。ご主人様以上のご主人様は見つかりそうにありませんので」

「ありがとう、メイ」

最後に、シオン。

みんなの視線が集まる中、少女は迷うような表情でしばし間を置いてから、

「わたくしは日本に戻ります」

「……そっか」

「はい。娘が向こうに行きたがっていますし、向こうでやりたいこともありますので」

シオンは前に帰還した際、日本のお稲荷様から接触を受けていた。神社という意味ではなく妖狐という意味だ。いたんだ妖狐、とみんなして盛大に突っ込んだが、未裔的な者たちがひっそりと存在していたらしい。

彼ら彼女たちから手伝って欲しいと言われていたので向こうでも楽しくやれそうである。

シオンは申し訳無きように微笑んで、

「ですので、役目を終えたら戻ってきててもよろしいでしょうか？ 五年か十年か、その程度で戻ってまいります」

「シオンちゃん。いいの？」

「ええ。娘もその頃には十分大きくなります。妖狐にとってのその時間はあつと言う間でしょう」

ゲートを開くタイミングは選べる。

日本にいる転移者たちにまで能力喪失の影響が及ぶか心配なので一度戻ってきてもらう必要があるし、使う前までに種族を固定化すれば能力は残せる。

シオンは妖狐として戻り、また帰ってくる道を選んだ。

「わたくしだって、レンさまの腕の中は恋しいのです。わかってくださいますか？」

「もちろん。……みんなまで待ってる」

「はいっ！」

異世界の人口も再び増え始めている。

先の不安が減った以上、これからはどんどん増えていくだろう。

となると問題は神殿か。

「神殿はなくならないんだよね？」

「うん。だけど、この世界を守っていた結界はなくなるみたい」

闇は新しい世界を侵食できない、と、王子たちは言っていた。ただ絶対ではないし、こちらから干渉すれば反撃くらいはしてくるかもしれない。

世界を飲み込めなくても人に無害とは限らないのだ。

「神殿も一種の神器になったみたいだし、解析してコントロールできないか試してみようか」

十分な欠片が集まったらダンジョンは封印した方がいいかもしれない。

代わりにこの世界にダンジョンを作ってもいい。世界の欠片で洞窟を作ればそこにモンスターが湧き出す可能性はある。ここはみんなとよく話し合うべきか。

それから、祝福の機能を変えられないか。

物語でよく見るような「何歳になったらスキルを授かる」みたいな機能ならきつと暮らしやすくなるだろう。

「やることいっぱいだなあ」

「シオンちゃんが帰ってくるまでに終わらないかもね」

「終わってしまったては困ります。むしろ、過去へ旅する際はわたくしも呼んでくださいませ」

「うん。シオンがいてくれたら百人力だよ」

これで方針は決まった。

あとは色々頑張るだけだ。子育てと後進の育成、街の発展に神器の解析とタイムスリップの方法探し。

まだまだレンの役目は終わらないけれど、戦いはここでひと区切り。

過去での戦いに備えて腕をさらに磨きながら励んでいこう。

「一緒に頑張ろう、エル」

最後に、すっかり立派な聖女となった彼女に問いかけると、笑顔で左手を差し出してくれた。

「はい。連れて行ってください。この先まで、ずっと」

あの王子と姫を本当の意味で救える日も、案外、遠くはないかもし

れない。